ちくま学芸文庫

原典訳マハーバーラタ 7

第7巻（1-173章）

上村勝彦 訳

筑摩書房

目次

原典訳　マハーバーラタ7

［家系図］

クリピー ― ドローナ ― アシュヴァッターマン

太陽神 ― タパティー
バラターサンヴァラナ
クル ― プラティーパ ― スバラ
ガーンダーリー
シャクニ
太陽神
カルナ

ガンガー女神
シャンタヌ
ビーシュマ
サティヤヴァティー
チトラーンガダ
ヴィチトラヴィーリヤ
パラーシャラ
ヴィヤーサ
アンバー
アンビカー
アンバーリカー
ドリタラーシュトラ
パーンドゥ
マードリー
ヴィドゥラ

ドゥルヨーダナ
ドゥフシャーサナ
（百王子）
ヴィカルナ

ヤドゥ ― ヴリシュニ……シューラ
クンティー
ヴァスデーヴァ

ナクラ
サハデーヴァ
ユディシティラ
ビーマセーナ
アルジュナ
（マツヤ国王）
ヴィラータ
スバドラー
クリシュナ
バララーマ

ドルパダ
ドラウパディー（クリシュナー）
ドリシタデュムナ
シカンディン

アビマニユ
ウッタラー
パリクシット ― ジャナメージャヤ

パーンダヴァ　　カウラヴァ

主要登場人物

アシュヴァッターマン　ドローナの息子で、父に劣らぬ勇士。
アビマニユ　アルジュナとスバドラーの息子。
アルジュナ　パーンドゥの五王子のうちの三男。母クンティーがインドラ神より授かった息子。あらゆる武芸に秀でた勇士。妻スバドラーとの間に息子アビマニユが生まれる。
アンバー　カーシ国王の長女。アンビカーとアンバーリカーの姉。ビーシュマに復讐を誓い、後にシカンディンという男性になる。
アンバーリカー　カーシ国王の三女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。パーンドゥの母。
アンビカー　カーシ国王の次女。ヴィチトラヴィーリヤの妻。ドリタラーシトラの母。
ヴァイシャンパーヤナ　聖仙。ヴィヤーサの弟子。蛇の供犠祭を催すジャナメージャヤ王の前で、ヴィヤーサから聞いた『マハーバーラタ』を吟誦する。
ヴァスデーヴァ　ヤドゥ族の長シューラの息子。クンティーの兄。バララーマ、クリシュナ、スバドラーの父。
ヴィチトラヴィーリヤ　シャンタヌとサティヤヴァティーの次男。カーシ国王の娘アンビカーとアンバーリカーを妃に迎える。
ヴィドゥラ　ヴィヤーサとアンバーリカーの召使女の徳高い息子。ドリタラーシトラとパーンドゥの異母弟。
ヴィヤーサ（クリシュナ・ドゥヴァイパーヤナ）　聖仙。『マハーバーラタ』の作者。サティヤヴァティーと聖仙パラーシャラとの間に生まれる。ドリタラーシトラ、パーンドゥ、

ヴィドゥラの実父。
ヴィラータ　マツヤ国の王。パーンダヴァたちは変装してこの王の宮廷に仕えた。
ウグラシュラヴァス　吟誦詩人。ローマハルシャナの息子。ヴァイシャンパーヤナが語った『マハーバーラタ』をナイミシャの森で聖仙たちに語る。
ウッタラ　ヴィラータの息子。妹のウッタラーはアビマニユの妻になる。
カルナ　クンティーが太陽神より授かった息子。生まれつき甲冑と耳環をつけた勇士。
ガンガー　ガンジス川の女神。シャンタヌ王との間に息子ビーシュマを産む。
ガーンダーリー　ガーンダーラ国王スバラの娘。ドリタラーシトラの妻。百王子の母。
クリシュナ　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの息子（ヴァースデーヴァ）。バララーマの弟。ヴィシュヌ神の化身とみなされる。
クリタヴァルマン　ヴリシュニ族の勇士。フリディカの息子。
クリパ　武術の達人で、クル族に仕える。妹のクリピーはドローナの妻。
クンティー（プリター）　ヤドゥ族の長シューラの娘。太陽神よりカルナを授かる。パーンドゥの妻。ユディシティラ、アルジュナ、ビーマの母。
サティヤヴァティー　漁師の長の娘。聖仙パラーシャラとの間にヴィヤーサをもうける。シャンタヌの妻となり、チトラーンガダ、ヴィチトラヴィーリヤを産む。
サーティヤキ　ヴリシュニ族の勇士。ユユダーナとも呼ばれる。シニの孫。
サハデーヴァ　パーンドゥの五王子のうちの五男。マードリーの双子の息子の一人。
サンジャヤ　ドリタラーシトラの吟誦者。『マハーバーラタ』の戦争の語り手。
シカンディン　ドルパダの次男。アンバーの生まれ変わり。

シャウナカ　聖仙。十二年におよぶ祭祀を行なうナイミシャの森の祭場で、様々な神聖な物語をウグラシュラヴァスから聞く。

シャクニ　ガンダーラ国王スバラの長男。ドゥルヨーダナ兄弟の叔父。

ジャナメージャヤ　パーンダヴァ族の後裔。パリクシットの息子。ヴィヤーサの弟子ヴァイシャンパーヤナの物語る『マハーバーラタ』の聞き手。

ジャヤドラタ　シンドゥの王。ドリタラーシトラの娘婿。

シャリヤ　マドラ国の王。ナクラとサハデーヴァの母マードリーの兄（または弟）。

シャンタヌ　クル族の王プラティーパの息子。ガンガー女神との間に息子ビーシュマを、サティヤヴァティーとの間にチトラーンガダとヴィチトラヴィーリヤをもうける。

スバドラー　ヤドゥ族の長ヴァスデーヴァの娘。バララーマとクリシュナの妹。夫アルジュナとの間にアビマニユをもうける。

ソーマダッタ　バーフリーカの息子。ブーリシュラヴァスの父。

チトラーンガダ　シャンタヌとサティヤヴァティーの長男。

ドゥフシャーサナ　ドリタラーシトラの次男。

ドゥルヨーダナ　ドリタラーシトラの長男。邪悪な性格で、パーンダヴァ兄弟を苦しめる。

ドラウパディー（クリシュナー）　パーンチャーラ国王ドルパダの娘。パーンドゥの五王子の共通の妻。

ドリシタデュムナ　ドルパダの長男。

ドリタラーシトラ　ヴィヤーサとアンビカーの盲目の息子。ガーンダーラ国王の娘ガーンダーリーを妃とする。百王子の父。

ドルパダ　パーンチャーラ国王プリシャタの息子。祭火よりドラウパディー、ドリシタデュムナ、シカンディンの三人の子を授かる。

ドローナ　聖仙バラドゥヴァージャの息子。クリピーを妻とする。アシュヴァッターマンの父。パーンドゥの五王子とドリタラーシトラの百王子に武術を教授する。

ナクラ　パーンドゥの五王子のうちの四男。マードリーの双子の息子の一人。

バガダッタ　プラーグジョーティシャの王。カウラヴァ側につく。

バーフリーカ　ソーマダッタの父。シャンタヌの兄。

パラーシャラ　聖仙。ヴィヤーサの父。

バララーマ　ヴァスデーヴァの長男。クリシュナの兄。

パリクシット　アビマニユとウッタラーの息子。ジャナメージャヤの父。

パーンドゥ　ヴィヤーサとアンバーリカーの息子。ドリタラーシトラの弟。五王子の父。

ビーシュマ（デーヴァヴラタ）　シャンタヌ王とガンガー女神の息子。パーンドゥとドリタラーシトラの伯父。

ビーマ（ビーマセーナ）　パーンドゥの五王子のうちの次男。クンティーが風神より授かった息子。

ブーリシュラヴァス　クルの勇士。ソーマダッタの息子、バーフリーカの孫。

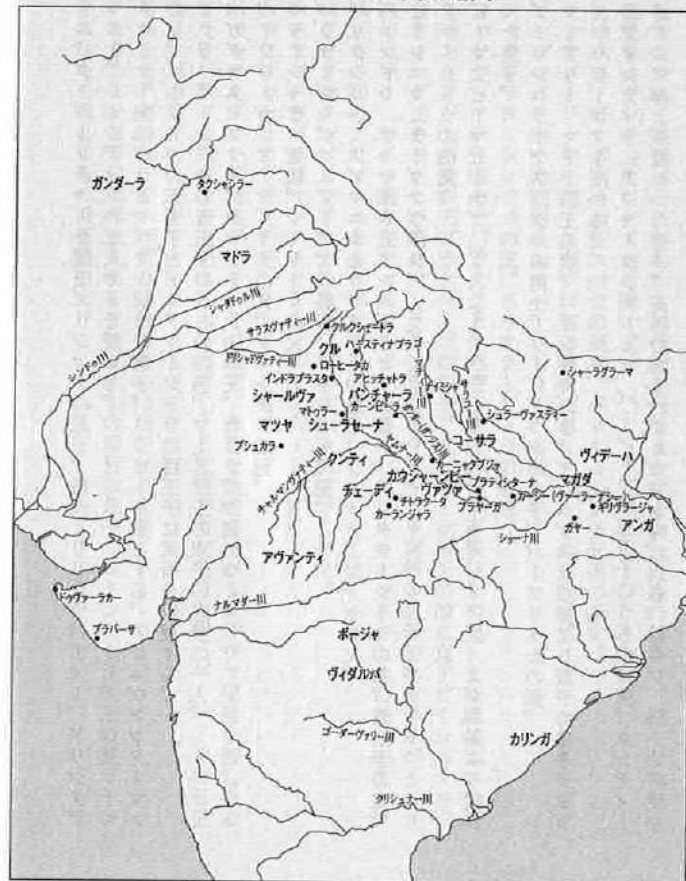
マードリー　マドラ国王の娘。パーンドゥの妻。アシュヴィン双神より双子の息子ナクラとサハデーヴァを授かる。

ユディシティラ（アジャータシャトル）　パーンドゥの五王子のうちの長男。クンティーがダルマ神より授かった息子。高徳であり、ダルマ王と呼ばれる。

第7巻・ドローナの巻（ドローナ・パルヴァン）

第一章―第百七十三章

マハーバーラタ関連地図

(65) ドローナの軍司令官就任（第一章―第十五章）

カルナが出陣する

ジャナメージャヤは言った。

「強力なドリタラーシトラ王は、無比の勇気、威厳、力、気力、勇武をそなえたデーヴァヴラタ（ビーシュマ）が、パーンチャーラの王子シカンディンに倒されたことを聞いて、悲しみで心を乱した。梵仙よ、父が殺された時、彼はどのように行動したか。（一－二）尊者よ、彼の息子は、ビーシュマやドローナなどの戦士たちにより、パーンダヴァの勇士たちをうち破って、王国を望んでいる。（三）尊者よ、すべての弓取りの旗（最上者）である彼が倒された時、クル族の王がどのように行動したか、それを私に語ってくれ。最高のバラモンよ。（四）」

ヴァイシャンパーヤナは語った。——

クル族の王ドリタラーシトラ王は、父が倒されたことを聞いて、もの思いと悲しみにふけり、平安を得られなかった。（五）その王が絶えず悲嘆に暮れていた時、再び高潔なサンジャヤがやって来た。（六）大王よ、その夜サンジャヤが陣営から象の都（ハースティナプラ）に到着した時、アンビカーの息子ドリタラーシトラは彼にたずねた。（七）ビーシュマが倒れたことでひどく落胆し、また息子の勝利を望んで、彼は嘆き悲しんだ。（八）

ドリタラーシトラは言った。

「友よ、恐ろしく勇猛で偉大なビーシュマが倒されてから、その後クルの人々はカーラ（時間・破壊神）にかりたてられてどのように行動したか。（九）その強力で無敵な勇士が倒された時、クルの人々は悲しみの海に沈み、どのように行動したか。（一〇）サンジャヤよ、偉大なパーンダヴァたちの膨大な大軍は、三界すべてに激しい恐怖を生じさせる。（一一）クルの雄牛デーヴァヴラタが倒された時、王たちはどのように行動したか。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。（一二）」

サンジャヤは語った。——

王よ、私が申し上げる話を一心に聞きなさい。デーヴァヴラタが戦場で倒された時、あなたの息子たちがどのように行動したかを。（一三）

王よ、不屈の勇者ビーシュマが倒された時、あなたの軍の人々とパーンダヴァ軍の人々は、それぞれ考え込んだ。（一四）彼らはその偉大な人に平伏し、王族の法（クシャトラダルマ）について聞いて驚嘆し喜び勇んだが、自己の義務について〔何と酷いことかと〕非難していた。（一五）人中の虎よ、彼らは無量の威光を持つビーシュマのために寝台を用意し、真っ直ぐの矢により枕を用意した。（一六）そしてビーシュマのために警護を置き、お互いに語り合い、ビーシュマを右まわりにまわって敬意を表した。（一七）それから、怒りで赤い眼をしてお互いに見合い、王族（クシャトリヤ）たちはカーラにかりたてられて再び戦うために退出した。（一八）楽器の音により、太鼓の大音響により、敵味方の軍隊は進軍した。（一九）

王中の王よ、ビーシュマが倒れ、その日が終わった時、バラタ族の最上者たちは、カーラに心を乱され怒りに圧倒され、偉大なビーシュマの正しい言葉を無視して、すべて武器を持って出陣した。（二〇―二一）あなたと息子の迷妄により、またビーシュマが倒されたことにより、クル族の人々はすべての王たちとともに死神に支配された。（二二）彼らはビーシュマを失って、番人なしで野獣に満ちた森にいる山羊や羊たちのように、ひどく心細い状態にあった。（二三）そのバラタの最上者が倒れた時、クルの軍は次のような有様になった。星のない天空、風のない虚空、作物が死んだ大地、洗練されない言葉、かつてバリが捕えられた時の阿修羅（アスラ）の軍隊、美しい尻の寡婦、水が涸れた川、群の長を殺され、森で狼たちに囲まれた雌鹿、獅子が殺されて容易に侵入できる大きな山窟。バラタの最上者よ、ビーシュマが倒れた時、バラタの軍隊は以上のようであった。（二四―二七）そしてまた、的を外さぬ強力なパーンダヴァの勇士たちにひどく苦しめられて、大海で暴風に打たれて壊れた船のようであった。（二八）その軍隊は騎兵と戦車兵と象兵がひどく乱れ、大部分の歩兵は意気消沈し、見るも哀れな有様になった。（二九）ビーシュマを欠いて、その軍隊における諸王と様々な兵たちは恐れ、地底界（パーターラ）に沈んだかのようになった。その時、クルの人々はカルナのことを思い出した。実に彼はビーシュマに匹敵する者であった。（三〇）彼はすべての戦士たちの最上者であり、輝かしい客人である。彼らの心はまさに彼に向かった。災禍に陥った人の心が友人に向かうように。（三一）バーラタよ、そこで王たちは、我々のために身を捨てて戦う我らの友、ラーダーの息子、スータの息子に向かって、「カルナよ、カルナよ」と叫んだ。（三二）その時、その誉

れ高いカルナは、その重臣や縁者とともに、十日間戦っていなかった。彼らは急いでそのカルナを呼んだ。（三三）力と勇武に満ちた戦士が列挙された時、ビーシュマはすべての王族が見ている前で、勇士カルナのことを「半人前の戦士」と呼んだ。実際には、その人中の雄牛は二倍〔の力を持つ勇士〕であるのに。（三四）彼は勇士たちに尊敬され、〔偉大な〕戦士と超戦士の列挙において最上の勇士であり、主要な神々や阿修羅たちとも（異本による）戦うことができよう。（三五）王よ、カルナはそのことに対して怒り、ビーシュマに言った。

「ビーシュマよ、あなたが生きている間は、私は決して戦わないであろう。（三六）しかしもしあなたが激戦においてパーンダヴァたちを殺したら、私はドゥルヨーダナの許しを受けて森へ行くであろう。ビーシュマよ。（三七）また、あなたビーシュマがパーンダヴァたちに殺されて天界へ行ったなら、私は一騎で、あなたが勇士だと考えるすべての戦士たちを殺すであろう。（三八）」

大王よ、誉れ高いカルナはこのように告げると、あなたの息子の許可を得て、それから十日間は戦わなかった。（三九）王よ、戦いにおいて勇猛な、無限の勇武を有するビーシュマは、戦場においてパーンダヴァに属する戦士たちを殺した。（四〇）しかし、その誓いを守る強力な勇士が倒された時、あなたの息子たちはカルナのことを思い出した。川を渡ろうと望む者が舟を思い起こすように。（四一）あなたの息子たちとあなたの軍は、すべての王とともに、「ああ、カルナよ」と叫んだ。「今こそ出番だ」と言いながら。（四二）ジャマダグニの息子（パラシュラーマ）から武器を伝授された、不屈の勇気を持つカルナに、我々の心は向かった。災禍に

〔陥った者の心が〕友人に向かうように。（四三）王よ、実に彼は戦いにおいて、我々を大きな危険から救うことができる。ゴーヴィンダ（ヴィシュヌ＝クリシュナ）が常に神々を大きな危険から救うように。（四四）

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

このように〔サンジャヤが〕最高の戦士カルナを繰り返し讃えていた時、ドリタラーシトラは毒蛇のようにため息をついて、彼に言った。（四五）

「その時、そなたたちの心はヴィカルタナ（太陽）の息子カルナに向かったと言うが、スータの息子のカルナが身を捨てて戦うとそなたたちは見るのか。（四六）その不屈の勇者が、戦いにおいて、迷い苦しみ恐れ、救いを求める者たちを裏切るようなことはないか。（四七）ビーシュマが殺された時、その最高の弓取りが、戦いにおいてクル軍の穴を埋められたか。（四八）彼は敵に恐怖を与えながらその穴を埋めたか。私の息子たちの勝利の願いを実りあるものにしたか。（四九）」

（第一章）

サンジャヤは語った。――

御者（スータ）の息子カルナは、ビーシュマが倒されたことを聞いて、底知れぬ海で難破した船のようなあなたの息子に属するクル軍を、兄弟のように災禍から救出しようとした。（一）その不屈の王、勇大なビーシュマが倒されたことを聞いて、最高の弓取りであり、敵を悩ますカルナは急いでやって来た。王よ（異本による）。（二）最高の戦士ビーシュマが敵に倒された時、彼は父のように、海に沈もうとする船のようなあなたの息子の軍隊を救おうとして、急いでクル族のもと、あなたの息子たちのもとにやって来た。（三）

カルナは言った。

「ビーシュマには堅固さ、知性、勇武、威厳、自制、真実、すべての英雄の美質が存する。神的な武器、謙譲、廉恥、好ましい言葉、不滅の言葉（テクスト疑問）が存する。（四）彼はバラモンの敵を殺し、常に恩を知る。月に標（しるし）があるように、彼には永遠の優れた特性が存する。敵の勇士を殺す彼がもし入寂すれば、すべての戦士は殺されたも同然と私は思う。（五）この世では行為（カルマン）は無常と結びついているから、確かなものは何も存在しない。偉大な誓戒を守るビーシュマが殺されたら、誰が疑いを抱かずに、今日太陽が昇ると確信できるか。（六）ヴァス神たちのような力を持つ、ヴァス神たちの力より生まれた、その大地の主がヴァス神たちのもとに行った時、あなた方は財産、息子、大地、クル族、その軍隊について悲しむべきである。（七）」

サンジャヤは語った。――

偉大な力を持ち、願いをかなえる、世界で最も優れた、威厳に満ちたビーシュマが倒された時、バラタ族が敗れたことに心を痛めたカルナは、ひどく涙を流して、人々を慰めた。

(八)王よ、あなたの息子たちと兵士たちはカルナの言葉を聞くと、お互いにひどく泣き叫び、苦痛のあまり眼からさめざめと涙を流した。(九) しかし、再び激戦が展開し、王たちに率いられた軍隊がそれに没入した時、一切の勇士の雄牛であるカルナは、戦士の雄牛たちに、歓喜をもたらす言葉を述べた。(一〇)

カルナは言った。

「無常の世界は常に走っているので、そのことを考えて、今、私は、〔すべてが〕定めないと見る。あなた方がいるのに、山のようなクルの雄牛はどうして戦場で倒されたか。(一一) 太陽が地面に落ちるように、勇士ビーシュマが倒された時、諸王はアルジュナに耐えることはできない。樹々が山を吹き飛ばす〔ような強い〕風に耐えられないように。(一二) このクル軍は今や主要な戦士を殺され、苦悩し、敵により気力をくじかれ、寄る辺がない。だが私はあの偉大なビーシュマがしたように、戦場でそのクルの軍隊を守るであろう。(一三) その重荷は私にかかって来た。あの戦いに酔う勇士が戦場で倒されたから、私はこの世を無常であると見る。私はどうして戦いにおいて恐怖を抱くであろうか。(一四) 私は戦場で活躍し、あのクルの雄牛(パーンダヴァ)たちを真っ直ぐの矢で、ヤマ(閻魔)の住処に送り、世間において最高の名声を発揮して生き続けるか、戦場で敵に殺されて横たわるかである。(一五) ユディシティラは堅固さ、叡知、徳性、真理を有する。狼腹(ビーマ)は百頭の象に等しい勇武を有する。またアルジュナは最高の神(インドラ)の息子である。その軍隊は神々によっても容易にはうち破りがたい。(一六) 双子(ナクラとサハデーヴァ)は戦いにおいてヤマに等しい。臆病者は、デーヴァキーの息

子(クリシュナ)とサーティヤキのいるその軍隊に近づいたら生還することはない。生き者が(異本による)死神の口から生還することのないように。(一七) 熱力(苦行の力)によってのみ旺盛な熱力を制することができるように、賢明な人々は力によって力を制する。私の心は敵を撃退する決意をし、味方を守ることに山のように確立した。(一八) スータ(サンジャヤ)よ、私はこのように彼らの力を知り、行って彼らに勝利しよう。私には友を裏切ることは耐えられない。軍隊が破れた時に助ける者、それが友である。(一九) 私はこの善き人にふさわしい気高い行為をなすか、さもなくば生命を捨ててビーシュマを追う。私は戦場ですべての敵の群を殺すか、さもなくば彼らに殺されて勇士の世界(天界)へ行くであろう。(二〇) スータよ、女子供が泣き叫び、雄々しいドゥルヨーダナが敗れた時、私は行動をなすべきだと思う。それ故、私はドゥルヨーダナの敵を征服しよう。(二一) 私はクル族を守り、パーンドゥの息子たちを殺しつつ、この恐ろしい戦いに生命を捨てて、戦場で敵の群を殺して、ドゥルヨーダナに王国を与えるであろう。(二二) 黄金製で美しい、宝玉と宝石で輝く、きらびやかな鎧と、太陽のように輝く冑と、弓と毒蛇のような矢を私の身につけさせてくれ。(二三) 十六の矢筒を結びつけてくれ。また、神聖な弓を持って来てくれ。そして刀と槍と重い棍棒と黄金で燦然と輝く法螺貝を持って来てくれ。(二四) あの勝利をもたらす黄金の象の腹帯と、青蓮のように輝く勝利の旗を、なめらかな布でぬぐって持って来い。網のついた多彩な花輪をそこに結びつけて。(二五) スータの息子よ、白雲のような、呪句で浄めた水で沐浴した、精錬された黄金の装飾をつけた、太った最高の駿馬たちを速やかに連れて来い。(二六)(二七―二九略)

スータよ、アルジュナと狼腹（ビーマ）とダルマの息子（ユディシティラ）と双子のいる所へ速やかに行け。私は戦場で相見えて彼らを殺すであろう。あるいは敵に殺されてビーシュマの後に従うであろう。（三〇）信義を堅く守るユディシティラ王、ピーマセーナ、アルジュナ、ヴァースデーヴァ、サーティヤキ、及びスリンジャヤたちがいる軍隊は、王たちにはうち破れないと私は思う。（三一）もしすべてを奪う死神が常に怠ることなく戦場でアルジュナを守ろうとも、私は戦場で相見えて彼を殺すであろう。あるいは私はビーシュマのたどった道によりヤマ（魔閻）のもとに行くであろう。（三二）私は必ず彼ら勇士たちの中に行くであろう。私はそのことを誓う。友を裏切る人々、信愛の弱い人々、その性邪悪な人々は、私の仲間ではない。（三三）」

サンジャヤは語った。——

カルナの最高の戦車は豪奢で（異本による）、堅固で、黄金で飾られた美しい轅を持ち、軍旗をつけ、風のように速い最高の馬たちにひかれる。彼はその戦車に乗って、勝利を求めて進撃した。（三四）その恐るべき弓取り、戦士の雄牛である偉大なカルナは、クル軍に讃えられつつ、白馬にひかれて進み、あのバラタの雄牛（ビーシュマ）が倒れた戦場に行った。（三五）カルナは軍旗のついた、黄金と真珠と金剛石に満ち、雷雲のような音をたて、駿馬にひかれた大きな戦車に乗り、無量の光輝を持つ太陽のようであった。（三六）その火のように輝く美しい偉大な戦士カルナは、火のように輝く美しい戦車に乗り、天車に乗る神々の王自身のように輝いていた。（三七）

（第二章）

ビーシュマとカルナの和解

無量の力を持つ偉大なビーシュマは矢の床に横たわり、大風の群によって干上がった海のようであった。（一）その偉大な射手は、アルジュナにより神的な武器で倒された。あなたの息子たちの勝利の希望は砕かれ、防御も鎧も砕かれた。（二）底知れぬ水の浅瀬を求める人々、向こう岸を見出せぬ人々にとっての島（寄る辺）であった彼は、ヤムナー川の流れのような矢の洪水に沈んだ。（三）大山マイナーカ（インドラに翼を切られなかった山）が地上に落ちたかのように、あり得ないことであり、また太陽が天空から地上に落ちたかのようであった。（四）昔時、インドラがヴリトラにうち破られたように、考えられないことである。戦いにおいてビーシュマが倒れたことは、すべての兵士を茫然とさせるものであった。（五）偉大な誓戒を守るあなたの父は、すべての兵士たちの頂点であり、すべての弓取りたちの標（第一人者）であったが、アルジュナの矢におおわれた。（六）その英雄の床に横たわるバラタの最上者、人中の雄牛ビーシュマを見て、カルナは戦車から降りて挨拶し、合掌して敬礼し、涙にむせぶ声で告げた。（七－八）

「私はカルナです。あなたに幸あらんことを。バーラタよ、今日は清らかで安らかな言葉で私と話して下さい。その眼で見て下さい。（九）きっと何人もこの世では善行の果報を享けることはないのでしょう。法に専念する長老のあなたが、ここで地面に横たわっているとは。

(二〇)クルの最上者よ、国庫を拡大すること、政策を立てること、陣形を整えること、武器の使用に関して、クル族の守護者はあなた以外には認められない。(二一)あなたは清浄な知性をそなえ、クル族を危険から救えるのに、戦士たちを舟（拠り所）のない（状態）に捨てて、祖霊の世界に行くであろう。(二二)バラタの最上者よ、今日からは、怒った虎が鹿を殺すように、パーンダヴァたちはクル族を滅亡させるであろう。(二三)今日、ガーンディーヴァ弓を響かせるアルジュナの力を知るクルの人々は、阿修羅たちがインドラを恐れるように彼を恐れるであろう。(二四)今日、ガーンディーヴァから放たれた、雷のような矢の音が、戦場で、クルの人々とその他の王たちを恐れさせるであろう。(二五)勇士よ、大きな焔をあげて燃え上がる火が樹々を焼くように、アルジュナの矢はドリタラーシトラの息子たちを焼くであろう。(二六)風と火がいっしょになって森で広がるように、二人の聖なる男（アルジュナとクリシュナ）は望むところのものを燃やす。(二七)疑いもなくアルジュナは燃え上がる火のようであり、疑いもなくクリシュナは風のようである。人中の虎よ。(二八)パーンチャジャニヤ（クリシュナの法螺貝）が鳴り響き、ガーンディーヴァ弓が音をたてる時、バーラタよ、すべての兵士たちは戦慄するであろう。(二九)勇士よ、あなたなしでは、王たちは猿の旗標を持つ、敵を悩ますアルジュナが襲来する時（異本による）、その戦車の音に耐えることはできないだろう。(三〇)賢者たちはアルジュナの神のような働きを讃える。あなた以外のいかなる王が、戦場でそのアルジュナと戦うことができるか。(三一)その高邁な男は、シヴァ神と超人的に戦った。それ故、彼は自制していない人々によっては得られがたい恩寵を得た。(三二)今日私はあなたに許可されて、あの戦いに酔うアルジュナを容赦せず、視力を奪う非常に恐ろしい毒蛇のようなあの勇士を、武器の力により殺せるであろう（異本による）。(三三)」

(第三章)

サンジャヤは語った。——

このように繰り返し話す彼の言葉を聞いて、老いたクルの祖父は、満足して、場所と時にふさわしい言葉を述べた。(一)

「河川にとっての海のように、天体にとっての太陽のように、真実にとっての善人のように、種にとっての肥沃な土地のように、生類にとっての雨のように、お前は親しい者たちの拠り所であれ。縁者たちがお前に依存して生きるようにせよ。神々が千眼者（インドラ）に依存するように。(二–三)カルナよ、お前はドゥルヨーダナによかれと願い、自分の腕力により、ラージャプラに行ってカーンボージャ国を滅ぼした。(四)ギリヴラジャにいたナグナジットをはじめとする王たちと、アンバシタ、ヴィデーハ、ガーンダーラの国々は、お前によって征服された。(五)カルナよ、ヒマーラヤの城砦に住む、猛烈に戦うキラータ族は、かつてお前によって、ドゥルヨーダナの支配下に帰せしめられた。(六)カルナよ、強力なお前はドゥルヨーダナによかれと願い、あちこちの戦場で、多くの勇士たちをうち破った。(七)わが子よ、親類と一族（クラ）と縁者をともなうドゥルヨーダナのように、お前もまたすべてのクル族の寄る辺となれ。(八)お前の幸せを祈る。行って敵と戦え。戦いにおいてクル軍を指揮せよ。ドゥルヨ

ーダナに勝利をもたらせ。(九) お前はドゥルヨーダナと同じように、私にとって孫に等しい。我々はすべて、法(ダルマ)に従って彼に属するとともにお前にも属する。(一〇) 最高の人よ、この世で善き人々が善き人々と結びつくことは、血縁の関係よりも優れていると賢者らは説く。(一一) そこでお前は約束を守り、ドゥルヨーダナと同じ様に、自分のものだと考えてクル族の軍隊を守れ。(一二)」

ヴァイカルタナ・カルナは、以上の言葉を聞くと、ビーシュマの足下に平伏して〔別れを告げ〕、急いで戦場に行った。(一三) 彼は大勢の人々の集団のいる、陣形を布(し)かれ武器に満ちた(原文疑問)無比の場所を見て、その軍隊を激励した。(一四) クルの人々は、戦いの準備をした勇士カルナを見て、喚声をあげ腕をたたいて大きな音を出し、獅子吼し、種々の弓の音をたてて彼を歓迎した。(一五)

(第四章)

ドローナが軍司令官に就任する

サンジャヤは語った。――

王よ、ドゥルヨーダナは戦車に立つ人中の虎カルナを見て喜び、次のように言った。

「あなたに守られた軍隊はふさわしい指導者を得たと私は思う。しかし、適切で有益なことが考慮されるべきである。(一―二)」

カルナは言った。

「人中の虎である王よ、言って下さい。あなたは最も知者であるから。他の王はなすべきことをあなたのようには知らない。(三) 王よ、そこですべての人々はあなたの言葉を聞こうと望んでいる。実にあなたは道理にあわない言葉を言わないと私は考える。(四)」

ドゥルヨーダナは言った。

「ビーシュマが軍の指導者であった。彼は年齢と勇武と博識とすべての戦士の美質をそなえていた。(五) カルナよ、その誉れ高い偉大な男は私の敵の群を殺し、善戦して十日の間、我々を守った。(六) なしがたい働きをした彼が、天界に発(た)とうとしている時、その後に誰が軍司令官になったらよいとあなたは思うか。(七) 指導者なしでは、軍隊は戦場においてわずかの間も存続しない。戦いにおける最上者よ。導き手を欠いた船が水上で航行できないように。(八) 実に、舵手のいない船や御者のいない戦車は好き勝手に動くように、軍司令官のいない軍隊も同様である。(九) そこであなたは、わが軍のすべての偉大な人々を吟味して、ビーシュマに続く適切な軍司令官を見出しなさい。(一〇) 君よ、我々一同はすべて、あなたが戦いにおける軍の指導者と認める者をそれに任じるであろう。(一一)」

カルナは言った。

「ここにいる最高の人々は、すべて偉大で、軍司令官の地位につくことができる。この点について疑問の余地はない。(一二) 彼らは一族(クラ)をまとめる知識と、力と勇武と知性をそなえ、恩を知り、廉恥心あり、戦いにおいて退却することはない。(一三) しかし彼らを同時に指導者にすることはできない。この場合、特に優れた美質を持つ一人の人を任ずべきである。

（一四）お互いに競い合う彼らのうちの一人を任ずれば、残りの者たちは意気阻喪して、明らかに戦わなくなるであろう。バーラタよ。（一五）しかしこのドローナは、すべての戦士の師匠であり、長老であり長上である。この最高の戦士ドローナを軍司令官にするのが適切である。（一六）ブラフマン（ヴェーダ）を知る人々の最上者である無敵のドローナがいる時、そのシュクラ（悪魔の師）やブリハスパティ（神々の師）のような知見を有する彼以外の何人が軍司令官になれようか。（一七）バーラタよ、あなたのすべての王たちのうちで、戦場を行くドローナの後に従わない戦士はいない。（一八）王よ、あなたの軍の指導者たち、武器をとる人々、知性ある人々のうちで、彼は最上者であり長上である。（一九）であるから、ドゥルヨーダナよ、師匠をすぐに軍司令官に任じなさい。戦いで阿修羅たちを征服したいと望む神々がカールッティケーヤ（スカンダ）を軍司令官にしたように。（二〇）」

サンジャヤは語った。——

その時ドゥルヨーダナ王は、カルナの言葉を聞いて、軍隊の中央にいるドローナに言った。（二一）

「種姓が最上位（バラモン）であること、良家の生まれであること、博識、年齢、知性、気力、巧妙さ、侵しがたいこと、実利の知識、政策、（敵に）勝利すること、苦行（修養）、恩を知ること、以上の点であなたは長老であり、一切の美質をそなえている。あなたに等しい王たちの守護者は他に存在しない。（二二―二三）そこであなたは、インドラが神々を守るように、我々を守って下さい。最高のバラモンよ、我々はあなたを指導者として、敵に勝利することを望みます。（二四）ルドラ神群のうちのカーパーリン（シヴァ）、ヴァス神群のうちのパーヴァカ（火神）、夜叉たちのうちのクベーラ、マルト神群のうちのインドラ、バラモンのうちのヴァシシタ、光熱を持つものたちのうちの太陽、祖霊たちのうちのダルマ（ヤマ）、アーディティヤ神群（本異は「海に住む者たち」）のうちの水の王（ヴァルナ）、星宿のうちの月、ディティの息子たち（悪魔）のうちのウシャナス、以上の者たちのように、あなたは軍指導者たちのうちで最高である。そこで我々の軍司令官になって下さい。（二五―二七）非の打ち所のない者よ、この十一の軍団があなたの統制下に帰すように。それらにより敵に対して布陣し、敵を殺しなさい。インドラが悪魔たちを殺すように。（二八）火神の息子（スカンダ）が神々の先頭を行くように、あなたは我々の先頭を進みなさい。我々は戦場であなたに従うでしょう。牛たちが雄牛（牛の指導者）に従うように。（二九）アルジュナは恐るべき弓取りで、偉大な射手であり、神聖な弓を引くが、我々の先頭にあなたを見て、刃向かうことができないだろう。（三〇）人中の虎よ、もしあなたが軍司令官であれば、必ずや私は、ユディシティラとその従者や親族を、戦いにおいて破るであろう。（三一）」

ドローナがこのように告げられた時、諸王は大きな獅子吼によりあなたの息子を喜ばせつつ、「万歳」と叫んだ。（三二）そして兵士たちは喜んで、ドゥルヨーダナを先頭として、大きな名声を望んで、その最高のバラモンを祝福した。（三三）

ドローナは言った。

「私はヴェーダとその六補助学を知っている。私は人間の実利の学を知っている。またシヴ

アに属する矢の武器や、その他種々の武器を知っている。(三四) 勝利を望むあなたが私について挙げた諸々の美質を真実のものにすることを望んで、私はパーンダヴァたちと戦うであろう。(三五)」

サンジャヤは語った。──

王よ、あなたの息子はこのように承認されて、それから、儀軌に見られる作法により、ドローナを軍司令官にした。(三六) そしてドゥルヨーダナをはじめとする王たちは、ドローナを軍司令官の地位につけた。かつてインドラをはじめとする神々がスカンダを軍司令官に就任させたように。(三七) ドローナが軍司令官になった時、楽器の音や法螺貝の（異本による）大音声とともに人々の歓喜が生じた。(三八) それから、吉日を寿ぐ声、祝辞の声、称讃、吟誦者(スータ)と讃嘆者(マーガダ)と崇拝者(バンディン)たちの歌声、最高のバラモンたちの「万歳」という声、幸せな女性（夫が息災な妻）たちの踊りにより、種々にドローナをもてなして、パーンダヴァたちはすでに征服されたも同然と人々は考えた。(三九―四〇)　（第五章）

車陣(シャカタ)対帝釈鴫(クラウンチャ)の陣形

サンジャヤは語った。──

偉大な戦士であるバラドゥヴァージャの息子（ドローナ）は、軍司令官の地位に就任して、戦い

を望み、軍隊の陣形を整えて、あなたの息子たちとともに進軍した。(一) シンドゥ国王、カリンガ国王、あなたの息子ヴィカルナは、鎧を着て、右翼に位置して立っていた。(二) シャクニは汚れない槍で戦うガーンダーラ出身の最高の騎兵たちとともに、彼らの翼の先端を守った。(三) クリパ、クリタヴァルマン、チトラセーナ、ヴィヴィンシャティは、ドゥフシャーサナを先頭として、努力して左翼を守った。(四) スダクシナを先頭とするカーンボージャ軍と、シャカ軍とヤヴァナ軍は、高速の馬たちにより彼らの翼の先端を守って進んだ。(五) マドラ、トリガルタ、アンパシタの軍隊、西部と北部に住む人々、シビ、シューラセーナの軍隊、シュードラ軍、マラダ軍、サウヴィーラ軍、キタヴァ軍、すべての東部と南部の人々は、あなたの息子に先導されて、御者(スータ)の息子（カルナ）の背後に位置した。(六―七) ヴァイカルタナ・カルナは、すべての兵たちを喜ばせ、軍隊を力づけながら、すべての弓取りたちの先頭を進んだ。(八) 彼の輝かしい巨軀は自分の兵士たちを喜ばせ、その象の腹帯の意匠の大旗は太陽のように燦然と輝いていた。(九) カルナを見ると、誰もビーシュマの不幸について考えなかった。すべての王とクル族の人々は、悲しみを離れた。(一〇) そこに集まった多くの戦士たちは、喜んで言い合った。──

「パーンダヴァたちは戦場でカルナを見たら戦いを続けられないだろう。(一一) というのは、カルナはインドラをはじめとする神々と戦っても勝利することができる。いわんや、気力と勇武を欠いたパーンダヴァたちは問題ではない。(一二) 剛腕のビーシュマは戦いにおいてパーンダヴァたちに手加減をした。しかしカルナは、疑いもなく鋭い矢で彼らを殺すであろう。

（一三）」

王よ、彼らはこのように言い合って、喜んで、カルナを尊敬し讃えつつ出撃した。（一四）

ドローナはわが軍を車陣に整えた。そしてバラタ族の王よ、ダルマ王は喜んで、偉大な敵軍をクラウンチャ（帝釈鴫）の陣形に整えた。（一五）彼らの陣形の先頭には二名の人中の雄牛、クリシュナとアルジュナが、猿の旗標を掲げて立っていた。（一六）その無量の威光を持つアルジュナの旗は、すべての兵たちにとって頂であり、すべての弓取りたちの標識であり、太陽の道（天空）を行く。（一七）それは偉大なパーンダヴァの軍を輝かせた。宇宙紀の終末の燃え上がる太陽が大地を照らすように。（一八）射手たちのうちでアルジュナが最上である。弓のうちでガーンディーヴァが最上である。生類のうちでヴァースデーヴァ（クリシュナ）が最上である。円盤のうちでスダルシャナが最上である。（一九）白馬にひかれる戦車は、これらの四つの威光［あるもの］を乗せて、振り上げられたカーラ（破壊神）の円盤のように、敵軍の先頭に立っていた。（二〇）このように、これらの偉大な者たちが軍隊の先頭を進んだ。すなわち、あなたの軍の先頭をカルナが、敵軍の先頭をアルジュナが。（二一）カルナとアルジュナは、お互いに相手を殺そうと望み、怒りにかられ、戦場で見つめ合っていた。（二二）

それから、偉大な戦士ドローナが激しく進軍した時、恐ろしい反響により大地は震動した。（二三）それから、絹の群のような激しいほこりが風で舞い上がり、虚空と太陽を一面におおった。（二四）天空は雲もないのに、肉と骨と血を降らせた。その時、禿鷲、鷹、鳶（異本は「鶴」）、鷺、鴉たちが幾千となく［クルの］軍隊の上に絶えず降下した。王よ。（二五）ジャッカルたちは恐怖を与えるおぞましい叫びで吠えた。彼らは肉を食らい血を飲みたいと望んで、あなたの軍隊のまわりを何度も左まわりにまわった。（二六）そして燃え上がる流星が、その尾で戦場をすべておおい、突風と震動をともなって、輝きながら落下した。（二七）王よ、軍司令官が進軍した時、太陽に、稲妻と雷鳴をともなう大きな日暈が生じた。（二八）以上の、そしてその他多くの、非常に恐ろしい前兆が生じた。それらは、戦いにおいて、勇士たちが死滅することを告げるものである。（二九）それから、互いに相手を殺すことを望むクル軍とパーンダヴァ軍との間に戦闘が始まった。その音によって世界を喜ばせ（異本は「満たし」）つつ。（三〇）

パーンダヴァとカウラヴァの戦士たちは、勝利を望んで、お互いに猛り立ち、鋭い矢で攻撃し合った。（三一）光輝に満ちたパーンダヴァの偉大な射手たちは、鋭い多くの矢を注ぎつつ、敵の大軍を激しく攻撃した。（三二）王よ、パーンダヴァたちとスリンジャヤ軍は、奮闘するドローナを見て、それぞれ矢の雨を降らせて迎え撃った。（三三）パーンダヴァの大軍とパーンチャーラ軍は、ドローナによってかき乱され、うち破られて、風に乱される鶴のように分断された。（三四）（三五―四一略）王よ、強力なドローナはパーンダヴァ軍に対し、旋火輪（回転する火炬）のように襲いかかった。それは奇蹟のようであった。（四二）彼はすばらしい戦車に乗って、敵の軍隊を滅ぼした。その戦車は空飛ぶ都城のようで、［兵器の］論書の見地から作られ、その旗は風にひるがえり、大音響をたて、飛び上がり、水晶のように汚れない旗を立て、敵を苦しめるものであった。（四三）

（第六章）

サンジャヤは語った。――

このようにドローナが馬と御者と戦車と象とともに〔パーンダヴァ軍〕を殺しているのを見ても、パーンダヴァたちは苦にすることなく、彼を取り囲んだ。（一）それからユディシティラ王は、ドリシタデュムナとアルジュナに告げた。

「あらゆる努力を払って、ドローナを制圧せよ。（二）」

そこで偉大な戦士であるアルジュナとドリシタデュムナは、従者たちとともに、みなして向かって来るドローナを迎え撃った。（三）王よ、ケーカヤ軍、ビーマセーナ、アビマニユ、ガトートカチャ、ユディシティラ、双子（ナクラとサハデーヴァ）、マツヤ軍、ドルパダの息子たち、ドラウパディーの息子たちは喜び、ドリシタケートゥとサーティヤキ、怒ったチェーキターナ、勇士ユユツ、そしてパーンダヴァに従うその他の王たちは、一族（クラ）の力にふさわしい多くの働きをした。（四―六）戦場でパーンダヴァたちにまとめられる軍隊を見て、ドローナは眼をそちらに向けて、怒って凝視した。（七）戦いに酔う彼は戦車の上で激しく怒り、風が雲を吹き散らすように、パーンダヴァの兵たちを滅ぼした。（八）ドローナはあちこちで戦車、馬、人、象を攻撃して、老いてはいたが若人のように、狂ったかのように動きまわった。（九）王よ、彼の風のように速い、血統のよい赤色の馬は、血まみれになったが動揺することなく美しい姿をしていた。（一〇）誓戒を守るドローナが怒って、死神（アンタカ）のように襲って来るのを見て、ユディシティラの兵たちはあちこち逃げまわった。（一一）彼らは逃げまわり、あるいは引き返し、あるいは凝視し、あるいはそこにとどまり、その声はもの凄く最高に恐ろしいものであった。（一二）その声は勇士たちに歓喜を生じさせ、臆病者の恐怖を増大し、天地の間をすべて満たした。（一三）

それからドローナは、戦場で再び名乗りをあげて、敵に幾百の矢を注ぎ、自己を凄まじいものにした。（一四）強力な長老ドローナは、若者のように、叡知あるユディシティラの兵たちをカーラ（破壊神）のように殺した。（一五）その恐るべき偉大な戦士は、〔敵の〕頭と装飾をつけた腕を切り、戦車の座席を空（から）にして雄叫びをあげた。（一六）王よ、彼の歓喜の叫びと矢の激しさにより、戦場で戦士たちは寒さに苦しむ牛たちのようにふるえた。（一七）ドローナの戦車の音により、弓弦の当たる音により、弓の音により、虚空に大音響があがった。（一八）そして彼の矢は幾千となく発射され、すべての方角を満たして、象兵や騎兵や戦車兵や歩兵の上に落下した。（一九）パーンチャーラとパーンダヴァの軍は、非常に激しく弓を引き、武器で燃え上がる火であるドローナを攻撃した。（二〇）ドローナは戦車兵と象兵と騎兵をともなう彼らをヤマ（閻魔）の住処に送り、すぐに大地を血まみれにした。（二一）ドローナが最高の武器を拡げ、絶えず矢を発射し、諸方に矢の網を向けているのが認められた。（二二）歩兵、戦車兵、騎兵、象兵の間に、いたるところ、彼の旗が雲間の稲光のようにひるがえっているのが見えた。（二三）それからドローナは、弓矢を持ち、ケーカヤの五人の勇士とパーンチャーラの王を矢で粉砕し、元気いっぱい戦い、ユディシティラの軍隊を攻撃した。（二四）ビーマセーナ、アルジュナ、シニの孫（サーティヤキ）、ドルパダの息子、シャイビヤ（シビ国王）の息子、カ

ーシ国王、シビは、喜び勇み、叫びつつ、矢の洪水を彼に浴びせた。(二五) ドローナの弓から放たれた、金色のきらびやかな羽根を持つ矢は、それらの若い象や馬の身体を貫き、その羽根は血まみれになり、大地に達した。(二六) その大地は、矢で断たれ、倒れた戦士の群、戦車、象、馬たちにおおわれ、黒雲におおわれた天空のようであった。(二七) ドローナはあなたの息子たちの繁栄を望み、サーティヤキ、ビーマ、アルジュナ、その他の軍の指導者たち、シャイビヤとアビマニユとカーシ国王、そしてその他の勇士たちを、戦場において粉砕した。(二八) クル族の王よ、偉大なドローナは、その戦いにおいて、以上のような働きをしてから、終末の太陽が天空に出て諸世界を熱するように進撃した。(二九) このように黄金の戦車に乗る勇士は、戦場で何十万のパーンダヴァ軍の戦士たちを殺してから、ドリシタデュムナに倒された。(三〇) その剛毅な男は、退くことのない勇士の大軍団を殺してから、その後で最高の帰趨に達した。(三一) 王よ黄金の戦車に乗る彼は、非常になしがたい行為をしてから、パーンダヴァたちと、残酷な行為をする不吉なパーンチャーラたちに殺された。(三二) 王よ、戦いにおいて師匠が殺された時、虚空に生類と兵士たちの叫び声が生じた。(三三) 天と地と空と水と四方四維を響かせて、「ああ、何ということ」という生類の大声が生じた。(三四) 神々と祖霊たちと彼の縁者たちは、そこで殺された勇士ドローナを見た。(三五) パーンダヴァたちは勝利を得て獅子吼をした。その大音声により大地は震動した。(三六)

(第七章)

ドローナはどのようにして殺されたのか

ドリタラーシトラは言った。

「パーンダヴァとスリンジャヤの人々はどのようにして戦場でドローナを殺したか。ドローナはすべての戦士たちのうちでも武器に巧みであるのに。(一) ドローナが殺されたとは、彼が戦っている間に戦車が壊れたのか。あるいは弓が壊れたのか。あるいは狂ったのか。(二) 友よ、ドローナは敵たちに侵されがたく、多くの金の羽根のついた矢の群を注ぐ。彼は手練の早業で、最高のバラモンであり、敏腕で、めざましく戦う。遠方から矢を射ることができ、自制し、武器による戦いに通達している。彼は最高にして不滅、戦場で恐るべき仕事をし、奮闘する偉大な戦士である。パーンチャーラの王子ドリシタデュムナは、どのようにしてそのドローナを殺したのか。(三—五) 疑いもなく、運命は人間の努力よりも強力であると私は考える。勇士ドローナが偉大なドリシタデュムナによって殺されたのだから。(六) その勇士には、四種の武器が確立していた。その最高の弓矢の師匠であるドローナが殺されたとそなたは私に告げる。(七) 虎皮におおわれ、黄金で飾られた黄金の戦車〔に乗る彼〕が殺されたと聞いて、私は今も悲しみを除くことができない。(八) サンジャヤよ、確かに他人の苦しみによっては何人も死ぬことはない。ドローナが殺されたと聞いても、私は生き続け、死ぬことはないから。(九) きっと私の心は非常に堅固で、鉄でできているのだ。ドローナが殺された

と聞いても、百に裂けないのだから。(一〇) バラモンや王子たちは、神聖なヴェーダや弓矢の術に秀でることを求めて彼に仕えたものだ。その彼が何故に死んでしまったのか。(一一) 私はドローナの死に耐えることはできない。海が干涸び、メール山が動き、太陽が落ちるようなことだ。(一二) 敵を苦しめる彼は、高慢な人々を制し、徳高い人々を守る。その彼が、卑しい者のために生命を捨てたとは。(一三) 私の愚息たちは、彼の勇武を頼りにして勝利を願った。知性の点ではブリハスパティやウシャナスに等しい彼が、どうして殺されたのか。(一四) 彼の戦車につながれた、風のように速い赤色の立派な馬たちは、黄金の網でおおわれ、戦場ですべての武器にうち勝ち（異本による）、強力で、大音声を出し、よく調教され、シンドゥ産で、見事に車をひき、戦場において堅固（平静）である。その馬たちは当惑していないだろうか。(一五―一六) その馬たちは戦場で、法螺や太鼓の音に合わせて（異本による）咆哮する象たち、弓弦を引く音や矢の雨、刀剣などの武器に耐え、敵に勝つことを望み、息づかいを制御し、苦しみを克服し、高速で、ドローナの戦車をひく。駿馬たちは黄金の戦車につながれ、人間の英雄とともにあるのに、どうしてパーンダヴァたちの軍隊を渡ることができなかったか。友よ。(一七―一九)

戦いにおいてインドラのような勇士ドローナは、黄金の飾りのついた最高の戦車に乗り、何をなしたか。(二〇) 全世界の弓取りたちはドローナの学術に依存する。その約束を守る強力なドローナは、戦いにおいて何をなしたか。(二一) 彼は天上のインドラのようであり、弓取りたちのうちで最高の司令官である。その恐るべき行為を行なう彼に対し、いかなる戦士

たちが対戦したのか。(二二) 神的な武器を放ち、軍隊を滅ぼしている不滅の黄金の戦車を見て、パーンダヴァ軍は逃走しなかったのか。(二三) またドリシタデュムナを司令官とするダルマ王とその弟たちは、全軍によってドローナをすっかり取り巻いたか。(二四) きっとアルジュナは真っ直ぐの矢で他の戦士たちを食い止めていた。それから悪事をなすドリシタデュムナがドローナを攻撃した。(二五) アルジュナに守られた恐ろしいドリシタデュムナを除いて、他の誰かが強力なドローナを殺せると私は思わない。(二六) ケーカヤ、チェーディ、カールーシャ、マツヤ、その他の国王たち、以上の勇士たちにぐるりと取り巻かれ、卑劣なパーンチャーラの王子は、蟻に悩まされる蛇のように、途方に暮れて、なしがたい行為に専念している師匠を殺したのだと私は思う。(二七―二八) 彼は四ヴェーダすべてと、第五の〔ヴェーダである〕物語(アーキヤーナ)（イティハーサとプラーナ）を学んで、バラモンたちの拠り所となった。海が河川の拠り所であるように。その長老のバラモンが、どうして武器により殺されたのか。(二九) 猛々しいクンティーの息子は、それにふさわしくないのに、いつも私に苦しめられて耐えて来た。これはその行為(カルマン)の果報である。(三〇) 世界中のすべての弓取りたちが、彼の行為に依存している。約束を守り、善行をなす彼が、どうして富貴を望む人々により殺されたのか。(三一) 彼は天上のインドラのように、最高の強力な勇士である。その彼がどうしてパーンダヴァたちに殺されたのか。鯨(ティミ)が小さな魚たちに殺されるように。(三二) 彼は手練の早業を持ち、強力で、剛弓を持ち、敵を粉砕する。彼の生命を望む者は、その領域に達したら生きながらえることはできない。(三三) 彼が生きている時は、二つの音が決して彼を捨てることはなかった。

すなわち、ヴェーダを望む人々の梵音と、弓を持つ人々の弓弦の音と。(三四) 獅子や象のように勇猛なドローナが殺されたことに、私は耐えることはできない。サンジャヤよ、侵しがたい名誉と力を有する無敵な彼が殺されたことに、どうして耐えられようか。(三五) いかなる人々が戦場で戦うその偉大な勇士の右の車輪を守っていたか。左の車輪を守っていたか。後方を守っていたか。(三六) そしてまた、いかなる人々がその戦場で、ドローナに真っ向から立ち向かって死んだか。いかなる勇士たちが最高の堅固さを示したか。(三七) サンジャヤよ、高貴な人は困難な窮迫時においても、このことをなすべきである。――力の限り勇気を発揮すべきである。それはドローナにおいて確立していた。(三八) 友よ、私の心は茫然とする。ひとまず話をやめてくれ。サンジャヤよ、意識を取りもどしたら、再びそなたにたずねるだろう。(三九)」　(第八章)

悲嘆に暮れるドリタラーシトラ

ヴァイシャンパーヤナは語った。――

ドリタラーシトラはサンジャヤにこのようにたずねてから、息子たちの勝利に希望を失い、ひどく悲嘆に暮れて地面に倒れた。(一) おつきの人々が、意識を失って倒れた彼に、非常に冷たい水を注ぎ、清らかな香りを送って扇いだ。(二) バラタ族の女たちは、大王が倒れたのを知って、ぐるりと取り囲み、手で彼をさすった。(三) そしてその美しい女たちは涙で喉を

つまらせて、静かに王を地面から起き上がらせ、座席に座らせた。(四) しかし座席についても、気絶したままでいた。まわりじゅうから扇がれても、彼はまったく動かないでいた。(五) 王は次第に意識を取りもどすと、ふるえながら、再びサンジャヤに詳細をたずねた。(六)

「ユディシティラは太陽が光により闇を除いて昇るように襲来した。誰が彼をドローナから遠ざけたか。(七) 彼は発情した象のように猛々しく、強力で、〔目的に〕専心し、輝かしく、雌象と交わる際、対抗する象の群の長と戦って相手の象を殺す象のように無敵である。(八) 彼は剛毅で約束を守り、強力で、その恐るべき眼により、一人ですべてのドゥルヨーダナの軍隊を燃やすであろう。(九) 彼は眼力で敵を殺し、勝利に専念し、最高の弓取りに守られ、自制し、世の中で非常に尊敬されている。いかなる勇士たちが彼を食い止めたか。(一〇) その王は不可侵であり、最高の弓取りであり、不屈である。わが軍の兵たちの誰が、クンティーの息子であるその人中の虎を攻撃したか。(一一)

ビーマセーナは激しく襲来してドローナを攻撃した。その襲来するビーマを、いかなる勇士たちが食い止めたか。(一二) 最高に強力な雲のような戦士アルジュナは、雲が激しい雷電を放つように〔矢を放って〕襲来した。(一三) 彼はインドラが雨を降らせるように矢の雨を降らせた。猿の旗標を持つ彼は、空を矢でいっぱいにし、弓籠手と車輪の音ですべての方角を響かせた。(一四) その弓は稲妻のように輝き、戦車の群は雲のように恐ろしい。彼の戦車の車輪の音は轟き、彼の矢の音は非常に魅力的である。(一五) 彼の怒りは雲に勝って恐ろしく、思考や意図のように迅速である。矢を持ち、〔敵の〕急所を貫き、血の池を作る。(一六)

すべての大地を浸し、人間〔の死体〕でおおい、恐ろしい叫びをあげ（異本による）、凄まじく、ドゥルヨーダナに対して奮闘する。（一七）英邁なアルジュナは戦闘において、ガーンディーヴァ弓を持ち、禿鷲の羽根のついた、石で研いだ矢を注ぐ。その時、そなたの心はどのようであったか。（一八）ガーンディーヴァの音により力を失わなかったか。アルジュナが恐ろしい形相をして激しく襲来した時。（一九）アルジュナが矢でそなたの生命を奪わなかったのか。矢の群で諸王を貫かなかったのか。風が激しく雲を断ち切るように（異本による）。実にいかなる人が戦いにおいてガーンディーヴァを持つ彼に耐えることができるか。（二〇）軍隊が戦慄し、勇士たちを恐怖が襲った時、いかなる人々がそこでドローナを捨てなかったか。いかなる卑しい人々が恐れて逃走したか。（二一）いかなる人々がそこで、戦いにおいて神や鬼神にも勝利するアルジュナに対し、生命を捨てて、真っ向から戦って死んだか。（二二）わが軍の兵たちは、白馬にひかれる彼の激しさと、雨季の雲のような音をたてるガーンディーヴァの音に耐えることはできない。（二三）クリシュナがその御者であり、アルジュナが戦士である。その戦車は神や阿修羅たちによってもうち破ることはできないと私は思う。（二四）

ナクラは繊細で若く勇猛で見目麗しい。叡知あり、敏腕で、英邁であり、戦いにおいて不屈の勇者である。（二五）その英邁なナクラが、大きな雄叫びをあげてすべてのクル軍を戦慄させて襲来した時、いかなる勇士たちがそれを食い止めたか。（二六）戦いにおいて無敵で常勝のサハデーヴァは毒蛇のように怒り、敵を殺戮しつつ進撃した。その貴人の誓戒を守る、的を外すことのない、恥を知る無敵の男が、ドローナに向かって進撃した時、いかなる勇士

たちが彼を食い止めたか。（二七—二八）

ユユダーナ（サーティヤキ）はサウヴィーラの王の大軍を粉砕し、全身美しい可憐なボージャ族の娘を妃にした。（二九）この人中の雄牛であるユユダーナには、真実、堅固さ、勇武、梵行（浄行）などすべての美質が常に完全に存する。（三〇）彼は強力で、約束を守り、落胆することなく、無敵である。戦いにかけてはクリシュナに次ぐか、クリシュナと同等である。（三一）アルジュナに教授されて弓矢に秀で（異本による）、武器にかけてアルジュナに等しい。誰が彼を食い止めてドローナから遠ざけたか。（三二）彼はヴリシュニ族の最上者で、勇猛で、すべての弓取りたちのうちの勇士であり、武器と名声と勇武にかけてラーマに等しい。（三三）真実、堅固さ、自制、勇武、最高の梵行などすべての美質がサーティヤキにそなわっている。クリシュナのうちに三界が含まれるように。（三四）以上のような美質をそなえ、神々も抗しがたいその偉大な射手を迎え撃って、いかなる勇士たちが食い止めたか。（三五）

ウッタマウジャスはパーンチャーラ国の最上者である勇士で、最高の家系の人々に愛され、戦いにおいて常に最高の働きをする。（三六）彼はアルジュナのために専念し、最高に私の不利益をもたらし、ヤマ、ヴァイシュラヴァナ（クベーラ）、太陽神、大インドラ、ヴァルナに等しい。（三七）彼は偉大な戦士の誉れ高く、激戦において生命を捨ててドローナと戦おうと努力する。いかなる勇士が彼を食い止めたか。（三八）

ただ一人チェーディの人々から離れ、パーンダヴァ方についたドリシタケートゥが襲来した時、誰が彼を食い止めてドローナから遠ざけたか。（三九）勇士ケートゥマットは西の辺境

の山道においてスダルシャナ王子を殺した。誰が彼を食い止めてドローナから遠ざけたか。（四〇）男性と女性の長所と短所を知る（異本による）人中の虎である、ヤジュニャセーナ（ドルパダ）の息子シカンディンは、戦いにおいて落胆することがない。（四一）彼は戦いにおいて偉大なデーヴァヴラタ（ビーシュマ）の死の原因である。ドローナに向かって進撃する彼を、いかなる勇士たちが食い止めたか。（四二）アビマニユにおいては、アルジュナをも凌駕するすべての美質が存する。彼においては、諸々の武器、真実、梵行が常に存する。（四三）彼は気力においてクリシュナに等しく、力においてアルジュナに等しい。威光にかけて太陽に等しく、叡知にかけてブリハスパティに等しい。（四四）その偉大なアビマニユが、口を開いた死神のように、ドローナに向かって進撃する時、いかなる勇士たちが彼を食い止めたか。（四五）アルナ（光暁）のような若者、スバドラーの息子、敵の勇士を殺す彼が、ドローナに向かって進撃した時、そなたの心はどのようであったか。（四六）人中の虎であるドラウパディーの息子たちは、河川が海に流れるように、戦場でドローナに向かって行く。いかなる勇士たちが彼らを食い止めたか。（四七）

あの子供たちは、十二年間、遊びをやめて、武器〔修得〕のために最高の誓戒を保ってビーシュマのもとに滞在した。（四八）すなわち、クシャトランジャヤ、クシャトラデーヴァ、クシャトラダルマン、マーニナという、ドリシタデュムナの息子である。いかなる勇士たちが彼らを食い止めてドローナから遠ざけたか。（四九）ヴリシュニの人々は、チェーキターナは戦いにおいて百人の戦士よりも優れていると見る。誰がその偉大な射手を食い止めてドローナから遠ざけたか。（五〇）〔五一―七三略〕」

（第九章）

クリシュナの神的な諸行為

ドリタラーシトラは続けた。

「サンジャヤよ、ヴァースデーヴァ（クリシュナ）の神的な諸行為を聞け。ゴーヴィンダがやったような行為は、他の人間は決してできない。（一）その偉大な男は牛飼（ナンダ）の家で成長し、まだ少年の時に、その両腕の力を三界に知らしめた。サンジャヤよ。（二）ウッチャイヒシュラヴァスに等しい力を持ち、速さにかけて風のような、ヤムナー川の森に住む馬の王（阿修羅ケーシン）を彼は殺した。（三）彼は子供の時、雄牛の姿を取った、牛たちにとって死神が立ち上がったかのような、恐ろしい所業の悪魔を両腕で殺した。（四）蓮の眼をした彼は、プラランバ、ナラカ、ジャンバ、ピータ、ムラなど、山のような大阿修羅たちを殺した。（五）また、ジャラーサンダに守られた威光に満ちたカンサとその眷属を、クリシュナは勇武によって戦って成敗した。（六）ボージャの王カンサの真中の弟で、強力なスナーマンという勇猛な男がいた。彼はシューラセーナの王で、すべての軍団の長であった。敵を滅ぼす強力なクリシュナは、バラデーヴァ（バララーマ）とともに、戦いにおいて彼とその兵たちを焼いた。（七―八）非常に短気なドゥルヴァーサスという名の梵仙は、妻をともなう彼にもてなされて、彼に恩寵を与えた。（九）またその蓮花の眼をした勇士は、婿選び式（スヴァヤンヴァラ）において、ガーンダーラの王の娘を獲得して、

王たちを連れて行った。（一〇）我慢できない王たちは、生まれつき馬のように、彼の婚礼の車につながれて、突き棒（鞭）で傷つけられた。（一一）またジャナールダナ（クリシュナ）は方策を用いて、師団の長である強力なジャラーサンダを、他人（ビーマ）に殺させた。（一二）また強力なクリシュナは、集会で（テクストを修正する）言い争う最高の軍司令官である勇猛なチェーディ王（シシュパーラ）を、獣のように殺した。（一三）サウバという快適な悪魔の都市は、シャールヴァに守られ、難攻であった。マーダヴァ（クリシュナ）はそれを攻撃して、海中に落下させた。（一四）彼はアンガ、ヴァンガ、カリンガ、マーガダ、カーシ、コーサラ、ヴァツア、ガルガ、カルーシャ、プンドラの国々を戦いによって征服した。（一五）アーヴァンティ、南部地方、山岳地帯、ダシェーラカ、カーシュミーラ、アウラサカ、ピシャーチャ、サマンダラ（テクスト疑問）、カーンボージャ、ヴァータダーナ、チョーラ、パーンディヤ、トリガルタ、マーラヴァ、難攻のダラダ、シュヴァシャカに向けて様々な地方から集まった群（テクスト疑問）、ヤヴァナとその従者たち……。

サンジャヤよ、蓮花の眼をしたクリシュナは以上の地方を征服した。（一六―一八）

かつて彼は海獣（ヤーダス）に満ちた海に入り、水中にいるヴァルナ（水天）と戦ってうち破った。（一九）クリシュナは地底界に住むパンチャジャナと戦ってこれを殺し、パーンチャジャニヤという神聖な法螺貝を得た。（二〇）そしてまた強力な彼は、アルジュナとともにカーンダヴァの森で火神を喜ばせ、火神に属する武器である無敵の円盤を得た。（二一）そしてまたその勇士は、ヴィナターの息子（ガルダ）に乗り、アマラーヴァティー〔に住む神々〕を恐れさせて、大インドラの宮殿からパーリジャータ樹を持ち帰った。（二二）インドラは彼の勇武を知っていたので、その行為を甘受した。そしてまた、王たちのうちでクリシュナにうち破られない者が誰かいると、我々は聞いたことがない。（二三）そしてサンジャヤよ、その蓮の眼の男は私の集会場において非常に驚異的なことをした。この世で彼以外に誰がそのようなことができるか。（二四）

そして私は信愛（バクティ）により清澄になり（満足し）、イーシュヴァラ（主）であるクリシュナを見た。そこで私には、すべてが直接に見るかのように非常に明瞭になった。（二五）サンジャヤよ、勇武をそなえ知性をそなえたクリシュナの行為の果てを極めることはできない。（二六）ガダ、サーンバ、プラデュムナ、ヴィドゥーラタ、アーガーヴァーハ、アニルッダ、チャールデーシュナ、サーラナ、ウルムカ、ニシャタ、サミーカ、アリメージャヤ、以上の強力なヴリシュニの勇猛な戦士たちは、偉大なヴリシュニの英雄クリシュナに呼ばれて、ようやくパーンダヴァ軍に依存して戦場に立っている。それ故、すべてが危機的であると私は思う。（二七―三〇）

クリシュナがいる所、そこには鋤を持つラーマ（バララーマ）がいる。勇士ラーマは一万頭の象の力を持ち、カイラーサの峰のようである。（三一）バラモンたちはそのヴァースデーヴァを一切の父と呼ぶ。サンジャヤよ、その彼がパーンダヴァたちのために戦うのか。（三二）友よ、そのクリシュナがパーンダヴァたちのために武装するなら、誰も彼に対抗して戦わないであろう。（三三）もしクルの一族がパーンダヴァの一族に勝利するなら、クリシュナは彼らのために最高の武器をとるであろう。（三四）それからその強力な人中の虎は戦いにおいてすべて

の王とクル族の人々を殺し、クンティーの息子に大地を与えるであろう。（三五）クリシュナがその戦車の御者で、アルジュナがその戦士である。いかなる戦車が戦場でその戦車に対抗できるか。（三六）いかなる方策によっても、クル軍に勝ち目はない。それ故、戦闘がどのように展開したか、私にすべてを告げてくれ。（三七）アルジュナはクリシュナの生命(アートマン)であり、クリシュナもアルジュナの生命である。アルジュナには常に勝利があり、クリシュナには永遠の名声がある。（三八）クリシュナに存する美質は特にほとんど計り知れない。だがドゥルヨーダナは迷妄によりクリシュナのことを知らない。（三九）彼は運命の計らいにより迷わされ、すでに死神の輪縄にとらわれて、ダシャールハのクリシュナとパーンダヴァのアルジュナについて知らない。（四〇）その偉大な両者は、古(いにしえ)の神ナラとナーラーヤナとである。それらは同一性のものであるが、地上における人々は二様のものと見るのである。（四一）その誉れ高い無敵の両者はもし望めば、意(こころ)のみによってこの軍隊を滅ぼすことができる。しかし、彼らは人間となっているからそのように望まないのである。（四二）

友よ、ビーシュマが倒れ偉大なドローナが死んだことは、宇宙紀(ユガ)の変化のようで、世界の人々を茫然自失させる。（四三）まことに、梵行やヴェーダ学習や祭式や武器によっても、何人(なんぴと)も死を免れることはできない。（四四）ビーシュマとドローナは世人に尊敬され、勇猛で、武器に通達し、戦いに酔う。サンジャヤよ、その二人が倒されたと聞いて、私はどうして生きているのか。（四五）かつて我々は繁栄がユディシティラに移ったことを妬んだ。今、ビーシュマとドローナの死により、それを承認する。（四六）そしてこのクル族の滅亡は私のせいで訪れた。サンジャヤよ、熟したものが滅する場合、草といえども金剛杵(ヴァジュラ)のようになる。（四七）この世でユディシティラは無比の権力に到達した。彼の怒りにより、勇士ビーシュマとドローナは倒された。（四八）法(ダルマ)は自然に（ユディシティラの方に）趣く。法は我々の方には来ない（異本による）。残酷なカーラ（時間、破壊神）はすべてを凌駕し一切を滅ぼす。（四九）友よ、賢明な人々が計画したことも、運命により別様になると私は考える。（五〇）それ故、不可避の最高に困難なこと、越えがたい、考えられがたいことが訪れた時に起こったことを、ありのままに私に話しなさい。（五一）」

（第十章）

ユディシティラを捕えるための布告

サンジャヤは語った。——

おお、直接に見たことをすべてあなたに描写しましょう。ドローナがパーンダヴァとスリンジャヤの軍に滅ぼされ、倒れた次第を。（一）

バラドゥヴァージャの息子である勇士（ドローナ）は軍司令官の位につき、全軍の中央であなたの息子に言った。（二）

「王よ、そなたは今日、クル族の雄牛ビーシュマの後任として、私を軍司令官にした。（三）王よ、その行為にふさわしい果報を得よ。私は今日、そなたのいかなる仕事をしたらよいか。そなたの望むことを選びなさい。（四）」

そこでドゥルヨーダナは、カルナやドゥフシャーサナたちと相談して、最高の勝利者である無敵の師匠に言った。(五)
「もしあなたが私の願いをかなえてくれるなら、最高の戦士ユディシティラを生け捕りにして、私のもとに連れて来なさい。(六)」
するとクルの師匠はあなたの息子の言葉を聞くと、全軍を喜ばせて次のように告げた。(七)
「クンティーの息子である王は幸せである。そなたは彼を捕えることのみを望むのだから。無敵の者よ、そなたは殺害という望みを申し出なかったのだから。(八) 人中の虎よ、どういうわけで彼の殺害を望まなかったのか。ドゥルヨーダナよ、確かにそなたは私にその行為を願わなかった。(九) あるいはそのダルマの息子を憎む者がいないせいか。あるいは、彼が生きていることをそなたが望むのは、自分の一族(クラ)を守るためか。(一〇) あるいはバラタの最上者よ、戦いでパーンダヴァたちをうち破って、王国の一部を返還して、兄弟のような関係を結ぼうと望むのか。(一一) クンティーの息子である王と、叡知ある彼の高い生まれ(異本による)は幸いなるかな。彼がアジャータシャトル(「敵がいない」という意)と呼ばれることもその通りである。そなたが好意を持つのだから。(一二)」
バーラタよ、あなたの息子がドローナにこのように言われた時、彼の内に常にあった感情が突然ほとばしり出た。(一三) ブリハスパティ(神々の師)のような人でも内心が外に現われるのを隠すことはできない。王よ、それ故、あなたの息子は喜んで次のように言った。(一四)

「師匠よ、ユディシティラを殺せば、戦いにおいて私の勝利はない。彼が殺されれば、アルジュナは必ずや我々すべてを殺すであろう。(一五) そしてすべての神々といえども、戦って彼を殺すことはできない。また、彼らのうちで生き残った一人が、我々を全滅させるであろう。(一六) 約束を実現するユディシティラがここに連れて来られ、再び賭博で敗れたら、彼に忠実なクンティーの息子たちは再び森へ行くであろう。(一七) そのような私の勝利は、明らかに長い間続くであろう。こういうわけで私は決してダルマ王の殺害を望まないのである。(一八)」
真実を知る英邁なドローナは彼の曲った意図を知り、考えてから、次のような条件つきの恩寵を彼に与えた。(一九)
ドローナは言った。
「勇士よ、戦いにおいてアルジュナがユディシティラを守らなければ、パーンダヴァの長子は自分の支配下に帰したと思いなさい。(二〇) というのは、インドラを含む神々や阿修羅たちでも、戦いにおいてアルジュナに向かって行くことはできない。わが子よ、それ故私は彼を攻撃しない。(二一) 疑いもなく彼は私の弟子で、武術にかけては私を師とする。しかし彼は若く、名声をそなえ、ひたむきである。(二二) そして、インドラとルドラ(シヴァ)から多くの武器を得た。王よ、彼はそなたに怒っている。(二三) そこで私は彼を攻撃しない。もしできるなら何らかの方法で彼が戦列を離れてくれたら。アルジュナがいなくなれば、そなたはダルマ王に勝利したも同然である。(二四) 人中の雄牛よ、彼を捕えれば勝利があり、殺せば勝

利はない（異本による）。そしてこのような方策により必ず捕えることができよう。（二五）王よ、私は疑いもなく今日、あの真実と法（ダルマ）に専念する王を捕えて、そなたの支配下に置く。（二六）ただし、もし戦場で彼がわずかの間でも私の前に立ち、人中の虎アルジュナが戦列を離れたら……。（二七）しかしアルジュナの見ている所では、戦いにおいてユディシティラを捕えることは、インドラを含む神や阿修羅たちにもできない。（二八）」

サンジャヤは語った。――

ドローナが条件つきでユディシティラを捕えると約束した時、非常に愚かなあなたの息子たちは、ユディシティラがすでに捕えられたも同様であると考えた。（二九）しかしドゥルヨーダナはドローナがパーンダヴァたちを憎からず思っていることを知っていた。約束を確実なものにするために、その密議を公に知らしめた。（三〇）そこでドゥルヨーダナは、ユディシティラを捕えることをすべての軍営に布告した。敵を制する者よ。（三一）

（第十一章）

サンジャヤは語った。――

ユディシティラを捕えることを聞くと、兵士たちは矢や法螺貝の音とともに獅子吼した。（一）バーラタよ、ダルマ王はドローナの意図を、すべてありのままに、信頼できる［スパイ］たちによりすぐに知った。（二）そこでダルマ王は、すべての弟たちとすべての兵たちを呼んで、アルジュナに次のように言った。（三）

「人中の虎よ、お前はドローナの意図を聞いたであろう。それが実現しないように政略を考えてくれ。（四）敵を苦しめる者よ、ドローナは条件つきの約束をした。その彼がつけた条件は、的を外さぬ射手であるお前にかかっている。（五）そこで勇士よ、今日は私から離れないで戦え。ドゥルヨーダナがドローナを通じてその望みを達成することのないように。（六）」

アルジュナは言った。

「私は決して師匠を殺すことはできない。王よ、またあなたを捨てるつもりはない。（七）パーンダヴァよ、私は戦いにおいて生命を捨てるとも、師匠に刃向かったりあなたを捨てることは決してない。（八）王よ、ドゥルヨーダナは戦場であなたを捕えることを願っているが、彼がこの世でその願望を達成することは決してない。（九）星々をともなう天空が落下しようと、大地が砕けようと、私が生きている限り、ドローナは絶対にあなたを捕えることができない。（一〇）もしインドラ自身が神々や魔類とともに、戦いにおいて彼の加勢をしても、彼は戦場であなたを捕えることはないであろう。（一一）王中の王よ、私が生きている限り、あなたは最上の戦士ドローナを恐れる必要はない。（一二）私は嘘を言った記憶はないし、敗北した記憶もない。何かを約束して果たさなかった記憶もない。（一三）」

サンジャヤは語った。――

大王よ、それからパーンダヴァの陣営において、法螺貝や種々の太鼓が鳴らされた。

(二四)そして偉大なパーンダヴァたちの獅子吼が生じ、弓弦や弓籠手の音は非常に恐ろしく、天空に触れるほどであった。(二五)偉大なパーンダヴァたちの法螺の音を聞いて、あなたの軍隊においても、種々の楽器が鳴り響いた。(二六)そしてバーラタよ、あなたの軍と彼らの軍は陣形を布き、戦場でお互いに戦おうとして徐々に接近した。(二七)それから、パーンダヴァ軍とクル軍、ドローナとパーンチャーラの王(ドルパダ)の間に、身の毛がよだつ激戦が展開した。(二八)王よ、スリンジャヤ(パーンチャーラ)軍はドローナの軍を滅ぼすべく努力したが、ドローナに守られたその軍を滅ぼすことができなかった。(二九)同様に、あなたの息子の最高の戦士たちは、アルジュナに守られたパーンダヴァの軍隊を滅ぼすことはできなかった。(三〇)両雄に守られた両軍は、動かずに対峙していた。美しく花の咲いた二つの森が、夜にぐっすりと眠ったかのように。(三一)

王よ、それから黄金の戦車に乗る(ドローナ)は、輝く太陽のような戦車により出撃して、戦場を走りまわった。(三二)戦車で迅速に行動し奮戦する彼は一騎であるのに、パーンダヴァとスリンジャヤの軍は恐れて、彼が大勢いると考えた。(三三)大王よ、彼に放たれた恐ろしい矢は一切の方角に飛び、パーンダヴァ軍をおびやかした。(三四)ドローナは百の光線に囲まれた真昼の太陽のように見えた。(三五)わが君よ、そしてパーンダヴァ軍のうちで誰も、戦場で怒った彼を見ることができなかった。悪魔たちが大インドラを見ることができないように。(三六)それから栄光あるドローナは、敵軍を混乱させてから、鋭い矢で速やかにドリシタデュムナの軍を破壊した。(三七)彼は真っ直ぐ飛ぶ矢ですべての方角を塞ぎ、空をおおい、ドリシタデュムナのいる場所でパーンダヴァ軍を粉砕した。(三八)

(第十二章)

サンジャヤは語った。――

それからドローナは、パーンダヴァ軍に大混乱を生じさせて、火が乾いた草木を焼くようにパーンダヴァ軍を焼いて動きまわった。(一)現に火神が燃え上がったかのように戦場で軍隊を焼いている、黄金の戦車に乗る彼を見て、スリンジャヤ軍は戦慄した。(二)手練の早業の彼の、絶えず引かれる弓の弦の音が聞かれた。それは雷鳴のように凄まじかった。(三)腕利きの彼が放つ恐ろしい矢は、戦車兵、騎兵、象と馬、歩兵たちを粉砕した。(四)夏の終わりに雲が風をともなって大きな音をたて雹を降らせるように、彼は矢を雨降らせて敵軍を恐れさせた。(五)王よ、強力なドローナは敵軍を攪乱しつつ動きまわり、敵軍にこの世のものとは思われない恐怖を拡大させた。(六)黄金で飾られた彼の弓が、雲間の稲妻のように、動揺する戦車という雲の中に何度も認められた。(七)その勇士は真実を守り、叡知あり、常に法に専念し、峻厳で、宇宙紀の終わりのカーラ(破壊神)のように(異本による)、恐ろしい川を流出させた。(八)その川は憤怒の激流から生じ、肉食動物の群に満ち、いたるところ軍隊の群に満ち、勇士という樹木を根こぎにし運び去る。(九)その川は血という水をたたえ、戦車という渦巻を持ち、象と馬により作られた堤を持つ。(一〇)鎧という小舟をそなえ、肉という泥に満ちている。(一一)脂肪、髄、骨という砂利をそなえ、すばらしいターバンで泡立っている。戦

闘という雲に満ち、槍という魚に満ちている。（一一）人や象や馬〔の血〕から生じ、激しい矢の激流を持つ。死体という流木で混雑し（異本による）、腕という蛇に満ちている。（一二）（一三―一八略）

バーラタよ、ドローナが敵軍をあちこちでうち破っているのを見て、ユディシティラをはじめとするパーンダヴァたちはいたるところから彼を攻撃した。（一九）彼ら勇士たちが攻撃しているのを見て、剛弓を持つあなたの兵たちは、いたるところで彼らを迎え撃った。それは身の毛がよだつ光景であった。（二〇）（二一―八〇略）

（第十三章）

棍棒で撃ち合うシャリヤとビーマ

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、そなたは多くの非常にめざましい一騎打ちについて語った。それらを聞いて、私は眼を持つ者たちがうらやましい。（一）クル軍とパーンダヴァ軍との戦いは神々と阿修羅たちの戦いのように驚異的なもので、世の人々に語り継がれるであろう。（二）私は今、その最高の戦いを聞いていて飽きることはない。それ故、アールターヤニ（シャリヤ）とスバドラーの息子（アビマニュ）との戦いを私に語ってくれ。（三）」

サンジャヤは語った。――

シャリヤは御者が殺されたのを見て、すべて鉄でできた棍棒を振り上げて、怒って叫び声をあげ、最高の戦車から飛び下りた。（四）燃え上がる終末の火、杖（ダンダ）を持つ死神のような彼に対し、ビーマは大きな棍棒を持って急いで襲いかかった。（五）アビマニュも金剛杵のような大きな棍棒を持って、シャリヤに「来い、来い」と言ったが、ビーマは努力して彼を制止した。（六）栄光あるビーマセーナはアビマニュを止めてから、戦場でシャリヤに向かって行き、不動の山のように立っていた。（七）マドラ国王（シャリヤ）も強力なビーマを見て、虎が象に近づくように、そちらの方に向かって行った。（八）それから幾千の楽器や法螺貝の音、獅子吼、太鼓の大音響が生じた。（九）幾百のパーンダヴァとクル族の人々は、それを見ている間、お互いに同じ気持になって、「いいぞ、いいぞ」と叫んだ。（一〇）バーラタよ、すべての王のうちで、マドラ国王を除いて、戦場でビーマセーナの激しい力に耐える者は他にいなかった。（一一）また、戦いにおいて偉大なマドラ国王の棍棒の激しさに耐えることができる者は、この世で狼腹（ビーマ）を除いて他にいなかった。（一二）ビーマの大きい棍棒は黄金の板がはめこまれて、人々を喜ばせるものであった。それはビーマに振りまわされて輝いた。（一三）また、次々と円を描いて進むシャリヤの棍棒も、大きな稲妻のように輝いていた。（一四）シャリヤと狼腹の両者は雄牛のように吼え、棍棒という角を少し曲げて、円を描いて進んだ。（一五）円を描いて進み、棍棒で撃つことに関し、その二人の獅子のような男の戦いは互角であった。（一六）シャリヤの大きい棍棒は、ビーマセーナに撃たれて、火焔を上げ、その非常に恐ろしい棍棒は粉々に砕けた。（一七）また、ビーマセーナの棍棒も敵に撃たれ、雨季の夜に蛍におおわれた樹木のように輝いた。（一八）バーラタよ、戦場でマドラ国王が投じた棍棒は空を燃

やし、多くの火を放った。(一九) またビーマセーナが敵に投じた棍棒は、敵軍を苦しめた。落下する大流星のように。(二〇) これらの二つの最高の棍棒は相互に撃ち合って、息を吐く二匹の雌蛇のように火を放出した。(二一) 二頭の大きな虎が爪により、二頭の巨象が牙により攻撃し合うように、両者はお互いに棍棒で攻撃し合った。(二二) すぐに偉大な両者は、棍棒の先で撃たれ、血まみれになり、花をつけたキンシュカ樹のように見えた。(二三) 人中の獅子である両者が棍棒で撃ち合う大音響は、インドラの電撃の音のようであり、あらゆる方角で聞こえた。(二四) マドラ国王が棍棒でその左右を撃っても、ビーマは裂かれる山のように動揺することはなかった。(二五) 同様に、強力なマドラ国王も、ビーマの激しい棍棒に撃たれても、金剛杵に撃たれた山のように、平然として立っていた。(二六) 両者は大きな棍棒を振り上げ、猛烈な勢いで攻撃した。そして再び相手の隙をうかがい、円を描いて動いた。(二七) そして八歩飛び上がって、二頭の象のように攻撃し合い、突然、鉄棒でお互いに相手を撃った。(二八) 両雄はお互いに棍棒で激しく撃たれ、同時に、インドラの旗のように地面に倒れた。(二九)

それから、シャリヤが朦朧として何度も吐息していた時、勇士クリタヴァルマンは速やかにシャリヤに近づいた。(三〇) 大王よ、そして彼は、シャリヤが棍棒で撃たれて気を失い、失神した蛇のような有様であるのを見た。(三一) そこで勇士クリタヴァルマンは、棍棒とともにマドラ国王を戦車に乗せ、速やかに戦場から連れ去った。(三二) 一方、強力な勇士ビーマは、酔漢のように朦朧としていたが、一瞬のうちに再び立ち上がり、棍棒を手にしている

のが認められた。(三三) それからあなたの息子たちは、マドラ国王が退却したのを見て、象兵と戦車兵と歩兵と騎兵たちとともにふるえ上がった。わが君よ。(三四) あなたの軍の兵士たちは、勝利を望むパーンダヴァたちに苦しめられて恐れ、風に吹き散らされる雲のように諸方に逃げ去った。(三五) 王よ、誉れ高いパーンダヴァの勇士たちは、ドゥルヨーダナの軍をうち破り、戦場で輝きつつ歓喜した。(三六) 彼らは喜んで、大声で獅子吼し、法螺貝を吹き、種々の太鼓を鳴らした。(三七)

(第十四章)

アルジュナ、ユディシティラを救う

サンジャヤは語った。——

あなたの大軍がうち破られたのを見て、強力なヴリシャセーナ(カルナの息子)は、戦場でただ一人、武器の幻力を発揮して、パーンダヴァ軍を食い止めた。(一) わが君よ、ヴリシャセーナは矢を十方に放った。それらの矢は、歩兵、騎兵、戦車兵、象兵を射貫いてなおも飛行した。(二) 彼の燃え上がる強力な矢は、幾千となく飛んで行った。王よ、それは夏の季節における太陽の光線のようであった。(三) 大王よ、戦車兵や騎兵は、彼に苦しめられて、風に倒される樹々のように突然大地に倒れた。(四) 王よ、彼は騎兵と戦車と象兵の群をいたるところで幾百幾千と倒した。(五) 彼が戦場で恐れを知らぬかのように動きまわっているのを見て、すべての王はこぞって、ぐるりと彼を取り囲んだ。(六)

ナクラの息子シャターニーカはヴリシャセーナに襲いかかり、急所を断つ十本の矢で彼を射貫いた。(七) しかしカルナの息子は、彼の弓を切断して、旗を落下させた。ドラウパディーの他の息子たちは、兄弟を救おうとして、彼に向かって行った。(八) 彼らはすぐに矢の群を浴びせてカルナの息子を見えなくした。ドローナの息子を先頭とする戦士たちが、雄叫びをあげながら彼らに襲いかかった。(九) 大王よ、彼らは速やかにドラウパディーの息子である勇士たちを種々の矢でおおった。雲が〔雨で〕山々をおおうように。(一〇) パーンダヴァたちは息子に対する愛情から、急いでクル軍を迎え撃った。パーンチャーラ、ケーカヤ、マツヤ、スリンジャヤの軍も、武器を振り上げて同様にした。(一一) そこであなたの軍とパーンダヴァ軍との間に、恐ろしい身の毛がよだつ激戦があった。それは神々と悪魔たちの戦いのようであった。(一二)

　このようにして、クル軍とパーンダヴァ軍はお互いに睨み合い、相手が罪を犯したとして、最高に猛り立って戦った。(一三) 怒って戦おうとする彼ら無量の威光を持つ人々の身体は、空中で戦う最高の鳥（ガルダ）と蛇たちの身体のようであった。(一四) ビーマ、カルナ、クリパ、ドローナ、ドローナの息子、ドリシタデュムナ、サーティヤキにより、戦場は終末の諸々の太陽によるかのように輝いた。(一五) 互いに相手を攻撃する勇士たちの間に激戦が行なわれた。強力な神々と悪魔たちの間の激戦のような。(一六)

　それから、ユディシティラの軍は波立つ海のような音をたてて、あなたの軍隊を殺した。その軍の偉大な戦士たちは逃走した。(一七) 自軍が敵にうち破られ、ひどく苦しめられてい

るのを見て、ドローナは、「勇士たちよ、逃げる必要はない」と言った。(一八) それから赤い馬にひかれるドローナは、四牙の象のように怒り、パーンダヴァ軍に攻め入り、ユディシティラに襲いかかった。(一九) ユディシティラは鷺（カンカ）の羽根のついた鋭い矢でドローナを射た。ドローナは彼の弓を切断し、速やかに彼を襲撃した。(二〇) 彼の車輪を守るパーンチャーラの誉れ高い王子クマーラは、襲来するドローナを制止した。海岸が海を制止するように。(二一) バラモンの雄牛ドローナがクマーラに制止されたのを見て、人々は「いいぞ、いいぞ」と言って獅子吼をした。(二二) それからクマーラは、その激戦において、ドローナの胸を矢で射て、猛り立ち、獅子のように何度も吼えた。(二三) しかし強力なドローナは戦場においてクマーラを食い止め、手練の業を発揮し、疲れを知らず、幾千の矢で彼を射た。(二四) その最高のバラモンは、その貴人の誓戒を守り武道に励む勇士、車輪を守るクマーラを粉砕した。(二五) 戦士のうちの雄牛ドローナは、すべての敵軍の中央に達して、諸方を動きまわり、あなたの軍隊を守った。(二六) そして彼はシカンディンを十二本の矢で、ウッタマウジャスを二十本の矢で、ナクラを五本の矢で、サハデーヴァを七本の矢で射貫いた。(二七) そしてユディシティラを十二本の矢で、ドラウパディーの息子たちを三本ずつの矢で、サーティヤキを五本の矢で、マツヤ〔国王〕を十本の矢で射貫いた。(二八) それから彼は戦場で次々と主要な戦士たちを攻撃して、敵軍を混乱させた。そしてクンティーの息子ユディシティラを探し求めて進撃した。(二九)

　王よ、それからユガンダラは風で波立つ海のような猛り立つ勇士ドローナを制止した。

(三〇) 王よ、それからドローナは、ユディシティラを真っ直ぐの数本の矢で射てから、一矢によりユガンダラを戦車の座席から落とした。(三一) それから、ヴィラータ、ドルパダ、ケーカヤ軍、サーティヤキ、シビ、パーンチャーラの王子ヴィヤーグラダッタと強力なシンハセーナ、その他多数の人々がユディシティラを救おうとして、多くの矢を放って、ドローナの道を塞いだ。(三二―三三) 王よ、パーンチャーラの王子ヴィヤーグラダッタは鋭い五十本の矢でドローナを射貫いた。人々は喚声をあげた。(三四) またシンハセーナは、速やかに勇士ドローナを射て、突然喜んで笑った。誓戒を守る彼を恐れさせて……。(三五) それからドローナは両眼を見開き、弓の弦をさすり、弓籠手の大きな音をたてて彼を攻撃した。(三六) そして強力な彼は、二本の半月形の先を持つ矢を放って、耳飾りをつけたシンハセーナの頭とヴィヤーグラダッタの頭を胴体から切り取った。(三七) 更に彼はパーンダヴァ軍の勇士たちを矢の群で粉砕して、死神のようにユディシティラの近くに立った。(三八)

王よ、誓戒を守るドローナが近くに立った時、ユディシティラ軍において、「王が奪われる」という戦士たちの大きな声があがった。(三九) 兵士たちはそこでドローナの勇武を見て言った。

「今日、ドゥルヨーダナ王は目的を達するであろう。この戦いにおいて、彼はきっと我々とドゥルヨーダナのもとに、[ユディシティラを連れて] 帰るであろう。(四〇)」

あなたの軍の兵たちがこのように話している時、勇士アルジュナが戦車の音を響かせて急いでやって来た。(四一) アルジュナは戦場に血の水をたたえ、戦車という渦巻を持つ川を作

った。その川は勇士たちの骨の堆積に満ち、死者の群を運び去るものである。(四二) その川は矢の群という大きな泡を持ち、槍という魚に満ちている。アルジュナは急いでその川を渡り、クル軍を逃走させた。(四三) それからアルジュナは、ドローナの軍隊を激しく攻撃した。大きな矢の網でおおい、混乱させて。(四四) 誉れ高いアルジュナが絶えず矢をつがえて速やかに放つ時、[それらの動作の間に] 間隔は認められなかった。(四五) 大王よ、諸方も空中も天も地も見分けられなかった。すべて矢だけになった。(四六) 王よ、ガーンディーヴァ弓を持つアルジュナが矢によって大きな暗闇を作った時、その戦場には何も認められなかった。(四七) そしてほこりにおおわれた太陽が西山に沈んだ時、敵も味方もまったく見分けがつかなくなった。(四八) そこでドローナやドゥルヨーダナなどは軍隊を引きあげさせた。そしてアルジュナは、敵がひどく恐れ、戦意を失ったのを知って、徐に自軍を引きあげさせた。パーンダヴァ軍とスリンジャヤ軍とパーンチャーラ軍は喜んで、心地よい言葉によりアルジュナを讃えた。聖仙たちが太陽を讃えるように。(四九―五〇) アルジュナはこのように敵に勝利してから、喜んでクリシュナとともに、全軍の後から自分の宿舎に引きあげた。(五一) 最上のエメラルド、ラピスラズリ、金銀、ダイヤモンド、珊瑚、水晶によりきらびやかな戦車に乗って、パーンドゥの息子は輝いていた。星々のきらめく空において月が輝くように。(五二)

(第十五章)

⑹⑹ 特攻隊（サンシャプタカ）の殺戮（第十六章—第三十一章）

特攻隊（サンシャプタカ）の誓約

サンジャヤは語った。――

王よ、両軍は宿舎に帰り、区分に応じ、適切に、部署に応じて、すべて宿舎に入った。(一)ドローナは軍隊を引きあげさせ、最高に意気消沈し、ドゥルヨーダナを見て恥ずかしそうに言った。(二)

「前に私は告げた。アルジュナがいる時には、神々ですら戦場でユディシティラを捕えることはできないと。(三)そなたたちが努力したにもかかわらず、アルジュナは戦場で目的を成就した。私の言葉を疑ってはならぬ。クリシュナとアルジュナをうち破ることはできない。(四)何らかの方策により白馬にひかれるアルジュナがいなくなれば、王よ、ユディシティラは今日、そなたの支配下に帰すであろう。(五)誰かがアルジュナに挑戦して、他の場所に連れ出すべきである。アルジュナは彼をうち破らないうちは決して引き返さないであろう。(六)王よ、その間、アルジュナがいない時に、私は敵軍を破り、ドリシタデュムナが見ている前で、ダルマ王を捕えるであろう。(七)アルジュナがいなくても、もし彼が戦いを捨てなければ、私の方策は完了したと考え、彼は捕えられたと知りなさい。(八)王よ、このようにして、疑いもなく今日すぐに、ダルマの息子ユディシティラとその眷属をそなたの支配下に入らせる。(九)もし戦いが行なわれている時、わずかの間でもパーンドゥの息子が戦場から

いなくなれば、それは勝利よりも優れている。(一〇)」

王よ、ドローナの言葉を聞いて、トリガルタの王は兄弟たちとともに次のように言った。(一一)

「王よ、我々はいつもガーンディーヴァ弓を持つアルジュナに傷つけられている。バラタの雄牛よ、我々は罪を犯していないのに、彼は我々に罪を犯す。(一二)そこで我々は、一つ一つの無礼を思い出して、怒りの火により焼かれ、いつも夜に眠れない。(一三)その神的な武器をそなえた彼が、我々の視界に入っている。我々は心に存する意図をすべて実行しよう。(一四)あなたに好ましいことは、我々の名誉になることである。我々は彼を戦場の外に連れ出して殺すであろう。(一五)今日、地上からアルジュナがいなくなるか、トリガルタ軍がいなくなるかだ。我々はあなたに約束する。これは偽りにならないであろう。(一六)」

バラタ族の大王、サティヤラタ、サティヤダルマ、サティヤヴァルマン、サティエーシュ、サティヤカルマンの五兄弟は一万の戦車とともに、戦場でこのように誓って引き返した。(一七―一八)マーラヴァ軍、トゥンディケーラ軍と三万の戦車、そしてトリガルタのプラスタラの王である人中の虎スシャルマンは、マーチェーッラカ軍とラリッタ軍とマドラカ軍、一万の戦車兵とともに、兄弟たちといっしょに誓った。(一九―二〇)そして更に方々の地方から、一万の優れた戦車兵がふるい立って、誓約をするためにやって来た。(二一)それから火を持って来て、一同はそれぞれ供物を火中に投じてから、クシャ草の衣服ときらびやかな鎧を着た。(二二)勇士たちは鎧を身につけ、ギーを塗り、クシャ草の衣服をまとい、ムールヴァー草の

帯をしめ、何千何百の謝礼を〔バラモンに〕払った。（二三）彼らは祭祀を主催し、息子にめぐまれ、清浄な世界に行くにふさわしく、目的を成就し、身体を捨てて戦う。そして名誉と勝利に専念している。（二四）梵行やヴェーダ学習などにより、豊富な謝礼をともなう祭式により到達され得る諸世界（天界）に、彼らは見事な戦いによって速やかに行こうと願った。（二五）彼らはバラモンたちを満足させ、各々に金貨を与え、牛や衣服を与え、更にお互いに話し合った。（二六）それから火を燃え上がらせて、急いで戦場に近づいて（異本による）、決意も固く、その火の前で誓いを立てた。（二七）そしてすべての生類が聞いている中で、一同はアルジュナを殺すことを誓い、高らかな声で告げた（異本による）。（二八）

「虚偽を述べる者、バラモンを殺す者、酒を飲む者、師（グル）の妻と楽しむ者、バラモンの財産を奪う者、王の扶持を徒（いたずら）に食む者、庇護を求める人を捨てる者、請願者を殺す者、家を燃やす者、牛を殺す者、他者を害する者、バラモンを憎む者、迷妄により受胎の時期に妻と交わらない者（異本による）、シュラーッダ祭（祖霊祭）の時に性交する者、自分のカーストを隠す者、委託物を奪う者、聞いたことを忘れる者、怒りにより（異本は「不能者と」）戦う者、卑しい人に従う者、無神論者、火とホロスコープと父を捨てる者。もし我々が戦いにおいてアルジュナを殺さずに引き返したら、また、彼に苦しめられて恐れて退却したら、我々は以上の者たちやその他の悪事をなした者たちの世界に達するであろう。（二九—三五）あるいは、もし我々が戦いにおいて、世にもむずかしい仕事をなすならば、疑いもなく我々は、善行をなした人々の望ましい世界に達するであろう。（三六）」

王よ、彼ら勇士たちはこのように言って、それから彼らは戦場に進撃した。そして彼らは祖霊の住む方角（南方）からアルジュナに挑戦した。（三七）敵の都市を征服するアルジュナは、彼ら人中の虎に挑戦されて、近くにいるダルマ王に次のように言った。（三八）

「挑戦されたら避けないと私は固く誓っている。王よ、あの特攻隊（サンシャプタカ）（「誓った者たち」）が何度も私に挑戦している。（三九）あそこでスシャルマンは兄弟たちとともに、私に挑戦している。私が彼とその眷属を殺すことをお許し下さい。（四〇）人中の雄牛よ、私はこの挑戦に我慢できない。私はあなたに約束する。敵どもは戦いにおいて殺されたと知りなさい。（四一）」

　ユディシティラは言った。

「君よ、お前はドローナの意図を聞いたであろう。それが実現しないように行動せよ。（四二）というのは、ドローナは強力な勇士で、武器に通達し、疲れを克服している。勇士よ、彼は私を捕えると約束した。（四三）」

　アルジュナは言った。

「王よ、このサティヤジット（ドルパダの息子）が今日、戦いにおいてあなたを守る。このパーンチャーラの王子が生きている限り、師匠（ドローナ）は望みを達しないであろう。（四四）しかし王よ、人中の雄牛であるサティヤジットが戦いで殺されたら、すべての兵がいても、決してここにいるべきではない。（四五）」

　サンジャヤは語った。――

それからユディシティラ王は、アルジュナが行くのを許し、彼を抱きしめた。そして何度も愛情をこめて彼を見て、祝福の言葉を述べた。(四六)それから強力なアルジュナは兄から離れて、トリガルタ軍に向かって行った。飢えた獅子が飢えを癒すために鹿の群を襲うように。(四七)アルジュナが去った時、ドゥルヨーダナの軍は最高に喜んで、猛り立ってダルマ王を捕えようとした。(四八)それから両軍は、お互いに激しく攻撃し合った。雨季に水量が増したガンガー(ガンジス)川とサラユー川が激しく合流するように。(四九)

(第十六章)

アルジュナと特攻隊の激戦

サンジャヤは語った。――

王よ、それから特攻隊(サンシャプタカ)は平坦な土地に陣取り、喜び勇み、戦車により「半月」という名の陣形を布いた。(一)わが君よ、彼ら人中の虎は、アルジュナが向かって来るのを見て、喜んで大声で叫んだ。(二)その音声はすべての四方四維と虚空とをおおった。世界はすっかりおおわれたから、そこに反響はなかった。(三)彼らがこの上なく喜んでいるのを見て、アルジュナはわずかに笑って、クリシュナに次のように言った。(四)

「デーヴァキーの息子よ、トリガルタの兄弟たちを見よ。彼らは今日、戦いで死のうとしているが、嘆くべきところを喜んでいる。(五)あるいは、疑いもなく今はトリガルタ軍にとって喜ぶべき時なのだ。彼らは臆病者には達しがたい最高の世界に到達するであろうから。(六)」

勇士アルジュナはクリシュナにこのように告げてから、戦場で布陣したトリガルタ軍に近づいた。(七)アルジュナはデーヴァダッタという黄金で飾られた法螺貝をとり、諸方を満たしながら猛烈な勢いで吹いた。(八)特攻隊の軍隊はその音に恐れ、まるで石でできているかのように、戦場において不動で立ち尽くした。(九)彼らの乗物(象や馬)も、眼を見開き、耳と首は麻痺し、足は硬直し、尿と血を流した。(一〇)それから彼らは意識を取りもどし、陣形を立て直して、鷺(カンカ)の羽根のついた矢を一斉にパーンドゥの息子に放った。(一一)手練の勇者アルジュナは、それら幾千の矢がまだ到着しないうちに、五本、十本の矢で切断した。(一二)それから彼らは、十本ずつの鋭い矢でアルジュナを射た。アルジュナは三本ずつの矢で彼らを射た。(一三)王よ、それから彼らは一人ずつ、五本の矢でアルジュナを射た。勇猛なアルジュナは二本ずつの矢で彼らを射た。(一四)彼らは怒って、アルジュナとクリシュナに、鋭い矢を浴びせた。[雲が]池に雨を注ぐように。(一五)それから、幾千の矢はアルジュナに向けて落下した。蜂の群が花開く樹々の森に降下するように。(一六)黄金の羽根のついた矢がアルジュナの王冠に刺さり、アルジュナは黄金でできた花飾りがついた、そびえる祭柱(異本は「昇る太陽」)のように輝いていた。(一八)

それからアルジュナは、その戦いにおいて、半月形の先の矢でスバーフの弓懸(ゆがけ)を断ち切った。そして更に、彼に矢の雨を浴びせた。(一九)それからスシャルマンとスラタとスダルマンとスダヌスとスバーフは、アルジュナに十本の弓を放った。(二〇)最高の猿の旗標を持つ

アルジュナは、彼らすべてにそれぞれ諸々の矢を射返し、半月形の先の矢で彼らの黄金の旗を断ち切った。(二一)そして矢を放ってスダンヴァンの弓を断ち切り、彼の馬を殺した。そして兜をつけた彼の頭を、その胴体から切り取った。(二二)その勇士が倒れた時、彼の従者たちは恐れ、恐怖にかられて、ドゥルヨーダナ軍がいる所に逃げて行った。(二三)それからインドラの息子は猛り立って、絶え間ない矢の群により敵の大軍を殺した。太陽が光線により闇を滅するように。(二四)かくてその軍隊がすっかり敗走し、そしてアルジュナが猛り立った時、トリガルタ軍に恐怖が入り込んだ。(二五)アルジュナが真っ直ぐの矢により彼らを殺している間、彼らは鹿の群のように、あちこちで恐れおののき茫然自失していた。(二六)

　それからトリガルタの王（スシャルマン）は怒り、勇士たちに言った。

「勇士たちよ、あわてることはない。恐れてはいけない。(二七)全軍の見ている前で恐るべき誓いを立てながら、ドゥルヨーダナの軍に行ってどのように説明しようというのか。指導者たちよ。(二八)戦いでこのような行為をして、どうして我々は笑われないであろうか。みなでそろって、力の限り引き返すべきである。(二九)」

　王よ、このように言われて、勇士たちは何度も雄叫びをあげ、お互いに元気づけて、法螺貝を吹いた。(三〇)そこで特攻隊の群と、ナーラーヤナ〔と呼ばれる〕牛飼たちは再び引き返した。退却は死であると考えて。(三一)

（第十七章）

サンジャヤは語った。——

特攻隊が戦場に引き返したのを見て、アルジュナは偉大なヴァースデーヴァ（クリシュナ）に告げた。

「クリシュナよ、特攻隊に向けて馬たちをかりたててくれ。彼らは生きて戦場を捨てないと私は思う。(一-二)私の腕の力と弓の力を見よ。私は今日、怒って彼らを倒すであろう。ルドラが獣たちを殺すように。(三)」

　すると無敵のクリシュナは微笑して、祝福の言葉でアルジュナを喜ばせて、彼が望む場所に導いた。(四)その戦車は白馬たちにひかれて戦場を行き、天空を行く天車のように、こよなく輝いていた。(五)王よ、かつて神々と阿修羅たちの戦いにおいてインドラの戦車がそうしたように、その戦車は円を描いて進み、前進し後退した。(六)それからナーラーヤナたちは怒り、種々の武器を手にして、矢の群でおおって、アルジュナを取り囲んだ。(七)そしてバラタの雄牛よ、その戦いにおいて彼らはすぐにアルジュナとクリシュナの姿を見えなくした。(八)アルジュナは戦場で怒り、その勇猛さを倍加させて、速やかに、ガーンディーヴァ弓をとってその弦に触れた。(九)そしてアルジュナは、忿怒の形相を示して眉をひそめ、大法螺デーヴァダッタを吹き鳴らした。(一〇)そしてアルジュナは、敵の群を滅ぼすトゥヴァシトリの武器を放った。それから〔アルジュナとクリシュナの〕幾千もの姿が現出した。(一一)一人のアルジュナが種々の姿をとったように見えて、彼らは幻惑され、それぞれをアルジュナであると考え、自分の味方を殺した。(一二)「これはアルジュナだ」、「これはクリシ

ュナだ」、「これはクリシュナとアルジュナだ」と言いながら、彼らは迷って戦場でお互いに殺し合った。(一三) 戦士たちはその最高の武器に幻惑されて、お互いに〔殺し合って〕死んだ。彼らは戦場で花咲くキンシュカ樹のように輝いていた。(一四) その武器は彼らに放たれた幾千の矢を焼き尽くし、彼ら勇士たちをヤマ(閻魔)の住処に送った。(一五) それからアルジュナは笑い、ラリッタ、マーラヴァ、マーチェーッラカ、トリガルタ、ヤウデーヤの軍を矢で苦しめた。(一六) それらの王族たちは勇士に殺されつつも、カーラ(運命、破壊神)にかりたてられて、種々の矢をアルジュナに放った。(一七) 恐ろしい矢の雨におおわれて、アルジュナも戦車もクリシュナも認められなかった。(一八) そこで彼らは的を射たので、お互いに喚声をあげた。そしてアルジュナとクリシュナは殺されたと喜び彼らの衣服を振るった。(一九) そして彼らは、ベーリーやムリダンガ(太鼓の種類)や法螺貝を幾千となく鳴らし、恐ろしい獅子吼をした。わが君よ。(二〇)

クリシュナは汗を出し、疲れて、アルジュナに言った。

「アルジュナよ、どこにいるのか。あなたが見えない。敵を殺す者よ、あなたは生きているのか。(二一)」

人の心を知るアルジュナは、彼が人間的な状態にあるのを知り、風神《ヴァーユ》の武器(ヴァーヤヴィヤ)によって、彼らに放たれた矢の雨を吹き払った。(二二) それから尊い風神が、特攻隊《サンシャプタカ》の群を、馬や象や戦車や武器とともに、枯葉の群を運ぶように運び去った。(二三) 王よ、風に運ばれて行く彼らは非常に美しかった。時が来て、樹々から飛んで行く鳥たちのように。(二四) そしてアルジュナは速やかに彼らを動揺させて、鋭い矢で幾百幾千と殺した。(二五) 彼は彼らの頭や武器を持った腕を、半月形の先を持つ矢で切り取った。そして象の鼻のような腿を矢で地面に射落とした。(二六)(二七―三五略)

彼らはアルジュナに殺され、その馬や戦車や象は混乱したが、アルジュナのみをめざして戦死し、インドラの客人となった(天界へ行った)。(三六) バラタの最上者よ、その土地はすべて、殺されて死者となった勇士たちにより、すっかりおおわれた。(三七)

その間、アルジュナが戦いに酔っていた時、ドローナは陣形を整えてユディシティラを攻撃した。(三八) 戦士たちはユディシティラを守ろうとして、急いで陣形を整えてドローナを迎え撃った。そこで大激戦が行なわれた。(三九)

(第十八章)

ドローナの活躍

サンジャヤは語った。――

王よ、勇士ドローナはその夜を過ごしてから、スヨーダナ(ドゥルヨーダナ)王に何度も言って、アルジュナと特攻隊《サンシャプタカ》とについての術策を講じた。その後、アルジュナが特攻隊を殺すべく戦場から出て行った時、ドローナはダルマ王を捕えようとして、パーンダヴァの大軍を攻撃した。バラタの最上者よ。(一―三) ドローナが布《し》いたスパルナ(ガルダ)の陣形を見て、ユディシティラはそれに対抗して半円(マンダラールダ)の陣を布いた。(四) スパルナの口には、勇士ドローナ

がいた。頭にはドゥルヨーダナ王が弟や従者たちとともにいた。（五）両眼には、クリタヴァルマンと最高の射手クリパがいた。ブータヴァルマン、クシェーマシャルマン、強力なカラカルシャ、そしてカリンガ軍、シンハラ軍、東部の人々、シューラ、アービーラ、ダシェーラカ、シャカ、ヤヴァナ、カーンボージャ、ハンサパダの軍、シューラセーナ、ダラダ、マドラとケーカヤの軍、及び象兵と騎兵と戦車兵と歩兵の群が、幾百幾千と、首のところに立っていた。（六―八）ブーリシュラヴァス、シャラ、シャリヤ、ソーマダッタ、バーフリーカなどの勇士たちが、軍団に囲まれて、右翼のところにいた。（九）アヴァンティのヴィンダとアヌヴィンダ、カーンボージャのスダクシナが、ドローナの息子（アシュヴァッターマン）を先頭として、左翼のところにいた。（一〇）その背中には、カリンガとアンバシタ、マーガダ、パウンドラ、マドラカ、ガーンダーラ、山間部の人々、ヴァサーティの軍が、シャクニに率いられていた。（一一）尾のところには、ヴァイカルタナ・カルナとその息子たちと親類縁者が、種々の旗を立てた大軍とともにいた。（一二）王よ、ジャヤドラタ、ビーマラタ、……ブーミンジャヤ、ヴリシャ、クラータ、強力なニシャダの軍など戦いに通達した者たちが、……大軍に囲まれて、その陣形の胸のところに（異本による）立っていた。（一三―一四）歩兵・騎兵・戦車兵・象兵よりなる、ドローナに布かれた陣形は、風に波立つ海のように見えた。（一五）（一六―二〇略）

それから、ユディシティラは、その超人的で敵にうち破られない陣形を見て、戦場でドリシタデュムナに告げた。（二一）

「貴公、私が今日、あのバラモン（ドローナ）の支配下に帰さないように、戦略を講じてくれ。鳩

のように白色の馬たちにひかれた者よ。（二二）」

ドリシタデュムナは言った。

「誓戒を守る者よ、ドローナがいくら努力しても、あなたは彼の支配下には帰さないでしょう。私は今日、ドローナとその従者を食い止めます。（二三）ユディシティラよ、私が生きている限り、あなたは心配する必要はない。ドローナは決して戦いにおいて私をうち破ることはできないから。（二四）」

サンジャヤは語った。——

強力なドルパダの息子はこのように言って、鳩のように白色の馬たちにひかれ、矢を注ぎながら、自らドローナを攻撃した。（二五）会いたくないドリシタデュムナが立っているのを見て、ドローナはすぐに不快な気持になった。（二六）しかし敵を苦しめるあなたの息子ドゥルムカはドリシタデュムナを見て、ドローナに好ましいことをしようと望んで、彼を制止した。（二七）バーラタよ、かくて勇士ドリシタデュムナとドゥルムカとの間に、非常に恐ろしい（異本による）激戦が行なわれた。（二八）ドリシタデュムナは速やかに矢の網でドゥルムカをおおい、矢の大洪水でドローナをおおった。（二九）あなたの息子は、ドローナが矢でおおわれたのを見て憤激し、種々の相の矢の群によりドリシタデュムナを混乱させた。（三〇）パーンチャーラの王子とクルの勇士とが戦いに専念している間に、ドローナはユディシティラの軍隊を矢で散々うち破った。（三一）雲が風によってすっかり断片になるように、ユディシティラ

の軍はあちこちでうち破られた。(三二)(三三－六三略)恐ろしくも凄まじい戦いが行なわれている間に、ドローナは敵を幻惑させて、ユディシティラに襲いかかった。(六四)

(第十九章)

サンジャヤは語った。——

それからユディシティラは、ドローナが近づいて来るのを見て、恐れることなく、矢の大雨により迎え撃った。(一)そして、ユディシティラの軍隊に「わあ、わあ」という声があがった。大きな獅子が象の群の長を捕えようとする時に象たちが叫ぶように。(二)ドローナを見て、不屈の勇者である勇士サティヤジット(七・一六・四四参照)は、ユディシティラを捕えようと望む師匠(ドローナ)を攻撃した。(三)それから師匠とパーンチャーラの王子は敵軍を混乱させつつ、インドラとヴァイローチャナ(バリ)のようにお互いに戦った。(四)それから師匠は急所を貫く鋭い十本の矢でサティヤジットの弓矢を切断してから、速やかに彼を射貫いた。(五)栄光ある彼は速やかに他の弓をとって、鷺の羽根のついた二十本の矢で速やかにドローナを射た。(六)戦場でドローナがサティヤジットに苦しめられているのを知って、パーンチャーラの王子ヴリカは鋭い百本の矢でドローナを攻撃した。(七)王よ、勇士ドローナが戦場において矢でおおわれているのを見て、パーンダヴァたちは喚声をあげ、衣服を振るった。(八)王よ、強力なヴリカは最高に猛り立って、六十本の矢でドローナの胸の中央を射貫いた。それは奇蹟のようであった。(九)一方、勇士ドローナは矢の雨でおおわれて、怒りで両眼をつり上げ、猛烈な勢いで勇武を発揮した。(一〇)それからドローナは、サティヤジットとヴリカの弓を断ち切り、六本の矢でヴリカとその御者と馬を殺した。(一一)その時サティヤジットはこの上なく迅速に他の弓をとって、矢によってドローナとその御者と軍旗を射た。(一二)ドローナはその戦いにおいてパーンチャーラの王子に苦しめられたことに我慢できなかった。そこで彼を亡き者にするために急いで矢を放った。(一三)ドローナは彼の馬たち、旗、弓の握り、両端の馬を御す二人の御者に幾千と矢の雨を浴びせた。(一四)このように何度も弓が断ち切られても、最高に武器を知るパーンチャーラの王子は、赤い馬にひかれた(ドローナ)と戦った。(一五)サティヤジットがこのように奮戦しているのを見て、ドローナはその偉大な男の頭を半月形の先の矢で断ち切った。(一六)雄牛のような戦士であるパーンチャーラの高官が殺された時、ユディシティラはドローナを恐れて駿馬に乗って逃走した。(一七)パーンチャーラ、ケーカヤ、マツヤ、チェーディ、カールーシャ、コーサラの軍は、ユディシティラを守るために、喜び勇んでドローナを攻撃した。(一八)敵の群を殺す師匠は、ユディシティラを捕えようとして、風が綿の堆積を吹き払うように、敵軍を粉砕した。(一九)

ドローナが繰り返し種々の敵軍を燃やしていた時、マツヤ国王の弟のシャターニーカがドローナを攻撃した。(二〇)彼は研師に磨かれた太陽の光線のような六本の矢で、ドローナとその御者と馬たちを射てから、大声で叫んだ。(二一)ドローナは咆哮している彼の耳飾りのついた頭を、馬蹄形の先の矢により速やかに胴体から切り取った。そこでマツヤ軍は逃走した。(二二)ドローナはマツヤ軍をうち破ってから、チェーディ、カールーシャ、ケーカヤ、

パーンチャーラ、スリンジャヤ、パーンダヴァの軍を繰り返しうち破った。(二三) 黄金の戦車に乗るドローナが怒って、猛り立つ火が森を焼いているように敵軍を焼いているのを見て、スリンジャヤ軍は戦慄した。(二四) 最高の弓を用い敵たちを殺す、迅速に行動する彼の弓の弦の音は、すべての方角で聞こえた。(二五) 手練の業の彼に放たれた恐ろしい矢は、象と馬と歩兵と戦車兵と象の御者たちを粉砕した。(二六) 寒季の終わりに、風をともなう雲が咆哮し、雹を降らせるように、ドローナは敵軍に矢を雨降らせ、恐怖をもたらした。(二七) その味方の恐怖を除く強力で勇猛な偉大な射手は、敵軍を混乱させつつ一切の方角へ行った。(二八) 無量の力を持つドローナの黄金で飾られた弓は、雲間の稲妻のようで、我々はそれを一切の方角に見た。(二九) ドローナはパーンダヴァ軍において大殺戮を行なった。神々と阿修羅に敬われるヴィシュヌが、悪魔の群において大殺戮を行なうように。(三〇) 約束を守り、叡知あり、強力で、不屈の勇者で、威厳に満ちたその勇士は、終末の恐ろしくも凄まじい恐怖の川を作った。(三一) 鎧がその川の波であり、旗が渦巻である。その川は人間という土手を運び去る。象や馬という大きな鰐と刀という魚がいて渡りがたい。(三二) その恐ろしい川では、勇士の骨が砂利であり、ベーリーとムラジャ(太鼓の種類)が亀である。楯と鎧が舟であり、毛髪が水草と草である。(三三) 矢が波で、弓が流れであり、腕という蛇に満ちている。それは戦場を流れる恐ろしい川で、クルとスリンジャヤとを運ぶ川である。人間の頭がその岩石であり、槍が魚で、棍棒が筏である。(三四) その川はターバンという泡をつけ、散乱する臓物という蛇がいる。その恐ろしい川は勇士を運び去り、肉と血の泥濘を有する。(三五) 象という鰐、旗という樹木を持ち、王族たちがそこに沈む。その残酷な川は、死体がひしめき(異本による)、騎兵という鰐がいて越えがたい。このようにドローナはそこに死神に行きつく川を作った。(三六) その川は肉食動物の群の声が響き、野犬やジャッカルの群がいる。非常に恐ろしい肉食鬼がいたるところ住みついている。(三七)

偉大な戦士ドローナが死神のように敵軍を燃やしていた時、クンティーの息子を先頭とするパーンダヴァ軍はいたるところからドローナを攻撃した。(三八) あなたの軍の諸王と王子たちは、武器を振り上げて、その敵の勇猛な勇士たちを、ぐるりと取り囲んだ。(三九) 約束に忠実なドローナは、発情した象のように、戦車兵をうち破り、ドリダセーナを倒した。(四〇) それから、恐れることなく攻撃して来るクシェーマ王を襲い、九本の矢で射た。彼は殺されて戦車から落ちた。(四一) 彼は敵軍の中央に達して、すべての方角に行き、他の人々を助けたが、彼自身は助けられる必要はまったくなかった。(四二) 彼は十二本の矢でシカンディンを、二十本の矢でウッタマウジャスを射た。そして半月形の矢でヴァスダーナをヤマ(閻魔)の住処に送った。(四三) それから彼は八十本の矢でクシェーマヴァルマンを、二十六本の矢でスダクシナを射た。そして半月形の矢でクシェーマデーヴァを戦車の座席から射落とした。(四四) それから黄金の戦車に乗るドローナは、六十四本の矢でユダーマニユを、三十本の矢でサーティヤキを射て、速やかにユディシティラに近づいた。(四五) そこで最高の王ユディシティラは駿馬により急いでドローナから(異本による)逃げた。それからパーンチャーラの王子(名前は不明)がドローナを攻撃した。(四六) ドローナは彼とその弓と馬と御者とを

殺した。彼は殺されて、星が天から落ちるように、戦車から地面に落ちた。（四七）パーンチャーラに名誉をもたらすその王子が殺された時、「ドローナを殺せ、ドローナを殺せ」（テクスト疑問）という大騒ぎが起こった。（四八）このようにパーンチャーラ、マツヤ、ケーカヤ、スリンジャヤ、パーンダヴァたちはひどく怒ったが、強力なドローナは彼らを混乱させた。（四九）ドローナはクル軍に囲まれて、サーティヤキ、チェーキターナ、ドリシタデュムナ、シカンディン、ヴァールダクシェーミン、チトラセーナ、セーナービンドゥ、スヴァルチャス、及びその他の多くの国王をすべて戦いにおいて破った。（五〇—五一）大王よ、あなたの軍の兵たちは激戦において勝利を得て、いたるところ逃げまわるパーンダヴァ軍を殺した。（五二）バーラタよ、パーンチャーラとケーカヤとマツヤの軍は、悪魔が偉大なインドラに殺されるように殺されて戦慄した。（五三）

（第二十章）

パーンダヴァ軍の反撃

ドリタラーシトラは言った。

「その激戦においてパーンダヴァ軍やパーンチャーラ軍がすべてドローナにうち破られた時、他に誰かドローナを攻撃したか。（一）戦う決意をすることは高貴で、王族（クシャトリヤ）に名声をもたらす。臆病者はそのような決意をしないが、人中の雄牛たちはその決意をする。（二）サンジャヤよ、パーンダヴァ軍がうち破られた時、そのように戦う決意をして、決定（けつじょう）したドローナを見て攻撃した男は誰かいるか。（三）ドローナは、あくびをする虎か発情した象のようで、戦場で生命を捨てる覚悟があり、具足をつけ、めざましく戦う。（四）彼は偉大な射手で、人中の虎であり、敵の苦しみを増大させる。恩を知り、真実に専念し、ドゥルヨーダナの幸せを望む。（五）そのように軍隊の中で身構えた勇士ドローナを見て、いかなる勇士たちが引き返したか。サンジャヤよ、それを私に告げてくれ。（六）」

サンジャヤは語った。——

クル軍は戦場において、パーンチャーラ、パーンダヴァ、マツヤ、スリンジャヤ、チェーディ、ケーカヤの軍が、ドローナの矢に動揺し、駆逐されたのを見た。（七）彼らはドローナの弓から放たれた生命を奪う矢の群により、舟が川の急流に流されるように殺された。（八）そしてクル軍は、獅子吼により、種々の楽器の音により、そして戦車と象と人と馬により、いたるところをおおった。（九）

従者に囲まれて自軍の中央にいるドゥルヨーダナ王は、彼らを見て喜び、笑ってカルナに言った。（一〇）

「カルナよ見よ。剛弓を持つドローナがその矢によりパーンチャーラ軍を駆逐するのを。獅子が森の鹿たちを恐れさせるように。（一一）大きな樹々が風に折られるように、ドローナにうち破られた彼らは、決してまた戦場にもどるとは私は思わない。（一二）彼らは偉大な彼に黄金の羽根の矢で苦しめられ、あちこちで逃げまどい、散り散りに逃げ去った。（一三）クル

軍と偉大なドローナに抑圧されて、火に囲まれた象たちのように、彼らはみな一団となった。（二四）彼らは蜂のようなドローナの鋭い矢に射られて、逃げることに専念し、お互いにぶつかり合った。（二五）カルナよ、かくてドローナは烈しく怒り、パーンダヴァとスリンジャヤの軍を滅ぼし、わが軍の兵たちに囲まれて私を喜ばせる（異本による）。（二六）あの邪悪なパーンドゥの息子は、明らかに今日、世界はドローナよりなると見る。きっと彼は、今、生命と王国についての希望を失ったであろう。（二七）」

カルナは言った。

「その強力な男は生きている限り決して戦いをやめないだろう。そしてこの獅子吼に我慢できないだろう。（一八）そしてまた、パーンダヴァたちは戦いにおいて敗れないであろうと私は思う。彼らは勇士で、強力で、武器に通達し、戦いに酔う。（一九）パーンダヴァたちは毒と火事と賭博の難と、森に住んだことを思い出して、戦いを捨てはしないと私は考える。（二〇）無量の力を持つ強力な狼腹（ビーマ）は侮辱された（異本は「引き返した」）。彼は次々と偉大な戦士たちを殺すであろう。（二一）彼は刀、弓、槍、馬、象、戦車、鉄棒を用いて、わが軍の群を次々と殺すであろう。（二二）サーティヤキをはじめとする戦士たち、パーンチャーラ、ケーカヤ、マツヤ、特にパーンダヴァの軍が彼に続くであろう。（二三）彼らは勇士であり、強力で、勇猛で、偉大な戦士であり、特に怒ったビーマにかりたてられている。（二四）クルの雄牛（パーンダヴァ）たちは狼腹を守ろうと望んで、いたるところからドローナを攻撃する。雲の群が太陽をおおうように。（二五）彼らは一途に、守られていないドローナを苦しめるだろう。蝗（いなご）が命がけで灯火をおびやかすように。武器に通達した彼らは、闘いをやめないドローナを食い止めることができる。（二六）ドローナに課せられた重荷は重すぎると私は考える。そこで我々はドローナがいる所に急いで行こう。鴉たちが大蛇を殺す（注釈は「猿たちが巨象を殺す」と解する）ように、彼らがドローナを殺さないように。（二七）」

サンジャヤは語った。――

王よ、その時ドゥルヨーダナ王は、カルナの言葉を聞いて弟たちとともにドローナの戦車の所に行った。（二八）パーンダヴァたちは様々な色の駿馬たちにひかれて、一人のドローナを殺そうとしてそこに引き返し、大きな叫びをあげていた。（二九）

（第二十一章）／（第二十二章略）

ドリタラーシトラは言った。

「戦場にもどった狼腹（ビーマ）をはじめとする戦士たちは、戦いにおいて神々の軍隊をも戦慄させるであろう。（一）人間はそれぞれの定め（命運）により行為をさせられる。そしてまさにその定めにおいて、すべてのものごとが一つ一つ認められる。（二）ユディシティラは編髪を結い鹿皮をつけて（苦行者のなりで）長い期間森で亡命生活をした。そして世人に知られないでさすらった。（三）まさにそのユディシティラが、戦いにおいて大軍を集めた。私の息子に（王国が）

あったのも運命の計らいに他ならぬ。（一四）人間は必ずや運命と結びついて生まれる。彼は運命に引きずられて、自らは望まないことをやる。（一五）ユディシティラは賭博の悪徳のせいで苦難に陥ったが、再び運命により協力者を得た。（一六）私はケーカヤの人々の半分を味方にした。カーシカ、コーサラ、他にチェーディ、ヴァンガの人々は私の側についた。（一七）私の愚かな息子ドゥルヨーダナは『父よ、ほとんどの地上〔の王たち〕は、パーンダヴァでなく私の側につく』と私に言った。（一八）その軍隊の群の中で、ドローナはよく守られていたが、戦いにおいてドリシタデュムナに殺された。運命の計らい以外の何ものでもない。（一九）諸王の中で、ドローナは強力で、常に戦いに喜び、すべての武器に通達していた。その彼に、どうして死が近づいたのか。（二〇）私は苦境に陥り、この上なく困惑した。ビーシュマとドローナが殺されたと聞いて、私は生きることができない。（二一）なあ、サンジャヤよ、私が息子を溺愛するのを見てヴィドゥラが私に告げたことを、ドゥルヨーダナと私はすべて実際に経験している。（二二）もしドゥルヨーダナを捨てて他の息子たちを救おうとしたら、非常に残酷なことであろう。しかし全滅するということにはならなかったろう〔異本による〕。（二三）法（ダルマ）を捨てて利益（アルタ）に専念する人は、この世界〔の人々〕から捨てられ、惨めな状態に赴く。（二四）サンジャヤよ、今やこの勢いを失った王国の背瘤〔上頂〕が砕かれたので、それが残存するとは思われない。（二五）我々はあの二人の忍耐強い人中の雄牛〔ビーシュマとドローナ〕にいつも従って生きて来た。その重責を担う二人が逝去した時、どうして残存することがあろうか。（二六）戦争の状況を明瞭に私に語れ。誰が戦ったか。誰が〔敵を〕うち破ったか〔異本による〕。いかなる臆病者が恐れて逃げたのか。（二七）アルジュナについて私に語れ。あの戦士の雄牛がどのようにしたか、一つ一つ。我々は特別にあの敵を非常に恐れる。（二八）サンジャヤよ、パーンダヴァが引き返した時、彼らとわが軍の残りとの非常に恐ろしい合戦はどのようであったか。そしてわが軍の勇士たちは、そこで誰々を食い止めたか。（二九）」　（第二十三章）

サンジャヤは語った。——

パーンダヴァ軍が引き返した時、雲が太陽をおおうように彼らがドローナを〔矢で〕おおうのを見て、わが軍に大きな恐怖が生じた。（一）彼らに立てられた激しいほこりが、あなたの軍隊をおおい、視界が奪われて、我々はドローナが殺されたと考えた。（二）勇猛な勇士たちが恐ろしい行為をやろうとしているのを見て、ドゥルヨーダナは急いで自軍を鼓舞した。（三）

「諸王よ、力の限り、気力の限り、勇気の限り、状況に応じて、パーンダヴァの軍隊を食い止めよ。（四）」

それから、あなたの息子ドゥルマルシャナは、近くにビーマを見かけ、ドローナの生命を救おうとして、矢を浴びせながら彼に近づいた。（五）彼は戦場で猛り立ち、死神のようなビーマに矢を注いだ。ビーマも彼を矢で射た。そこで激しい戦いが行なわれた。（六）主君に命じられた叡知ある勇猛な戦士たちは、その戦いにおいて、死と恐怖を忘れて互いに敵と対戦

した。（七）（八—五九略）ドローナを殺すことと守ることに専念する者たちの間に行なわれたような戦闘は、いまだかつて見られたことも聞かれたこともなかった。（六〇）王よ、これは恐ろしく、これはめざましく、これは凄まじいという具合に、そこでは広大で多くの戦いが認められた。（六一）

（第二十四章）

象に乗るバガダッタ王の武勇

ドリタラーシトラはたずねた。

「彼らが引き返し、部隊ごとに進撃した時、パーンダヴァたちとわが軍の精鋭はどのように戦ったか。（一）またアルジュナは、特攻隊（サンシャプタカ）に対してどのようにしたか。そして特攻隊はアルジュナにどのようにしたか。サンジャヤよ。（二）」

サンジャヤは語った。——

彼らが引き返し、部隊ごとに進撃した時、あなたの息子（ドゥルヨーダナ）は象兵により自らビーマを攻撃した。（三）象に挑戦された象のように、雄牛に挑戦された雄牛のように、王に自ら挑戦されたビーマは、敵の象兵に襲いかかった。（四）戦いに長け腕力をそなえたビーマは、すぐに象兵をうち破った。わが君よ。（五）いたるところ分泌液（マダ）を流した、山のような象たちは、ビーマセーナの矢により勢いを殺（そ）がれ退却した。（六）風が雲の群をすっかり吹き払うように、風神の息子（ビーマ）はそれらの軍を粉砕した。（七）ビーマは象たちに矢を放って輝いた。昇った太陽がすべての世界に光線を放って輝くように。（八）それらの象は、幾百のビーマの矢により貫かれて輝いていた。天空で種々の雲が太陽の光線に貫かれて輝くように。（九）

風神の息子がこのように象を殺戮していた時、ドゥルヨーダナは怒って、近づいて鋭い矢で彼を射た。（一〇）それからすぐに、ビーマは血走った眼をし、王を殺そうとして、鋭い矢で射貫いた。（一一）ドゥルヨーダナは全身に矢を受けて怒ったが、笑うかのように、太陽の光線のような多くの矢でビーマセーナを射貫いた。（一二）ビーマは相手の旗についた、宝石できらびやかな、宝玉づくりの象と、彼の弓を、半月形の先の矢で速やかに断ち切った。（一三）

わが君よ、ドゥルヨーダナがビーマに苦しめられているのを見て、象に乗ったアンガ国王がビーマを苦しめようとして襲いかかった。（一四）象が雲のような音をたてて襲来した時、ビーマセーナはその額の二つの瘤の真中を矢でしたたかに撃った。（一五）その矢は象の体を突き抜けて地面に入った。そして象は金剛杵（ヴァジュラ）に撃たれた山のように倒れた。（一六）その象が倒れるので、落ちようとする蛮族（ムレーッチャ）の頭を、迅速に行動するヴリコーダラが矢で断ち切った。（一七）その勇士が倒れた時、彼の軍隊は逃走した。その軍の馬と象と戦車はうろたえ、歩兵を踏みつぶした。（一八）

そのすべての軍隊がすっかり逃げた時、プラーグジョーティシャの王（バガダッタ）は象に乗ってビーマを攻撃した。（一九）その象によってインドラは悪魔たちをうち破った。その最高の

象はビーマに激しく襲いかかった。(二〇)その象は二つの耳、二(四)本の足、巻いた鼻により、怒って眼をまわし、ビーマを燃やすかのようであった。(二一)それから、すべての兵士たちの、「ああ、ああ、ビーマが象に殺された」という大きな叫び声があがった。わが君よ。(二二)王よ、パーンダヴァ軍はその叫びに驚いて、狼腹のいる所に急いで走って行った。(二三)それからユディシティラ王は、狼腹が殺されたと考え、パーンチャーラ軍とともに、バガダッタをぐるりと取り囲んだ。(二四)最高の戦士たちは、戦車で彼をぐるりと取り囲み、幾百幾千の鋭い矢を浴びせた。(二五)その山岳地帯の王(バガダッタ)は鉤棒でそれらの矢を防ぎ、象によりパーンダヴァとパーンチャーラの軍を粉砕した。(二六)王よ、戦場で老いたバガダッタが象によって驚異的な行為をするのを我々は見た。(二七)

それから、ダシャールナの王が、象でプラーグジョーティシャの王を攻撃した。その象は斜めに進み、分泌液(マダ)を「こめかみから」流し、迅速に進んだ。(二八)その恐ろしい姿の二頭の象の間に戦闘が行なわれた。太古、羽根を持ち樹木のある二つの山の間に戦いがあったように。(二九)バガダッタの象は、ダシャールナの象に襲いかかり、その脇を裂いて倒した。(三〇)その時バガダッタは、太陽の光線のような七本の槍で、象に乗っていた、まさにその座席から落ちようとする敵を殺した。(三一)

ユディシティラはバガダッタ王に近づき、戦車兵の大軍でぐるりと取り囲んだ。(三二)象に乗るバガダッタは、戦車兵によりぐるりと囲まれて輝いていた。森の中にあって、山の上で燃えている火のように。(三三)恐るべき弓取りである戦士たちが矢の雨を注いでいる間、

その象は密に円を描いて、いたるところ歩きまわった。(三四)それからバガダッタは、その象の雄牛を制御して、突然ユユダーナ(サーティヤキ)の戦車に向かって行かせた。(三五)その巨象はシニの孫の戦車を捕え、激しく投げ出した。しかしユユダーナは脱出した。(三六)一方、御者は大きなシンドゥ産の馬たちを立ち直らせ、再びその戦車をサーティヤキのところに向かわせ合流した。(三七)ところがその象は隙を見て、速やかに戦車の囲みから抜け出した。そしてすべての王たちを投げ飛ばした。(三八)人中の雄牛である王たちは、戦場で迅速に動く象のために恐怖にかられ、一頭の象を数百の象であると考えた。(三九)パーンダヴァ軍は、象に乗るバガダッタに追い立てられた。悪魔たちが、アイラーヴァタ象に乗る神々の王に追い立てられるように。(四〇)パーンチャーラの軍があちこち逃げまわっている間に、象や馬のたてる恐ろしい大音響があがった。(四一)

パーンダヴァ軍が戦場でバガダッタに追い立てられていた時、ビーマは怒って、再びバガダッタを攻撃した。(四二)襲来する彼の馬たちに向けて、バガダッタの象は鼻から水を放って濡らし、馬たちを恐れさせた。そこで馬たちはビーマを戦場から運び去った。(四三)それから、クリティンの息子ルチパルヴァンは戦車に乗り、死神のように、矢の雨を注ぎながら、速やかにバガダッタを攻撃した。(四四)美しい肢体を持つ山岳地帯の王(バガダッタ)は、真っ直ぐの矢でルチラパルヴァン(ルチパルヴァン)をヤマ(閻魔)の領土に送った。(四五)

その勇士が倒れた時、スバドラーの息子(アビマニユ)、ドラウパディーの息子たち、チェーキターナ、ドリシタケートゥ、ユユツがその象を攻撃した。(四六)雲が大雨を注ぐように、彼

らは象に矢の大雨を注いだ。象を殺そうとして、恐ろしい音を響かせて、（四七）象は巧みな乗り手に踵と鉤とつま先でかりたてられて、鼻を延ばし、耳と眼を動かさずに、速やかに進んだ。（四八）象はユユツの馬たちを足で踏み、その御者を殺した。

ところが、あなたの息子は興奮して、スバドラーの息子（アビマニユ）の戦車に突撃した。（四九）象に乗る王（バガダッタ）は、敵軍に矢を放ちながら、太陽が世界中に光線を放って輝くように輝いていた。（五〇）アルジュナの息子（アビマニユ）は十二本の矢により、ユユツは十本の矢により、ドラウパディーの息子たちとドリシタケートゥは三本ずつの矢により彼を射た。（五一）象は敵が懸命に放った矢におおわれて輝いていた。大きな雲が、太陽の光線に貫かれて輝くように。（五二）その象は敵の矢に苦しめられたが、御者が技術と努力により操縦したので、敵を左右に投げ飛ばした。（五三）森で牛飼が杖で畜牛の群を打つように、バガダッタは何度も敵軍を苦しめた。（五四）ひどく逃げまどうパーンダヴァ軍の叫び声は、すばやく鷹に襲われた鴉たちの声のようであった。（五五）王よ、その象王は、最上の鉤棒で打たれて、羽根のある太古の山王のようであった。そして敵をひどく恐れさせた。逆巻く海が隊商の群を恐れさせるように。（五六）王よ、それからその戦いにおいて、逃げる象や戦車や馬や王たちが恐れて、非常に恐ろしい音が生じ、大地と空と天と四方四維をおおった。（五七）バガダッタ王はその最高の象により、敵軍に深く侵入した。かつてヴィローチャナが、戦場で神々によく守られた神軍に侵入したように。（五八）風がひどく吹いた。ほこりは幾重にも天空と兵士たちをおおった。一頭の象が走っていたのだが、人々は多くの象が群をなしていたるところ走っていると考えた。（五九）

（第二十六章）

アルジュナ、特攻隊を粉砕する

サンジャヤは語った。──

あなたはその戦いにおけるアルジュナの働きを私にたずねた。大王よ、戦場でアルジュナがしたことをお聞きなさい。（一）バガダッタが敵軍を粉砕していた時、舞い上がるほこりを見て、そして象の鳴き声を聞いて、アルジュナはクリシュナに言った。（二）

「マドゥスーダナよ、プラーグジョーティシャの王が象に乗り、全速力で進撃しているらしい。これは確かに彼のたてる音だ。（三）彼は象に乗ることに通達していて、戦いにおいてインドラに劣らない。地上において一、二を争うと私は考える。（四）そしてそれは最高の象で、戦場でそれに匹敵する象は決していない。それはすべての武器を超え（異本による）、戦いに通達し、疲れを知らない。（五）非の打ち所のない人よ、彼は武器が振り下ろされても、火に触れても、それに耐える。明らかに今、その象はただ一頭でパーンダヴァ軍を滅ぼすであろう。（六）我々二人を除いて、他に彼を制止することができる者はいない。そこでバガダッタがいる所に急いで行ってくれ。（七）彼はインドラの友であることにより、象の力により、また年齢にかけて慢心している。私はまさに今日、インドラの愛しい客として彼を送り込んでやる（殺して天界に送る）。（八）」

アルジュナの言葉により、クリシュナは、バガダッタがパーンダヴァ軍を殺している場所へ行った。(九) 進んで行く彼に対し、一万四千人の特攻隊（サンシャプタカ）の勇士たちが後ろから挑戦し攻撃した。(一〇) 王よ、そのうちの一万人はトリガルタの軍、四千人は〔もともと〕ヴァースデーヴァ（クリシュナ）の従者であった。(一一) わが君よ、バガダッタに殺される軍隊を見て、また彼らに挑戦されて、アルジュナの心は二様に分かれた。(一二)「ここから引き返すべきか、あるいはユディシティラのもとに行くべきか、一体どちらの行動をとったらよいか」と考えたのである。(一三) クルの長よ、アルジュナは理性によりよく考えて、特攻隊を滅ぼした方がよいと決定した。(一四) 最高の猿の旗標を持つアルジュナは、戦場において一人で幾千の戦士を殺そうと考え、突然引き返した。(一五) 実はこれはドゥルヨーダナとカルナの二人が、アルジュナを殺す方策として考えていたことである。そこで二面策戦を講じたのである。(一六) アルジュナは二面策戦によって迷わされたが、勇士たちを殺すことによって彼らの意図を無効にしたのであった。(一七)

王よ、それから特攻隊の勇士たちは、百千の真っ直ぐの矢をアルジュナに注いだ。(一八) 王よ、それらの矢におおわれて、アルジュナもクリシュナも馬や戦車も見えなくなった。(一九) クリシュナが汗をかき気を失いそうになった時、アルジュナは金剛（ヴァジュラ）の武器（アストラ）で彼らを大量に殺した。(二〇) 弓矢と弓弦を持ち、弓籠手（ゆごて）をつけた幾百の手が切り取られた。旗や馬が射貫かれ、戦車兵は地面に落ちた。(二一) 樹々や山頂や雲に似た、よく装備された象たちは、アルジュナの矢で撃たれ、乗り手も殺され、大地に倒れた。(二二) 馬たちはアルジュナの矢

の群に撃たれ、その馬衣も手綱も断たれ、馬具も切れ、息絶えて、乗り手もろとも倒れた。(二三) 槍、楯、刀、鉤爪、槌、斧を持つ人々の腕が、アルジュナにより矢で断ち切られて落ちた。(二四) わが君よ、朝日や蓮や月に似た頭が、アルジュナの矢で断ち切られ、地面に落ちた。(二五) 装飾をほどこされ、敵の生命を食らう、種々の特徴のある矢で、怒ったアルジュナが敵を殺していた時、その軍隊は燃え上がるかのようであった。(二六) 象が蓮池を荒らすようにアルジュナが敵軍を粉砕していた時、生類の群は「見事、見事」と言って彼を讃えた。(二七) インドラのようなアルジュナの行為を見て、クリシュナは最高に驚嘆して、拍手して讃えた。(二八) それからアルジュナは、堅い決意をした特攻隊（サンシャプタカ）を大部分殺して、「バガダッタの所に行け」とクリシュナをうながした。(二九)　（第二十六章）

アルジュナ、バガダッタ王の心臓を射貫く

サンジャヤは語った。——

それからクリシュナは、アルジュナがそちらに行きたいと言うので、黄金におおわれた、思考のように速い彼の白馬たちを、ドローナの軍隊の方にかりたてた。(二) クルの最上者（アルジュナ）がドローナに苦しめられた味方を救おうとして進んだ時、スシャルマン（トリガルタの王）が兄弟たちとともに、戦いを求めて背後から彼を追った。(三) すると白馬にひかれたアルジュナは無敵のクリシュナに言った。

「クリシュナよ、そこにスシャルマンが兄弟たちとともに私に挑戦している。(三) 敵を殺す者よ、そして北方では我々の軍隊が殺されている。今日、私の心は特攻隊(サンシャプタカ)により二つに分断された。(四)『私は特攻隊を殺そうか、それとも敵に苦しめられている味方を守ろうか』と。あなたは私の考えを知っている。ここでどうすればよいだろうか。(五)」

このように言われたクリシュナは、トリガルタの王がアルジュナに挑戦している場所に車を引き返した。(六) それからアルジュナは七本の矢でスシャルマンを射て、そして彼の旗と弓を馬蹄形の先の矢で断ち切った。(七) そしてアルジュナは速やかに、六本の矢で、トリガルタの王の弟を、馬や御者もろともに、ヤマの住処に送った。(八) それからスシャルマンは、蛇のような鉄の槍をアルジュナに投じ、クリシュナめがけて投槍を投じた。(九) アルジュナは三本ずつの矢で槍と投槍を断ち切り、矢の群でスシャルマンを惑わせて撃退した（異本による）。(一〇) 恐るべき彼が大雨のような矢の洪水を注ぎ、インドラのように襲いかかった時、王よ、あなたの兵士たちのうちで誰も彼を制止できなかった。(一一) それからアルジュナは、火が乾いた草木を燃やすように、クル族の勇士たちを矢で殺しながら襲来した。(一二) 人々が火の接触に耐えることができないように、英邁なクンティーの息子の抗しがたい激しさに彼らは耐えることができなかった。(一三) 王よ、アルジュナは兵たちを矢の雨でおおって、スパルナ（ガルダ）が飛行するように、バガダッタに向かって行った。(一四)（一五―二〇略）

自軍が粉砕された時、バガダッタ王は、例の象に乗ってアルジュナに激しく襲いかかった。(二一) 人中の虎は戦車に乗って、恐れることなく彼を迎え撃った。そこで戦車と象との激しい戦いが行なわれた。(二二) バガダッタとアルジュナの両雄は、（戦略の）論理にもとづいて整備された戦車と象により、戦場で動きまわった。(二三) それからバガダッタは、主神インドラのように、雲のような象の上から、矢の大雨をアルジュナに注いだ。(二四) しかし強力なアルジュナはバガダッタの矢の雨が到達しないうちに、矢の雨によりそれを断ち切った。(二五) それからバガダッタ王は矢の雨を制止して、強力なアルジュナとクリシュナを矢で射た。バーラタよ。(二六) そして彼はおびただしい矢の群でクリシュナとアルジュナをおおって、その二人を殺すためにその象をかりたてた。(二七) 怒った象が死神のように襲来するのを見て、クリシュナは急いで戦車で左まわりにまわった。(二八) アルジュナは向きを変えた巨象とその乗り手を死神の手に渡すことはできたが、法(ダルマ)を思い出して、殺すことは望まなかった。(二九) わが君よ、しかしその象は他の象や戦車や馬たちをうち破って、死神の世界に送った。そこでアルジュナは怒った。(三〇)

（第二十七章）

ドリタラーシトラは言った。

「そのように怒ったアルジュナは、バガダッタに対して何をしたか。またバガダッタはアルジュナに対して何をしたか。それを私にありのままに語ってくれ。(一)」

サンジャヤは語った。――

クリシュナとアルジュナの二人がバガダッタに専念していた時、一切の生類は二人が死神の近くに達したと考えた。(二)というのは、王よ、バガダッタは象の肩から、戦車に立っているクリシュナとアルジュナに対し、絶えず矢の雨を降らせたから。(三)彼は引き絞った弓から放たれた、黒鉄の矢、黄金の羽根があり、石で研いだ矢でクリシュナを射た。(四)バガダッタに放たれた、火の接触のように激しい鋭い矢は、クリシュナを貫通して地面に達した。(五)アルジュナは彼の弓を切断し、箙（えびら）を断ち、バガダッタ王を翻弄するかのように戦った。(六)バガダッタは太陽の光線のように輝く、鋭い十四本の投槍を投じた。アルジュナはそれらを各々三つに切断した。(七)それからアルジュナは矢の群により、相手の象のつけている鎧を断ち切った。それは雲を脱した山の王のように輝いた。(八)それからバガダッタは黄金の柄を持つ鉄製の槍をクリシュナに投じた。アルジュナはそれを二つに切った。(九)それからアルジュナは、矢により王の傘と旗を切り、笑って、十本の矢で山岳地帯の王（バガダッタ）を速やかに射貫いた。(一〇)美しい矢筈と鷺（カンカ）の羽根を持つアルジュナの矢によってしたたかに射貫かれて、バガダッタは偉大なアルジュナに対して怒った。(一一)彼は白馬にひかれるアルジュナの頭に向けて投槍を投げて、雄叫びをあげた。その戦いにおいて、それらの槍によりアルジュナの王冠は逆向きにされた。(一二)アルジュナは逆向きになった王冠を直して、「世間をよく見なさい」と王に告げた。(一三)バガダッタはこのように言われて怒り、輝かしい弓をとり、アルジュナとクリシュナに矢の雨を降らせた。(一四)アルジュナは彼の弓を切断し、箙を断ち、速やかに七十二本の矢で相手のすべての急所を射た。(一五)バガダッタは

射貫かれても苦にせず、怒ってヴィシュヌの武器（呪句）を喚起し、呪句を唱えて鉤を加持し、アルジュナの胸に放った。(一六)その時クリシュナは、アルジュナを庇って、バガダッタに放たれた、そのすべてを破壊する武器を、自分の胸で受け止めた。(一七)その武器はクリシュナの胸でヴァイジャヤンティー（勝利の）首飾りとなった。(一八)

それからアルジュナは落胆してクリシュナに言った。

「蓮の眼のクリシュナよ、『私は戦わないで、馬たちを御するであろう』という自分の約束をあなたは守っていない。(一九)もし私が災いに陥っていたり、防ぐことができないならば、その時はあなたはそのようにしてもよい。しかし、私が立っている限り、そのようにすべきではない。(二〇)私は弓矢を持って、神や阿修羅や人間を含むこの諸世界を征服することができる。そのことはあなたも知っている。(二一)」

するとクリシュナは、アルジュナに意味深い言葉を述べた。

「非の打ち所のないアルジュナよ、古い秘密をありのまま聞きなさい。(二二)私は四つの体（ムールティ）を持ち、常に世界を救うべく努力している。私は自分自身を分離して、諸世界に幸せをもたらす。(二三)私の一つの体は地上にあって、苦行をしている。他の体は善悪の行為をなす世界を見ている。(二四)もう一つの体は人間の世界にあって行為をしている。第四の体は、千年の眠りについている。(二五)その私の体は、千年が終わった時に起き上がり、その時、恩寵に値する人々に最高の恩寵を与える。(二六)その時、大地の女神はその時が来たと知り、〔息子の〕ナラカのために、私の恩寵を求めた。それを聞きなさい。(二七)

『私の息子がヴィシュヌの武器を持ち、神々と阿修羅たちに殺されることのないようにして下さい。どうか私にそのことをかなえて下さい。（二八）』

このように、大地の息子についての願いを聞いて、かつて私は的を外さぬそのヴィシュヌの武器を彼に与えた。（二九）そしてこう言った。

『戦いにおいてこの武器が、有効的にナラカを守るように。誰も彼を殺すことのないように。（三〇）汝の息子はこの武器に守られ、敵軍を苦しめる。彼は常に、全世界において無敵になるであろう。（三一）』

聡明な女神は願望がかない、『そのようであれ』と言って去った。そして敵を苦しめるナラカは無敵になった。（三二）その私の武器は、ナラカからバガダッタの手に渡った。わが君よ、インドラやルドラ（シヴァ）を含む世界において、それに殺されない者はいない。（三三）そこで私は、あなたのために、それを無効にさせたのである。アルジュナよ、最高の武器を失った偉大な阿修羅を殺せ。（三四）戦いにおいて無敵の敵、神々の敵バガダッタを……。かつて私が［世の］幸せのために、ナラカを殺したように。（三五）』

偉大なクリシュナにこのように言われて、アルジュナはバガダッタに鋭い矢を激しく注いだ。（三六）それから、強力で気高いアルジュナは、迷うことなく、象の額の二つの隆起の真中を矢で射た。（三七）その矢は象に達し、金剛杵（ヴァジュラ）が山を裂くように羽根のところまで入り込んだ。蛇が蟻塚に入るように。（三八）その巨象は四肢を硬直させ、二本の牙から先に、地面に倒れ込んだ。そして苦しい声で叫び、生命を捨てた。（三九）

それからアルジュナは、半月形の先を持つ真っ直ぐの矢で、バガダッタ王の心臓を射貫いた。（四〇）バガダッタ王はアルジュナに心臓を射貫かれて、息絶えて弓矢を投げ出した。（四一）彼の頭から上等の布（ターバン。異本による）が落ちた。蓮の茎を打つことにより花弁が落ちるように。（四二）黄金の首輪をつけた彼は、黄金の飾りをつけた山のような象から落下した。美しく花をつけたカルニカーラが激風に倒され、山頂から落下するように。（四三）インドラの息子（アルジュナ）はその戦いにおいて、インドラのように勇猛で、インドラの友である王を殺して、あなたの軍の他の勝利を望む王たちを、風が樹々を砕くように粉砕した。（四四）（第二十八章）

アルジュナ、シャクニの幻術を破る

サンジャヤは語った。――

常にインドラの親友である、無量の力を持つバガダッタを殺して、アルジュナは彼を右まわりにまわって敬意を表した。（一）それから、ガーンダーラの王の二人の息子、敵の都を征服するヴリシャカとアチャラの兄弟が、戦場でアルジュナを攻撃した。（二）二人の弓を持つ勇士は、アルジュナに近づいて、前後から鋭い高速の矢で猛烈に彼を射た。（三）アルジュナは鋭い矢で、スバラの息子ヴリシャカの馬、御者、弓、傘、戦車、軍旗を粉々に砕いた。（四）それからアルジュナは、矢の群と種々の武器により、スバラの息子をはじめとするガーンダーラ軍を混乱させた。（五）そしてアルジュナは怒り、武器を振り上げる五百人のガーン

ダーラの勇士たちを矢で死神の世界に送った。(六) 強力なヴリシャカは、馬を殺された戦車から速やかに飛び下りて、兄弟の戦車に乗り、別の弓をとった。(七) 一つの戦車に乗ったヴリシャカとアチャラの兄弟は、矢の雨により繰り返しアルジュナを射た。(八) あなたの妻の弟であるヴリシャカとアチャラという偉大な王たちは、ヴリトラとバラがインドラを射るように、激しくアルジュナを射た。(九) ガーンダーラの二王は、的を外すことなく、繰り返しアルジュナを射た。夏と雨季の二つの季節が、熱さと水により世界を苦しめるように。(一〇) 王よ、人中の虎であるヴリシャカとアチャラの二王は、身体を寄せ合って戦車に乗っていたが、アルジュナは一矢によりその二人を殺した。(一一) 赤い眼をした獅子のような強力な兄弟、同じ特徴をした二人の勇士は、息絶えて落下した。(一二) 縁者たちに愛される二人の身体は、戦車から地面に落ちて、神聖な名誉を十方に広めてそこに横たわっていた。(一三)

王よ、逃げることを知らぬ二人の母方の叔父がその戦いで殺されたのを見て、あなたの息子たちはひどく涙を流した。(一四) 幻力に通達したシャクニは、弟たちが殺されたのを見て、幻術を用いてクリシュナとアルジュナを惑わした。(一五) それから、警棒、鉄球、岩石、百殺棒(シャタグニー)、槍、棍棒、鉄棒、刀、戟(シューラ)、槌、矛、その他ありとあらゆる武器が、四方四維いたるところからアルジュナめがけて落ちて来た。(一部省略) (一六―一八) そして、驢馬、駱駝、水牛、獅子、虎、鹿、豹(異本による)、熊、狼、禿鷲、猿、蛇、種々の飢えた羅刹、怒り狂った種々の鳥たちが、アルジュナめがけて飛びかかって来た。(一九―二〇) 神的な武器を知る勇士アルジュナは、矢の網を作り出して、激しくそれらを攻撃した。(二一) それらはその勇士により堅固な最高の矢で撃たれ、大声で叫んで、いたるところで死滅した。(二二) すると闇が現われてアルジュナの戦車をおおった。その闇から恐ろしい声があがってアルジュナを非難した。(二三) アルジュナはジョーティシャという強力な武器でその闇を滅した。その闇が除かれた時、恐ろしい洪水が現われた。(二四) その水を滅するために、アルジュナはアーディティヤ(太陽)の武器を用いた。その武器により水はほとんど干上がった。(二五) このようにシャクニは何度も多様な幻影(マーヤー)を作り出したが、アルジュナは笑って、武器の力によりそれらを速やかに滅した。(二六) こうして種々の幻術が破れた時、アルジュナの矢に撃たれてシャクニは普通の人のように恐れ、駿馬によって逃走した。(二七)

それから、武器を知るアルジュナは、自己の優れた業を敵に示しつつ、クルの軍隊に矢の洪水を雨降らせた。(二八) 大王よ、あなたの息子の軍隊はアルジュナに殺されながら二手に分かれた。ガンガー(ガンジス)が山に達して二手に分かれるように。(二九) 王よ、アルジュナに苦しめられて、ある勇士たちはドローナのもとに行き、ある者たちはドゥルヨーダナのもとに行った。(三〇) それからその軍隊は闇におおわれて、我々はそれを見ることができなかった。そして私は南側からガーンディーヴァ弓の音を聞いた。(三一) ガーンディーヴァの音は、法螺貝と太鼓の音、楽器の音を凌駕して天界に達した。(三二) それからまた、戦場の(異本による)南側で、めざましく戦う勇士たちとアルジュナとの間に激戦が行なわれた。私はドローナに従っていた。(三三)

バーラタよ、アルジュナはあなたの息子たちの種々の軍隊をうち破っていた。その時期に、風が天空で雲を吹き払うように。(三四) 偉大な射手、恐ろしい人中の虎である彼が、大雨のような矢を注いで襲来した時、誰も彼を制止することはできなかった。(三五) あなたの軍の兵士たちは、アルジュナに攻撃されて非常に苦しんだ。多くの人々はあちこち逃げまわり、味方を殺した。(三六) アルジュナに放たれた、鷺（カンカ）の羽根のついた、身体を貫通する矢は、十方をおおって、蝗（いなご）のように飛来した。(三七) わが君よ、それらの矢は、馬、戦車兵、象、歩兵を貫通して大地に達した。蛇が蟻塚に入るように。(三八) しかしアルジュナは象や馬や人に第二の矢を放たなかった。それらは一矢で苦しめられ、息絶えて倒れた。(三九) 矢の雨により殺された人間、馬、倒れた象たちにより、野犬やジャッカルや鴉たちが鳴く戦場は多彩であった。(四〇) 矢に悩まされて父は息子を捨てた。友は親友を捨てた。息子は父親を捨てた。人々は自分を守るので精一杯であった。アルジュナに苦しめられて、彼らは乗物（象や馬）をも捨てた。(四一)

（第二十九章）

ドローナの息子、ニーラを殺す

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、それらの軍隊がアルジュナにうち破られ、逃走した時、そなたの心はどのようであったか。(一) 軍隊がうち破られ、確固たる拠り所を見出せない時、それを立て直すことは困難である。サンジャヤよ、それを私に話してくれ。」(二)

サンジャヤは語った。――

しかし王よ、あなたの息子によかれと願う勇士たちは、世間における名誉を大切にして、ドローナに従った。ユディシティラが近づき、武器が振り上げられた時、恐ろしい状況ではあったが、彼らは恐れないかのように高貴な行為をなした。(三―四) 王よ、彼らは無量の力を持つビーマセーナと勇士サーティヤキとドリシタデュムナの隙を見つけて襲いかかった。(五) 猛々しいパーンチャーラ軍は「ドローナを殺せ、ドローナを殺せ」と言って自軍をかりたてた。またあなたの息子は、「ドローナを殺させるな」と言ってすべてのクル軍をかりたてた。(六) 一方が「ドローナを殺せ、ドローナを殺せ」と言い、他方が「ドローナを殺させるな」と言う。クル軍とパーンダヴァ軍はドローナは、ドローナの賭けをしているかのようだった。(七) ドローナがパーンチャーラの戦車群に向かって行くと、そこにはいつもパーンチャーラの王子ドリシタデュムナがいた。(八) 各部門ごとに交戦する恐ろしい戦いが行なわれた時、勇士たちは恐ろしい叫びをあげて（異本による）勇士たちを攻撃した。(九) そこで敵軍はパーンダヴァたちを恐れさせることはできなかった。一方、彼らは自分たちの受けた苦しみを思い出して、敵軍を恐れさせた。(一〇) 彼らは廉恥心あり、気力にかりたてられ、怒りにかられ、生命を捨ててドローナを攻撃しつつ戦場にとどまった。(一一) その激戦において、生命を賭けて勝負している無量の威光を持つ者たちの戦いは、鉄と石の衝突のようであった。

（二二）大王よ、老いた人々もそのような合戦を覚えていなかった。いまだかつて見たことも聞いたこともなかった。（二三）その勇士たちの滅亡に際し、奮闘する大軍により、重みに苦しんで、大地は震動した。（二四）怒ったユディシティラとあなたの息子の、動きまわる大軍のたてる音は、天空を麻痺させるかのようであった。（二五）

ドローナは戦場を動きまわり、幾千のパーンダヴァ軍を攻撃して、鋭い矢でうち破った。（二六）驚異的な働きをするドローナが彼らを粉砕している時、軍司令官（ドリシタデュムナ）は自らドローナを攻撃して取り囲んだ。（二七）ドローナとパーンチャーラの王子との戦いは驚異的であった。それは何ともたとえようがないと私は考える。（二八）

それからニーラ（マーヒシュマティーの王）は、火のようにクル軍を燃やした。彼の矢は火花であり、弓は焔である。彼は火が乾草を燃やすように燃やした。（二九）彼がクル軍を燃やしていた時、栄光あるドローナの息子（アシュヴァッターマン）は先に口火を切り、その繊細な男に笑って言った。（三〇）「ニーラよ、お前の矢の焔で多くの兵士を燃やして何になるか。私一人と戦え。怒って矢で撃って見よ。（三一）」

ドローナの息子は蓮の群のような姿で、蓮弁のような眼をし、開花した蓮のような顔をしていた。ニーラはその彼を矢で射貫いた。（三二）ニーラに激しく射られたドローナの息子は、半月の先を持つ鋭い三本の矢で敵の弓と旗と傘を断ち切った。（三三）ニーラは鳥のように戦車から飛び下りて、最高の楯と刀を持ち、ドローナの息子の頭を胴体から切り離そうと望んだ。（三四）しかしドローナの息子は笑うかのように、半月の先の矢を用いて、刀を振り上げ

た彼の、美しい鼻を持ち耳飾りをつけた頭を胴体から切り離した。非の打ち所のない王よ。（三五）満月のような顔をし、蓮弁のような眼をし、蓮花の内部のように輝く長身の彼は、殺されて大地に倒れた。（三六）威光で輝くニーラが師匠の息子に殺された時、パーンダヴァ軍はひどく動揺して苦しんだ。（三七）すべてのパーンダヴァ軍の勇士たちは、「アルジュナが我々を敵から救ってくれないものか」と考えた。わが君よ。（三八）しかし、その強力な男は、南側で、特攻隊（サンシャプタカ）の残党とナーラーヤナの軍隊を殺戮していたのである。（三九）（第三十章）

アルジュナ、カルナの弟たちを殺す

サンジャヤは語った。――

しかし狼腹（ビーマ）は自軍の敗北に我慢できなかった。彼はバーフリーカを六本の矢で、カルナを十本の矢で射た。（一）ドローナは彼を殺そうとして、鋭い刃のついた鉄製のよく研がれた矢で、速やかに彼の諸々の急所を射た。（二）カルナは十二本の矢を、アシュヴァッターマンは七本の矢を、ドゥルヨーダナ王は六本の矢を彼に浴びせた。（三）強力なビーマセーナは、彼らすべてに矢を射返した。彼はドローナを五十本の矢で、カルナを十本の矢で、ドゥルヨーダナを十二本の矢で、ドローナの息子を八本の矢で射て、戦場で激しい雄叫びをあげて彼らを攻撃した。（四―五）彼が生死を等しく見て、生命を捨てて戦っていた時、ユディシティラは戦士たちに「ビーマを救え」と命じた。（六）無量の力を持つユユダーナをはじめとす

る戦士たちや、マードリーの二人の息子（ナクラとサハデーヴァ）は、ビーマセーナのそばに行った。（七）彼ら人中の雄牛たちは、一同そろって、非常に怒り、勇士たちに守られたドローナの軍をうち破ろうと望んだ。（八）ビーマをはじめとする強力な戦士たちは、ドローナに襲いかかった。最高の戦士ドローナも、専念して、彼らを迎え撃った。（九）あなたの軍の兵たちは、死の恐怖を忘れて、パーンダヴァの強力な超戦士たち、戦いにおいて輝く勇士たちに向かって行った。（一〇）（一一―三三略）

それから、軍司令官（ドリシタデュムナ）は速やかに「今や時が来た」と言って、常に迅速なパーンダヴァたちを急き立てた。（三四）誉れ高いパーンダヴァたちは、彼の指令を受けて、攻撃しながらドローナの戦車に近づいた。ハンサ鳥たちが湖に近づくように。（三五）「捕えよ」、「恐れずに突撃せよ」、「切れ」というような騒がしい声が無敵のドローナの戦車の方で聞こえた。（三六）それから、ドローナ、クリパ、カルナ、ドローナの息子、ジャヤドラタ王、アヴァンティ国のヴィンダとアヌヴィンダ、シャリヤが、彼らを食い止めた。（三七）制しがたく無敵のパーンチャーラ軍とパーンダヴァ軍は矢で苦しんだが、気高い（アーリヤ）戦士として奮起し、ドローナを捨てることはなかった。（三八）するとドローナは怒りにかられ、幾百の矢を放ち、チェーディとパーンチャーラとパーンダヴァの軍を殺戮した。（三九）わが君よ、彼の弓弦と弓籠手（ゆごて）の音は諸方で聞こえた。それは金剛杵（ヴァジュラ）の打撃のような音で、多くのパーンダヴァ軍を恐れさせた。（四〇）

その間、強力なアルジュナは特攻隊（サンシャプタカ）を殺してから、ドローナがパーンダヴァ軍を粉砕し

ている場所にやって来た。（四一）アルジュナは特攻隊を殺し、矢の群という大渦巻と血の水のある大きな湖水を渡ってからもどって来た。（四二）太陽のような威光を持つ誉れ高い彼の標章、威光で輝いている猿の旗標を我々は見た。（四三）特攻隊という海を、武器という光線で干上がらせ、アルジュナという宇宙紀（ユガ）の終末の太陽は（異本による）クル軍をも熱し苦しめた。（四四）アルジュナは武器の威光によりすべてのクル軍を燃やした。宇宙紀の終わりに生じる火（ドゥーマケートゥ）が一切の生類を燃やすように。（四五）彼に幾千本の矢で射られて、象や馬や戦車兵たちは、矢で苦しめられて武器を放り出して地面に倒れた。（四六）アルジュナの矢で撃たれ、ある者たちは苦痛の声をあげ、また他の者たちは大声で叫んだ。ある者たちは息絶えて倒れた。（四七）アルジュナは、攻撃する戦士たちのうちで、倒れた者たちや退却する者たちを決して殺さなかった。戦士の掟を思い出したからである。（四八）クル軍は戦車と馬と象を奪われ、大部分退却しながら、「ああ、ああ、カルナよ、カルナよ」と叫んだ。（四九）カルナは救いを求める人々の、その呼びかけを聞いて、「恐れることはない」と約束して、アルジュナに立ち向かって行った。（五〇）バラタ族の最高の戦士であり、すべてのバラタ族を喜ばせる、武器を知る者たちの最上者であるカルナは、火神の武器（アーグネーヤ）を出現させた。（五一）しかしアルジュナは、燃える矢の群と燃える弓を持つ彼の矢の群を、自分の矢の雨で除去した。武器を武器によって防止し、更に矢を放って、彼は雄叫びをあげた。（五二）

ドリシタデュムナとビーマと勇士サーティヤキは、カルナに近づいて、三本ずつの矢で彼を射た。（五三）しかしカルナは、アルジュナの矢を矢の雨で防ぎ、三本の矢で彼ら三人の弓

を断ち切った。(五四) 勇士たちは弓を切られて、毒のない蛇のようになったが、戦車に装備されている槍を投じて、大声で獅子吼をした。(五五) 最高の腕により放たれた蛇のような大槍は、輝きながらカルナめがけて飛んで行った。(五六) 強力なカルナは、三本ずつの真っ直ぐに飛ぶ鋭い矢でそれらの槍を断ち切り、更にアルジュナに矢を放って雄叫びをあげた。(五七) アルジュナは七本の矢でカルナを射てから、三本の鋭い矢でカルナの弟(この弟の名前は不明)を殺した。(五八) それからアルジュナは、六本の真っ直ぐに飛ぶ矢でシャトルンジャヤを殺してから、突然、半月形の先の矢でヴィパータの頭を戦車から射落とした。(五九) こうしてアルジュナはただ一人で、ドリタラーシトラの息子たちが見ている前で、カルナの面前で、カルナの三人の弟たちを殺したのである。(六〇) (六一―七五略)

猛獣と鳥と羅刹を喜ばせる、恐ろしい殺戮がそこで行なわれていた時、多くの軍隊はお互いに怒り、殺し合いながら、速やかに動きまわっていた。(七六) バーラタよ、それから両軍はひどく疲労し、おびただしい血にまみれてお互いに見つめ合っていたが、太陽が西山(アスタ)にかかった時、徐(おもむろ)に宿舎にもどった。(七七)

(第三十一章)

(67) アビマニュの死(第三十二章—第五十一章)

ドローナの輪円(チャクラ)の陣形

サンジャヤは語った。——

まず無量の力を持ったアルジュナによってわが軍がうち破られ、ドローナの意図が空しくなり、ユディシティラが守られた時、あなたのすべての軍は、その鎧は断たれ、戦いに敗れ、ほこりにまみれ、ひどく落胆して、十方を見つめていた。(一―二) それから、ドローナの同意のもとに戦場から引きあげ意気消沈していた。敵は目的を達して、戦場で彼らのことを大いに笑っていた。(三) 生類がアルジュナの無量の美質を称讃し、クリシュナのアルジュナに対する友情が讃えられている時、彼らはもの思いに沈んで沈黙し、呪われたかのようであった。(四)

翌朝、言葉に巧みなドゥルヨーダナは、敵の隆盛に落胆し、怒り、すべての者たちの聞いている所で、愛情に甘えて尊大に言った。(五)

「最もヴェーダを知る者よ、疑いもなく我々はあなたに殺されるべき側にある〔とみなされている〕。というのは今回、ユディシティラが近くに来たのに、あなたは彼を捕えなかった。(六) もしあなたがその気になって敵を殺そうと望んでいれば、戦場で敵があなたの眼に止まったら、それを逃がすはずはない。たとえそれが神々をともなったパーンダヴァたちに守られているとしても。(七) あなたは喜んで私の願いをかなえると言いながら、後で裏切りました。高貴な人というものは、帰依する者の希望を裏切ることは決してありません。(八)」

そのように言われて、ドローナは不快になって、王に答えた。

「そなたのために努力している私のことを誤解してはいけない。(九) 神、阿修羅、ガンダルヴァ、夜叉、蛇、羅刹を含む諸世界も、戦いにおいてアルジュナに守られている軍に勝利することはできない。(一〇) 宇宙を創造したゴーヴィンダ(クリシュナ)がいて、軍隊を指導する(異本による)アルジュナがいる時、シヴァ神以外のいかなる者の軍隊が対抗できるか。(一一)

しかし私はそなたに約束する。それは決して別様にはならないであろう。今日、私は彼らのうちで偉大な戦士である最高の勇士を倒すであろう。(一二) 私は神々にも破れない陣形を布くであろう。しかし王よ、そなたは何らかの方策によってアルジュナを誘い出すべきである。(一三) 戦闘に関して彼が知らないこと、成し遂げなかったことは何もない。彼はすべてを(異本による)、すべての知識を、あちこちから修得したから。(一四)」

ドローナがそう告げた時、また特攻隊(サンシャプタカ)の群がアルジュナに挑戦し、戦場の南方に誘い出した。(一五) そこでアルジュナは敵と戦いを繰り広げた。そのような戦いは、どこにおいても聞かれたことも見られたこともなかった。(一六)

王よ、ドローナに布かれた陣形は輝かしかった。真昼の太陽のように熱し、見られがたかった。(一七) バーラタよ、それは輪円(チャクラ)の陣という破られがたい陣形であったが、アビマニユは父の兄の命令により、それを何度も破った。(一八) 彼はなしがたい行為をして、幾千の勇士を殺してから、六名の勇士と戦い、ついにドゥフシャーサナの息子に倒された。(一九) 王

よ、スバドラーの息子が殺された時、我々は最高に喜び、パーンダヴァたちは悲嘆に暮れて、それぞれ軍を引きあげた。(二〇)

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、人中の獅子であるアルジュナの、まだ成年に達しない息子が戦死したと聞いて、私の心は微塵に裂けるかのようである。(二一) 法(ダルマ)の制定者たちに定められた王族の法(クシャトラダルマ)とは残酷なものだ。王国を望む勇士たちが、少年に武器を振り下ろすのだから。(二二) 非常に幸せだった少年が恐れることなく活躍した時、武器に通達した多くの者がどのようにして彼を殺したのか。サンジャヤよ、答えてくれ。(二三) 無量の力を持つスバドラーの息子は、戦車兵を破ろうとして、戦場で戯れるかのようであった。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。(二四)」

サンジャヤは語った。——

王中の王よ、あなたはスバドラーの息子が殺されたことについて私にたずねた。私はそれをすべて話す。王よ、注意深く聞きなさい。その王子が敵軍を破ろうとして戯れるかのように戦ったことを。(二五) 多くの茂み、草、樹々の生えた森で、森火事に包まれた森に住む者たちが恐れるように、あなたの軍の兵士たちは恐れた。(二六)

(第三十二章)

サンジャヤは語った。——

戦いにおいて非常に恐るべき働きをする、その修練が行為に顕(あら)われる、五名のパーンダヴァたちが、クリシュナとともにいれば、神々によっても侵されがたい。(一) 勇気、行為、家系、知性、本性、名声、繁栄にかけて、クリシュナに等しい美質を持つ人は、いまだかつていなかったし、将来もいないであろう。(二) ユディシティラ王は真実と法(ダルマ)に専念し、布施をして、バラモンを敬うことなどの特性により、常に天界に達している。(三) 王よ、宇宙紀(ユガ)の終末における破壊神(アンタカ)、強力なジャマダグニの息子（バラシュラーマ）、戦場に立つビーマセーナ、以上の三者は同等であると言われる。(四) アルジュナはガーンディーヴァ弓(ダヌル)を持ち、戦いにおいて約束した行為を見事に果たす。地上で彼に匹敵する者はいない。(五) 目上に対する愛情、非常に謙虚であること、修養、自制、美しさ、勇猛さ。ナクラにおいては以上の六が確立している。(六) 博識、重々しさ、甘美さ、勇気、気力、勇武にかけて、勇士サハデーヴァはアシュヴィン双神に等しい。(七) クリシュナとパーンダヴァたちに存する多大な美質、それらの美質の集合がアビマニユにおいて一堂に会して認められる。(八) 彼は平静さにかけてはユディシティラに等しく、行動にかけてはクリシュナに等しく、働きにかけては恐ろしい仕事をするビーマセーナに等しい。(九) 容姿と勇武と博識にかけてはアルジュナに等しく、修養にかけてはナクラとサハデーヴァに等しい。(一〇)

ドリタラーシトラはたずねた。
「サンジャヤよ、無敵のスバドラーの息子アビマニュについてすべて聞きたいと思う。彼は戦いにおいてどのようにして殺されたのか。(二一)」
サンジャヤは語った。——
大王よ、師匠は輪円(チャクラ)の陣を布(し)き、そこにインドラのようなすべての王たちが配備された。(二二)すべての王子たちが集合した。全員が誓約を交わし、黄金で飾られた軍旗を持っていた。(二三)全員が赤衣をまとい、全員が赤い装飾をつけていた。全員が赤い旗を持ち、全員が黄金の首輪をつけていた。(二四)彼らのうち、見目麗しいあなたの孫のラクシュマナをはじめとして、一万名の屈強な弓取りがいた。(二五)彼らはお互いに苦労を共にし、お互いに等しい大胆さを持ち、お互いに競い合い、お互いに有益なことに専念していた。(二六)王はカルナやドゥフシャーサナやクリパなどの勇士に囲まれ、神々の王(インドラ)のようであり、栄光あり、白い傘をかざされていた。払子(ほっす)や扇が揺すられ、昇る太陽のようであった。(二七)軍司令官が位置するその軍の先頭にドローナがいた。また栄光あるシンドゥ国王(ジャヤドラタ)がメール山のように立っていた。(二八)大王よ、シンドゥ国王の脇には、アシュヴァッターマンに先導されて、神々のようなあなたの三十名の息子たちがいた。(二九)シンドゥ国王の脇には、また、ガーンダーラ国王である賭博師(シャクニ)、シャリヤ、ブーリシュラヴァスという勇士たちが輝いていた。(三〇)

(第三十三章)

サンジャヤは語った。——
ビーマセーナをはじめとするパーンダヴァたちは、ドローナに守られるその軍陣を攻撃した。(一)サーティヤキ、チェーキターナ、ドリシタデュムナ、勇猛なクンティボージャ、勇士ドルパダ、アルジュナの息子(アビマニュ)、クシャトラダルマン、強力なブリハトクシャトラ、チェーディ国王ドリシタケートゥ、マードリーの二人の息子(ナクラ、サハデーヴァ)、ガトートカチャ、勇猛なユダーマニュ、無敵のシカンディン、無敵のウッタマウジャス、勇士ヴィラータ、怒ったドラウパディーの息子たち、強力なシシュパーラの息子、強力なケーカヤ軍、幾千のスリンジャヤ、以上の人々、そしてその他の武器に通達した人々が、従者たちを率いて、戦いに酔い痴れ、戦おうと望んで、激しくドローナに襲いかかった。(二―六)しかし強力なドローナは動揺することなく、矢の大雨により、集結した彼らすべてを食い止めた。(七)大洪水が堅固な山に達し、また海水が海岸線に達して食い止められるように、彼らはドローナを攻撃して抜くことはできなかった。(八)王よ、パーンダヴァ軍はドローナの弓から発せられた矢で苦しめられて、ドローナの正面に立つことができなかった。(九)ドローナの腕の力は驚異的であると我々は思う。パーンチャーラ軍がスリンジャヤ軍とともに攻めて突破できなかったのだから。(一〇)ドローナが怒って進撃して来るのを見て、ユディシティラはドローナを食い止める方法を色々と考えた。(一一)ユディシティラは他の者はドローナに敵わないと考

え、耐えられない重荷をスバドラーの息子（アビマニユ）に課した。（二二）クリシュナやアルジュナに劣ることのない、無量の力を持つ、敵を滅ぼすアビマニユに対し、ユディシティラは告げた。（二三）

「わが子よ、行ってアルジュナが我々を非難しないように戦いなさい。我々はどうしても輪円の陣を破る方法を知らない。（二四）勇士よ、お前かアルジュナか、クリシュナかプラデュムナのみが輪円の陣を破ることができる。その他に第五の者は見出されない。（二五）なあ、アビマニユよ、父たち、母方の伯父たち、すべての兵士たちがお願いする。その願いをかなえてくれ。（二六）わが子よ、アルジュナは戦いから帰ったら我々を非難するであろう。速やかに武器をとって、ドローナの軍陣を滅ぼしてくれ。（二七）」

アビマニユは言った。

「父たちの勝利を望んで、この戦いにおいて、ドローナの堅固で揺ぎない最高の軍陣に侵入し破ってみせます。（二八）私はその陣を破る方法を父から教わりました。しかし私は、何か災いがあった時、そこから出ることはできません。（二九）」

ユディシティラは言った。

「最高の戦士よ、その陣を破って入口を作ってくれ。わが子よ、我々はお前が行く道を通って、お前について行くであろう。（三〇）わが子よ、お前は戦いにおいてアルジュナに等しい。我々はお前を先に立てて、あらゆる方向を守り、後について行く。（三一）」

ビーマは言った。

「私はお前について行く。ドリシタデュムナもサーティヤキも、パーンチャーラ軍、ケーカヤ軍、マツヤ軍、すべてのプラバドラカ軍もついて行く。（三二）一度その陣形がお前に破られたら、我々は敵の勇士たちを次々と殺し、いたるところで繰り返しそれを破壊してやろう。（三三）」

アビマニユは言った。

「私はこの無敵なドローナの軍陣に侵入します。怒った蝗が燃え上がる火に入るように。（三四）私は今日、二つの家系にとって有益な行為をしましょう。私の母方の伯父や父が喜ぶようなことをしましょう。（三五）今日、戦場で子供の私が一人で敵の兵士の群を追い立てるのを、すべての者は見るであろう。（三六）」

ユディシティラは言った。

「スバドラーの息子よ、そのように言うお前の力が増大せんことを。お前が非常に破りがたいドローナの軍陣を破ることができるように。（三七）それはサーディヤ神群、ルドラ神群、マルト神群のような、ヴァス神群、アグニ、アーディティヤ神群のような勇猛な戦士たち、人中の虎である偉大な射手たちに守られてはいるが……。（三八）」

サンジャヤは語った。――

彼の言葉を聞くと、アビマニユは御者をうながした。

「スミトラよ、戦場で速やかに馬たちをドローナの軍陣に向けて急がせよ。（三九）」

（第三十四章）

アビマニユ、ドローナの陣形を破る

サンジャヤは語った。――
バーラタよ、スバドラーの息子は英邁なダルマ王の言葉を聞くと、ドローナの軍陣に行くようにと御者を急き立てた。(一) 王よ、「行け、行け」と彼に急き立てられて御者はアビマニユに答えた。(二)
「王子よ、パーンダヴァたちはあなたに過度の重荷を課した。少しの間よくよく考えてから戦った方がよい。(三) というのは、ドローナ師は敏腕で、最高の武器について修練を積んでいる。しかるにあなたは、この上なく快適に育ち、それほど戦いに通達していない（異本による。批判版は、「戦いに通達している」）。(四)」
するとアビマニユは笑って御者に言った。
「御者よ、一体このドローナは何者なのか。またすべての王族（クシャトラ）、何するものぞ。(五) 私は戦場において、神群をともなうアイラーヴァタ象に乗ったインドラとも戦うことができる。今、王族に対して私は驚くことはない。この敵軍は、私にとって十六分の一にも値しない。(六) 御者よ、宇宙の征服者ヴィシュヌである母方の伯父（クリシュナ）や父のアルジュナと戦うことになっても、私が恐怖にかられることはないであろう。(七)」

それからアビマニユは、御者のその言葉を無視して、「ぐずぐずせずにドローナの軍陣へ行け」とのみ彼に告げた。(八) 御者はあまり乗り気ではなかったが、黄金の飾りでおおわれた、三歳の彼の馬たちをかりたてた。(九) 王よ、馬たちはドローナの軍陣に向かうようスミトラに操縦されて、全速力で勇ましく、ドローナに向かって駆けて行った。(一〇)
そのように彼が進撃するのを見て、ドローナをはじめとするすべてのクル軍は彼を攻撃した。そしてパーンダヴァ軍は彼に従って進んだ。(一一) アルジュナにも勝るようなアルジュナの息子は、最上のカルニカーラ樹の旗標を高く掲げ、黄金の鎧を着て、戦いを挑んで、ドローナを長とする大軍を攻撃した。仔獅子が象たちを攻撃するように。(一二) 彼らは陣形を守ることに努力し、戦闘を開始した。それは少しの間、海に入るガンガー（ガンジス）の渦巻のようであった。(一三) 王よ、勇士たちがお互いに殺し合い、戦っている間に、非常に凄まじい激戦が繰り広げられた。(一四) 非常に恐ろしい戦闘が行なわれていた時、アルジュナの息子は、ドローナが見ている前で、その陣形を破って侵入した。(一五) 強力な彼が敵を破って敵中に入った時、象兵と騎兵と戦車兵と歩兵の群が武器を振り上げて彼を取り囲んだ。(一六) 種々の楽器の音、雄叫び、叫び声、咆哮、フンという声、獅子吼、「待て、待て」という声、恐ろしい「わあ、わあ」という声、「行くな、待て、俺のところに来い」という声をあげて、「私はここだ、あそこだ」と何度も言って、また、象の咆哮、鈴の音、蹄と車輪の音をたてて、彼らは大音響をあげてアルジュナの息子に向かって大地を駆けた。(一七―一九)
しかし敏速に武器を用い、急所を知る勇士は、彼らが襲来する前に、速やかに確実に、急

所を断つ矢で彼らの群を殺した。(二〇) 彼らは種々の印のある鋭い矢で殺されつつも、蝗(いなご)が火に入るように、戦場で彼一人に襲いかかった。(二一) それから彼は、彼らの身体や身体の部分を大地に速やかに撒き散らした。祭祀において祭壇にクシャ草を撒くように。(二二) アルジュナの息子は、あなたの軍の兵士たちの幾千もの太い腕を切り落とした。それらの腕は、弓籠手(ゆごて)と弓懸(ゆがけ)をつけ、箙(えびら)と弓を持ち、刀と楯と鉤(かぎ)と手綱を持ち、投槍と斧を持つ。(中略) 腕飾りと腕環をつけ、よい香りの香油を塗っている。(二三―二六) 大王よ、ガルダ鳥に切られた五つの頭を持つ蛇のような、真っ赤に輝くそれらの腕で大地は輝いていた(異本による)。わが君よ。(二七) そしてアルジュナの息子は、敵の頭で大地をおおった。それらの頭は、美しい鼻と顔と髪を持ち、傷がなく、美しい耳環をつけ、怒って唇を嚙みしめ、多くの血を流している。美しい花輪と王冠とターバンをつけ、宝石と宝物で輝いている。茎のない蓮のようで、太陽や月のように輝いている。それらは生前には有益で好ましいことを語っていた。清らかな香りに満ちている。(二八―三〇)(三一―三九略)

アビマニユは一人でヴィシュヌのように、非常になしがたい不可思議の行為をなした(異本による)。このようにして、三部門(戦車、象兵、騎兵)よりなるあなたの大軍は彼に粉砕された。バーラタよ、そして彼はあなたの軍の歩兵の群を殺した。(四〇) このようにアビマニユが一人で、スカンダが阿修羅の軍隊を滅ぼすように、鋭い矢であなたの軍を手ひどくうち破るのを見て、あなたの兵士たちや息子たちは十方を見まわした。彼らの口は干涸び、眼は動揺し、汗をかき、総毛立っていた。(四一―四二) 彼らは敵を滅ぼす気力がなくなり、逃げることに専念し、生きたいと望んで、お互いに姓名を呼んで叫び合った。(四三) 殺された息子や父、友や親類縁者や、象や馬をうち捨てて、彼らは急いで逃げ出した。(四四)

(第三十五章)

サンジャヤは語った。——

無量の力を持つアビマニユに自軍がうち破られたのを見て、ドゥルヨーダナはひどく怒り、アビマニユに向かって行った。(一) 戦場で王がアビマニユに向かって引き返したのを見て、ドローナは兵士たちに向かって、「王を守れ」と告げた。(二)「強力なアビマニユは、我々が見ている前で、標的にした者を殺している。彼を攻撃せよ。恐れるな。速やかにクルの王を守れ。(三)」

それから、恩を知る王の友たち、勝ち誇る強力な勇士たちは、危険から王を救おうとして、あなたの息子を取り巻いた。(四) ドローナ、ドローナの息子、クリパ、カルナ、クリタヴァルマン、シャクニ、ブリハドバラ、マドラ国王、ブーリ、ブーリシュラヴァス、シャラ、パウラヴァ、ヴリシャセーナは、鋭い矢を放って、アビマニユに矢の大雨を浴びせた。(五―六) そして彼らは彼を惑わして、ドゥルヨーダナを救出した。アルジュナの息子は、口にくわえたものを奪うようなその行為に我慢できなかった。(七) アビマニユは矢の大雨により、彼ら偉大な戦士たちと馬と御者たちを退却させ、獅子吼をした。(八) 獲物を狙う獅子の叫びのような彼の叫びを聞いて、ドローナをはじめとする戦士たちは怒り、我慢できなかった。(九)

わが君よ、彼らは戦車の群で彼らを取り囲み、種々の印のついたおびただしい矢の群を放った。〔二〇〕あなたの孫（アビマニユ）は鋭い矢によりそれらを空中で断ち切った。そして彼らに射返した。それは奇蹟のようであった。〔二一〕〔二二―二三略〕

それからカルナ、クリパ、ドローナ、ドローナの息子、ガーンダーラの王、シャラ、シャリヤ、ブーリシュラヴァス、クラータ、ソーマダッタ、ヴィヴィンシャティ、ヴリシャセーナ、スシェーナ、クンダベーディン、プラタルダナ、ヴリンダーラカ、ラリッタ、プラバーフ、ディールガローチャナ、怒ったドゥルヨーダナは、彼に矢の雨を浴びせた。〔二四―二五〕アビマニユは偉大な射手たちに矢で射られて怒り、敵の身体を貫く矢をカルナに放った。〔二六〕王よ、その矢はカルナの鎧を貫き、身体を貫通し、蛇が蟻塚に入るように大地に入った。〔二七〕カルナはその強烈な一撃により錯乱したかのように苦しみ、地震の時の山のように戦場で動揺した。〔二八〕そして強力な彼は、他の三本の鋭い矢で、スシェーナ、ディールガローチャナ、クンダベーディンの三名を射た。〔二九〕カルナは彼に二十五本の矢を放った。アシュヴァッターマンは二十本、クリタヴァルマンは七本の矢を放った。〔三〇〕インドラの息子の息子は全身矢で傷ついて怒り、軍隊の間を輪縄を持つ死神のように動きまわっているのが認められた。〔三一〕彼は近くにいるシャリヤに矢の雨を浴びせた。そしてその勇士は雄叫びをあげて、あなたの兵たちを恐れさせた。〔三二〕王よ、それからシャリヤは、武器に通じた彼により、急所を貫く矢で射貫かれ、戦車の座席に座り込んで失神した。〔三三〕彼が誉れ高いアビマニユに射貫かれたのを見て、ドローナの眼の前ですべての軍隊は逃走した。〔三四〕その勇士が黄金の羽根の矢でおおわれたのを見て、あなたの兵たちは、獅子に襲われた鹿たちのように逃げた。〔三五〕アビマニユは戦場における名誉により、祖霊、神々、チャーラナとシッダ（半神の類）、夜叉の群により、地上に住む生類の群に称讃されて、バターを注がれた火のようにこよなく輝いていた。〔三六〕

（第三十六章）

ドリタラーシトラはたずねた。

「偉大な射手であるアルジュナの息子が矢で攪乱している間、我々の軍のいかなる人々が戦場で彼を食い止めたか（異本による）。〔一〕」

サンジャヤは語った。――

王よ、若い王子が戦場で大いに戯れる〔かのように戦った〕ことを聞きなさい。ドローナに守られた戦車隊を破ろうとして……。〔二〕

アビマニユが戦場で矢によりマドラ国王（シャリヤ）を制したのを見て、シャリヤの弟は怒り、矢を注ぎながら攻撃した。〔三〕彼は十本の矢でアビマニユとその馬と御者を射貫き、大声で叫んで、「待て、待て」と言った。〔四〕アビマニユは彼の頭と首と手足と、弓、馬、傘、軍旗、御者、トリヴェーヌ（車軸と轅を連結する三叉の木材）、資具（テクスト疑問）、車輪、頸木と轅、箙、車軸、旗、二人の車輪の護衛、一切の備品を、矢によって切断した。非常な早業であったので、誰も彼のその動作を見ることができなかった。〔五―六〕相手は装飾と衣服を貫かれ、死んで地面に倒れた。

無量の力を持つ風により大樹が砕けるように。その従者たちは彼を恐れ、あらゆる方角へ逃げた。(七) パーラタよ、すべての生類はアビマニュのその働きを見て、「見事、見事」と言って、いたるところで喚声をあげた。(八)(九―一〇略)、

アビマニュは怒って、太陽が光線を放つように、黄金の羽根を持ち、石で研いだ、おびただしい多彩な矢を幾百となく放った。(一一) 彼はドローナの見ている前で、その戦車兵たちに種々の矢を注いだ。それからその軍隊は矢で苦しめられて退却した。(一二―一三)

（第三十七章）

勇士たちを圧倒するアビマニュ

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、アビマニュが私の息子の軍隊を食い止めたというので、私の心は恥ずかしさと満足とにより二つに分かれる。(一) サンジャヤよ、更に詳しく私にすべてを語ってくれ。若い王子が戯れる〔ように戦った〕ことを。スカンダが阿修羅たちと戦ったように。(二)」

サンジャヤは語った。――

おお、私はその非常に恐ろしい戦いをあなたに語りましょう。一人と多数との間の激戦をありのままに。(三)

アビマニュは戦車に乗って奮闘し、敵を制するあなたの軍の指揮するすべての戦士たちをも喜ばせた。(四) 彼は旋火輪（回転する炬火）のように動きまわり、ドローナ、カルナ、クリパ、シャリヤ、ドローナの息子、ボージャ、ブリハドバラ、ドゥルヨーダナ、ソーマダッタの息子（ブーリシュラヴァス）、強力なシャクニ、その他の様々な王や王子、種々の兵たちをすべて、矢によって攻撃した。(五―六) バーラタよ、最高の武器を持つ威光ある強力なアビマニュは、敵たちを殺しながら、いたるところで〔自分の姿を〕見せた。(七) 無量の力を持つアビマニュの働きを見て、あなたの軍の兵たちは繰り返し戦慄した。(八) わが君よ、栄光ある大知者ドローナは、戦場で巧みに戦うアビマニュを見て、喜びで眼を見開いて急いでクリパに言った。あなたの息子の急所を撃つかのように……。(九―一〇)

「パーンダヴァ軍の先頭に、若いスバドラーの息子がやって来る。すべての親しい人々とユディシティラを、そしてナクラ、サハデーヴァ、ビーマセーナ、その他の親類縁者たち、中立を保つ人々、盟友たちを喜ばせつつ。(一一―一二) 戦いにおいて彼に等しい弓取りは他に誰もいないと思う。もしそう望めば、彼はこの軍隊を滅ぼすことができる。何かの理由で望まないが。(一三)」

アビマニュに関する、ドローナの喜びが交じったこの言葉を聞いて、あなたの息子は怒ったが、笑うかのようにドローナを見た。(一四) それからドゥルヨーダナは、カルナ、バーフリーカ、クリパ、ドゥフシャーサナ、マドラ国王、及びその他の勇士たちに告げた。(一五)

「彼はすべての王族の師匠であり、最もヴェーダを知る者であるが、愚かなアルジュナの息

子を殺すことを望まない。（二六）実に彼が戦場で危害を加えようとしたら、死神（アンタカ）といえども逃れることはできない。いわんや普通の人間はなおさらである。私は諸君にこの真実を述べる。（二七）ところで彼はアルジュナの息子である。徳ある人々にとって息子や弟子は可愛い。弟子であるから守っている。彼らの子供も可愛い。（二八）アビマニユはドローナに守られて、自分には力があると考えている。しかし彼は愚かで、自惚れているのだ。すぐに彼を粉砕せよ。（二九）」

王にこのように言われて、彼らはいきり立って殺意を抱き、ドローナの見ている前でアビマニユを襲撃した。（三〇）ところでクルの虎ドゥフシャーサナは、その時ドゥルヨーダナの言葉を聞いて、ドゥルヨーダナに次のように言った。（三一）

「大王よ、私は彼を殺すであろう。私はあなたに誓う。パーンドゥの息子たちとパーンチャーラ軍が見ている前で、私は今日、アビマニユを滅ぼすであろう。ラーフ（日食、月食を起こす悪魔）が太陽を呑むように。（三二）」

そして彼は大きな声で、クルの王に再び言った。

「スバドラーの息子が私に殺されたと聞いて、誇り高いクリシュナとアルジュナは疑いもなく、生者の世界を捨てて死者の世界へ行くであろう。（三三）その両者が死んだと聞けば、パーンドゥの妻に生まれた息子たちも無力になって、親しい人々の群とともに、必ずや一日にして生命を捨てるであろう。（三四）それ故、この敵が殺されれば、あなたのすべての敵が殺されたことになります。王よ、私の幸運を祈って下さい。私はあなたの敵を殺します。

（二五）」

王よ、あなたの息子ドゥフシャーサナは、このように言うと雄叫びをあげて、猛り立ち、矢の雨を注ぎながらアビマニユに襲いかかった。（二六）

敵を制するあなたの息子が怒って襲来した時、アビマニユは二十六本の鋭い矢を彼に放った。（二七）一方ドゥフシャーサナは、発情した象のように怒ってアビマニユと戦った。アビマニユも彼と戦った。（二八）戦車の学に通じた両者は、それぞれの戦車により、左右に美しい輪円を描いて動きまわって戦った。（二九）かくて人々は、種々の太鼓を打って大音響をたて、海から生ずる音のような獅子吼の混じった叫び声をあげた。（三〇）

（第三十八章）

サンジャヤは語った。——

英適なアビマニユは全身矢で傷ついていたが、敵のドゥフシャーサナが戦いを挑んで立っているのを見て、微笑して彼に告げた。（一）

「幸いなことに戦場で、高慢な敵がやって来るのに出会った。残酷で、法（ダルマ）を捨て、暴言にふける敵だ。（二）お前は集会場で、ドリタラーシトラ王の聞いている所で、乱暴な言葉を言ってダルマ王ユディシティラを怒らせた。そしてまた、勝ち誇るお前は、ビーマに多くの不適切なことを言って彼を怒らせた。（三）他人の財産を奪うこと、不名誉な怒り、貪欲、知識の喪失、悪意、無謀な行為、恐るべき弓取りである私の父たちの王国を奪うこと。偉大な

人々の怒りにより、お前は以上の恐ろしい悪徳の果報を速やかに得るがよい。愚か者よ。私は今日、すべての兵士の見ている前で、矢でお前を成敗するであろう。(四—六) 怨んでいるクリシュナー(ドラウパディー)と望みを抱く私の父の怒りに対し、私は今日、戦いにおいて義務を果たすであろう。(七) クルの王よ、ビーマに対しても、私は戦いで義務を果たすであろう。もしお前が戦いを捨てなければ、お前は生きて私から逃れることはできないだろう。(八)」

敵の勇士を殺す強力なアビマニユは、このように言ってから、終末の火や風のように輝く、ドゥフシャーサナを滅ぼす矢を弓につがえた。(九) その矢は速やかに彼の胸に達し、鎖骨を射貫いた。アビマニユは更に、二十五本の矢で彼を射た。(一〇) ドゥフシャーサナは深く射貫かれて苦しみ、戦車の座席に座り込んだ。大王よ、そして彼は完全に失神した。(一一) ドゥフシャーサナがアビマニユの矢に傷つけられて失神した時、御者は急いで戦場から彼を運び去った。(一二) パーンダヴァたちやドラウパディーの息子たち、ヴィラータ、パーンチャーラ軍、ケーカヤ軍は、それを見て獅子吼をした。(一三) そしてパーンダヴァ軍の兵たちは喜んで、多種多様なすべての楽器を鳴らした。(一四) 彼らはアビマニユの活躍を見て笑った。旗の先にダルマ神と風神とインドラとアシュヴィン双神の像をつけているドラウパディーの息子である勇士たち、及びサーティヤキ、チェーキターナ、ドリシタデュムナ、シカンディン、ケーカヤ軍、ドリシタケートゥ、マツヤとパーンチャーラとスリンジャヤの軍、そしてユディシティラをはじめとするパーンダヴァたちは、この上なく敵意を抱く高慢な敵がうち破られたのを見て大いに喜び、ドローナの軍陣を破ろうとして、こぞって攻撃した。

(一五—一八) それから、勝利を望み、退却することのないあなたの軍の勇士たちと敵軍との間に、激しい戦いが行なわれた。(一九)

大王よ、ドゥルヨーダナはカルナに次のように言った。

「見よ、勇士ドゥフシャーサナはアビマニユに圧倒された。(二〇) 熱する太陽のように戦場で敵を殺しているアビマニユを救おうと、パーンダヴァ軍が奮起して攻撃して来る。(二一)」

それからカルナは怒り、あなたの息子によかれと望み、無敵のアビマニユに鋭い矢を浴びせた。(二二) そしてその勇士は、侮蔑をこめて、戦場でアビマニユの従者たちを、鋭い最高の矢で射貫いた。(二三) 王よ、一方気高いアビマニユは、ドローナを探していたが、速やかにカルナを七十三本の矢で射た。(二四) インドラが阿修羅たちを殺すように、アビマニユが最高の戦士たちを殺していた時、戦場において、ドローナに近づかないように彼を食い止めることのできる者は誰もいなかった。(二五)

それから、一切の弓取りのうちで最も誇り高いカルナは、勝利を望んで、諸々の最高の武器を使用して、幾百の矢でアビマニユを射た。(二六) こうして最高の武人である栄光あるラーマの弟子は、その戦いにおいて、無敵のアビマニユを苦しめた。(二七) 戦場においてカルナに矢の雨でこのように苦しめられても、神のようなアビマニユはひるまなかった。(二八) アビマニユは石で研いだ鋭い真っ直ぐの矢で、勇士たちの弓を断ち切ってから、カルナを苦しめた。そしてアビマニユは、カルナの軍旗と弓を断ち切り、地面に落下させた。(二九) カルナが苦境に陥ったのを見て、カルナのすぐ下の弟は、剛弓を構えて、速やかにアビマニユ

に襲いかかった。(二〇) それからパーンダヴァたちと彼らの従者たちは喚声をあげ、楽器を鳴らし、アビマニュを讃えた。(二一)

（第三十九章）

サンジャヤは語った。——

カルナの弟は雄叫びをあげ、手に弓を持って何度も弦を引き、速やかに偉大な両者の戦車の間に入った。(一) 彼は笑うかのように、十本の矢で、速やかに無敵のアビマニュとその傘と旗と御者と馬たちを射た。(二) 父祖と同様の超人的な働きをしたアビマニュが矢で苦しんでいるのを見て、あなたの軍の兵たちは喜んだ。(三) しかしアビマニュは笑って、弓を引き絞り、一矢により彼の頭を切り取った。彼は戦車から地面に落ちた。(四) 王よ、風で引き抜かれ山から落ちる（異本による）カルニカーラ樹のような、殺された弟を見て、カルナはひどく苦しんだ。(五) アビマニュは鷺（カンカ）の羽根のついた矢でカルナを退却させて、速やかに他の勇士たちに襲いかかった。(六) それから誉れ高いアビマニュは、怒った大魚（ジャシャ）のように、象兵・騎兵・戦車兵・歩兵よりなる大軍団をうち破った。(七) 一方カルナは、アビマニュにより多くの矢で苦しめられて、駿馬たちにひかれて避難した。そこでクル軍は壊滅した。(八) 王よ、虚空は蝗か大雨のようなアビマニュの矢でおおわれて、何も見分けがつかなかった。(九) あなたの軍の兵士たちが鋭い矢で殺された時、シンドゥ国王（ジャヤドラタ）以外は誰も踏みとどまっていなかった。(一〇)

それから、人中の雄牛アビマニュは、法螺貝を吹いて、速やかにバラタ族の軍に襲いかかった。バラタの雄牛よ。(一一) 乾いた草の中に投げこまれた火のように、アビマニュは激しく敵を燃やしながら、バラタ族の兵士たちの中を動きまわった。(一二) 彼は鋭い矢で戦車兵と象兵と騎兵と歩兵を苦しめつつ、敵中に入って大地を頭のない胴体の群に満ちたものにした。(一三) アビマニュの弓から放たれた最高の矢によって切られ、兵士たちは生きのびたいと願い、味方を殺しながら逃げた。(一四)(一五—二二略) 大王よ、我々はすぐに、アビマニュが、真昼の太陽のように、更に敵の群を熱しているのを見た。(二三) インドラの息子であるアビマニュは、戦いにおいてインドラに等しく、軍隊の真中で輝いていた。(二四)

（第四十章）

パーンダヴァ軍を食い止めたジャヤドラタ

ドリタラーシトラは言った。

「アビマニュは少年で、非常に快適に育ち、制しがたい力を誇り、戦いにおいて巧妙であり、勇猛で、良家の子息で、身体を捨てる覚悟をしている。(一) 彼は三歳の良馬たちにひかれて敵軍に侵入した。ユディシティラの兵たちのうちで、誰か彼の後に従った戦士はいるか。(二)」

サンジャヤは語った。――

ユディシティラ、ビーマセーナ、シカンディン、サーティヤキ、ナクラとサハデーヴァ、ドリシタデュムナ、ヴィラータ、ドルパダ、ケーカヤ軍、怒ったドリシタケートゥ、マツヤ軍が、その戦いにおいて彼に従って行った。(三) 戦士たちは陣形を整え、アビマニユを守ろうとして突撃した。走って来るその勇士たちを見て、あなたの軍の兵たちは退却した。(四) あなたの息子の大軍が退却するのを見て、威光あるあなたの義理の息子(ジャヤドラタ)がそれを制止しようとして駆け寄った。(五) 大王よ、かくてシンドゥ国王の息子であるジャヤドラタ王は、息子(アビマニユ)を救おうとするパーンダヴァたちとその軍隊を食い止めた。(六) そのヴリッダクシャトラの息子である、恐るべき弓取りの勇士は、神的な武器を呼び起こして、彼らを食い止めた。発情した象たちを止めるように(異本によるも疑問)。(七)

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、思うに非常な重荷がシンドゥ国王にかかったな。息子(アビマニユ)を救おうと望む怒ったパーンダヴァたちを一人で食い止めるとは。(八) シンドゥ国王の力と勲(いさお)は非常に驚異的であると私は思う。その偉大な男の気力と最高の働きを私に語ってくれ。(九) シンドゥ国王はいかなる布施をしたのか。いかなる祭祀をしたのか。いかなる苦行をよく行じたのか。怒ったパーンダヴァたちを一人で食い止めたとは。(一〇)」

サンジャヤは語った。――

その王はドラウパディーを掠奪した時、ビーマセーナにうち破られた。彼はそれを怨み、恩寵を求めて非常に激しい苦行を行なった。(一一) 彼は諸々の感官を、好ましい感官の対象から制御して、飢えと渇きと熱に耐え、痩せ細り、その血管が全身に浮き出ていた。そしてシヴァ神を満足させ、永遠のブラフマン(ヴェーダ)を唱えていた。(一二) 信者を哀れむ尊いシヴァ神は、そこで彼に慈悲をかけた。夢の終わりに、シヴァはシンドゥ国王の息子に告げた。

「ジャヤドラタよ、願いごとを言え。私はお前に満足した。何を望んでいるか。(一三)」

バーラタよ、自制したシンドゥ国王ジャヤドラタは、シヴァにこのように言われて、平伏し合掌してルドラ(シヴァ)に答えた。(一四)

「私は戦場において一人で、恐るべき力と勇猛さをそなえたすべてのパーンダヴァたちを食い止めたいです。(一五)」

神々の主はこのように言われて、ジャヤドラタに告げた。

「よい男よ、お前のその願いをかなえる。お前は戦場でアルジュナ以外の四人のパーンドゥの息子たちを食い止めるであろう。」

王は「そのようであれかし」と神々の主に言ったところで目覚めた。(一六―一七)

この恩寵により、そして神的な武器により、彼は一人でパーンダヴァたちの軍を食い止めたのである。(一八) 彼の弓弦と弓籠手(ゆごて)の音により、敵の王族たちに恐怖が入り込み、一方あなたの軍には最高の歓喜が生じた。(一九) 王よ、シンドゥ国王がすべての重荷を担ったのを

見て、王族たちは雄叫びをあげて、ユディシティラの軍隊のいる場所を攻撃した。(二〇)

(第四十一章)

サンジャヤは語った。——

王中の王よ、あなたはシンドゥ国王の勇武についてたずねた。彼がパーンダヴァたちに対してどのように戦ったか、すべてをお話ししますからお聞きなさい。(一)

シンドゥ産の良馬たちが彼の戦車をひいていた。その大きな馬たちはよく御者に制御され、見事に行動し、風のように駿足であった。(二)その戦車は規定通りに整備され、蜃気楼のようであった。銀製の大きな猪の意匠の彼の旗標は彼をいっそう輝かせていた。(三)白い傘と旗と払子(ほっす)と扇などの王者の標識により、彼は空中の星々の主(月)のように輝いていた。(四)彼の鎧(注によれば、「戦車の囲い」)は鉄製で、真珠とダイヤモンドと宝珠と黄金により飾られ、星々に囲まれた空のように輝いていた。(五)彼は大弓を引き、矢の大群を注いで、アルジュナの息子(アビマニユ)が切り開いた入口の割れ目を塞いだ。(六)彼は三本の矢でサーティヤキを、八本で狼腹(ビーマ)を、六十本でドリシタデュムナを、十本でヴィラータを射た。(七)五本の鋭い矢でドルパダを、十本でシカンディンを、二十五本でケーカヤ軍を、三本ずつの矢でドラウパディーの息子たちを射た。(八)そして七十本の矢でユディシティラを射た。そしてその他の者たちを矢の大群で駆逐した。それは奇蹟のようであった。(九)

その時、栄光あるダルマの息子(ユディシティラ)である王は笑い、鋭くてよく鍛えられた矢で狙いをつけ、彼の弓を断ち切った。(一〇)しかし彼は一瞬の後に、他の弓をとって、ユディシティラを十本の矢で射て他の者たちを三本ずつの矢で射た。(一一)ビーマは彼の手練の早業を見て、速やかに三本の矢で、彼の弓と旗と傘を地面に落とした。(一二)しかし彼は他の弓をとって弦を張り、ビーマの旗と弓と馬たちとを破壊した。わが君よ。(一三)弓を断たれたビーマは、馬を殺された最高の戦車から飛び下り、獅子が山頂に飛び上がるように、サーティヤキの戦車に飛び乗った。(一四)それから、あなたの軍の兵たちは、シンドゥ国王の信じられないような最高の行為を見て、喜んで「見事、見事」と叫んだ。(一五)彼がただ一人で猛り立ち、武器の威力によりパーンダヴァ軍を食い止めた時、すべての生類は彼のその行為を称讃した。(一六)前にアビマニユは最高の戦士と象たちを殺して、パーンダヴァたちに道を作ったのだが、シンドゥ国王はそれを塞いだ。(一七)マツヤ、パーンチャーラ、ケーカヤの勇士たちやパーンダヴァたちは、努力して(アビマニユの)後に従おうとしたのだが、シンドゥ国王に対抗できなかった(異本による)。(一八)あなたの敵のうち、ドローナの陣形を破ろうと努力するすべての者を、シンドゥ国王はシヴァ神の恩寵のお蔭で食い止めたのである。(一九)

(第四十二章)

孤軍奮闘するアビマニユ

サンジャヤは語った。——

シンドゥ国王が勝利を望むパーンダヴァ軍を食い止めた時、あなたの軍と敵軍との戦いは非常に凄まじいものになった。(一) 約束を守る威光に満ちたアルジュナの息子（アビマニユ）は、侵しがたいあなたの軍に侵入して、マカラ（海豚または鰐）が海をかき乱すように動揺させた。(二) 敵を制するアビマニユがこのように矢の雨であなたの軍を動揺させていた時、クル族の最上者たちは、その重要度に応じてアビマニユを攻撃した。(三) 絶えず矢の雨を放つ無量の力を持つ彼らとアビマニユとの戦闘は、凄まじいものになった。(四) 敵軍は戦車の群でアビマニユを取り囲んだ。彼はヴリシャセーナ（カルナの息子）の御者を殺して、その弓を断ち切った。(五) それから強力なアビマニユは、真っ直ぐに飛ぶ矢で相手の馬たちを射た。その馬たちは風のように速く、相手を戦場から運び去った。(六) アビマニユの御者はその隙をついて、戦車を〔囲みから〕脱出させた。そして戦士たちの群はそれを見て、「見事、見事」と叫んだ。(七) 彼が獅子のように猛り立って敵を粉砕して、遠くからやって来た時、ヴァサーティーヤ（ヴァサーティの王）は近づいて、急いで攻撃した。(八) 彼は黄金の羽根のついた六十本の矢でアビマニユを射てから告げた。

「私が生きている間は、お前は戦場から生きて出られないぞ。(九)」

アビマニユは高速の矢で、鉄製の鎧をつけた彼の胸を射た。彼は負傷して地面に倒れた。(二〇) 王よ、王族（クシャトリヤ）の雄牛たちは、ヴァサーティヤ（ヴァサーティーヤ）が殺されたのを見て怒り、多様な弓を引き絞り、あなたの孫を殺そうとして取り囲んだ。そこでアビマニユと敵たちとの間で、恐ろしい戦いが行なわれた。(二一―二二)（二三―二八略）アビマニユが怒って戦場において四方四維すべてを動きまわっていた時、彼の姿は見えなくなった。彼の黄金の鎧と装飾品と、弓矢の〔形状〕だけが見えた。(二九) 彼が真昼の太陽のように立ち、矢で戦士たちを迎え撃っていた時、誰も肉眼で彼を見ることはできなかった。(三〇)（第四十三章）

サンジャヤは語った。——

アビマニユは勇士たちの生命を奪いつつ、終末の時が来た時すべての生類の生命を奪う破壊神（アンタカ）のようであった。(一) そのインドラの息子の強力な息子であるアビマニユは、インドラのような勇武を発揮して、敵軍を混乱させて、こよなく輝いていた。(二) 王中の王よ、彼は王中の王たちを破壊する者（アンタカ）のように、サティヤシュラヴァスを捕えた。強力な虎が（異本による）鹿を捕えるように。(三) サティヤシュラヴァスが捕えられた時、勇士たちは急いで強力な武器をとって、アビマニユを攻撃した。(四) 王族（クシャトリヤ）の雄牛たちは、我先に競い合って、アビマニユを殺そうとして襲撃した。(五) 駆けて来る王族たちの軍隊が襲来した時、彼はそれを受け止めた。海において鯨が小さい魚たちを受け入れて食うように。(六) 敵に後ろを見

せぬ彼らは、彼のそばに行って、引き返すことはなかった。河川が海に近づいて、そこから引き返すことがないように。(七) 船が海上で、大きな鮫に捕えられたかのように、激風の危険に苦しむかのように、その軍隊はうち破られ、動揺した。(八)

その時、マドラ国王(シャリヤ)の息子で、強力なルクマラタという者が、恐れた軍隊を励ますために、恐れることなく言った。(九)

「諸君は恐れることはない。私がいるからには、彼は何者でもない。私が必ず彼を生け捕りにしよう。(一〇)」

強力な彼はこのように告げて、よく装備された輝かしい戦車に乗って、アビマニユに襲いかかった。(一一) 彼は三本の矢でアビマニユの胸を、三本の矢で右腕を、鋭い三本の矢で左腕を射て、雄叫びをあげた。(一二) アビマニユは彼の弓を断ち切り、左右の腕と、美しい眼と眉のある頭を、速やかに地面に射落とした。(一三) ルクマラタはシャリヤの誇り高い息子で、アビマニユを生け捕りにしようとしたが、かえって誉れ高いアビマニユによって傷つけられた。王よ、それを見て、ルクマラタの友である勇猛な王子たちは、戦いに酔い、黄金で飾られた軍旗を掲げ、アビマニユを攻撃した。その勇士たちは、棕櫚のように長い(あるいは、ターラの長さの)弓を引いて、いたるところから矢の雨をアビマニユに浴びせた。(一四―一六) 訓練を積み力をそなえた若い勇士たちが、この上なく怒り、戦場で、一人の無敵の勇士アビマニユを矢の群でおおったのを見て、ドゥルヨーダナは喜び、「彼はヤマ(閻魔)の住処に行った」と考えた。(一七―一八) それらの王子たちは、瞬く間に、黄金の羽根のついた多様な矢を三本ずつ放ち、

アビマニユの姿を見えなくした。(一九) わが君よ、彼の戦車と御者と馬と旗は、すっかり矢でおおわれて、ヤマアラシが針でおおわれたようになった。(二〇) 彼はひどく傷つけられて、鉤棒に苦しめられた象のように怒り、ガンダルヴァ(半神の種類)の武器を拡げた。そして戦車の幻術を用いた。(二一) アルジュナが苦行を行なって、トゥンブルなどのガンダルヴァからその武器を入手したものである。アビマニユはそれを用いて敵たちを惑わせた。(二二) 王よ、彼は一人であったが、百人にも千人にも見えた。戦場で旋火輪のように、敏速に武器を使用して。(二三) 王よ、敵を苦しめるアビマニユは、戦車の動きと武器の幻力により惑わせて、王たちの身体を百に切断した。(二四) 王よ、生ある者たちの生命は、戦場で、鋭い矢によって送り出され、あの世に到達した。彼らの身体は大地に赴いた。(二五) アビマニユは彼らの弓、馬、御者、軍旗、腕環をつけた腕、頭を、鋭い矢で断ち切った。(二六) アビマニユに殺された幾百の王子たちは、五年になって実をつけようとするマンゴー林が破壊されて倒れているかのようであった。(二七) 快適な生活に慣れた繊細な王子たちが、怒った毒蛇のようになったが、一人のアビマニユに殺されたのを見て、ドゥルヨーダナは恐れた。(二八) 戦車兵、象兵、騎兵、歩兵が粉砕されたのを見て、ドゥルヨーダナは怒って、速やかに彼を攻撃した。(二九) 少しの間、両者の間に戦いが行なわれたが、決着はつかなかった。あなたの息子は幾百の矢に苦しめられて退却した。(三〇)

(第四十四章)

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、そなたは私に、一人と多数との恐ろしい激戦と、その偉大な男の勝利を語った。（一）アビマニユの勇武は信じられず、驚嘆すべきことである。しかし、法（ダルマ）が存する人々の場合は、それほど驚くべきことではない。（二）ドゥルヨーダナが退却し、百名の王子が殺された時、わが軍の者たちはアビマニユに対してどのように行動したか。（三）」

サンジャヤは語った。——

彼らは口は渇き、眼は動揺し、汗をかき、総毛立った。敵に勝とうという気力が失せ、懸命に逃げようとした。（四）殺された兄弟、父、友、親類縁者をすべて捨てて、彼らは馬や象を急がせて逃げて行った。（五）このように彼らがうち破られたのを見て、ドローナ、ドローナの息子、ブリハドバラ、クリパ、ドゥルヨーダナ、カルナ、クリタヴァルマン、シャクニは、非常に怒って無敵のアビマニユに襲いかかった。しかし王よ、彼らもあなたの孫（アビマニユ）によってほとんど退却させられた。（六—七）だがただ一人、ラクシュマナがアビマニユに立ち向かった。彼は快適に育ち、若さと誇りのために恐れを知らず、弓矢の道に通じ、威光に満ちていた。（八）彼の父のドゥルヨーダナは、息子が愛しいので引き返した。他の勇士たちも、ドゥルヨーダナに続いて引き返した。（九）彼らは雲が山に雨を注ぐように、彼に矢を注いだ。しかしアビマニユは一人で彼らを粉砕した。旋風が雲を断つように。（一〇）

あなたの孫、無敵で見目麗しい勇士ラクシュマナは、弓を引いて父の傍らに立っていた。（一一）彼はこの上なく快適に育ち、財宝の主（クベーラ）の息子のようであった。アビマニユは興奮

し、興奮した象のような彼に戦いを挑んだ。（一二）敵の勇士を殺すアビマニユは、ラクシュマナと交戦し、よく研がれた鋭い矢でその両腕と胸を撃たれた。（一三）大王よ、強力なあなたの孫（アビマニユ）は、杖で打たれた蛇のように怒り、あなたの孫（ラクシュマナ）に言った。（一四）「この世をよく見ておけ。お前はすぐにあの世に行くから。お前の親族が見ている前で、私はお前をヤマ（閻魔）の住処に送ってやる。（一五）」

敵の勇士を殺す強力なアビマニユはこのように言って、脱皮した蛇のような半月形の先の矢をとり上げた。（一六）彼の腕から放たれた矢は、ラクシュマナの見目よい頭（顔）、美しい鼻と眉と美しい耳環のついた頭を切り取った。人々はラクシュマナが殺されたのを見て、「ああ、ああ」と叫んだ。（一七）

愛しい息子が倒された時、王族の雄牛であるドゥルヨーダナは怒り、王族たちに向かって、「彼を殺せ」と叫んだ。（一八）そこでドローナ、クリパ、カルナ、ドローナの息子、ブリハドバラ、フリディカの息子クリタヴァルマンの六名が彼を取り囲んだ。（一九）アビマニユは彼らを鋭い矢で射て退却させ、猛り立ち、シンドゥ国王（ジャヤドラタ）の大軍を激しく攻撃した。（二〇）武装したカリンガ、ニシャダの軍、クラータの強力な息子が、象隊によって彼の道を塞いだ。王よ、そして激しい戦いが続いた。（二一）それからアビマニユは、その猛々しい象隊を粉砕した。大空で風が雲を幾百に吹き散らすように。（二二）

それからクラータ〔の息子〕はアルジュナの息子に矢の群を浴びせた。更に、その他のドローナをはじめとする戦士たちも引き返し、種々の最高の武器を放ってアビマニユを攻撃し

た。(二三) アビマニユは矢でそれらを防いでから、急いでクラータの息子を殺そうとして、無数の矢の群で彼を撃った。(二四) アビマニユは弓矢を持ち腕環をつけた彼の両腕と、王冠をつけた頭と、彼の傘と旗を射落とし、彼の御者と馬を倒した。(二五) 家柄、性行、学識、力、名声、武器の力をそなえた彼が殺された時、勇士たちはほとんど退却した。(二六)

(第四十五章)

ドリタラーシトラは言った。

「若い無敵のアビマニユがわが軍に侵入し、戦場において退却することなく、一族にふさわしい行動をして、血統のよい非常に強力な三歳馬にひかれ、空中を飛行するかのようであった時、いかなる勇士たちが彼を食い止めたか。(一―二)」

サンジャヤは語った。――

パーンドゥの孫アビマニユはあなたの軍に侵入し、鋭い矢ですべての王を退却させた。(三) その時、ドローナ、クリパ、カルナ、ドローナの息子、ブリハドバラ、フリディカの息子クリタヴァルマンの、六名の戦士が彼を取り囲んだ。(四) 一方、シンドゥ国王(ジャヤドラタ)に過度の重荷がかかったのを見て、大王よ、あなたの軍はユディシティラに襲いかかった。(五) 他の勇士たちは、棕櫚ほど長い(または、「一ターラ(長さの単位)ほどの」)弓を引き絞って、矢の雨を勇士アビマニユに降らせた。(六) しかし、敵の勇士を殺すアビマニユは、戦場で矢を放ち、一切の武器に通じたすべての勇士を釘づけにした。(七) 彼は五十本の矢でドローナを、二十本の矢でブリハドバラを射た。そして八十本の矢でクリタヴァルマンを、六十本の矢でクリパを射た。(八) それからアビマニユは、耳まで(引き絞った弓から)放たれた黄金の羽根のついた、十本の高速の矢により、アシュヴァッターマンを射た。(九) そしてアビマニユは、敵中、よく鍛えられた鋭い最高の矢で、カルナの耳を射た。(一〇) 彼はまた、クリパの馬たちと、両端の馬を御す二人の御者を倒し、クリパの胸の中央を十本の矢で射た。(一一) それから強力な彼は、あなたの勇猛な息子たちが見ている前で、クル族の名声を高める勇士ヴリンダーラカ(ドリタラーシトラの息子)を殺した。(一二) 彼が恐れを知らぬかのように、敵の要人を次々と殺していた時、ドローナの息子は二十五本の短い矢を彼に放った。(一三) わが君よ、しかしアビマニユは、ドリタラーシトラの息子たちが見ている前で、鋭い矢で速やかにアシュヴァッターマンを射た。(一四) ドローナの息子はよく研いだ鋭い刃の六十本の恐ろしい矢で彼を射たが、マイナーカ山のような彼を動揺させなかった。(一五) 威光に満ちた強力な彼は、黄金の羽根のついた真っ直ぐ飛ぶ七十三本の矢で、害をなすドローナの息子を射た。(一六) ドローナは息子を守ろうとして、彼に百本の矢を落下させた。アシュヴァッターマンも戦場で父を守ろうとして、八本の矢を放った。(一七) カルナは二十二本の矢を、クリタヴァルマンは十四本の矢を、ブリハドバラは五十本の矢を、シャラドヴァットの息子クリパは十本の矢を放った。(一八) しかしアビマニユは、彼らに苦しめられつつも、すべて鋭い十本ずつの矢を放って彼らに反

撃した。(一九) コーサラ国王(ブリハドバラ)は矢で彼の胸を射た。彼は相手の馬たちを倒し、旗と弓と御者を地面に落下させた。(二〇) その時コーサラ国王は戦車を失い、刀と楯を持ち、アビマニュの耳環のついた頭を胴体から切り取ろうと望んだ。(二一) 彼は矢でコーサラ国王ブリハドバラの胸を射た。相手は心臓を射られて倒れた。(二二) 王よ、刀と弓を持つ一万の偉大な兵たちは、不吉な声をあげながら崩壊した。(二三) このように、アビマニュはブリハドバラを殺して戦場で動きまわった。矢の雨により、あなたの勇士たちを釘付けにして。(二四)

(第四十六章)

アビマニュを殺す方法

サンジャヤは語った。——

アビマニュは再び矢でカルナの耳を射た。そして更に五十本の矢で射て、彼をひどく怒らせた。(一) ラーダーの息子(カルナ)は同数の矢で彼を射た。彼はそれらの矢で全身おおわれて、この上なく輝いた。バーラタよ。(二) 怒った彼は、カルナをも血まみれにした。勇士カルナもまた、矢を受けて血まみれになり、美しく輝いていた。(三) 偉大な両者とも、多彩な矢で身体が斑(まだら)になり、血まみれになり、花咲くキンシュカ樹のようになった。(四) それからアビマニュは、カルナのめざましく戦う六名の勇猛な重臣たちを殺し、馬と御者と旗と戦車を破壊した。(五) そして彼は動揺することなく他の勇士たちを、十本ずつの矢で射た。それは奇

蹟のようであった。(六) それから彼は、六本の矢でマガダ国王の息子を射て、馬や御者とともに若いアシュヴァケートゥを倒した。(七) それから彼は馬蹄形の先の矢で、象の旗標を持つボージャ族のマールティカーヴァタカを殺し、矢を放ちながら雄叫びをあげた。(八) ドゥフシャーサナの息子は、四本の矢でアビマニュの四頭の馬を、一本の矢で御者を、十本の矢でアビマニュ自身を射た。(九) するとアビマニュは怒りで赤い眼をし、七本の矢でドゥフシャーサナの息子を射て、高らかに告げた。(一〇)

「お前の父は臆病風を吹かせ、戦場を捨てて逃げた。幸いなことにお前は戦うことを知っている。しかし今日は生きて帰れないぞ。(一一)」

彼はこのように告げてから、研師によく研がれた矢を敵に放った。ドローナの息子は三本の矢でそれを断ち切った。(一二) アビマニュは相手の旗を断ち切って、三本の矢でシャリヤを撃った。シャリヤは禿鷲の羽根のついた九本の矢で彼を撃った。(一三) アビマニュはシャリヤの旗を切り、両端の馬を御す二人の御者を殺し、鉄製の六本の矢で相手を射た。相手は他の戦車に乗り移った。(一四) アビマニュは更に、シャトルジャヤ、チャンドラケートゥ、メーガヴェーガ、スヴァルチャス、スーリヤバーサの五名を殺し、シャクニを射貫いた。(一五) シャクニは三本の矢で彼を射てから、ドゥルヨーダナに言った。

「彼が我々を一人一人殺す前に、みなで彼を殺そう。(一六)」

その時、ヴァイカルタナ・カルナはドローナに言った。

「彼が我々すべてを殺す前に、彼を殺す方法を早く我々に告げて下さい。(一七)」

すると勇士ドローナは彼ら一同に答えた。

「諸君のうちで、あの少年の隙を見出す者が誰かいるか。(一八) 今日、あのパーンダヴァの人獅子は、父に倣って一切の方角を動きまわっているが、その彼の早業を見よ。(一九) 彼の戦車が行く道には、矢をつがえて迅速に放つ彼の、円形に引かれた弓のみが認められる。(二〇) 敵の勇士を殺すアビマニユは、私の生命をおびやかし、矢で錯乱させるが、それでも私を喜ばせる。(二一) アビマニユは戦場を動きまわり、こよなく私を歓喜させる。怒った勇士たちも、彼の隙を見出せない。(二二) 手練の早業の彼がすべての方角に強力な矢を放つ時、戦いにおいて私は彼とガーンディーヴァ弓を持つアルジュナとの相違を見出さない。(二三)」

その時、アビマニユの矢に苦しめられたカルナは再びドローナに言った。

「私はアビマニユによって苦しめられたが、踏みとどまらねばと思って、辛うじてとどまっている。(二四) あの威光ある子供の矢は非常に恐ろしい。今日、火のように輝く恐るべき矢は、私の心を苦しめる。(二五)」

師匠は微笑して徐(おもむろ)にカルナに言った。

「彼の鎧は貫かれない。彼は若くて、手練の勇武を発揮する。(二六) 私は彼の父に鎧のつけ方を教えた。敵の都を征服する彼は、必ずやその鎧のつけ方をすべて知っている。(二七) しかし、弓弦につがえた矢で彼の弓を断つことはできる。また、手綱と馬たちと、両端の馬を御す二人の御者を断つことはできる。(二八) 勇士カルナよ、もしできるならやってみよ。彼を退却させて、その後で攻撃せよ。(二九) 彼は弓を持っていれば、神々や阿修羅たちも彼をうち破れない。もし望むなら、彼の弓と戦車を奪え。(三〇)」

ヴァイカルタナ・カルナは、その師匠の言葉を聞くと、手練の早業で矢を放っているアビマニユの弓をその矢で断ち切った。(三一) ボージャ族(クリタヴァルマン)は彼の馬たちを、クリパは両端の馬を御す二人の御者を殺した。残りの人々は、弓を切られた彼に矢の雨を浴びせた。(三二) 六名の勇士は、その急を要する時に急いで、戦車を失った一人の少年に対して、情け容赦なく矢の雨を注いだ。(三三) 栄光ある彼は、弓は切られ戦車も失ったが、自己の義務(スヴァダルマ)を守り、刀と楯を持ち、虚空に飛び上がった。(三四) アビマニユは手練の早業と力とにより、カウシカなどの飛翔法を用いて、鳥の王(ガルダ)のように存分に空中を動きまわった。(三五)

「彼は刀を持って、まさに私の上に下りる」と考えて、勇士たちは戦場で視線を上に向け、隙を見つけて彼を射た。(三六) ドローナは彼の掌にある、宝玉づくりの柄(つか)のある刀を断ち切った。カルナは鋭い矢で彼の最上の楯を粉砕した。(三七) 彼は刀と楯を失い、全身に矢を受けて、空中から下りて再び地面に立った。そして怒って円盤(七・四八・一参照)を振りかざしてドローナに襲いかかった。(三八) アビマニユは円盤のほこりにより美しく輝く身体で、円盤を非常に高く振り上げて、(月の出ている)夜のように美しく、ヴァースバドラ(ヴィシュヌ＝クリシュナ)にも似て、戦場で輝いていた。(三九) 流れる血で真っ赤になった衣服をまとい(異本による)、眉をひそめ眉間にしわを寄せ、大声で獅子吼する、無量の力のアビマニユ王子は、戦場で、最高の王たちの中で、こよなく輝いていた。(四〇)

(第四十七章)

アビマニユの死

サンジャヤは語った。――

ヴィシュヌ（クリシュナ）の妹（スバドラー）の喜びをもたらす超戦士（アビマニユ）は、ヴィシュヌの武器（円盤）で飾られ、もう一人のクリシュナのように戦場で輝いていた。（一）風でその髪の束が逆立ち、振り上げた円盤という最高の武器を持つ彼の身体は、神々にも見られがたいものであった。諸王はそれを見てひどく恐れ、その円盤を粉砕した。そこで勇士アビマニユは大きな棍棒を握った。（二―三）アビマニユは敵のために弓と戦車と刀を失い、円盤も失って、棍棒を手に持ち、アシュヴァッターマンに襲いかかった。（四）人中の雄牛（アシュヴァッターマン）は、燃える雷電のようなその振り上げられた棍棒を見て、戦車の座席から降りて、大またで三歩退いた。（五）アビマニユは棍棒で彼の馬たちを殺し、また両端の馬を御する二人の御者を殺して、矢で全身おおわれ、ヤマアラシのように見えた。（六）それから彼は、スバラの息子カーラケーヤを殺した。そして彼に従う七十七人のガーンダーラ人たちを殺した。（七）彼はまたブラフマ・ヴァサーティーヤの十名の戦車兵を殺した。そしてケーカヤの七名の戦士と十頭の象を殺し、ドゥフシャーサナの息子の戦車と馬たちを棍棒で粉砕した。（八）わが君よ、そこでドゥフシャーサナの息子は怒り、棍棒を振り上げてアビマニユに襲いかかり、「待て、待て」と言った。（九）こうして再従兄弟同士である両雄は、棍棒を振り上げて、お互いに相手を殺

そうと望んで、かつてシヴァとアンタカが戦ったように戦った。（一〇）敵を苦しめる両者はその戦いの最中、互いに棍棒の先で撃たれて地面に倒れた。引き抜かれた二本のインドラの旗のように。（一一）クル族の名声を高めるドゥフシャーサナの息子は、アビマニユが起き上がる前に起き上がり、棍棒でその頭を撃った。（一二）敵の勇士を殺すアビマニユは、棍棒の大きな衝撃と疲労により錯乱して、意識を失って地面に倒れた。王よ、このようにしてこの戦いにおいて、一人が大勢に殺されたのである。（一三）その勇士は象が蓮池をかき乱すようにすべての軍隊をかき乱してから、森の象が虎たちに殺されるように殺されて輝いていた。（一四）あなたの兵たちは倒れているその勇士を取り巻いていた。彼はあたかも、寒季が過ぎた時、森を焼いてから鎮まった火のようであった。（一五）あるいは、樹々や峰々を砕いた後で静まった風のようであった。または、バラタ族の軍を熱してから西山に沈む太陽のようであった。（一六）または〔ラーフに〕攻撃された月か、干涸びた海のようであった。そして彼は、満月のような顔をして、その眼は「鴉の羽根」（少年が結う髪の束）でおおわれていた。（一七）その彼が地面に倒れているのを見て、あなたの軍の勇士たちは最高に喜んで、何度も獅子のように吼えた。（一八）王よ、あなたの軍の兵士には最高の歓喜があり、敵の勇士たちの眼からは、涙が流れ落ちた。（一九）王よ、空から落ちた月のような倒れている勇士を見て、空中で諸々の生き物が叫んだ。（二〇）

「彼は一人で、ドローナとカルナをはじめとするドリタラーシトラ側の六人の勇士に殺されて横たわっている。これは法であると我々は思わない。（二一）」

その勇士が殺された時、大地はこの上なく輝いた。星の群に囲まれた大空が満月により輝くように。(二二) 大地は黄金の羽根のついた矢でおおわれ、血の洪水につかり、耳環をつけ輝いている勇士たちの頭でおおわれていた。(二三) きらびやかな象の背中の覆いや旗でおおわれ、払子(ほっす)、象飾り、投げ捨てられた最高の衣服でおおわれていた。(二四) 戦車や馬や人や象の美しく輝く装飾品により、よく鍛えられた鋭い、蛇のような抜き身の刀によりおおわれていた。(二五) 大地は弓、切られた矢、槍や刀や投槍やカンパナ(飛び道具の一種)、その他種々の武器によりおおわれて輝いていた。(二六) アビマニュに倒され、死んだ馬、血まみれで横たわっている馬と、その乗り手たちにより、大地は平坦でなくなった。(二七) 崩れた山のような、矢で殺された象、鉤棒、御者、鎧、武器、旗。(二八) 地面に満ちた、馬と御者と戦士を失い、蛇が殺された(無害になった)揺れる池のような最高の戦車。(二九) 種々の武器に飾られた、殺された歩兵たち。以上のものにより、大地は臆病者に恐怖をもたらすような、凄まじい有様であった。(三〇)

月や太陽のように輝く彼が大地に倒れているのを見て、あなたの兵たちは最高に喜び、パーンダヴァたちは悲しんだ。(三一) 王よ、未成年の少年アビマニュが殺された時、それを見てダルマ王のすべての軍は逃走した。(三二) アビマニュが倒された時、軍隊が総崩れになるのを見て、アジャータシャトル(ユディシティラ)は自軍の勇士たちにこう告げた。(三三)

「退くことなく戦ったあの勇士は、殺されて天界に行った。踏みとどまれ。恐れるな。我々は戦いにおいて敵に勝利するであろう。(三四)」

威光に満ち輝きに満ちた最高の戦士ダルマ王は、このように告げて、悲嘆に暮れた人々から悲しみを取り除いた。(三五)

戦場でまず毒蛇のような多くの王子たちを殺してから、アルジュナの息子は彼らの後を追った。(三六) 一万の兵とコーサラの勇士を殺して、クリシュナとアルジュナに等しいアビマニュは、必ずやインドラの住処に行った。(三七) 幾千の戦車、馬、人、象を殺しても彼は戦いに飽きることはなかった。あの善行者のことを嘆く必要はない(天界に行ったから)。(三八)

一方我々は、その最高の勇士を殺してから、彼らの矢に苦しめられ、夕方、血まみれの体で宿舎に帰った。(三九) 大王よ、我々は敵に見つめられている間に、戦場を離れた。悲嘆に暮れ、意気消沈していた。(四〇) それから、夜と昼の中間の時が訪れた。それは不吉で、ジャッカルが吠え、驚異的な時であった。蓮の花輪に似た太陽が西山(アスタ)に行って懸った時。(四一) 最高の刀、槍、投槍、戦車の防護物、楯、及び諸々の装飾の輝きを回収しつつ、天と地を同一のものにしつつ、太陽は火という自分の好む体をとる。(四二) 殺された多くの象たちは、大きな雲が頂にかかる、金剛杵(ヴァジュラ)で倒された山のようである。大地はそれらの象と、旗と鉤と楯と御者たちでおおわれ、ため息をつくかのようである。(四三) 王よ、大地は粉砕された大きな戦車により輝いていた。それらの戦車の主(あるじ)は殺され、(護衛の)歩兵と装備はうち砕かれ、馬と御者は殺され、旗と幡を失い、敵に破壊された都市のようであった。(四四)

(四五―四六略) 犬、ジャッカル、鴉、鷲、スパルナ(ガルダ)、狼、ハイエナ、種々の血を飲む鳥、羅刹の群、非常に恐ろしいピシャーチャ鬼の群は、戦場で大喜びした。(四七) 彼らは死体の皮

を破り、脂肪と血と髄を飲み、肉を食った。彼らは何度も死体を引きずり、脂肪を裂き、笑い、歌った。（四八）（四九―五一略）このように戦場は凄まじい光景で、祖霊の主（ヤマ）の王国のようであり、立ち上がって〔踊る〕頭のない胴体の群に満ちていた。夜の初め、人々はその戦場を眺めつつ、徐（おもむろ）にそこを離れた。（五二）その時、人々は戦場に、殺されたインドラのような勇士アビマニユを見た。その高価な装飾品は失われ、壊されていた。彼はあたかも、もはや供物（バター）を注がれない祭場の火のようであった。（五三）

（第四十八章）

クリシュナに励まされるアルジュナ

サンジャヤは語った。——

戦士の群の長である勇士アビマニユが殺された時、一同は戦車を降り、具足を脱ぎ、弓を置いた。（一）彼らはユディシティラ王を取り巻き、その近くに座り、アビマニユのことを偲びつつ、その悲しみにひたっていた。（二）それからユディシティラ王は非常に悲しみ、弟の息子である勇士アビマニユが殺されたことについて嘆いた。（三）

「彼は私によかれと望み、侵しがたいドローナの軍陣に対し、その陣形を破って侵入した。獅子が牛の中に入るように。（四）敵軍の勇猛な偉大な射手たちは、武器に通達し戦いに酔っていたが、戦いにおいて彼にうち破られ、退却した。（五）我々の最大の仇敵ドゥフシャーサナは速やかに彼と対戦したが、彼に矢で失神させられ、退却させられた。（六）ああ、アビマ

ニユはドローナの軍陣という渡りがたい大海を渡って、ドゥフシャーサナの息子に斃れて、ヤマ（閻魔）の領土に行った。（七）アビマニユが殺された今、私はどのようにしてアルジュナに会おうか。また、どのようにして愛しい息子を失った気高いスバドラーに会おうか。（八）我々は内容のない、まとまりのない、不適切なことを、クリシュナとアルジュナの二人に言うだろうか。（九）まさにこの私が、よかれと望み、勝利を望んで、スバドラーとクリシュナとアルジュナとにこのような気の毒なことをしてしまった。（一〇）欲にかられた者は難点に気づかない。迷妄により貪欲が生じる。蜜を切望する者は落ちることを見ない。私の場合もちょうどそれと同じだ。（一一）食事、車、寝所、装飾に際し先に立てられるべき（最も大切に扱われるべき）少年を、我々は戦いにおいて先に立てた。（一二）良馬と同じように、どうして若くて戦いに通達しない少年が、平坦でない難所において無事でいられるか。（一三）あるいは、怒りに燃えるアルジュナの悲しい眼で焼かれて、我々もアビマニユの後を追って大地に横たわるべきだ。（一四）アルジュナは貪欲でなく、知性あり、恥を知り、忍耐あり、容姿にめぐまれ、強力である。見事な身体をし、敬うべきを敬い、勇猛で、好ましく、真実に専念する。（一五）神々も気力旺盛な彼の行為を讃える。強力な彼はニヴァータカヴァチャ族とカーラケーヤ族（魔類）を殺した。（一六）彼はヒラニヤプラに住む大インドラの敵たちを殺し、一瞬の間にパウローマ族とその一族を殺した。（一七）強力な彼は、敵といえども安全を求めて来た場合にはこれに安全を与える。我々は今日、そのような彼の息子を危機から救うことができなかった。（一八）ところで、ドリタラーシトラの大軍に非常に大きな危険が到来した。アルジ

ユナは息子の死により怒り、クル軍を全滅させるであろう。(一九) 卑しいドゥルヨーダナは、卑しい仲間たちとともに、味方の滅亡を見て嘆き悲しみ、必ずや生命を捨てるであろう。(二〇) 無比の気力と勇気を持つ、このインドラの息子の息子が倒れているのを見て、私には勝利も王国も嬉しくない。不死になることも、神々と同じ世界に住むことも嬉しくない。(二一)」

(第四十九章)

サンジャヤは語った。——

生類が滅びるその恐ろしい日が終わり、太陽が西山(アスタ)に行き、黄昏になった時、そして軍隊が宿舎に引きあげた時、猿の旗標を持つ栄光あるアルジュナは神的な武器で特攻隊(サンシャプタカ)の群を滅ぼして、勝利の戦車に乗り、自分の宿舎にもどって来た。彼は進みながら、涙にむせぶ声でクリシュナに言った。(一―三)

「クリシュナよ、私の心はどうして恐れるのか。声はどうしてつかえるのか。凶兆が跳梁している。私の四肢は沈み込む。不滅の人よ。(四) 不吉な予感は心にこびりつき、心から去らない。地上の諸方に恐ろしい前兆が現われ、私を恐れさせる。(五) 多様な前兆が見られ、すべて災禍を告げる。私の兄である王と顧問たちは無事であるか。(六)」

ヴァースデーヴァ(クリシュナ)は言った。

「あなたの兄とその顧問たちは確実に無事であろう。悲しんではいけない。そこには何か他

のよくないことがあるのだろう。(七)」

サンジャヤは語った。——

それから両雄は黄昏(サンディヤー)(女神とされる)を崇拝してから、勇士たちを滅ぼす戦いにおける出来事を語りつつ戦車に乗って出発した。(八) クリシュナとアルジュナは非常になしがたい行為を行なってから、自分たちの宿舎に着いた。しかしそこには喜びはなく、輝きもなかった。(九) 敵の勇士を殺すアルジュナは、沈み込んだ宿舎を見て胸騒ぎがして、クリシュナに言った。(一〇)

「クリシュナよ、今日は祝福の楽器が歓迎してくれない。太鼓の音やらっぱと混じった法螺貝が、シンバルや手拍子の音とともに今日は鳴らされない。(一一) わが軍の崇拝者(バンディン)たちは、称讃をともなう祝福の歌を歌うことも吟誦することもない。(一二) 戦士たちは私を見るとうつむいて逃げるようにする。彼らは仕事は前と同じようにしているが、私に話しかけない。(一三) クリシュナよ、今日、私の兄弟たちは無事であろうか。身内の人々が苦悩しているのを見て、私の心は晴れない。(一四) 誇りを与えるクリシュナよ、パーンチャーラ国王やヴィラータは無事か。また、私のすべての戦士たちは恙無(つつがな)いか。(一五) スバドラーの息子(アビマニユ)は、いつも私が戦いから帰ると、弟たちとともに喜び、笑って出迎えたものだが、今日はいつもと違う。(一六)」

二人はこのように話しながら自分の宿舎に入った。そして、パーンダヴァたちがひどく悪

い状態で、茫然自失しているのを見た。(一七)猿の旗標を持つアルジュナは、兄弟たちや息子たちを見て、スバドラーの息子がいないので当惑して、次のように言った。(一八)

「あなた方はみな顔色が悪いようだ。私はアビマニユを見ない。そしてあなた方は私を歓迎してくれない。(一九)ドローナが輪円(チャクラ)の陣を布いたと聞いた。あなた方のうちには、アビマニユ以外に戦いでそれを破ることができる者はいない。(二〇)しかし私は、その陣から出る方法を彼に教えていない。もしかしてあなた方は、あの子供を敵の軍陣に入らせたのではないか。(二一)敵の勇士を殺す勇士アビマニユは、戦場において敵の大軍を破ってから殺されて、横たわっているのではないか。(二二)彼は赤い眼をし、強力で、山に生まれた獅子のようである。インドラの弟（ヴィシュヌ＝クリシュナ）に等しい。その彼が戦いにおいて、どのようにして殺されたか言え。(二三)彼は非常に繊細な勇士で、インドラの息子であり、いつも私に愛されている。その彼が戦いにおいて、どのようにして殺されたか言え。(二四)その勇士アビマニユは、私にいつも可愛がられ、母のスバドラーにいつも愛されていた。いかなる者がカーラ（時間、死神）にかりたてられて彼を殺したのか。(二五)彼は勇武と学識と偉大さにかけて、ヴリシュニの獅子である偉大なクリシュナに等しい。その彼がどうして戦いにおいて殺されたのか。(二六)彼はスバドラーやドラウパディーやクリシュナにいつも愛されていた。もし私がその息子に会えないのなら、私はヤマ（閻魔）の住処に行くであろう。(二七)少年である彼は、柔らかくカールした髪をし、仔鹿のような眼で、発情した象のように勇壮であり、シャーラの若木のように成長した。(二八)微笑して話し、自制し、常に目上(グル)の言葉に従う。子供とはいえ子供らしからぬ行為をする。彼は好ましく語り、もの惜しみしない。(二九)気力に満ち、強力で、切れ長の青蓮のような眼をしている。慕う人々に情け深く、自制し、卑しい人々に従わない。(三〇)恩を知り、知識をそなえ、武器に通達し、敵に後ろを見せることはない。常に戦いにおいて喜び勇み、敵の苦しみを増大させる。(三一)身内の幸福に専念し、父たちの勝利を切望する。決して先に攻撃せず、戦いにおいてうろたえることはない。もし私がその息子に会えないのなら、私はヤマの住処に行くであろう。(三二)美しい額をし、美しい髪を持ち、美しい眉と眼と唇を持つ彼の顔を見られない私の心に、どうして平安があるだろうか。(三三)〔楽器の〕弦の音のように快い、雄のコーキラ（公郭）のように美しい音の、彼の声を聞けない私の心に、どうして平安があるだろうか。(三四)神々のうちにも得られがたいその美しい姿を見られない私の心に、どうして平安があるだろうか。(三五)彼は礼儀正しく、親たちの言葉に喜んで従う。今日、もし私が彼に会えないなら、どうして私の心に平安があるだろうか。(三六)その勇士は常に繊細で、高価な寝台にふさわしく、最高に身寄りにめぐまれているのに、きっと身寄りがない者のように地面で寝ているのだ。(三七)以前は最高の女たちが寝ている彼に仕えていた。今は、不吉な雌のジャッカルたちが、傷だらけの体の彼に仕える。(三八)以前は、眠っている彼は、吟誦者(スータ)、讃嘆者(マーガダ)、崇拝者(バンディン)たちに目覚めさせられた。今はきっと、猛獣たちがおぞましい声で彼を目覚めさせる。(三九)彼の美しい顔は傘の陰にふさわしかった。今はきっと、戦場のほこりが、それを塵でおおっているだろう。(四〇)ああ息子よ、私はいつも息子を見て飽くことがないのに、カーラ（時間、死神）はその不幸な私から

お前を力ずくで奪って行く。（四一）常に善行者の帰趨であるあのサンヤマニー（ヤマの都市）は、それ自体の輝きにより美しいが、きっと今日は、お前によってこの上なく輝いているだろう。（四二）客人を歓待する、ヤマとヴァルナとインドラとクベーラは、訪れた恐れを知らぬお前をきっと歓迎している。（四三）」

このようにアルジュナは、船が難破した商人のように、ひどく嘆いて、大きな悲しみに入り込まれて、ユディシティラにたずねた。（四四）

「パーンダヴァの王よ、あの人中の雄牛は敵を殺戮してから、戦場で真っ向から敵と戦って天界に行ったのか。（四五）彼はきっと、孤立無援で多くの人中の虎と戦いつつ、援助を求めて、私のことを考えたにちがいない。（四六）兄さん、あの子供は、敵の矢に苦しみながら、『どうか私のもとに駆けつけて』と嘆きながら、多くの卑劣な人々に殺されたと私は思う。（四七）あるいは、私の息子で、クリシュナの甥であり、スバドラーに生まれた彼は、そのように言うはずはない。（四八）きっと私の心は金剛のように堅固なのだ。長い腕をし、赤い眼をした彼に会えないのに裂けないとは。（四九）あの卑劣な者たちは、クリシュナの甥で私の息子である少年の勇士に対して、どうして急所を断つ矢を放ったのか。（五〇）

血気盛んな彼は、いつも私を出迎えて歓迎した。その彼が、今日敵を殺して帰った私をどうして出迎えないのか。（五一）きっと彼は倒れて、血まみれで大地に横たわっている。落ちた太陽のようにその四肢で大地を輝かせて。（五二）スバドラーはアビマニユに会えないで、私に何を言うだろうか。そしてドラウパディーも……。私も、悲嘆に暮れる彼女たちに何を

言おうか。（五三）きっと私の心は金剛のように堅固なのだ。悲嘆に暮れて泣いている嫁を見ても千々に裂けないのだから。（五四）私は喜んだドリタラーシトラ軍の獅子吼を聞く。クリシュナは、ユユツが〔敵の〕勇士たちを非難しているのを聞く。（五五）

『汝らは偉大な戦士でありながら、アルジュナを殺せないので子供を殺して、どうして喚声をあげられるのか。法を知らぬ者たちよ。アルジュナに対して力を示せ。（五六）クリシュナとアルジュナの両者に不快なことをして、どうして戦場で喜んで獅子のように叫んでいるのか。悲しみの時が近づいたのに。（五七）速やかにこの悪業の疑いが汝らに訪れるだろう。というのは、ひどい非法がなされたのに、どうして長いことその報いが来ないことがあろうか。（五八）』

大知者である〔ドリタラーシトラと〕平民の娘の息子（ユユツ）はこのように彼らに告げて、怒りと悲しみにかられ、武器を捨てて立ち去った。（五九）

クリシュナよ、戦いにおいてあなたは何故、このことを私に言わなかったのか。もし言ったなら、私はあのすべての残酷な勇士たちを燃やしたであろう。（六〇）」

クリシュナは、息子故の苦しみにうちひしがれ、激しく嘆き悲しむ彼を制して、「そのように嘆くな」と告げた。（六一）

「退くことなく戦うすべての勇士たち、特に戦いを職業とする王族にとって、これは道である。（六二）退くことなく戦う勇士たちにとって、これは法典を知る人々に定められた帰趨である。帰趨を知る人々の最上者よ。（六三）退くことなく戦う勇士たちにとって、戦いにお

ける死は必然である。疑いもなくアビマニュは善行者たちの世界へ行った。(六四) バラタの雄牛よ、『我々は戦場で退くことなく戦って死のう』というのが、すべての勇士たちの願望である。誇りを与える者よ。(六五) そして彼は、戦いにおいて勇士たちや強力な王子たちを殺してから、退くことなく戦い、勇士に望まれる死を得た。(六六) 人中の虎よ、嘆くな。法(ダルマ)を実践する先人たちは、王族(クシャトリヤ)にとって戦場で滅することが法であると定めた。(六七) バラタの最上者よ、ここにいるあなたの兄弟や親しい王たちは、あなたが悲嘆に暮れているので、みなうちひしがれている。(六八) 誇りを与える者よ、慰めの言葉で彼らを励ましなさい。あなたは知るべきことは知った。嘆いてはいけない。(六九)」

クリシュナにこのように励まされたアルジュナは、すべての兄弟に口ごもりながら（異本による）告げた。(七〇)

「長い腕、広い肩を持ち、切れ長の青蓮の眼をしたアビマニュはどのように行動したか。私はありのままに聞きたい。(七一) 私の息子に敵対した者たちを、象や戦車や馬もろとも、従者たちとともに、私が戦場で殺すのを見るがよい。(七二) 武器に通達し武器を持つあなた方すべてがいっしょにいれば、どうしてアビマニュは殺されたであろうか。たとえインドラによっても。(七三) パーンダヴァとパーンチャーラの人々が私の息子を守ることができないともし知っていたら、この私が彼を守ったものを。(七四) あなた方が戦車に乗り、矢の雨を放っているのに、どうして戦士たちはあなた方を侮ってアビマニュを殺したのか。(七五) ああ、あなた方には雄々しさも勇武もない。戦場であなた方が見ている前で彼は殺されたのだから。(七六) 私は自分自身を非難すべきである。あなた方が無力で、臆病で、怯懦であるのを知りながら出かけたのであるから。(七七) あなた方の鎧や刀や矢などの武器は飾り物なのか。言葉は集会場でしゃべるためか。私の息子を守れないのだから……。(七八)」

アルジュナはこのように告げて、最高の弓と刀を持って立っていた。誰も彼を見ることはできなかった。(七九) 彼は怒った死神(アンタカ)のようで、何度もため息をついていた。息子故の悲しみに苦悩し、顔は涙だらけだった。(八〇) 親しい人々は誰もアルジュナに話しかけることも見ることもできなかった。ただし、クリシュナとユディシティラは例外であった。(八一) その両者はあらゆる状況において、アルジュナのためを思い、親密であった。彼は彼らを尊敬し、愛していたから、彼らは彼に口をきくことができた。(八二) 青蓮の眼をした彼が、息子についての悲しみでひどく心苦しみ、怒っていた時、ユディシティラ王は彼に言葉をかけた。(八三)

（第五十章）

ジャヤドラタを殺すと誓うアルジュナ

ユディシティラは言った。

「勇士よ、お前が特攻隊(サンシャプタカ)の軍隊の方に行った時、師匠（ドローナ）は私を捕えようと、最大の努力をした。(一) しかし我々は、その戦いでドローナの布陣に対抗して、奮闘する戦車隊を配陣して、彼を全面的に食い止めた。(二) 彼は戦車兵たちに守られた私に食い止められて、速

やかに我らを攻撃して、鋭い矢で苦しめた。(三)そこで我々はドローナに苦しめられ、その戦いにおいてドローナの軍陣を見ることすらできなかった。いわんやそれを破ることは問題外であった。(四)そこで強力な者よ、我々みなは、無比の気力を持つお前の息子に、『わが子よ、あの陣形を破れ』と告げた。(五)彼は我々にこのようにうながされて、強力な良馬のように、担いがたいその重荷を担う決意をした。(六)お前に武器を伝授され、気力をそなえたその少年は、ガルダ鳥が海に入るように敵軍に侵入した。(七)そこで我々は、戦場でスバドラーの息子であるその勇士に従って、彼が入った入口を通って敵軍に入ることを望んだ。(八)その時、卑しいシンドゥ国王ジャヤドラタが、ルドラ(シヴァ)の恩寵により、我々すべてを食い止めたのだ。(九)それから、ドローナ、クリパ、カルナ、ドローナの息子、ブリハドバラ、クリタヴァルマンの六名がアビマニユを取り囲んだ。(一〇)その少年は戦場で、それらすべての勇士たちに囲まれ、力の限り最高に奮戦したが、多勢によって戦車を奪われた。(一一)それから、ドゥフシャーサナの息子は、戦車を失った彼を速やかに攻撃し、自分自身も最高の危機に陥りながらも、彼を殺すことに成功した。(一二)彼は幾千の象、馬、戦車兵を殺し、幾百の有力な王子、名も知らぬ多くの勇士たちを殺した。(一三)そしてブリハドバラ王を昇天させてから、最高に徳高い彼は死に至った。(一四)以上で、我々の悲しみを増大させる出来事は完了した。あの人中の虎は、天界に達した。(一五)」

サンジャヤは語った。――

それからアルジュナは、ダルマ王に告げられた話を聞いて、「ああ、息子よ」と言ってため息をつき、苦しんで大地に倒れた。(一六)一同は悲し気な顔をして、アルジュナを取り囲み、意気消沈し、瞬きをしないで互いに見つめ合っていた。(一七)それからアルジュナは意識を取りもどし、怒りにかられて、苦熱でふるえ、何度もため息をついた。(一八)彼は眼に涙を浮べ、手をこすり合わせ、息を吐き、狂人のように見つめて、次のように言った。(一九)

「私は真実にあなた方に誓う。私は明日、ジャヤドラタを殺すであろう。もし彼が殺されることを恐れてドリタラーシトラの息子たちを捨てなければ。(二〇)そして我々や、最高の人クリシュナや、あなた方に庇護を求めなければ。大王よ、私は明日、ジャヤドラタを殺すであろう。(二一)あの悪党は私への友情を忘れ、ドゥルヨーダナによかれと望み、あの少年を殺した原因である。私は明日、ジャヤドラタを殺すであろう。(二二)戦場で彼を守り、私に対して戦う者は誰でも、ドローナやクリパのような勇士であろうと、私は彼らを矢でおおってやる。(二三)人中の雄牛たちよ、もし私が戦いにおいてそのようにできなかったら、私は勇士たちに敬われる善行者の世界に到達できないであろう。(二四)母や父を殺した者、師の妻を犯す者、誹謗者(人を離間させる者)たちの世界。(二五)善人を妬む者、中傷する者、委託物を奪う者、信頼を裏切る者たちの世界。(二六)前に享受した女性を非難する者、その罪を言い立てる者、バラモンを殺す者、牛を殺す者たちの世界。(二七)あるいは、乳粥(パーヤサ)、麦飯、野菜、乳と胡麻と米の料理、麦粉菓子(サンヤーヴァ)その他の菓子、肉を、〔神に供えないで〕空しく食べる人々の

世界。もし私がジャヤドラタを殺さなければ、私はその日のうちにそれらの世界に行くであろう。（二八）ヴェーダを学習する、あるいは〔誓戒を〕厳守する最高のバラモンを軽蔑する者、長老、善人、長上たちを軽蔑する者が行く世界〔に行くであろう〕。（二九）バラモン、牛、火に足で触れる人々が行く帰趨、水に痰や大小便を放った者たちが行く帰趨。もし私がジャヤドラタを殺さなければ、そういう恐ろしい帰趨に行くであろう。（三〇）裸で沐浴する人、客を正しくもてなさぬ人の帰趨、賄賂を受けた人々、虚偽を述べた人々、詐欺師たちの帰趨、自己〔の職業を〕偽る人々、お世辞を言う人々の帰趨。（三一）使用人、息子、妻、従者に見られている時、彼らに分かち与えないで料理を食べる卑しい人々が行く帰趨。もし私がジャヤドラタを殺さなければ、そのような恐ろしい帰趨に行くであろう。（三二）庇護を求める人を捨て、善人や彼の言葉に喜んで従う人を養わず、有益な人を非難する邪悪な性質の者。（三三）もらうにふさわしい隣人に祖霊祭〔における施物〕を与えない者、ふさわしくない人や、シュードラ女の夫にそれを与える者。（三四）酒を飲む者、羽目をはずす者、恩知らず、兄弟を非難する者。もし私がジャヤドラタを殺さないなら、私は速やかにこのような者たちの帰趨に行くであろう。（三五）もしこの夜を過ごし、明日、私がジャヤドラタを殺さなければ、私は速やかに、以上列挙した者たちと、列挙しないその他の法を逸脱した人々が達する帰趨に達するであろう。（三六）

更に私のこの別の誓いを聞け。もしあの悪党が殺されないうちに、太陽が西山に沈むなら、私はこの場で燃え盛る火に入るであろう。（三七）阿修羅、神、人間、鳥、蛇、祖霊、夜行の者たち、梵仙、神仙、その他動不動のすべての者。以上の者といえども私のあの敵を守ることはできない。（三八）もし彼が地底界やその奥底に入ろうとも虚空や神々の都や魔物の都に入ろうとも、夜が明けたら、私は幾百の矢で激しく射て、敵の頭を奪ってやる。（三九）」

アルジュナはこのように言って、ガーンディーヴァ弓を左右に引っぱった。弓の音は彼の声を超えて天界に達した。（四〇）アルジュナが誓った時、クリシュナはパーンチャジャニヤを吹き鳴らした。アルジュナもデーヴァダッタを吹き鳴らした。（四一）パーンチャジャニヤは、クリシュナの口から出る息によりその内部を満たされて大きな音を発した。それは宇宙紀の終末が来たように、地底界、天空、諸方の守護神を含む全世界を震動させた。（四二）偉大なアルジュナが誓った時、いたるところで楽器の音が響き、パーンダヴァ軍の獅子吼があがった。（四三）

（第五十一章）

(68) 誓約（第五十二章―第六十章）

ジャヤドラタを元気づけるドローナ

サンジャヤは語った。——

息子のことを切に哀悼するパーンダヴァたちの大音声を聞き、スパイたちによりそのこと（アルジュナの誓い）を知らされた時、ジャヤドラタは立ち上がった。(一) 彼は悲しみで心迷い、苦悩により打ちのめされ、底知れず深く広大な悲しみの海に沈んだかのようであった。(二) シンドゥ国王はよくよく考えて、王たちの集会場に行った。彼は王たちのもとで嘆きつつ、アビマニュの父を恐れ、恥じながら次のように告げた。

「彼はパーンドゥの田地（夫人）において、愛を抱いたインドラによって生まれた。(三―四) その邪悪な男が、私一人をヤマ（閻魔）の住処に導こうと望んでいる。あなた方に幸あらんことを。生命が惜しいから私は自分の家に帰る。(五) あるいは王族（クシャトリヤ）の雄牛たちよ、アルジュナに狙われた私を救うために、彼に対して戦ってくれ。勇士たち。私に無畏（安全）を与えてくれ。(六) ドローナ、ドゥルヨーダナ、クリパ、カルナ、マドラの王、バーフリーカ、ドゥフシャーサナなどは、死神（アンタカ）に悩まされる者をも救うことができる。(七) いわんや、アルジュナ一人が私を殺そうと望んでいるのだから、あなた方すべての王がそろえば、私を彼から救えないはずがない。(八)

だがパーンダヴァたちが喜び勇む声を聞いて、私に大きな恐怖が生じた。王たちよ、私の

四肢は、まさに死のうとする人の四肢のように力が抜ける。(九) 確かにアルジュナは私を殺すことを誓ったのだ。というのは、パーンダヴァたちは悲しむべき時に喜んで叫んでいるのだから。(一〇) 神々、ガンダルヴァ、阿修羅、蛇、羅刹たちも〔アルジュナの誓いを〕別様にすることはできない。いわんや人間の王たちはなおさらである。(一一) それ故、私が去るのを許してくれ。御機嫌よう、人中の雄牛たちよ。私は身を隠す。パーンダヴァたちは私を見つけないだろう。(一二)」

このように彼が恐怖から心乱れて嘆いていた時、ドゥルヨーダナ王は自分の目的を重視して、次のように言った。(一三)

「人中の虎よ、恐れてはいけない。というのは、人中の雄牛よ、あなたが王族の勇士たちの中に立っている時、誰があなたに戦いを挑めようか。(一四) 私、ヴァイカルタナ・カルナ、チトラセーナ、ヴィヴィンシャティ、ブーリシュラヴァス、シャラ、シャリヤ、無敵のヴリシャセーナ、プルミトラ、ジャヤ、ボージャ、カーンボージャの王スダクシナ、強力なサティヤヴラタ、ヴィカルナ、ドゥルムカ、サハ、ドゥフシャーサナ、スバーフ、武器を振り上げたカリンガの王、アヴァンティのヴィンダとアヌヴィンダ、ドローナ、ドローナの息子、サウバラ（シャクニ）がいる。(一五―一七) そしてあなた自身も、最高の戦士で、勇猛で、無量の光輝を有する。それなのに、どうしてあなたはパーンダヴァたちを恐れるのか。シンドゥの王よ。(一八) 私の十一の軍団があなたを守るべく努力して戦うだろう。シンドゥの王よ、恐れることはない。あなたの恐怖を捨てよ。(一九)」

王よ、シンドゥ国王はあなたの息子ドゥルヨーダナにこのように元気づけられ、その夜、ドゥルヨーダナとともにドローナのもとに行った。(二〇) 王よ、彼はドローナに恭しく挨拶し、敬礼してそのそばに座り、次のようにたずねた。(二一)

「的を射貫くこと、遠くから的を射ること、手練の業、射貫く力の強さ。これらの点について、尊師は私とアルジュナとの違いを言って下さい。(二二) 師匠よ、学術に関しても私とアルジュナとの相違を真に知りたいと思います。先生、ありのまま私におっしゃって下さい。(二三)」

ドローナは言った。

「わが子よ、そなたとアルジュナは師匠を同じくする。しかし鍛練し、あのように苦難に慣れていることにより、アルジュナはそなたより優れている。(二四) しかしそなたは決して戦いにおいてアルジュナを恐れてはならぬ。わが子よ、私が確実にそなたを危険から守るから。(二五) 神々といえども私の腕で守られた者に勝つことはできない。そして私は、アルジュナが渡れないような陣形を布くであろう。(二六) それ故、戦いなさい。恐れてはいけない。自己の法(ダルマ)(本務)を守れ。王よ、父祖の道に従って行きなさい。(二七) そなたは正しく諸ヴェーダを学び、聖火に正しく供物を投じ、多くの祭祀を行なえば、そなたには死の恐怖はない。(二八) そなたは愚かな人々には得られがたい大なる幸運を得て、腕の力で得られた最高の神聖な世界に達するであろう。(二九) クル族、パーンダヴァたち、ヴリシュニ族、その他の人々、そして私と私の息子は定めなきものであると考えるべきである。(三〇) 我々はすべて、

強力なカーラ(時間、破壊神)によって順番に滅ぼされ、各自の業(カルマン)とともに他の世界に行くであろう。(三一) 苦行者たちが苦行を行なって達する諸世界に、勇猛な王族(クシャトリヤ)たちは王族の法を行なうことによって達する。(三二)」

サンジャヤは語った。——

王よ、シンドゥ国王はこのようにドローナに元気づけられた。彼はアルジュナに対する恐れを離れ、戦いの決意をした。(三三)

(第五十二章)

クリシュナに戦意を伝えるアルジュナ

サンジャヤは語った。——

アルジュナがシンドゥ国王を殺すことを誓った時、強力なヴァースデーヴァ(クリシュナ)はアルジュナに告げた。(一)

「あなたは兄弟たちの考えを知って、言葉により誓った。『私は明日、シンドゥ国王を殺す』と。まったく無謀なことをしたものだ。(二) 私と相談しないで、あなたは過度の重荷を背負った。我々はどのようにしたらすべての人々の笑いものにならないですむか。(三) 私はドゥルヨーダナの野営場にスパイたちを派遣した。彼らは速やかにもどり、我々に次のような知らせをもたらした。(四) あなたがシンドゥ国王を殺すことを誓った時、彼らは非常に大きな

獅子吼と楽器の音を聞いた。（五）その音声によって、ドリタラーシトラの息子たちとシンドゥ国王は戦慄した。この獅子吼は原因のないものではないと考えて彼らは戦いの準備をした。（六）強力な者よ。クル軍の象兵と騎兵と歩兵に非常に大きな音声があがり、恐ろしい戦車の音がした。（七）『きっとアルジュナがアビマニュの死を聞いて苦しみ、怒って夜襲をするであろう』と考えて、彼らは戦いの準備をしたのである。（八）青蓮の眼の人よ、彼らは準備しているうちに、真実を守るあなたがシンドゥ国王を殺すと誓ったことを聞いた。（九）それから、スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）のすべての顧問たちは意気消沈し、小さな動物のようにふるえた。ジャヤドラタ王も同様であった。（一〇）そしてその哀れなサウヴィーラとシンドゥの王はひどく悩み、立ち上がると、顧問たちとともに自分の宿舎に行った。（一一）王の集会における協議の時、よい結果をもたらすための行動をすべて協議して、スヨーダナに次のように言った。（一二）

『アルジュナは私が息子を殺したと考え、明日、私に対して進撃して来るだろう。というのは、彼は軍隊の真中で私を殺すと誓ったのであるから。（一三）神々、ガンダルヴァ、阿修羅、蛇、羅刹といえども、そのアルジュナの誓いを別様にすることはできない。（一四）そこであなた方は戦いで私を守ってくれ。アルジュナがあなた方の頭に足をのせて、その目的を達することのないように。このように取り計らっていただきたい。（一五）クルの王よ、戦いにおいて私が守られないなら、私にいとまを下さい。家に帰ります。（一六）』

スヨーダナはこのように言われて、言葉もなく、意気阻喪していた。あなたが誓ったこと

を聞いて、彼は考えこんだ。（一七）シンドゥ国王は彼が苦しんでいるのを見て、優しく、期待をこめて、自分に有益なことを告げたという。（一八）

『私はあなた方のうちに、戦いにおいてアルジュナの武器を自分の武器により撃退できるような強力な弓取りを見出さない。（一九）アルジュナがクリシュナをともない、ガーンディーヴァ弓を揺する時に……。インドラ自身が実際に現われたようなアルジュナの前に、誰が立つことができようか。（二〇）かつてヒマーラヤの山中で、大威光あるマヘーシュヴァラ（シヴァ）が、徒歩のアルジュナと戦ったということだ。（二一）また、神々の王にうながされたアルジュナはただ一人で、ヒラニヤプラに住む幾千の悪魔たちを殺した。（二二）そのクンティーの息子は、英邁なクリシュナと結びついた。彼は神々を含む三界すべてを滅ぼすことができると私は考える。（二三）そこで私は、いとまを乞いたい。あるいは、偉大な勇士ドローナが息子とともに私を守って欲しい。もしあなたがよいと思われるなら。（二四）』

アルジュナよ、そこで王は自ら師匠に強く懇願した。そして種々の対応策が実施され、戦車も準備されたという。（二五）カルナ、ブーリシュラヴァス、ドローナの息子、無敵のヴリシャセーナ、クリパ、マドラ国王の六名がジャヤドラタの前を行った。（二六）ドローナは半分は車陣、半分は蓮華陣の陣形を布いた。ジャヤドラタは蓮華陣の中心部に位置し、〔針陣の〕針の目のところにいた（注釈によれば、蓮華陣の後の部分に針陣がある）。シンドゥ国王は戦いに酔い痴れる勇士たちに守られているであろう。（二七）アルジュナよ、これらの六名の戦士は、弓その他の武器に秀で、力、気力、血統にめぐまれ、最も抗しがたいから、彼らとその従者をうち破らないで

は、ジャヤドラタを制することはできない。(二八) 彼ら六名について、一人一人、力量を考えてみよ、これらの人中の虎たちがいっしょになったら、容易にはうち破ることはできない。(二九) 私は我々の利益のために、再び政略を検討しよう。政略を知る親しい顧問とともに、目的を達成するために相談しよう。(三〇)」

アルジュナは言った。

「あなたが非常に強力だと考えるドゥルヨーダナの六名の戦士の力は、私の力の半分にも値しないと私は思う。(三一) クリシュナよ、私がジャヤドラタを殺したいと望み、彼らすべての武器を自分の武器で破壊するのを、あなたは見るであろう。(三二) ドローナとその従者たちが見て嘆いている前で、私はシンドゥ国王の頭を大地に落下させるであろう。(三三) サーディヤ神群、ルドラ神群、ヴァス神群、アシュヴィン双神、マルト神群、インドラ、一切諸神、阿修羅(アスラ)たち、祖霊たち、ガンダルヴァたち、スパルナ(ガルダ)たち、海、山、天、空、地、諸方位、諸方位の守護神、村や森に住む生類、動不動の生類が、もしシンドゥ国王を救護しても、クリシュナよ、それでもあなたは、私が明日戦場で矢によって彼を殺すのを見るであろう。クリシュナよ、私は武器に触れて、真実にかけて誓う。(三四―三七) クリシュナよ、勇士ドローナはあの邪(よこしま)な悪党の守護者である。私はまずそのドローナを攻撃するであろう。(三八) スヨーダナ(ドゥルヨーダナ)は、この賭け(戦い)はドローナにかかっていると考えている。それ故、まずドローナの軍の前衛を破ってから、シンドゥ国王に対して進撃しよう。(三九) あなたは明日、私が戦場で鋭い切っ先の矢により、敵の勇士たちを断ち切るのを見るであろう。

金剛杵(ヴァジュラ)により山の峰々を断つように。(四〇) 鋭い矢により射られて倒れつつある、またすでに倒れた、人や象や馬の体から血が流れ出るだろう。(四一) ガーンディーヴァ弓から放たれた、思考や風のように速い矢は、幾千という人や象や馬たちの体と生命を奪うであろう。(四二) 私がヤマ、クベーラ、ヴァルナ、ルドラ(シヴァ)、インドラから授かった恐ろしい武器を、人々は戦場で見るであろう。(四三) 私が戦いにおいて、シンドゥ国王を守るすべての者たちの武器を、ブラフマ・アストラ(梵天の武器)により破壊するのをあなたは見るであろう。(四四) 明日の戦いにおいて、私が激しい矢で切断した諸王の頭により大地がおおわれるのをあなたは見るであろう。クリシュナよ。(四五) 私は肉食獣たちを満足させるであろう。敵たちを逃走させるであろう。友たちを喜ばせるであろう。シンドゥ国王を倒すであろう。(四六) 邪悪な地方に生まれ、多くの罪悪をなす悪しき親類であるシンドゥ国王は、私に殺されて、自分の身内を悲しませるだろう。(四七) すべての乳と米飯を食べる、悪行をなすシンドゥ軍は、諸王もろとも、戦場において私に矢で駆逐されて滅びるであろう。(四八) クリシュナよ、夜が明けたら、私に等しい弓取りはこの世で他にいないとスヨーダナが考えるようにするであろう。(四九) ガーンディーヴァは神弓である。そして私が戦士である。人中の雄牛よ、そしてあなたが御者である。クリシュナよ、私が征服できないものがあろうか。(五〇) 月における標(点斑)のように、海における水のように、同様に私の誓いは真実である(実現する)と知れ。クリシュナよ。(五一) 私の武器を軽んじてはならぬ。強固な弓を軽んじてはならぬ。両腕の力を軽んじてはならぬ。ダナンジャヤ(アルジュナ)を軽んじてはならぬ。(五二) 私は戦場に行ったら敗

れない。必ず勝利する。その真実にかけて、ジャヤドラタがすでに戦場で殺されたと思え。（五三）バラモンに真実は確実である。善き人々に謙虚さは確実である。有能さ（異本は「祭祀」）において繁栄は確実である。ナーラーヤナ（ヴィシュヌ＝クリシュナ）において勝利は確実である。（五四）」

サンジャヤは語った。――

アルジュナはクリシュナに、そして自ら自分自身にこのように告げてから、大声でまた主クリシュナに言った。（五五）

「クリシュナよ、夜が明けたら私の戦車の準備が整っているようにしてくれ。大仕事をやらなければならぬから。（五六）」（第五十三章）

悲嘆に暮れるスバドラー

サンジャヤは語った。――

クリシュナとアルジュナは悲嘆に暮れ、蛇のように息を吐き、眠ることができなかった。（一）インドラをはじめとする神々は、ナラとナーラーヤナ（アルジュナとクリシュナ）が怒ったことを知って悩み、「一体どのようになるのだろうか」と心配した。（二）恐ろしい出来事を告げる凄まじい激風が吹いた。日輪の中に鉄棒と胴体が見えた。（三）雨が降らないのに雷が、電撃と稲光をともなって落ちた。そして大地が、山や森林もろともに震動した。（四）大王よ、マカラ（海豚または鰐）の住処である海は動揺した。また諸川は逆流した。（五）戦車、馬、人、象たちは大混乱に陥った。肉食獣を喜ばせ、ヤマ（閻魔）の王国を繁栄させる前兆である。（六）象や馬は大小便を出し、泣き叫んだ。それらすべての身の毛がよだつ恐ろしい前兆を見て、そして強力なアルジュナの誓いを聞いて、あなたの軍のすべての兵は苦悩した。バラタの雄牛よ。（七―八）

その時、強力なアルジュナはクリシュナに言った。

「あなたはスバドラーと彼女の嫁（ウッタラー）とを慰めなさい。（九）嫁とあなたの妹が（原文疑問）悲しみを離れるようにせよ。マーダヴァよ。慰めることにより、真実で適切な言葉により元気づけよ。主よ。（一〇）」

そこでクリシュナは、非常に心苦しくはあったが、息子のことで悲嘆に暮れる妹を元気づけた。（一一）

「ヴリシュニ族の女よ、息子のことで嫁とともに悲しんではいけない。怯える女よ、すべての生類には、カーラ（時間、運命）に定められた唯一の結末しかない。（一二）特に王族（クシャトリヤ）の一族（クラ）に生まれた勇士であるお前の息子にとっては、ふさわしい死である。悲しむな。（一三）父に等しい勇武を有する偉大な戦士であるあの勇士は、幸いなことに、王族の作法に従って、勇士に望まれる帰趣に到達した。（一四）彼は多くの敵をうち破って死神のもとに送り、すべての願望をかなえる不滅の善行者たちの世界に行った。（一五）お前の息子は、善き人々が苦行、梵行、博識、智慧により行く帰趣に達した。（一六）お前は勇士の息子を持ち、勇士の夫を持ち、勇士の舅や親類を持つ。バドラー（スバドラー）よ、最高の帰趣に達した息子のことを悲しむな。

(一七)子供の殺害者であるあの卑しいシンドゥ国王は、友人の群や親類とともに、この罪悪の果報を得るであろう。(一八)美しい尻の女よ、この夜が過ぎたら、悪行をなした彼はアルジュナから逃れられないだろう。たとえ彼がアマラーヴァティー（インドラの都）に入ったとしても。(一九)明日、お前は聞くであろう。戦いにおいてあのシンドゥ国王の頭が切られて、サマンタパンチャカ（クルクシェートラ）の外にころがり出ることを。悲しみを離れよ。泣くな。(二〇)その勇士は王族の法を前提として、善き人々の帰趨、我々やその他の戦士たちが行く帰趨に達した。(二一)広い胸をし、大きな腕を持ち、退くことのない、敵を退ける（異本による）お前の息子は天界へ行った。美しい尻の女よ、苦熱を捨てよ。(二二)偉大な戦士であるその強力な勇士は、父と母の一党に従い（異本による）、幾千の敵を殺してから自らも殺された。(二三)王妃よ、嫁を慰めよ。王族の女よ、ひどく悲しむな。妹よ、明日非常に好ましい知らせを聞いて悲しみを離れよ。(二四)アルジュナが誓ったことはその通りに実現し、別様にはならないだろう。というのは、お前の夫の意図したことは決して実を結ばないことはないから。(二五)もし人間、蛇、ピシャーチャ鬼、夜行の者たち、鳥、神、阿修羅たちが、戦場にいるシンドゥ国王に加勢しても、明日、彼と彼らは生きながらえないだろう。(二六)」

（第五十四章）

サンジャヤは語った。――

偉大なクリシュナのこのような言葉を聞いて、スバドラーは息子のことを嘆き悲しんで、

非常に苦しんで泣いた。(一)

「ああ、不幸な私の息子よ、あなたは勇武にかけて父に等しいのに、どうして戦いに行って死んでしまったのか。(二)わが子よ、青蓮のような、美しい眼と歯を持つあなたの顔が、どのようにして、戦場のほこりにまみれているのが認められるのか。(三)きっと諸々の生類は、退くことのないあなたが倒れているのを見る。美しい頭と首と腕と肩を持ち、広い胸を持ち、腹が出ていないあなたが。(四)あなたは全身が魅力的に発達し、美しい眼をして、武器による傷におおわれている。きっと諸々の生類は、昇った月を見るようにあなたを見ているでしょう。(五)以前には彼の寝台は高価な敷布におおわれていた。その幸せに慣れた彼が、どうして矢で射貫かれて大地に横たわっているのか。(六)以前にはあの強力な勇士は美しい女たちに仕えられていた。その彼が今日、どうして大地に倒れて、雌のジャッカルたちに仕えられているのか。(七)以前には彼は喜んだ吟誦者（スータ）、讃嘆者（マーガダ）、崇拝者（バンディン）たちに讃えられていた。その彼が今日、咆哮する恐ろしい猛獣たちにより仕えられている。(八)パーンダヴァたちや、ヴリシュニの勇士たちや、パーンチャーラの勇士たちが保護者であるのに、勇者よ、あなたは保護者がいないかのように、誰に殺されたのですか。(九)非の打ち所のない息子よ、私はまだあなたを見足りない。疑いもなく今日、この不幸な女はヤマ（閻魔）の住処に行きます。(一〇)あなたの顔は、大きい眼をし、美しい髪をし、魅力的な言葉を述べ、よい香りがする。息子よ、いつまた傷のないその顔を見るであろうか。(一一)ビーマセーナやアルジュナの力は空しい。弓を持つヴリシュニの勇士の力は空しい。パーンチャーラたちの力は空しい。

(二二) ケーカヤ、チェーディ、マツヤ、スリンジャヤはどうした。戦場にいる勇猛なあなたを守ることができないのだから（異本による）。(二三) 今日、大地が輝きを失い空っぽになったかのように見える。アビマニユを見ないで、悲しみに沈む眼をした私には。(二四) あなたはヴァースデーヴァ（クリシュナ）の妹の子、ガーンディーヴァ弓を持つアルジュナの息子です。どうして勇猛なあなたが戦車を失い、敵に倒されるのを見るのでしょう。(二五) ああ勇士よ、私にとってあなたは、夢の中で見られてすぐに失われた財宝です。ああ、人間というものは定めない水泡のように無常である。(二六) ここにいるあなたの若い妻は、あなたの死に対する苦しみにひたっている。仔牛を失った牝牛のような彼女をどのように慰めたらよいか。(二七) ああ息子よ、あなたは時ならぬ時に出発したものだ。成果を収めた時にあなたに会うことを切望する私を見捨てて。(二八) 確かに死神の帰趣は知者たちによっても知られがたい。というのは、あなたはクリシュナが保護者であるのに、保護者がいないかのように戦場で殺されたのであるから。(二九) 祭祀を行なう者、布施をし徳性ある者、自己を制したバラモン、梵行（清浄行）を行なう者、神聖な聖場で沐浴する者、恩を知る者、寛大な者、長上に仕える者、幾千の謝礼を与える者、あなたはそういう者たちがたどる帰趣に達しなさい。(三〇—三一) 戦場で退くことなく戦い、敵たちを殺して自らも殺された勇士たちがたどる帰趣に達しなさい。(三二)（三三—三二略）」

スバドラーが落胆し悲嘆に暮れて、このように嘆いていた時、パーンチャーラの姫（ドラウパディー）はヴィラータの娘（ウッタラー）とともに彼女に近づいた。(三三) 王よ、彼女たちは非常に苦しみ、この上なく嘆き悲しんで、気が狂ったかのように、意識を失って大地に倒れた。

クリシュナも非常に苦しんでいたが、苦しんでいる妹に恭しく水を注ぎ、元気づけて色々と適切な言葉を述べた。(三四) 蓮花の眼をした彼は、失神しそうに嘆き、〔息子に〕取り残されてふるえている妹に次のように告げた。(三五)

「スバドラーよ、息子のことを悲しむな。パーンチャーラの姫よ、ウッタラーを慰めなさい。王族（クシャトリヤ）の雄牛であるアビマニユは知れわたった帰趣に達した。(三六) 美しい顔の女よ、一族にいる他の男たちもすべて、誉れあるアビマニユのたどった帰趣に行くように。(三七) 今日、お前の息子である勇士が一人で行なったような働きを、我々と我々の友たちも行なうべきである。(三八)」

敵を制する勇士クリシュナは、妹とドラウパディーとウッタラーをこのように慰めて、アルジュナのもとにもどった。(三九) 王よ、それから勇者クリシュナは、王たちと縁者たちに別れを告げて、宿舎に入った。他の者たちもそれぞれの宿舎に行った。(四〇)（第五十五章）

クリシュナ、御者のダールカに指示する

サンジャヤは語った。——

それから蓮花の眼をした主クリシュナは、アルジュナの宿舎に入り、水に触れてから、吉相の地面に、瑠璃のようなダルバ草によりすばらしい寝床を敷いた。(一) それからその寝床

を最高の武器で囲み、花輪、炒り米、香、非常に吉祥の品々によってそれを作法通りに飾りつけた。(二) そしてアルジュナも水に触れた時、礼儀正しい従者たちが、いつもの夜のシヴァに対する供物を彼に示した（運んで来た）。(三) そこでアルジュナは満足し、香や花輪でマーダヴァを飾り、その夜の供物をシヴァに捧げた。(四) クリシュナは微笑してアルジュナに告げた。

「アルジュナよ、眠りなさい。どうかあなたに幸あらんことを。私は行く。(五)」

　それから栄光ある彼は、門衛と守備官をそこに置き、ダールカ（御者の名）に従われて自分の宿舎に入った。そして多くのなすべきことを考えながら、輝かしい寝台で寝た。(六) パーンダヴァたちの宿舎においては、その夜は誰も眠らなかった。王よ、不眠がすべての人に取りついた。(七)「ガーンディーヴァ弓を持つ偉大なアルジュナは、息子についての悲しみにかられ、突然、シンドゥ国王を殺すことを誓った。(八) 敵の勇士を殺す強力なインドラの息子は、どのようにしてその誓約を実現するのか」と彼らは考えた。(九)

「まことに、偉大なアルジュナは困難なことを決意したものだ。彼は息子についての悲しみに苦しめられ、大変な誓約をした。(一〇)〔敵の〕兄弟たちは勇猛で、その軍隊は多数である。ドリタラーシトラの息子はすべてを彼（ジャヤドラタ）に告げ知らせた。(一一) アルジュナがシンドゥ国王を殺して再びもどるように。アルジュナが敵の群を殺して、誓願を果たすように。(一二) もし彼がシンドゥ国王を殺せなければ、彼は火に入るであろう。まことにアルジュナは誓いを破ることはできない。(一三) アルジュナが死んだら、ダルマ王はどうして生きながらえようか。というのは、ユディシティラは勝利をすべてアルジュナに託しているから。

(一四) もし我々が何か善業を積んだなら、布施を行ない祭祀を行なったなら、そのすべての果報により、アルジュナが敵に勝利するように。(一五)」

　王よ、このように彼らが勝利を願っている間に、やっとのことでその夜は過ぎた。(一六) ところで、その夜中に、クリシュナは目覚め、アルジュナの誓約を思い出してダールカに言った。(一七)

「ダールカよ、息子を殺されたアルジュナは苦しみ、『明日ジャヤドラタを殺す』と誓った。(一八) しかしドゥルヨーダナはそれを聞き、戦場においてアルジュナがジャヤドラタを殺せないように、顧問官たちと協議するであろう。(一九) すべての軍団がジャヤドラタを守るであろう。すべての武術に通じたドローナも、その息子とともに彼を守るであろう。(二〇) ダイティヤとダーナヴァ（悪魔の類）を滅ぼす無比の勇士インドラといえども、ドローナに守られた彼を戦いにおいて殺すことはできない。(二一) そこで私は、明日、太陽が西山（アスタ）に沈まぬうちに、アルジュナがジャヤドラタを殺すように計らうであろう。(二二) 私にとって、妻も友も親類縁者も、その他の誰でも、クンティーの息子アルジュナほど愛しくはない。(二三) ダールカよ、私はアルジュナのいない世界を一瞬たりとも見ることはできない。そして、そのようにはならないだろう。(二四) 私はアルジュナのために、馬や戦車や象もろとも、カルナやスヨーダナもろともに、敵軍を滅ぼすであろう。(二五) ダールカよ、明日、三界の者たちは激戦において、戦場でアルジュナのために勇武を発揮する私の力を見るがよい。(二六) ダールカよ、明日、私は戦いにおいて幾千の王、幾百の王子たちを、馬や象や戦車とともに逃走

させるであろう。(二七) 明日、私が戦いにおいて怒り、アルジュナのために、諸王の軍を円盤で粉砕し、打倒するのをお前は見るであろう。(二八) 明日、神々、ガンダルヴァ、ピシャーチャ鬼、蛇、羅刹を含むすべての世界は、私がアルジュナの親友であることを知るであろう。(二九) 彼を憎む者は私を憎め。彼に従う者は私に従え。このように知って、アルジュナは私の半身であると考えられるべきである。(三〇) 夜が明けないうちに、お前は〔兵学の〕論書に従い、専念して（テクスト疑問）最上の戦車を整備して運んで来なさい。(三一) そして御者よ、神聖な棍棒カウモーダキー、槍、円盤、弓、矢、すべての資具を戦車に乗せなさい。(三二) 戦車の座席に、戦場において戦車を飾る、勇猛なガルダの〔標の〕、私の旗を立てる場所を設けなさい。(三三) 戦車に傘を〔立て〕、ヴィシュヴァカルマン（一切造者）に作られた、太陽や火のような黄金の網で飾られた馬たち、すなわちバラーハカ、メーガプニヤ、サイニヤ、スグリーヴァという最高の馬たちを戦車につなぎ、お前は鎧を着て油断なく待機しておれ。ダールカよ。(三四―三五) リシャバの音階（第二音階）に満ちたパーンチャジャニヤ（法螺貝の名）の恐るべき音響を聞いたら、速やかに私のもとに来なさい。(三六) ダールカよ、私は一日で、父方の叔母の子である兄弟の怒りとすべての苦しみを取り除いてやる。(三七) 私はあらゆる手段を用いて、ドリタラーシトラの息子たちが見ている前で、アルジュナがジャヤドラタを殺すように努力する。(三八) アルジュナがそれぞれの人を殺そうと努力すると、その相手に対し、必ずや彼の勝利があるであろう。御者よ、私はそう宣言する。(三九)」

ダールカは言った。

「彼には必ずや勝利のみがあります。どうして敗北がありましょうか。人中の虎よ、あなたが彼の御者となるのですから。(四〇) この夜が明けたら、アルジュナの勝利のために、あなたが命令した通りにやります。(四一)」

（第五十六章）

シヴァからパーシュパタの武器を授かる

不可思議の勇武を有するクンティーの息子アルジュナは、自分の誓約を果たそうとして、例の〔ヴィヤーサから授けられた〕呪句（マントラ）を想起しつつ眠った。(一) 猿の旗標を持つ彼は悲しみにより苦しんでいた。夢の中で、ガルダの旗標を持つ大威光ある神（ヴィシュヌ＝クリシュナ）が、もの思いにふける彼のもとに来た。(二) 徳性あるアルジュナは、あらゆる状況下で常にクリシュナを信愛し、愛情を抱いていたから、礼儀を欠くことなく起立して迎えた。(三) アルジュナは起立してゴーヴィンダを迎えて、彼に座席を与えた。しかし自らは座ろうとはしなかった。(四) それから、大威光あるクリシュナは座り、アルジュナの決意を知り、立っている彼に告げた。(五)

「アルジュナよ、悲嘆に暮れてはならぬ。カーラ（時間、破壊神）は克服しがたい。カーラはすべての生類を必然的なあり方に従わせる。(六) いかなるわけであなたは嘆くのか。最も雄弁な者よ、それを言いなさい。賢者は悲しむべきではない。悲しみはなすべき仕事を阻害する。(七) 人は嘆いていれば、敵を喜ばせ、縁者たちを苦しませ、自分自身は衰退する。それ故あ

なたは嘆いてはならぬ。（一八）」
　無敵のアルジュナはヴァースデーヴァ（クリシュナ）にこのように告げられた。その時、英邁なアルジュナは次のような、意義ある言葉を述べた。（一九）
「私はジャヤドラタを殺すという重大な誓約をした。クリシュナよ、あの息子を殺した邪悪な男を、私は明日殺すであろう。（二〇）クリシュナよ、ドリタラーシトラの息子であるすべての勇士たちは、明日、私の誓約を妨害するために、後ろからシンドゥ国王を守るであろう。（二一）クリシュナよ、それらの十一の軍団はこの上なくうち破りがたい。誓約が果たされなかったら、私のような男はどうして生きながらえることができるか。（二二）勇士よ、私は苦悩のみを手段とするので、誓いを守れそうもない。〔この季節には〕太陽は速やかに沈む。それ故、私はこのように言う。（二三）」
　鳥（ガルダ）を旗標とするクリシュナは、アルジュナの悲しみの原因を聞くと、水に触れてから、東方を向いて座った。（二四）大威光ある蓮花の眼をした彼は、アルジュナのために、シンドゥ国王を殺す決意をして（異本による）、次のように告げた。（二五）
「アルジュナよ、パーシュパタ（シヴァの武器）という永遠で最高の武器がある。マヘーシュヴァラ（シヴァ）の神は戦場において、その武器ですべての悪魔を殺したのだ。（二六）もしあなたが今、それを〔使用する呪句を〕思い出せば、明日、あなたはジャヤドラタを殺すであろう。そこで、雄牛を旗標とする神（シヴァ）を念想せよ。（二七）アルジュナよ、その神を念想して心静かに座っていなさい。そうすれば、彼の信者であるあなたは、彼の恩寵によりその偉大な武器を得るであろう。（二八）」
　アルジュナはクリシュナの言葉を聞くと、水に触れてから地面に座り、一心不乱にシヴァを念想した。（二九）それから、吉相のブラフマンの刻限（未明の聖なる時刻）がやって来た時、アルジュナは自分自身とクリシュナが空中にいるのを見た。（三〇）アルジュナはクリシュナとともに、風のように速く進み、星々に満ち、シッダやチャーラナ（半神族）の住む天空に行った。（三一）彼は主クリシュナに右腕をつかまれていた。そして多くの驚異的な光景を眺めながら進んだ。（三二）徳性ある彼は、北方に白い山を見た。そしてクベーラの遊園で、蓮の花に飾られた蓮池を見た。（三三）彼は豊富な水を運ぶ最高の川ガンガーを見た。それは常に花や果実や樹木にめぐまれ、水晶やその他の貴い石に満ちていた。獅子や虎に満ち、種々の獣の群に満ちていた。神聖な隠棲所があり、心地よく、魅力的な鳥たちが住んでいた。（三四—三五）それから彼はマンダラ山の地域を見た。そこはキンナラの歌声が響き、金や銀の峰々で輝き、種々の薬草で輝いていた。そして花咲くマンダーラ樹で飾られていた。（三六）それから彼は、艶々した墨（アンジャナ）（アンチモニー）の堆積のような形状のカーラ山（黒い山）に到着した。そして神聖なヒマーラヤの山麓、マニマット山、ブラフマトゥンガ山、その他の河川、諸々の地方に達した。（三七）それからスシュリンガ、シャタシュリンガ、シャリヤーティの森、聖地アシュヴァシラス、アータルヴァナ（聖者名か？）の聖地に行った。（三八）そして山王ヴリシャダンシャと天女（アプサラス）たちに満ち、キンナラたちに飾られた大マンダラ山に行った。（三九）清らかな滝をそなえた、金の鉱脈に飾られたそれらの山々を行きつつ、アルジュナはクリシュナとともに、都の群に飾ら

れた、月光のように輝く大地を見た。そして種々の驚異的な、多様な宝庫である海を見た。（三〇―三一）彼はクリシュナとともに、空と天と地を見つつ驚嘆し、ヴィシュヌパダに行き、放たれた矢のように通過した。（三二）

その時アルジュナは燃えるような山を見た。それは惑星、星宿、月、太陽、火のように輝いていた。（三三）その山に着いて、彼はその山頂にいる、常に苦行をしている偉大なシヴァ神を見た。（三四）その神は自らの威光により、千の太陽のように輝いていた。槍を持ち、髷を結い、白色で、樹皮と虎皮を着ていた。（三五）その神は千の眼で光り輝く多彩な身体をし、パールヴァティーと輝かしい鬼神の群をともなっていた。（三六）歌や器楽の音をたてる者たちが、シヴァのために拍手をとり踊っていた。跳ね手を打ち叫ぶ者たちが、芳香を放ってシヴァに仕えていた。（三七）聖者やヴェーダの読誦者たちが神的な讃歌により、その弓を持つ不滅の神、一切の生類の守護者を讃えていた。（三八）

徳性あるヴァースデーヴァ（クリシュナ）はシヴァを見ると、永遠のヴェーダを唱えながら、アルジュナとともに頭を下げて大地に平伏した。（三九）その神は世界の原初であり、一切を造った者であり、不生不滅の主である。意（思考器官）の最高の起源である。空であり風であり諸天体の拠り所である。（四〇）彼は雨の創造者であり、世界の最高の本源である。神、魔類、夜叉、人間たちにとって〔目的を〕成就させる者である。（四一）彼はヨーガ行者たちにとっては最高ブラフマン（梵）であり、明瞭にブラフマンを知る人々の依所（解脱者は最高神と合体する）である。動不動の生類を創造する者であり、また帰滅させる者である。（四二）偉大な彼はカーラ（破壊神）の

ような怒りを抱き、彼はシャクラ（インドラ）や太陽神のような優れた属性を有する。その時クリシュナは、言葉と意と知性（根源的思惟機能）と行為とによってその神に敬礼した。（四三）微妙なアートマンに関する〔知識に沈潜する〕境地を望む賢者たちが見るところの、その窮極の原因である不生なるバヴァ（シヴァ）に対し、二人は庇護を求めた。（四四）アルジュナもその神が万物の本初であり、過去と未来と現在を生ずる者（異本による）と知り、その神に繰り返し敬礼した。（四五）それからシヴァはやって来た二人に微笑して告げた。

「最高の人たちよ、ようこそ。立ちなさい。旅の疲れをとりなさい。勇士たちよ、心で何をお望みか。すぐに言いなさい。（四六）あなた方はいかなる用事で来たのか。私はそれをあなた方のためにかなえるであろう。自分にとって有益なことを願いなさい。あなた方のためにすべてかなえるであろう。（四七）」

大なる叡知を有するクリシュナとアルジュナはその言葉を聞くと、合掌して立ち上がり、シヴァを讃えた。（四八）（四九―五八略）クリシュナとアルジュナはこのように偉大な神を讃えてから、武器を得るためにバヴァ（シヴァ）を満足させた。（五九）

それからアルジュナは、心から喜び、雄牛を旗標とする神に敬礼した。そして彼は眼を見開き、そのすべての光輝の貯蔵庫を見た。（六〇）そしてシヴァの傍らに、自分がヴァースデーヴァに供えた日常の夜の供物を見た。（六一）そこでアルジュナは、心によってシヴァとクリシュナに敬意を表し、「私は神聖な武器を望む」とシヴァに言った。（六二）それから主神は、アルジュナの願いの言葉を聞いて、微笑してクリシュナとアルジュナに告げた。（六三）

「敵を殺す者たちよ、この近くに、甘露よりなる神聖な湖がある。以前、私の例の神弓と矢はそこに置かれた。(六四) 私はそれによって、すべての神の敵たちを戦いにおいて倒した。二人のクリシュナよ、その最高の弓と矢をそこから運んで来なさい。(六五)」

二人の勇士は「承知しました」とシヴァに答えて、シヴァの眷属たちとともに、神的な驚異に満ちたその神聖な湖に向けて出発した。(六六) 聖仙ナラとナーラーヤナ（アルジュナとクリシュナ）は当惑することなく、シヴァに教えられた、すべての目的を成就させる神聖な湖に行った。(六七) そしてその日輪のような湖に着いて、アルジュナとクリシュナは水中に恐ろしい竜（蛇）を見た。(六八) そして二人は、また別の千の頭を持つ最高の竜を見た。それは大火焰を吐いて、火のように強く輝いていた。(六九) それからクリシュナとアルジュナは水に触れ、合掌して、シヴァを拝みながらその二匹の竜に近づいた。(七〇) ヴェーダを知る二人は、ルドラ（シヴァ）を讃える百の聖句を唱えつつ、全身全霊で無比のシヴァに敬礼しつつ進んで行った。(七一) すると二匹の大蛇は、ルドラの偉大さにより、蛇の姿を捨てて、弓と矢という、敵を殺す一対の武器になった。(七二) そこで喜んだ二人は、美しく輝く弓矢をつかんだ。偉大な二人はそれを運んで、偉大な〔シヴァ〕に渡した。(七三) するとシヴァの脇から一人の梵行者（ブラフマチャーリン）（清浄行者）が出て来た。彼は黄褐色の眼をし、苦行の田地（器容）であり、強力で、青黒い喉と赤い髪を持っていた。(七四) 梵行者はその最高の弓をとって、注意深く位置を定めて立った。そして弓に矢をつがえ、作法通りに引き絞った。(七五) 不可思議な勇武をそなえたアルジュナは、彼の弓弦〔を引く〕掌や構えを見て、そしてシヴァの発する呪句（マントラ）を聞いて、

すべてを把捉した。(七六) 非常に強力な主（梵行者）はその矢を湖に放った。そしてその勇士は、その弓を再び湖にもどした。(七七) それからアルジュナは、シヴァが喜んだことを知り、森の中で願いをかなえると言われたことと、シヴァが直々に姿を見せたことを思い出して、「それが私に実現しますように」と心で祈念した。(七八) シヴァは、それが彼の考えだと知り、喜んでそれをかなえた。そしてその恐るべきパーシュパタ〔の武器〕と、彼の誓約の実現を授けた。(七九) 無敵のアルジュナは身の毛を立てて〔喜び〕、目的は成就したと考えた。アルジュナとクリシュナは喜んで、頭を下げてマヘーシュヴァラ（シヴァ）に敬礼した。(八〇) アルジュナとクリシュナの両雄は、即座にシヴァに別れを告げ、最高に喜んで自分たちの宿舎に着いた。ジャンバ（悪魔の名）を殺すことを望む、喜ぶインドラとヴィシュヌのように。(八一)

（第五十七章）

戦闘準備を整えたアルジュナ

サンジャヤは語った。——

王よ、クリシュナとダールカとが語っている間にその夜は過ぎた。そして王（ユディシティラ）は目を覚ました。(一) パーニスヴァニカ、マーガダ、マドゥパルキカ（演奏者、吟誦者の類）が吟誦し、ヴァイターリカやスータ（吟誦詩人の類）がその人中の雄牛を讃えた。(二) 舞踊家は踊り、甘い声の歌手はクルの家系を讃える内容の甘美な歌を歌った。(三) ムリダンガ、ジャルジャラ、ベーリ、

パナヴァ、アーナカ（いずれも太鼓の種類）、ゴームカ（角笛？）、アーダンバラ（ラッパ、または太鼓）、法螺貝、大きな音の太鼓。（四）バーラタよ、よく訓練された巧みな人々が、喜んで、以上の、そしてその他のすべての楽器を演奏した。（五）雷雲のように響くその大きな音は天に届いた。そしてそれは、眠っている最高の王ユディシティラを目覚めさせた。（六）高価な最高の寝台に安楽に眠っていた彼は目覚め、立ち上がって、必要な日課をするために浴室に行った。（七）それから、沐浴し、白衣を着た、百八人の若い沐浴係りの者たちが、水に満ちた金の瓶で彼に奉仕した。（八）彼はすばらしい座席に安楽に座り、薄衣をまとい、加持された、栴檀を含んだ水により沐浴をした。（九）よく訓練された力の強い男たちが、〔種々の薬草の〕煎じ汁で彼を洗った。そして彼は、よい香りのする清めの水で沐浴した。（一〇）その強力な王は、黄色い栴檀香を身体に塗り、花輪をかけ、汚れない衣服を着て、東方を向いて合掌して立った。（一一）そしてユディシティラは善き人々の道に従って念誦した。それから彼は恭しく火が燃え上がる火室に入った。（一二）呪句（マントラ）で清められた神聖な供物で、燃え上がる火を崇拝してから、彼はその室から出た。（一三）それから人中の虎である王はそこを出て、第二の室において、ヴェーダを知るバラモンの雄牛たちに会った。（一四）彼らは自制し、ヴェーダと誓戒と沐浴を実践し、祭祀の最後の沐浴をしていた。彼らは千人の従者をともなう、八千人の太陽信者（サウラ）であった。（一五）強力なユディシティラは汚れのない花々、蜂蜜と醍醐（サルピス）、非常にめでたい最高の果実を与えて彼らに発声させた。（一六）それから彼は、バラモン一人一人に対し一ニシュカ（貨金）と、飾られた百頭の馬、衣服、その他の望まれた謝礼を与えた。（一七）ユディシティラはまた、金の角を持ち、銀の蹄を持つ、茶色の乳牛を雄牛とともに謝礼として与えた。（一八）スヴァスティカ（卍形の品物）、ヴァルダマーナ（図形の一種、またはその形の器）、ナンディアーヴァルタ（図形の一種、またはその形の器）、花輪、水瓶、燃火、満水の傷のない器、輝かしい首飾り、美しく飾られた美しい娘たち、凝乳（ダディ）と醍醐（サルピス）と蜜と水、めでたい鳥類、その他の貴いもの。ユディシティラはそれらを見て触れ、それから外の室に行った。（一九―二二）

それから、強力な彼に仕える従者たちが方形をした（サルヴァトーバドラ）黄金の最高の座席を運んで来た。それは真珠と瑠璃で飾られ、最上の敷物でおおわれ、豪華なカバーでおおわれていた。それはヴィシュヴァカルマン（一切造者）に作られた神聖な座席であった。（二二―二三）偉大な彼がそこに座った時、召使たちがありとあらゆる輝かしい高価な品を運んで来た。（二四）大王よ、偉大なユディシティラが装飾品と衣服を身につけた時、彼の容貌は敵の悲しみを増大させるものであった。（二五）金の柄のついた、月光のように白い払子（ほっす）で扇がれて、彼は稲妻の光る雲のように輝いていた。（二六）吟誦者（スータ）たちはユディシティラを讃え、崇拝者（バンディン）たちは敬意を表した。ガンダルヴァたちは彼のために歌った。（二七）崇拝者たちの音声と、戦車の車輪の音と、騎馬の蹄の音は、たちまち大きくなった。（二八）象の鈴の音、法螺貝の音、人々の足音が、大地を震動させた。（二九）それから門衛が王の居間に来て、両膝で地面に立って、敬うべき王に対し頭を下げて挨拶した。（三〇）その門衛は若くて、耳環をつけ、刀を帯び、鎧を着ていた。彼は頭を下げて偉大なダルマの息子に敬礼し、クリシュナが来たことを告げた。（三一）人中の虎はクリシュナを歓迎し、「もてなしの品々と最高に飾られた座席をお出しし

ろ」と命じた。(三二) それからクリシュナを招き入れ、最上の座席に座らせ、敬意を表した。そして彼からも敬意を表されて、ユディシティラは彼にたずねた。(三三)

(第五十八章)

ユディシティラは言った。

「マドゥスーダナ(クリシュナ)よ、快適に夜を過ごされたか。不滅の人よ、あなたの知識はすべて清明であるか。(一)」

サンジャヤは語った。——

クリシュナも同様のことをユディシティラにたずねた。それから侍従は、臣下たちがやって来たことを告げ知らせた。(二) そして王に許可されて、彼は人々を入らせた。すなわち、ヴィラータ、ビーマセーナ、ドリシタデュムナ、サーティヤキ、シカンディン、双子(ナクラとサハデーヴァ)、チェーキターナ、ケーカヤたち、クル族のユユツ、パーンチャーラのウッタマウジャスたちである。(三—四) 彼らとその他多くの王族たちが、その偉大な王族の雄牛に近づき、それぞれの席に座った。(五) 光輝に満ちた偉大で強力なクリシュナとユユダーナ(サーティヤキ)との両雄は、一つの座席に座った。(六) それからユディシティラは、彼らの聞いている中で、蓮の眼のクリシュナに優しい声で告げた。(七)

「神々がインドラに依存するように、我々はただあなた一人に依存して、戦いにおける勝利

と、永遠の幸福を求めています。(八) クリシュナよ、実にあなたは、我々が王国を失ったこと、敵たちにより追放されたこと、我々の様々な艱難辛苦をすべて知っている。(九) 一切の主よ、信者を愛する者よ、マドゥスーダナよ、我々すべての幸福と営みはすべてあなたに依存しています。(一〇) そこでクリシュナよ、私の心が常にあなたにあるようにして下さい。そして、アルジュナが求める誓約が実現するようにして下さい。(一一) あなたは今、この苦悩と怒りの大海を渡らせて下さい。今日、渡ることを望む我々の舟になって下さい。マーダヴァよ。(一二) クリシュナよ、御者であるあなたが努力して行なうような働きを、カールタヴィーリヤのような戦士でさえも戦いにおいてなすことはできないから。(一三)」

ヴァースデーヴァは言った。

「神々を含む全世界において、プリターの息子アルジュナのような弓取りは他に誰もいない。(一四) 彼は気力をそなえ、武器に通達し、勇猛で強力である。戦いに酔い、常に怒り、最高の威光をそなえている。(一五) 彼は若く、雄牛のような肩をし、長い腕で強力である。獅子や雄牛のように歩み、栄光ある。彼はあなたの敵たちを殺すであろう。(一六) 私としては、アルジュナが燃え上がる火のようにドゥルヨーダナの兵士たちを燃やすように取り計らうであろう。(一七) 今日、アルジュナは矢により、あのアビマニユを殺した卑しい悪党を、二度と見られない道に送るであろう。(一八) 禿鷲、鷹、鳶、ジャッカル、及びその他の人食いの者たちが、今日、彼の肉を食うであろう。(一九) もしインドラを含むすべての神々が彼を守護しても、彼は今日、激戦において殺されて、ヤマ(閻魔)の王都に達するであろう。(二〇) ア

ルジュナは今日、シンドゥ国王を殺してあなたのもとに帰るであろう。王よ、成功をめざして、悲しみと苦熱を離れよ。（二二）」

（第五十九章）

サンジャヤは語った。――

彼らがそのように話していた時、バラタの最上者である王と友の群に会いたいと望んで、アルジュナが現われた。（一）アルジュナがすばらしい部屋に入って、前に立った時、パーンダヴァの雄牛は立ち上がり、愛情をこめて彼を抱きしめた。（二）そして頭に接吻してから腕で抱きしめ、最高の祝福を述べ、微笑して彼に言った。（三）

「アルジュナよ、疑いもなく戦いにおいてお前の大勝利は確実である。というのは、お前の顔色は上々であり、クリシュナは満足しているから。（四）」

するとアルジュナは、最高の大奇蹟を彼に告げた。

「あなたに幸いあれ。私はクリシュナの恩寵によりすばらしいことを見ました。（五）」

それからアルジュナは、新しい人々を元気づけるために、シヴァと会ったことを見た通りに話した。（六）するとすべての人々は驚嘆し、頭を地面につけ、シヴァに敬礼して、「すばらしい、すばらしい」と言った。（七）それからすべての親しい人々は、ダルマの息子の許しを得て、武装を完備し、喜び勇んで戦いに出かけた。（八）ユユダーナ（サーティヤキ）、クリシュナ、アルジュナたちは、王に挨拶してから、ユディシティラの宿舎から喜んで出て行った。（九）無敵のサーティヤキとクリシュナの両雄は一つの戦車に乗り、そろってアルジュナの宿舎に行った。（一〇）そこでクリシュナは御者のように、猿の雄牛（最高の猿）の旗標のある、最高の戦士の戦車の戦闘準備を整えた。（一一）その雷雲のような音を響かせ、融けた金のように輝く最高の戦車は整備されて、朝日のように輝いた。（一二）それから、準備を整えた人中の雄牛は、アルジュナの前に行き、朝の日課を終えたアルジュナに戦車の準備が整ったことを告げた。（一三）この世界における最高の人アルジュナは、黄金の鎧をまとい、弓矢を持ち、その乗物を右まわりにまわった。（一四）それから、学術と年齢の点で長老の、祭式を正しく行なう、感官を制御したバラモンたちに勝利の祈りで祝福されながら、彼は大きな戦車に、前もって戦勝の呪句（マントラ）により加持された最高の戦車に乗った。太陽が東山（ウダヤ）に昇るように。（一五―一六）黄金におおわれた最高の戦士は、黄金の戦車の上で、光り輝く汚れない太陽がメール山で輝くように輝いていた。（一七）サーティヤキとクリシュナもアルジュナに続いて戦車に乗った。あたかもアシュヴィン双神が、シャリヤーティ王の祭祀に行くインドラに続いて戦車に乗るように。（一八）そこで最高の御者クリシュナは手綱をとった。ヴリトラを殺しに行くインドラのために、マータリが手綱をとるように。（一九）かくて敵の群を殺すアルジュナは、シンドゥ国王を殺すことを望み、彼ら二人とともに最高の戦車に乗って進軍した。月がブダ（木星）とシュクラ（金星）とともに闇を滅しつつ進むように。インドラがターラカ（悪魔の名）を滅ぼす戦いにおいて、ヴァルナとミトラとともに進軍したように。（二〇―二一）それから吟誦者（スータ）と讃嘆者（マーガダ）たちは、楽器の音により、吉祥の讃歌により、進んで行くアルジュナを讃えた。（二二）戦勝を

祈り、その日の幸を祈る吟誦者や讃嘆者たちの音声は、楽器の音と混じり、勇士たちを喜ばせた。(二三) 神々しい香を運ぶ清らかな風がアルジュナの後ろから吹いた。彼を喜ばせ、敵を悲しませつつ。(二四) そしてパーンダヴァ軍の多くの勝利の前兆と、あなたの軍の敗北の前兆が現われた。わが君よ。(二五) アルジュナは勝利の前兆を見て、右にいる勇士サーティヤキに告げた。(二六)

「ユユダーナよ、今日の戦いにおいて私の勝利は確実のように見える。これらの前兆が認められるから。シニの雄牛よ。(二七) そこで私は、シンドゥ国王がいる場所に行くであろう。奴はヤマ（閻魔）の世界に行きたいと望み、私の力を待っている。(二八) シンドゥ国王を殺すことが私の最高の義務であり、同様に、ダルマ王を守ることが最高の義務である。(二九) 勇士よ、そこであなたは今日、王を守れ。私が王を守るように、あなたも王を守るべきである。(三〇) 私はあなたと勇士プラデュムナを信頼して、安心してシンドゥ国王を殺すことができる。人中の雄牛よ。(三一) サーティヤキよ、私に心配することはまったくない。あなたは全身全霊で王のみをよくよく守れ。(三二) 勇士クリシュナが立ち、私がいる所では、必ずや、何も滅びることはない。(三三)」

敵を殺すサーティヤキはアルジュナにこのように告げられて、「承知した」と言って、ユディシティラ王のいる所に行った。(三四)

（第六十章）

(69) ジャヤドラタの死（第六十一章―第百二十一章）

ドリタラーシトラの大きな罪

ドリタラーシトラは言った。

「アビマニユが死んだ翌日、彼らは悲嘆に暮れて何をなしたか。そして我々の軍のいかなる人々がそこで戦ったか。(一) わがクル軍はあのアルジュナの働きぶりを知りながら、あのような罪悪をした後で、どうして恐れなかったのか。言ってくれ。(二) あの人中の虎が、息子の死を嘆き、怒って死神のようにやって来るのを、彼らはどのようにして戦場で見ることができたか。(三) 猿王の旗標を持つ彼が、息子のことで嘆き、戦場で大弓を揺すっているのを見て、わが軍の兵士たちはどのようにしたか。(四) サンジャヤよ、その戦いにおいてドゥルヨーダナの身に何が起こったのか。今や私には大きな嘆声が聞こえる。喜びの声は聞こえない。(五) シンドゥ国王の宿舎においては、魅力的で耳に快い音声が聞こえていたものだが、それらすべては今や聞こえない。(六) 私の息子たちの宿舎においては、讃えている吟誦者(スータ)と讃嘆者(マーガダ)の群や、舞踊家たちの声が聞こえたが、今はまったく聞こえない。(七) かつて私の耳は〔快い〕音声でいつも鳴り響いていた。今や彼らは嘆いているので、そのような音を発するのを私は聞かない。(八) なあサンジャヤよ、私は信義を守るソーマダッタの宿舎において座っていて、以前は最高の音声を聞いたものだ。(九) ところが今は、功徳のない私は、私の息子たちの宿舎が、活気を失い、苦悩の声がそこで響くのを見る。(一〇) ヴィヴィンシャティ、ドゥルムカ、チトラセーナ、ヴィカルナ、及びその他の私の息子たちの宿舎でも、以前に聞かれたような音声は聞かれない。(一一) バラモンと王族(クシャトリヤ)と実業者(ヴァイシャ)と弟子たちは偉大な射手であるドローナの息子に仕える。彼は私の息子たちの寄る辺である。(一二) 討論、会話、対話により、護摩(ホーマ)、請願、讃歌により、種々の好ましい歌により、彼は昼も夜も楽しんでいる。(一三) 彼は多くのクルとパーンダヴァとサートヴァタの人々に崇敬されている。スータよ、そのドローナの息子の宿舎において、今日は以前のような音声が聞こえない。(一四) 多くの歌手や舞踊家たちが偉大な射手であるドローナの息子に仕えていた。彼らの音声はもう聞かれない。(一五) ヴィンダとウパヴィンダの宿舎や、ケーカヤたちの宿舎では、大きな音声が聞こえていたが、今やそれも聞かれない。(一六) 友よ、常に喜び踊る人々の拍手や歌の大きな音、その音も今はない。(一七) 祭官たちは祭祀を執行して博識なソーマダッタの息子(ブーリシュラヴァス)に仕えていた。彼らの音声も、もはや聞かれない。(一八) ドローナの宿舎においては、いつも弓弦の音、ヴェーダ読誦の音、槍や刀や戦車の音が聞こえた。それも私は聞くことができない。(一九) 諸国の歌や、諸々の楽器の大きな音が聞こえたが、それらの音も今は聞かれない。(二〇)

不滅なるクリシュナが、すべての生類のことを憐れんで和平を望み、ウパプラヴィヤからやって来た時、サンジャヤよ、私は愚かなドゥルヨーダナに言った。

『息子よ、クリシュナを橋渡しとしてパーンダヴァたちと講和せよ。(二一―二二) その時が来たと私は考える。ドゥルヨーダナよ、背いてはならぬ。クリシュナが和平を求め、好意的に語

っているのに、もしお前が拒絶すれば、戦いにおけるお前の勝利はない（異本による）。（二三）』

一切の弓取りの雄牛であるクリシュナは好意的なことを述べたのに、彼はクリシュナを拒絶し、無謀にも彼の意見に従わなかった。（二四）邪悪な彼は、カーラ（時間、破壊神）に引きずられ、私を捨てて、ドゥフシャーサナとカルナの二人の意見に従った。（二五）まことに私は賭博を望まなかった。ヴィドゥラもシンドゥ国王もビーシュマも賭博を望まなかった。（二六）シャリヤ、ブーリシュラヴァス、プルミトラ、ジャヤ、アシュヴァッターマン、クリパ、ドローナたちも賭博を望まなかった。サンジャヤよ。（二七）もし息子がこれらの人々の意見に従っていたら、彼は親類や盟友や親しい人々とともに、恙（つつが）無く長生きしたであろう。（二八）〔私は息子に言った。〕

『パーンダヴァたちは柔和で、優しく話し、親類の間で好ましく語る。良家の生まれで、尊敬され、知性がある。彼らは幸福になるであろう。（二九）法（ダルマ）を求める人は、常にいたるところで幸福を得る。そのような人は死後、幸運と恩寵を得る。（三〇）力をそなえた彼らは大地の半分を享受するに値する。彼らにも海に囲まれた父祖の大地が存する。（三一）パーンダヴァたちは〔統治を〕託されたら法の道にとどまるであろう。わが子よ、我々にはパーンダヴァたちが彼らの言うことを聞く親族がいる。（三二）すなわちシャリヤ、ソーマダッタ、偉大なビーシュマ、ドローナ、ヴィカルナ、バーフリーカ、クリパである。（三三）そしてその他のバラタ族の偉大な長老たちである。友よ、もし彼らがお前のために言えば、パーンダヴァたちはその有益な言葉に従うだろう。（三四）彼らのうちで誰がそれに反することをそなたに言うと思うか。クリシュナは法を捨てないだろう。彼らはすべてお前に従う。（三五）私もまた、あの勇士たちに法にかなう言葉を述べた。彼らはそれに逆らわないだろう。パーンダヴァたちは徳性があるから。（三六）』

サンジャヤよ、私は嘆いて以上のように何度も息子に言ったが、彼は愚かにも私の言うことを聞かなかった。時間の浪費であったと私は思う。（三七）狼腹（ビーマ）、アルジュナ、ヴリシュニの勇士サーティヤキ、パーンチャーラのウッタマウジャス、無敵のユダーマニユ、無敵のドリシタデュムナ、無敵のシカンディン、アシュマカ軍、ケーカヤ軍、ソーマカのクシャトラダルマン、チェーディ国王、チェーキターナ、カーシ国王の息子アビブ、ドラウパディーの息子たち、ヴィラータ、勇士ドルパダ、人中の虎である双子（ナクラとサハデーヴァ）、顧問官であるクリシュナ。（三八―四〇）この世で生きたいと望むいかなる者が彼らと戦えるだろうか。神的な武器を駆使するあの私の敵たちに立ち向かうであろうか（異本による）。（四一）ドゥルヨーダナ、カルナ、シャクニ、第四にドゥフシャーサナ以外は……。他に第五の者を見出すことはない。（四二）彼らの間では、ヴィシュヌが手綱を握って戦車に立ち、武装したアルジュナが戦士である。その彼らには敗北はない。（四三）私のあの嘆きをドゥルヨーダナは覚えていないだろう。実に、人中の虎であるビーシュマとドローナとが倒されたとそなたは私に告げた。（四四）あの予見力のあるヴィドゥラが言った言葉がこのような結果に帰結したのを見て、息子たちは嘆いていると私は思う。（四五）寒季の終わりに、風にかき立てられた大火が乾いた草を焼くように、アルジュナは私の軍隊を焼くであろう。（四六）サンジャヤよ、そなたは語

りが巧みだから、我らにすべてを語ってくれ。方策を用いて夕方にアルジュナに対して罪を犯した後で起こったことを……。友よ、アビマニユが殺された時、そなたたちの心はどのようであったか。(四七) 友よ、アルジュナに対し非常に悪いことをして、戦場でガーンディーヴァ弓を持つ彼の活動に、わが軍の兵たちは耐えることができない。(四八) サンジャヤよ、ドゥルヨーダナとカルナは何をなすべきだと言ったか。そしてドゥフシャーサナとシャクニは。集結した私のすべての息子たちがこのようになった時に……。(四九) 友よ、私の愚かな息子は、貪りに満ち邪悪で、怒りで我を忘れ、王国を望んで迷い、激情に心を乱している。彼の悪しき政策により戦場で起こったこと、彼の悪行と善行とを、サンジャヤよ、私に語ってくれ。(五〇―五二)」

（第六十一章）

サンジャヤは語った。――

おお、私は直接に見ましたから、すべてをあなたに語りましょう。気を確かに持ってお聞きなさい。あなたの罪は大きいですから。(一) 王よ、水が引いた後の築堤のように、あなたの嘆きは無益である。バラタの雄牛よ、嘆いてはなりませぬ。(二) この運命の驚くべき教令は乗り越えがたい。バラタの最上者よ、嘆いてはなりませぬ。これは前もって定められたことです。(三) 実にもしあなたが以前に、ユディシティラとあなたの息子たちとの賭博を禁じていたら、災いはあなたにふりかからなかったであろう。(四) また、戦いの時が来た時、もしあなたが怒った者たちを制止していたら、災いはあなたにふりかからなかったであろう。(五) またもしあなたが以前に、服従しないドゥルヨーダナを捕えようとクル族の人々をうながしていたら、災いはあなたにふりかからなかったであろう。(六) そこでパーンダヴァたちや、すべてのパーンチャーラとヴリシュニの人々や、その他の大勢の人々は、あなたの定見のなさを知るであろう。(七) もしあなたが父親にふさわしい行動をとって、息子を正道にとどめ、法（ダルマ）に従っていたら、災いはあなたにふりかからなかったであろう。(八) あなたはこの世で最も叡知ある人なのに、永遠の法を捨て、ドゥルヨーダナとカルナとシャクニの意見に従った。(九) 私は〔現世的〕利益に専念したあなたの嘆きをすべて聞きました。それは毒の混じった蜜のようなものです。(一〇) 王よ、以前にはクリシュナは、ユディシティラやビーシュマやドローナよりもむしろあなたを尊敬していました。(一一) しかしクリシュナは、あなたが王の法（ダルマ）から堕ちたことを知って以来、あなたをそれほど尊敬しなくなりました。(一二) パーンダヴァたちが乱暴な言葉を言われた時も、あなたは見過ごしていました。息子たちの王権を望むあなたに、その報いがやって来たのです。(一三) 非の打ち所のない人よ、父祖の王国が終わったのです。パーンダヴァたちが勝ち取った大地をあなたが奪った時に。(一四) クル族の王国と名声はパーンドゥによって勝ち取られました。それから、徳行のパーンダヴァたちが更にそれ以上のものを勝ち取りました。(一五) 彼らのそのような働きは、あなたのせいで、すっかり無駄になりました。肉を切望する(貪欲な)あなたのせいで、彼らは父祖の王国から追放されたのですから。(一六) ところが王よ、あなたは戦いの時になって、多くの過失を挙げ

て息子たちを非難する。それは今はよろしくない。（二七）実に王たちは戦場で戦っている時は生命を守ろうとしないものだ。あの王族の雄牛たちは、パーンダヴァ軍に入り込んで戦っている。（二八）クリシュナ、アルジュナ、サーティヤキ、狼腹（ビーマ）の守る軍隊に対し、クル族の人々以外の何人(なんぴと)が戦うことができるか。（二九）アルジュナが戦士で、クリシュナが顧問官で、サーティヤキと狼腹とが守護者である時、死すべき人間であるいかなる弓取りが彼らに対して戦うことができるか。クル族の人々とそれに従う人々を除いて……。（三〇―三二）誠実な諸侯たち、王族の法に専念する勇士たちによってなされ得ること、その限りのことをクル族の人々は行なう。（三三）クル族の雄牛のような勇士たちがパーンダヴァたちとどのように激しい戦いをしたか、それをすべてありのままお聞きなさい。（三四）

（第六十二章）

ドローナによる強力な車陣(シャカタ)

サンジャヤは語った。――

その夜が過ぎた時、最高の戦士ドローナは全軍の布陣を開始した。（一）王よ、怒って猛り立ち、叫び声をあげ、お互いに相手を殺すことを望む者たちの様々な音声が聞こえた。（二）人々は弓を引き、手で弓弦をこすり、息を吐き出して、「今、アルジュナはどこにいる」と叫んだ。（三）ある人々は刀を鞘から抜いて投げ上げた。その刀は美しい柄を持ち、その刃は鋭く、均整がとれ、よく鍛えられ、虚空のようであった。（四）戦いを望む幾千の勇士たちが、剣道と弓道を練習しているのが認められた。（五）また他の人々は、栴檀を塗り黄金と金剛石で飾られた、鈴のついた棍棒を投げて、パーンダヴァたちの行方をたずねていた。（六）他の腕力にあふれた人々は、力に驕り高ぶり、そびえるインドラの旗のような鉄棒により大空を打った。（七）また他の勇士たちは、多彩な花輪で飾られ、戦いを望んで、種々の武器を持ってそこかしこに位置を占めていた。（八）その時、彼らは戦場で、「アルジュナはどこにいる。クリシュナはどこにいる。高慢な狼腹（ビーマ）はどこにいる。彼らの友たちはどこにいる」と呼ばわっていた。（九）

それからドローナは、法螺貝を吹き、自ら馬たちを急がせ、あちこちで兵たちを布陣させて速やかに動きまわった。（一〇）大王よ、戦いに喜ぶすべての兵たちが布陣した時、ドローナはジャヤドラタに告げた。（一一）

「あなたとソーマダッタの息子、勇士カルナ、アシュヴァッターマン、シャリヤ、ヴリシャセーナ、クリパ、及び十万の騎兵、六万の戦車、一万四千の発情した象、二万一千の武装した歩兵は、三里（ガヴューティ）ほどの間で、間隔を置いて私に従って立っておれ。（一二―一四）インドラを含む神々もそこに立っているあなたに対抗できない。いわんやパーンダヴァなどすべて問題ではない。シンドゥ国王よ、安心せよ。（一五）」

シンドゥ国王ジャヤドラタはこのように言われて安心した。彼は勇士たちと、鎧を着て槍を持って身構えて立つ騎兵たちに囲まれ、ガーンダーラ軍とともに進軍した。（一六）王中の王よ、ジャヤドラタの駿馬たちは、すべて吹流し（ヤクの尾でできている）で飾られ、黄金で飾られていた。

それらは七千頭いて、更に二千頭のシンドゥ産の馬たちがいた。(一七)
あなたの息子ドゥルマルシャナは戦おうとして、千五百頭の象とともに軍の先頭に位置していた。それらは発情し、巧みな乗り手に操られ、恐ろしい姿で、鎧をつけ、恐ろしい働きをする象たちであった。(一八―一九) それからあなたの息子のドゥフシャーサナとヴィカルナとは、シンドゥ国王の目的を成就するために、前衛に位置していた。(二〇) ドローナは輪円陣(チャクラ)〔を含む〕車陣(シャカタ)を形成した。それは長さ十二里で、後半部の広さは三里である。(二一) ドローナは自ら、いたるところ種々の勇猛な王たち、戦車兵、騎兵、象兵、歩兵の群を配して布陣した。(二二) その陣形の後半部の内部に非常に難攻の蓮華(パドマ)陣がある。更に蓮華の中央に隠された陣形として針陣(スーチー)がある。(二三)

ドローナはこのように強力な陣形を布(し)いていた。針陣の先のところに勇士クリタヴァルマンが位置していた。(二四) その直後に、カーンボージャの王とジャラサンダがいた。わが君よ。その後に、ドゥルヨーダナとその顧問たちがいた。(二五) そして、針陣を守るために、退くことのない十万の戦士が、すべて車陣のところに布陣していた。(二六) 王よ、彼らの背後に、ジャヤドラタ王が大軍に囲まれて、針の輪(針の目?)のところに位置していた。(二七) 王中の王よ、ドローナは車陣の入口に立っていた。彼の後ろで、ボージャの王が自ら彼を守った。(二八) ドローナは白い鎧と衣服とターバンをつけ、広い胸と大きい腕を持ち、弓を引き絞って、怒った死神(アンタカ)のように立っていた。(二九) 旗がひるがえり、赤い馬たちをつなぎ、祭壇と黒鹿の皮の意匠の旗標のあるドローナの戦車を見て、クル族の人々は喜んだ。(三〇) ドローナにより布かれた、揺れ動く海のような陣形を見て、シッダやチャーラナ(いずれも半神の種類)の群はこの上なく驚いた。(三一) その陣形は、山と海と森をともない、種々の地方に満ちた大地を呑むかのようだと、すべての生類は考えた。(三二) その陣形は多くの戦車、人、馬、歩兵、象を含み、恐ろしい音を響かせ、奇蹟的な形状をし、敵の心を裂くものであった。王(ドゥルヨーダナ)はその強力な車陣が作られたのを見て喜んだ。(三三)　(第六十三章)

クル軍の前衛をうち破るアルジュナ

サンジャヤは語った。――
わが君よ、軍隊は布陣し、雄叫びをあげた。小鼓(ベーリ)が打たれ、太鼓(ムリダンガ)が鳴り響いた。(一) 兵士たちは喜び勇み、楽器の音が響いた。法螺貝が吹かれ、身の毛がよだつ音がした。(二) 戦おうとするバラタ族の人々は徐(おもむろ)に攻撃を開始した。そしてルドラの刻がやって来た時、アルジュナが姿を現わした。(三) バーラタよ、幾千の鳶と鴉とがアルジュナの前方で遊び戯れていた。(四) 恐ろしい叫び声をあげる獣たちや、不吉な外観のジャッカルたちが進軍する我々の右側で吠えていた。(五) いたるところで燃え上がる流星が音をたてて落下した。恐ろしい危機が生じた時、大地全体が震動した。(六) クンティーの息子が戦場に近づいた時、荒々しい暴風が雷をともない、砂利を雨降らせて吹いた。(七) ナクラの息子シャターニーカと、プリシャタの孫ドリシタデュムナとの、叡知ある両者がその時、パーンダヴァ軍を配陣した。

（八）

あなたの息子ドゥルマルシャナは、千の戦車兵、百の象兵、三千の騎兵、一万の歩兵とともに、千五百弓長（距離の単位）の広さの地に、全軍の先頭に立っていた。そして彼は言った。（九―一〇）

「今日、戦いに酔う、ガーンディーヴァ弓を持つアルジュナが〔我々を〕苦しめる時、私は彼を食い止めよう。海岸が海を食い止めるように。（一一）今日、合戦において、猛々しい無敵のアルジュナが専ら私と戦うのを見るがよい。石の堆積が石に衝突するように。（一二）」

大王よ、思慮深い偉大な勇士である彼はこのように告げて立っていた。（一三）一方アルジュナは、怒った死神のようであり、金剛杵を持つインドラのようであり、杖を持つ耐えがたい死神が時間（破壊神）にかりたてられたかのようであった。（一四）槍を持つアクショーヴィヤ（「揺ぎなき者」。ここではシヴァを指すか）、輪縄を持つヴァルナのような彼はまた、宇宙紀の終末の輝く火のように生類を燃やすであろう。（一五）ニヴァータカヴァチャを滅ぼした彼は、忿怒と力により猛り立ち、勝利であり、勝利者であり、真実を守り、大誓戒を成就するであろう。（一六）彼は鎧を着て、刀を帯び、黄金の冠をかぶり、白い花輪（異本による）と衣服をつけ、美しい腕環と耳環をつけている。（一七）ナラ（アルジュナの前身）はナーラーヤナ（クリシュナ）を連れて戦車に乗り、ガーンディーヴァ弓を揺すり、昇る太陽のように戦場で輝いていた。（一八）

その時栄光あるアルジュナは、軍隊の最前線の矢が落下する場所に、準備の整った戦車を停めて法螺貝を吹いた。（一九）わが君よ、クリシュナもまた、落着き払って、アルジュナとともに、最高の法螺であるパーンチャジャニヤを力強く吹き鳴らした。（二〇）王よ、二人の法螺の音により、あなたの軍隊の兵たちは肝をつぶし、総毛立ってふるえ上がった。（二一）すべての生き物が雷鳴により戦くように、あなたの兵たちは法螺の音により戦慄した。（二二）すべての象や馬は大小便を流した。そしてすべての軍隊と象や馬は意気消沈した。（二三）わが君よ、法螺の音により人々は元気をなくし、ある人々は意識を失い、またある人々は恐れおののいた。（二四）それから旗標の中にいる他の動物とともに猿が口を開いて大声で叫び、あなたの兵たちを恐れさせた。（二五）そして、〔わが軍の〕法螺、ペーリ、ムリダンガ、アーナカ（いずれも太鼓の種類）が再び鳴らされて、あなたの兵たちを喜ばせた。（二六）種々の楽器の大きな音、激しい雄叫びと腕をたたく音、挑戦して呼ばわる勇士の獅子吼と楽器の音により、臆病者の恐怖を増大させる非常に騒々しい音がした時、アルジュナはクリシュナに告げた。（二七―二八）

「クリシュナよ、ドゥルマルシャナのいる所に馬たちを急がせよ。あの象隊を破って敵軍に侵入しよう。（二九）」

アルジュナにこのように言われて、勇士クリシュナはドゥルマルシャナのいる所に馬たちを急がせた。（三〇）かくて一騎と大勢との間に、戦車と象と人を滅ぼす非常に恐ろしい激戦が行なわれた。（三一）それからアルジュナは、雨を降らせる雲のように矢の雨を敵に注いだ。雲が山に雨を注ぐように。（三二）手練の業を持つすべての戦士たちは急いで、クリシュナとアルジュナのいる所に矢の群を注いだ。（三三）勇士アルジュナは戦場で敵たちに制止されて

怒り、矢によって戦士たちの頭を胴体から切り取った。(三四) 眼がまわり、唇を嚙みしめた美しい顔（頭）、耳環と冑をつけた顔（頭）により、大地はおおわれた。(三五) 戦士たちの頭は、撒き散らされた蓮花の群のようで、いたるところに散らばって輝いていた。(三六) 王よ、それらは黄金で鮮やかに輝き、血にまみれて、稲妻をともなう雲の群のように見えた。(三七) 王よ、地面に落ちている諸々の頭は音をたてた。それは時がいたって熟して落ちた椰子の実がたてる音のようであった。(三八) それから、ある胴体が弓にすがって立ち上がった。ある胴体は刀を引き抜いて、腕で振り上げて立っていた。(三九) 人中の雄牛たちは、アルジュナに耐えることができず、戦いに勝つことを切望して、自分たちの頭が地面に落ちたのを知らなかった。(四〇)(四一―五四頌)

真昼の太陽が常に生類により見られがたいように、怒ったアルジュナはその戦いにおいて、敵たちに見られがたかった。(五五) 敵を苦しめる者よ、このように戦場で彼の矢に苦しめられたあなたの息子の軍隊は、うち破られ、非常に混乱した。(五六) 雲の群が揺り動かす大風にかりたてられるように、その軍隊は彼にかりたてられて、彼を見ることができなかった。(五七) 突き棒、弓の端、フンという声、巧みな操縦、鞭で背中を打つこと、激しいかけ声により、馬たちをかりたてて、あなたの軍の騎兵や戦車兵や歩兵たちは、アルジュナに苦しめられて、速やかに逃げた。(五八―五九) また他の者たちはアルジュナの矢に惑わされていたが、踵と親指と鉤棒により象たちをかりたてて、彼に向かって突撃した。その時、あなたの戦士たちは、気力も失せ、度を失っていた。(六〇)

（第六十四章）

ドローナの軍陣に突入するアルジュナ

ドリタラーシトラはたずねた。

「軍隊の前衛がアルジュナに破られ殺されていた時、その戦場においていかなる勇士たちがアルジュナに立ち向かったか。(一) あるいは、決意を忘れて、車陣に入り、城壁のようなドローナに依存して、危険のない状態でいたのか。(二)」

サンジャヤは語った。――

このように、あなたの軍がアルジュナにうち破られ、勇士を殺され、気力を失って、逃げ始め、アルジュナに最高の矢で絶えず殺されていた時、その戦場において、誰もアルジュナを見ることができなかった。(三―四) それから王よ、あなたの息子ドゥフシャーサナは自軍がそのような状態であるのを見て、ひどく怒って、アルジュナに戦いを挑んだ。(五) その勇猛果敢な勇士は黄金で多彩な鎧をまとい、黄金の冑をかぶっていた。(六) 大王よ、ドゥフシャーサナは象軍の大軍により大地を呑むかのように、アルジュナを取り囲んだ。(七) 象の鈴の音、法螺の音、弓弦を引く音、象の鳴き声、それらの音により、大地と諸方と空中はすっかりおおわれた。すぐに凄まじい恐怖が生じた。(八) 象たちは鉤棒でかりたてられ、鼻をぶらぶらさせ、翼を持つ山のように怒って襲いかかった。それらを見て、人中の獅子である

アルジュナは、大声で獅子吼し、速やかに敵の象隊を矢で粉砕した。(二〇―二一)風で激しく波立つ大海のような象隊に、アルジュナはマカラ（海豚）のように突入した。(二二)敵の都城を征服するアルジュナは、宇宙紀（ユガ）の終末に、軌道を外れた熱する太陽のように、あらゆる方角に認められた。(二三)馬の蹄の音、車輪の音、叫び声、弓弦の音、デーヴァダッタ（法螺の名）の音、ガーンディーヴァ弓の音により、象たちはすっかりその速度を鈍らせ、肝をつぶした。そしてアルジュナは、毒蛇のような矢により彼らを射貫いた。(二四―二五)それらの象の多くは、戦場において、ガーンディーヴァ弓から発せられた幾千の鋭い矢を全身に受けた。(二六)彼らはアルジュナに撃たれて、最高に大きな叫びをあげて、絶えず大地に倒れた。〔インドラに〕翼を切られた山々のように。(二七)他の象たちは、牙の根もとや額の瘤やこめかみを矢で射られ、クラウンチャ鳥のように何度も嘆声をあげた。(二八)そしてアルジュナは、象の肩にいる人々の頭を真っ直ぐの矢で断ち切った。(二九)地面に落ちる蓮花のような耳環をつけた頭の群により、アルジュナは〔神々に捧げる〕供物を作った。(二〇)(二一―二九略)殺された象や馬、倒れている王族（クシャトリヤ）たちによって、大地は凄まじい様相を呈していた。(三〇)大王よ、このようにドゥフシャーサナの軍隊はアルジュナに攻撃されて苦しみ、指導者とともに逃走した。(三一)ドゥフシャーサナとその軍隊は、矢に苦しめられ、恐れてドローナに救いを求め、車陣の中に逃げ込んだ。(三二)

（第六十五章）

サンジャヤは語った。――

アルジュナはドゥフシャーサナの軍隊をうち破り、シンドゥ国王を求めてドローナの軍陣を襲撃した。(一)彼は陣形の前衛に立つドローナのもとに行き、クリシュナの許可を得て、合掌して次のように言った。(二)

「バラモンよ、私の幸せを祈って下さい。私を祝福して下さい。あなたの恩寵により、私は破りがたい軍陣に入ることを望みます。(三)あなたは私にとって父に等しく、またダルマ王に等しく、クリシュナに等しいです。私はこの真実をあなたに告げます。(四)非の打ち所のない尊師よ、あなたにとってアシュヴァッターマンが守られるべきであるように、常に私も守られるべきです。最高のバラモンよ。(五)私はあなたの恩寵により戦場でシンドゥ国王を殺したいと望みます。最高のバラモンよ、私の誓約を守って下さい。主よ。(六)」

師匠はこのように言われて、微笑して答えた。

「アルジュナよ、私に勝利せずにジャヤドラタに勝利することはできない。(七)」

ドローナは彼にこのように言って笑い、彼と戦車と軍旗と御者に鋭い矢の群を注いだ。(八)そこでアルジュナは、ドローナの矢の群を矢の群で抑止し、恐ろしい形のより強力な矢でドローナを苦しめた。(九)王よ、彼は王族の法（クシャトラダルマ）に立脚して、戦場でドローナに敬意を表してから、九本の矢で彼を射た。(一〇)ドローナは彼の矢を自分の矢で断ち切り、毒や火焔のような矢でクリシュナとアルジュナの両者を射た。(一一)アルジュナは相手の弓を矢で切断することを望んだ。しかし、偉大なアルジュナがそう考えていた時、強力なドローナは動揺

することなく、彼の弓弦を矢で速やかに切った。（一二）そして彼の馬と軍旗と御者を射た。そして笑い、勇士アルジュナに矢を注いだ。（一三）

その間にアルジュナは、大弓に弦を張り、一切の武士のうちの最上者である師匠を凌駕する勢いで、六百本の弓をとって、一本であるかのように速やかに放った。（一四）更に彼は引き返すことのない他の七百本の矢、千本の矢を放ち、更に他の一万本の矢を放って、ドローナの軍隊の兵たちを殺した。（一五）めざましく戦う強力な勇士に見事に矢で射貫かれて、人間と馬と象たちは息絶えて倒れた。（一六）（一七―二一略）

その時ドローナは、敵の生命を食う矢を烈しく放って、アルジュナの胸を撃った。（二二）アルジュナは地震の時の山のように全身をふるわせたが、平静さを取りもどし、ドローナを矢で射た。（二三）一方ドローナは、五本の矢でクリシュナを射た。そして七十三本の矢でアルジュナを射て、三本の矢で彼の旗を射た。（二四）王よ、それから勇猛なドローナは、弟子（アルジュナ）を凌駕して、瞬時のうちに、矢の雨によりアルジュナを見えなくした。（二五）我々は絶えず落下するドローナの矢を見た。そして円形に引き絞られた彼の驚異的な弓を見た。（二六）王よ、ドローナが放つ、鷺(カンカ)の羽根のついた非常に多くの矢が、戦場でクリシュナとアルジュナとに飛来した。（二七）その時、ドローナとアルジュナとのそのような戦いを見て、大知者クリシュナはなすべきことについて考えた。（二八）そこでクリシュナはアルジュナに告げた。

「アルジュナよ、勇士アルジュナよ、我々は時間を無駄にしてはいけない。（二九）ドローナを捨てて行こう。もっと重要な仕事がある。」

アルジュナもまた「ケーシャヴァよ、あなたの望むようにしよう」とクリシュナに言った。（三〇）それから勇士アルジュナはドローナを右まわりにまわって敬意を表してから進んで行った。かくてアルジュナは矢を放ちながら退却した。（三一）そこでドローナは笑って言った。

「アルジュナよ、汝は今どこへ行くのか。汝は戦場で敵をうち破らずして引きあげないのではないか。（三二）」

アルジュナは言った。

「あなたは私の師である。私の敵ではない。私はあなたの息子に等しい。それに、この世で戦いにおいてあなたをうち破れる男はいない。（三三）」

サンジャヤは語った。――

勇士アルジュナはこのように言いながら、ジャヤドラタを殺すことを切望し、急いでその軍隊に近づいた。（三四）彼があなたの軍に入る時、パーンチャーラの偉大なユダーマニユとウッタマウジャスとが、彼の車輪の守護者として彼について行った。（三五）大王よ、それからジャヤ、サートヴァタのクリタヴァルマン、カーンボージャの王、シュルターユスが、アルジュナを制止した。（三六）彼らに従う一万の戦士たちがいた。アビーシャーハ、シューラセーナ、シビ、ヴァサーティ、マーチェーッラカ、ラリッタ、ケーカヤ、マドラカ、ナーラーヤナ・ゴーパーラ、カーンボージャの種々の部族(ガナ)。（三七―三八）これらは以前、戦いにおいて

カルナによって征服された。勇士の誉れ高い彼らは、ドローナを先頭として、生命を捨ててアルジュナに対抗した。(三九) そのアルジュナは、息子を殺された悲しみに苦しみ、怒り、世界を滅ぼす死神のようであった。彼は激戦で生命を捨てる覚悟をし、めざましく戦う。(四〇) 彼は群の長である象のようにわが軍に入り込んだ。その勇猛な勇士である人中の虎を制止したのであった。(四一) それから、お互いに挑み合う戦士たちとアルジュナとの間に、身の毛がよだつ激戦が行なわれた。(四二) その人中の雄牛がジャヤドラタを殺すことを望んで進撃した時、彼らは結束して彼を制止した。治療が盛んになる病を食い止めるように。(四三)

（第六十六章）

サンジャヤは語った。——

大なる力と勇猛さをそなえた最高の戦士アルジュナは、彼らに食い止められ、またドローナに急追されていた。(一) しかしアルジュナは、太陽が自らの光線を注ぐように鋭い矢の群を注ぎ、その軍隊を苦しめた。病の群が身体を苦しめるように。(二) 馬は貫かれ、旗は切られ、象は乗り手もろとも倒れた。傘は断たれ、戦車は車輪を失った。(三) 矢に苦しんだ兵士たちは、いたるところ逃げまわった。このように激戦が行なわれ、何も見分けられなかった。(四) 王よ、彼らが戦場でお互いに矢で攻撃し合っている間に、アルジュナは絶えず敵軍を戦慄させた。(五) 白馬にひかれる、約束を固く守るアルジュナは、誓約を守ろうと望んで、赤

い馬にひかれる最高の戦士（ドローナ）に襲いかかった。(六) 師匠であるドローナは、二十五本の急所を断つ矢で、弟子である勇士を苦しめた。(七) 最高の戦士アルジュナは、敵の矢の勢いを殺ぐ矢を放ちながら、速やかに彼に襲いかかった。(八) 彼が速やかに諸々の矢を放った時、その限りなく高邁な男はそれらに対して、ブラフマ・アストラ（梵天の武器）の呪文を唱えつつ、真っ直ぐの矢を射返した。(九) 我々はその戦いにおいて、ドローナの驚異的な名人芸を見た。若いアルジュナがいくら努力しても、彼を射貫けなかったのである。(一〇) 大雲が大雨を降り注ぐように、ドローナという雲はアルジュナという山に幾千の矢の雨を降らせた。(一一) わが君よ、威光あるアルジュナはその矢の雨をブラフマ・アストラによって受け止めた。諸々の矢で諸々の矢を無効にして。(一二) 一方ドローナは二十五本の矢でアルジュナを苦しめた。そして七十本の矢でクリシュナの両腕と胸を射た。(一三) しかし英邁なアルジュナは笑って、鋭い矢を洪水のように放つ師匠を戦場において食い止めた。(一四)

さて、二人の最高の戦士は、ドローナに攻撃されつつも、その宇宙紀（ユガ）の終末の火のように立ちはだかる無敵の男を敬遠した。アルジュナはドローナ師が放つ鋭い矢を避けて、ボージャ軍を攻撃した。(二五―二六) 彼はマイナーカ山のようなドローナを避けて、クリタヴァルマンとカーンボージャのスダクシナの間に入って進撃した。(二七) クルの最上者よ、無敵のボージャの王（クリタヴァルマン）は動揺することなく、鷺（カンカ）の羽根のついた十本の矢でその人中の虎を速やかに射貫いた。(二八) 王よ、アルジュナは戦場において鋭い矢で彼を射貫いた。そして更に、他の三本の矢でそのサートヴァタの王を茫然とさせた。(二九) しかしそのボージャの王は笑

って、アルジュナとクリシュナの一人一人に、二十五本の矢を注いだ。(二〇) アルジュナは彼の弓を切ってから、七十三本の矢で彼を貫いた。それらの矢は火焔のようであり、怒った毒蛇のようであった。バーラタよ。(二一) それから勇士クリタヴァルマンは他の弓をとり、五本の矢で相手の胸を射た。(二二) そして更に、五本の鋭い矢でアルジュナを射貫いた。アルジュナは九本の矢で彼の胸の中央を射た。(二三) アルジュナがクリタヴァルマンの戦車に釘付けになっているのを見て、クリシュナは時間を無駄にすべきではないと考えた。(二四) そこでクリシュナはアルジュナに告げた。

「クルの縁者であるからといって、クリタヴァルマンに哀れみをかけてはいけない。彼を粉砕して殺せ。(二五)」

そこでアルジュナは矢でクリタヴァルマンを惑わせて、高速の馬たちにより、カーンボージャの軍に向かって行った。(二六)(二七—三四略)

次々と殺されるクル族の勇士たち

このように進撃するアルジュナを見て、勇士であるシュルターユダ王は非常に怒り、大弓を揺すってアルジュナを攻撃した。(三五) 彼は三本の矢でアルジュナを、七十本の矢でクリシュナを苦しめた。そして彼は、非常に鋭い馬蹄形の先の矢でアルジュナの旗を撃った。(三六) アルジュナは大いに怒り、九十本の真っ直ぐの矢で彼を射た。突き棒で巨象を打つように。(三七) 王よ、彼はアルジュナの勇武に我慢できなかった。そこで彼はアルジュナに向けて七十七本の矢を放った。(三八) アルジュナは彼の弓を切ってから、その箙を断ち、怒って七本の真っ直ぐの矢で彼の胸を射た。(三九) そこで王は他の弓をとって、怒りにかられて、九本の矢でアルジュナの両腕と胸を射た。(四〇) それから敵を制するアルジュナは笑って、幾千本の矢でシュルターユダを苦しめた。バーラタよ。(四一) そしてその強力な勇士は、速やかに彼の馬たちと御者を殺し、更に七十本の矢で彼を射貫いた。(四二) 強力なシュルターユダ王は、戦場で馬たちを殺された戦車を捨てて、棍棒を振り上げてアルジュナに襲いかかった。(四三)

その勇猛なシュルターユダ王はヴァルナ(水天)の息子であった。冷たい水をたたえる大河パルナーシャーが彼の母であった。(四四) 王よ、彼の母は息子のためにヴァルナに頼んだ。

「私の息子がこの世で敵に殺されないものになりますように。(四五)」

ヴァルナは喜んで告げた。

「私は願いをかなえ、彼に神的な武器を与えよう。それにより、お前の息子は殺されないものになるであろう。(四六) しかし人間が死なないということは決してない。生まれた者はすべて必ず死ななければならぬ。最高の川よ。(四七) 彼は戦いにおいてこの武器の威力により、常に敵に破られない者になるであろう。お前の心の熱がなくなるように。(四八)」

ヴァルナはこう言って、呪句(マントラ)とともに棍棒を与えた。シュルターユダはそれを得て、全世界において無敵になった。(四九) しかし尊い水の主(ヴァルナ)は更に彼に告げた。

「その棍棒を戦わない者に放ってはならぬ。もし放てば、それはまさにお前に落下するであろう。(五〇)」

ところが彼は、その勇士を殺す棍棒を投じてクリシュナを撃ったのである。強力なクリシュナは逞しい肩でそれを受け止めた。(五一)風がヴィンディヤ山を揺るがさないように、それはクリシュナを揺るがすことはなかった。強力な棍棒はシュルターユダの方にもどって来た。〔黒魔術で〕誤って操縦された妖女(クリティヤー)が〔呪術師の方を害する〕ように。(五二)その棍棒は立っている短気な勇士シュルターユダを殺した。それは勇士シュルターユダを殺してから大地に落下した。(五三)敵を制するシュルターユダが自分の武器で殺されたのを見て、兵士たちの間に「ああ、ああ」という大声があがった。(五四)王よ、シュルターユダは戦わないクリシュナにその棍棒を投じたから、それ故それは彼を殺したのである。(五五)ヴァルナが告げた通りになって、彼はその戦いにおいて死んだ。すべての弓取りたちが見ている前で、息を引き取って大地に倒れた。(五六)パルナーシャーの愛しい息子は、倒れながらも、風に倒された多くの枝を持った大樹のように輝いていた。(五七)敵を滅ぼすシュルターユダが殺されたのを見て、すべての兵士たちとすべての主要な軍隊は逃走した。(五八)

それから、カーンボージャの王子である勇士スダクシナは、駿馬によって、敵を殺すアルジュナに向かって行った。(五九)アルジュナは彼に対し七本の矢を放った。パーラタよ。それらの矢はその勇士を貫通して地面に入った。(六〇)スダクシナは戦場でガーンディーヴァ弓に放たれた鋭い矢でひどく射貫かれたが、鷺(カンカ)の羽根のついた十本の矢でアルジュナを射た。(六一)そしてクリシュナを三本の矢で射てから、更にアルジュナを五本の矢で射た。わが君よ、アルジュナは彼の弓を断ち切ってから、旗を切った。(六二)そしてアルジュナは、非常に鋭い二本の半月形の先の矢で彼を射貫いた。しかし彼は、三本の矢でアルジュナを射貫いてから、獅子吼をした。(六三)そして勇士スダクシナは怒り、鈴のついたすべて鉄製の恐ろしい槍をアルジュナに投じた。(六四)大流星のように燃え上がる、火花を放つその槍は、勇士アルジュナに達して貫通し、地面に落下した。(六五)しかし考えられないほど勇猛なアルジュナは、鷺の羽根のついた十四本の矢で相手と馬と旗と弓と御者を射て、そして他の多くの矢で戦車を粉砕した。(六六)カーンボージャの王子スダクシナの願望と勇武は空しくなり、アルジュナは広い刃を持つ矢で彼の心臓を断ち切った。(六七)その勇士は急所を断たれ、その肢体はぐったりし、王冠と腕環は落ち、装置から解かれた〔インドラの〕旗(七・六八・六五参照)のように仰向けに倒れた。(六八)山の頂に生ずる美しいカルニカーラ、美しい枝を持ち、しっかりと立つカルニカーラが、冬が過ぎた時(寒季)に、風で折られたように、敷布に寝るにふさわしいカーンボージャの王子は、殺されて大地に横たわっていた。ハンサムで、赤い眼をしたカーンボージャの王子スダクシナは、アルジュナにより矢で殺された。(六九—七〇)シュルターユダとカーンボージャのスダクシナが殺されたのを見て、あなたの息子のすべての軍は逃走した。(七一)

サンジャヤは語った。——(第六十七章)

王よ、勇猛なスダクシナとシュルターユダが殺された時、怒ったあなたの兵士たちは速やかにアルジュナを攻撃した。（一）王よ、それからアビーシャーハ、シューラセーナ、シビ、ヴァサーティの軍は矢の雨をアルジュナに浴びせた。（二）アルジュナは彼らのうちの六百の高貴な人々を矢で粉砕した。小動物が虎を恐れるように彼らは恐れて逃げ出した。（三）彼らは再び引き返して、戦場で敵に勝利しようと欲し、好敵手を殺しているアルジュナを、ぐるりと取り巻いた。（四）彼らが襲来した時、アルジュナは速やかに、ガーンディーヴァ弓から放った矢で頭と腕を切り落とした。（五）そこに落ちた頭により大地は隙間がなくなった。そしてその戦場で、鴉と禿鷲と鳶により大地は雲におおわれたように陰った。（六）シュルターユスとアチユターユスは、彼らが滅ぼされた時、怒りと怨みにかられ、アルジュナに対して戦いを挑んだ。（七）競い合う強力な二人の勇士、良家の生まれで強腕の両者は、左右から彼に矢の雨を浴びせた。（八）大王よ、その二人の弓取りは大きな名声を求め、あなたの息子のために、急いでアルジュナを殺すことを望んだ。（九）二人は怒って、真っ直ぐの千本の矢でアルジュナをおおった。雲が池を〔雨で〕おおうように。（一〇）それから怒った最高の戦士シュルターユスは、よく鍛えられた鋭い槍を投じてアルジュナを撃った。（一一）敵を苦しめるアルジュナは、その戦いにおいて強力な敵により手ひどく傷つけられて完全に失神し、クリシュナを当惑させた。（一二）

まさにその時、勇士アチユターユスは、非常に鋭い槍でアルジュナを撃った。（一三）彼は偉大なアルジュナの傷口に塩を塗ったのである。アルジュナの方は手ひどく傷つけられて、

旗竿に寄りかかった。（一四）王よ、それからあなたのすべての軍に大きな獅子吼があがった。アルジュナが殺されたと考えたのである。（一五）クリシュナもアルジュナが失神したのを見て非常に心配し、快い言葉でアルジュナを元気づけた。（一六）それからその的を外さぬ二人の最高の戦士は、矢の雨により、戦場でアルジュナとクリシュナを、戦車と車輪と轅、馬と旗と幡もろとも、すっかり見えなくした。（一七―一八）

さてバーラタよ、アルジュナは死王の都に達して再びもどって来たかのように、次第に意識を取りもどし、クリシュナと戦車が矢の網でおおわれ、燃える火のような二人の敵が面前にいるのを見た。（一九―二〇）それから勇士アルジュナは、シャクラ（インドラ）の武器を出現させ、それにより真っ直ぐの千本の矢を放った。（二一）それらの矢は、相手の二人の勇士と、彼らに放たれた矢を破壊した。アルジュナの矢に断ち切られたそれらの矢は空中で飛び散った。（二二）

アルジュナは矢の勢いにより速やかにそれらの矢を撃退してから、あちこちで勇士たちと戦いながら進んで行った。（二三）シュルターユスとアチユターユスは、アルジュナの矢の洪水により両腕と頭を落とされ、風に倒された二本の木のように地面に倒れた。（二四）シュルターユスとアチユターユスの死は、まるで海が干涸びたような〔驚くべき〕ことで、世の人々を驚かせた。（二五）アルジュナは更にその二人に従う五十名の戦士を殺してから、バラタ族の軍隊の主立った人々を次々と殺しながら進んで行った。（二六）

シュルターユスとアチユターユスとが殺されたのを見て、バーラタよ、その二人の息子で

ある最高の人、アユターユスとディールガーユスとは怒り、父の災難に嘆き、種々の矢を注ぎながらアルジュナを襲撃した。(二七―二八) アルジュナは最高に怒り、少しの間に、真っ直ぐの矢で彼ら二人をヤマ(閻魔)の住処に送った。(二九) 象が蓮池をかき乱すように、アルジュナが敵軍をかき乱していた時、王族の雄牛たちは誰もアルジュナを制止することができなかった。(三〇) しかしアンガ軍が象の群によってアルジュナを取り囲んだ。王よ、怒った幾千の象の乗り手たちは訓練を積んでいた。(三一) 東部、南部の王たち、カリンガ国王をはじめとする王たちも、ドゥルヨーダナに指示され、山のような象によって〔アルジュナを取り囲んだ〕。(三二) 彼らが襲来した時、アルジュナはガーンディーヴァから放たれた恐ろしい(異本による)矢により、速やかに彼らの頭と美しく飾られた腕を断ち切った。(三三) 大地はそれらの頭でおおわれ、腕環をした腕によりおおわれ、蛇におおわれた金の石のように輝いていた。(三四) 矢で断ち切られた腕、切られて落ちた頭は、樹木から落ちた鳥たちのようであった。(三五) 矢で射貫かれた幾千の象は血を流し、その時期(雨季)に赤いチョークの液を流す山々のように見えた。(三六) その他、象の背に乗る種々に異様な姿をした蛮族(ムレーッチャ)たちは、アルジュナの鋭い矢で殺されて横たわっていた。(三七) 王よ、様々な衣裳をまとい、様々な武器の群に囲まれた彼らは、多彩な矢により殺されて、血まみれの体で輝いていた。(三八) 幾千の象は、乗り手や足もとに従う兵たちとともに、アルジュナの矢に撃たれ、身体の部分を切られ、血を吐いていた。(三九) 他の象たちは叫び、倒れ、諸方をうろついた。象たちはひどく恐れ、多くの味方の軍を踏みつぶした。(四〇) (四〇の最後から五五まで略)

アルジュナは怒り、金剛杵(ヴァジュラ)のような矢で大地を血まみれにして、バラタ族の軍に侵入した。アンバシタの王シュルターユスは、進撃する彼を制止した。(五六) アルジュナは鷲(カンカ)の羽根のついた鋭い矢で、奮闘する相手の馬を速やかに倒した。わが君よ。そして他の矢で相手の弓を切って、アルジュナは更に進んで行った。(五七) 一方、アンバシタの王は、怒りに満ちた眼をして棍棒を持ち、戦場で、アルジュナと勇士クリシュナに襲いかかった。(五八) バーラタよ、それからその勇士は笑い、棍棒を振り上げて戦車を制止して、棍棒でクリシュナを撃った。(五九) バーラタよ、敵の勇士を殺すアルジュナは、クリシュナが棍棒で撃たれたのを見て、アンバシタの王に対しこの上なく怒った。(六〇) それから彼は戦場で、金色の羽根を持つ矢で、棍棒を持つ最高の戦士をおおった。雲が昇った太陽をおおうように。(六一) それからアルジュナは、他の矢で、その偉大な相手の棍棒を粉砕した。それは奇蹟のようであった。(六二) シュルターユスはその棍棒が落ちたのを見て、別の大きな棍棒をとり、アルジュナとクリシュナを繰り返し撃った。(六三) アルジュナは二本の馬蹄形の先の矢を用い、棍棒を持つ相手のインドラの旗のような形の両腕を切り取った。そして他の矢で彼の頭を断ち切った。(六四) 王よ、彼は殺されて、地響きをあげて大地に倒れた。それはあたかも、インドラの旗が放たれ、装置から束縛を解かれて〔倒れる〕かのようであった(七・六七・六八参照)。(六五) アルジュナは戦車隊に侵入し、幾百の象や馬に囲まれ、太陽が雲におおわれるかのように見えた。(六六)

(第六十八章)

ドローナ、ドゥルヨーダナに神聖な鎧を着せる

サンジャヤは語った。――

かくてアルジュナはシンドゥ国王を殺そうと望み、渡りがたいボージャの軍を破って、ドローナの軍に侵入した。(一)王よ、アルジュナはカーンボージャの王の後継ぎであるスダクシナを殺し、勇猛なシュルターユダを殺した。(二)うち破られたあなたの軍はいたるところで逃走した。その時、あなたの息子は自軍がうち破られたのを見て、ドローナの所へ行った。(三)ただ一騎で急いで行って、彼はドローナに告げた。

「あの人中の虎は、この大軍を粉砕して行った。(四)この恐ろしい殺戮において、アルジュナを殺すために、今後どのようにしたらよいか、よくよく考察して下さい。(五)あの人中の虎であるジャヤドラタが殺されないように計らって下さい。どうかお願いです。あなたは我々の最高の寄る辺ですから。(六)あのアルジュナという火は、怒りの火にかりたてられ、私の軍隊という乾草を燃やす。燃え上がる火が乾草を燃やすように。(七)敵を苦しめる者よ、アルジュナがわが軍を破って通り過ぎた時、ジャヤドラタを守る人々はこの上なく心配した。(八)ブラフマン(ヴェーダ)を知る人々の最上者よ、アルジュナは決して生きてドローナを通過できないと諸王は確信していた。(九)ところがアルジュナは、あなたと交戦したのに通過して行った。実にすべての軍は無力であると私は思う。私には軍隊がないも同様である。(一〇)

気高い者よ、あなたがパーンダヴァたちのためになるよう専念していることを私は知っている。バラモンよ、私は何をなすべきか考えて迷うのである。(一一)バラモンよ、私はできる限り、あなたを最高に待遇している。できる限りあなたを満足させている。しかしあなたはそれを認めない。(一二)限りなく勇猛な人よ、我々はあなたを愛しているのに、あなたはいつも我々を好いていない。あなたはいつも我々の不快なことに専念するパーンダヴァたちを喜ばせている。(一三)あなたは我々に依存して生活しているのに、我々に不快なことに専念する。あなたが蜜を塗った剃刀のようであるとは、私は知らなかった。(一四)もしあなたがパーンダヴァを抑制することについて私の願いをかなえないのなら、私は家に帰ろうとするシンドゥ国王を止めないであろう。(一五)私は愚かにもあなたが救ってくれると望んで、シンドゥ国王を元気づけ、迷妄により彼を死神に引き渡した。(一六)ヤマ(閻魔)の牙の中に入った人といえども解放されることがある。しかし戦場でアルジュナの支配下に帰したジャヤドラタは決して解放されない。(一七)赤い馬たちにひかれる者よ、シンドゥ国王が守られるようにせよ。私の嘆きの繰り言を怒らないでくれ。シンドゥ国王を守れ。(一八)」

ドローナは言った。

「私はそなたの言葉に怒らない。そなたは私にとってアシュヴァッターマンと同じであるから。しかし私はそなたに真実を告げる。王よ、それを喜んで受け入れよ。(一九)クリシュナは最高の御者である。彼の最高の馬たちは駿足である。アルジュナはわずかな隙をついて速やかに通り過ぎる。(二〇)速やかに進むアルジュナが放った矢の群が戦車の後ろ、一クロー

シャ（四十八マイル）ほどのところに落ちるのをそなたは見なかったか（それほど戦車が速い）。（二一）私は今や老いたからそのように速く行くことはできない。そしてこの軍隊はパーンダヴァたちの前衛に近づいた。（二二）すべての弓取りたちが交戦している時、私はユディシティラを把捉することができる。強力な者よ、私は王族（クシャトリヤ）の中でそのように誓ったのだ。（二三）彼はアルジュナに捨てられて私の面前にいる。それ故、私は軍陣の前衛を捨ててアルジュナを攻撃しないのである。（二四）あの敵は一騎で、そなたと同様の生まれで同様の行動をする。そなたは加勢がいる。行って彼と戦え。恐れてはいけない。そなたはこの世の主君である。（二五）王であり、勇士であり、敏腕であり、巧妙である。勇士よ、そなたはパーンダヴァたちとの反目をひき起こしたのだから、速やかにアルジュナのいる所へ自ら行きなさい。（二六）」

ドゥルヨーダナは言った。

「最高の戦士アルジュナはあなたをも抜いて行った。師匠よ、どうして私が彼を制することができるか。（二七）戦いにおいて金剛杵（ヴァジュラ）を持つインドラに勝つことはできても、敵の都城を征服するアルジュナに勝つことはできない。（二八）彼はボージャの王クリタヴァルマンと神のようなあなたを、武器の威力により破り、シュルターユスを滅ぼした。（二九）そしてスダクシナとシュルターユダ王をも殺した。そして更に、シュルターユスとアチュターユスとムレーッチャ（蛮族）たちを幾百と殺した。（三〇）戦場で多くの敵を燃やすあの無敵のアルジュナに対して、どのようにして戦うことができるか。それを私に教えてくれ。武器に巧みな者よ。（三一）もし今日、私が彼と戦うことができると考えるなら、私を教え導いてくれ。私は召使

のようにあなたに依存している。私の名誉を守ってくれ。（三二）」

ドローナは言った。

「クルの王よ、そなたは真実を述べる。アルジュナは無敵である。しかし私は、そなたが彼に対抗できるようにしてあげよう。（三三）世間のすべての弓取りたちは、今日、奇蹟を見るがよい。クリシュナが見ている前で、アルジュナがそなたに釘付けになるのを。（三四）王よ、戦場で矢やその他の武器がそなたを害することのできないように、私は今そなたに黄金の鎧を着せよう。（三五）もし神、阿修羅、夜叉、蛇、羅刹、人間を含む三界すべてが、そなたに対して戦うとしても、そなたには危険はない。（三六）クリシュナもアルジュナも他の戦士も、戦いにおいてそなたの鎧を矢で射貫くことはできないだろう。（三七）そこでそなたは今日その鎧を着て、戦場で猛り立つアルジュナのもとに自ら急いで行きなさい。彼はそなたに敵わないだろう。（三八）」

サンジャヤは語った。――

ドローナはこのように告げると、水に触れ、呪句（マントラ）を唱えながら、あなたの息子がその大きな戦いに勝利するように、その輝かしい驚異的な鎧を作法通りに彼に着せた。最高にヴェーダを知る彼は、その学術により世の人々を驚かせようとしていた。（三九－四〇）

ドローナは言った。

「梵天（ブラフマー）とバラモンたちがそなたを祝福せんことを。最高の蛇たちからの祝福がそなたにあ

るように。バーラタよ。（四一）ヤヤーティ、ナフシャ、ドゥンドゥマーラ、バギーラタなど、すべての王仙が、全面的にそなたを祝福せんことを。（四二）一本の足を持つ者、多くの足を持つ者たちからの祝福がそなたにあらんことを。この大きな戦いにおいて、足を持たない者たちからの祝福が常にそなたにあるように。（四三）スヴァーハー、スヴァダー、シャチーが常にそなたを祝福せんことを。ラクシュミーとアルンダティーがそなたを祝福せんことを。非の打ち所のない者よ。（四四）アシタ・デーヴァラ、ヴィシュヴァーミトラ、アンギラス、ヴァシシタ、カシャパが、そなたを祝福せんことを。王よ。（四五）配置者（ダートリ）と制定者（ヴィダートリ）、世界主、諸方位と方位の守護神たち、カールッティケーヤ（スカンダ）が、今日、そなたを祝福せんことを。（四六）尊いヴィヴァスヴァット（太陽神）が全面的にそなたを祝福せんことを。四つの方位の象たち、大地、天空、惑星が祝福せんことを。（四七）王よ、地下にいて常に大地を支えるシェーシャ竜王がそなたを祝福せんことを。（四八）

ガーンダーリーの息子よ、かつて悪魔ヴリトラは勇ましく戦って、最高の神々をうち破り、幾千となく彼らの身体を断ち切った。（四九）その時、インドラをはじめとするすべての神々は、威光と力を奪われ、大阿修羅ヴリトラを恐れて、梵天に庇護を求めた。（五〇）神々は言った。

『最高の神よ、ヴリトラに粉砕された神々の寄る辺となって下さい。最高の神よ、大きな危険から我々を救って下さい。（五一）』

ドローナは続けた。

「すると梵天は、傍らにいるヴィシュヌと、インドラなどの最高の神々を〔見た〕。そして消沈した最高の神々に真実の言葉を告げた。（五二）

『インドラをはじめとする神々と、バラモンたちは、常に私により守られるべきである。しかしヴリトラを創造したトゥヴァシトリの威光は抗しがたい。（五三）神々よ、かつてトゥヴァシトリは百万年の間、苦行を行ない、偉大な主（マヘーシュヴァラ）（シヴァ）の許しを得て、ヴリトラを創造した。（五四）その強力な敵は、彼の恩寵によりあなた方を（異本による）殺すであろう。シヴァの住処に行かずして、尊いシヴァは見られることはない。（五五）あなた方は彼に会えば敵を殺すであろう。速やかにマンダラ山に行きなさい。苦行（タパス）の起源であり、ダクシャの祭祀を破壊した、ピナーカ槍を持つ、一切の生類の主であり、バガの眼（英訳は「バガネートラという阿修羅」ととる）の破壊者であるシヴァはそこにいる。（五六）』

そこで神々はこぞって、梵天とともにマンダラ山に行き、千万の太陽のように輝く光輝（テージャス）の塊である神に会った。（五七）彼は言った。

『神々よ、ようこそ。言いなさい。私は何をすればよいのか。私が姿を見せることは決して空しくはならない。あなた方の願望はかなうであろう。（五八）』

このように言われて、すべての神々は答えた。

『我々の威光はヴリトラに奪われた。神々の寄る辺になって下さい。（五九）神よ、見なさい。我々の身体は彼の攻撃により傷だらけになった。我々はあなたに庇護を求めます。偉大な主よ、我々の寄る辺になって下さい。（六〇）』

偉大な主は告げた。

『神々よ、私の知るところ、この恐ろしく強力な行動は、トゥヴァシトリの威光から生じたもので、自己を制御していない者たちには制しがたいものである。(六一)私としてはどうしてもすべての神々を援助しなければならぬ。神々の主インドラよ、私の身体から生じたこの輝かしい鎧を受け取って、意(こころ)でこの呪句(マントラ)を唱えて、それを身につけよ。(六二)』」

ドローナは続けた。

「願いをかなえるシヴァはこのように告げて、鎧とその呪句とを授けた。インドラはその鎧に守られて、ヴリトラの軍に対し進撃した。(六三)激戦において種々の武器の群が放たれたが、その鎧の合せ目を断つことはできなかった。(六四)そこで神々の王は、戦場で自らヴリトラを殺した。そして彼は、呪句よりなる鎧のつけ方と、その鎧をアンギラスに授けた。(六五)アンギラスは呪句を知る息子のブリハスパティに、ブリハスパティは聡明なアグニヴェーシャにそれを伝授した。(六六)そしてアグニヴェーシャは私に伝授した。そこで私は今、そなたの身体を守るために、呪句とともにそなたに鎧を着せているのだ。最高の王よ。(六七)」

サンジャヤは語った。――

師匠のうちの雄牛である光輝に満ちたドローナはこのように告げると、再びあなたの息子に言った。(六八)

「王よ、私はブラフマンの糸(バラモンがつける聖なる紐)でこの鎧をそなたに着せる。かつてヒラニヤガルバ(梵天)が戦場でヴィシュヌに着せたように。(六九)ターラカを滅ぼす戦いにおいて梵天がインドラに神聖な鎧を着せたように、私はそなたに鎧を着せる。(七〇)」

バラモン(ドローナ)は作法にもとづき呪句とともに王に鎧を着せてから、彼を大いなる戦いに送り出した。(七一)その強力な王は偉大な師匠により具足をつけ、トリガルタの千名の勇猛な戦車兵、発情した強力な千頭の象、一万の騎兵、その他の勇士たちに囲まれて、アルジュナの戦車に向けて、種々の楽器の音とともに、ヴィローチャナの息子(魔王バリ)のように進撃した。(七二―七四)バーラタよ、それから底知れぬ海のようにクルの王が進撃するのを見て、あなたの兵たちの間に大音声があがった。(七五)

(第六十九章)

勇士たちに守られるジャヤドラタ

サンジャヤは語った。――

大王よ、アルジュナとクリシュナが侵入し、人中の雄牛ドゥルヨーダナが背後から追跡した時、パーンダヴァ軍はソーマカ(パーンチャーラ)軍とともに、大音声をあげて、ドローナを急襲した。それからまた戦闘が行なわれた。(一―二)パーンチャーラ軍とクル軍の陣形の前衛で、驚異的で身の毛のよだつ恐ろしい激戦が行なわれた。(三)王よ、太陽が中天に達した時に行なわれたその戦闘のように凄まじいものは、いまだかつて見たことも聞いたこともなかった。

(四) ドリシタデュムナをはじめとするすべてのパーンダヴァの勇士たちは、陣形を整え、ドローナの軍隊に矢の雨を浴びせた。(五) 我々は一切の戦士のうちの最上者であるドローナを先頭に立てて、ドリシタデュムナをはじめとするパーンダヴァ軍に矢を雨降らせた。(六) 戦車で飾られた美しい二つの軍隊の前衛は輝いていた。冬が過ぎた時（寒季）に、それぞれ逆方向の風を受けた、隆起した二つの大雲のように。(七) 雨季に増水したガンガーとヤムナーの両河のように、二つの大軍は一つに合して、最高の激流となった。(八) 戦場という大きな雲は、種々の武器という先駆けの風を持ち、象、馬、戦車におおわれ、棍棒という稲妻により非常に恐ろしい。(九) それはドローナという風に吹き上げられ、幾千の矢という大雨を降らせる。それは非常に恐ろしく、燃え上がるパーンダヴァ軍の火に雨を降り注ぐ。(一〇) 夏の終わりに、恐ろしい大風が海を動揺させるように、最高のバラモン（ドローナ）はパーンダヴァの軍隊を動揺させた。(一一) 彼らの方も、ありとあらゆる努力をして、ドローナのみに襲いかかった。強力な大洪水が大きな堤に襲いかかるように。(一二) しかしドローナは、山が洪水を防ぐように、戦場で怒ったパーンダヴァとパーンチャーラとケーカヤの軍を制止した。(一三) その時、他の強力で勇猛な王たちも、いたるところから引き返し、戦場でパーンチャーラ軍を食い止めた。(一四)

それから、その戦いにおいて、人中の虎であるドリシタデュムナは、パーンダヴァたちとともに、敵軍をうち破ろうと望み、何度もドローナを攻撃した。(一五) ドローナがドリシタデュムナに矢の雨を浴びせるのと同様、彼の方も矢の雨を降らせた。(一六) ドリシタデュムナは雲のようだった。太刀はその前触れの風である。弓弦は稲妻、弓の音は雷鳴である。(一七) その雲は矢の群という雹（ひょう）をすべての方角に放つ。彼は最上の戦士たちを殺し、敵軍を〔矢の雨で〕おおう。(一八) ドローナはパーンダヴァの戦車隊を何度も矢で攻撃したが、ドリシタデュムナはその度に矢でドローナを撃退した。(一九) バーラタよ、このようにドローナは戦場で努力したが、その軍隊はドリシタデュムナに遭遇して三つに分断された。(二〇) 一つの軍はボージャの王（クリタヴァルマン）のもとに退却した。他の軍はジャラサンダのもとに退却した。他の軍はパーンダヴァたちに殺されて、ドローナのもとに退却した。(二一) 最高の戦士ドローナは軍隊を編成した。勇士ドリシタデュムナはそれらを粉砕した。(二二) 三つに分かれたドゥルヨーダナの軍はパーンダヴァとスリンジャヤの軍に殺された。森で牧夫のいない家畜たちが多くの猛獣に殺されるように。(二三) その激戦において、ドリシタデュムナに惑わされた戦士たちをカーラ（時間、破壊神）が食っていると、人々は考えた。(二四) 悪い王の王国が、飢饉、病気、盗賊に損なわれるように、あなたの軍隊はパーンダヴァに苦しめられた。(二五) 諸々の武器や鎧が太陽の光線に照り映え、軍隊のたてるほこりにより視界は奪われた。(二六)

パーンダヴァ軍に攻撃されて軍隊が三つに分かれた時、ドローナは怒って、パーンチャーラ軍を矢で粉砕した。(二七) ドローナがそれらの敵軍を矢で粉砕し破壊していた時、彼の姿は燃える終末の火の姿のようであった。(二八) 王よ、勇士ドローナは、戦場において、戦車兵、象兵、騎兵、歩兵を一矢ずつで射貫いた。(二九) バーラタよ、その戦いにおいてパーン

ダヴァたちの軍隊のうちで、ドローナの弓から放たれた鋭い矢に耐えられる者は誰もいなかった。（三〇）バーラタよ、パーンチャーラの軍は、太陽に焼かれ、ドローナの矢に苦しめられ、あちこちさまよった。（三一）同様にあなたの軍も、ドリシタデュムナにかりたてられて、乾いた森が火で焼かれるように、いたるところで燃えていた。（三二）ドローナとドリシタデュムナの矢で両軍の兵士たちが殺されていた時、兵士たちは生命を捨てて、力の限り戦った。（三三）パラタの雄牛よ、戦っている敵味方の兵たちの間には、恐怖から戦いを捨てる者は誰もいなかった。大王よ。（三四）（三五―四七略）

バーラタよ、シンドゥ国王（ジャヤドラタ）はすべての軍の後衛にいた。彼はクリパをはじめとする最高の射手である戦士たちに守られていた。（四八）そして二人の最強の勇士がシンドゥ国王の戦車の両輪を守っていた。すなわち、ドローナの息子は右側を守り、御者の息子（カルナ）は左側を守っていた。（四九）そして彼の背後を守る者は、ソーマダッタの息子（ブーリシュラヴァス）を先頭に、クリパ、ヴリシャセーナ、シャラ、無敵のシャリヤであった。（五〇）すべて政策に通じ、戦いに巧みな勇士たちであった。このように彼らはシンドゥ国王を守って戦った。（五一）

（第七十章）

サーティヤキ、ドリシタデュムナを救出する

サンジャヤは語った。――

王よ、私は驚異的な戦闘をお話ししますからお聞きなさい。クル軍とパーンダヴァ軍との間にどのような戦いが繰り広げられたか。（一）パーンダヴァたちは、その戦いにおいてドローナの軍を破ろうと望み、軍陣の先頭に立つドローナに近づいて戦った。（二）ドローナの兵たちも、自軍の陣形を守って、大きな名誉を望んで、戦場でパーンダヴァたちに対して戦った。（三）アヴァンティのヴィンダとアヌヴィンダは、あなたの息子によかれと望み、猛り立ち、十本の矢でヴィラータを射た。（四）大王よ、ヴィラータの方も、戦場に立っている勇猛な二人とその従者たちを攻撃して戦った。（五）血の水を流す彼らの戦いは、森における、獅子と二頭の発情した巨象との戦いのように、恐ろしいものであった。（六）強力なヤジュニャセーナの息子（ドリシタデュムナ）は、その戦いにおいて、急所と骨を断つ恐るべき鋭い矢により、バーフリーカを激しく射た。（七）バーフリーカは怒り、金の羽根のついた、石で研がれた、九本の真っ直ぐの矢で、ヤジュニャセーナの息子を激しく射た。（八）矢と槍に満ちたその戦いは恐ろしく、臆病者に恐怖をもたらし、勇士の歓喜を増大するものであった。（九）その両者に放たれた矢により、空中と諸方はすべておおわれ、何も見分けられなかった。（一〇）（一一―三二略）

（第七十一章）

サンジャヤは語った。――

身の毛がよだつ戦いが始まった時、パーンダヴァたちは三つに分かれたクル軍に襲いかか

った。(一) 戦場で、強力なビーマセーナはジャラサンダを食い止め、勇士ユディシティラはクリタヴァルマンを食い止めた。(二) 大王よ、ドリシタデュムナは輝く太陽のように矢の雨を降らせて(異本による)、ドローナを攻撃した。(三) かくして、互いにいきり立って逸るクル軍とソーマカ軍のすべての戦士たちの間に戦いが始まった。(四) 兵士たちが相対して恐れることなく戦い、このように恐ろしい殺戮が繰り広げられていた時、強力なドローナは、強力なパーンチャーラの王子とともに、矢の群を放っていた。それは奇蹟のようであった。(五―六) ドローナとパーンチャーラの王子は多くの人々の頭を切ったが、それらは蓮の群生のように、いたるところに散乱していた。(七) 戦場いたるところに、勇士たちの衣服、装飾品、刀その他の武器、旗、鎧が散乱していた。(八) 黄金できらびやかな諸々の身体は血にまみれ、稲妻をともなう雲の群が混じり合ったかのように見えた。(九) (一〇―二〇略)

王よ、このように際限のない戦いが行なわれていた時、ドリシタデュムナは自分の馬たちを、ドローナの馬たちと絡ませた。(二一) 風のように速い馬たちは、一方は鳩のように白い色、他方は血のように赤い色で、戦場で混じり合って美しく輝いた。王よ、馬たちは稲妻をともなう雲のように輝いていた。(二二) バーラタよ、勇士ドリシタデュムナは、ドローナが近くにいるのを見て、弓を捨て、刀と楯をとった。(二三) 敵の勇士を殺す彼は、なしがたい行為をしようと欲して、轅により乗り移り、ドローナの戦車に入り込んだ。(二四) 彼は次々と頸木の真中、その接合部、馬の尻の部分に立った。兵たちはそれを誉めそやした。(二五) 彼が刀を持って赤い馬たちの上に立って動いていた時、ドローナは彼の隙を見出さなかった。

それは奇蹟のようであった。(二六) 森で鷹が餌を切望して降下するように、彼もドローナを殺そうとして攻撃した。(二七)

それからドローナは、百本の矢によりドリシタデュムナの百の月に飾られた楯を破壊した。そして十本の矢によりその刀を断ち切った。(二八) そして強力なドローナは、六十四本の矢で相手の馬たちを殺した。そして二本の半月形の先の矢でその旗と傘を断ち切り、両端の馬を御す二名の御者を殺した。(二九) それからドローナは急いで、生命を奪う他の矢を耳のところまで引き絞って放った。インドラが金剛杵を放つように。(三〇) ところがサーティヤキが、十四本の矢でその矢を切断した。彼は師匠(ドローナ)の口に呑まれていたドリシタデュムナを救い出したのである。(三一) わが君よ、シニの雄牛(サーティヤキ)は、獅子に呑まれた鹿のような、人獅子ドローナに呑まれたパーンチャーラの王子を救出した。(三二) 激戦においてサーティヤキがパーンチャーラの王子を守ったのを見て、ドローナは急いで二十六本の矢を彼に放った。(三三) それからシニの孫は、二十六本の鋭い矢で、スリンジャヤ軍を呑んでいるドローナの胸の真中を射た。(三四) ドローナがサーティヤキに攻撃された時、それから、すべてのパーンチャーラの戦士たちは勝利を切望し、急いでドリシタデュムナを救出した。(三五)

(第七十二章)

ドローナとサーティヤキの激戦

ドリタラーシトラはたずねた。

「ドローナの矢が切られ、ドリシタデュムナがヴリシュニの勇士ユユダーナ（サーティヤキ）に救われた時、サンジャヤよ、その最高の戦士、人中の虎である勇士ドローナは怒り、その戦いにおいてシニの孫に対してどのようにしたか。（一―二）」

サンジャヤは語った。――

ドローナは大蛇のように息を吐いて襲いかかった。怒りの毒を持ち、開いた口のように弓を引き絞り、鋭い刃の矢という歯を持ち、鋭い鉄矢（ナーラーチャ）という牙を持ち、猛り立ちいきり立ち赤い眼をしていた。彼は勇士に喜ばれる高速の血のような馬、空中を飛ぶかのようにいたるところを闊歩する馬たちにより、金の羽根の矢を放って、ユユダーナを襲撃した。（三―五）ドローナという雲は、矢という大雨を降らせ、戦車の音という雲〔の轟き〕をたて、弓を引き絞って放つ多くの矢という稲妻を持つ。槍と刀という雷電を持ち、怒りにより激しく立ち上がる（雲が湧き上がる）。それは制しがたく、馬という風にかりたてられる。（六―七）そのようなドローナが襲来するのを見て、敵の都市を征服する勇士サーティヤキは、戦いに酔い、笑って御者に告げた。（八）

「あの猛烈なバラモンは、自己の仕事を踏み外し、ドゥルヨーダナ王の拠り所であり、苦しみと恐怖をもたらす。（九）急いで馬たちをかりたてて、勇み立って、いつも勇士であると自慢しているあの王子たちの師匠の所に行け。（一〇）」

それから、銀のような色をしたマドゥ族の勇士の最高の馬たちは、風のように速く、急いでドローナの方に向かって行った。（一一）それからすぐに、矢の群におおわれて、恐ろしい暗黒が訪れ、他の勇士たちに侵害されないかのようであった。（一二）手練の早業を発揮するドローナとサーティヤキという二人の人獅子は矢の雨を降らせ、絶え間が認められなかった。（一三）矢の落下により、大雨の衝撃のような音がし、インドラが放つ雷電の音のような音が聞こえた。（一四）鉄矢に貫かれた矢の外見は、毒蛇に咬まれた蛇の姿のように見えた。バーラタよ。（一五）その両手の弓弦が籠手にあたる恐ろしい音が絶えず聞こえた。それは山の峰々が雷電（ヴァジュラ）に撃たれる時の音のようであった。（一六）王よ、両者の戦車、馬たち、二人の御者は、その時、金の羽根の矢におおわれ、あざやかな姿になった。（一七）王よ、汚れない真っ直ぐの鉄矢は、脱皮した毒蛇のように見え、それらの落下は恐ろしいものであった。（一八）両者の傘と旗は落ち、両者は勝利を望み、その身体は血まみれになった。（一九）両者は生命を奪う矢によりお互いに傷つけ合った。〔発情して〕分泌液を流す二頭の象のように、身体から血を流して。（二〇）大王よ、咆哮や叫び声、法螺貝や太鼓の響きはやんだ。誰も声を発しなかった。（二一）兵たちは沈黙した。戦士たちは戦いをやめた。人々は好奇心にかられて両者の一騎打ちを見た。（二二）戦車兵、象兵、騎兵、歩兵たちは、二人の戦士を取り巻

いて、目を凝らして見つめていた。(二三)象隊も騎兵隊も戦車隊も、向かい合って布陣し、立ち止まっていた。(二四)バーラタよ、真珠と珊瑚であざやかな、宝玉と黄金で飾られた旗と装飾、黄金製のきらびやかな鎧、勝利の旗、象の背にかける華やかな布、汚れなく鋭い刀、馬の吹流し、象の頭の、金銀製の額の瘤を飾る花輪と、牙のまわりを飾る輪により、それらの軍は、夏の終わりの、鶴や蛍や虹をともなう雲の群のように見えた。(二五―二八)わが軍もユディシティラの軍も立ち止まって、そのサーティヤキと偉大なドローナの戦いを見た。(二九)天車の先端にいる梵天やインドラをはじめとする神々、シッダとチャーラナの群、ヴィディヤーダラ(いずれも半神の種類)、大蛇たちも見た。(三〇)彼らはその二人の人獅子の、種々のめざましい武器の応酬によって驚嘆した。(三一)強力なドローナとサーティヤキの二人は、武器における手練の早業を披露しつつ、相互に矢で貫き合った。(三二)サーティヤキはその戦いにおいて、非常に強力な矢でドローナの矢を切り、そして速やかに弓を切断した。光輝に満ちた者よ。(三三)一瞬の後、ドローナは他の弓に弦を張った。サーティヤキは彼のその弓をも断ち切った。(三四)それから、ドローナは急いで再び別の弓を手にとって身構えたが、彼が弦を張る度に、サーティヤキは鋭い矢で彼の弓を断ち切った。(三五)王中の王よ、その戦いでドローナはサーティヤキの超人的な行為を見て、心で次のように考えた。(三六)

「サーティヤキの武器の力は、ラーマ(パラシュラーマであろう)、カールタヴィーリヤ〔アルジュナ〕、アルジュナ、人中の虎ビーシュマに見られるものと同じだ。(三七)」

そして、最高のバラモンであるドローナは、インドラのような彼の手練の業を見て、心の

中で彼の勇武を讃えた。(三八)その武器を知る人々の最上者(ドローナ)は満足した。インドラをはじめとする神々も、迅速に行動する彼のような手練の早業を発揮しなかった。(三九)王よ、神々やガンダルヴァやシッダやチャーラナ(いずれも半神の種類)も、サーティヤキとドローナのその働きを目撃した。(四〇)

それから、武器を知る者たちの最上者である、王族を粉砕するドローナは、他の弓をとって、飛び道具によって戦った。バーラタよ。(四一)しかしサーティヤキは、彼の武器を武器の幻力(マーヤー)によって撃退して、鋭い矢によって彼を射た。それは奇蹟のようであった。(四二)戦場で余人には及びもつかない彼の超人的な行為を見て、あなたの軍の武術(ヨーガ)を知る人々は武術をそなえた彼を讃えた。(四三)ドローナが放った武器をサーティヤキも放った。敵を苦しめる師匠も、ひるむことなく彼と戦った。(四四)

大王よ、それから弓のヴェーダ(兵学)に通達したドローナは怒り、サーティヤキを殺すために神的な武器を呼び起こした。(四五)それはアーグネーヤ(火神の武器)という、敵を滅ぼす非常に恐ろしい武器であった。勇士サーティヤキはそれを見て、ヴァールナ(水天の武器)という神的な武器を呼び起こした。(四六)両者が神的な武器を用いるのを見て、「わあ、わあ」という大声があがった。空中においては、空を飛行する生き物たちも動くことはなかった。(四七)両者はヴァールナとアーグネーヤの武器(アストラ)(呪句)を矢に統合した。その二つが合しないうちに、太陽は傾いた。(四八)

それから、パーンダヴァのユディシティラ王とビーマセーナとナクラとサハデーヴァがサ

ーティヤキを援護した。（四九）ヴィラータとケーカヤ軍が、ドリシタデュムナ等とともに、そしてマツヤ軍とシャールヴェーヤ軍が、急いでドローナのもとに来た。（五〇）ドゥフシャーサナをはじめとする幾千の王子たちが、敵たちに取り囲まれたドローナの援護に来た。（五一）王よ、それから敵味方の戦士たちの間に戦いが行なわれた。世界はほこりにおおわれ、矢の群におおわれた。（五二）すべてが混乱し、何も認められなかった。世界は軍隊とほこりにおおわれ、混沌とした状態になった。（五三）

（第七十三章）

アルジュナ、馬たちに水を飲ませる

サンジャヤは語った。——

太陽が傾いた時、兵たちは太陽の光線とほこりによりおおわれて弱った。（一）彼らが踏みとどまって戦い、再び引き返し、うち破られたり、勝ったりしている間に、昼は次第に暮れて行った。（二）このように兵士たちが勝利を切望して戦いに専念していた時、アルジュナとクリシュナはシンドゥ国王（ジャヤドラタ）めざして進んで行った。（三）アルジュナは鋭い矢で、戦車が通る広さの道を作った。そこでクリシュナは〔戦車を御して〕その道を進んだ。（四）王よ、偉大なアルジュナの戦車が行くいたるところで、あなたの軍隊はうち破られた。（五）強力なクリシュナは大中小の円形を描いて、すばらしい戦車の技術を発揮した。（六）アルジュナの竹と鉄でできた矢は、彼の名前を印され、鍛えられ、終末の火のようであり、腱が巻いてあり、美しい節を持ち、太くて、遠方まで達する。非常に長く、種々の先端を持つ。それらの矢は、〔禿鷲などの〕鳥とともに、戦場で生類の血を飲んだ。（七―八）アルジュナは車上に立って一クローシャ（一ヨージャナの四分の一）ほどの距離に矢を射る。それらの矢は、彼の戦車が一クローシャを移動した時、敵たちを殺す（ちょうど矢が敵を殺した頃、彼の高速の戦車はそこに達している）。（九）クリシュナはガルダ鳥か風のように速い、よく訓練された馬たちにひかれ、そのような速さで進み、すべての人々を驚かせた。（一〇）王よ、太陽やインドラやルドラ（シヴァ）やヴァイシュラヴァナ（クベーラ）の戦車でもそれほど速く進めない。（一一）王よ、戦場において、アルジュナの戦車は思考や意図のように速く進んだ。他の者の戦車がそれほど速く進んだことは、いまだかつてなかった。（一二）王よ、敵の勇士を殺すクリシュナは戦場において、敵軍の中に入り、速やかに馬たちをかりたてた。バーラタよ。（一三）それから、彼の最高の馬たちは戦車の群の中に達し、飢えと渇きと疲労に襲われ、やっとのことで戦車をひいた。（一四）それに馬たちは、戦いに酔う（好戦的な）者たちに多くの武器で方々傷つけられていたが、何度も見事な円形を描いて進んだ。（一五）彼らは幾千の殺された馬、象、戦車、人の山の上を越えて行った。（一六）

王よ、その間、アヴァンティの勇猛な兄弟（ヴィンダとアヌヴィンダ）は軍隊を率いて、馬たちが疲労したアルジュナを攻撃した。（一七）その両者は喜び勇み、六十四本の矢でアルジュナを、七十本の矢でクリシュナを、百本の矢で馬たちを射た。（一八）大王よ、相手の急所を知るアルジュナは戦場で怒り、急所を断つ九本の真っ直ぐの矢でその二人を射た。（一九）それからその二人はいきり立ち、矢の群でアルジュナとクリシュナを攻撃し、獅子吼をした。（二〇）白馬

にひかれるアルジュナは、戦場で速やかに、半月形の先の矢で二人の美しい弓を断ち、黄金で輝く二本の旗を断ち切った。(二一)王よ、すると二人は、戦場で他の弓をとり、非常に怒って、矢でアルジュナを攻撃した。(二二)アルジュナは二人にひどく怒り、急いでまた二本の矢で二人の弓を断ち切った。(二三)そして他の金の羽根のついた、石で研がれた矢により、速やかに馬たちと歩兵たちを殺し、また両端の二人の御者を殺した。(二四)そして馬蹄形の先の矢で兄の方の頭を胴体から切り取った。彼は殺されて、風に折られた樹木のように大地に倒れた。(二五)ヴィンダが殺されたのを見て、栄光ある強力なアヌヴィンダは、馬が殺された戦車を捨てて、棍棒をつかんだ。(二六)それから棍棒を持つ者たちの最上者であるその勇士は、兄が殺されたことを恨み、戦場において、棍棒により踊るかのように襲撃した。(二七)怒ったアヌヴィンダは、棍棒でクリシュナの額を撃ったが、マイナーカ山のような彼を揺るがすことはできなかった。(二八)アルジュナは六本の矢で彼の頸部、両足、両腕、頭を切った。彼は切断され、山の堆積のように倒れた。(二九)それから王よ、二人が殺されたのを見て、二人の従者たちは怒り、幾百の矢を注ぎつつ襲撃した。(三〇)バラタの雄牛よ、アルジュナは矢で彼らを速やかに殺して、火が冬の終わりに森を焼いて輝くように輝いていた。(三一)

アルジュナは二人の軍隊を通過して、ようやくにしてその外に出た。彼は昇った太陽が雲を抜け出て輝くように輝いていた。(三二)クル族の人々はアルジュナを見て、恐れるとともに勇み立ち、いたるところで彼に〔矢の〕雨を浴びせた。(三三)彼が疲れたと見て、そしてシンドゥ国王は遠くにいると知って、大きな獅子吼をして、ぐるりと彼を取り囲んだ。(三四)人中の雄牛アルジュナは彼らが非常にいきり立っているのを見て、微笑して徐にクリシュナに告げた。(三五)

「馬たちは矢に苦しみ、疲れた。そしてシンドゥ国王は遠くにいる。次に何をしたら最善であるとあなたは思うか。(三六)クリシュナよ、ありのままに告げてくれ。あなたは常に最も賢明であるから。あなたを眼（導き手）とするパーンダヴァたちは、戦いで敵に勝利するであろう。(三七)しかし、すぐにすべきだと私が思うことを聞きなさい。クリシュナよ、馬たちを安楽に解放して、矢を抜いてやりなさい。(三八)」

アルジュナにこう言われて、クリシュナは彼に答えた。

「アルジュナよ、あなたが言ったことは、私の考えでもある。(三九)」

アルジュナは言った。

「クリシュナよ、私はすべての軍を食い止めよう。あなたの方は、すぐになすべきことを適切にやって下さい。(四〇)」

サンジャヤは語った。——

アルジュナは悠然として戦車の座席から降り、ガーンディーヴァ弓を持って、山のように不動に立っていた。(四一)勝利を望む王族（クシャトリヤ）たちは弱点を見つけたと思い、雄叫びをあげて、大地に立つアルジュナに襲いかかった。(四二)彼らは弓を引き絞って矢を放ち、戦車の大群

により一人の彼を取り囲んだ。（四三）彼らはいきり立ち、多彩な武器を披露し、雲が太陽をおおうように、矢でアルジュナをおおった。（四四）偉大な戦士である王族たちは、王族の雄牛である獅子のような戦士に、激しく襲いかかった。発情した象たちが獅子に襲いかかるように。（四五）そこで、アルジュナの両腕の偉大な力が見られた。怒った彼は、大軍を完全に食い止めたのである。（四六）強力な彼は、その武器により敵の武器をすっかり抑止し、速やかに多くの矢によってすべての敵をおおった。（四七）王よ、そこの空中においては、多くの矢の衝突により、大きな輝きを放つ火が生じた。（四八）

あちこちで勇士たちは血まみれになり、息を吐いていた。敵を悩ます馬や象たちは、切られ、大声をあげていた。（四九）敵の勇士たちは、戦いに勝利することを求め、いきり立っていた。これら多くの者たちがいきり立って一カ所にいるので、暑気が生じたかのようであった。（五〇）アルジュナはその時、海岸が海を防ぐように、侵しがたい戦車の海を矢によって食い止めた。その海は矢という波、旗という渦巻、象という鰐を持ち、越えがたい。歩兵という魚に満ち、法螺貝と太鼓の音が轟く。それは計りがたく、無限で、甚だしいほこりという波を持つ（異本を参照した）。ターバンという亀におおわれ、旗という泡に囲まれている。（五一―五三）

それから勇士クリシュナは戦場で、動揺することなく、親友である最高の人アルジュナに話しかけた。（五四）

「アルジュナよ、戦場には馬たちが水を飲めるような所がない。だが馬たちは飲む水を望んでいる。水浴したいとまでは望まないにしても。（五五）」

アルジュナは動揺することなく、「ここにある」と言って、矢で地面を射て、馬が飲めるような清浄な池を作った。（五六）それからアルジュナは、矢の梁（はり）、矢の柱、矢の屋根を持つ驚異的な家を作った。彼はまるで〔造物主〕トゥヴァシトリのように奇蹟的な行為をした。（五七）アルジュナがその激戦場に矢の家を作った時、クリシュナは笑って、「見事、見事」と言った。（五八）　（第七十四章）

クリシュナ、馬たちの世話をする

サンジャヤは語った。――

偉大なアルジュナが敵軍を食い止め、水を作り出し、矢の家を作った時、光輝に満ちたクリシュナは速やかに戦車から降りて、鷺（カンカ）の羽根のついた矢により貫かれた馬たちを解放した。（一―二）未曾有の出来事を見て、シッダとチャーラナ（半神の種類）の群やすべての軍隊に、大きな獅子吼が生じた。（三）人中の雄牛たちは、徒歩で戦っているアルジュナを食い止めることができなかった。それは奇蹟のようであった。（四）戦車の群、多くの象と馬が襲っても、アルジュナは人々を凌駕し、動揺することはなかった。（五）王たちはアルジュナに対し矢の群を放った。しかし、敵の勇士を殺す徳性あるインドラの息子はひるまなかった。（六）強力なアルジュナは、飛来する矢の群、棍棒、投槍を食い尽くした。海が多くの河川を受け入れるように。（七）アルジュナは武器の非常な激しさにより、腕の力により、すべての王中の王

たちの最高の矢を食い尽くした。（八）大王よ、クル族の人々は、アルジュナとクリシュナの二人の、最高に驚異的な勇武を讃えた。（九）

「これ以上驚くべきことがあったであろうか。これからもあるであろうか。アルジュナとクリシュナは戦場で馬たちを解放した。（一〇）この最高の人間である両者は、激戦において、平然として、恐るべき威光を示して、我々に大きな恐怖を与えた。（一一）」

バーラタよ、その時、蓮花の眼のクリシュナは女性の間にいるかのようにくつろいで笑って、あなたの兵士たちが見ている前で、アルジュナが戦場に作った矢の家に馬たちを入らせた。王よ。（一二―一三）馬の世話に巧みなクリシュナは、彼らの疲労、消耗、ふるえ、嘔吐、傷をすべて癒してやった。（一四）彼は、矢を引き抜いて、その馬たちを両手でなで、適切に歩きまわらせ、水を飲ませた。（一五）馬たちが水を飲み、水浴し、餌を食べて、疲れがとれた時、彼は喜んで再び彼らを最高の戦車につないだ。（一六）威光に満ちた最高の戦士であるクリシュナは、その最高の戦車に乗り、アルジュナとともに急いで出発した。（一七）水を飲んだ馬たちをつないだ、最高の戦士の戦車を戦場で見て、クル軍の最上者たちは再び意気消沈した。（一八）王よ、彼らは牙を折られた蛇のように息を吐いた。「ああ、残念無念。アルジュナとクリシュナは行ってしまった」と言い合いながら。（一九）彼らはすべての王族が見ている前で、一台の戦車に乗り、子供の遊びのように我々の軍隊を翻弄して行った。（二〇）敵を苦しめる両者は、叫んで奮闘している人々に妨げられることなく、自己の力を発揮して、すべての王の間を進撃した。（二一）進撃する彼らを見て、他の兵士たちが言った。

「すべてのクル族よ、急いでクリシュナとアルジュナを殺せ。（二二）すべての弓取りたちが見ている前で、あのダシャールハの勇士（クリシュナ）は戦車に馬をつなぎ、戦場で我々を苦しめて進んで行く。（二三）」

王よ、またある王たちは、戦場でいまだかつて見られなかった大きな奇蹟を見て、互いに言い合った。（二四）

「ドゥルヨーダナの過失により、すべての軍隊、ドリタラーシトラ王、王族は滅亡する。すべての大地も滅亡する。王はそのことを知らない」などと。（二五―二六）

バーラタよ、また別の王族たちは次のように言った。

「シンドゥ国王はヤマ（閻魔）の住処に行ったも同然だ。方策を知らない謬見を抱くドゥルヨーダナは、彼のためになすべきことをせよ。（二七）」

それから、太陽が沈もうとする時、水を飲んで元気を出した馬たちにひかれて、アルジュナはより速度を増してシンドゥ国王めざして進んで行った。（二八）一切の戦士のうちの最上者であるその勇士が、怒った死神のように進撃する時、わが軍の戦士たちは彼を食い止めることができなかった。（二九）それから敵を苦しめるアルジュナはシンドゥ国王を求めて、獅子が鹿の群を逃走させるように、わが軍を逃走させ、動揺させた。（三〇）クリシュナは速やかにわが軍に侵入し、鶴（バラーカ）の色をした馬たちをかりたて、パーンチャジャニヤ（法螺貝の名）を鳴り響かせた。（三一）前にアルジュナに射られた矢は背後に落ちた。風のように速い馬たちはいやが上にも高速で彼らを運んだのである。（三二）戦士たちは、旗の先が風でひるがえり、

〔雷〕雲のような音をたてる、猿の旗標をつけた恐ろしい戦車を見て意気消沈した。（三三）さて、太陽がひどいほこりですべておおわれた時、戦場で矢に苦しむ戦士たちは、二人のクリシュナを見ることができなかった。（三四）それから、怒った王たちや、その他の多くの王族たちは、ジャヤドラタを殺そうと望むアルジュナを取り囲んだ。（三五）兵たちが敗走した時（異本による）、ドゥルヨーダナは戦場にしっかりと立つ人中の雄牛アルジュナに対し、速やかに向かって行った。（三六）

（第七十五章）

二人のクリシュナを食い止めたドゥルヨーダナ

サンジャヤは語った。——

王よ、クリシュナとアルジュナの両者が通過するのを見て、あなたの軍の兵たちは恐怖のあまり、力が抜け、へたりこんだ。（一）しかし、すべての偉大な人々は、勇猛心にかりたてられて激し、恥じて、毅然として、アルジュナに反撃した。（二）怒りと敵意にかられた彼らは、アルジュナに戦いを挑んだが、いまだに退却することはなかった。諸々の川が海から引き返すことがないように。（三）しかるに立派でない者たちは退却した。無神論者（ナースティカ）（ヴェーダの権威を否定する人々）がヴェーダから顔を背けるように。彼らは罪悪を得て、地獄へ行く。（四）人中の雄牛である二人は、戦車隊を通過し抜け出て、ラーフ（日食、月食を起こす悪魔）の口から脱した月と太陽のように見えた。（五）二匹の魚が大きな網を破って出て来るように、二人のクリシュナは苦熱も去り、

軍隊の網（群）を破って現われた。（六）武器に満ちた非常に破りがたいドローナの軍隊から脱け出て、偉大な二人は終末の二つの太陽が昇ったように見えた。（七）おびただしい矢から脱し、ひしめく武器から脱し、その偉大な二人が敵を攻撃しているのが認められた。（八）マカラ（海豚または鰐）の口から脱した二匹の魚のように、二人は火に触れる〔ような危機〕から脱し、わが軍を動揺させた。二匹のマカラが海を動揺させるように。（九）二人がドローナの軍隊にいる間は、あなたの軍の兵たちとあなたの息子たちは、その二人がドローナ〔の軍〕を渡れないと考えていた。（一〇）しかし光輝に満ちた二人がドローナの軍を越えたのを見て、大王よ、彼らはシンドゥ国王の生命に対する希望を失った。（一一）王よ、あなたの息子たちは強い希望を抱いていた。「二人のクリシュナはドローナとクリタヴァルマンから逃れることはできない」と。（一二）大王よ、敵を苦しめる二人は、その希望を空しいものにして、越えがたいドローナの軍とボージャの軍とを越えた。（一三）そして突破した燃火のような二人を見て、彼らは絶望し、シンドゥ国王の生命に対する希望を失った。（一四）敵の恐怖を増大させる、恐れを知らぬクリシュナとアルジュナは、お互いに、ジャヤドラタを殺す相談をあれこれと話し合った。（一五）

「あのシンドゥ国王はドリタラーシトラの息子である六人の勇士たちの間で守られている。しかし我らの視界に達したら、彼は我々から逃れることはできないだろう。（一六）もしインドラが神々の群とともに戦場で彼を守ったとしても、我々は彼を殺すであろう。」

二人のクリシュナは以上のように言った。（一七）強力な二人のクリシュナが、シンドゥ国

王を見ながら、お互いにこのように話していた時、あなたの息子たちはそれを聞いた。(二八) 二頭の象が砂漠を通り過ぎて行き、喉が渇いたが、水を飲んで元気が出る。ちょうどそのように、敵を制する二人も元気になった。(二九) その二人の勇士は、虎や獅子や象に満ちた山々を越えて来た商人たちのように見えた（異本による）。あなたの軍の兵士たちは、突破した二人を見て、「二人の顔色は、死と老いを越えた者の顔色のようだ」と考えた。そしていたるところで大声で嘆いた。(二〇―二一) 毒蛇か燃火のようなドローナや、他の王たちから抜け出た二人は、輝く太陽のようであった。(二二) 海のようなドローナの軍から抜け出た敵を制する二人は、海を越えた後のように喜びにあふれて見えた。(二三) ドローナとクリタヴァルマンに守られた（テクストは誤植か）おびただしい武器の群から解放された二人は戦場で輝き、インドラとアグニ（神火）のように見えた。(二四) 二人のクリシュナはドローナの鋭い矢におおわれ、血を流して、カルニカーラの花によって輝く山々のように輝いていた。(二五) (二六―三二略)

手綱を持つクリシュナと弓を持つアルジュナとの両者の輝きは、太陽と火の輝きのようであった。(三三) 二人がドローナの軍を抜け出て、近くにシンドゥ国王を見た時の喜びは、二羽の鷹が近くに餌を見つけた時の喜びのようであった。(三四) 二人は近くにシンドゥ国王を見て怒り、速やかに激しく襲いかかった。二羽の鷹が餌に襲いかかるように。(三五) あなたの息子（ドゥルヨーダナ）は、クリシュナとアルジュナが〔ドローナの軍を〕通過したのを見て、シンドゥ国王を守るために奮戦した。(三六) 王よ、ドローナによって鎧を着せられ、馬の調教を知るドゥルヨーダナ王は、戦場において、ただ一騎で進んだ。(三七) 王よ、あなたの息子

は勇士であるクリシュナとアルジュナを通り越してから、蓮の眼の〔クリシュナの〕前方で向きを変えて攻撃した。(三八) あなたの息子がアルジュナを通り越した時、すべての軍隊の間で、諸々の楽器が喜び勇んで演奏された。(三九) そして、そこでドゥルヨーダナが二人のクリシュナの正面に立ったのを見て、法螺貝や太鼓に混じった獅子吼が轟いた。(四〇) 王よ、火のようなシンドゥ国王の守護者たちは、戦場であなたの息子を見て喜び勇んだ。(四一) 王よ、ドゥルヨーダナが従者とともに通り過ぎたのを見て、クリシュナはアルジュナに、次のような時宜に適した言葉を述べた。(四二)

（第七十六章）

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。

「アルジュナよ、見よ。スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）が通り過ぎた。彼は非常に驚異的だと私は思う（異本による）。彼に等しい戦士はいない。(一) 強力なドゥルヨーダナは遠方から矢を射ることができる偉大な射手で、武器に通達し、戦いに酔い痴れる。強固な武器の使い手で、めざましく戦う。(二) 彼はこの上なく幸福に育ち、勇士たちに尊敬され、常に敏腕である。しかしアルジュナよ、彼は常にパーンダヴァたちを憎む。(三) 非の打ち所のない者よ、あなたが彼と戦うべき時が来たと私は思う。あなたに勝負の時が来た。勝利か敗北か。(四) アルジュナよ、長いこと抱き続けた怒りの毒を彼に吐き出せ。この勇士は、パーンダヴァたちの不利益の根である。(五) 今や彼はあなたの矢の届く範囲にやって来た。手柄を立てよ。王国を望む王が

どうしてあなたと戦おうとするのか。(六) 幸いなことに、今や彼はあなたの矢の届く範囲にやって来た。アルジュナよ、彼の生命を奪え。(七) 彼は権力に酔い痴れて、苦しみを経験したことがない。そして彼は戦いにおけるあなたの力を知らない。人中の雄牛よ。(八) アルジュナよ、神と阿修羅と人間を含む三界は、戦いにおいてあなたに勝つことはできない。いわんやスヨーダナ一人は問題ではない。(九) アルジュナよ、幸いなことに彼はあなたの戦車の近くに来た。勇士よ、インドラがヴリトラを殺したように彼を殺せ。(一〇)

非の打ち所のない者よ、彼は常にあなたの不利益のために努力した。彼は賭博において、詐術によりダルマ王を騙した。(一一) 名誉を与える者よ、邪悪な彼は常に、罪のないあなた方に対し、多くの非常に卑劣な行為をした。(一二) この男は常に高貴でなく、卑しく、放埒である。アルジュナよ、気高く戦いの決意をして、ためらうことなく彼を殺せ。(一三) アルジュナよ、詐術により王国を奪われたこと、森での生活、クリシュナー(ドラウパディー)の苦難を思い出して勇武を発揮せよ。(一四) 幸いなことに、今や彼はあなたの矢の届く範囲にいる。幸いなことに、あなたの目的を妨害するために、彼は前方で努力している。(一五) 幸いなことに、彼は戦闘においてあなたと戦わなければならぬと考えている。アルジュナよ、幸いなことにあなたが望んでいたすべての願望はかなう。(一六) アルジュナよ、それ故、あの一族のうちの最低な男であるドゥルヨーダナを、戦いにおいて殺せ。かつて神々と阿修羅の戦いにおいて、インドラがジャンバを殺したように。(一七) もし彼があなたに殺されれば、彼の軍隊は主がなくなり、壊滅するであろう。この抗争を終わらせなさい。邪悪な者たちの根を

断ち切れ。(一八)」

サンジャヤは語った。——

アルジュナは彼に答えた。

「承知した。それは私がやらねばならぬことだ。他のすべてのことを無視して、スヨーダナのいる所へ行け。(一九) 彼はかくも長い間、棘(危険)のない我々の王国を享受して来た。私は戦場で勇敢に戦って、彼の頭を切るであろう。(二〇) クリシュナよ、苦難にふさわしくないクリシュナー(ドラウパディー)が髪を引っぱられたことに対し、復讐することもできよう(原文疑問)。(二一)」

二人のクリシュナはこのように話し、喜び勇んで、戦場でその王を求めて最上の白馬たちをかりたてた。(二二) バラタの雄牛よ、あなたの息子はその両者の近くに達し、大きな危険が来たのに、恐れることはなかった。わが君よ。(二三) すべての王族(クシャトリヤ)たちは、彼のことを称讃した。ためらうことなくアルジュナとクリシュナに向かって行ったからである。(二四) 王よ、それから戦場でその王を見て、すべてのあなたの軍隊の間に大音声があがった。(二五) 恐ろしい人々の喚声があがった時、あなたの息子は敵を攻撃して、食い止めた。(二六) 敵を苦しめるアルジュナは弓を持つあなたの息子に食い止められて、彼に対して怒った。(二七) ドゥルヨーダナとアルジュナがいきり立ったのを見て、恐るべき姿の王たちはいたるところから両者を見た。(二八) わが君よ、あなたの息子は怒ったアルジュナとクリシュナを

見て、嘲笑い、戦いを望んで呼ばわった。(二九)それから、クリシュナとアルジュナは喜び勇み、大声で叫び、最高の法螺貝を吹いた。(三〇)その二人が勇み立っているのを見て、すべてのクル族の人々は、あなたの息子の生命についての希望を失った。(三一)すべてのクル族の人々は最高の悲しみに達した。あなたの息子が火神の口に供えられたと考えたからである。(三二)あなたの戦士たちは、クリシュナとアルジュナが喜び勇んでいるのを見て、恐怖にかられ、「王は殺された、王は殺された」と叫んだ。(三三)
　ドゥルヨーダナは人々の叫びを聞いて言った。
「汝らの恐怖が去らんことを。私は二人のクリシュナを死神のもとに送ってやる。(三四)」
　王は勝利を望み、すべての兵たちにこのように告げてから、怒ってアルジュナに呼びかけ、次のように言った。(三五)
「もしお前がパーンドゥから生まれ、神的人的な武器を学んだのなら、すぐにそれを私に見せよ。(三六)お前の力とクリシュナの力とを、すぐに私に対して発揮せよ。我らはお前の能力を見ている。(三七)人々は我らの見ていない所でなされたお前の働きを讃える。君主たちに尊敬される働きをここで示せ。(三八)」

（第七十七章）

サンジャヤは語った。──
　ドゥルヨーダナ王はアルジュナにそう言ってから、急所を貫く三本の矢でアルジュナを射

た。そして高速の四本の矢で、四頭の馬を射た。(一)その直後に、彼は十本の矢でクリシュナを射た。そして半月形の先の矢で相手の突き棒（鞭）を断ち切って、地面に落下させた。(二)アルジュナは平然として、多彩な羽根を持つ、石で研がれた十四本の矢で、速やかに彼を射た。しかしそれらの矢は彼の鎧を貫くことができなかった。(三)アルジュナはそれらが効果がなかったのを見て、再び九本と五本（十四本）の鋭い矢を送った。しかしそれらも相手の鎧を貫くことができなかった。(四)放たれた二十八本の矢が効果がなかったのを見て、敵の勇士を殺すクリシュナはアルジュナに次のように告げた。(五)
「私はいまだかつて見たことのないことを見た。岩が歩き出すようなものだ。アルジュナよ、あなたに送られた矢が目的を達しないとは。(六)バラタの雄牛よ、ガーンディーヴァ弓の威力は変わりないか。あなたの握力や両腕の力は前と同じか。(七)今日、あなたとあの敵との、最後の時が訪れたのではないか（異本による）。たずねている私に答えてくれ。(八)アルジュナよ、この戦いにおいて、これらの矢が目的を遂げずに、ドゥルヨーダナの戦車に対して落下したのを見て、私の驚きは大きい。(九)アルジュナよ、あなたの矢は電撃のように恐ろしく、敵の身体を貫くのに、今日、目的を達しないとは、何と笑止のことか。(一〇)」
　アルジュナは言った。
「クリシュナよ、この意匠はドローナによるものだ。彼がドゥルヨーダナに鎧を着せた。これは私の矢で貫けないから（以上、異本による）。(一一)クリシュナよ、この鎧には三界すべての力がこもっている。実にただドローナ一人がそれを知っている。そして私も、その最上の人から〔学

んで〕知っている。(二二)矢でこの鎧を貫くことは絶対にできない。クリシュナよ、戦場でインドラ自身が金剛杵(ヴァジュラ)を用いてもそれを断つことはできない。(二三)クリシュナよ、あなたもそれを知りながら、どうして私をからかうのか。クリシュナよ、三界において起こったこと、今起こっていること、これから起こるであろうこと、それらすべてをあなたは知っている。クリシュナよ、あなたのように知っている者は他に誰もいない。(二四―二五)クリシュナよ、あのドゥルヨーダナはドローナにその鎧を着せられて、戦場に恐れることなく立っている。(二六)しかしクリシュナよ、この場合になすべきであると定められたことを彼は知らない。彼は適切に鎧を着ているが、女性のようにつけている。(二七)クリシュナよ、私の両腕の力と、弓の力とを見よ。鎧に守られていても、私はドゥルヨーダナをうち破るであろう。(二八)神々の主がこの輝く鎧をアンギラスに与えた。神々の主は更に、私にその鎧を与え、それを回収する方法を教えた。(二九)もし彼の鎧が梵天自身に作られたにしても、今日、私の矢に撃たれたら、あの愚かな者を守ることはできないであろう。(三〇)」

サンジャヤは語った。――

アルジュナはこのように告げると、矢を加持して引き絞った。彼がこのように何度も引き絞った弓の中央にある矢を、ドローナの息子(アシュヴァッターマン)はその一切の武器を破壊する武器によって断ち切った。(三一)バラモン(アシュヴァッターマン)が遠くから矢を断ち切るのを見て、白馬にひかれるアルジュナは驚嘆してクリシュナに告げた。(三二)

「クリシュナよ、私はこの武器を二度用いることはできぬ。その武器はまさにこの私を殺すであろう。しかし、今日、私の力を見よ。(二三)」

王よ、それからドゥルヨーダナは、その戦いにおいて、毒蛇のような真っ直ぐの九本の矢で二人のクリシュナを射た。そして更に、戦場で、クリシュナとアルジュナに矢を雨降らせた。(二四)その矢の大雨により、あなたの兵たちは喜び、楽器を鳴らし、獅子吼をあげた。(二五)それから、アルジュナは戦場でいきり立ち、口の端を舐めまわし、ドゥルヨーダナの身体を見たが、鎧に守られていない部分を見出さなかった。(二六)そこで死神のような鋭い矢を見事に放ち、相手の馬たちを殺し、両端の馬を御す二人の御者を殺した。(二七)そして強力な彼は、相手の弓と弓懸(ゆがけ)を断ち切った。そしてアルジュナは、相手の戦車を壊し始めた。(二八)それからアルジュナは、戦車を失ったドゥルヨーダナの両の掌を二本の鋭い矢で射た。(二九)ドゥルヨーダナがアルジュナの矢に苦しめられ、苦境に陥ったのを見て、最高の弓取りたちが彼を守ろうとして集まって来た。(三〇)彼らは幾千の戦車、装備した象と馬、猛り立つ歩兵の群によって、アルジュナを取り囲んだ。(三一)そこでアルジュナとクリシュナは、武器の大雨、人々の洪水によりおおわれ、彼らもその戦車も見えなくなった。(三二)

それからアルジュナは、武器の力によりその軍隊を殺した。戦車兵や象兵は粉砕されて、幾百となく倒れた。(三三)彼らはすでに殺され、あるいは殺されようとし、アルジュナの最高の戦車を把捉することができなかった。その戦車は静止し(テクストを少し変える)、周囲の敵たちから一クローシャ(一ヨージャナの四分の一の距離)ほどの所に立っていた。(三四)それからヴリシュニの勇士(クリシュナ)

は、急いでアルジュナに話しかけた。
「力いっぱい弓を引き絞れ。私は法螺貝を吹く。(三五)」
そこでアルジュナは、力をこめてガーンディーヴァ弓を引き、弓籠手(ゆごて)の音をたてて矢の大雨を放ち、敵たちを殺した。(三六) そしてクリシュナは、力強く高らかにパーンチャジャニヤを吹き鳴らした。そのまつ毛の先はほこりにおおわれ、彼は顔一面に汗をかいていた。(三七) その法螺の音と弓の響きにより、勇気がある人々もない人々も大地に倒れた。(三八) 彼らから脱け出た戦車は、風に動かされた雲のように輝いていた。
ジャヤドラタを守っている人々とその従者たちはいきり立った。(三九) そのシンドゥ国王を守っている人々は、突然アルジュナを見て、大地を震動させて種々の叫び声をあげた。(四〇) 偉大な者たちは、法螺の音と混じった、恐ろしい矢の音を響かせ、また獅子吼をあげた。(四一) あなたの兵たちのあげた恐ろしい音声を聞いて、クリシュナとアルジュナは法螺を吹いた。(四二) 王よ、山、海、大陸、地底界(パーターラ)を含むこの大地は、その大きな音に満たされた。(四三) バラタの最上者よ、その音は十方すべてを満たして、クル軍とパーンダヴァ軍の間で反響した。(四四) あなたの軍の戦士たちは、クリシュナとアルジュナを見て、最高にいきり立った。あなたの軍の勇士たちは、鎧を着た気高い二人のクリシュナを見て、怒って急いで襲いかかった。それは奇蹟のようであった。(四五―四六)
(第七十八章)

アルジュナに襲いかかるクル軍の戦士たち

サンジャヤは語った。――
あなたの兵たちは、ヴリシュニ・アンダカとクル(パーンダヴァ)の最上者たちを見るやいなや、殺そうとして急いで襲いかかった。ヴィジャヤ(アルジュナ)も同様に敵に襲いかかった。(一) すべての者は、燃火のような、黄金できらびやかな、虎皮でおおわれた、大音響をたてる大きな戦車により、すべての方角を輝かせていた。(二) 王よ、それらの戦車は金張りの弓により見られがたく、怒った蛇のように、無比の音をたてていた。(三) ブーリシュラヴァス、シャラ、カルナ、ヴリシャセーナ、ジャヤドラタ、クリパ、マドラ国王、最高の戦士ドローナの息子。(四) 以上の八名の勇士は、馬たちにより、虚空を飲むかのようだった。彼らは鎧を着ていきり立ち、十方を輝かせ、虎皮と黄金の月で飾られた、雲の群のような音をたてる戦車に乗り、いたるところで、鋭い矢によりアルジュナをおおった。(五―六) クルータ産のすばらしい馬がその勇士たちを運んだ。彼らは速やかに進み、十方を照らしつつ輝いていた。(七) 馬たちは血統がよく、高速で、山岳地帯、河川地帯、シンドゥの産など、種々の地方で生じたものである。王よ、クルの最高の戦士たちは、それらの最高の馬により、あなたの息子を守ろうとして、アルジュナの戦車に対し、いたるところから速やかに襲いかかった。(八―九) 王よ、彼ら最高の勇士たちは大法螺を吹き、天と大地と海を満たした。(一〇) 一切の生類のうちの最

上者であるアルジュナとクリシュナはそれぞれ、地上において、一切の法螺のうちの最高のものである、デーヴァダッタとパーンチャジャニヤを吹いた。(一一) アルジュナが発したデーヴァダッタの音は、地上と空中と天上を満たした。(一二) 同様に、クリシュナが発したパーンチャジャニヤは、すべての音を凌駕して天地を満たした。(一三) このように、臆病者に恐怖を生じさせ、勇士の歓喜を増大させる、恐ろしい喧噪が進行していた。(一四) そして、ベーリ、ジャルジャラ、アーナカ、ムリダンガ（いずれも太鼓の種類）が何度も鳴らされた。王中の王よ。(一五) その時、ドゥルヨーダナのためを願う、勇士として知られる最高の弓取りである各地の王たちは、それぞれの兵たちに守られていたが、その音に我慢できなくなって怒った。(一六) 勇猛な偉大な戦士たちは、クリシュナとアルジュナに対抗して、激して大法螺を吹いた。(一七) 王よ、あなたの軍隊は法螺の音に興奮し、その戦車兵と象兵と騎兵は動揺し、不安な状態になった。(一八) 勇士たちは法螺の音を響かせ、虚空は雷鳴が響くかのようにひどく苦しんで見えた。(一九) 王よ、その非常に大きな音は、すべての方角を鳴り響かせ、宇宙紀（ユガ）の終末の大音響のように、あなたの軍隊を恐れさせた。(二〇)

それから、ドゥルヨーダナと、偉大な戦士である八名の王たちは、ジャヤドラタを守るために、アルジュナを取り囲んだ。(二一) ドローナの息子（アシュヴァッターマン）は七十三本の矢でクリシュナを射た。そして三本の矢でアルジュナを、五本の矢でその旗と馬たちを射た。(二二) クリシュナが射られた時、アルジュナはこの上なく怒り、六百本の矢で彼を射た。(二三) そして強力なアルジュナは、十二本の矢でカルナを、三本の矢でヴリシャセーナを射てから、シャ

リヤの矢をつがえた弓をその握りのところで断ち切った。(二四) そこでシャリヤは別の弓をとってアルジュナを射た。ブーリシュラヴァスも、石で研いだ金の羽根のついた三本の矢でアルジュナを射た。(二五) カルナは二十二本の矢で、ヴリシャセーナは五本の矢で、ジャヤドラタは七十三本の矢で、クリパは十本の矢で、そしてマドラ国王は十本の矢で、戦場においてアルジュナを射た。(二六)

それからドローナの息子は、六十本の矢でアルジュナを射て、クリシュナを七十本の矢で、そして再び五本の矢でアルジュナを射た。(二七) しかし、白馬たちにひかれクリシュナを御者とする人中の虎（アルジュナ）は笑って、手練の早業を見せ、彼らすべてに射返した。(二八) 彼は戦場において、十二本の矢でカルナを射て、三本の矢でヴリシャセーナを射てから、シャリヤの弓をその握りのところで断ち切った。(二九) そして三本の矢でソーマダッタを、十本の矢でシャリヤを、火焔のように鋭い八本の矢でドローナの息子を射た。(三〇) 二十五本の矢でガウタマ（クリパ）を、百本の矢でシンドゥ国王を、そして再び七十本の矢でドローナの息子を射た。(三一) ブーリシュラヴァスは怒って、クリシュナの突き棒（鞭）を断ち切った。そして七十三本の矢でアルジュナを射た。(三二) するとアルジュナは怒って、速やかに幾百の鋭い矢で敵たちを撃退した。強風が雲を吹き飛ばすように。(三三)

（第七十九章）

〔第八十章で勇士たちの旗標の特徴が説かれるが、省略する〕

ドローナに圧倒されて退却するユディシティラ

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、アルジュナがシンドゥ国王に迫った時、ドローナに食い止められたパーンチャーラの軍はクル軍とともにどのように戦ったか。（一）」

サンジャヤは語った。——

大王よ、その日の午後の、パーンチャーラ軍とクル軍の身の毛がよだつ戦いにおいては、ドローナを中心に戦いが行なわれた。（二）わが君よ、パーンチャーラ軍はドローナを殺そうと望み、喜び勇んで、雄叫びをあげて矢の雨を浴びせた。（三）それからパーンチャーラ軍とクル軍の間に、神と阿修羅との戦いのように恐ろしく、驚異的な激戦が行なわれた。（四）パーンチャーラ軍はパーンダヴァたちとともに、ドローナの戦車に迫り、彼の軍隊を破ろうと望んで強力な武器を用いた。（五）戦士たちは戦車に乗り、〔大地を〕震動させ、中位の速度で、ドローナの戦車の近くに行った。（六）（七―一七略）

バラタの最上者よ、それからユディシティラは九十本の真っ直ぐの矢でドローナのすべての急所を射た。（一八）バラタの最上者よ、ドローナは誉れあるユディシティラにより怒らされ、二十五本の矢で相手の胸の間を射た。（一九）そして更に、ドローナはすべての戦士が見

ている前で、二十本の矢により相手とその馬と御者と旗を射た。（二〇）徳性あるユディシティラは手練の業を発揮し、矢の雨により、ドローナの放ったそれらの矢を防いだ。（二一）それからドローナは大いに怒り、戦場において弓をとり、偉大なダルマ王の弓を激しく断ち切った。（二二）それからその勇士は急いで、弓を切られた相手を、いたるところ幾千の矢でおおった。（二三）ユディシティラ王がドローナの矢により見えなくなったのを見て、一切の生類は王が殺されたと考えた。（二四）ある人々は、彼が退却したと考えた。あるいは、誉れ高いバラモン（ドローナ）により王は捕えられたと考えた。王中の王よ。（二五）

ダルマ王ユディシティラは最高の窮地に陥ったが、その戦いでドローナに切られた弓を捨てて、他の重荷を除く神聖にして最高に強力な弓をとった。（二六）そしてその誉れ高い勇士は、戦場でドローナが放った矢を幾千と断ち切った。それは奇蹟のようであった。（二七）王はそれらの矢を断ち切ってから、怒りで眼を赤くして、山々をも裂くような槍を戦場でつかんだ。それは金の柄を持ち、非常に恐ろしく、八個の鈴がついていて、恐怖をもたらす。（二八）強力な彼はその槍を投げ上げて、喜んで力強く叫んだ。その叫びですべての生類を恐れさせつつ。バーラタよ。（二九）ダルマ王が戦場で槍を投げ上げたのを見て、すべての生類は突然、「ドローナに幸いあれ」と叫んだ。（三〇）王の腕により放たれたその槍は、脱皮した蛇のようであった。それは空と諸方と中間の方角を輝かせつつ、ドローナのもとに達した。燃える口をした雌蛇のように。（三一）王よ、最高に武器に通達したドローナは激しく飛来するその槍を見て、梵天の武器（ブラフマ・アストラ）を現出した。（三二）その武器はその恐ろしい槍を灰に

して、速やかに誉れあるユディシティラの戦車に向かった。（三三）すると叡知あるユディシティラ王は、その発せられたドローナの武器を、ブラフマ・アストラにより鎮めた。バーラタよ。（三四）そして彼は戦場において、真っ直ぐの五本の矢でドローナを射て、鋭い馬蹄形の先の矢で、ドローナの大弓を断ち切った。（三五）王族（クシャトリヤ）を粉砕するドローナは、その切られた弓を捨てて、ダルマの息子に向かって激しく棍棒を投げた。わが君よ。（三六）敵を苦しめるユディシティラはその激しく飛来する棍棒を見て猛り立ち、彼も棍棒をつかんで投げつけた。（三七）互いに相手に放ったその二本の棍棒は、衝突して火花を放ち、大地に落ちた。（三八）

わが君よ、それからドローナは大いに怒り、四本の鋭い最高の矢で、ユディシティラの馬たちを射た。（三九）それから一本の矢で相手の弓を断ち切り、もう一本の矢でインドラの旗のような旗を切り、三本の矢でユディシティラを苦しめた。（四〇）ユディシティラ王は馬を殺された戦車から速やかに飛び下りると、武器を持たず、上方に腕を上げて立った。バラタの雄牛よ。（四一）王よ、彼が戦車を失い、とりわけ武器も失ったのを見て、ドローナは敵たちとすべての軍隊を混乱させた。（四二）堅く誓戒を守るドローナは、手練の早業を発揮し、鋭い矢の群を放ち、強力な獅子が鹿に襲いかかるように王に襲いかかった。（四三）敵を滅ぼすドローナが彼に襲いかかるのを見て、「ああ、ああ」という叫びが突然パーンダヴァ軍に生じた。（四四）わが君よ、「ドローナに王が殺された、殺された」という大きな叫び声が、パーンダヴァ軍のいたるところであがった。（四五）それからユディシティラ王は、急いでサハデーヴァの戦車に乗り、駿馬たちにひかれて退却した。（四六）

（第八十一章）／（第八十二章～第八十三章略）

ガトートカチャ、羅刹王アランブサを殺す

サンジャヤは語った。——

アランブサ（羅刹王の名）が戦場で恐れを知らぬかのように動きまわっていた時、ヒディンバーの息子（ガトートカチャ）が速やかに彼に向かって行き、鋭い矢で彼を射た。（一）羅刹の獅子であるその両者は、インドラとシャンバラ（悪魔の名）のように、種々の幻術（マーヤー）を用いて、両者の間に恐怖をもたらす戦いが行なわれた。（二）アランブサは激しく怒ってガトートカチャを攻撃した。一方ガトートカチャは、二十本の鉄矢でアランブサの胸の間を射て、繰り返し獅子のように吼えた。（三）王よ、アランブサの方も、戦いに酔うガトートカチャを何度も射て喜び勇んで空をいたるところ響かせて雄叫びをあげた。（四）それから強力な二名の羅刹は激しく怒り、お互いに幻術を用いて、互角に戦った。（五）幻術合戦に巧妙な誇り高い両者は、幾百の幻影を創り出してお互いに惑わせて、幻術合戦を戦った。（六）王よ、その戦いにおいて、ガトートカチャが幻影を現わす度に、アランブサは幻術によりそれぞれそれを無効にした。（七）幻術合戦に長けた羅刹王アランブサがこのように戦っているのを見て、パーンダヴァたちは怒った。（八）王よ、ビーマセーナなどの勇士は、激しく怒って、戦車によりいたるところから彼を攻

撃した。(九) わが君よ、彼らは戦車群で彼を取り囲み、人々が松明で象を攻撃するように、いたるところから彼に矢を浴びせた。(一〇) 彼は武器(アストラ)(呪句)の幻力で彼らの激しい武器を無効にして、その戦車団から脱した。象が森火事から脱出するように。(一一) 彼はインドラの雷電のような音をたてる恐ろしい弓を引き絞り、二十五本の矢で風神の息子(ビーマ)を、五本の矢でビーマセーナの息子(ガトートカチャ)を、三本の矢でユディシティラを、七本の矢でサハデーヴァを射た。(一二) わが君よ、それから彼は七十三本の矢でナクラを、五本ずつの矢でドラウパディーの息子たちを射て、恐ろしい叫び声をあげた。(一三) それに対し、ビーマセーナは九本の矢で、サハデーヴァは五本の矢で、ユディシティラは百本の矢でその羅刹を射た。ナクラは六十四本の矢で、ドラウパディーの息子たちは三本ずつの矢で彼を射た。(一四)

強力なヒディンバーの息子(ガトートカチャ)はその戦いにおいて、五百本の矢でその羅刹を射てから、更に七十本の矢で彼を射て雄叫びをあげた。(一五) その偉大な射手は、いたるところから勇士たちにしたたか射られたが、彼らすべてに五本ずつの矢を射返した。(一六) その戦いで、ヒディンバーの息子である羅刹は怒り、怒った相手の羅刹を七本の矢で射貫いた。バラタの最上者よ。(一七) 強力な羅刹王は強力な彼に手ひどく射貫かれたが、金の羽根のついた、石で研がれた矢を速やかに放った。(一八) それらの真っ直ぐの矢は、羅刹(ガトートカチャ)の身体に入った。怒った強力で恐ろしい蛇たちが山に入るように。(一九) そこでパーンダヴァたちは心配し、いたるところから鋭い矢を放った。ヒディンバーの息子ガトートカチャも矢を放った。(二〇)

アランブサは戦場で勝ち誇るパーンダヴァたちに傷つけられて〔死のうとしていた〕。〔ガトートカチャは、〕燃える山頂か砕けた墨(アンジャナ)の堆積のような彼を両腕で持ち上げて、何度も振りまわし、満水の瓶を石に打ちつけて砕くように、速やかに彼を地面にたたきつけて砕いた。(テクスト疑問。補って解した)(二一―二二) 腕力と敏捷さと勇武をそなえたビーマの息子は、その戦いで怒り、すべての兵士たちを戦慄させた。(二三) 勇士ガトートカチャに殺されたアランブサは、全身ずたずたになり、骨も飾りも砕けた。(二四)

その夜行の者(アランブサ)が殺された時、パーンダヴァたちは喜び、獅子吼をして衣服を揺り動かした。(二五) そしてあなたの兵たちは、その恐ろしい姿の強力な羅刹王アランブサが、砕けた山のように殺されたのを見て、「ああ、ああ」という叫び声をあげた。バラタの雄牛よ。(二六) 人々は好奇心にかられて、たまたま大地に落ちている炭〔の堆積〕のようなその羅刹を見た。(二七) ガトートカチャは最強の羅刹を殺して、大きな叫び声をあげた。インドラがバラを殺して叫ぶように。(二八) その困難な仕事がなされた時、ガトートカチャは父たちとその縁者たちに讃えられた。彼は熟したアランブサ(果実の名)のようなアランブサという敵を殺して喜んだ。(二九) それから、法螺貝と種々の矢の音が混じった大音声があがった。クル族の人々はその音を聞いて、対抗して叫んだ。そこでその大音響が全世界に広がった。(三〇)

(第八十四章)

サーティヤキ、ユディシティラに要請される

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、ユユダーナ（サーティヤキ）はどのようにしてドローナを食い止めたか。ありのままに語ってくれ。私は最高に興味があるのだ。（一）」

サンジャヤは語った。——

大知者である王よ、お聞きなさい。ドローナと、サーティヤキに率いられたパーンダヴァとの、身の毛がよだつ戦いを。（二）

わが君よ、自軍がサーティヤキに殺されるのを見て、ドローナは自ら不屈の勇者サーティヤキに襲いかかった。（三）激しく襲来するその勇士ドローナに対し、サーティヤキは二十五本の小矢（クシュドラカ）（矢の種類）を送った。（四）戦いにおいて勇猛なドローナも、心を統一し、金の羽根のついた、石で研いだ五本の矢で、速やかにサーティヤキを射た。（五）王よ、それらの矢は堅固な鎧を貫通し、息を吐く蛇のように、敵の肉を食らい、大地に入った。（六）強力なサーティヤキは突き棒に苦しめられた象のように怒り、五十本の火のような矢でドローナを射た。（七）その戦いで、サーティヤキに貫かれたドローナは、速やかに、奮闘するサーティヤキを多くの矢で射た。（八）そして更に、その強力で偉大な射手は、百本の真っ直ぐの矢でサーテ

ィヤキを苦しめた。（九）王よ、サーティヤキは戦場でドローナに射られて、何をなすべきかわからなかった。（一〇）王よ、ドローナが戦場で鋭い矢を放っているのを見て、サーティヤキは顔を曇らせた。（一一）王よ、あなたの息子たちと兵士たちは、彼がそのようであるのを見て、心から喜んで、獅子のように何度も歓声をあげた。（一二）

その恐ろしい叫びと、サーティヤキが苦しめられていることを聞き、ユディシティラはすべての兵たちに告げた。バラタ族の王よ。（一三）

「真実の行為をなす、ヴリシュニの最上者である勇士サーティヤキは、戦いにおいて勇士ドローナに呑まれようとしている。太陽がラーフに呑まれるように。サーティヤキが戦っている場所に走って行け。（一四）」

王よ、そして彼はパーンチャーラの王子ドリシタデュムナに向かって言った。

「速やかにドローナの所に行け。パールシャタよ、あなたは何故立ち止まっているのか。ドローナにより我々に恐ろしい危険が迫っているのを見ないのか。（一五）あの偉大な射手ドローナは、戦場において、サーティヤキで遊んでいる。子供が糸につながれた鳥で遊ぶように。（一六）ビーマセーナをはじめとするすべての戦士たちは、あなたとともに、奮起してサーティヤキの戦車の方に行くがよい。（一七）私は軍隊を率いて、あなたの後から行く。ヤマ（閻魔）の牙の間に入ったサーティヤキを救え。（一八）」

パーンダヴァの王はこのように告げて、サーティヤキを救うために、全軍を率いて戦場でドローナに向かって走った。（一九）ただドローナ一人と戦おうと望む、すべてのパーンダヴ

ア軍とスリンジャヤ軍の叫び声は大きなものであった。あなたに幸あらんことを。(二〇) 人中の虎よ、彼らは勇士ドローナに近づいて、鷺(カンカ)と孔雀の羽根のついた鋭い矢を浴びせた。(二一) しかしドローナは、それらの勇士たちを自ら迎え入れた。訪れた客人を、水と座席を出して歓迎するように。(二二) 王よ、弓をとるドローナの矢により、彼らは満足した。客人がよくもてなす家に来て満足するように。(二三) 王よ、彼らはすべてドローナを見つめることができなかった。正午に達した太陽を見ることができないように。(二四) 一方、最高の戦士ドローナは、彼らすべての勇士たちを、矢の群により苦しめた。太陽が光線で苦しめるように。(二五) 王よ、その戦いにおいて殺されるパーンダヴァとスリンジャヤの軍は、泥にはまった象のように、守護者を見出せなかった。(二六) ドローナの放つ強力な矢は、いたるところを熱する太陽の光線のように見えた。(二七) ドローナはその戦いにおいて、偉大な戦士に数えあげられる、ドリシタデュムナに尊敬される二十五名のパーンチャーラの戦士を殺した。(二八) 人々は、パーンダヴァとパーンチャーラの全軍において、主立った勇士たちをドローナが次々と殺しているのを目撃した。(二九) 大王よ、ドローナは百名のケーカヤの兵を殺し、いたるところ彼らを敗走させ、病人にとっての死神のように立っていた。(三〇) 勇士ドローナは、幾百幾千のパーンチャーラ、スリンジャヤ、マツヤ、ケーカヤ、パーンダヴァの軍をうち破った。(三一) ドローナの矢に殺される彼らの声は、森で火に焼かれる森に住む者たちの声のようだった。(三二) そこでは、神々とガンダルヴァと祖霊たちは言った。

「王よ、このようにパーンチャーラとパーンダヴァの人々が軍隊とともに逃走する。(三三)」

このように戦場でソーマカ(パーンチャーラ)軍を殺しているドローナに対し、いかなる人々も向かって行かず、矢を射かけなかった。(三四)

このように最高の勇士たちの恐ろしい滅亡が進行している時、ユディシティラは突然パーンチャジャニヤの音を聞いた。(三五) シンドゥ国王を守る勇士たちが戦い、ドゥルヨーダナの軍がアルジュナの戦車に対して叫んでいる時、クリシュナに吹かれた法螺の王(パーンチャジャニヤ)が大きな音で鳴り響いたのであった。(三六) そしてガーンディーヴァ弓の音はまったく聞こえなかった。パーンダヴァの王は憂鬱になって考え込んだ。(三七)

「きっとアルジュナは無事でいないのだ。法螺の王が鳴っていて、クル軍の人々が喜んで繰り返し叫んでいるから。(三八)」

アジャータシャトル(ユディシティラ)は乱れた心でこのように考えて、涙で口ごもりつつ、シニの雄牛サーティヤキに告げた。彼は何度も当惑したが、次になすべきことは考慮していた。(三九―四〇)

「シニの孫よ、かつて善き人々は、困難な時の友人の義務について、永遠の法(ダルマ)を教示したが、今やそれをなすべき時が来た。(四一) シニの雄牛サーティヤキよ、考えてみても、すべての戦士たちのうちであなたより親しい者を私は誰も知らない。(四二) いつも心から愛してくれる者、常に忠実な者が、困難な時に用いられるべきであると私は考える。(四三) クリシュナが常にパーンダヴァたちの寄る辺であるように、ヴリシュニの勇士よ、あなたも勇武にかけてクリシュナに等しい。(四四) そこで私はあなたに重荷を委ねる。どうか担ってくれ。

私の願いを決して空しくしてくれるな。(四五) そこであなたは、戦いにおいて、兄弟、友人、師(グル)であるアルジュナを援護するために苦労してくれ。人中の雄牛よ。(四六) あなたは誓約を守り、勇猛で、友たちの恐怖を除く。勇士よ、あなたはその行為により、真実を述べると世に知られている。(四七) シニの孫よ、友のために戦って身体を捨てる人と、バラモンたちにこの大地を与える人とでは、その功徳は同等である。(四八) このすべての大地を作法に従ってバラモンたちに与え、天界へ行った多くの王たちについて、我々は聞いたことがある。(四九) 徳性ある王よ、大地の布施に等しい果報、いやそれ以上の果報があなたにあるように。私は合掌してあなたにお願いする。(五〇) クリシュナはただ一人、常に友たちの恐怖を除き、戦いにおいて生命を捨てる。サーティヤキよ、あなたは第二の男だ(彼に等しい)。(五一) 勇敢に戦い、名誉を求める勇士にとって、勇士のみが援護者である。その他の一般の人々はそうではない。(五二) サーティヤキよ、このような苦境に陥っているアルジュナを戦場で守る者は、あなた以外にはいない。(五三) アルジュナはあなたの諸行為を讃えつつ、私に喜びを生じさせて、繰り返し称揚した。(五四)

『サーティヤキは手練の業で武器を用い、めざましく戦い、迅速に攻撃する。彼は知者であり、一切の武器を知り、勇士で、戦いにおいて迷うことはない。(五五) 彼は大きな肩と大きな胸と大きな腕をして、大きな弓を持つ。大力で強力であり、偉大で、大戦士である。(五六) 彼は私の弟子、友である。彼にとって私は愛しく、私にとって彼は愛しい。ユユダーナ(サーティヤキ)は私の援助者であり、クル族の軍を粉砕するであろう。(五七) 王中の王よ、確かに

クリシュナ、(バラ)ラーマ、アニルッダ、勇士プラデュムナも、ガダ、サーラナ、サーンバも、ヴリシュニの人々とともに、戦いの頂点において我々を援助するために、具足をつけて戦うであろう。大王よ。(五八―五九) それにしても、私としては、不屈の勇者であるあのシニの孫である人中の虎に援助を仰ぎたい。私にとって、彼に等しい者は他にいない。(六〇)』

アルジュナはドゥヴァイタの森で私にそう言った。貴人たちの集会において、あなたのいない所で、あなたの諸々の真正な美質を語りながら。(六一) ヴリシュニの勇士よ、あなたはアルジュナの願いと、私とビーマの二人の願いを空しくしてはならぬ。(六二) 私は諸聖地をまわって、ドゥヴァーラカーに行ったが、そこで私も、あなたのアルジュナに対する献身的な愛を見た。(六三) シニの孫よ、我々が苦境にあった間に、あなたが我々を愛してくれたような友情を、私は他の人々に見出すことはなかった。(六四) 勇士サーティヤキよ、そこであなたは高貴な生まれで、我々に愛情を抱いているから、どうか友であり師であるアルジュナに同情して、あなたの友情、力、高い家柄、真実にふさわしい行為をしていただきたい。(六五―六六)

スヨーダナ(ドゥルヨーダナ)はドローナに鎧をつけてもらって、先にクル族の勇士たちが行った後を急いで追って行った。(六七) アルジュナのいる方向で非常に大きな叫び声が聞こえる。シニの孫であるサーティヤキよ、どうか急いで行ってくれ。(六八) ビーマセーナと私らは兵たちとともに奮闘して、もしドローナがあなたの方に向かうなら、彼を食い止めよう。(六九) シニの孫よ、見よ。兵たちは戦場で逃走している。バラタ族の軍隊は戦いにおいて大

声をあげている。（七〇）月相の変わり目に激しい大風に揺り動かされる海のように、ドゥルヨーダナの軍はアルジュナに動揺させられた。（七一）戦車、馬、人は走りまわり、軍隊はほこりをたてて退却した。（七二）敵の勇士を殺すアルジュナは、鉤爪や槍で戦う、非常に尊敬される、シンドゥとサウヴィーラの勇士たちに取り囲まれた。（七三）この軍隊を退けずしてジャヤドラタを殺すことはできない。というのは、彼らはすべて、シンドゥ国王のために生命を捨てているからである。（七四）見よ。ドゥルヨーダナの軍隊は非常に難攻である。矢と槍と軍旗は森のようであり、馬と象に満ちている。（七五）太鼓の音、法螺の音、獅子吼の大音声を聞け。（七六）幾千となく、大地をふるわせて走る、象兵、歩兵、騎兵のたてる音を聞け。（七七）前方にはシンドゥ国王の軍、後方にはドローナの軍（異本による）。人中の虎よ、その軍は数が多いから、神々の王（インドラ）をも悩ませるであろう。（七八）アルジュナは限りない軍隊に埋没して、生命を捨てるであろう。もし彼が戦死すれば、私のような者がどうして生きながらえるだろうか。あなたが生きているのに（異本による）、私はすっかり苦境に陥った。（七九）パーンドゥの息子アルジュナは浅黒く、若くて、見目麗しい。その勇士は手練の業で武器を用い、めざましく戦い、日の出時にバラタの軍隊に突入した。友よ。そして昼が過ぎようとしている。サーティヤキよ、彼が生きているかどうか、私は知らない。そしてクル族の大軍は海のようである。（八〇―八一）友よ、勇士アルジュナは激戦において、ただ一人でバラタ族の軍に突入した。その軍は神々によっても抗しがたいのに。（八二）今日、私はどうしても戦おうという気になれない。ドローナは戦いにおいて激しく私の軍隊を苦しめる。勇士よ、あなたもあ

のバラモンがどのように活躍するか現に見た。（八三）あなたは諸々のなすべきことが同時にやって来た時、最も重大なことを迅速にすることができる。サーティヤキよ。（八四）すべてのなすべきことのうちで、戦場においてあのアルジュナを救うことが最もなすべきことであると常に私は考える。（八五）世界の守護者である主クリシュナのことは、私は悲しまない。というのは友よ、彼は三界が集結したとしてもそれを破ることができる。（八六）いわんや非常に弱いドゥルヨーダナの軍隊に勝つことなど簡単である。人中の虎よ、私はあなたにこの真実を述べる。（八七）しかしサーティヤキよ、アルジュナは、戦いにおいて多くの者たちに苦しめられ、戦場において生命を捨てるかも知れぬ。それ故、私は気弱になっているのだ。（八八）あなたは彼の足跡をたどって行け。というのはあなたのような人は、このような時、私のような者にうながされて、彼のような者の足跡をたどるべきであるから。（八九）戦いにおいて、ヴリシュニの勇士たちのうちで、ただ二人だけが超戦士であると言われている。すなわち、勇士プラデュムナ（クリシュナの息子）と、あなたとが有名である。（九〇）あなたは武器にかけてナーラーヤナ（ヴィシュヌ＝クリシュナ）に等しく、腕力にかけてサンカルシャナ（バララーマ）に等しい。そして勇猛さにかけてアルジュナに等しい。人中の虎よ。（九一）あなたはビーシュマやドローナを凌駕し、すべての戦闘に通達している。サーティヤキよ、人中の虎であるあなたについて、善き人々は言う。『サーティヤキにとって、この世で達成されないことはない』と。強力な者よ、私が言うことを実行せよ。（九二―九三）世の人々はあなたとアルジュナの両者を尊敬している。勇士よ、ここでその尊敬を無にすることはよろしくない。（九四）親しい人々も生命も

捨てて、戦いにおいて勇士らしく行動せよ。シニの孫よ、まことにダーシャールハ（ヤーダヴァ）たちは、戦いにおいて生命を惜しまないものだ。（九五）戦場で戦わないこと、確固としないこと、逃走すること。以上は立派でない臆病者の道である。ダーシャールハの人々は決してそのようにはしない。（九六）友よ、徳性あるアルジュナはあなたの目上である。シニの雄牛よ。そしてクリシュナは、あなたと英邁なアルジュナの目上である。（九七）私はこの二つの理由を考えて、あなたに告げる。私の言葉を軽んじてはならぬ。私はあなたの目上の目上であるから。（九八）これはクリシュナの考えであり、私とアルジュナの考えでもある。私はこの真実をあなたに述べた。アルジュナのいる所へ行け。（九九）不屈の勇者よ、この私の言葉を聞いて、邪悪なドゥルヨーダナの軍に突入せよ。友よ。（一〇〇）サーティヤキよ、適切に突入して、偉大な戦士たちと交戦して、戦場において自分の働きをふさわしく示しなさい。（一〇一）」

（第八十五章）

サーティヤキの迷い

サンジャヤは語った。——

ダルマ王のその言葉は、愛情あふれ、心地よく、優しい響きを持つ。時宜にかない、すばらしく、道理にかなって（異本による）説かれた。バラタの最上者よ。シニの雄牛サーティヤキはその言葉を聞いて、ユディシティラに答えた。（一―二）

「不滅の人よ、私はあなたが言われた言葉をすべて聞いた。それは道理あり、多彩で、すばらしく、アルジュナのために名誉をもたらす。（三）王中の王よ、このような時、私のような親密な者を見て、アルジュナのために、アルジュナに告げるように私に告げるのがふさわしい。（四）私はアルジュナのためなら決して生命を惜しまない。しかもあなたに命じられたら、激戦において何をなさないであろうか。（五）王中の王よ、あなたに命じられたら、私は神と阿修羅と人間を含む三界とすら戦うであろう。いわんやあの無力の奴とは……。（六）今日、私はすべてのスヨーダナの軍と戦うであろう。王よ、私は戦いに勝利するであろう。私はあなたにこの真実を述べる（誓う）。（七）王よ、巧みな私は巧みなアルジュナの所に行き、ジャヤドラタが殺されたら、あなたのもとに再び帰って来るだろう。（八）しかし王よ、私はどうしてもクリシュナと英邁なアルジュナの言葉をすべてあなたに申し上げなければならぬ。（九）アルジュナは全軍の中で、クリシュナが聞いている時、繰り返し私に固く懇願した。（一〇）

『サーティヤキよ、今日は気高く戦う決意をして、油断することなく王を守れ。私がジャヤドラタを殺すまで。（一一）勇士よ、あなたか勇士プラデュムナに王を託して、私は安心してジャヤドラタに向かって行くことができる。（一二）というのは、ドローナが戦いにおいて強力で、最上であるとみなされていることはあなたも知っての通りだ。サーティヤキよ、そしてあなたはドローナの誓いも常に聞いている。（一三）ドローナはダルマ王を捕えようと切望している。そして彼は、戦いにおいてユディシティラを捕える能力がある。（一四）そこで最高の人よ、私は今日あなたにダルマ王を託して、シンドゥ国王を殺しに行く。（一五）サーテ

ィヤキよ、私は必ずやジャヤドラタを殺して帰って来る。しかし、もしドローナが戦場でダルマ王を捕えれば……。（一六）サーティヤキよ、最上の人がドローナに捕えられたら、シンドゥ国王の殺害は実現しないだろう。そうすれば嘆かわしいことだ。（一七）最上の人よ、真実を述べるパーンダヴァがそのようになれば、必ずや我々は再び森へ行かなくてはならぬだろう。（一八）もし、怒ったドローナが戦場でユディシティラを捕えれば、この私の勝利は明らかに無駄だということになろう。（一九）そこで勇士サーティヤキよ、あなたは今日、私によかれと思い、勝利のために、名誉と利益のために、戦いにおいて王を守れ。（二〇）』

王よ、そこであなたは、委託物としてアルジュナにより私に託されたのである。彼は常に、ドローナからの危険があなたにふりかかることを考慮している。（二一）勇士よ、ルクミニーの息子（プラデュムナ）を除いて、他にドローナに対抗できる者はいないと常に彼は考えている。王よ。あるいは私も、戦いにおいて英邁なドローナに立ち向かえると考えている。（二二）そこで私は、この評価と師匠（アルジュナ）の言葉に背くわけにはいかない。また、あなたを捨て置くことはできない。王よ。（二三）

師匠（ドローナ）は手練の業を持つから、断たれぬ鎧に身をつつみ、戦場であなたを得て、子供が鳥で遊ぶように弄ぶであろう。（二四）もしマカラ（海豚または鰐）の旗標を掲げるクリシュナの息子（プラデュムナ）が弓を持ってここにいれば、彼にあなたを託せたものを。彼はアルジュナのようにあなたを守ることができる。（二五）あなたは御自身を守らなければならぬ。私が行ってしまったら、誰があなたを守るか。私がアルジュナのもとに行っている間、誰が戦場でドローナに立ち向かうか。（二六）王よ、今日あなたはアルジュナについて恐れる必要はない。あの勇士は重責を担って、決してうちひしがれることはない。（二七）王よ、サウヴィーラの軍、シンドゥ・パウラヴァの軍、北部の軍、南部の軍、その他の勇士たち、カルナをはじめとする定評ある最上の戦士たち。彼らは怒ったアルジュナの十六分の一にも値しない。（二八―二九）王よ、神々、阿修羅、人間、羅刹の群、キンナラ、大蛇を含む動不動の全世界のものたちが決起しても、戦いにおいてアルジュナに敵わない。大王よ、そのように考えて、アルジュナについての恐れを捨てよ。（三〇―三一）不屈の勇者、偉大な射手である勇猛な二人のクリシュナがいる所では、事業が失敗することは決してない。（三二）あなたの弟が神的であること、アルジュナに通達していること、術策に長けていること、戦いにおいて猛り立つこと、恩を知ること、武器に慈悲あることを考えなさい。（三三）そして王よ、私がアルジュナの方に行き、いなくなった時、ドローナが戦場でどのようなめざましい武術を発揮するか考えてみなさい。（三四）王よ、師匠はあなたを捕えることをこよなく切望している。自分の誓いを守り、それを実現するために。パーラタよ。（三五）今は自身を守るべきである。私が行ったら誰があなたを守るか。プリターの息子よ、私は誰を頼りにしてアルジュナのもとに行けばよいのか。（三六）クルの大王（ユディシティラ）よ、私は激戦において、あなたを誰かに託さないではどこにも行かないであろう。私はこの真実をあなたに述べる（誓う）。（三七）最上の知者よ、このことを理性的によく考えて、理性的に最上のことを見きわめてから私に命令して下さい。王よ。（三八）」

ユディシティラは言った。

「勇士サーティヤキよ、あなたが言った通りだ。しかし貴君よ、アルジュナのことを心配し、私の気持は晴れないのだ。(三九) 私は自分を守ることに最大の努力を払おう。お願いする、あなたはアルジュナの行った方に行ってくれ。(四〇) 戦いにおいて自分を守ることと、アルジュナの方に行くこととのどちらが大事か理性的に考えると、行くことの方がよいと私には思われる。(四一) そこであなたは、アルジュナが行った所に行きなさい。強力なビーマが私を守るであろう。(四二) ドリシタデュムナとその弟である強力な王たち、ドラウパディーの息子たちが、疑いもなく私を守るであろう。友よ。(四三) 貴君よ、五名のケーカヤの兄弟、羅刹ガトートカチャ、ヴィラータ、ドルパダ、勇士シカンディン、強力なドリシタケートゥ、クンティボージャ、ナクラとサハデーヴァ、パーンチャーラ軍、スリンジャヤ軍、これらの人々が団結して、疑いもなく私を守るであろう。友よ。(四四―四五) ドローナとその軍隊、及びクリタヴァルマンは、戦いにおいて私を攻撃することはできないし、私をうち破ることもないだろう。(四六) そして敵を苦しめるドリシタデュムナは、戦いにおいて、奮戦して、怒ったドローナを食い止めるであろう。海岸が海を食い止めるように。(四七) 戦場において、敵の勇士を殺す彼が立つ所では、強力なドローナの軍も、決して進むことはできないだろう。(四八) 彼はドローナを殺すために、鎧をつけ弓矢と刀を持ち、美しい飾りをつけて、火の中から立ち上がったのである。(四九) シニの孫よ、安心して行け。私について迷うことはない。怒ったドリシタデュムナが戦いにおいてドローナを食い止めるであろう。(五〇)」

(第八十六章)

サーティヤキ、アルジュナのもとに行く

サンジャヤは語った。――

シニの雄牛はダルマ王の言葉を聞くと、王を捨てたことでアルジュナに非難されることを恐れた。(一) しかし何よりも自分が世間から非難されることを避けようとして、「私がアルジュナのもとに行けば、人々は私のことを怖気づいたと言わないだろう」と考えた。(二) 戦いに酔うサーティヤキは何度も決意して、ダルマ王に次のように告げた。人中の雄牛よ。(三)

「王よ、あなたに吉祥あれ。もしあなたが防御を固めたと考えるなら、私はアルジュナを追うであろう。あなたの命令に従おう。(四) 私にとって三界でアルジュナよりも愛しい者は他に誰もいない。王よ、私はこの真実をあなたに告げる。(五) 誇りを与える者よ、あなたの命令により私は彼の足跡をたどるであろう。あなたのためなら私は何でもする。(六) 最高の人よ、私にとって師の言葉は大切だが、あなたの言葉はもっと大切である。(七) というのは、クリシュナとアルジュナの〔義〕兄弟は、いつもあなたに好ましいように行動する。王中の雄牛よ、私はその両者に好ましいようにしていると知りなさい。(八) 王よ、私は頭を下げてあなたの命令を受け入れて、アルジュナのために、この破りがたい敵軍を破って進むであろう。最高の人よ。(九) 私は怒って、魚が海に入るように、ドローナの軍に入るであろう。王よ、ジャヤドラタ王のいる所に行くであろう。(一〇) 彼がアルジュナを恐れ、軍隊に依存し、

ドローナの息子やカルナやクリパなどの最高の勇士たちに守られている所に。(一一) 王よ、アルジュナがジャヤドラタを殺すべく努力している所は、ここから三由旬（ヨージャナ）ほどの距離であると思う。(一二) 王よ、彼は三由旬も進んだが、シンドゥ国王を殺すまで、私は決意も堅く、彼の足跡をたどるであろう。(一三) 目上（グル）に命令されないで、いかなる人が戦うであろうか。しかし王よ、あなたに命じられたら、私のような者がどうして戦わないだろうか。王よ、私が行くであろう場所について、私はよく知っている。(一四) 鉄棒、槍、棍棒、投槍（プラーサ）、剣、楯、太刀、刺股（トーマラ）、最高の矢に満ちた軍隊という海を、私は動揺させるであろう。(一五) 幾千の象軍が見えるでしょう。その象軍はアンジャナという血統に属し、そこにおける象たちは力に満ち、多くの戦いに酔う勇猛な蛮族（ムレーッチャ）たちに乗られる。王よ、それらの象は雲のようで、雲が雨を降らすように〔こめかみから分泌液を〕滴らせる。(一六―一七) その象たちは御者にかりたてられても決して退却しない。王よ、彼らを殺す以外に彼らをうち破ることはできない。(一八)

また、あの戦士たちがすっかり見えるでしょう。彼らはルクマラタという名の偉大な戦士である王子たちである。王よ、彼らは戦車、武器、象に巧みで、弓のヴェーダ（兵学）に通達しており、拳闘にも巧みである。(一九―二〇) 棍棒に通達し、格闘に巧みで、刀を持っての戦い、楯と剣との打ち合いにも巧みである。(二一) 王よ、彼らは勇士であり、武術を修め、お互いに競い合い、常に戦いにおいて人々に勝利しようと欲している。(二二) 王よ、彼らはカルナに支配され、ドゥフシャーサナに忠実に従う。クリシュナといえどもあれらの優れた戦士たちを讃える。(二三) 彼らはカルナの支配下にあり、いつも彼によかれと望んでいる。王よ、彼らはカルナの命令により、アルジュナから手を引いた。(二四) 彼らは無傷で疲れてもおらず、堅固な鎧と弓を持ち、きっとドゥルヨーダナの命令により私を待ち受けている。(二五) その後でクル族の王（ユディシティラ）よ、私はあなたのために、戦いにおいて彼らを粉砕して、その後でアルジュナの足跡をたどるであろう。(二六)

また王よ、あれらの他の七百頭の象たちが見えるでしょう。それらは鎧でおおわれ、キラータ（部族名）たちが乗っている。(二七) 以前、キラータの王はアルジュナに捕えられ、自分の生命が助かることを望み、それらの美しく飾られた象と従者たちを譲渡した。(二八) 王よ、かつてあれらは忠実にあなたのために働いていた。しかし今は、他ならぬあなたに対し戦おうとしている。見よ、時の移り変わりを。(二九) あの最高のキラータたちが象たちに乗っている。彼らは戦いに酔い、象学に通じ、すべてアグニに起源を持つ。(三〇) 彼らはすべて戦いにおいてアルジュナにうち破られた。今や彼らはドゥルヨーダナの支配下にあり、私を討つために身構えている。(三一) 王よ、私はその戦いに酔うキラータたちを矢でうち破ってから、シンドゥ国王を殺すことに専念するアルジュナの後を追うであろう。(三二)

一方、あれらの非常に大きな象たちは、アンジャナの一族に生まれ、堅い皮をし、よく訓練され、発情してこめかみが裂けて液を流している。(三三) 王よ、彼らは黄金製のありとあらゆる鎧によって美しく飾られ、戦場において目標を達し、アイラーヴァタ（インドラの象）のように戦う。(三四) 彼らは北の山から来て、残酷な悪魔（ダスユ）（または、アウトカースト）たちが乗っている。その最高

の戦士たちは荒々しく、黒い鉄製の鎧を着ている。(三五) 牛や猿から生まれた者たちや、その他多様な動物から生まれた者たちや、人間から生まれた者たちがいる。(三六) ヒマーラヤの砦に住む、悪をなす邪悪な蛮族(ムレーッチャ)たちの煙色をした軍隊は猛り立っている。(三七)

ドゥルヨーダナは以上のようなすべての象の軍団を得て、そしてまた、クリパ、ソーマダッタの息子、最高の戦士ドローナ、シンドゥ国王、カルナを得て、パーンダヴァたちを軽んじた。そして、カーラ(破壊神)にかりたてられて、自分の目的は成就したと考えた。(三八—三九) 彼らすべては私の矢の領域に入った。クンティーの息子よ、もし彼らが思考のように速いとしても免れることはないであろう。(四〇) あの他人の力に依存して生きる男(ドゥルヨーダナ)が常に尊重する者たちは、私の矢の群に苦しめられて滅亡するであろう。(四一)

また王よ、あそこに黄金の旗を持つ戦士たちが見えるでしょう。あれはあなたも聞く通り、抗しがたいカーンボージャの軍です。(四二) 彼らは勇士で、武術を修め、お互いによかれと望んで、固く団結している。(四三) バーラタよ、ドゥルヨーダナの軍団はクルの勇士たちに守られ、いきり立って、私を討つために身構えている。(四四) 大王よ、彼らは油断しないで、まさに私を待ち受けている。火が草を燃やすように、私は彼らを粉砕するであろう。(四五) それ故王よ、戦車の整備員たちに命じて、すべての矢筒、すべての資具を私の戦車に適切に準備させて下さい。(四六) 実にこのような戦いにおいては、種々の武器が用いられるべきである。学匠たちに教えられた五倍の戦車が必要である。(四七) というのは、私は毒蛇のような怒ったカーンボージャ軍と対戦するのであるから。種々の武器が入り混じり、種々の武器

で戦うあの軍と。(四八) 私は毒のようなキラータ軍と対戦するであろう。それは戦士を擁し、ドゥルヨーダナによかれと願い、常に王に可愛がられている。(四九) 私はシャカ族の軍とも対戦するであろう。それはシャクラ(インドラ)のように勇猛で、火のようであり、難攻で、燃火のようである。(五〇) 王よ、同様に他の大勢の戦いに酔う、カーラ(破壊神)のような種々の軍隊と私は対戦するであろう。(五一) それ故、吉相をそなえたすばらしい馬たちで、自由に歩きまわって疲れがとれ、太ったものたちを、再び私の戦車につないでくれ。(五二)」

そこで王は、すべての矢筒とすべての資具と種々の武器をサーティヤキの戦車に装備させた。(五三) それから人々は四頭の良馬を自由に放して、おいしくて興奮をかりたてる飲物を飲ませた。(五四) 四頭の馬たちは水を飲み、水浴し、食物を食べ、飾られ、矢を取り除かれ、黄金の環で飾られた。(五五) それらは奮起し、金色に輝き、よく訓練され、俊足で、喜び勇み、落着いていた。それらの馬を適切に戦車につないだ。(五六) その戦車は、金のたてがみで飾られる獅子の〔旗標の〕大きな軍旗と、宝玉と珊瑚できらびやかな金の旗でおおわれ、白雲のような幡に飾られていた。(五七) 黄金の柄の上に傘が高く掲げられ、多くの武器でおおわれたその戦車に、金の資具で飾られた馬たちをつないだ。(五八) サーティヤキの親友である、ダールカの弟の御者は、戦車を適切に準備した。マータリがインドラの戦車を準備するように。(五九)

それから最高に栄光あるサーティヤキは沐浴し、清浄になり、神聖な儀式を行ない、ヴェーダ修得者に千の金貨を与え、祝福の言葉を浴びた。(六〇) それから、接待されるにふさわ

しい彼は、カイラーヴァタ酒を飲み、酔いで眼をまわし、赤い眼をして輝いていた。(六一)
その最高の戦士は、勇士の杯を得て大喜びし、その威光は二倍になり、燃え上がる火のようになった。(六二) 彼はバラモンたちに祝福され、鎧を着て飾りつけられ、炒り米と香と花輪によって乙女たちに歓待された。(六三) 彼は合掌してユディシティラの両足に平伏し、王に頭に接吻され、大きな戦車に乗った。(六四) それから、よく太った風のように速い、シンドゥ産の無敵の馬たちは喜び勇んで、勝利の車をひいた。(六五)

その時、サーティヤキは全身で喜びを表わしてビーマに言った。

「ビーマよ、あなたは王を守れ。あなたにとって、それが最も大切な仕事だ。(六六) 私はカーラ（時間、破壊神）に煮られた敵軍を破って侵入するであろう。今でもこれから先でも、王を守ることが最も大切である。(六七) あなたは私の力を知っている。そして私はあなたの力を知っている。敵を制する者よ。それ故ビーマよ、引き返してくれ。もし私によかれと望むなら。(六八)」

そのように言われて、ビーマはサーティヤキに答えた。

「あなたは目的を成就するために行け。私は王を守るであろう。最高の人よ。(六九)」

そのように言われて、サーティヤキはビーマセーナに答えた。

「ビーマよ、速やかに行け。今日、私は必ず勝利する。(七〇) というのは、あなたは今日、私に優しくて忠実で、私の指示に従ってくれるから。ビーマよ、そして諸々の吉兆が私の勝利を告げる。(七一) 邪悪なシンドゥ国王が偉大なアルジュナに殺された時、私は疑いもなく

徳性ある王を抱きしめるであろう。(七二)」

気高いサーティヤキはビーマにこのように言って別れを告げ、虎が鹿の群を見るように、あなたの軍隊を見つめた。(七三) 王よ、あなたの軍隊は、侵入しようとする彼を見て、再びこの上なく度を失ってふるえた。(七四) 王よ、それからサーティヤキは、ダルマ王の命令によりアルジュナに会おうと望んで、あなたの軍隊に対して激しく進撃した。(七五)

(第八十七章)

進撃するサーティヤキを制止するドローナ

サンジャヤは語った。――

大王よ、ユユダーナ（サーティヤキ）が戦いを求めてあなたの軍隊に対し進撃した時、ダルマ王は自己の軍隊に囲まれて、ドローナの戦車を求めて、ユユダーナの後から進んで行った。(一) それから、戦いに酔うパーンチャーラの王子（ドリシタデュムナ）と、ヴァスダーナ王は、パーンダヴァ軍の中で叫んだ。(二)

「来い、速やかに攻撃せよ、駆けろ。戦いに酔うサーティヤキが容易に進めるように。(三) 実に多くの勇士たちが彼をうち破るために努力しているので。」

彼らはそう言いながら、急いであなたの軍隊を襲撃した。(四) 「我々はうち破りたいと望んで彼らを襲撃する」と言って。それから、サーティヤキの戦車の方で大きな音があがった。

（五）大王よ、あなたの息子の大軍はサーティヤキにより戦慄させられ、百に分断された。（六）その軍が分裂した時、シニの孫である勇士は、陣頭において七名の勇猛な大射手たちを粉砕した。（七）長い腕の（強力な）彼に踏みにじられ粉砕された勇士たちは恐れ、超人的な彼を見て戦場を捨てた。（八）わが君よ、車軸が砕かれ座席が壊れた戦車、砕けた車輪、切断され落ちている軍旗、車軸、幡、黄金で飾られた兜、栴檀香を塗り腕環をはめた腕、象の鼻のような、蛇（コブラ）のふくらんだ頸部のような腿によって大地はおおわれていた。最高の人である王よ。（九―一一）そして落ちている雄牛のような眼の男たちの、魅力的な耳環をつけた月のような顔により大地は輝いていた。バーラタよ。（一二）切られて横たわっている山のような多くの象たちにより、大地は散らばっている山々により輝くように輝いていた。（一三）馬たちはその勇士に粉砕され、生命を失って地面に倒れ、黄金製の引き綱、真珠の網で飾られたきらびやかな胸当てにより輝いていた。（一四）

サーティヤキはあなたの軍の種々の兵たちを殺して、多くの軍隊を敗走させてから、あなたの軍隊に侵入した。（一五）それからサーティヤキは、まさにアルジュナが進んだ道をたどって行こうとしたが、ドローナに制止された。（一六）わが君よ、サーティヤキはドローナに遭遇して怒ったが、それ以上進むことができなかった。海が海岸を越えて進まないように。（一七）ドローナは戦場において勇士サーティヤキを制止し、急所を断つ五本の鋭い矢で彼を射貫いた。（一八）王よ、しかしサーティヤキはその戦いにおいて、金の矢筈（やはず）を持ち鷺（カンカ）の羽根のついた、石で研いだ七本の矢でドローナを射貫いた。（一九）そしてドローナは、六本の矢

により、彼と馬たちと御者を攻撃した。勇士サーティヤキはドローナに我慢できなかった。（二〇）それからサーティヤキは獅子吼して、十本の矢でドローナを射た。そして別の六本の矢、八本の矢で射た。（二一）そして更に、サーティヤキは十本の矢でドローナを射た。そして戦場において、一本の矢で彼の御者を、四本の矢で四頭の馬を、一本の矢で軍旗を射貫いた。わが君よ。（二二）ドローナは急いで、相手と馬と御者と戦車と軍旗を、蝗（いなご）の群のような高速の矢でおおった。（二三）サーティヤキもまた、同様にドローナを、多くの高速の矢でおおった。するとドローナは悠然として言った。（二四）

「お前の師匠（アルジュナ）は臆病者のように戦場を捨てて去った。彼は戦っている私を捨てて、右まわりにまわって（敬意を表した）。（二五）サーティヤキよ、今は、私が戦えば、お前は生きて私から解放されることはできないだろう。もしお前が師匠のように、戦場で私を捨てて急いで逃げないなら。（二六）」

サーティヤキは言った。

「ダルマ王の命令により、私はアルジュナの足跡をたどる。バラモンよ、御機嫌よう。時間を無駄にしたくない。（二七）」

サンジャヤは語った。――

王よ、シニの孫はこのように言うと、突然に師匠（ドローナ）を避けて進もうとして、御者に次のように告げた。（二八）

「ドローナは私を制止するために、あらゆる努力をするであろう。御者よ、戦場で奮励努力して進め。（二九）
あそこにアヴァンティ国の輝きに満ちた軍隊が見える。その次に、南部地方の大軍がいる。（三〇）その次にバーフリーカ（地方名）の大軍がいる。バーフリーカ軍のそばに、カルナの大軍が控えている。（三一）御者よ、これらの軍隊はお互いに分離している。しかし相互に依存し合い、戦場を捨てないだろう。（三二）その間を見出して、喜び勇んで馬たちをかりたてよ。御者よ、中位の速度をとって私を運べ。（三三）あそこに種々の武器を振り上げるバーフリーカ軍が見える。そしてカルナを先頭とする多くの南部の軍が見える。（三四）また象と馬と戦車がひしめく軍隊が見える。諸国の出身の歩兵たちが立っている。（三五）」
サーティヤキは御者にここまで言うと、バラモン（ドローナ）を避けて、カルナの恐ろしい大軍のいる方に進んだ。（三六）勇士サーティヤキが後をふり向くことなく進んで行った時、ドローナは怒って、多くの矢を注いで彼を追跡した。（三七）サーティヤキは鋭い矢によりカルナの大軍を殺して、限りないバラタ族の軍隊に突入した。（三八）サーティヤキが突入すると、敵軍は逃走した。その時、クリタヴァルマンは怒ってサーティヤキを制止した。（三九）襲来する彼に対し、強力なサーティヤキは六本の矢で射て、また四本の矢で彼の四頭の馬を殺した。（四〇）そして更に、サーティヤキは十六本の真っ直ぐの矢でクリタヴァルマンの胸の真中を射た。（四一）大王よ、サーティヤキにより多くの鋭い切っ先の矢で射られて、クリタヴァルマンは我慢できなかった。（四二）王よ、彼は蛇か火のような、「仔牛の歯」（矢の種類）を弓につがえて、耳のところまで引き絞り、サーティヤキの胸を射貫いた。（四三）矢筈に羽根のついたその矢は、彼の鎧と身体を貫通して、血まみれになって地面に入った。（四四）王よ、それから最高に武器に通じたクリタヴァルマンは多くの矢により、相手の弓を矢と弦とともに切断した。（四五）そして王よ、彼は戦場で猛り立ち、十本の鋭い矢で不屈の勇者サーティヤキの胸の間を射た。（四六）弓が断たれた時、力（シャクティ）を持つ者のうちの最上者サーティヤキは、槍（シャクティ）を投じてクリタヴァルマンの右腕を撃った。（四七）そして勇士サーティヤキは他の非常に堅固な弓をとって、速やかに幾百幾千の矢を放った。（四八）サーティヤキは戦場において、すっかりクリタヴァルマンを矢でおおい、いたるところ彼とその戦車に矢を浴びせた。（四九）そしてサーティヤキは半月の先の矢を用いて相手の御者の頭を切った。クリタヴァルマンの御者は殺されて、大戦車から落ちた。すると彼の御者が殺されたので、馬たちは一目散に逃走した。（五〇）しかしボージャの王は、うろたえることなく、自ら馬たちを制御し、弓矢を手にしてとどまった。兵たちはそれを讃えた。（五一）彼は少しの間息をついてから、良馬たちをかりたてた。彼は恐怖を離れ、敵たちに非常に大きな恐怖をもたらした。しかしサーティヤキは彼から離れて行った。そこで彼はビーマに襲いかかった。（五二）
王中の王よ、サーティヤキはドローナの軍隊から脱け出て、速やかにカーンボージャの大軍に向かって行った。（五三）王よ、不屈の勇者サーティヤキは、そこで多くの勇猛な大戦士たちに食い止められて進めなくなった。（五四）そしてドローナは軍隊をまとめて、ボージャの王（クリタヴァルマン）にあとのことを委ねて、戦場で奮い立ち、戦おうとしてサーティヤキを追跡

した。(五五)パーンダヴァの兵のうちの最も偉大な人々は猛り立ち、サーティヤキを背後から追うドローナを制止した。(五六)一方、パーンチャーラ軍はビーマセーナを先頭として最高の戦士クリタヴァルマンと対戦して気力を失った。王よ、勇士クリタヴァルマンは勇武を発揮して彼らを食い止めたのである。(五七)彼らはすべて努力したが少し意気消沈し、その馬や象は疲れた。彼は矢の群により彼らをすっかりおおった。(五八)しかし勇士たちは、ボージャの王に圧倒されても、ボージャ軍との戦いを望んで貴人（アーリヤ）らしく大きな名誉を求めて戦場にとどまっていた。(五九)

（第八十八章）

わが軍は海のようである

ドリタラーシトラは言った。

「我々の軍はこのように多くの美質を持ち、多様であり、最上である（異本による。六・七二・一参照）。このように適切に布陣し、多数である。サンジャヤよ。(一)常に我らに敬われ、常に我らに愛情を抱いている。強大であり、非常に驚異的な外観をし、前もって勇猛さが知られている（異本による）。(二)〔兵たちは〕あまり老年でも若年でもない。痩せても太ってもいない。敏速であり、長命である。頑丈な体をし、健康である。(三)鎧をつけ、多くの武器に通じ、多くの武術に通じている。(四)〔象などに〕乗ること、飛び下りること、進むこと、その間に跳躍すること、正しく攻撃すること、行進、後退に巧みである。(五)象と馬と戦車に乗ることに関し、

何度もよく試験されている。よく調査されて、適切に給料を払われている。(六)私の軍隊においては、交際、追従、縁故を理由にして招かれなかったり雇用されないということはない。(七)私の軍隊は家柄のよい気高い人をそなえ、満足し、よく養われていて、従順である。ふさわしく敬われ、好意をかけられている。名声あり思慮深い。(八)友よ、この軍隊は、主要な顧問たちにより、その他多くの主要な仕事をする人々によって守護されている。その最高の人々は、世界守護神のようである。(九)それは我らによかれと望む多くの王たちに守られている。彼らは自分の意志により、軍隊を連れ、従者を連れ、我らのもとに来た人々である。(一〇)わが軍は、いたるところ河川が注いで満水の海のようである。それは翼を持たない鳥のような戦車や馬たちに満ちている。(一一)その海は兵士という無尽の水をたたえ、恐ろしく、象や馬という波で波立っている。それは櫂のような刀、棍棒、槍、矢、投槍に満ちている。(一二)そこには旗と飾りがひしめき、宝物や布で満ちている。駆けまわる象や馬により、強風で揺れるように揺れている。(一三)それはドローナという深い海底を持ち、クリタヴァルマンという大きな穴を持つ。ジャラサンダという大きな鮫がいる。カルナという月の出で隆起する。(一四)サンジャヤよ、その私の軍隊という海を破って、パーンダヴァの雄牛が一騎で速やかに進み、サーティヤキが続いた。(一五)サンジャヤよ、アルジュナと勇士サーティヤキが私の軍隊に侵入した時、私はその残りを見出すことはない。(一六)その恐れを知らぬ強力な二人が侵入したのを見て、そしてシンドゥ国王がガーンディーヴァの矢の射程に入ったのを見て、その時クルの軍はカーラ（破壊神）にかかりたてられてどのような行動をとったか。

この上なく恐ろしい時において、どのようにふるまったか。(一七―一八) 友よ、集結したクル族は死神に呑まれたと私は思う。というのは、今や戦場において、以前のように彼らの勇武が見られることはないから。(一九) 戦場でクリシュナとアルジュナは無傷で侵入した。サンジャヤよ、ここでその二人を食い止められる者は誰もいない。(二〇) わが軍の偉大な戦士たちはよく吟味して雇用されている。ある人々は適切な賃金により、またある人々は好ましい言葉により。(二一) 友よ、私の軍隊には、理由なくして召し抱えられた者はいない。適切な仕事によって俸給が得られている。(二二) サンジャヤよ、私の軍隊には、わずかな賃金で雇用されている兵士も、安価な金属で(テクスト疑問)雇用されている兵士もまったくいない。友よ。(二三) 私は可能な限り、贈与、名誉、座席により彼らに敬意を払う。私の息子たち、親類縁者たちも同様にする。(二四) しかし、アルジュナは戦場で彼らに遭遇してうち破った。サーティヤキは彼らを蹂躙した。運命以外の何ものでもない。(二五) サンジャヤよ、戦場において守られる者、そして守る者たち、その守られる者と守る者たちとの道は同一である。(二六) 戦場でシンドゥ国王の前に立つアルジュナを見て、ひどく取り乱した私の息子はどのように行動したか。(二七) サーティヤキが恐れを知らぬかのように侵入したのを見て、ドゥルヨーダナはいかなる行動をとるのが時宜にかなうと考えたか。(二八) すべての武器に害されることのない、二人の最高の戦士がわが軍に侵入したのを見て、わが軍の兵たちは戦いにおいて平静さを保ったかどうか。(二九) クリシュナとシニの雄牛とがアルジュナのために戦いの準備をしたのを見て、息子たちが嘆いたことと私は思う。(三〇) サーティヤキとアルジ

ュナとがわが軍を通過し、クル軍が逃走するのを見て、息子たちが嘆いたことと私は思う。(三一) 戦士たちが敵に勝利する気力をなくして逃げるのを見て、逃走に気力を起こしたのを見て、息子たちが嘆いたことと私は思う。(三二) サーティヤキとアルジュナとにより、戦車の座席が空にされ、戦士たちが殺されたのを見て、息子たちが嘆いたことと私は思う。(三三) 幾千の勇士たちが馬と象と戦車を失って、当惑して戦場を駆けまわっているのを見て、息子たちが嘆いたことと私は思う。(三四) そこでサーティヤキとアルジュナとにより、馬たちが勇士を欠いたものとなり、人々が戦車を欠いたものとなったのを見て、息子たちが嘆いたことと私は思う。(三五) 戦場で歩兵の群がいたるところで逃走しているのを見て、すべての息子たちが希望を失って嘆いていることと私は思う。(三六) 無敵の二人の勇士がドローナの軍を瞬時に通過したのを見て、息子たちが嘆いたことと私は思う。(三七) 友よ、不屈のクリシュナとアルジュナが、サーティヤキとともに、わが軍に侵入したことを聞いて、私はひどく取り乱した。(三八) あのシニの最高の戦士がわが軍に侵入し、ボージャ軍を突破した時、クル族たちはどのようであったか。(三九)

またサンジャヤよ、戦場においてドローナがパーンダヴァ軍を苦しめた時、戦闘はどのようであったか。それを私に語ってくれ。(四〇) 実にドローナは強力な勇士で、武器に通達し、確固たる勇武を持つ。パーンチャーラ軍はその偉大な射手に対して、戦場でどのように戦ったか。(四一) 彼らはドローナに対し遺恨を抱き、ダルマ王の勝利を望んでいる。勇士ドローナもまた、彼らに遺恨を抱いている。(四二) そしてアルジュナはどのようにしてシンドゥ国

王を殺したか、それをすべて私に語ってくれ。サンジャヤよ、そなたは巧みな語り手であるから。(四三)」

(第八十九章)

クリタヴァルマン、パーンダヴァ軍を食い止める

サンジャヤは語った。――

バラタの雄牛よ、自身の過失により生じた災禍を得て、勇士よ、あなたは普通の人のように嘆くべきではない。(一) 最高の王よ、あなたが不徳であること、息子たちを依怙贔屓すること、法(ダルマ)に関して二面性がある(不確定な)こと、パーンダヴァに対して慳貪であること、多くの愚痴を言うことを知り、全世界の真理を知り、全世界の師(グル)である主ヴァースデーヴァ(クリシュナ)は、そこでクル族の間に大戦争をもたらした。(二―三) あなた自身の罪により、あなたに大々的な滅亡が訪れた。というのは、バーラタよ、始まりにも中間にも終わりにも、あなたの善行はまったく認められないから。この敗北はまさにあなたを原因とする。(四) それ故、今は気を確かに持って、世の行く末を知り、神と阿修羅の戦いのようなその恐ろしい戦いがどのように展開したかを聞きなさい。(五)

不屈の勇者サーティヤキがあなたの軍に侵入した時、ビーマセーナを先頭とするパーンダヴァたちはあなたの軍隊に立ち向かった。(六) パーンダヴァたちが従者たちとともに、猛り立って烈しく襲来した時、勇士クリタヴァルマンは戦場において、一人で彼らを食い止めた。

(七) 海岸が隆起した海を食い止めるように、クリタヴァルマンは戦場でパーンダヴァ軍を食い止めた。(八) 人々は彼の勇武を驚異的であると考えた。というのは、結集したパーンダヴァ軍が戦場で彼を突破することができなかったのである。(九)

勇士ビーマは三本の矢でクリタヴァルマンを射てから、法螺貝を吹き、パーンダヴァ軍を喜ばせた。(一〇) サハデーヴァは二十本の矢、ダルマ王は五本の矢、ナクラは百本の矢でクリタヴァルマンを射た。(一一) ドラウパディーの息子たちは七十三本の矢で、ガトートカチャは七本の矢で、ドリシタデュムナは三本の矢でクリタヴァルマンを射た。ヴィラータとドルパダは五本の矢で彼を射た。(一二) シカンディンは五本の矢でクリタヴァルマンを射て、更に笑うかのように、二十本の矢で彼を射た。(一三) 王よ、するとクリタヴァルマンは、彼らすべての勇士たちの各々を五本の矢で射て、七本の矢でビーマを射た。そして彼は奮起し、ビーマの戦車から弓と旗を大地に落とした。(一四) それからその勇士は猛り立ち、急いで、七十本の鋭い矢で弓を断たれたビーマの胸を射た。(一五) クリタヴァルマンの最高の矢で深く傷ついた強力なビーマは戦車の中に立ち、地震の時の山のようにふるえた。(一六) ビーマセーナがそのような状態であるのを見て、ダルマ王をはじめとする人々は、恐ろしい矢を射て、クリタヴァルマンを苦しめた。(一七) わが君よ、彼らは戦車の群により彼を取り囲んで、勇み立って、風神の息子(ビーマ)を守るために彼を矢で射た。(一八) それから強力なビーマセーナは意識を取りもどし、戦場で、黄金の柄のついた鉄製の槍をつかんで、その戦車からクリタヴァルマンの戦車に向けて速やかに投げた。(一九) ビーマの腕から放たれた

その非常に恐ろしい槍は、脱皮した蛇のようで、クリタヴァルマンに向けて、輝いて（飛んで行った）。（二〇）宇宙紀の終末の火のように輝くその槍が激しく飛来するのを見て、その時クリタヴァルマンは二本の矢でそれを二つに切断した。（二一）王よ、その黄金で飾られた槍は切られて地面に落ちた。天空から落ちた大流星のように諸方を輝かせつつ。その槍が断たれたのを見て、ビーマはひどく怒った。（二二）そしてビーマセーナは非常に大きな音をたてる他の剛弓をとって、戦場で猛り立ち、クリタヴァルマンを制止した。（二三）それから恐るべき力を持つビーマは、五本の矢で相手の胸の間を射た。王よ、あなたの悪しき政策のせいだ。（二四）わが君よ、ボージャの王はビーマセーナに全身傷つけられて、開花した赤いアショーカのように、戦場で輝いていた。（二五）それから彼は怒り、その戦いにおいて笑うかのように三本の矢でビーマセーナを手ひどく撃った。それからその偉大な射手は三本ずつの矢で、奮闘するすべての勇士を射た。彼らもそれぞれ七本ずつの矢を放って彼を射た。（二六—二七）

バーラタよ、それからその勇士は怒り、戦場において笑うかのように、馬蹄形の先の矢でシカンディンの弓を断ち切った。（二八）弓が切られた時、シカンディンは怒り、戦場において急いで刀と百の月で飾られた輝く楯をとった。（二九）彼は黄金で飾られた大きな楯を振りまわし、その刀をクリタヴァルマンの戦車に対して送った。（三〇）王よ、その大きな刀は戦場で相手の弓矢を切り、空中から落下した星のように大地に落下した。（三一）まさにその時、その勇士は戦場において、急いで矢によってクリタヴァルマンを手ひどく傷つけた。（三二）

バラタの最上者よ、それからクリタヴァルマンはその断たれた大弓を捨てて、他の弓をとり、戦場において、三本ずつの矢でパーンダヴァたちを射た。そして、三本の矢、次に五本の矢でシカンディンを射た。（三三—三四）一方、誉れ高いシカンディンは他の弓をとり、亀の爪のような先をした矢でクリタヴァルマンをおおった。（三五）王よ、それからその戦いにおいて、クリタヴァルマンは怒り、勇士シカンディンに激しく襲いかかった。（三六）王よ、戦場で偉大なビーシュマの死の原因であるシカンディンに対し、その勇士はその力を示して、虎が象に襲いかかるように襲いかかった。（三七）敵を制する両雄は方位を守る象のように、あるいは燃え上がる火のように、お互いに矢の群を放って攻撃し合った。（三八）二人は最高の弓に矢をつがえて揺すり、幾百の矢を放った。それは二つの太陽が光線を放つかのようだった。（三九）二人の偉大な戦士は、鋭い矢でお互いに苦しめ合った。二人の勇士は、宇宙紀の終末に現われる（原文疑問）二つの太陽のように輝いていた。（四〇）クリタヴァルマンは勇士シカンディンを七十三本の矢で激しく射貫き、更に七本の矢で射貫いた。（四一）シカンディンはしたたか射貫かれて苦しみ、弓矢を放り出し、すっかり失神して、戦車の座席に座り込んだ。（四二）バラタの雄牛よ、彼が戦車の上で気絶したのを見て、あなたの兵士たちはクリタヴァルマンを讃え、衣服を揺すった。（四三）シカンディンがそのようにクリタヴァルマンの矢に苦しめられたのを知って、彼の御者は急いでその勇士を戦場から運び去った。（四四）

シカンディンが戦車の座席に倒されたのを見て、パーンダヴァ軍は戦車により戦場で速やかにクリタヴァルマンを取り囲んだ。（四五）勇士クリタヴァルマンはそこで最高の驚異を発

挿した。というのは、彼はその戦いにおいて、一人でパーンダヴァたちとその従者たちを食い止めたのである。(四六) 勇士クリタヴァルマンはパーンダヴァたちをうち破ってから、チェーディ、パーンチャーラ、スリンジャヤ、強力なケーカヤの軍をうち破った。(四七) パーンダヴァ軍は戦場でクリタヴァルマンにうち破られて、あちこちに逃げまわり、冷静さを保つことができなかった。(四八) クリタヴァルマンはビーマセーナをはじめとするパーンダヴァたちを戦いにおいて破り、煙を出さない火のように輝いていた。(四九) 勇士たちは戦場で彼に敗走せしめられ、矢の雨で苦しめられ、顔を背けて退却した。(五〇)　(第九十章)

サーティヤキ、ジャラサンダを殺す

サンジャヤは語った。——

王よ、一意専心して聞きなさい。あなたが私にたずねたことを。敵軍が偉大なクリタヴァルマンに敗走せしめられ、あなたの軍は喜んで、敵軍が恥ずかしさでうつ向いた時、底知れぬ深みに沈んで浅瀬を探していたパーンダヴァたちにとって、サーティヤキが島（寄る辺）であった。(一―二) 王よ、シニの孫（サーティヤキ）は、戦場におけるあなたの兵たちの恐ろしい叫び声を聞くと、急いでクリタヴァルマンに向かって行った。(三) フリディカの息子クリタヴァルマンは非常に猛り立って、鋭い矢をサーティヤキに注いだ。そこでサーティヤキは怒った。(四) サーティヤキは戦場で、クリタヴァルマンに対して非常に鋭い半月形の先の矢を送った。

そして他の四本の矢を送った。(五) それらは相手の馬たちを殺した。そして半月形の先の矢により、彼は相手の弓を切断した。それからまた、彼は鋭い矢により、相手の背後を守る者と御者を射貫いた。(六) それから不屈の勇者サーティヤキは相手の戦車を破壊し、真っ直ぐの矢により相手の軍隊を苦しめた。(七) その軍隊はサーティヤキの矢に苦しめられて分断された。それから不屈の勇者サーティヤキは急いで進撃した。(八) 大王よ、強力な彼がドローナの軍という海を越えて、あなたの軍隊に何をしたか聞きなさい。(九) その勇士は戦場でクリタヴァルマンをうち破って喜び、平然として、「徐（おもむろ）に行け」と御者に命じた。(一〇) ところでサーティヤキは、戦車兵、騎兵、象兵、歩兵に満ちたあなたの軍隊を見て、再び御者に言った。(一一)

「ドローナ軍の左に、雲のような非常に大きい象隊がいる。ルクマラタがその隊長である。(一二) 御者よ、彼らは多数で、戦闘において抗しがたい。ドゥルヨーダナに指示されて、私と戦うために命がけである。彼ら王子たちはすべて偉大な射手で、勇ましく戦う。(一三) 彼らはトリガルタ国の高邁な戦士たちで、黄金で飾られた旗を持つ。あの勇士たちは、覚悟を決めて、私のみをめざして戦おうとしている。(一四) 御者よ、私をすぐにあそこに連れて行ってくれ。馬たちをかりたてよ。私はドローナの見ている前でトリガルタ軍と戦うであろう。(一五)」

そこで御者はサーティヤキの意を受けて、太陽の色をした、軍旗の立つ輝かしい戦車により、徐に進んで行った。(一六) 御者の意のままに従う、跳ねる最高の馬たち、風のように疾

走する、白蓮か月か銀のように輝く馬たちが、戦場で彼を運んだ。（一七）法螺貝の色をした最高の馬たちによりその戦車が襲来した時、勇士たちは象隊によりそれをぐるりと取り囲んだ。容易に的を射貫く、種々の鋭い矢を注ぎながら。（一八）サーティヤキの方も、象隊に対し鋭い矢により戦った。夏の終わりに、大雲が山々に対して雨を降らせるように。（一九）シニの勇士（異本による）に放たれた、金剛杵か雷電のように烈しい矢に殺されて、象たちは戦場を捨てて逃走した。（二〇）象たちはその牙は砕け、血まみれになり、その額の隆起は裂け、耳や顔や鼻は切れ、御者は殺され、旗はなくなった。（二一）鎧と鈴は破壊され、大軍旗は切断された。王よ、彼らは乗り手を殺され、毛布はずり落ち、諸方を駆けまわった。（二二）彼らは種々の叫び声をあげ、雷雲のような音を響かせ、サーティヤキに種々の矢で切り裂かれた。（二三）

象隊が敗走した時、偉大な戦士ジャラサンダは奮起し、（サーティヤキの）銀色の馬たちがひく戦車に対し、自分の象を近づけた。（二四）その勇士は金色の手をし（異本は「黄金の鎧をつけ」）、黄金の腕環をつけ、清らかで、耳環と王冠をつけ、法螺貝（異本は「刀」）を持ち、赤栴檀を塗っていた。（二五）燃えるような金製の鎖を頭につけ、胸には胸飾りをつけ、輝く首輪をつけていた。（二六）大王よ、彼は象の頭の上で、黄金で飾られた弓を揺すり、稲妻をともなう雲のように輝いていた。（二七）マガダ国王の最高の象が激しく襲来した時、サーティヤキは海岸が隆起する海を食い止めるようにその象を食い止めた。（二八）サーティヤキの最高の矢によって象が食い止められたのを見て、王よ、強力なジャラサンダは戦場において怒った。（二九）そこで怒った偉大な射手ジャラサンダは、重大な目的を達成する矢で、シニの孫の広い胸を射た。（三〇）それから彼は、よく鍛えられた鋭い矢で、矢を放とうとしているヴリシュニの勇士の弓を断ち切った。（三一）バーラタよ、マガダの勇士は笑うかのように、五本の鋭い矢で、弓を断たれたサーティヤキを射た。（三二）しかしその強力な勇士は、ジャラサンダに多くの矢で射られてもふるえることはなかった。それは奇蹟のようであった。（三三）強力な彼はそれらの弓をものともせずに、あまり動揺することなく、他の弓をとり、「待て、待て」と言った。（三四）サーティヤキはそのように言って、笑うかのように、六十本の矢でジャラサンダの広い胸を深々と射貫いた。（三五）そして彼はよく鍛えられた馬蹄形の先の矢で、ジャラサンダの大弓の握りの部分を断ち切り、三本の矢で相手を射貫いた。（三六）わが君よ、ジャラサンダは弓矢を捨て、サーティヤキに向けて速やかに投槍を放った。（三七）その恐ろしい槍はその激戦において、サーティヤキの左腕を貫通して地面に落ちた。それは息を吐く大蛇のようであった。（三八）不屈の勇者サーティヤキは、左腕を貫かれて、三十本の鋭い矢でジャラサンダを撃った。（三九）すると強力なジャラサンダは、刀と雄牛の皮で作った百の月の飾りのついた大楯をとり、その刀を振るって、サーティヤキに放った。（四〇）その刀はサーティヤキの弓を切断して地面に落ちた。それは地面に落ちて旋火輪（回転する炬火）のように輝いていた。（四一）

それからサーティヤキは、すべての者の身体を断つ別の弓をとって、戦場で怒り、シャーラ樹の幹のような、インドラの雷電のような音をたてるその弓を引き絞り、ジャラサンダを

射貫いた。（四二）それからマーダヴァ族の最上者（サーティヤキ）は笑うかのように、馬蹄形の先の二本の矢で、飾りをつけ、腕環をつけたジャラサンダの両腕を断ち切った。（四三）その鉄棒のような両腕は、最高の象から落下した。五つの頭を持つ二匹の蛇が山から落ちるように。（四四）それからサーティヤキは、第三の馬蹄形の先の矢で、相手の美しい歯と顎を持つ、魅力的な耳環をつけた、高い鼻のついた頭を切り落とした。（四五）その頭と腕を落とされた恐ろしい姿の胴体は、ジャラサンダの象を血まみれにした。（四六）王よ、サーティヤキは戦いにおいてジャラサンダを殺してから、速やかに象の背からナイシャーディ（エーカラヴィヤを指すか）を落下させた。（四七）ジャラサンダの象は全身血まみれになり、ぶらさがってまつわりつく最高の座席を運んでいた。（四八）その巨象はサーティヤキの矢に苦しめられ、自軍を踏みつぶしつつ、恐ろしい苦痛の叫びをあげて逃走した。（四九）わが君よ、ジャラサンダがヴリシュニ族の雄牛に殺されたのを見て、あなたの軍隊に「ああ、ああ」という大声があがった。（五〇）あなたの兵たちは顔を背けて退却し、いたるところに逃げた。彼らは敵に勝利する気力を失い、逃げることに気力を出したのである。（五一）

王よ、その間、最高の戦士ドローナは、駿馬によって勇士サーティヤキに近づいた。（五二）サーティヤキが猛り立つのを見て、クルの雄牛たちは怒って、ドローナとともに彼を取り囲んだ。（五三）王よ、それからクル軍及びドローナとサーティヤキとの間に、神と阿修羅との戦いのような恐ろしい戦いが始まった。（五四）

（第九十一章）

サーティヤキとクリタヴァルマンの戦い

サンジャヤは語った。――

大王よ、彼らすべての戦士は矢の群を注ぎ、急いでサーティヤキに対して戦った。（一）ドローナは七十七本の鋭い矢で彼を射た。ドゥルマルシャナは十二本の矢で、ドゥフサハは十本の矢で彼を射た。（二）そしてヴィカルナは鷺（カンカ）の羽根のついた三十本の鋭い矢で、彼の左脇と胸の間を射た。（三）ドゥルムカは十本の矢で、ドゥフシャーサナは八本の矢で、チトラセーナは二本の矢でサーティヤキを射た。わが君よ。（四）そして王よ、ドゥルヨーダナと他の勇猛な大戦士たちは、戦場で矢の大雨によりサーティヤキを苦しめた。（五）しかしサーティヤキは、あなたの息子たちや勇士たちにいたるところ射貫かれたが、諸々の矢で彼ら各々に射返した。（六）彼は三本の矢でドローナを、九本の矢でドゥフサハを、二十五本の矢でヴィカルナを、七本の矢でチトラセーナを射た。（七）十二本の矢でドゥルマルシャナを、四本の矢でヴィヴィンシャティを、九本の矢でサティヤヴラタを、十本の矢でヴィジャヤを射た。（八）それからルクマーンガダを射て、勇士サーティヤキは弓を揺すって、速やかにあなたの息子である勇士（ドゥルヨーダナ）に向かって行った。（九）そして彼は、一切の戦士のうちの最上者である全世界の王を、諸々の矢で猛烈に攻撃した。それから両者の間に戦いが行なわれた。（一〇）（一一―一二略）

王よ、あなたの息子ドゥルヨーダナは、その戦いにおいて、サーティヤキの最高の矢で攻撃されて、弓を持つチトラセーナの戦車に飛び乗り、突然逃走した。(二三) 空でラーフに呑まれる月のように、王が戦場でサーティヤキに呑まれそうなのを見て、人々は「ああ、ああ」と叫んだ。(二四) その大声を聞いて、勇士クリタヴァルマンは、強力なサーティヤキがいる場所に急いで行った。(二五) 彼は最高の弓を揺すり、馬たちをかりたて、「急いで行け、行け」と言って厳しく御者を急き立てた。(二六) 彼が口を開いた死神のように襲来するのを見て、大王よ、サーティヤキは御者に次のように言った。(二七)
「あそこにクリタヴァルマンが矢を持ち、戦車に乗って急いで襲って来る。一切の弓取りの最上者である彼に対し、戦車により戦え。(二八)」
それから馬たちを急がせて、適切に装備した戦車により、弓取りたちの鑑(かがみ)であるボージャの王に戦いを挑んだ。(二九) それから二名の人中の虎は、燃え上がる火のように最高に猛り立ち、強力な二頭の虎のように対決した。(三〇) クリタヴァルマンはよく研がれた鋭い二十六本の矢でサーティヤキを射て、七本の矢で御者を射た。(三一) そして四本の最高の矢で、サーティヤキのよく調教されたシンドゥ産の四頭の最上の馬を射た。(三二) 彼は黄金の旗を持ち、黄金の腕環をつけ、黄金の鎧を着て、金張りの大弓を引き絞り、黄金の羽根のついた矢を注いだ。(三三) それからシニの孫（サーティヤキ）は、アルジュナに会いたいと望み、急いで八十本の矢をクリタヴァルマンに送った。(三四) 敵を苦しめる無敵の彼は、強力な敵に手ひどく射貫かれ、地震の時の山のようにふるえた。(三五) それから巧妙なサーティヤキは、六十三本の鋭い矢で速やかにクリタヴァルマンの馬たちを、七本の矢で御者を射た。(三六) そしてサーティヤキは、金の羽根のついた矢、大きな火焔のような、怒った蛇のような矢をつがえて放った。(三七) そのヤマ（閻魔）の杖(ダンダ)のような矢は、クリタヴァルマンの黄金できらびやかな輝く鎧を貫通して彼の体内に入った。そしてその恐ろしい矢は、血まみれになって大地に達した。(三八) クリタヴァルマンはその戦いでサーティヤキの矢に苦しめられ、傷ついてふるえ、弓をうち捨てて最上の戦車の上で倒れた。(三九) その獅子の歯をした限りなく勇猛な人中の雄牛は、サーティヤキに矢で苦しめられ、戦車の座席に両膝をついた。(四〇) 千の腕を持つ〔アルジュナ〕（カールタヴィーリヤ）に等しい、揺ぎない海のようなクリタヴァルマンを制してから、サーティヤキは進んで行った。(四一) クル軍には刀や槍や弓が満ち、象や馬や戦車が満ち、幾百の王族(クシャトリヤ)の雄牛たちによって恐ろしい血が流出していた。(四二) シニの雄牛は、すべての軍隊が見ている中を、インドラが阿修羅の軍を破るようにその軍隊を破って進んで行った。(四三) 一方、強力なクリタヴァルマンは元気をとりもどし、他の大弓をとって、戦場でパーンダヴァたちを制止してその同じ場所に立っていた。(四四)

（第九十二章）

サーティヤキ、スダルシャナを殺す

サンジャヤは語った。――
サーティヤキがいたるところでクル軍を駆逐していた時、ドローナは矢の大群を浴びせた。

(一)全軍が見ている前で、ドローナとサーティヤキの間で激しい戦闘が行なわれた。それはバリとインドラとの間の戦いのようであった。(二)ドローナはすべて鉄製の毒蛇のような三本の美しい矢で、シニの孫の額を射た。(三)大王よ、額に刺さったそれらの矢により、サーティヤキは三つの峰のある山のように輝いていた。(四)更にドローナは戦場において相手の隙をうかがって、インドラの雷電のような音をたてる他の諸々の矢を相手に送った。(五)最高に武器を知るサーティヤキは、ドローナの弓から放たれて飛来する矢を、美しい羽根のついた二本ずつの矢で断ち切った。(六)王よ、ドローナは彼の手練の早業を見て笑い、それから三十本の矢でシニの雄牛を射た。(七)ドローナはサーティヤキの早業をその早業により凌駕し、更に五十本の矢、そして百本の矢で射た。(八)王よ、敵の身体を断つそれらの矢は、怒った大蛇が蟻塚から飛び出るように、ドローナの戦車から飛んで行った。(九)同様に、サーティヤキに放たれた、血を飲む幾百千の矢は、ドローナの戦車をおおった。(一〇)わが君よ、最高のバラモン（ドローナ）とサーティヤキとの間には、手練の業について相違を見出せなかった。二名の人中の雄牛はまったく互角であった。(一一)(一二—三五略)

(第九十三章)

サンジャヤは語った。——

クルの雄牛たちの最上者よ、シニの英雄である勇士サーティヤキは、ドローナを破り、クリタヴァルマンをはじめとするあなたの軍を破ってから、笑って御者に告げた。(一)

「御者よ、クリシュナとアルジュナがすでに敵たちを焼いてしまった。我らは道具（実際に手を下す者）に過ぎない。我々は神々の主（インドラ）の息子である人中の雄牛にすでに殺された敵たちを殺しているのだ。(二)」

その時、敵を殺す最高の弓取りである強力なシニの雄牛は戦場で御者にこのように告げると、いたるところに矢を注ぎつつ、鷹が獲物を襲うように激しく襲撃した。(三)その勇士が月か法螺貝のような色の馬たちにひかれてクル軍に突入して進撃した時、すべてのクル軍の群は太陽の光線のようなその最高の人を制止することがまったくできなかった。バーラタよ、彼の勇武に耐えることはできず、彼は元気いっぱいで、抗しがたく、千眼者（インドラ）のような威力を持ち、雲が消失した天空における太陽のようであった。(四—五)

その時、最高の王スダルシャナが、襲来するサーティヤキを力ずくで制止した。非常にめざましく戦うその王は怒りに満ち、弓を持ち、黄金の鎧を着ていた。(六)バーラタよ、その両者の間に非常に恐ろしい戦闘が行なわれた。あなたの兵士たちや、ソーマカ（パーンチャーラ）の人々は、神の群がヴリトラとインドラの戦いを讃えるようにその戦いを讃えた。(七)スダルシャナはその戦いにおいて、非常に鋭い幾百の矢でサーティヤキを射た。一方シニの雄牛は、それらの矢が到着しないうちに、自分の矢でそれらを断ち切った。(八)インドラのようなサーティヤキも、諸々の矢をスダルシャナに放った。スダルシャナは最高の矢でそれらの矢を二つまたは三つに断ち切った。(九)スダルシャナはその時、諸々の矢がサーティヤキの矢の勢いにより破壊されたのを見て、怒りで燃えるかのようになり、黄金で

きらびやかな、鋭い切っ先の（異本により「矢」にかかるととる。他の個所参照）矢を放った。（一〇）彼は更に、弓を耳まで引き絞って、美しい羽根のついた鋭い火のような三本の矢を放った。それらはサーティヤキの鎧を貫いて、その身体に入った。（一一）その王子はまた、他の燃え上がるような四本の矢を弓につがえて、相手の銀のような四頭の馬を激しく撃った。（一二）ンドラのように強力で勇猛なシニの孫は、このようにスダルシャナに攻撃されたが、非常に鋭い矢の群により相手の馬たちを速やかに殺して雄叫びをあげた。（一三）そしてシニの勇士はインドラの雷電のような半月形の先の矢でスダルシャナの御者の頭を切り取ってから、馬蹄形の先の矢でスダルシャナの頭をも激しく切断した。（一四）彼は美しい耳環をつけ、満月のような、輝く頭を身体から切り離した。かつてインドラが戦いにおいて非常に強力なバラの頭を激しく切り落としたように。王よ。（一五）偉大で強力なヤドゥ族の雄牛（サーティヤキ）は戦場でその王子の孫（原文のまま）を殺してから、最高に喜んで、神々の王のように輝いた。王よ。（一六）それから彼は、矢の群によりあなたの軍隊を退けて、アルジュナの行った道をたどって行った。その勇士は、良馬をつないだ戦車により、人々を驚かせて進撃した。（一七）最高の戦士たちはこぞって、彼の驚異的な最高の行為を讃えた。というのは、彼は火のように、矢の射程に入った敵たちを矢で焼き尽くしたから。（一八）

（第九十四章）

サーティヤキ、異民族たちを破る

サンジャヤは語った。――

偉大なヴリシュニの雄牛である英邁なサーティヤキは、戦いにおいてスダルシャナを殺してから、御者に次のように言った。（一）

「ドローナの軍は大洋のようだ。それは戦車と馬と象（戦車と馬という竜）に満ち、矢や槍という波に囲まれ、刀という魚、棍棒という鮫を持ち、勇士と武器による大音響を持つ。（二）それは生命を奪い、恐ろしく、楽器の音が高らかに響く。それは勝利を望まない戦士たちにとっては、容易には触れがたく、侵しがたい。（三）それは人を食うものたちのようなジャラサンダの軍によって取り巻かれている。友よ、我々はその越えがたいドローナ軍の海を戦いにおいて渡ったのだ。（四）私はその他の残りの軍は、簡単に渡れる水の少ない小川のようであると考える。落着いて馬たちをかりたてよ。（五）今私はアルジュナのすぐ近くに来たと思う。戦いにおいて制しがたいドローナとその従者たちをうち破り、最高の戦士であるクリタヴァルマンをうち破り、アルジュナに追いついたと私は思う。多くの敵軍を見ても私には恐れは生じない。燃え上がる火が、夏に、乾いた草の茂みを見るようなものだ。（六―七）パーンダヴァの最上者アルジュナが進んだ地を見よ。歩兵、馬、戦車、象が倒れていて、平坦でなくなっている。（八）私は白い馬たちにひかれ、クリシュナを御者とするアルジュナの近くにいると思う。無量の力を持つ彼の、あのガーンディーヴァ弓の音が聞こえる。（九）アルジュナは日没前にシンドゥ国王を殺すであろうという前兆が私の前に現われている。（一〇）スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）をはじめとする、鎧をつけた敵軍がいる所に、馬たちを励まして徐（おもむろ）に進め。（一一）

武装して恐るべき行為をする、戦いに酔うカーンボージャ軍、弓矢を持つヤヴァナの戦士たち、シャカ、キラータ、ダラダ、バルバラ、タームラリプタカ、その他、種々の武器に通じた多くのムレーッチャ（蛮族）たちは、すべて私のみをめざして、戦いを求めて立っている。（二二―二三）戦車兵、象兵、騎兵、歩兵をともなう彼らを戦いにおいて殺して、非常に恐ろしいこの越えがたい海をすでに越えたと考えよ。（二四）」

御者は言った。

「不屈の勇者であるヴリシュニの勇士よ、もし怒ったジャマダグニの息子（パラシュラーマ）が前に立っているとしても、私は取り乱すことはない。（二五）あるいは最高の戦士ドローナ、クリパ、マドラの王（シャリヤ）が前に立っているとしても、勇士よ、私はあなたに依存しているから取り乱すことはない。（二六）敵を殺す者よ、あなたは戦いにおいて多くの人々をうち破った。いまだかつて私は決して取り乱したことはない。いわんやこのような取るに足りない戦いに直面しても何でもない。勇士よ。（二七）貴卿よ、どの道を通ってあなたをアルジュナのもとに導こうか。ヴリシュニの勇士よ、あなたはいかなる人々に対して怒っているか。どの人々に死神が近づいたか。いかなる人々の心が今日、サンヤマニー（ヤマの都市）にあえて行こうとしているか。（二八）いかなる人々が、破壊神カーラかヤマのような勇武をそなえた勇猛なあなたを戦場で見て逃走するであろうか。勇士よ、今日ヴァイヴァスヴァタ（ヤマ）王は、いかなる人々を想起するか。（二九）」

サーティヤキは言った。

「インドラが悪魔を殺すように、私は剃髪したあのカーンボージャたちを殺すであろう。私は誓約を守る。彼らのもとに私を連れて行け。今日、彼らを殺戮してから、私は速やかにアルジュナのもとに行くであろう。（二〇）御者よ、すべての軍隊において、剃髪の兵たちが殺された時、今日、スヨーダナをはじめとするクル族の人々は私の力を見るであろう。（二一）今日、戦場で滅ぼされるクルの軍隊の絶叫を聞いて、スヨーダナは非常に苦しむであろう。（二二）今日、私は戦いにおいて、あの白馬にひかれたパーンダヴァの最上者（アルジュナ）に教えられた道を見せるであろう。（二三）今日、幾千という最高の戦士が私の矢により殺されるのを見て、ドゥルヨーダナ王は後悔するであろう。（二四）今日、手練の私が最高の矢を放つ時、クル軍は私の旋火輪のような弓を見るであろう。（二五）私の矢を全身に受けて多くの血を流している兵士たちの殺戮を見て、スヨーダナは苦しむであろう。（二六）今日、怒った私が勇士たちを次々と殺す時、スヨーダナは世界に二人のアルジュナがいると思うであろう。（二七）今日、私が戦場で幾千の王を殺すのを見て、ドゥルヨーダナ王は激戦において苦しむであろう。（二八）今日、私は幾千の王を殺して、パーンダヴァの偉大な王たちに、愛情と献身とを示すであろう。（二九）」

サンジャヤは語った。——

御者はこのように言われて、月のような色をしたよく訓練された良馬たちをこの上なくかりたてた。（三〇）思考か風のように速い最高の馬たちは、虚空を呑むかのように走り、速や

かにサーティヤキをヤヴァナ族のいる所に連れて行った。(三一)手練の業を持つ多くのヤヴァナたちは、戦場で退却することのないサーティヤキに近づいて、矢の雨を注いだ。(三二)王よ、しかしサーティヤキは、真っ直ぐの矢で速やかに彼らの矢とその他の武器を断ち切った。それらの矢は彼に達することはなかった。(三三)恐るべき彼は、金の矢筈を持ち禿鷲の羽根のついた非常に鋭い矢で、ヤヴァナ族の頭や腕を断ち切った。(三四)それらの矢は、彼らの鉄製や銅製の鎧をすっかり貫き、彼らの身体をも貫いてから地面に達した。(三五)その蛮族(ムレーッチャ)たちは戦場で勇士サーティヤキに殺されて、何百となく息絶えてそこで地面に倒れた。(三六)引き絞られた弓から絶え間なく射られる矢により、彼は一度に五、六、七、八名のヤヴァナ族を射貫いた。(三七)王よ、サーティヤキはあなたの軍隊を滅ぼして、幾千のカーンボージャ、シャカ、シャバラ、キラータ、バルバラたちで、大地を肉と血で汚して見えなくした。(三八―三九)いたるところで大地は、毛のない鳥のような、冑をつけた剃髪の頭によっておおわれていた。(四〇)戦場は全身血まみれの胴体によって一面におおわれて、赤い雲によっておおわれた空のようであった。(四一)馬を乗物とする彼らは、金剛杵(ヴァジュラ)か雷電のような美しい節を持つ矢によって殺されて、大地をおおっていた。(四二)大王よ、戦いにおいてサーティヤキにうち破られ、わずかに生き残った武装した者たちはうちひしがれ、やっとのことで息をし、度を失っていた。(四三)彼らは恐怖にかられ、足や鞭で馬を打ち、全速力で、あらゆる方角に逃げた。(四四)バーラタよ、戦いにおいて難攻のカーンボージャ軍を敗走させ、強力なヤヴァナ軍とシャカ軍をも敗走させ、不屈の勇者である人中の虎サーティヤキは、喜び勇んであなたの軍をうち破り、「行け」と御者をかりたてた。(四五―四六)王よ、アルジュナの背後を守って進撃する彼を見て吟誦者(チャーラナ)たちは喜んだ。あなたの兵たちですら彼を讃えた。(四七)

(第九十五章)

敵の大軍を殺戮するサーティヤキ

サンジャヤは語った。——

最高の戦士サーティヤキはヤヴァナとカーンボージャの軍をうち破ってから、あなたの軍隊の中央を通ってアルジュナのもとに行った。(一)その人中の虎は、矢という牙を持ち、多彩な鎧で輝き、虎が鹿たちを殺すようにあなたの兵を殺し、恐れさせた。(二)彼は戦車により道を進み、激しく弓を揺り動かした。その弓は黄金の背を持ち、金の月の飾りに満ち、非常に強力であった。(三)その勇士は黄金の腕環と冑をつけ、黄金の鎧でおおわれ、黄金のすばらしい旗を持ち、まるでメールの峰のように輝いていた。(四)その人中の太陽は、弓という円盤を持ち、戦場で威光という輝く光線を持ち、秋に昇った太陽のように輝いていた。(五)その人中の雄牛は、雄牛のような肩と歩行を有し、雄牛のような眼をし、あなたの軍の中で牛たちの中にいる雄牛のように輝いていた。(六)発情した象のような彼は、発情した象のように歩み、群の中で確固として立つこめかみから分泌液(マダ)を流す象のようである。あなたの軍は、その象を殺そうとする虎のように、戦場で彼に襲いかかった。(七)彼はドローナの

軍を通り過ぎ、越えがたいボージャ軍を通り過ぎ、海のようなジャラサンダを渡り、クリタヴァルマンというマカラ（海豚または鰐）から脱し、カーンボージャ軍を越えた。その海のような軍隊を渡ったサーティヤキを、あなたの戦士たちは怒って取り囲んだ。（八―九）ドゥルヨーダナ、チトラセーナ、ドゥフシャーサナ、ヴィヴィンシャティ、シャクニ、ドゥフサハ、若いドゥルマルシャナ、クラタ、その他多くの武器を持つ手強い勇士たちは進んで行くサーティヤキの背後からいきり立って追跡した。（一〇―一一）わが君よ、あなたの軍のたてる音は大きいものであった。それは月相の変わり目に、風で激しく隆起する海の音のようであった。（一二）シニの勇士は彼らをすべてが襲来するのを見て、笑うかのように御者に告げた。

「徐（おもむろ）に行け。あそこに、象兵と騎兵と戦車兵と歩兵よりなるドゥルヨーダナの軍は、猛り立ち、まさに私に向かって急いでやって来る。（一三―一四）御者よ、彼らは戦車の音をすべての方角に響かせて、大地と空と海をもふるわせる。（一五）友よ、私は戦場においてこの海のような軍隊を食い止めるであろう。満月の時に隆起した海を海岸が食い止めるように。（一六）御者よ、激戦において私のインドラのような勇武を見よ。私は今、鋭い矢で敵軍を滅ぼしてやろう。（一七）戦場で歩兵と騎兵と戦車兵と象兵が幾千となく、火のような私の矢で殺されて、身体を失い息絶えているのを見よ。（一八）」

無量の力を持つサーティヤキがこのように言った時、兵士たちが戦いを望んで速やかに彼の近くに来た。「殺せ。襲撃しろ。待て。見よ、見よ」と言いながら。（一九）そのように告げる勇士たちに対し、サーティヤキは鋭い矢で三百の騎兵と四百の象兵を殺した。（二〇）彼と

その弓取りたちとの戦いは激しいもので、神と阿修羅との戦いのようであった。そこで人々の殺戮が行なわれた。（二一）わが君よ、シニの孫は毒蛇のような矢により、あなたの息子の雲の群のような軍隊を迎え撃った。（二二）大王よ、強力な彼はその戦いにおいて矢の群でおおわれたが、動揺することなく、多くのあなたの兵たちを殺した。（二三）王中の王よ、私はそこで非常に驚くべきことを見た。王よ、サーティヤキの矢は一つも無駄にならなかったのである。（二四）戦車兵と騎兵に満ち、歩兵という波に満ちたあなたの軍隊という海は、サーティヤキという海岸に達して静止した。（二五）（二六―四三略）

王よ、あなたの全軍をすっかり敗走させて、サーティヤキはアルジュナの戦車の方に進んで行った。（四四）彼が矢を放って、自分を捨てて御者を守っている時、あなたの兵たちも彼を讃えた。（四五）

（第九十六章）

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、サーティヤキが大軍を粉砕してアルジュナの方に行った時、あの私の恥知らずの息子たちは彼に対して何をしたか。（一）アルジュナに等しいサーティヤキの働きを見て、まさに死のうとしている彼らはどのようにして戦いの決意をしたか。（二）軍隊の中で、その敗れた彼らは、その王族に対してどのように言うのだろうか。また誉れ高いサーティヤキは、戦闘においてどのようにして彼らを突破したか。（三）サンジャヤよ、私の息子たちが

生きているのに、サーティヤキはどのようにして進撃したか。それを私にありのままに語ってくれ。（四）友よ、私はそなたからこの非常に驚異的なことを聞く。一人と多くの敵の勇士たちとの戦いを。（五）哀れな息子たちは運に見離されたと私は思う。彼らが戦いにおいて偉大なサーティヤキに殺されたのであるから。（六）というのは、サンジャヤよ、私の軍は怒ったサーティヤキ一人にも敵わないのであるから。いわんやパーンダヴァ全員には言うまでもない。（七）彼は戦いにおいて、戦いに酔う達人のドローナをうち破り、獅子が獣の群を殺すように私の息子たちを殺すであろう。（八）クリタヴァルマンをはじめとする多くの勇士たちが戦場でいくら努力しても、人中の雄牛サーティヤキを殺すことはできなかった。（九）アルジュナでさえも、誉れ高いシニの孫がそこで戦ったほどには戦わなかった。（二〇）」

サンジャヤは語った。——

王よ、あなたの悪しき政策により、ドゥルヨーダナの所行により〔このようになった〕。バーラタよ、私の言うことを注意深く聞きなさい。（一一）彼らはあなたの息子の命令により相互に特攻隊（七・一六参照）を結成して、戦う決意を固めて、再び引き返した。（一二）ドゥルヨーダナをはじめとする三千人の戦士たち、シャカ、カーンボージャ、バーフリーカ、ヤヴァナ、パーラダ、クニンダ、タンガナ、アンバシタ、パイシャーチャ、マンダラ（異本は「バルバラ」）たちは、蝗が火に入るように、サーティヤキに襲いかかった。（一三―一四）王よ、岩石で戦う山岳部の五百人の勇猛な戦士たちも結束して、サーティヤキに襲いかかった。（一五）それから、千の戦車兵、百名の偉大な戦士、千の象兵、二千の騎兵よりなる勇士たち、及び無数の歩兵たちは、種々の矢の雨を注いでサーティヤキに襲いかかった。（一六―一七）バラタ族の大王よ、ドゥフシャーサナは「彼を殺せ」と彼らをかりたてて、サーティヤキをすっかり取り囲んだ。（一八）そこで我々は驚異的で偉大なサーティヤキの働きを見た。というのは、彼は一人で大勢と冷静に戦ったのであるから。（一九）彼はすべての戦車兵、象兵、騎兵を殺し、すべての蛮族たちをも殺した。（二〇）（二一―四四略）

ドローナは騒がしい音声を聞いて御者に言った。

「御者よ、あのサートヴァタの偉大な戦士が戦場で怒って、多くの軍隊をうち破ってカーラ（破壊神）のようにうろついている。御者よ、あの喧噪の聞こえる所に戦車を導け。（四五―四六）確かにサーティヤキが、岩石で戦う山岳民たちと交戦しているのだ。すべての戦士たちは逃走する馬たちにより運ばれて行く。（四七）彼らは武器と鎧を失い、傷ついてあちこちで倒れている。御者たちは激戦において馬たちを御することができない。（四八）」（四九）

王よ、英邁なドローナがこのように告げた時、彼の御者は最高の戦士ドローナに答えた。

「貴卿、クル族の軍はいたるところで逃げまわっている。戦いにおいてうち破られてあちこち逃げまどっている戦士たちを見なさい。（五〇）そしてまた、こちらではパーンチャーラとパーンダヴァの軍がこぞって、まさにあなたを殺そうとして、いたるところから走って来る。（五一）敵を制する者よ、ここで時宜にかなった仕事をなすべきである。ここにとどまるべき

か、それとも〔サーティヤキの方に〕行くべきか。だがサーティヤキはすでに遠くに行ってしまった。(五二)」

わが君よ、ドローナの御者がこのように言っている間に、多様な戦士たちを殺しているサーティヤキの姿が見えた。(五三) あなたの兵たちは戦場でサーティヤキに殺されつつ、彼の戦車を離れて、ドローナ軍の方に逃げて来た。(五四) 前にドゥフシャーサナが率いて〔戦場に〕引き返した戦士たちも、すべて恐怖にかられ、ドローナの戦車に向かって逃げて来た。(五五)

（第九十七章）

ドローナとドリシタデュムナの驚異的な交戦

サンジャヤは語った。――

ドローナはドゥフシャーサナの戦車が近くにとどまっているのを見て、彼に言葉をかけた。(一)

「ドゥフシャーサナよ、どうしてすべての戦士たちは逃げたのか。王は無事か。シンドゥ国王は生きているか。(二) そなたは王子だ。王の弟、偉大な戦士である。そなたは皇太子の位につきながら、どうして戦場で逃げたか。(三) そなた自身がパーンチャーラとパーンダヴァとの大なる憎悪を作り出しておきながら、戦場でサーティヤキただ一人に遭遇してどうして恐れるのか。(四) 以前、賭博において骰子（さいころ）をとりながら、そなたは知らない。それらが恐ろ

しい毒蛇のような矢になることを。(五) そなたはよりによってパーンダヴァたちに不快なことを言った。そして以前のドラウパディーの苦悩はそなたを原因とする。(六) 勇士よ、そなたの誇り、高慢、大言壮語はどこに行った。毒蛇のようなパーンダヴァたちを怒らせておきながら、そなたはどこへ行くか。(七) このバラタ族の軍隊とスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）王は哀れだ。その荒々しい弟であるそなたが一目散に逃げるのだから。(八) 勇士よ、うち破られて恐怖に苦しむこの軍隊を、そなたが自分の腕力により守るべきではないか。そのそなたが今、恐れて戦いを捨て、敵を喜ばせている。(九) 敵を殺す者よ、軍隊の指導者であるそなたが逃げたら、他の誰が戦場にとどまるか。拠り所が恐れる時、それに頼る人も恐れるものだ。(一〇) 罪のない者よ、今日、そなたはサーティヤキ一人と戦って、戦いから逃げようとした。(一一) クルの王子よ、ガーンディーヴァ弓を持つアルジュナやビーマセーナや双子と対戦したら、そなたはどうするのか。(一二) そなたはサーティヤキの矢を恐れて逃げたが、それらの矢は、戦場で太陽や火のように輝くアルジュナの矢とは比較にならない。(一三) もし一目散に逃げるつもりなら、和平を結んでダルマ王に国土を引き渡せ。(一四) 脱皮した蛇のようなアルジュナの矢がそなたの身体に入らないうちに、パーンダヴァたちと講和せよ。(一五) 偉大なパーンダヴァたちがそなたの百人の兄弟を殺して、国土を奪わないうちに、パーンダヴァたちと講和せよ。(一六) ダルマの息子であるユディシティラ王と戦いにおいて誇り高いクリシュナが怒らないうちに、パーンダヴァたちと講和せよ。(一七) 強力なビーマが大軍に侵入し、そなたの兄弟たちを粉砕しないうちに、パーンダヴァたちと講和せよ。(一八)

だが以前にビーシュマはそなたの兄スヨーダナに告げた。「愛しい者よ、パーンダヴァたちは戦いにおいて無敵である。彼らと講和せよ」と。しかしそなたの愚かな兄スヨーダナはそれに従わなかった。(一九) そこでそなたは戦う決意をして、努力してパーンダヴァたちと戦え。速やかに戦車により、サーティヤキがいる所に行け。(二〇) というのはバーラタよ、そなたのいない軍隊は敗走するであろう。自分のために、不屈の勇者サーティヤキと戦場で戦いなさい。(二一)」

このように告げられたあなたの息子は何も答えなかった。彼は聞いても聞かないふりをして、サーティヤキのいる所に行った。(二二) 彼は退くことのない蛮族(ムレーッチャ)たちの大軍を率いていた。彼は戦場にもどって、奮起してサーティヤキと戦った。(二三) 最高の戦士ドローナも猛り立ち、中位の速度でパーンチャーラとパーンダヴァの軍を襲撃した。(二四) ドローナは戦場においてパーンチャーラの軍に入って、幾百幾千の戦士たちを敗走させた。(二五) 大王よ、それからドローナは戦場で名乗りをあげて、パーンダヴァとパーンチャーラとマツヤの兵たちの大虐殺を始めた。(二六) パーンチャーラの王子である輝かしいヴィーラケートゥは、いたるところで味方の軍を破っているドローナに襲いかかった。(二七) 彼は真っ直ぐの五本の矢でドローナを射て、一本の矢で彼の軍旗を、七本の矢で御者を射た。(二八) 大王よ、私は戦場で奇蹟を見た。ドローナは戦場で、その強力なパーンチャーラの王子に近づけなかったのである。(二九) わが君よ、それからパーンチャーラ軍は、ドローナが戦場で食い止められたのを見て、ダルマの息子の勝利を望み、すべての方角からドローナを取り囲んだ。王よ。

(三〇) 王よ、彼らは火のような矢や高価な投槍や、その他の種々の武器をドローナ一人に注いだ。(三一) 王よ、ドローナはそれらの矢の群をすっかり破壊して、空中で風が大雲を吹き払って輝くように輝いていた。(三二) それから敵の勇士を殺す彼は、太陽か火のように非常に恐ろしい矢をつがえてヴィーラケートゥの戦車に向けて放った。(三三) 王よ、その矢はパーンチャーラの王子を貫いて、血に濡れて燃えるかのようになり、速やかに大地に達した。(三四) そこでパーンチャーラの王子はすぐに戦車から落下した。大きなチャンパカ樹が風に倒されて山頂から落ちるように。(三五) 強力で偉大な射手であるその王子が殺された時、パーンチャーラ軍は急いでドローナをぐるりと取り囲んだ。(三六) バーラタよ、チトラケートゥ、スダンヴァン、チトラヴァルマン、チトララタたちは、兄弟の死に苦しみ、戦おうとしてこぞってドローナを攻撃し、夏の終わりの雲のように矢の雨を放った。(三七—三八) 彼はその戦いにおいて、勇士である王子たちに猛烈に攻撃されて怒り、王子たちの馬と御者を殺し戦車を破壊した。(三九) それから誉れ高い彼は、別の鋭い半月形の矢で、花を摘むように、彼らの頭を射落とした。(四〇) 王よ、栄光ある彼らは殺されて戦車から大地に落ちた。かつて神々と阿修羅との戦いにおいて、悪魔たちが殺されて落ちたように。(四一) 王よ、栄光あるドローナはその戦いで彼らを殺してから、金張りの無敵の弓を揺り動かした。(四二)

ドリシタデュムナは神のようなパーンチャーラの勇士たちが殺されたのを見て、両眼から涙を流して怒り、戦場でドローナの戦車を攻撃した。(四三) 王よ、それからその戦いにおいてパーンチャーラの王子がドローナを矢でおおったのを見て、突然、「ああ、ああ」という

音声があがった。(四四) 偉大なドリシタデュムナにすっかり矢でおおわれても、ドローナは苦にすることなく、笑うかのようにして戦い続けた。(四五) 大王よ、それからパーンチャーラの王子は怒りにかられ、猛り立って、九本の真っ直ぐの矢でドローナの胸を射た。(四六) 誉れ高いドローナは強力な相手により深く傷つき、戦車の座席に座り込み、意識が朦朧となった。(四七) 強力で勇猛なドリシタデュムナは彼がそのような状態になったのを見て弓を捨て、速やかに刀をつかんだ。(四八) わが君よ、そしてその勇士は急いで戦車から飛び下りて、速やかにドローナの戦車に乗り、怒りで眼を赤くして、彼の頭を胴体から切り離そうと望んだ。(四九) 王よ、その時、強力なドローナは意識を取りもどし、接近戦に常用されるヴァイタスティカという矢（一ヴィタスティ、約二十三センチメートルの短い矢）によって、戦場で勇士ドリシタデュムナと戦った。(五〇) 近接戦に用いられるそれらのヴァイタスティカという矢を、ドローナは巧みに用いた。王よ、それらはドリシタデュムナを傷つけた（異本による）。(五一) 勇猛で強力な彼はその多くの矢により射られて、その勢いを殺がれ、急いで戦車から飛び下りた。(五二) それから、偉大な戦士である勇士ドリシタデュムナは自分の戦車に乗り、大弓をとって、戦場でドローナを射貫いた。(五三) 大王よ、その両者の戦いは驚異的であった。生類の群、王族（クシャトリヤ）たち、その他の兵士たちは、その戦いを讃えた。(五四) パーンチャーラの人々は、「ドローナはドリシタデュムナと交戦して、必ずや我らの王に制圧されるであろう」と叫んだ。(五五) しかしドローナはその戦いにおいて、速やかにドリシタデュムナの御者の頭を切り落とした。樹から熟した果実を切り落とすように。王よ、そこでその偉大な男の馬たちは逃走した。(五六) 彼らが逃走した時、勇猛なドローナは戦場のいたるところで、パーンチャーラ軍やスリンジャヤ軍を敗走させた。(五七) かくて敵を滅ぼす栄光あるドローナはパーンダヴァとパーンチャーラの軍に勝利して、再び自分の陣営にもどって泰然と構えていた。王よ、パーンダヴァたちも戦いにおいて彼に勝つことはできなかった。(五八)

（第九十八章）

ドゥフシャーサナを破る

サンジャヤは語った。——

王よ、それからドゥフシャーサナは、雨を降らせる雲のように、幾千の矢を放ってサーティヤキを攻撃した。(一) 彼はサーティヤキを六十本の矢で射て、また更に十六本の矢で射た。(二) しかし戦場にマイナーカ山のように立っている相手を動揺させることはできなかった。ちょうど蜘蛛が、飛んで来た蚊を糸でおおうように。(三) 王（ドゥルヨーダナ）はこのようにドゥフシャーサナが幾百の矢におおわれたのを見て、サーティヤキの戦車を攻撃するようにトリガルタ軍をうながした。(四) そこで戦いに通じた三千のトリガルタの戦士たちは、恐るべき行為をするサーティヤキのそばに行った。(五) 彼らはお互いに決して退却しないと誓って（サンシャプタカ）、戦いの固い決意をして、戦車の大部隊により彼を取り囲んだ。(六) 彼らが戦場で矢の雨を放って襲来した時、彼は前線において、主立った五百名の戦士たちを粉砕した。(七) 彼らはシニの英雄の矢により速やかに殺さ

れて倒れた。大樹が激しい強風により折られて倒れるように。（八）（九―一二略）

勇士サーティヤキは毒蛇のような矢で五百名の戦士を殺してから、徐（おもむろ）にアルジュナの戦車の方に向かって行った。（一三）あなたの息子のドゥフシャーサナは、進んで行くその最高の人を、真っ直ぐの九本の矢で速やかに射貫いた。（一四）しかし偉大な射手サーティヤキは、黄金の矢筈の、禿鷲の羽根のついた、真っ直ぐ飛ぶ五本の鋭い矢で彼を迎え撃った。（一五）バラタ族の大王よ、ドゥフシャーサナは嘲笑い、サーティヤキを三本の矢で射て、更に五本の矢で射た。（一六）しかしサーティヤキはあなたの息子を五本の矢で射て、そして戦場でその弓を断ち切ってから、笑ってアルジュナの方に進んで行った。（一七）そこでドゥフシャーサナは怒り、進んで行くヴリシュニの勇士を殺そうとして、すべて鉄製の槍を彼に放った。（一八）王よ、しかしサーティヤキは、鷲（カンカ）の羽根のついた鋭い矢で、あなたの息子のその恐ろしい槍を百に切断した。（一九）王よ、そこであなたの息子は他の弓をとって、十本の矢でサーティヤキを射て獅子吼をした。（二〇）しかしサーティヤキは戦場で怒り、あなたの息子を錯乱させて、火焔のような矢でその胸の間を射て、更にすべて鉄製の鋭い先端の八本の矢で射た。（二一）ドゥフシャーサナの方も、二十本の矢でサーティヤキを射た。王よ、一方サーティヤキは真っ直ぐの三本の高速の矢で相手の胸の間を射貫いた。（二二）それから勇士サーティヤキは怒り、鋭い矢で相手の馬たちを殺し、真っ直ぐの矢で御者を殺した。（二三）そして最高に武器に通じた彼は、一本の半月形の先の矢で相手の弓を、五本の矢で弓懸（ゆがけ）を、二本の半月形の先の矢で軍旗と旗竿を、鋭い諸々の矢で両端の馬を御す二人の御者を断ち切った。

（二四）ドゥフシャーサナが旗を切られ、戦車を失い、馬と御者を殺された時、トリガルタの将軍は自分の戦車で彼を運び去った。（二五）バーラタよ、強力なサーティヤキは相手を少しの間追跡したが、ビーマセーナの言葉を思い出して相手を殺さなかった。（二六）というのはバーラタよ、ビーマセーナは集会場の中で、あなたのすべての息子たちを戦いにおいて殺すと誓ったからである。（二七）王よ、このようにサーティヤキは、戦いにおいてドゥフシャーサナをうち破ってから、急いでアルジュナがいる所に行った。（二八）（第九十九章）

ドゥルヨーダナの活躍

ドリタラーシトラは言った。

「サーティヤキがそのように進撃した時、彼を殺すことも食い止めることもできなかったとは、私の軍隊の中に誰も勇士がいなかったのか。（一）あのインドラに等しい力を持つ不屈の勇者は、一人で、戦場において、大インドラが悪魔たちの間で行なったような働きをなした。（二）あるいは、サーティヤキが進んだ道は無人であったのか。実にその人中の雄牛は一人で多くの軍隊を粉砕したのだ。（三）多くの偉大な人々が戦っているのに、サーティヤキは一人でどのようにして彼らを突破したか。サンジャヤよそれを私に語ってくれ。（四）」

サンジャヤは語った。――

王よ、戦車兵と象兵と騎兵と歩兵よりなるあなたの軍隊の激しい軍事行動は、まるで宇宙紀の終末のようであった。（五）誇りを与える人よ、あなたの軍隊が毎日召集される時、この世でそれに等しい集団は何もないと私は考えた。（六）そこに集まった神々やチャーラナ（天上の歌手）たちは、「これは地上における最後の（[illegible]の）集団となるであろう」と述べた。王よ、ジャヤドラタが殺された時にドローナが布いていたような陣形は他に決してなかった。（七―八）戦場でお互いに攻撃し合う軍隊の群のたてる音は、激しい風に襲われた海の音のようであった。（九）最高の人よ、集結したあなたの軍の諸王とパーンダヴァ軍とは何十万という数であった。（一〇）戦場で猛り立った恐るべき行為の勇士たちがそこでたてる大声は騒々しく身の毛がよだつものであった。（一一）

わが君よ、その時ビーマセーナ、ドリシタデュムナ、ナクラ、サハデーヴァ、ダルマ王ユディシティラは叫んだ。（一二）

「来い、力をこめて打て、突撃せよ。クリシュナとアルジュナの両雄は敵軍に入ったぞ。（一三）その両者がジャヤドラタを殺すために容易に進めるように速やかに手配せよ。」

彼らはこのように兵たちをうながした。

「もしその二人がいなくなれば、クル軍は目的を果たし、我々はうち破られるであろう。（一四）そこで諸君は結束して、速やかに敵軍の海を動揺させよ。激しい強風が海を動揺させるように。（一五）」

王よ、ビーマセーナとパーンチャーラの王子にうながされた兵たちは、愛しい自分の生命をも捨てて、戦場でクル軍を攻撃した。（一六）最高の威光をそなえた彼らは、天界に行くために武器により戦死することを望んで、友のために戦い、自分の生命を守ろうとしなかった。（一七）王よ、同様にあなたの兵たちも、大きな名声を望んで、気高い戦いの決意をして戦いに臨んだ。（一八）

その非常に恐ろしい激戦が行なわれていた時に、サーティヤキは多くの兵士を殺して、アルジュナの方に進んで行った。（一九）太陽の光線で燦然たる鎧の輝きは、戦場で兵士たちの視界をすっかり妨げた。（二〇）大王よ、パーンダヴァ軍が奮戦している時、ドゥルヨーダナは恐れることなく、その大軍に侵入した。（二一）バーラタよ、彼らと彼との交戦は激しいもので、大々的にすべての兵たちを滅ぼすものであった。（二二）

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、そのように軍隊が進撃している時、ドゥルヨーダナは自ら苦境に陥って、戦場から退却しなかったか。（二三）激戦において一人で多勢と交戦すること、殊に王がそうすることは、私には不公平に見える。（二四）彼はこの上なく安楽に成長し、富貴にめぐまれ、世界の主君である。彼は一人で多勢と交戦して、退却することはなかったか。（二五）」

サンジャヤは語った。——

バラタ族の王よ、あなたの息子一人と多数の敵との驚異的な戦いを語りますから、その奇

蹟を聞きなさい。(二六)

戦場でパーンダヴァの軍はドゥルヨーダナによって激しくかき乱された。蓮池が象によってすっかりかき乱されるように。(二七) クルの王よ、あなたの息子により自軍がそのようにされたのを見て、ビーマセーナを先頭として、パーンチャーラの軍隊は彼に襲いかかった。(二八) 彼は十本の矢でビーマセーナを、三本ずつの矢でマードリーの双子を、六本の矢でヴィラータとドルパダを、百本の矢でシカンディンを射た。(二九) そして二十本の矢でドリシタデュムナを、七本の矢でダルマの息子を、十本の矢でケーカヤたちを、三本ずつの矢でドラウパディーの息子たちを射た。(三〇) そして彼は戦場で、その他の幾百の戦士と象を、恐ろしい矢で断ち切った。怒った死神（アンタカ）が生類を断ち切るように。(三一) 彼は鍛練により、また武器の力により、矢をつがえて弓を円形に引き絞って矢を放ち敵を殺すが、それは眼にも留まらぬ早業であった。(三二) わが君よ、彼が敵を殺していた時、パーンドゥの長子は、半月形の先の矢でその金張りの大弓を三つに断ち切った。(三三) そして彼は多くの鋭い矢を見事に放って相手を射た。それらの矢は速やかに相手の鎧に達して砕け（ドゥルヨーダナの鎧は矢に貫かれない）大地に落ちた。(三四)

それから、パーンダヴァたちは勇み立ち、ユディシティラを取り巻いて〔守った〕。ちょうどヴリトラを殺した時に、神々が大仙たちとともに勇み立ってインドラを取り巻いたように。(三五) その時、ドゥルヨーダナ王は剛弓をとって、「待て、待て」と言いながらパーンダヴァの王に襲いかかった。(三六) 王よ、偉大な戦士であるあなたの息子がそのように言った時、勝利を望むパーンチャーラ軍が勇み立って彼を攻撃した。(三七) ドローナは戦場でユディシティラを捕えようと望み、彼らを迎え撃った。山が激風に煽られる雨雲を受け止めるように。(三八) 王よ、そこで身の毛がよだつ（異本による）激戦が行なわれた。一切の生類を帰滅させるルドラ（シヴァ）の遊戯のような。(三九)

（第百章）

アルジュナとサーティヤキの足跡を追うビーマ

サンジャヤは語った。——

大王よ、その日の最後に、ドローナとソーマカ（パーンチャーラ）軍との間に、再び雷雲のような音をたてる激戦が行なわれた。(一) 英雄ドローナは精神を統一し、赤い馬にひかれる戦車に乗り、戦場で中位の速度をとってパーンダヴァたちを攻撃した。(二) その最高の水瓶から生まれた栄光ある強力な勇士ドローナは、あなたに有益なことに専念し、美しい羽根のついた鋭い矢で、優れた戦士を次々と倒し、戦場で戯れるかのようであった。バラタ族の王よ。(三―四) 〔ドローナはブリハトクシャトラ、ドリシタケートゥ、ジャラーサンダの息子、クシャトラダルマン（ドリシタデュムナの息子）等を次々と殺す。(五―六二略)〕

それから、ドリシタデュムナの息子が殺された時、パーンダヴァ軍は戦慄した。その時、勇士チェーキターナがドローナを攻撃した。(六三) 彼は十本の矢でドローナの胸の間を射て、そして四本の矢でその御者を、また四本の矢で四頭の馬を射た。(六四) 師匠（ドローナ）は十六本の

矢で相手の右腕を射て、また十六本の矢でその軍旗を、七本の矢で御者を射た。(六五)彼の御者が殺された時、その馬たちは、戦場でドローナの矢におおわれて、戦車をひいて逃走した。(六六)御者を殺されたチェーキターナの戦車が逃げるのを見て、その時、パーンチャーラとパーンダヴァの軍に大恐怖が入り込んだ。(六七)戦場に集結したチェーディとパーンチャーラとスリンジャヤの勇士たちを全面的に敗走させて、ドローナはこの上なく輝いた。わが君よ。(六八)八十歳を越えた老いたドローナは、浅黒い顔をし、耳の際まで白髪であったが、まるで十六歳の若者のように戦場で活躍した。(六九)大王よ、敵を殺すドローナが恐れを知らぬように活動していた時、敵たちは彼のことをインドラのようだと思った。(七〇)大王よ、それから英邁なドルパダが言った。

「彼は飢えた虎が小獣を殺すように王族(クシャトリヤ)たちを殺す。(七一)あの邪悪で愚かなドゥルヨーダナは〔死後に〕惨めな世界に行くであろう。彼の貪欲により戦いにおいて王族の雄牛たちが殺されたのであるから。(七二)彼らは切られた雄牛のように幾百と大地に横たわっている。血まみれの体をして、犬やジャッカルどもの餌食にされている。(七三)」

大王よ、軍団の長ドルパダはこのように告げて、戦場でパーンダヴァたちを先に立てて、速やかにドローナを襲撃した。(七四)

（第百一章）

サンジャヤは語った。——

パーンダヴァの軍陣がいたるところで動揺させられていた時、パーンダヴァとパーンチャーラとソーマカの軍はかなり遠方に退却した。(一)バーラタよ、そのように宇宙紀(ユガ)の終末における恐ろしい世界の滅亡のような、身の毛がよだつ恐ろしい戦闘が行なわれていた。(二)ドローナは戦場で奮闘し、繰り返し雄叫びをあげた。そしてパーンチャーラとパーンダヴァの軍隊は殺され、消耗していた。(三)その時、ダルマ王ユディシティラは寄る辺を見出すことができず、どのようになりゆくかと心配した。王中の王よ。(四)ユディシティラはアルジュナを探そうとしてすべての方角を見たが、アルジュナとサーティヤキを見つけることができなかった。(五)彼は猿の雄牛を旗標とする、人中の虎を見つけられないで、またガーンディーヴァ弓の音を聞かないで、気が動転した。(六)そしてダルマ王ユディシティラは、ヴリシュニ族の最高の戦士サーティヤキを見ないで、心配でたまらなくなった。彼はその時、その二人の人中の雄牛を見ないで、平安でいられなかった。(七)誉れ高い強力なダルマ王は、世人の非難を恐れて、サーティヤキの戦車について心配した。(八)

「私は戦場でアルジュナの足跡を追って、友たちの恐れを除き、信義を守る、シニの孫サーティヤキを派遣した。(九)一つであった私の心配が、今や二つになった。私はサーティヤキとアルジュナとについて安否を知らなければならぬ。(一〇)アルジュナの足跡をたどるためにサーティヤキを派遣したが、サーティヤキの足跡をたどるために誰を派遣したらよいか。(一一)もしサーティヤキを探さないで弟の探索だけに努力すれば、世人は私を非難するであろう。(一二)『ダルマ王ユディシティラは弟の探索をして、不屈の勇者であるヴリシュニ族の

サーティヤキを捨てた（二三）』という世人の非難を恐れるから、そこで私は偉大なサーティヤキの足跡をたどるべく、狼腹ビーマを派遣しよう。（二四）敵を殺すアルジュナは私にとって愛しいが、まったく同様に、戦いに酔うヴリシュニの勇士サーティヤキも私にとって愛しい。（二五）私はサーティヤキに過度の重荷を託した。その勇士は友（アルジュナ）の禁止と〔ユディシティラに対する〕尊敬との間で〔迷ったが、ついに〕マカラ（海豚または鰐）が海に入るように、バラタの軍隊に突入した。（二六）あそこに英邁なヴリシュニの勇士と交戦している不退転の勇士たちの叫び声が聞こえる。（二七）何度も固く決心して、今やその時期が来たと思う。二人の勇士が行った所に弓をとるビーマセーナが行くことがよいと私は思う。（二八）地上において、ビーマが耐えられないことは何も存在しない。というのは彼は戦場において、自分の腕力によって、まさしく地上のすべての弓取りに対抗することができるから。（二九）我々はすべてこの偉大な男の腕力に依存して森林の生活を終えることができた。そして戦いにおいて敗れることはない。（三〇）もしビーマセーナがここからサーティヤキの方に行くなら、サーティヤキとアルジュナは戦場において寄る辺を見出すことになろう。（三一）さりながら、確かに戦場でサーティヤキとアルジュナについて心配する必要はないだろう。彼らは武器に通達し、しかもクリシュナに守られている。（三二）しかし私は自分の〔わずかな〕心配をどうしても取り除きたいのだ。それ故、サーティヤキの足跡を追うことをビーマに託したのだ。かくてサーティヤキに対する配慮がなされたことになる。（三三）」

王よ、ダルマの息子ユディシティラはこのように決意して、「ビーマの方に私を連れて行

け」と御者に言った。（二四）馬術に巧みな御者はダルマ王の言葉を聞くと、黄金で飾られた戦車をビーマのもとに近づけた。（二五）ビーマセーナのそばに行き、王は待っていましたとばかりに、急に弱気になって、色々と繰り言を言った。（二六）

「ビーマセーナよ、アルジュナはただ一騎で、神々とガンダルヴァと悪魔たちをうち破ったものだが、その彼の旗標を見ることができないのだ。（二七）」

するとビーマセーナは、そのような状態のダルマ王に告げた。

「あなたがこのように弱気になったのを、見たことも聞いたこともない。（二八）以前、我々が悩み苦しんだ時は、実にあなたが我々の寄る辺であったのに。王中の王よ、立ち上がれ、立ち上がれ。命令してくれ。あなたのために何をするべきか。（二九）誇りを与える人よ、私には成し遂げられないこと、できないことは存在しない。クルの最上者よ、命令しなさい。悲しみに沈んではならぬ。（三〇）」

王は顔を曇らせて、涙をいっぱい浮べ、黒蛇のように息を吐いて、ビーマセーナに次のように言った。（三一）

「誉れ高いクリシュナが怒って吹くパーンチャジャニヤ法螺の音が聞こえることからすると、きっとお前の弟のアルジュナは今日、殺されて横たわっているのだ。（三二）きっと彼が殺されたので、クリシュナ自身が戦っているのだ。パーンダヴァたちは気力あるアルジュナの力に依存している。（三三）彼ら（我々）は、危険において、神々がインドラに頼るように彼に寄る辺を求める。その勇士はシンドゥ国王を求めて、バラタ族の軍隊に入って行った。（三四）ビ

ーマよ、我らは彼が行ったことは知っているが、もどって来ないかも知れぬ。アルジュナは若くて浅黒く、見目麗しく、強力である。(三五) 広い胸、広い肩をし、発情した象のように歩む。チャコーラ鳥のような眼で、赤い眼をして、敵たちの悲しみを増大させる。(三六) 敵を制する者よ、お前に幸あらんことを。これが私の嘆きの原因だ。勇士よ、アルジュナのため、そしてサーティヤキのため、その悲しみは供物(精製バター)により何度も燃え上がる火のように増大するのである。私は彼の旗標を見ない。それ故、私は気弱になっているのだ。(三七―三八) そしてあの人中の虎である勇士サーティヤキのことを考えよ。彼はお前の弟であるあの勇士の後を追って行った。私はあの勇士をも見ないので、気弱になっているのだ。(三九) それ故、きっと戦いに巧みなクリシュナが戦場で戦っているのだ。パーンダヴァたちは強力なアルジュナの力に依存している。(四〇) ビーマよ、そのアルジュナと、強力なサーティヤキが行った所に行ってくれ。法(ダルマ)を知る者よ、もし承知するなら、私の言葉を実行してくれ。私はお前の兄である。(四一) お前はアルジュナのことを探るべきだが、それよりももっとサーティヤキについて探るべきである。ビーマよ、彼は私によかれと望んで、アルジュナの足跡をたどって行った。それは恐ろしくて達しがたく、自己を制していない者たちには行きがたいのに。(四二)」

ビーマセーナは言った。

「あの戦車はかつて梵天(ブラフマー)、イーシャーナ(シヴァ)、インドラ、ヴァルナを乗せた。二人のクリシュナはその戦車に乗って行った。二人について恐れることはない。(四三) しかし私はあなたの命令を頭を下げて受け、出かけるであろう。嘆くことはない。私はあの人中の虎たちに会って、あなたに報告するであろう。(四四)」

サンジャヤは語った。――

強力なビーマはそれだけ言うと、ドリシタデュムナや親しい人々に繰り返しユディシティラのことを託して出発した。強力なビーマはドリシタデュムナに次のように言った。(四五)

「勇士よ、勇士ドローナがダルマ王を捕えるためにあらゆる手段を講じているということは、あなたも知っている。(四六) ドリシタデュムナよ、行くことよりも王を守ることの方が、緊急にやるべきことであると私は思う。(四七) しかし私は兄にこのように言われて、口ごたえすることができない。私はまさに死のうとしているシンドゥ国王がいる所へ行くであろう。疑いもなく、ダルマ王の言葉には従わねばならぬ。(四八) そこであなたは、今、戦場で努めてユディシティラを守れ。この戦いにおいて、一切の仕事のうちでこれが最も重要な仕事であるから。(四九)」

大王よ、ドリシタデュムナは狼腹(ビーマ)に言った。

「勇士ビーマよ、ためらうことなく、望みのままに行け。(五〇) ドローナは戦場において、ドリシタデュムナを殺さないうちは絶対にダルマ王を捕えることはできない。(五一)」

かくてビーマはドリシタデュムナに王のことを託して、目上と長兄に挨拶してから、アルジュナのいる所に行った。(五二) バーラタよ、ダルマ王はビーマを抱きしめ、頭に口づけし

て、めでたい祝福の言葉を述べた。（五三）強力な最高の戦士ビーマセーナは鎧を着て、美しい耳環と腕環をつけ、弓籠手をつけ（異本による）、弓矢を持っていた。（五四）彼の黒鉄製の鎧は黄金で飾られ、豪華で、山にかかった稲光をともなう雲のように輝いていた。（五五）彼は黄、赤、黒、白の衣服を美しく身にまとい、頸当てをつけ、虹をともなう雲のように輝いていた。（五六）

王よ、ビーマセーナが戦おうとしてあなたの軍隊に向かおうとした時、再び恐ろしいパーンチャジャニヤ（クリシュナの法螺）の音が聞こえた。（五七）三界を恐れさせるその恐ろしい音を聞いて、強力なダルマの息子は再びビーマに言った。（五八）

「あのヴリシュニの英雄が大きな音で法螺貝を吹いている。あの法螺の王は大地と空中を響かせている。（五九）きっとアルジュナが大きな災禍に陥ったので、あの円盤と棍棒を持つ男はすべてのクル軍と戦っているのだ。（六〇）きっとクンティーとドラウパディーとスバドラーは、多くの人々とともに、今日、大凶兆を見ている。（六一）それ故ビーマよ、急いでアルジュナのいる所に行け。ビーマよ、アルジュナを見たいと望み、またサーティヤキのために、私にとって四方八方がすべてが暗闇である。（六二）」

このようにユディシティラは何度も「行け、行け」とビーマセーナに言った。ビーマは兄に強く命じられて、兄に好ましいことをするその弟は、太鼓を打ち、何度も法螺を吹いた。（六三）そして獅子吼をし、何度も弓弦を引き、恐ろしい姿をして、敵に向かって激しく襲いかかった。（六四）思考か風のように速い、よく訓練された最高の馬たちはヴィショーカ（御者の名）

に制御され、嘶きながら彼を運んだ。（六五）彼は手で弓弦を引き、切り、射貫き、引き投げ（原文疑問）、敵軍の前衛を動揺させた。（六六）その勇士が進撃した時、パーンチャーラとソーマカの勇士たちは、神々がインドラに従うように彼の後について行った。（六七）大王よ、ドゥフシャラ、チトラセーナ、クンダベーディン、ヴィヴィンシャティ、ドゥルムカ、ドゥフサハ、ヴィカルナ、シャラ、ヴィンダとアヌヴィンダ、スムカ、ディールガバーフ、スダルシャナ、ヴリンダーラカ、スハスタ、スシェーナ、ディールガローチャナ、アバヤ、ラウドラカルマン、スヴァルマン、ドゥルヴィモーチャナ等の兄弟が、軍隊を率いてビーマを取り囲んだ。（六八―七〇）最高の戦士である勇士たちが、種々の軍隊と従者たちとともに、戦場で奮起して、ビーマセーナを襲撃した。（七一）勇猛なビーマセーナは彼らを見て、獅子が小獣を襲うように、激しく襲いかかった。（七二）彼ら勇士たちは神的な偉大な武器の力を発揮して、雲が昇った太陽をおおうように、矢でビーマをおおった。（七三）ビーマは彼らを通り過ぎて、激しくドローナの軍隊に迫った。そしてまず象の軍隊に矢の雨を注いだ。（七四）風神の息子（ビーマ）は短時間のうちに、矢でその象隊を射て粉砕した。（七五）森で獣たちが咆哮するシャラバ（空想上の八足獣）を恐れるように、すべての象たちは恐ろしい叫びをあげながら逃げまわった。（七六）ビーマは更にそれを通り過ぎ、激しくドローナの軍に迫った。師匠（ドローナ）は海岸が海を食い止めるように彼を食い止めた。（七七）ドローナは笑うかのように、矢で彼の額を射た。ビーマは上方に光線を放つ太陽のようにそこで輝いていた。（七八）師匠は、ビーマもアルジュナのように自分に敬意を払うだろうと考えて彼に告げた。（七九）

「強力なビーマセーナよ、そなたは戦いにおいて、敵中の私をうち破らずして敵軍に入ることはできない。(八〇) そなたの弟のクリシュナ（アルジュナ）は私の許可を得てわが軍に入ったが、ああ、そなたは入ることはできない。(八一)」
ビーマは師の言葉を聞いても恐れることなく、怒って赤い眼をして息を吐き、ドローナに言った。(八二)
「名前だけのバラモンよ、アルジュナはあなたに許可されて戦場に入ったのではない。実に彼は無敵で、インドラの軍隊にも侵入するであろう。(八三) 彼は最高の崇拝をしてあなたに敬意を表したのだ。ドローナよ、私は憐れみ深いアルジュナとは違う。あなたの敵のビーマセーナである。(八四) あなたは我々の父親同然であり、師であり、縁者である。我々はあなたの息子である。我々みなはそう考えて、あなたを尊敬して来た。(八五) しかし今は、あなたはそのようなことを言うから、状況は一変した。もしあなたが我々の敵だと考えるなら、それはそれでよい。そこで私は敵であるあなたにふさわしい行為をする。(八六)」
そこでビーマは破壊神（アンタカ）が時間（カーラ）の杖（ダンダ）を振りまわすようにその棍棒を振りまわして、ドローナに向けて放った。王よ。ドローナは戦車から飛び下りた。(八七) それはドローナの戦車を馬、御者、旗もろとも粉砕した。そして、風が力まかせに樹々を砕くように、多くの戦士たちを粉砕した。(八八) あなたの息子たちは再びその最高の戦士を取り囲んだ。そして最高の戦士ドローナは再び他の戦車に乗った。(八九)
大王よ、それから勇猛なビーマセーナは猛り立ち、戦車隊を前にして、矢の雨を注いだ。

(九〇) 偉大な戦士であるあなたの息子たちは、その戦いで殺されながらも、勝利を望んで、戦場で恐るべき力のビーマと戦った。(九一) それから、ドゥフシャーサナは怒り、ビーマを殺そうとして、すべて鉄製の鋭い槍（異本による）を投げた。(九二) しかしビーマは、あなたの息子が投げた大槍が飛来する時、それを両断した。それは奇蹟のようであった。(九三) その時、怒った強力なビーマは、別の三本の鋭い矢で、クンダベーディン、スシェーナ、ディールガネートラ（いずれもドリタラーシトラの息子）の三名を殺した。(九四) それから彼は、戦っているあなたの勇猛な息子たちのうち、クル族の名声を高める勇士ヴリンダーラカを殺した。(九五) それからビーマはまた、三本の矢で、アバヤ、ラウドラカルマン、ドゥルヴィモーチャナという、あなたの三名の息子を殺した。(九六) 大王よ、あなたの息子たちは強力なビーマに殺されつつも、最高の戦士ビーマをぐるりと取り囲んだ。(九七) しかしビーマは笑うかのように、あなたの息子であるスヴァルマンと、ヴィンダとアヌヴィンダの両名を、矢によってヤマ（閻魔）の世界に送った。(九八) バラタの雄牛よ、それからビーマは、あなたの息子である勇士スダルシャナを、戦場で速やかに射貫いた。彼は倒れて死んだ。(九九) ビーマは短時間のうちに、矢をすべての方角に放って、その戦車隊を粉砕した。(一〇〇) 王よ、それから、轟く車の音におののく鹿のように、あなたの息子たちは戦場で殺されて、ビーマセーナを恐れて、すべて戦車とともに逃走した。(一〇一) 王よ、ビーマはあなたの息子たちの大軍を追跡し、戦場でクル族の軍をいたるところで射貫いた。(一〇二) 大王よ、あなたの軍はビーマセーナに殺されて、最高の馬たちをかりたて、戦場にビーマを捨てて去った。(一〇三) 強力なビーマセーナはその戦

いで彼らをうち破り、獅子吼をして、腕の音をたてた。(一〇四) そして強力なビーマは、大きな音で手をたたき、戦車隊を通過して、ドローナの軍隊を襲撃した。(一〇五)

(第百二章)

ビーマとアルジュナの雄叫び

サンジャヤは語った。——

太陽が闇を越えるように、ビーマが戦車隊を越えた時、師匠(ドローナ)は彼を食い止めようとして矢の雨を浴びせた。(一) ビーマはドローナの弓から放たれた(異本による)矢の群を呑むかのように〔受け止めて〕、幻力(マーヤー)によりあなたの軍を惑わせ、〔あなたの息子である〕兄弟たちに向かって行った。(二) 戦場であなたの息子たちにうながされた最高の弓取りたちは、大急ぎで彼をすっかり取り囲んだ。(三) バーラタよ、ビーマはこのように取り囲まれても笑うかのようで、獅子のように吼えると、彼らに向けて恐ろしい棍棒を構え、敵方を粉砕するその棍棒を(異本による)激しく彼らに投げた。(四) 王よ、その強力なインドラに投げられた雷電のような恐ろしい棍棒は、大地を大音響で満たして、光輝で燃え上がり、あなたの息子たちを恐れさせた。(五) 光輝に包まれた棍棒が猛烈な勢いで落下するのを見て、あなたのすべての兵たちは恐ろしい叫び声をあげて逃げまどった。(六) わが君よ、その棍棒の耐えがたい音を聞いて、人々はその場で倒れ、戦車兵たちは戦車から落ちた。(七) 戦いにおいて無敵のビーマは、それらの敵を敗走させてから、鳥の王スパルナ(ガルダ)のように、敵軍を高速で通過した。(八)

大王よ、戦車隊の長のうちの隊長であるビーマセーナがこのように敵を滅ぼしていた時、ドローナは彼を攻撃した。(九) ドローナは戦場において波のような矢でビーマを食い止めて、パーンダヴァたちを戦慄させつつ、激しく雄叫びをあげた。(一〇) 大王よ、ドローナと偉大なビーマとの間に、神と阿修羅との戦いのような非常に恐ろしい戦いが行なわれた。(一一) 戦場でドローナの弓から放たれた鋭い矢により、幾百幾千の勇士たちが殺された。(一二) 王よ、それからビーマは、急いで戦車から飛び下り、両眼を閉じると、徒歩でドローナに襲いかかった。(一三) 優れた雄牛がたやすく雨を受け止めるように、人中の虎ビーマは矢の雨を受け止めた。(一四) わが君よ、強力な彼は戦場で射られつつも、ドローナの戦車の轅(ながえ)を手でつかむと、戦車を放り投げた。(一五) しかし王よ、戦場でビーマに放り投げられたドローナは、速やかに別の戦車に乗り、軍陣の門の方に行った。(一六) その時、彼の御者は速やかに馬たちをかりたてた。クルの王よ、ビーマセーナのその〔働きは〕奇蹟のようであった。(一七) それから強力なビーマセーナは自分の戦車に乗り、あなたの息子の軍隊に激しく襲いかかった。(一八) 彼は風が樹々を砕くように戦場で王族たちを粉砕して、激流が山を砕くように敵軍を粉砕して進んだ。(一九) 王よ、フリディカの息子(クリタヴァルマン)に守られたボージャの軍に至って、ビーマセーナはそれをさんざんうち砕いて通過した。(二〇) わが君よ、彼は弓籠手(ごて)の音で敵軍を戦慄させ、虎が雄牛たちを制するようにすべての敵軍をうち破った。(二一) ビーマはボージャ軍を過ぎ、カーンボージャ軍を過ぎ、他の戦いに通達した多くの蛮族(ムレーッチャ)

の群を過ぎた。(二二) そしてビーマは人中の雄牛サーティヤキが戦っているのを見てから、奮起し、戦車で速やかに進んで行った。(二三) 大王よ、パーンドゥの王子ビーマセーナはアルジュナに会いたいと望み、戦場であなたの戦士たちを通り過ぎて、そこで戦っている人中の雄牛アルジュナを見た。勇猛なアルジュナはシンドゥ国王(ジャヤドラタ)を殺すために奮戦していたのである。(二四—二五) ビーマはそこでアルジュナを見て大声で叫んだ。アルジュナは叫んでいる彼の大音声を聞いた。(二六) 大王よ、そこでアルジュナとクリシュナも大声で叫んで、吼えている二頭の雄牛のように近づいて行った。(二七) クリシュナとアルジュナはその強力な男の叫びを聞いて、狼腹(ビーマ)に会いたいと望んで繰り返し雄叫びをあげた。(二八) 大王よ、ダルマ王ユディシティラは、ビーマセーナの叫びと、弓を持つアルジュナの叫びを聞いて喜んだ。(二九) そして王はその大音声を聞いて憂いも晴れ、アルジュナの戦勝を期待した。(三〇)

そのように戦いに酔うビーマが叫んでいた時、強力なダルマの息子ユディシティラは微笑した。(三一) そしてその法(ダルマ)を守る人々の最上者は、深く考えて、心中の思いを述べた。

「ビーマよ、お前は合図を送ってくれた。目上の言う通りにしてくれた。(三二) ビーマよ、お前を敵にしたら、彼らが戦いに勝つことはあり得ない。幸いなことに、アルジュナは戦場で生きながらえている。幸いなことに、不屈の勇者である英雄サーティヤキも無事だ。幸いなことに、私はクリシュナとアルジュナが叫んでいるのを聞く。(三三—三四) アルジュナは戦いにおいてインドラをうち破り、火神を満足させた。幸いなことに、戦場で敵を殺す、そのア

ルジュナは生きている。(三五) 我々はすべてアルジュナの腕力に依存して生きている。幸いなことに、敵軍を殺すそのアルジュナは生きている。(三六) その戦士は一騎で、神々にも破られがたいニヴァータカヴァチャ(悪魔の一族)を殺した。幸いなことに、そのアルジュナは生きている。(三七) マツヤ国の都で、クル族の人々が牛を捕えるために集結した時、アルジュナは彼らをすべてうち破った。幸いなことに、そのアルジュナは生きている。(三八) 彼は激戦において一万四千のカーラケーヤ(悪魔の一族)をその腕力により殺した。幸いなことに、そのアルジュナは生きている。(三九) 彼はドゥルヨーダナを救うために、強力なガンダルヴァの王をその武器の力によりうち破った。幸いなことに、そのアルジュナは生きている。(四〇) 彼は王冠と花輪をつけ、強力で、白馬たちにひかれ、クリシュナを御者とする。私にとって彼は常に愛しい。幸いなことに、そのアルジュナは生きている。(四一) 彼は息子の死に嘆き悲しみ、なしがたい行為を追求し、ジャヤドラタを殺そうと求め、誓いを立てた。そのアルジュナは、戦場でシンドゥ国王(ジャヤドラタ)を殺すであろうか。(四二) 私は日没前に、クリシュナに守られ、誓いを果たしたアルジュナに会えるだろうか。(四三) ドゥルヨーダナのために専念するシンドゥ国王は、アルジュナに倒されて、彼の敵たちを喜ばせるだろうか。(四四) シンドゥ国王がアルジュナに倒されるのを見て、ドゥルヨーダナ王は我々と和平を結ぶだろうか。(四五) 戦いにおいて兄弟たちがビーマセーナに殺されたのを見て、邪悪なドゥルヨーダナは我々と和平を結ぶだろうか。(四六) その他の多くの戦士たちが大地に倒れているのを見て、邪悪なドゥルヨーダナは後悔するだろうか。(四七) ビーシュマ一人の犠牲によ

って我々の怨みは鎮まるだろうか。スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）は生き残った者を守るために講和するだろうか。（四八）」

王よ、このようにユディシティラが哀れみに満ちて様々に考え込んでいる間に、恐ろしい戦いが展開していた。（四九）

（第百三章）

ドリタラーシトラは言った。

「強力なビーマセーナが、雲の轟きのような声で雄叫びをあげていた時、いかなる勇士たちが彼を食い止めたか。（一）サンジャヤよ、というのは戦場で怒ったビーマセーナの前に立てる者は、三界において見出されないと思う。（二）友よ、激戦において棍棒を振り上げるカーラ（時間、破壊神）のような彼に立ち向かう者を見出すことはできない。（三）彼は戦車により戦車を、象により象を撃破する。いかなる者が、インドラ自身のように、戦場で彼に立ち向かえるか。（四）ビーマセーナが怒って私の息子たちを殺そうとする時、ドゥルヨーダナのために専念するいかなる者たちが彼の前に立つか。（五）激戦においてビーマセーナという森火事が、私の息子という草や蔓を燃やす時、いかなる勇士たちが彼の面前に立つか。（六）戦場で私の息子たちが、すべての生類がカーラにかりたてられるように、ビーマに駆逐されるのを見て、いかなる者たちがビーマを食い止めたか。（七）ビーマという火が私の息子たちを燃やそうとする時、いかなる勇士たちが引き返して〔戦った〕か。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。

（八）」

サンジャヤは語った。――

このように強力なビーマセーナが騒々しい声で雄叫びをあげていた時、強力なカルナが彼に襲いかかった。（九）強力で非常に短気なカルナは、力強く弓を引きその力を発揮しようとして、戦いを望んだ。（一〇）カルナとビーマの合戦において、その両者の弓籠手の音を聞いて、戦車兵や騎兵たちの四肢はふるえた。（一一）戦場でビーマセーナの恐ろしい叫びを聞いて、王族の雄牛たちは、空も地もその響きで満たされたと考えた。（一二）そしてその偉大なパーンダヴァの恐ろしい叫びにより、戦場において、すべての戦士たちの弓は大地に落下した。（一三）そして大王よ、すべての象や馬は恐れて、大小便をたらし、意気阻喪した。（一四）王よ、そのビーマとカルナの激しい合戦において、多くの恐ろしい前兆が現われた。（一五）

それからカルナは二十本の矢でビーマを射た。そして速やかに五本の矢で彼の御者を射貫いた。（一六）しかし敏速で強力なビーマセーナは戦場で笑って、六十四本の矢でカルナを射た。（一七）勇士カルナは彼に四本の矢を放った。王よ、しかしビーマは、手練の早業を見せて、それらが到達しないうちに、真っ直ぐの矢でそれらをずたずたに切断した。（一八）カルナは何度も矢の群で彼をおおった。勇士ビーマは何度もカルナに矢でおおわれたが、カルナの弓をその握りのところで断ち切った。そして多くの真っ直ぐの矢で彼を射貫いた。（一九―二〇）恐るべき行為をする勇士カルナは、他の弓をとると、弦を張って、戦場でビーマを

射た。(二一) ビーマは非常に怒って、三本の真っ直ぐの矢をカルナの胸に激しく撃ち込んだ。(二二) 彼は胸の間に刺さった三本の矢により、三つの峰を持つ高山のように輝いた。バラタの雄牛よ。(二三) 最高の矢により彼が射られた時、山の鉱脈から流れ出る赤亜(ガイリカ)の線のような血が流れた。(二四) 見事に射当てられて苦しみ、カルナはわずかに動揺したが、弓に矢をつがえてビーマを射た。わが君よ。そして更に、幾百幾千の矢を放った。(二五) 屈強の弓取り（カルナ）によって激しく矢を浴びせられても、ビーマは笑って、相手の弓弦を断ち切った。(二六) そしてその勇士は戦場において、半月形の先の矢で、相手の御者をヤマ（閻魔）の住処に送った。そしてその四頭の馬の生命を奪った。(二七) 王よ、勇士カルナは馬を殺された戦車から飛び下り、ヴリシャセーナの戦車に乗った。(二八) 栄光あるビーマセーナは、その戦いでカルナをうち破って、雷雲の音のような大音声をあげた。(二九) バーラタよ、ユディシティラはその音声を聞いて、ビーマセーナによりカルナがうち破られたと考えて喜んだ。(三〇) その時パーンダヴァ軍はいたるところで法螺貝を鳴らした。敵軍のたてる音を聞いて、あなたの軍隊も大声をあげた。アルジュナはガーンディーヴァ弓を引き、クリシュナは法螺を吹き鳴らした。(三一) バラタ族の大王よ、しかし叫ぶビーマの音声は、そのような音をおって、すべての軍隊の間に聞こえた。(三二) それから、敵を制する両雄は武器により戦った。カルナはやや手加減して戦った。ビーマは強烈に戦った。(三三)

（第百四章）

戦争を賭博にたとえる

サンジャヤは語った。——

わが軍がかき乱され、アルジュナとサーティヤキとビーマセーナがシンドゥ国王の方に行った時、あなたの息子（ドゥルヨーダナ）は、多くのなすべきことを考えて、ただ一騎で急いでドローナのもとに向かった。(一) あなたの息子の最高に高速の戦車は、思考か風のように速く、すぐにドローナのもとに着いた。(二) あなたの息子は怒って赤い眼をして彼に言った。

「敵を苦しめる勇士であるアルジュナ、ビーマセーナ、無敵のサーティヤキたちは、シンドゥ国王のそばに到達した。そしてうち勝たれざる彼らはすべて、そこでも奮戦している。(三―四) 誇りを与える者よ、この戦いにおいて勇士アルジュナが通過して行ったとしても、どうしてあなたはサーティヤキとビーマとに通過されたのか。(五) この世において、海が干涸びることのように、まったく不思議なことだ。最高のバラモンよ、あなたがサーティヤキやアルジュナに敗れるとは。(六) そしてビーマセーナに敗れるとは。世人は盛んに言い立てている。『弓のヴェーダ（兵学）に通じたドローナは、どうして戦場で敗れたか』と。(七) 三名の戦士が、人中の虎であるあなたを通り抜けて行くとは、きっとこの不幸な私が戦死するということなのだ。(八) しかしこのようになったからには、次に何をすべきか、あなたの意図することを言って下さい。すでに起こったことは仕方ありません。善後策を講じなさい。誇り

を与える者よ。(九)次にシンドゥ国王のためになすべき、時宜にかなったことを言って下さい。そしてどうかすぐにそれを実行して下さい。(一〇)」

ドローナは言った。

「大王よ、考えるべきことは多い。私はここでなすべきことを言うから、聞きなさい。まことにパーンダヴァ側の三名の勇士が通過した。彼らの後に危険があるように、彼らの前にも危険がある。(一一)クリシュナとアルジュナとがいる所の危険がより重大であると私は思う。今やバラタ族の軍は、前後から捕えられている。(一二)この場合、シンドゥ国王を守るべきだと私は思う。わが子よ、我々は怒ったアルジュナを恐れる彼を守るべきである。(一三)サーティヤキと狼腹(ビーマ)の両雄も、シンドゥ国王の方に向かって行った。今やシャクニが計画した賭博(の本番)が訪れたのだ。(一四)あの集会場(賭博場)においては、勝利も敗北もなかった。わが子よ、今ここで勝負している我々に、勝利と敗北があるのだ。(一五)以前、クルの集会での賭博において、シャクニが恐ろしい骰子と考えていたもの、それらが抗しがたい矢である。(一六)わが子よ、多くのクル族の人々が集まっている時、軍隊が賭博者であり、矢が骰子であると知れ。王よ。(一七)そしてシンドゥ国王が賭けられた物である。王よ、かくてこの戦いは賭博であると決定する。シンドゥ国王をめぐって、我々は敵たちと大々的な賭博に専念しているのだ。(一八)大王よ、ここで我々はみな、自分の生命を捨てて、戦場においてシンドゥ国王を適切に守るべきである。わが子よ、ここで勝負している我々にとって、必ずや勝利と敗北とがある。(一九)あの最高の弓取りたちが努力してシンドゥ国王を守って

いる所に、自ら速やかに行きなさい。彼を守っている人々を守りなさい。(二〇)しかし私はここにとどまり、他の人々を送り出そう。そしてパーンダヴァとスリンジャヤと連合したパーンチャーラ軍を食い止めるであろう。(二一)」

それから、ドゥルヨーダナは師匠の指示により、恐ろしい仕事をするため、自らを鼓舞して、従者をともなって急いで出発した。(二二)一方、アルジュナの戦車の車輪を守る二名のパーンチャーラの王子、すなわちユダーマニユとウッタマウジャスは、クル軍の外側を通ってアルジュナの方に向かって行った。(二三)大王よ、前にアルジュナが戦おうとしてあなたの軍隊に突入した時、この二人はクリタヴァルマンに食い止められたのだった。(二四)強力なバラタ族の王ドゥルヨーダナは急いでいたが、その道を急ぐ二人の兄弟と激しい戦闘を始めた。(二五)偉大な戦士として名高いその二人の優れた王族(クシャトリヤ)は、戦場で弓を引き絞って襲いかかった。(二六)ユダーマニユは怒り、三十本の鉄製の矢をあなたの息子の胸の間に向けて速やかに放った。(二七)王中の王よ、ドゥルヨーダナもパーンチャーラの王子ウッタマウジャスの四頭の馬と、両端の馬を御す二人の御者を殺した。(二八)その戦いで馬と二人の御者を殺されたウッタマウジャスは、急いで兄弟のユダーマニユの戦車に乗った。(二九)彼は兄弟の戦車に乗り、多くの矢でドゥルヨーダナの馬たちを射た。馬たちは殺されて大地に倒れた。(三〇)その戦いで彼の馬たちが倒れた時、ユダーマニユは速やかに最高の矢で、彼の弓と箙(えびら)を断ち切った。(三一)あなたの息子の馬も御者も殺されたので、その勇士は戦車から飛び下り、棍棒を持って、二人のパーンチャーラの王子を襲撃した。(三二)敵の都市を征服

する彼が怒って襲来するのを見て、ユダーマニユとウッタマウジャスは戦車の座席から飛び下りた。（三三）そこで棍棒を持つ彼は、戦場において、黄金できらびやかな最高の戦車を、馬と御者と旗もろとも、棍棒で粉砕した。（三四）敵を苦しめるあなたの息子は敵の戦車を破壊したが、自らも馬と御者を殺されたので、急いでマドラ国王の戦車に乗った。（三五）一方、二名の強力なパーンチャーラの最高の王子たちは、他の戦車に乗り、アルジュナの方に向かって行った。（三六）

（第百五章）

ビーマの攻撃によりカルナは退却する

ドリタラーシトラはたずねた。

「アルジュナの戦車の付近で、強力なカルナとビーマとが戦ったが、その戦いはどのようなものであったか。（一）まず勇士カルナは戦いにおいてビーマセーナに敗れたが、どうして再びビーマのもとに行ったか。（二）またビーマは、偉大な戦士として名高い、地上において最高の戦士であるカルナに対して、どうして戦いを挑んだのか。（三）ダルマの息子ユディシティラは、ビーシュマとドローナを凌駕して、今や弓をとるカルナ以外に恐れる者はいない。（四）彼はその勇士のことを考えて、恐怖のあまりいつも眠れなかったのに、どうしてビーマはそのカルナに対して戦いを挑んだのか。（五）カルナは敬虔で、力をそなえ、戦場において退くことはない。どうしてビーマは、その最上のカルナに対して戦いを挑んだのか。（六）カ

ルナとビーマとの二人の勇士は、アルジュナの戦車の付近で遭遇し、どのように戦ったか。（七）そしてカルナは、先に兄弟であることを知らされ哀れみを抱いているのに、クンティーの言葉を思い出しながらどうしてビーマと戦ったのか。（八）また勇士ビーマは、以前カルナになされた敵意を思い出して、戦場でどのようにカルナと戦ったか。（九）サンジャヤよ、私の息子ドゥルヨーダナは、いつも望んでいた。カルナが戦場にこぞったパーンダヴァたちをうち破るだろうと。（一〇）私の愚かな息子は、戦勝の希望をカルナに寄せていた。その彼は、恐るべき行為のビーマセーナとどのように戦ったか。（一一）私の息子たちはカルナを頼りにしてあの勇士たちと敵対した。そのカルナに対して、ビーマはどのように戦ったか。（一二）カルナになされた多くの侮辱を思い出しながら、ビーマはどのようにカルナと戦ったか。（一三）強力なカルナは一騎で全地上を征服した。そのカルナに対し、ビーマはどのように戦いを挑んだのか。（一四）カルナは耳環と鎧とともに生まれた。そのカルナに対して、ビーマはどのように戦いを挑んだのか。（一五）その両者の戦いはどのようであったか。二人のうちどちらが勝ったか。それをありのままに話してくれ。サンジャヤよ、そなたは語るのに巧みであるから。（一六）」

サンジャヤは語った。――

「ビーマセーナは最高の戦士カルナを捨てて、勇猛なクリシュナとアルジュナがいる所に行こうと望んだ。（一七）大王よ、しかしカルナは、行こうとする彼に襲いかかり、雲が山に雨

を降らせるように、鷺（カンカ）の羽根のついた矢を彼に降り注いだ。(一八) 強力なアディラタの息子（カルナ）は、開花する蓮のような顔をして笑い、行こうとするビーマに戦いを挑んだ。(一九) ビーマセーナはカルナからのその挑戦に我慢できなかった。半円を描いて引き返し、カルナと戦った。(二〇) 誉れ高い彼は（異本による）、一騎打ちにおいて、すべての戦士たちの最上者である、鎧を着て奮戦するカルナに、真っ直ぐ飛ぶ矢を浴びせた。(二一) 強力なビーマは、抗争を終わらせたいと望み、カルナを殺そうとして、他のすべての兵を殺してから彼を攻撃した。(二二) わが君よ、敵を苦しめる短気なビーマは怒って、種々の恐ろしい矢の雨を放った。(二三) 誉れ高いカルナは、発情した象のように歩むそれらの矢の雨を、武器の幻力（マーヤー）により破壊した。(二四) 大王よ、その術にかけて非常に尊敬される偉大な射手カルナは、〔兵法の〕師匠のように戦場で動きまわった。(二五) ビーマセーナが怒って戦っている時、短気なカルナは笑うかのようにビーマを攻撃した。(二六) ビーマはカルナがその戦いにおいて、勇士たちがいたるところで戦い、見ている前で笑ったことに我慢できなかった。(二七) 彼が近づいた時、強力なビーマセーナは怒り、「仔牛の歯」（矢の種類）により彼の胸の間を射貫いた。御者が突き棒で巨象を突くように。(二八) そしてビーマは、美しい羽根のついた鋭い七十三本の矢を見事に放ち、美しい鎧を着たカルナの御者を（異本は「カルナを」）射貫いた。(二九) 勇士カルナは、黄金の網でおおわれた、風のように速い馬たちを、五本ずつの矢で射貫いた。(三〇) 王よ、それから一瞬の半分の間に、カルナがビーマセーナの戦車に対して矢よりなる網をかけるのが見えた。(三一) 大王よ、その時カルナの弓に放たれた矢により、ビーマは戦車、旗、御者も

ろともにおおわれた。(三二) カルナは六十四本の矢により、相手の堅固な鎧を貫いた。そして彼は猛り立ち、急所を断つ鉄矢により脇を射た。(三三) しかし狼腹はカルナの弓から放たれた猛烈な矢をものともせず、動揺することなくカルナを攻撃した（異本による）。(三四) 大王よ、ビーマは戦場でカルナの弓から発する毒蛇のような矢を受けても、苦にしなかった。(三五) そして栄光あるビーマセーナはその戦いで、切っ先鋭い三十二本の矢でカルナを射た。(三六) しかしカルナは苦にすることなく、シンドゥ国王を殺そうと望む勇士ビーマセーナに矢を浴びせた。(三七) 実はカルナは、その戦いにおいて、手加減してビーマと戦った。一方ビーマは以前の恨みを思い出して、怒りをこめて戦った。(三八) 短気なビーマセーナはその軽蔑に我慢できなかった。敵をうち破る彼は、速やかにカルナに矢の雨を放った。(三九) 王よ、その戦いでビーマセーナに放たれたそれらの恐ろしい矢は、さえずる鳥たちのように、いたるところに落下した。(四〇) 大王よ、ビーマセーナの弓から放たれた、黄金の羽根の矢は、狼たちが小獣を襲うように、カルナに襲いかかった。(四一) しかし王よ、最高の戦士カルナは、すっかり矢でおおわれながらも、戦場で恐ろしい矢の雨を放った。(四二) それらの戦場を飾る雷電のような矢が到着する前に、狼腹は多くの矢でそれらを断ち切った。(四三) バーラタよ、ヴァイカルタナ・カルナはその戦いにおいて、更に勇士ビーマを矢の雨でおおった。(四四) バーラタよ、ビーマは戦場においても矢で全身おおわれて、針におおわれるヤマアラシのように見えた。(四五) 金の羽根を持つ、石でよく研がれた矢がカルナの弓から放たれたが、勇士ビーマは、太陽が自分の光線を帯びるように、戦場でそれらの矢を帯びていた。

〔四六〕ビーマセーナは全身血まみれになり、森の中のパラーシャ樹が黄金のような花により輝くように輝いていた。〔四七〕大王よ、その戦いにおいて、勇士ビーマはカルナの行為に我慢できず、怒りで両眼をつり上げた。〔四八〕彼は二十五本の矢をカルナに放った。カルナは猛毒の蛇におおわれた白い山のようだった。〔四九〕神のように勇猛なビーマは戦場において、更に六本、そして八本の矢でカルナの急所を射た。〔五〇〕それから栄光あるビーマセーナは猛り立ち、速やかにカルナの弓を断ち切り、すべての資具をも破壊した。〔五一〕そしてすばやく矢で四頭の馬と御者を殺し、それから太陽光線のような鉄矢でカルナの胸を射た。〔五二〕わが君よ、それらすべての矢はカルナを貫通して大地に達した。太陽の光線が雲を貫通して大地に達するように。王よ。〔五三〕弓を切られ、相手の矢で苦しんだカルナは、雄々しさを誇ってはいたが、非常に動揺して、他の戦車に乗り移った。〔五四〕

（第百六章）

カルナ、再びビーマと戦う

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、私の息子たちの勝利の希望は常にカルナにあった。その彼が戦場において退却したのを見て、ドゥルヨーダナは何と言ったか。友よ、そしてカルナはそれから戦場においてどのようにしたか。〔一〕」

サンジャヤは語った。——

戦場において燃える火のようなビーマセーナを見て、カルナは適切に装備された他の戦車に乗り、風により隆起した海のように、ビーマに襲いかかった。〔二〕王よ、あなたの息子たちは怒ったカルナを見て、ビーマセーナのことを、ヤマ（閻魔。異本は「火」で）の口に献じられた供物のようだと考えた。〔三〕カルナは大きな弓の音と、恐ろしい弓籠手の音をたてて、ビーマセーナの戦車に向かって襲いかかった。〔四〕王よ、それから再び、カルナとビーマの間に、非常に恐ろしい激戦が行なわれた。〔五〕強力な両者は猛り立ち、お互いに相手を殺そうと望み、まなざしにより燃やすかのように互いに相手を凝視した。〔六〕敵を制する二人の勇士は、その戦いにおいて、怒りで赤い眼をし、いきり立ち、息を吐き、お互いに攻撃し、傷つけ合った。〔七〕両者は怒った虎のように、高速の鷹のように、いきり立つシャラバ（空想上の八足獣）のように、お互いに戦った。〔八〕

その時、敵を制するビーマは様々な苦難を思い出した。賭博における苦難、森での苦難、ヴィラータの都で経験した苦しみ。〔九〕あなたの息子たちに、宝物に満ちた王国を奪われたこと。あなたと息子たちにより、いつも諸々の苦しみを味わわされたこと。〔一〇〕あなた〔の息子〕が、罪もないクンティーとその息子たちを燃やそうと望んだこと。集会場の中で、クリシュナー（ドラウパディー）が邪悪な人々に苦しめられたこと。〔一一〕「他の夫を求めよ。お前には夫たちはいない。パーンダヴァたちは地獄に堕ちた。彼らはすべて不毛の胡麻のようになってしまった」などと、クルの王よ、あなたの前でクル族の人々があの時に言ったこと。あな

たの息子たちが、クリシュナーを奴隷女のように享受しようとしたこと。(一一―一三) そして集会場において、彼らが黒鹿の皮をまとって森に行こうとした時、カルナがあなたの前で彼らに乱暴なことを言ったこと。(一四) あなたの息子が順境にありながら、逆境にあって怒りで茫然自失しているパーンダヴァたちを草のよう(取るに足らぬもの)にみなし、踊り上がって喜んだこと。(一五) そして幼少の頃からの様々な苦難。——敵を殺す徳性ある狼腹(ビーマ)は、以上のことを思い出して、命も惜しくないと思った。(一六) バラタの虎は、耐えがたい金張りの大弓を引き絞り、身を捨ててカルナを攻撃した。(一七) ビーマはカルナの戦車に向けて、石でよく研がれた輝かしい矢を放ち、それらの矢が作る網で太陽の輝きをさえぎった。(一八) しかしカルナは笑って、速やかに鋭い矢を放って、それらの矢でビーマセーナの矢の網を破壊した。(一九) それからその強力な勇士カルナは、九本の鋭い矢で激しくビーマを射貫いた。(二〇) 狼腹は象が突き棒で制御されるようにそれらの矢で食い止められたが、動揺することなく、カルナに襲いかかった。(二一) パーンダヴァの雄牛が猛烈な勢いで襲いかかった時、カルナは戦うべくビーマを迎え撃った。発情した象が発情した象を迎え撃つように。(二二) それからカルナが百の太鼓のように鳴り響く法螺貝を吹くと、わが軍は喜んで、波立つ海のように揺れ動いた。(二三) 戦車兵・象兵・騎兵・歩兵よりなる軍隊が高揚するのを見て、ビーマはカルナに襲いかかり、矢でおおった。(二四) カルナも矢でビーマをおおってから、戦場で〔接近し、〕自分の鹿(異本は「熊」)のような色の馬たちを、相手のハンサ(鵞鳥)の色をした最高の馬たちに混じり合わせた。(二五) 風のように速い鹿色の馬たちを白馬たちに混じり合わせたのを見て、あなたの息子たちの軍は「わあ、わあ」という叫びをあげた。(二六) 大王よ、風のように速い白と黒の馬たちは、混じり合って輝いた。空において白と黒の雲が混じり合って輝くように。(二七) カルナと狼腹が猛り立ち、怒りで眼を赤くしているのを見て、あなたの軍の勇士たちは恐れてふるえた。(二八) バラタの最上者よ、その両者が戦う場所は、ヤマ(閻魔)の王国のように恐ろしかった。それは死者の王の都のように見られがたかった。(二九) 勇士たちは集会のようなそのめざましい戦いを見て、その激戦において(異本による)どちらか一方が明らかに勝ったと見ることはできなかった。(三〇) 王よ、強力な武器の応酬をする両者の交戦は、あなたと息子との悪い政策のせいだと彼らは考えた。(三一) 敵を殺す二人は、お互いに鋭い矢で相手をおおい、矢の雨を降らせ、矢の網で空をおおった。(三二) 二人の勇士は、鋭い矢によりお互いに相手を殺そうとしていた。二人は雨を降らせる二つの雲のように、最も見られるべき(美しい)ものであった。(三三) 王よ、敵を制する両者は、黄金で飾られた矢を放って、火か流星によるかのように、空中を輝かしいものにした。(三四) 両者に放たれた、鷺(カンカ)や孔雀の羽根のついた矢の列は、秋に空を飛ぶ発情した鶴(サーラサ)たちの列のようだった。(三五)

敵を制するビーマがカルナとの戦いに専念しているのを見て、クリシュナとアルジュナは、この戦いはビーマには荷が重すぎると考えた。(三六) カルナとビーマは矢の落下を克服して多くの矢を放ったが、それらの矢に手ひどく撃たれ、馬と人と象たちは倒れた。(三七) その他多くの倒れつつある者、倒れた者たちにより、大王よ、あなたの息子たちの人員ははなは

だしく減少した。(三八) バラタの雄牛よ、すぐに大地は、矢によって殺された人間と馬と象たちの身体でおおわれた。(三九)

(第百七章)

ドリタラーシトラは言った。

「私はビーマセーナの勇武は非常に驚異的であると思う。戦場において、迅速に攻撃するカルナと戦ったのだから。(一) カルナは戦場において武器をとって奮起する神々や、夜叉、阿修羅、人間たちをも制止することができる。(二) そのカルナがどうして、戦場で、光輝により輝いているビーマを圧倒できなかったのか。なあ、サンジャヤよ、そのわけを私に語ってくれ。(三) 両者の命を賭けた戦いにおいて、更にどのような戦闘が行なわれたか。勝利も敗北もそれに依存すると私は思う。(四) サンジャヤよ、私の息子スヨーダナはカルナを獲得して、戦いにおいて、クリシュナやサーティヤキをともなうパーンダヴァたちに勝利しようと企てたのだ。(五) しかしカルナが戦場で、恐るべき行為のビーマセーナによって何度もうち破られたと聞いて、迷妄が私に入り込むようだ。(六) 私の息子の悪しき政策により、私はクル族が滅亡したと考える。サンジャヤよ、カルナはパーンダヴァの勇士たちに勝てないだろうから。(七) カルナはパーンドゥの息子たちと諸々の戦いをしたが、あるゆる場合、パーンダヴァたちが戦場でカルナをうち破った。(八) 友よ、パーンダヴァたちはインドラを含む神々によってさえうち破られない。しかし私の愚かな息子ドゥルヨーダナはそのことを理解しない。(九) 私の愚かな息子は財主(クベーラ)のようなユディシティラの財産を奪って、蜜を求める愚者のように(七・四九・一一参照)、落下することを考えない。(一〇) 悪知恵の働く彼は詐術により偉大な者たちの王国を奪い、パーンダヴァたちは征服されたと考えて、彼らを軽蔑する。(一一) 私も自己を制することができず、息子への愛情に負けて、法(ダルマ)を守る偉大なパーンドゥの息子たちに辛く当たった。(一二) プリターの息子ユディシティラは思慮深く、常に平和を望んでいたが、私の息子たちは彼のことを無能力と考えて軽んじた。(一三) 勇士ビーマは、多くの苦難、すべての侮辱を心に抱いてカルナと戦っている。(一四) それ故サンジャヤよ、戦いにおける最上者であるカルナとビーマとが、お互いに相手を殺そうとして、戦場でどのように戦ったか、それを語ってくれ。(一五)」

ビーマ、ドゥルジャヤとドゥルムカを殺す

サンジャヤは語った。――

王よ、聞きなさい。森における二頭の象のような、お互いに相手を殺そうと望むカルナとビーマとの戦いがどのように行なわれたかを。(一六) 王よ、ヴァイカルタナ(カルナ)は怒り、敵を制する怒った勇猛なビーマを攻撃し、三十本の矢で射貫いた。(一七) バラタの最上者よ、ヴァイカルタナは、黄金で飾られた、曇りのない先端をした矢でビーマを射た。(一八) しかしビーマは、矢を放つカルナの弓を、三本の鋭い矢で断ち切った。そして彼は半月形の先の

矢で、相手の戦車の座席から御者を地面に射落とした。(一九) 勇者カルナは、ビーマセーナを殺そうと望み、黄金と瑠璃で飾った柄を持つ槍をつかんだ。(二〇) 強力なカルナは、そのまるでカーラ（破壊神）の槍のような大槍を持って投げようと身構え、生命を終わらせるその槍をビーマセーナに向けて投げた。(二一) 強力な御者(スータ)の息子カルナは、インドラが雷電を投じるようにその槍を投げて、非常に大きな声で叫んだ。あなたの息子たちはその叫びを聞いて喜んだ。(二二) しかしビーマは、カルナの腕により投げられた、その太陽か火のように輝く槍を、七本の矢により空中で断ち切った。(二三) わが君よ、脱皮した蛇のようなその槍を切って、ビーマは怒ってカルナの生命を求めるかのように、戦場でヤマ（閻魔）の杖のような、孔雀の羽根と金の矢筈のついた、石で研いだ九本の矢をカルナに送った。(二四―二五) 一方、威光に満ちたカルナは他の耐えがたい金張りの弓をとって引き絞り、九本の矢を放った。(二六) 王よ、しかしビーマは、九本の真っ直ぐの矢で、カルナに放たれた九本の大矢を断ち切り、獅子のように吼えた。(二七) その両者は、雌牛をめぐって吼える強力な二頭の雄牛のように、あるいは餌をめぐって（異本による）吼える二頭の虎のように、雄叫びをあげた。(二八) 二人はお互いの隙をうかがい、互いに相手を攻撃しようと望んで、牛舎にいる二頭の大きな雄牛のように睨み合った。(二九) 両者は弓を引き絞って放たれた矢によって撃ち合い、お互いに牙の先を突き合わせて戦う二頭の巨象のようであった。(三〇) 大王よ、両者はお互いに矢の雨により相手を焼きつつ、怒りで眼を見開き、お互いに睨み合った。(三一) このようにして、二人はお互いに笑い合い、繰り返し非難し合い、法螺貝の音を響かせ、相互に戦った。

(三二)

わが君よ、ビーマは相手の弓を握りのところで断ち切った。そして法螺貝のように白いその馬たちを、矢によりヤマ（閻魔）の住処に送った。(三三) このようにカルナが苦境に陥ったのを見て、ドゥルヨーダナ王は怒りでふるえ、〔弟の〕ドゥルジャヤに命じた。(三四)
「ドゥルジャヤよ、ビーマがカルナを呑み込まないうちに、彼のもとに行け。あの鬚(ひげ)なし男をすぐに殺せ。カルナを力づけて。(三五)」

このように命じられたあなたの息子は「承知した」と言って、一心不乱に矢を注ぎながら、ビーマセーナを攻撃した。(三六) 彼は九本の矢でビーマを射て、八本の矢で馬たちを、六本の矢で御者を、三本の矢で旗を射て、七本の矢で再びビーマを射た。(三七) 一方ビーマセーナは怒り、ドゥルジャヤの急所を断って、その馬や御者もろともヤマ（閻魔）の住処に送った。(三八) 美しく飾られた彼はうち破られ、地面で蛇のようにのたうちまわっていた。カルナは泣きながらそのあなたの息子のまわりを右まわりにまわって〔敬意を表した〕。(三九) ビーマの方は、宿敵のカルナの戦車を奪い、矢の群によりおおって、鉤で一面におおわれた百殺棒(シャタグニー)（兵器の種類）のようにした。(四〇) しかし敵を苦しめる超戦士のカルナは、多くの矢で貫かれても、戦場でいきり立つビーマから離れなかった。(四一)

（第百八章）

ビーマに敗れ逃走するカルナ

サンジャヤは語った。──

カルナはビーマに敗れて戦車を失ったが、他の戦車に乗って、再びビーマを射た。(一)両者は弓を引き絞って放たれた矢により撃ち合い、お互いに牙の先を突き合わせて戦う二頭の巨象のようであった。(二)その時カルナは、矢の群でビーマを激しく攻撃し、大声で雄叫びをあげ、更に相手の胸を射た。(三)しかしビーマは真っ直ぐ飛ぶ十本の矢を彼に射返した。そして更に、二十本の真っ直ぐの矢で彼を射た。(四)王よ、一方カルナは、九本の矢でビーマの胸の間を射た。そして一本の鋭い矢でその旗を射た。(五)それからビーマは、六十三本の矢でカルナを射貫いた。御者が突き棒で巨象を打ち、鞭で馬を打つように。(六)大王よ、勇士カルナは誉れ高いビーマにひどく傷つけられ、口の端を舐めまわし、怒りで眼を赤くした。(七)大王よ、それからカルナは、すべての身体を裂くことのできる矢をビーマセーナに送った。インドラが雷電をバラ(悪魔の名)に送ったように。(八)カルナの弓から放たれたその美しい羽根を持つ矢は、戦場でビーマを貫いてから、地面を裂いて地中に達した。(九)ビーマの方は躊躇することなく、カルナに向けて棍棒を投げた。それはすべて鋼鉄製で、四腕尺(キシュク)(長さの単位)あり、重くて、金環で飾られ、六角形であった。(一〇)インドラが金剛杵(ヴァジュラ)で阿修羅たちを殺すように、怒ったビーマはその棍棒でカルナの見事に戦車をひく良馬たちを殺した。

(一一)バラタの雄牛よ、それから強力なビーマは、先が馬蹄形の二本の矢で、カルナの軍旗を切り、御者をも殺した。(一二)バーラタよ、カルナは馬と御者を殺され、軍旗も落ちた戦車を捨て、意気消沈したが、しかし弓を引き絞って立った。(一三―一四)

王よ、最高の戦士カルナが戦場で戦車を失ったのを見て、ドゥルヨーダナは〔弟の〕ドゥルムカに言った。(一五)

「ドゥルムカよ、あそこでカルナは、ビーマのために戦車を壊された。あの勇士である最高の人に戦車を提供せよ。(一六)」

バーラタよ、ドゥルムカはドゥルヨーダナの言葉を聞いて、ビーマを矢でおおいつつ、急いでカルナのもとに行った。(一七)風神の息子(ビーマ)は、ドゥルムカがカルナのそばに行くのを見て、口の端を舐めまわして喜び勇んだ。(一八)大王よ、それからビーマは諸々の矢でカルナを食い止めておいて、速やかにその戦車をドゥルムカに向けて走らせた。(一九)大王よ、その瞬間、ビーマは美しい羽根のある真っ直ぐの九本の矢で、ドゥルムカをヤマ(閻魔)の住処に送った。(二〇)王よ、ドゥルムカが殺された時、カルナはまさにその戦車に乗り、燃える太陽のように輝いた。(二一)ドゥルムカが急所を貫かれ、血まみれになって横たわっているのを見て、カルナは眼にいっぱい涙を浮べて、しばらくの間攻撃しなかった。(二二)勇士カルナは息絶えた彼を右まわりにまわって、長く息を吐き、何もしようとしなかった。(二三)王よ、ビーマセーナはその隙をついて、禿鷲の羽根のついた十四本の矢をカルナに送った。(二四)大王よ、金の羽根のついた金色に彩られたそれらの強力な矢は、カルナ

の鎧を貫通して、十方を輝かせた。(二五) 王よ、それらの血に飢えた矢は、カーラ（破壊神）にかりたてられ、怒った蛇のように、カルナの血を飲んだ。(二六) それらの矢は地面に達して輝いていた。穴に半分入った、怒った大蛇のように。(二七) カルナは躊躇することなく、黄金で飾られた十四本の非常に恐ろしい鉄矢を彼に射返した。(二八) それらの恐ろしい矢は、ビーマセーナの左腕を貫通して、大地に入った。〔ハンサ〕鳥たちがクラウンチャ山に入るように（プーナ版の読みをとるも疑問）。(二九) それらの矢は大地に入って輝いていた。太陽が西に没した時、光線が輝くように。(三〇) ビーマはその戦いにおいて、急所を断つ鉄矢で貫かれて、山が川を流すように、多量の血を流していた。(三一) そこでビーマは怒り、スパルナ（ガルダ）のように高速の三本の矢でカルナを射て、また七本の矢で彼の御者を射た。(三二) 大王よ、誉れ高いカルナはビーマの力に苦しみ、動揺して、戦場を捨てて急いで逃走した。(三三) 超戦士ビーマの方は、黄金で飾られた弓を引き絞り、燃え上がる火のように戦場に立っていた。(三四)

（第百九章）

その他のクルの王子たちを殺すビーマ

ドリタラーシトラは言った。

「運命こそが最高であると私は思う。ああ、人間の努力などは何にもならない。戦場でカルナが苦労しても、ビーマを破れなかったのだから。(一)『カルナは戦いにおいて、パーンダヴ

アたちとクリシュナをうち破ることが可能である。カルナに等しい戦士はこの世に誰も見出せない』とドゥルヨーダナが何度も言うのを私は聞いた。(二)『実にカルナは強力な勇士で、疲れを知らぬ屈強な弓取りである。』サンジャヤよ、愚かなドゥルヨーダナは以前、私にそう告げた。『神々ですら戦いにおいて、カルナに協力された私に勝つことはできない。王よ、いわんや勇気のない、腑抜けのパーンドゥの息子たちなど、問題ではない。(三―四)』

カルナが無毒の蛇のように、敗れて、戦場から退却したのを見て、一体、ドゥルヨーダナはどのように言ったか。(五) ああ、彼は錯乱し、戦いに長けていないドゥルムカ一人を参戦させたのだ。蝗を火に入れるように。(六) サンジャヤよ、アシュヴァッターマン、マドラ国王（シャリヤ）、クリパ、カルナが結束しても、きっとビーマに立ち向かうことはできない。(七) 彼らも、一万の竜に匹敵するビーマの非常に恐ろしい力と、風のように激しい恐るべき決意を知っている。(八) 彼の腕力と怒りと精力を知る者たちが、恐るべき行為をする、ヤマ（閻魔）かカーラ（時間、破壊神）か死神のような彼を、戦場においてどうして怒らせるであろうか。(九) 強力な御者の息子カルナだけが、自分の腕力に依存して、ビーマをものともせずに、戦場で戦った。(一〇) しかしビーマは、その戦いにおいて、インドラが阿修羅をうち破るようにカルナをうち破った。そこで、誰も戦いにおいてビーマをうち破ることはできないのだ。(一一) ビーマはアルジュナの後を追って、ただ一騎でドローナを粉砕して私の軍隊に侵入した。生きたいと望むいかなる人が彼を攻撃するか。(一二) サンジャヤよ、誰がビーマの前に立つことができよう。悪魔たちが、雷電と金剛杵を振り上げた大インドラの前に立てないよ

うに。(二三)人は死王（ヤマ）の都に達しても、もどって来ることができよう。しかしビーマセーナのもとに行ったら、もどることは決してできない。(二四)彼らは迷い、怒ったビーマセーナを攻撃し、無思慮にも蝗が火に入るように身を滅ぼした。(二五)あの時ビーマは集会場において怒り、クル族の人々が聞いている所で、私の息子たちを殺すと誓った。(二六)きっとそのことを思い出し、またカルナが敗れたのを見て、ドゥフシャーサナは兄とともに、ビーマを恐れて戦うのをやめた。(二七)サンジャヤよ、あの愚か者（ドゥルヨーダナ）は集会において何度も言った。『カルナとドゥフシャーサナと私とで、戦いにおいてパーンダヴァたちを破るであろう』と。(二八)サンジャヤよ、しかしカルナがビーマに敗れて戦車を失ったのを見て、きっと彼はクリシュナ〔の調停〕を拒絶したことをひどく後悔している。(二九)自分の過失により、武装した弟たちが戦いにおいてビーマセーナに殺されたのを見て、きっと私の息子はこの上なく苦しんでいる。(三〇)実に生きることを望むいかなる者が、恐るべき武器を持つ、カーラ（破壊神）を体現したかのような、怒ったビーマに逆らえようか。(三一)ヴァダヴァー（海中火）の口の中にいる人でも逃れることができよう。しかしビーマの中に達した者は逃れられないと私は考える。(三二)そして、パーンダヴァたち、パーンチャーラの人々、クリシュナとサーティヤキは猛り立ち、戦いにおいて生命を惜しくないと思っている。(三三)」

サンジャヤは語った。――

クルの王よ、現在進行中の殺戮についてあなたは嘆いているが、疑いもなくあなたがこの

世界の滅亡の根源である。(二四)あなたは息子たちの言葉に従い、自らこの大なる敵意を作り出し、忠告されても受け入れなかった。死すべき者が適切な薬を飲まないように。(二五)大王よ、自ら非常に消化されにくい猛毒を飲んだのだから、今やその果報をすべて得なさい。最高の人よ。(二六)その力に応じて戦う戦士たちをあなたは非難するが、私は戦いがどのように行なわれたか、あなたに語るであろう。(二七)

わが君よ、あなたの息子である偉大な戦士たち、五名の兄弟は、カルナがビーマセーナに敗れたことに我慢できなかった。(二八)すなわち、ドゥルマルシャナ、ドゥフサハ、ドゥルマルダ、ドゥルダラ、ジャヤは、美しい鎧を着て、ビーマに向かって行った。(二九)彼らは強力な狼腹（ビーマ）をぐるりと取り囲み、蝗の群のような矢で諸方をおおった。(三〇)しかしビーマセーナは戦場で笑うかのように、激しく襲来する神々のような王子たちを受け止めた。(三一)あなたの息子たちがビーマセーナのそばに行ったのを見て、カルナは強力なビーマセーナを攻撃した。(三二)王よ、彼は金の羽根のついた、石で研いだ鋭い矢を放った。しかしビーマは、あなたの息子たちに制止されながらも、速やかにカルナに襲いかかった。(三三)一方、クルの人々は、カルナをすっかり取り巻いて、真っ直ぐの矢をビーマセーナに浴びせた。(三四)王よ、ビーマは二十五本の矢で、恐るべき弓を持つその人中の雄牛たちを、馬や御者もろとも、ヤマ（閻魔）の住処に送った。(三五)彼らは御者とともに息絶えて戦車から落下した。それは美しい花をつけた大樹が風によって折れて倒れるようだった。(三六)そこで我々はビーマセーナの驚異的な勇武を見た。彼は矢でカルナを食い止めておいて、あなたの

息子たちを殺したのである。(三七) 大王よ、カルナはビーマに鋭い矢ですっかり食い止められて、ビーマセーナを凝視していた。(三八) ビーマセーナは猛り立ち、怒りで赤い眼をして、非常に大きな弓を何度も引き絞ってカルナを凝視した。(三九)

(第百十章)

カルナとビーマの死闘は続く

サンジャヤは語った。——

あなたの息子たちが倒れているのを見て、栄光あるカルナは非常に怒って、生きる希望を失った。(一) そしてその時、カルナは自分のせいだと思った。それから彼は怒り、動揺してビーマセーナを攻撃した。(二) カルナは笑うかのように、五本の矢でビーマを射て、更に金の羽根のついた、石で研いだ七十本の矢で射貫いた。(三) しかし狼腹は、その嘲笑に我慢できず、百本の真っ直ぐの矢でカルナを射た。(四) そして更に、五本の高速の鋭い矢で射貫き、そして半月形の先の矢でカルナの弓を断ち切った。わが君よ。(五) バーラタよ、そこでカルナは意気消沈したが、他の弓をとり、ビーマセーナを矢ですっかりおおった。(六) ビーマは相手の馬たちを殺し、御者を殺し、相手に仕返しをして大笑いした。(七) そしてその人中の雄牛は、矢で相手の弓を断ち切った。大王よ、大音響をたてるその金張りの弓は落下した。(八) そこで勇士カルナは戦車から降り、戦場で棍棒を持ち、ビーマセーナめがけて投げた。(九) 狼腹は激しく飛来する棍棒を見て、すべての軍隊が見ている前で、矢でそれを食い止め

た。(二〇) それから勇猛なビーマはカルナを殺そうと望み、急いで、幾千の矢を放った。(二一) カルナは激戦において、それらの矢を自分の矢で防いで、更に諸々の矢によってビーマセーナの鎧を破壊した。(二二) そして彼は一切の生類が見ている前で、二十五本のクシュドラカ(矢の種類)をビーマに向けて放った。それは奇蹟のようであった。(二三)

大王よ、それからビーマは怒り、戦場で九本の真っ直ぐの矢をカルナに送った。わが君よ。(二四) それらの鋭い矢は、カルナの鎧を貫き、そして右腕を貫き、地面に入った。蛇たちが蟻塚に入るように。(二五) ビーマセーナに圧倒されて、カルナが戦場に徒歩で立っているのを見て、ドゥルヨーダナ王は言った。

「あらゆる努力をして、カルナの戦車の方に急いで行け。(二六)」

王よ、そこであなたの息子たちは、兄の言葉を聞いて、鋭い矢を放ちながらビーマを急襲した。(二七) すなわち、チトラ、ウパチトラ、チトラークシャ、チャールチトラ、シャラーサナ、チトラーユダ、チトラヴァルマンであり、戦いにおいてめざましく戦う勇士たちであった。(二八) 王よ、勇士ビーマは、奮起して激しく迫る彼らを、馬と御者と旗もろとも、戦場でうち倒した。彼らは殺されて、風に押された樹木のように大地に倒れた。(二九) 王よ、勇士であるあなたの息子たちが殺されたのを見て、カルナは顔を涙だらけにして悲嘆に暮れた。(三〇)

勇猛なカルナは再び適切に整えられた他の戦車に乗り、戦場で急いでビーマを攻撃した。(三一) 大王よ、両者は金の羽根のついた、石で研がれた矢により相互に射貫き合い、花咲く

キンシュカ樹のように輝いていた。（二二）ビーマは怒って、切っ先鋭い三十六本の矢で、カルナの鎧を破壊した。（二三）両者は矢で多大な傷をつけられて、体に赤栴檀を塗ったように血まみれになり、昇った二つの終末の太陽のように輝いていた。（二四）二人は矢で鎧を断たれ、全身血まみれになり、鎧を失い、脱皮した二匹の蛇のように輝いていた。（二五）その敵を制する二名の人中の虎は、お互いに牙で裂き合う二頭の虎のように、矢という牙を振るって切り合った。（二六）発情した象のように勇猛な両者は、鋭い矢で傷つけ合い、競技場（戦場）の中で〔闘争に〕専念している二頭の象のように輝いていた。（二七）両者は戦場でお互いに矢の網で相手をおおい、雄叫びをあげ、戦車ですべての方角を走りまわった。（二八）大王よ、その偉大な両者は、戦車で円を描いてまわったりなどして、ヴリトラとインドラのように輝いていた。（二九）ビーマは戦場で、手の飾りをつけた両腕で弓を引き絞り、稲妻をともなう雲のように輝いていた。（三〇）そして王よ、ビーマという雲は、弓の音という雷鳴をたて、矢の洪水という大雨を降らせ、カルナという山に襲いかかった。（三一）バーラタよ、それからビーマは弓から放った幾千の矢をカルナに浴びせた。雲が雨を山に注ぐように。（三二）ビーマが鷺（カンカ）の羽根のついた美しい矢筈を持つ矢でカルナをおおった時、あなたの息子たちはそのビーマセーナの勇武を目撃した。（三三）ビーマはアルジュナと誉れあるクリシュナと、サーティヤキと、両輪を守る二人を喜ばせて、戦場でカルナと戦った。（三四）大王よ、あなたの息子たちは、自己を知るビーマの勇武と、両腕の力と、冷静さを見せつけられた。（三五）

（第百十一章）

ビーマはクルの王子たちを殺し続ける

サンジャヤは語った。――

ビーマセーナの弓弦と弓籠手（ゆごて）の音を聞いて、発情した象が敵対する象の音を聞いて我慢できないように、カルナは我慢できなくなった。（一）彼は少しの間、ビーマの矢の届く範囲から退去したが、あなたの息子たちがビーマセーナに殺されて、戦車から落下しているのを見て、悲嘆に暮れて苦しんだ。彼は長く熱い息を吐いて、再びビーマに向かって行った。（二―三）カルナは怒って赤い眼をし、大蛇のように息を吐き、諸々の矢を放ち、光線を放つ太陽のように輝いた。（四）バラタの雄牛よ、狼腹（ビーマ）は太陽の光線の網のように拡げられた、カルナの弓から放たれた矢によりおおわれた。（五）カルナの弓から放たれた、孔雀の羽根のついた美しい矢は、ビーマの全身に入った。鳥たちが宿るために樹木に入るように。（六）カルナの弓から放たれた金の羽根の矢はいたるところに落下し、列をなしたハンサ鳥たちのように輝いた。（七）王よ、カルナの矢は、弓から〔だけでなく〕、軍旗、種々の資具、傘、轅（ながえ）の先、頸木からも生じるかのように見えた。（八）カルナは空を満たして、鳥の羽根のついた、金で飾られた、高速の鳥のような矢を放った。（九）

カルナが猛り立って死神（アンタカ）のように襲来した時、狼腹は生命を捨てて猛り立ち、九本の矢で彼を射貫いた。（一〇）カルナのそのような耐えがたい勢いと、彼の多量の矢の群を見ても、

強力なビーマはまったく動揺しなかった。(一一) それからビーマは、カルナの矢の網を破壊して、更に別の二十本の鋭い矢でカルナを射貫いた。(一二) その戦いでカルナがビーマを矢でおおったように、ビーマはカルナを矢でおおった。(一三) バーラタよ、戦いにおけるビーマセーナの勇武を見て、あなたの兵たちですら歓喜して、吟誦者(チャーラナ)たちも喜んだ。(一四) ブーリシュラヴァス、クリパ、ドローナの息子、マドラ国王(シャリヤ)、ジャヤドラタ、ウッタマウジャス、ユダーマニユ、サーティヤキ、クリシュナとアルジュナ、以上、クルとパーンダヴァの十名の勇士は、「見事、見事」と言って、激しく獅子吼をした。(一五―一六)

その身の毛がよだつ騒がしい音声があがった時、王よ、ドゥルヨーダナは急いであなたの息子である王や王子たち、すなわち彼の弟たちに告げた。

「どうか諸君、狼腹から守るために、カルナのもとに行ってくれ。(一七―一八) ビーマの弓から放たれた矢がカルナを殺さないうちに。勇士たちよ、カルナを守るべく努力せよ。(一九)」

わが君よ、ドゥルヨーダナに命じられて、七人の弟たちが怒って、ビーマセーナを取り囲んで攻撃した。(二〇) 彼らはビーマに近づき、矢の雨で彼をおおった。雨季に、雲が大雨で山をおおうように。(二一) 王よ、七人の勇士たちはいきり立ってビーマセーナを苦しめた。生類の帰滅の時に、七惑星(グラハ)が月を苦しめるように。(二二) 王よ、それからビーマは左手を堅く握りしめ、美しく飾られた弓を強く引き絞った。(二三) そして強力な彼は猛り立ち、普通の人間には考えられない業を発揮して(テクスト疑問)、七本の矢をつがえ、太陽の光線のようなそれらの矢を彼らに発射した。(二四) 大王よ、ビーマセーナは以前の怨みを思い出して、あなたの息子たちの身体から生命を放つかのように矢を放った。(二五) バーラタよ、ビーマセーナに放たれた、それらの金の羽根のついた、石で研がれた矢は、パラタ族の王子たちを貫通して空中を飛んだ。(二六) 大王よ、黄金で飾られたそれらの矢は、彼らの心臓を貫いて、美しい翼を持つ鳥たちのように輝いていた。(二七) 王中の王よ、黄金で飾られた七本の矢は、あなたの息子たちの血を飲んで出て来たので、その羽根も先端も血にまみれていた。(二八) 彼らはそれらの矢に急所を射貫かれて、戦車から大地に落ちた。山の斜面に生えた大樹が象に折られて落ちるように。(二九) すなわち、シャトルジャヤ、シャトルサハ、チトラ、チトラーユダ、ドリダ、チトラセーナ、ヴィカルナの七名が倒されたのであった。(三〇)

ビーマはカルナの見ている前で彼らを殺してから、恐ろしい獅子吼を発した。(三一) バーラタよ、その勇士のその叫びは、ダルマ王に、自分の大なる勝ち戦を告げるかのようであった。(三二) 弓を持つビーマセーナのその大きな叫び声を聞いて、戦場におけるダルマ王の喜びは最高であった。(三三) 大王よ、それから喜んだユディシティラは、ビーマセーナの叫び声に対して、いたるところで楽器の大きな音により呼応した。(三四) 狼腹が合図を送った時、彼は最高に喜んで、最高の戦士ドローナに戦いを挑んだ。(三五)

大王よ、あなたの息子である三十一名の勇士が殺されたのを見て、ドゥルヨーダナはヴィドゥラの言葉を思い出した。(三六) 「今や、ヴィドゥラの有益な言葉が現実のものになった」と考えて、その王はどうしてよいかわからなかった。(三七) 賭博の時、あなたの愚かな息子はひどいことを言った。そして集会場において、カルナはクリシュナー(ドラウパディー)に乱暴な

言葉を述べた。（三八）パーンドゥの息子たちの面前で、そして王よ、あなたの前で、そしてすべてのクルの人々の前で、師匠の前で……。（三九）「クリシュナーよ、パーンダヴァたちは破滅した。永遠に地獄に堕ちた。他の夫を選べ」と。今やその報いが訪れた。（四〇）あなたの息子たちは、ドラウパディーを集会場に連れて来て、数々の乱暴なことを言った。恐るべき弓取りのパーンダヴァたちを怒らせた。（四一）クルの王よ、ビーマセーナはその怒りの火を、十三年間も堪えていたが、今やそれを放出して、あなたの息子たちを滅ぼしている。（四二）ヴィドゥラは何度も懇願したが、あなたに和平を結ばせることはできなかった。パラタの最上者よ、息子たちとともに業の果報を享（う）けよ。王よ、ヴィカルナと強力なチトラセーナは殺された。（四三）その他のあなたの息子のうちの最上者、勇士である息子たちの誰でも、ビーマの視界に入れば、ビーマはそれを見て速やかに殺すであろう。大王よ（異本による）。（四四）ビーマとカルナに放たれた幾千の矢にわが軍が焼かれるのを、私は実にあなたのために目撃したのだ。（四五）

（第百十二章）

ドリタラーシトラは言った。

「吟誦者（スータ）サンジャヤよ、私は嘆いているが、特に私自身の非常に悪しき政策〔の結果〕が今や訪れたと私は思う。（一）しかし過ぎたことは過ぎたことだと私は考える。サンジャヤよ、今となっては、どのようなことをしたらよいのか。（二）私の悪い政策から生じたこの勇士たちの滅亡がどのように展開したか、それを私に語ってくれ。サンジャヤよ、私は気を確かに持っている。（三）」

サンジャヤは語った。——

大王よ、勇猛なカルナとビーマは、激戦において、二つの雨雲が雨を降らせるように、矢の雨を降らせた。（四）ビーマの名前を印された、金の羽根を持つ石で研がれた矢は、カルナに達してその生命を絶つかのように入り込んだ。（五）同様にビーマも、その戦いで、カルナに放たれた毒蛇のような幾百幾千の矢を浴びた。（六）大王よ、その両者の矢がいたるところに落下して、あなたの軍隊は海のように動揺した。（七）敵を制する者よ、ビーマの弓から放たれた毒蛇のように恐ろしい矢によって、戦場であなたの軍隊は殺された。（八）（九—二六略）

（第百十三章）

カルナはビーマを辱しめる

サンジャヤは語った。——

大王よ、それからカルナは三本の矢でビーマを射貫いてから、多彩な多くの矢の雨を放った。（一）大王よ、ビーマはカルナに撃たれつつも、山が貫かれるように、まったく苦にすることはなかった。（二）王中の王よ、ビーマセーナは戦場でカルナを、よく鍛えられた鋭い棘

のある矢で射貫いた。（三）大王よ、彼はカルナの耳から、黄金の輝かしい大きな耳環を地面に射落とした。燃える星を天空から落とすように。（四）そして強力なビーマは笑うかのように、他の矢でカルナの胸の間をしたたかに撃った。（五）バーラタよ、更にビーマは急いで、戦場において、ヤマの杖（ダンダ）のような十本の高速な鉄矢を放った。（六）わが君よ、ビーマに放たれたそれらの矢はカルナの額に達してその中に入った。蛇たちが蟻塚に入るように。（七）額に刺さったそれらの矢によって、あらかじめ青蓮の花輪をつけていたかのように輝いた。（八）

屈強の弓取りに苦しめられたカルナは戦場で怒り、猛烈な勢いで、ビーマセーナを殺そうとして急襲した。（九）強力で短気なカルナは怒り、禿鷲の羽根のついた百本の矢を彼に送った。バーラタよ。（一〇）しかしビーマは、戦場でカルナをものともせず、彼の力をも考慮することなく、恐ろしい矢の雨を放った。（一一）（一二―四三略）

ヴァイカルタナ・カルナは、真っ直ぐの矢によって、ビーマの両の箙（えびら）と弓弦を切り、更に手綱、馬をつなぐ紐を切った。（四四）それからカルナは、相手の馬たちを殺し、三本の矢で御者を射た。その御者は急いで飛び下りて、ユユダーナ（サーティヤキ）の戦車に行った。（四五）終末の火のようなカルナは猛り立ち、笑うかのように相手の軍旗を断ち、諸々の旗を落下させた。（四六）大王よ、弓を失ったビーマは怒り、戦車用の槍を握って振りまわし、カルナの戦車めがけて投じた。（四七）ビーマに投げられたその黄金で飾られた槍が大きな流星のように輝いて落下した時、カルナは十本の矢でそれを断ち切った。（四八）王よ、めざましく戦うカルナ

が友のために矢を放った時、その槍はカルナの矢で十に切られて落ちた。（四九）

それからビーマは、勝利かさもなくば死と覚悟して、黄金で飾られた楯と刀をとった。しかしカルナは笑うかのように、それを激しく砕いた。（五〇）大王よ、ビーマは楯と戦車を失い、怒りにかられ、急いで刀を振りまわして、カルナの戦車めがけて投げつけた。（五一）その鋭い刀はカルナの弓と弦を切り、空から落ちた蛇のように地面に落ちた。（五二）それからカルナは笑って、戦場で猛り立ち、敵を殺す、堅固な弦を持つ、より強力な弓をとった。（五三）

不屈の勇者である強力なビーマセーナは怒り、空中に飛び上がって〔カルナに襲いかかった〕。それはカルナの心を悩ませた。（五四）その戦いでカルナは、ビーマのその行為を見て、勝利を望み、身を隠して、ビーマセーナを欺いた。（五五）カルナが怖気づいて、戦車の座席から消えたのを見て、ビーマは彼の軍旗をとって地面に立った。（五六）ガルダが蛇を殺すように、ビーマが戦車の上でカルナを殺そうと望んだことに対し、すべてのクル族の人々と吟誦者（チャーラナ）たちは敬意を表した。（五七）ビーマは軍旗と戦車を失ったが、自己の義務（ダルマ）を守り、自分の戦車を後にして、ひたすら戦う決意をしていた。（五八）それからカルナは怒り、戦場で戦うべく近くにいるビーマを激しく攻撃した。（五九）強力な二人は、夏の終わり（雨季の始まり）に轟く二つの雷雲のように、大舞台（戦場）で競い合って戦った。（六〇）戦場で互いに容赦しない、怒った二名の人中の獅子の交戦は、神々と悪魔の戦いのようであった。（六一）しかしビーマは武器も尽きたので、カルナに圧倒された。戦車を失った彼は、アルジュナに殺された象た

ちが山のように倒れているのを見て、カルナの戦車の道を妨害するためにそれらの中に入った。(六二)ビーマは生きることを望み、戦車には通りがたい象の群の中に入り、カルナを攻撃しなくなった。(六三)それから敵の都市を征服するビーマは、決着をつけようと望み、アルジュナの矢に殺された象を持ち上げて立っていた。(六四)カルナは彼の持ち上げたその象をも矢で粉砕した。ビーマは咆哮して、砕かれた象の身体をカルナに投げつけた。(六五)そして怒ったビーマは、車輪や馬や戦車など、地面の上に見つけたものを手当り次第にとって、カルナに投げつけた。(六六)カルナは相手が投げたものをその度ごとにすべて鋭い矢で断ち切った。しかしカルナは、〔母親の〕クンティーの言葉を思い出して、武器を持たない相手を殺さなかった。(六七)カルナは走り寄って、弓の先でビーマセーナに触れ、笑って繰り返し彼に告げた。(六八)

「鬚なし男、愚か者、大食いめ。武器の使い方も知らぬ幼稚な奴め。戦場で臆病風を吹かせる奴め。俺と戦うな。(六九)パーンドゥの息子よ、種々の食物と飲物が沢山ある所へ行け。愚か者、お前は戦闘にはまったくふさわしくない。(七〇)あるいはビーマよ、隠者となって木の実を食べろ。大馬鹿者。クンティーの息子よ、森へ行け。お前は戦さは得意でない。(七一)狼腹よ、お前は木の実や根を食べるのや客人を接待するのに向いている。お前は軍事行動にはふさわしくないと思う。(七二)ビーマよ、お前は誓戒(ヴラタ)や戒行(ニヤマ)において、森で花や根や木の実を食べるのがふさわしい。お前は戦さは得意でない。(七三)戦うことと隠者であることは、何という違いか。狼腹よ、森へ行け。なあ、お前は戦いには向いていない。森での

生活に専念せよ。(七四)お前は家の中で、大急ぎで食事にするために、怒って料理人や召使や奴隷を打っているのがふさわしい。狼腹よ。(七五)」

王よ、カルナはかつて少年時代にビーマに告げたような不快で乱暴な言葉を彼に何度も聞かせた。(七六)そしてカルナはまた、身を縮めている彼に再び弓で触れた。それからまた笑い、カルナはビーマに言った。(七七)

「お前は他の場所で戦うべきだ(異本による)。私のような者とは戦うべきではない。私のような者と戦う人々は、このようなことになる(テクスト疑問)。(七八)二人のクリシュナ(クリシュナとアルジュナ)がいる所へ行け。二人は戦場でお前を守るであろう。あるいはビーマよ、家に帰れ。子供よ、戦いはお前には関係ない。(七九)」

王よ、このようにカルナはビーマの戦車を奪い、ヴリシュニの獅子と偉大なアルジュナの面前で彼を辱しめた。(八〇)

王よ、それから猿の旗標を持つアルジュナは、クリシュナにうながされて、石で研がれた矢をカルナに送った。(八一)アルジュナの腕によりガーンディーヴァ弓から放たれた、黄金で飾られた矢はカルナの体に入った。ハンサ(鵞鳥の一種)たちがクラウンチャ山に入るように。(八二)ガーンディーヴァから放たれた蛇のようなそれらの鋭い矢により、アルジュナはカルナをビーマセーナから引き離した。(八三)カルナはビーマに弓を切られ、アルジュナの矢に撃たれて、大きな戦車に乗って、急いでビーマから離れて行った。(八四)人中の雄牛ビーマの方も、サーティヤキの戦車に乗って、急いで戦場で弟のアルジュナの方に向かった。(八五)

それからアルジュナは、怒りで赤い眼をして、急いでカルナめがけて鉄矢を放った。破壊神（アンタカ）が死神（ムリテュ）に矢を放つように。(八六) そのガーンディーヴァ弓から放たれた鉄矢は空中で最上の蛇を求めるガルダ鳥のように、速やかにカルナに落下した。(八七) ドローナの息子である勇士（アシュヴァッターマン）は、アルジュナの危険からカルナを救出しようとして、空中でその鉄矢を矢によって断ち切った。(八八) 大王よ、そこで怒ったアルジュナは、六十四本の矢でドローナの息子を射て、「逃げるな。待て」と言った。(八九) しかしドローナの息子は、アルジュナの矢に苦しみ、発情した象と戦車に満ちた軍隊に急いで入り込んだ。(九〇) それから、戦場で金張りの諸々の弓が音をたてる中で、強力なアルジュナはガーンディーヴァ弓の音を響かせた。(九一) そしてアルジュナは、あまり遠方に行かないドローナの息子を背後から追跡した。矢により敵軍を恐れさせて。(九二) アルジュナは鷺（カンカ）や孔雀の羽根のついた鉄矢で人や象や馬の体を裂いて、敵軍を粉砕した。(九三) バラタの最上者よ、インドラの息子アルジュナはいきり立ち、馬と象と人間を含むその軍隊を滅ぼした。(九四)

（第百十四章）

サーティヤキ、アルジュナに合流する

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、私の燃えるような名声は日に日に失墜する。私の多くの戦士たちは殺された。これは終末の時だと私は思う。(一) 怒ったアルジュナは私の軍隊に侵入した。それはド

ローナとカルナに守られ、神々にも入られがたいのに。(二) 気力旺盛なクリシュナとビーマとの二人と、シニ族の雄牛（サーティヤキ）といっしょにいて、アルジュナの勇猛さは増大した。(三) それ以来、悲しみが火のように私の心を焼く。というのは、シンドゥ国王（ジャヤドラタ）を含む諸王は〔破壊神に〕呑み込まれたと私は見るから。(四) シンドゥ国王はアルジュナにこよなく不快なことをしたから、彼の視界に入ったら、どうして生きて逃れることができるか。(五) サンジャヤよ、私は推量する。シンドゥ国王はもはや生きながらえない。ところで私はたずねる。戦いはどのように展開したか、それを私に語ってくれ。(六) またサーティヤキは、象が蓮池に入るように、怒って一人で何度も大軍を動揺させて侵入した。(七) そのヴリシュニの勇士がアルジュナのためにどのように戦ったか、ありのままに語ってくれ。そなたは語りが巧みであるから。(八)」

サンジャヤは語った。——

王よ、勇士ビーマがカルナに苦しめられて、勇士たちの中を立ち去るのを見て、シニの勇士は戦車で彼について行った。(九) 夏の終わり（雨季）のインドラ（雷神）のように轟き、雨季の終わり（秋）の太陽のように燃え、彼は堅固な弓で敵を滅ぼし、あなたの息子の軍隊を戦慄させた。(一〇) その勇士サーティヤキが銀のような馬たちにひかれて戦場で動きまわる時、あなたの軍の兵たちは誰も彼を制止することができなかった。バーラタよ。(一一)

その時、退くことなく戦う最高の王であるアランブサ（羅刹王とは別人のようである）は、怒りに満ち、弓

を持ち、黄金の鎧を着て、マーダヴァの最上者サーティヤキに襲いかかり、彼を食い止めた。(二二) バーラタよ、その両者の間に、いまだかつてまったくなかったような戦闘が行なわれた。あなたの軍の兵たちも、敵たちもすべて、戦場で輝く二人をただ見守っていた。(二三)
最高の王アランブサは十本の矢で激しく彼を射た。シニの雄牛は、それらの矢が届く前に、自分の矢でそれらを断ち切った。(二四) アランブサは更に、耳まで引き絞った〔弓から放たれた〕、美しい羽根のついた鋭い三本の矢で相手を射た。それらはサーティヤキの鎧を裂き、その身体に入った。(二五) 火や風のような力を持つそれらの矢で彼の身体を貫いてから、アランブサは他の燃えるような四本の矢で、銀のように輝く四頭の馬を激しく撃った。
円盤を持つ者(クリシュナ)のような力を持つ、強力なシニの孫(サーティヤキ)はこのようにアランブサに射られて、最高に高速の四本の矢で、アランブサの馬たちを撃った。(二七) そして終末の火のような半月形の先の矢で相手の御者の頭を切り、美しい耳環をつけた満月のように輝く相手の顔を胴体から切り離した。(二八) 王よ、その諸王の子孫を殺して、その敵を滅ぼす勇士であるマドゥ族の雄牛(サーティヤキ)は、戦場であなたの軍隊を食い止めて、アルジュナの後を追った。(二九) このようにヴリシュニの勇士は、敵の中を動きまわり、クル族の軍隊を繰り返し矢で殺した。風が雲の群を吹き散らすように(テクスト疑問)。(三〇) よく調教された、牛乳かクンダ(ジャスミン)か月か雲のような、金の網におおわれた良馬たちは、その人中の獅子が望むあらゆる場所に彼を運んだ。(三一) バーラタよ、その時、あなたの息子たちはこぞって、そしてその他のあなたの軍の戦士たちは、指揮官であるあなたの息子ドゥフシャーサナを先頭にして、急いで彼に襲いかかった。アージャャミーダ(ドリタラーシトラ)よ。(三二) それらの将校たちは戦場でぐるりとサーティヤキを取り囲み、サーティヤキを攻撃した。しかし勇士サーティヤキは、矢の網により彼らを食い止めた。(三三) 敵を滅ぼすシニの孫は、火のような矢で速やかに彼らを食い止めてから、弓を引き絞って、ドゥフシャーサナの馬たちを射た。(三四)

(第百十五章)

サンジャヤは語った。——
勇士サーティヤキは、アルジュナのためになることを望んで、急いでなすべきことを急いで行なおうと努力し、ドゥフシャーサナの戦車に向かって行った。(一) トリガルタの勇士たちは、黄金で飾られた旗を掲げ、無限の(異本による)軍隊の海に入ったサーティヤキを取り囲んだ。(二) そして最高の弓取りである彼らは、戦車団により彼をぐるりと取り囲み、いきり立って矢の群を彼に注いだ。(三) トリガルタの王子たちは戦場で奮戦したが、不屈の勇者サーティヤキは、弓籠手(ゆごて)の音に満ちた、刀と槍と棍棒に満ちた、渡りがたい海のようなバラタの軍隊の真中に達して、一人で五十人の敵をうち破った。(四―五) その戦場で、我々はシニの孫の驚異的な行為を見た。彼は迅速であったので、西方にいるのが見えたかと思うと、東方にいるのが見えた。(六) そしてまた、北、南、東、西の方角に移動した。その勇士は踊るかのように動きまわり、百人の戦士がいるかのようであった。(七) 獅子のように勇壮な足どりで進む彼の行動を見て、トリガルタ軍は苦しみ、味方のいる方に退却した。(八)

他のシューラセーナの勇士たちは、戦場で矢の群を放って、彼を制止した。発情した象を鉤棒で制止するように。(九) 考えられない力と勇武をそなえたサーティヤキは少しの間、猛り立つ彼らを食い止めた。それから彼はカリンガ軍と戦った。(一〇) その抜きがたいカリンガの軍を通過して、その勇士はそれからアルジュナに近づいた。(一一) 水を泳いで渡り疲れた人が陸に近づいてほっとするように、その人中の雄牛を見て、サーティヤキは安心した。(一二) 彼がやって来るのを見て、クリシュナはアルジュナに告げた。

「アルジュナよ、あそこにあなたの足跡をたどってサーティヤキが来た。(一三) あの人中の雄牛はあなたの弟子であり、友であり、不屈の勇者で、すべての戦士たちを草のようにみなして(問題にしないで)征服する。(一四) アルジュナよ、あなたにとって生命よりも愛しいサーティヤキが、クル軍の戦士たちに恐ろしい災禍をもたらしてあそこにやって来る。(一五) アルジュナよ、サーティヤキは、ドローナとボージャのクリタヴァルマンを矢で苦しめて、あそこにやって来る。(一六) アルジュナよ、ダルマ王によかれと願い、優れた戦士たちを次々と殺し、武器に通達した勇士サーティヤキがやって来る。(一七) アルジュナよ、強力なサーティヤキは、軍隊の中で非常になしがたい行為をして、あなたに会いたいと望んでやって来る。(一八) アルジュナよ、サーティヤキは戦場において、一騎で、師匠をはじめとする多くの勇士たちと戦ってから、あそこにやって来る。(一九) アルジュナよ、サーティヤキはダルマの息子に遣わされ、自分の腕の力に依存して、敵軍をうち破り、あそこにやって来る。(二〇) クル軍のうちには彼に匹敵する戦士はまったくいない。アルジュナよ、その不屈の勇者サー

ティヤキがあそこにやって来る。(二一) アルジュナよ、サーティヤキは多くの兵たちを殺して、牛の群から抜け出た獅子のようにクルの軍隊から抜け出て、あそこにやって来る。(二二) アルジュナよ、幾千の王の蓮のような顔で地面を満たして、あそこにサーティヤキが急いでやって来る。(二三) サーティヤキは戦いにおいてドゥルヨーダナとその弟たちをうち破り、ジャラサンダを殺して、あそこに急いでやって来る。(二四) サーティヤキは血の激流と血の泥を持つ川を作り、クル族の人々を草(取るに足らぬもの)のように退けて、あそこにやって来る。(二五)」

するとアルジュナは喜ばず、クリシュナに言った。

「勇士よ、サーティヤキが私のもとに来るということは、私にとって嬉しくない。(二六) クリシュナよ、ダルマ王がどうなっているかわからないから。サーティヤキがいないで、彼は生きているか生きていないか？ (二七) 勇士よ、サーティヤキはあのユディシティラを守るべきであった。クリシュナよ、サーティヤキは彼を捨てて、どうして私の後を追ったか。(二八) 王は残されてドローナの脅威にさらされている。そしてシンドゥ国王はまだ倒されていない。ブーリシュラヴァスは戦場でサーティヤキをあのように攻撃している。(二九) シンドゥ国王のために、今やより多大な重荷が私にかかってきた。私は王について知らなければならないし、サーティヤキを守らなければならないし、ジャヤドラタも殺さなければならない。太陽は沈もうとしている。そして今やあの勇士は疲れ、力も弱っている。(三〇―三一) そして馬たちや御者も消耗している。クリシュナよ。しかもブーリシュラヴァスとその仲間は疲

れていない。(三二) 今この合戦においてサーティヤキの安全はあるであろうか。威力に満ちた不屈の勇者であるシニの雄牛サーティヤキは、〔敵軍の〕海を渡ってから、牛の足跡につまずいてへたりこんでいないか。(三三) 武器に通達した偉大なクル族の最上者ブーリシュラヴァスと交戦して、サーティヤキは無事であろうか。(三四) クリシュナよ、これはダルマ王の誤りであると私は思う。師匠（ドローナ）からの危険を放置してサーティヤキを派遣したということは。(三五) 空を飛ぶ鷹が肉を得ようと望むように、ドローナはダルマ王を捕えようといつも望んでいる。王は無事であろうか。(三六)」

（第百十六章）

サーティヤキ、ブーリシュラヴァスに敗れる

サンジャヤは語った。——

王よ、戦いに酔い痴れたサーティヤキがやって来るのを見て、ブーリシュラヴァスは怒って、激しく攻撃した。(一) そのクル族の勇士はシニの雄牛に言った。

「幸いなことに、今日、お前は私の視界に入った。(二) 今日私は戦いにおいて、長いこと望んでいたことを達成するであろう。というのは、もしお前が戦いを捨てなければ、お前は生きて私から逃れることはできないだろう。(三) サーティヤキよ、いつも勇士であると自惚れているお前を、今日戦いにおいて殺して、クルの王スヨーダナを満足させるであろう。(四) 今日、クリシュナとアルジュナの両雄はそろって、戦場でお前が私の矢で焼かれて大地に倒

れているのを見るであろう。(五) 今日、ダルマの息子である王は、お前が私に殺されたことを聞いて、お前をここに突入させたことを恥じるであろう。(六) 今日、お前が殺されて、血まみれになって大地に横たわる時、アルジュナは私の勇武を知るであろう。(七) 今日お前と戦うことになったが、それは長いこと望んでいたことだ。古の神々と阿修羅との戦争における、インドラとバリの戦いのようだ。(八) サーティヤキよ、今日私はお前と非常に恐ろしい戦いをするであろう。そこでお前は、私の気力と腕力と勇気を真に知るであろう。(九) 今日、お前は戦いで私に殺され、サンヤマニー（ヤマの都市）に行くであろう。ラーマの弟ラクシュマナに殺されたラーヴァナの弟（インドラジット）のように。(一〇) サーティヤキよ、今日、お前が殺された時、クリシュナとアルジュナとダルマ王は、気力を失って、疑いもなく戦いをやめるであろう。(一一) サーティヤキよ、今日鋭い矢でお前を亡き者にして、戦いでお前に殺された人々の妻たちを喜ばせるであろう。(一二) サーティヤキよ、私の視界に入ったら、お前は逃れられないであろう。獅子の視界に入った小獣のように。(一三)」

王よ、一方サーティヤキは笑うかのように彼に答えた。

「クル族の者よ、戦いにおける恐怖は私にはない。(一四) 戦場において私の武器を失わせる者が私を殺すであろう。戦場で私を殺す者は、永遠に〔敵を〕殺すであろう。(一五) 多くの無駄口をたたいて何になる。行動で示せ。秋の雲の雷鳴のように、お前の大言は無駄である。(一六) 勇士よ、お前の大言を聞いて私は笑いを禁じ得ない。クル族の者よ、この世で長いこと望んでいた戦いを今日やるがよい。(一七) 友よ、戦いを望むお前と戦おうと私の心は逸る。

私は今日、お前を殺さないで引きあげることはない。最低の男よ。(一八)」
このように二人の人中の雄牛はお互いに言葉で相手を傷つけて、相手を殺そうと望み、最高に猛り立って戦場で攻撃し合った。(一九) 二人の強力な人中の虎は対戦し競い合った。発情した二頭の象が雌象のために猛り立って戦うように。(二〇) 敵を制するブーリシュラヴァスとサーティヤキは、お互いに雲のように、恐ろしい矢の雨を降らせた。(二一) バラタの最上者よ、ソーマダッタの息子(ブーリシュラヴァス)は高速の矢でサーティヤキをおおい、殺そうと望んで、鋭い矢で射た。(二二) ソーマダッタの息子は十本の矢でサーティヤキを射て、そのシニの雄牛を殺そうと望んで、更に他の鋭い矢を放った。(二三) 王よ、しかし強力なサーティヤキは、それらの鋭い矢がまだ届かないうちに、武器(アストラ)(句呪)の幻力(マーヤー)により、空中でそれらを破壊した。(二四) クルとヴリシュニの名声を高める、最高の家柄の両雄は、相互に矢の雨を浴びせ合った。(二五) 二頭の虎が爪により、二頭の巨象が牙により傷つけ合うように、両者は矢と戦車用の槍とによって傷つけ合った。(二六) 両者は身体を切り傷つけ合い、血を流して、生命を賭けて賭博(負勝)をして、お互いに制止し合った。(二七) クルとヴリシュニの名声を高める、このように最高の行為を行なう二人は、二頭の象の群の長のようにお互いに戦った。(二八) 二人は最高の場所を獲得したいと望み、短期間のうちに梵界に行くことをめざし、お互いに攻撃し合った。(二九) ドリタラーシトラの息子たちが喜んで見ている前で、サーティヤキとソーマダッタの息子は、お互いに矢の雨を降らせ合った。(三〇) そこにいる人々は、二頭の象の群の長が雌象のために戦うように、二人の最高の戦士が戦っているのを見物した。

(三一) 二人は激戦においてお互いに相手の馬を殺し、弓を断ち切り、戦車を失って、刀によって戦った。(三二) 大きくて美しい、雄牛の皮でできた多彩な楯を持ち、刀を鞘から抜き、二人は戦場で動きまわった。(三三)(三四―三六略)
その二人の人中の虎は、刀により大きい皮製の美しい楯を切り、組み打ちを始めた。(三七) 二人とも広い胸と長い腕を持ち、組み打ちに巧みであり、鉄製の閂(かんぬき)のような腕で組み合っていた。(三八) 二人は腕で打ち合い、押えつけ合いつかみ合った。二人の鍛練の力が発揮され、それはすべての戦士たちを喜ばせた。(三九) 王よ、その最高の人である両者が戦場で戦う時、その両者のたてる大音響は、金剛杵(ヴァジュラ)と山との音のように凄まじいものであった。(四〇) 二頭の象が牙の先で、大きな雄牛が角で戦うように、その偉大なクルとサートヴァタの雄牛は戦った。(四一)
戦っているうちにサーティヤキが武器を失った時、クリシュナはアルジュナに告げた。
「あのすべての弓取りの旗(最上者)である彼が、戦っているうちに戦車を失ったのを見よ。(四二) アルジュナよ、彼はあなたの後からバラタ族の軍に入った。バーラタよ、そして強力なバラタ族の軍と戦った。(四三) あの最高の戦士は疲れ切って、戦いを望んで向かって来たブーリダクシナ(ブーリシュラヴァス)に遭遇した。アルジュナよ、これは公平ではない。(四四)」
王よ、それから怒ったブーリシュラヴァスは猛り立って、戦いに酔うサーティヤキを攻撃した。発情した象が発情した象を攻撃するように。(四五) 王よ、二人の主力戦士は戦車に乗り、憤って戦い、クリシュナとアルジュナは戦場で見守っていた。(四六) その時、勇士クリ

シュナはアルジュナに言った。

「見よ、ヴリシュニとアンダカの虎はソーマダッタの息子に圧倒されている。(四七) サーティヤキは地上において非常になしがたい行為をしてから疲労した。アルジュナよ、あなたの弟子であるあの勇士を守れ。(四八) 敵の勇士を殺す強力な人中の虎よ、あなたのために彼がヤジュニャセーナ(ブーリシュラヴァス)の支配下に帰さないように急いで取り計らいなさい。(四九)」

するとアルジュナは喜んでクリシュナに言った。

「見よ、クルの雄牛はヴリシュニの勇士と戯れている。森で獅子の群が発情した巨象と戯れるように。(五〇)」

バラタの雄牛よ、その時兵士たちの間に「ああ、ああ」という大声があがった。強力な男は猛り立ち、サーティヤキを大地に打ち倒した。(五一) クルの最上者ブーリシュラヴァスは、獅子が象を引きずるようにサーティヤキを引きずって輝いていた。(五二) そしてブーリシュラヴァスは戦場で刀を鞘から引き抜き、相手の髪をつかみ、足で胸を蹴った。(五三) 王よ、サーティヤキが戦場でこのように苦しんでいるのを見て、クリシュナは再びアルジュナに告げた。(五四)

「勇士よ、見よ。ヴリシュニとアンダカの虎はあなたの弟子で、弓にかけてあなたに引けを取らないが、ソーマダッタの息子に圧倒された。(五五) アルジュナよ、その勇武が真実でないブーリシュラヴァスが、戦いにおいて、不屈の勇者(直訳「その勇武が真実である」)サーティヤキを凌駕している。(五六)」

勇士アルジュナはクリシュナにこのように言われて、戦場において、心の中でブーリシュラヴァスを讃えた。(五七)

「彼はサーティヤキを引きずって、戦場で戯れているかのようだ。あのクル族の名声を高める男は、私を更に喜ばせる。(五八) ヴリシュニの勇士たちの最上者サーティヤキを殺さないで、森で獣王(獅子)が巨象を引きずるように引きずっている。(五九)」

王よ、勇士アルジュナはこのように心の中でクルの勇士を讃えてから、クリシュナに向かって言った。(六〇)

「クリシュナよ、私の眼はシンドゥ国王に専ら注がれているので、彼のことを見ない。しかし私はサーティヤキのために、なしがたい行為をしよう。(六一)」

アルジュナはこのように言って、クリシュナの言葉に従い、刀を持つブーリシュラヴァスの腕を矢で断ち切った。(六二)

(第百十七章)

サーティヤキ、腕を切られたブーリシュラヴァスを殺す

サンジャヤは語った。——

刀を持ち、美しい腕環をつけた彼の最高の腕は大地に落ち、世の人々に最高の悲しみをもたらした。(一) その腕は敵を攻撃しようとして、見えざるアルジュナによって切り取られた。それは五つの顔のある蛇のように、速やかに大地に落ちた。(二) クルの勇士は、アルジュナ

によって自分が無力にされたのを見て、サーティヤキを捨てて、怒ってアルジュナを非難した。（三）

「クンティーの息子よ、お前は非道な行為をしたものだ。私が他のことに専念してそちらを見ていない時に私の腕を切断したのだから。（四）お前はダルマの息子であるユディシティラ王に報告するのか。『ブーリシュラヴァスが何をしていた時に私は戦いにおいて彼を殺した』と。（五）偉大なインドラが直々にお前にこのような武器の使い方を教えたのか。あるいはルドラ（シヴァ）かドローナかクリパが教えたのか。（六）世間においてお前は他の者たちよりも自己の法《スヴァダルマ》をよりよく知っているのではないか。どうして戦場でお前と戦っていない者の腕を切り取ったのか。（七）心ある人は、油断した者、恐れた者、戦車を失った者、命乞いしている者、災禍に陥った者を攻撃しない。しかるにアルジュナよ、不善の者が行なうこのような卑しい行為、非常になしがたい行為を、お前はどうして行なったのか。（八―九）アルジュナよ、高貴な人は高貴な行為を容易になすと言われる。しかしこの世で、高貴な人は卑しい行為を非常になしがたい。（一〇）アルジュナよ、人はいかなる人々の間にあろうとも、いかなる行為に従事しようと、速やかにその環境になじむ。そのことがお前に認められる。（一一）お前は王の家系に属し、特にクル族に属し、誓戒を守って善行を行なっているのに、どうして王族の法《クシャトラダルマ》から外れたのか。（一二）お前はサーティヤキのために、このような非常に卑怯なことをしたが、それはきっとクリシュナの考えであろう。それはお前にはふさわしくない。（一三）というのは、クリシュナを友に持つ者以外に、いかなる者が、他人と戦って油断している者にこのような災いをもたらすであろうか。（一四）ヴリシュニとアンダカは堕落した種姓（ヴラーティヤ）であり、混合した仕事を行なう者たちであり、本性よりして非難される。アルジュナよ、お前はどうしてそれを模範とするのか。（一五）」

祭柱《ユーパ》の旗標《ケートゥ》を持つ勇士（ブーリシュラヴァス）はこのように告げてから、戦場でサーティヤキを捨て、断食して死のうと企てた。（一六）清浄な特相を持つ彼は左手で矢を敷いて（床を作り）、梵界に行こうと望み、気息《プラーナ》を気息の中に焼べた（呼吸法に専念した）。（一七）彼は眼を太陽に向け、清浄な心を水に向け、偉大な秘説《ウパニシャッド》について沈思し、ヨーガに専心して沈黙していた。（一八）

そこですべての兵士たちは、クリシュナとアルジュナを非難し、その人中の雄牛を称讃した。（一九）二人のクリシュナはそのように非難されても、何も不快なことを言わなかった。またブーリシュラヴァスはそのように讃えられても喜ばなかった。（二〇）王よ、しかしあなたの息子たちがそのように言った時、アルジュナは心の中で彼らとブーリシュラヴァスの言葉に我慢できなくなった。（二一）だがアルジュナは怒ることなく、その言葉で彼らに思い起こさせるように、思いをこめて告げた。（二二）

「すべての王は私の大誓戒を知っている。私の矢の届く範囲にいる味方の者を殺すことはできないと。（二三）ブーリシュラヴァスよ、このことを考慮すれば、私を非難することは適切でない。実に法《ダルマ》を知らないで他者を非難するのは正しくない。（二四）あなたが戦場で武器をとり、ヴリシュニの勇士を殺そうとしている時、私があなたの腕を切ったのであるから、法に外れたことではない。（二五）友よ、少年アビマニュが武器も戦車も鎧も失った時に彼を殺

したということは、敬虔な人なら決して讃えないであろう（異本を参照した）。（二六）」
アルジュナにそのように言われて、ブーリシュラヴァスは頭で地面に触れた。そして左手で（切られた）右手を彼のそばに投げた。（二七）大王よ、光輝に満ちたブーリシュラヴァスはアルジュナのその言葉を聞いてから、うつ向いて沈黙していた。（二八）
アルジュナは言った。
「シャラの兄よ、私はダルマ王、最も雄弁なビーマ、ナクラ、サハデーヴァを愛しているが、それと同じ様にあなたを愛している。（二九）私と偉大なクリシュナに認められて、善行の人々の世界に行きなさい。ウシーナラの息子シビのように。（三〇）」
サンジャヤは語った。——
サーティヤキはソーマダッタの息子から解放されて、刀を持って偉大な彼の頭を切ろうとした。（三一）シャラの兄であるブーリシュラヴァスは、油断しているところをアルジュナに撃たれ、罪障を離れていたが、サーティヤキはその彼を殺そうと望んだのである。（三二）腕を切り取られて、鼻を切られた象のように座っている彼を殺そうとしたのである。すべての兵士たちは叫び声をあげて彼を非難したが、彼は非常に心が乱れていた。（三三）クリシュナや偉大なアルジュナ、ビーマ、（アルジュナの）車輪を守る二人（ユダーマニユとウッタマウジャス）、アシュヴァッターマン、クリパ、カルナ、ヴリシャセーナ、シンドゥ国王に止められたが、そして兵士たちが叫んでいるのに、サーティヤキは誓戒を守る彼を殺した。（三四―三五）戦いにおいてア

ルジュナに腕を断たれ、彼が断食して死のうとしている時に、サーティヤキはクル族の王（ユディシティラを指すか）のために、刀で彼の頭を断ち切った。（三六）アルジュナにすでに殺されたも同然のクルの勇士を殺したということで、兵士たちはその行為によりサーティヤキを讃えなかった。（三七）シッダやチャーラナ（いずれも半神の一種）や人間及び神々は、戦場でインドラのようなブーリシュラヴァスが断食して死のうとしているところを殺されたのを見て、彼の行為に驚いて彼を讃えた。そして兵たちは彼について多くの意見を述べた。（三八―三九）
「これはヴリシュニの勇士の罪ではない。それ故諸君は怒るべきでない。怒りは人間に苦しみをもたらす。（四〇）彼は（ヴリシュニの）勇士に殺される運命であった。この点についてあれこれ考えるべきではない。まさに配置者（ダートリ）が、サーティヤキが彼の死の原因であると定めたのであるから。（四一）」
サーティヤキは言った。
「殺すべきでない、殺すべきでないと諸君は私に言う。諸君は法（ダルマ）にもとるのに、法の衣をまとってそのように言う。（四二）しかし少年であるスバドラーの息子（アビマニユ）が戦いにおいて武器を失った時に、諸君は彼を殺した。その時、諸君の法はどこへ行ったのか。（四三）私は何らかの侮辱がなされた時に、このように誓った。私を戦場でうち破り怒って足蹴にする敵は（テクスト疑問）私によって殺されるべきである。もし隠者（ムニ）の誓戒を保っていても。（四四）私は腕も眼もそなえて反撃しているのに、諸君は私が死んだと考えたのであろう。それは浅はかな考えだ。クルの雄牛たちよ、私が彼に反撃したのは適切なことだ。（四五）しかるにアルジュナ

は、私に対する愛情から、自分の誓約を守り、力を持つ彼の腕を切り取った。私にはそれだけは残念だった。(四六) そうなるべきようになるのだ。天命のみが人を行動させる。今彼はこの戦闘において殺された。この場合どうして法にもとる行為だと言うのか。(四七) それに、かつてヴァールミーキ(『ラーマーヤナ』の作者)は、地上において次のような詩節を詠じた。『敵に苦しみを与えるであろうことのみをなせ』(『ラーマーヤナ』六・八一・二八(ボンベイ版))と。(四八)」

サンジャヤは語った。——

大王よ、彼がそのように言った時、クル軍とパーンダヴァ軍の人々は何も言わなかったが、心の中で〔ブーリシュラヴァスを〕讃えた。(四九) 誉れ高いブーリシュラヴァスは、盛大な祭祀において聖句(マントラ)により浄められ、森にいる隠者(ムニ)のようであったので、誰も彼の殺害を喜ばなかった。(五〇)〔請願者の〕願いをかなえるその勇士の切られた頭は、美しい黒髪と、鳩のように赤い眼を持っていた。それは馬祀において切られて、供物置場の北側に置かれた馬の頭のようであった。(五一) 願いをかなえる彼、願いをかなえられるにふさわしい彼は、その威光と武器で殺されたことで(テクスト疑問)浄められ、激戦において最上の身体を捨て、その最高の法(ダルマ)で天地を満たして、上方の世界に昇って行った。(五二)

(第百十八章)

ブーリシュラヴァスが強力な理由

ドリタラーシトラはたずねた。

「勇士サーティヤキはユディシティラに約束して、ドローナ、カルナ、ヴィカルナ、クリタヴァルマンにも敗れずに軍隊の海を渡ったのに、その戦いにおいて食い止められたことのない彼が、どうしてクル族のブーリシュラヴァスに制圧されて、力ずくで大地に倒されたのか。(一―二)」

サンジャヤは語った。——

王よ聞きなさい。かつてサーティヤキとブーリシュラヴァスとがこの世に生じた次第を。王よ、あなたの疑問はそれに関係する。(三) アトリにはソーマという息子がいた。ソーマの息子はブダであると伝えられる。ブダにはプルーラヴァスという大インドラのような一人の息子がいた。(四) プルーラヴァスの息子はアーユスでアーユスの息子がナフシャであると伝えられる。ナフシャの息子は、ヤヤーティという神のような王仙であった。(五) ヤヤーティには、デーヴァヤーニーとの間に長男のヤドゥが生まれた。ヤドゥの家系にはデーヴァミーダという息子がいた。(六) ヤドゥの息子(ヤーダヴァ)の息子が、三界で尊敬されるシューラである。シューラの息子、すなわちシャウリが、誉れ高い最高の王ヴァスデーヴァである。(七) シューラは弓にかけて第一人者であり、戦いにおいてカールタヴィーリヤに等しい。まさにその一族に、彼に等しい力を持つシニ王が生まれた。(八)

王よ、ちょうどその時、偉大なデーヴァカの娘（デーヴァキー）の婿選び式（スヴァヤンヴァラ）があって、すべての王族が集まった。（九）そこにおいてシニは、ヴァスデーヴァのために、すべての王たちに勝利して、デーヴァキーを王妃として獲得し、戦車に乗せた。（二〇）王よ、デーヴァキーがシューラの息子シニの戦車に乗っているのを見て、威光に満ちた人中の雄牛であるソーマダッタ王は我慢できなかった。（二一）王よ、その両者の間に、半日も続く、多彩で驚異的な戦いが行なわれた。非常に強力な両者は、インドラとプラフラーダのように組み打ちをした。（二二）シニは力ずくでソーマダッタを地面に打ち倒した。（二三）幾千の王がずらりとそろって見物している前でそのようにしたのだ。しかしシニは相手を哀れんで、「生きろ」と言って放してやった。（二四）

わが君よ、ソーマダッタは彼のためにそのような状態にされて、怨恨を抱き、マハーデーヴァ（シヴァ）に祈願して満足させた。（二五）請願者たちの願いをかなえる主マハーデーヴァは、王に満足して、願いをかなえて彼を喜ばせた。王は願いを選んだ。（二六）「尊い神よ、幾千の王の中でシニの息子（孫子）を打ち倒し、戦場で足蹴にするような息子を望みます。（二七）」

王よ、ソーマダッタのその言葉を聞くと、その神は「そのようになるだろう」と告げて消え失せた。（二八）彼はその恩寵により、ブーリダクシナ（ブーリシュラヴァス）をもうけた。そしてソーマダッタの息子は戦いにおいてシニの息子（孫）を打ち倒したのである。（二九）

王よ、あなたが私にたずねたから、以上のことをあなたに語った。人中の雄牛よ、実にサートヴァタ（ヴリシュニ）の勇士たちに戦いで勝つことはできない。（二〇）彼らは戦場で狙った的を外さず、多数で、めざましく戦う。彼らは神々や魔類やガンダルヴァたちにも勝利し、狼狽することなく、自己の力による勝利に専念し、他人に依存することはない。（二一）王よ、この世で力にかけてヴリシュニの勇士たちに等しいものは、過去にも現在にも未来にも、まったく見出されない。バラタの雄牛よ。（二二）神々、阿修羅、ガンダルヴァ、夜叉、蛇、羅刹たちも、戦いにおいてヴリシュニの勇士たちに勝てない。いわんや人間は勝てない。（二三）彼らはバラモン、長上、親族の財産を侵害することはない。また何らかの窮迫時に守ってくれるような人々の財産を侵害することもない。（二四）彼らは財産を持ち、高慢でなく、敬虔で、真実を述べる。彼らは強力な者たちを侮ることなく、惨めな者たちを救い上げる。（二五）彼らは常に神々に専念し、自制し、気前よく与え、自慢しない。それ故、ヴリシュニの勇士たちの主権は損なわれることがない。（二六）人はメール山を運んだり、海を渡ったりできるかも知れない。しかし王よ、ヴリシュニの勇士たちに遭遇して彼らを滅ぼすことはできない。（二七）主よ、以上あなたが疑問に思うことすべてに答えた。クルの王よ、最上の人よ、実に〔彼らと戦うのは〕あなたの非常に大きな失政である。（二八）　（第百十九章）

アルジュナを攻撃するクルの勇士たち

ドリタラーシトラはたずねた。

「クル族のブーリシュラヴァスがそのような状態で殺された時、戦いは更にどのように展開したか。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。（一）」

サンジャヤは語った。——

バーラタよ、ブーリシュラヴァスが他界した時、勇士アルジュナはクリシュナに言った。（二）

「クリシュナよ、ジャヤドラタ王がいる所に馬たちを全速力でかりたてよ。勇士よ、太陽は速やかに西山（アスタ）に沈もうとしている。（三）人中の虎よ、私はこの大仕事を企て、それを遂行しなければならぬ。しかし彼はクル軍の勇士たちに守られている。（四）太陽が西山に沈まぬうちに、私の言葉が真実になるように、クリシュナよ、私がジャヤドラタを殺せるように、馬たちをかりたてよ。（五）」

そこで馬術に通じた勇士クリシュナは、銀のような馬たちを、ジャヤドラタの戦車めざしてかりたてた。（六）的を射外すことのないアルジュナが飛ぶ矢とともに進んで行った時、大王よ、軍の主力は急いで彼に向かって行った。（七）すなわち、ドゥルヨーダナ、カルナ、ヴリシャセーナ、マドラ国王（シャリヤ）、アシュヴァッターマン、クリパ、及びシンドゥ国王自身である。（八）

一方アルジュナは、シンドゥ国王のもとに達し、眼の前に立つ彼を、怒りに燃える両眼で焼くかのように見た。（九）それからドゥルヨーダナ王は、ジャヤドラタの戦車に向かって来

るアルジュナを見て、急いでカルナに言った。（一〇）

「ヴァイカルタナよ、今や戦いの時が来た。偉大な者よ、自分の力を見せてやれ。戦いにおいてアルジュナがジャヤドラタを殺さないように、カルナよ、そのようにしてくれ。（一一）勇士よ、もう少しで日が暮れる。今日、矢の群により敵を殺せ。勇士カルナよ、この日が終われば、疑いもなく我々は勝利するであろう。（一二）日没までシンドゥ国王を守れば、アルジュナは偽りの誓いをしたということで、火に入るであろう。（一三）誇りを与える者よ、この地上にアルジュナがいなくなったら、彼の兄弟たちはその従者とともに、生きていることができないであろう。（一四）カルナよ、パーンダヴァたちが滅びれば、我々は棘（危険）がない、この山や森林をともなう地上を享受するであろう。（一五）誇りを与える者よ、アルジュナは運命に見離され、なすべきこととそうでないことをわきまえず、戦場で動顛して誓いを立ててしまった。（一六）カルナよ、きっとアルジュナは、ジャヤドラタを殺すという誓いを立てて、身を滅ぼすことになる。（一七）カルナよ、無敵のあなたが生きているのに、どうしてアルジュナは日没前にシンドゥ国王を殺すことができるか。（一八）ジャヤドラタがマドラ国王と偉大なクリパに守られている時、どうしてアルジュナは戦場で彼を殺すことができるか。（一九）シンドゥ国王がドローナの息子と私とドゥフシャーサナに守られている時、どうしてアルジュナはカーラ（破壊神）にかりたてられて、彼に達することができるか。（二〇）多くの勇士たちが戦っている。そして太陽は沈もうとしている。誇りを与える者よ、アルジュナはジャヤドラタに達することもできないと私は思う。（二一）カルナよ、そこであなたは、私や他の

勇猛な大戦士たちとともに、最高に努力して戦場でアルジュナと戦え。（二二）」

わが君よ、カルナはあなたの息子ドゥルヨーダナにこのように言われて、クルの最上者である彼に次のように答えた。（二三）

「的を外さぬ勇士ビーマセーナは弓を持ち、戦場で何度も、私をひどく傷つけた。（二四）誇りを与える者よ、しかしここにとどまるべきだということで私は今戦場にいる。戦場で矢に苦しむ私の身体はまったく動かない。（二五）しかし王よ、私は戦場で精一杯戦おう。あのパーンダヴァの最上者がシンドゥ国王を殺さないように。（二六）というのは、私が鋭い矢を放って戦っている間は、勇猛なアルジュナもシンドゥ国王に達することはできないから。（二七）クルの王よ、私は常に、有益なことをなす有能な人がなすべきことをなすであろう。勝敗は時の運である。（二八）今日私は自分の力に依存して、あなたのためにアルジュナと戦うであろう。人中の虎よ。勝敗は時の運である。（二九）クルの最上者よ、今日すべての生類は、私とアルジュナの両者の、身の毛がよだつ恐ろしい戦いを見るがよい。（三〇）」

カルナとクルの王が戦場で話し合っていた時、アルジュナは鋭い矢であなたの軍勢を射た。（三一）彼は戦場において、鋭い先端の矢で退くことを知らぬ勇士たちの、鉄棒か象の鼻のような腕を断ち切った。（三二）そしてその勇士は、鋭い矢で兵たちの頭を切った。それから象の鼻や馬の首や戦車の車軸をいたるところで切った。（三三）更にアルジュナは、種々の槍を持つ血まみれの騎兵たちを、馬蹄形の先の矢で二つまたは三つに切断した。（三四）優れた馬や象たち、軍旗、傘、弓、払子（ヤクの尾）、人間の頭が、幾千となく落ちていた。（三五）燃え上が

る火が乾いた草木を焼くように、アルジュナはあなたの軍隊を焼き、すぐに大地を血まみれにした。（三六）その強力で無敵な不屈の勇者は、あなたの軍隊の兵たちをほとんど殺してから、シンドゥ国王に近づいた。（三七）バラタの最上者よ、アルジュナはビーマセーナとサーティヤキに守られ、燃え上がる火のように輝いていた。（三八）

力にかけて定評のある、人中の雄牛であるあなたの軍の勇士たちは、そのような状態のアルジュナを見て我慢できなくなった。（三九）ドゥルヨーダナ、カルナ、ヴリシャセーナ、マドラ国王、アシュヴァッターマン、クリパ、シンドゥ国王自身は怒って、シンドゥ国王のために、戦車の道において弓弦と弓籠手の音をたてて踊っているアルジュナを取り囲んだ。（四〇―四一）戦いに通達した彼らはすべて、恐れることなく、口を開いた死神のような、戦いに巧みなアルジュナの周囲を動きまわった。（四二）太陽が赤くなった時、彼らはシンドゥ国王を後ろに下がらせて、アルジュナとクリシュナを殺そうとして、太陽が西山に没するのを望んでいた。（四三）彼らは蛇の体のような腕で弓を引き絞り、アルジュナに向けて、太陽の光線のような矢を幾百も放った。（四四）戦いに酔うアルジュナは、放たれるそれらの矢を一本ずつ、二つ三つあるいは八つに切ってから、戦場で彼らを射貫いた。（四五）

王よ、獅子の尾の旗標をつけたシャーラドヴァティーの息子（アシュヴァッターマン）は、自らの力を発揮して、アルジュナを食い止めた。（四六）彼は十本の矢でアルジュナを、七本の矢でクリシュナを射て、シンドゥ国王を守りつつ戦車の道に立ちふさがった。（四七）それからクルの最上者であるすべての勇士たちは、戦車の大群によりアルジュナをぐるりと取り囲んだ。

(四八) 彼らはあなたの息子の命令により、弓を引き絞って矢を放ち、シンドゥ国王を守った。(四九) そこで勇士アルジュナの腕力と、その尽きざる矢と、ガーンディーヴァ弓の〔威力が〕目撃された。(五〇) 彼はドローナの息子とクリパの矢を自分の矢で防いでから、すべての戦士に対して、各々に九本ずつの矢を送った。(五一) ドローナの息子は二十五本の矢、ヴリシャセーナは七本の矢、ドゥルヨーダナは二十本の矢、カルナとシャリヤは三本ずつの矢で彼を射た。(五二) 彼らはぐるりと彼を取り囲み、弓を揺すって、何度も彼を射貫いて雄叫びをあげた。(五三) 勇士たちは太陽が西山(アスタ)に没するのを望んで、急いで、ぐるりと緊密な戦車の輪円を作った。(五四) 彼らは彼に向かって叫び、弓を揺すり、恐ろしい矢を浴びせた。雲が山に雨を注ぐように。(五五) 王よ、鉄棒のような腕を持つその勇士たちは、アルジュナの身体に対し、神的で強力な武器を放った。(五六)

不屈の勇者である強力で無敵なアルジュナは、敵軍の兵をほとんど殺して、シンドゥ国王に近づいた。(五七) バラタ族の王よ、戦場でカルナはビーマセーナとサーティヤキの見ている前で、矢によって彼を食い止めた。(五八) 強力なアルジュナは戦場において、すべての兵が見ている前で、十本の矢をカルナに射返した。(五九) サーティヤキも三本の矢でカルナを射た。わが君よ。またビーマセーナは三本の矢で、アルジュナは七本の矢で彼を射た。(六〇) 勇士カルナは彼らを六十本ずつの矢で射た。王よ、カルナと多数との戦いは驚異的であった。(六一) わが君よ、猛り立つカルナが一人で三人の戦士を食い止めたという、その驚異的な行為を我々は見た。(六二)

一方、勇士アルジュナは、その戦いにおいて、ヴァイカルタナ・カルナのすべての急所を百本の矢で射た。(六三) 栄光ある勇士カルナは全身血まみれになったが、五十本の矢をアルジュナに射返した。戦場でカルナのその早業を見て、アルジュナは我慢できなかった。(六四) 勇士アルジュナは相手の弓を断ち切り、九本の矢で速やかにその胸の間を射貫いた。(六五) アルジュナはその緊急な時に、その戦いにおいて相手を殺すために、急いで太陽のように輝く矢を放った。(六六) その矢が高速で飛来した時、ドローナの息子が半月形の鋭い矢でそれを切った。それは切られて地面に落ちた。(六七)

その時、敵を殺す栄光あるカルナは別の弓をとり、お返しをしようと望んで、幾千の矢でアルジュナをおおった。(六八) 人中の獅子である二人の勇士は、雄牛のように吼えて、空中を矢の群でおおった。二人は矢の群により見えなくなり、お互いに攻撃し合った。(六九)「私はアルジュナだ。待て!」「私はカルナだ。アルジュナよ、待て!」両者はこのように威嚇しながら、言葉の矢で相手を撃った。(七〇) 両雄は戦場でめざましく、手練の早業で、見事に戦った。すべての戦士たちの集会において、その両者は見物(みもの)であった。(七一) 大王よ、両者は戦場でシッダやチャーラナやヴァーティカ(いずれも半神の種類)たちに讃えられて、お互いに相手を殺そうとして戦った。(七二)

王よ、それからドゥルヨーダナはあなたの兵たちに告げた。

「努力してカルナを守れ。カルナは戦いにおいてアルジュナを殺さずして引きあげることはないだろう。ヴリシャ(カルナ)はそのように私に言った。(七三)」

王よ、その間、アルジュナはカルナの勇武を見て、弓弦を耳まで引き絞って放った四本の最高の矢で、カルナの四頭の馬を死神の世界に送った。(七四) そして半月形の先の矢でカルナの御者を戦車の座席から射落とした。そして更に、あなたの息子が見ている前で、彼を矢でおおった。(七五) 彼は戦場で馬と御者を殺され、矢の群におおわれて錯乱し、どのようにすべきかわからなくなった。(七六) 大王よ、その時アシュヴァッターマンは、カルナが戦車を失ったのを見て、彼を自分の戦車に乗せて、再びアルジュナと戦った。(七七)

一方マドラ国王(シャリヤ)は、三十本の矢でアルジュナを射た。またシャーラドヴァタ(クリパ)は二十本の矢でクリシュナを射て、十二本の矢でアルジュナを射た。(七八) 大王よ、またシンドゥ国王は四本ずつの矢で、ヴリシャセーナは七本ずつの矢で、クリシュナとアルジュナの各々を射た。(七九) クンティーの息子アルジュナも、彼らに対して射返した。彼は六十四本の矢でドローナの息子を、百本の矢でマドラ国王を射た。(八〇) そして十本の矢でシンドゥ国王を、三本の矢でヴリシャセーナを、三十本の矢でクリパを射て、アルジュナは雄叫びをあげた。(八一)

あなたの兵たちはアルジュナの誓いを妨害しようと望み、こぞって速やかにアルジュナに襲いかかった。(八二) その時アルジュナは、ドリタラーシトラの息子たちを恐れさせつつ、一切の方角に刃のある武器(異本は「ヴァルナの武器」)を現出させた。クル軍は矢の雨を降らせて、高価な戦車によって、アルジュナに立ち向かって行った。(八三) バーラタよ、その非常に恐ろしい、眩惑的な激戦が行なわれていた時、アルジュナ王子は迷うことなく多くの矢を放った。

(八四) 偉大なアルジュナはクル族の王国を得たいと望み、十二年間に起こった様々な苦しみを思い出し、ガーンディーヴァ弓から放たれた無量の矢によってすべての方角をおおった。(八五) 虚空には流星が燃え上がった。多数の鴉が死体に落下した。その間、アルジュナは怒って、シヴァが褐色の弦のアージャガヴァ弓によって敵を殺すように敵たちを殺した。(八六) 敵を滅ぼす誉れ高いアルジュナは大きな弓を用い、最上の馬や最上の象に乗った勇士たちを矢で射落とした。(八七) 恐ろしい姿の王たちは、重い棍棒や鉄棒や刀や槍や、その他の強力な武器を持って、アルジュナに激しく襲いかかった。(八八) その勇士は戦場において強力な弓をとり、猛り立つ戦車兵と騎兵と象兵と騎兵の群に対し、そのすべての武器と生命を奪い、彼らをしてヤマ(閻魔)の王国の人口を増大させた。(八九) (第百二十章)

アルジュナ、ジャヤドラタを殺す

サンジャヤは語った。——

アルジュナは驚異的な武器の力を発揮して、戦場を動きまわり、すべての方角において同時に認められた。(一) アルジュナは空中で熱する真昼の太陽のようで、すべての生類は彼を見つめることができなかった。(二) 戦場でその偉大な男のガーンディーヴァ弓から放たれた矢の群は、空中のハンサ鳥の列のように見えた。(三) 彼は勇士たちの武器を自分の武器ですっかり防御して、恐るべき力を発揮して、恐ろしい行為に従事していた。(四) 王よ、

アルジュナはジャヤドラタを殺そうと望んで、鉄矢（ナーラーチャ）で狼狽させて、それらの最高の戦士たちを通り抜けた。（五）クリシュナを御者とするアルジュナは、すべての方角に矢を放って、戦場を速やかに動きまわり、〔すべての方角で〕認められた。（六）その偉大な勇士の放つ矢の群は動きまわり、幾百幾千と空中に認められた。（七）その時我々は、偉大な射手アルジュナが矢をとり、弓につがえ、発射するのを認めることができなかった（それほど早業であった）。（八）王よ、そしてアルジュナは戦場ですべての方角とすべての戦士を矢で満たして、ジャヤドラタに襲いかかり、六十四本の真っ直ぐの矢で彼を射貫いた。（九）一方シンドゥ国王は、アルジュナの矢に射られて怒り、我慢できなかった。突き棒に苦しめられた象のように。（一〇）猪の旗標を持つ彼は、急いで戦場において鋭い矢をアルジュナに放った。その真っ直ぐの矢は、禿鷲の羽根がついていて、研師によく研がれ、まるで毒蛇のようであった。（一一）それから彼は三本の鉄矢でガーンディーヴァ弓を、六本でアルジュナを射た。そして八本の矢で馬たちを、一本の矢で軍旗を射た。（一二）アルジュナはシンドゥ国王が放つそれらの鋭い矢を撃退し、同時に二本の矢でシンドゥ国王の御者の頭を胴体から切り取り、美しく飾られた軍旗を切断した。（一三）シンドゥ国王の非常に大きい猪の旗標は矢で撃たれて裂け、その竿は断たれ、火焰のように落下した。（一四）ちょうどその時、太陽は速やかに移動した。そこでクリシュナは急いでアルジュナに告げた。（一五）

「ダナンジャヤよ、邪悪なシンドゥ国王の頭を切れ。太陽は最高の山アスタ（西山）に行こう

としている。ジャヤドラタを殺すことについて、私の言葉を聞け。（一六）シンドゥ国王の父は世に名高いヴリッダクシャトラである。彼は長い時間かけて、敵を殺す息子のジャヤドラタを得た。（一七）息子が生まれた時、誰のものともわからぬ、雲か太鼓のような音声が王に告げた。（一八）

『王よ、このあなたの息子は人間のうちにおいて、その美質の点で二つの家系にふさわしい者となろう。最高の王族（クシャトリヤ）で、世間において常に勇士に尊敬されるであろう。（一九）この弓取りが戦場で戦っている間に、地上において名高い敵が怒って彼の頭を切るであろう。（二〇）』

敵を制する者よ、それを聞いてシンドゥ国王（父親）は長らく考え込んで、息子への愛情に苦しみ、すべての親族に言った。（二一）

『戦場で重荷を担って戦っている私の息子の頭を地面に落とす者は、疑いもなく彼の頭も百に砕けるであろう。（二二）』

ヴリッダクシャトラはこのように言って、それからジャヤドラタを王位につけてから、望み通り苦行を行なうために森へ行った。（二三）その威光ある人は今も、このサマンタパンチャカの外で侵しがたい恐るべき苦行を行じている。猿の旗標を持つ者よ。（二四）敵を殺す者よ、それ故あなたは戦場において、驚異的で恐るべき神的な武器により、耳環をつけたシンドゥ国王ジャヤドラタの頭を切って、それを速やかにヴリッダクシャトラの膝に落としなさい。風神の息子（ビーマ）の弟であるバーラタよ。（二五－二六）もしあなたが彼の頭を地面に落とす

なら、疑いもなくあなたの頭も百に砕けるであろうから。(二七) あの老王がそのことに気づかないように、神的な武器を用いて、そのようにせよ。クルの最上者よ。あなたが達成できないこと、できないことは三界すべてに何もない。インドラの息子よ。(二八―二九)」

アルジュナはその言葉を聞くと、口の端を舐めまわし、シンドゥ国王を殺そうとして、速やかにインドラの雷電のような矢を放った。その矢は神聖な呪文(マントラ)で加持され、すべての重荷に耐え、常に香と花輪で供養されていた。(三〇―三一) そのガーンディーヴァ弓から放たれた矢は、高速で飛ぶ鷹が樹木の頂から鳥をさらうように、シンドゥ国王の頭を切り取った。(三二) アルジュナはさらに諸々の矢でその頭を上方に持ち上げ、敵を悲しませ味方を喜ばせた。(三三) それからアルジュナは、その時、その頭を諸々の矢で射て、カダンバの花のようにし(カダンバの花は集合して球状になる)、サマンタパンチャカの外にその頭を運んだ。(三四)

わが君よ、ちょうどその時、あなたの親戚である威光あるヴリッダクシャトラ王は、黄昏(サンディヤー)を崇拝していた。(三五) その時、念想して座っている彼の膝に、黒髪のある、耳環をつけたシンドゥ国王の頭が落下した。(三六) 敵を制する者よ、ヴリッダクシャトラ王は〔念想していて〕、その美しい耳環をつけた頭が自分の膝に落ちたことに気づかなかった。(三七) そして、英邁なヴリッダクシャトラが祈禱を終えて立ち上がった時、その頭は突然地面に落ちた。(三八) その王の息子の頭が地面に達した時、王の頭も百に砕けた。敵を制する者よ。(三九) それから、すべての生類は最高に驚嘆し、クリシュナと勇士アルジュナを讃えた。(四〇) そしてシンドゥ国王ジャヤドラタが殺されたのを見て、あなたの息子たちの眼から、悲しみのあまり多量の涙が落ちた。(四一)

ビーマセーナは戦場でユディシティラに知らせるかのように、大きな獅子吼により天地を満たした。(四二) その大音声を聞いて、ダルマ王ユディシティラは、偉大なアルジュナによりシンドゥ国王が殺されたと考えた。(四三) それから彼は、楽器の音により味方の兵たちを喜ばせて、戦いを望んで戦場でドローナを攻撃した。(四四) 王よ、そして太陽が西山(アスタ)に達した時、ドローナとソーマカ軍との間に、身の毛がよだつ戦いが行なわれた。(四五) 王よ、シンドゥ国王が殺された時、それらの勇士はドローナを殺そうと望んで、あらゆる努力を注いで戦った。(四六) パーンダヴァたちはシンドゥ国王を殺して勝利を得て、勝利に酔ってドローナと戦った。(四七) 大王よ、アルジュナもまた、シンドゥ国王を殺して、戦場であなたの最高の戦士たちと戦った。(四八) 勇士アルジュナは先の誓いを達成し、神々の王が神の敵たちを殺すように、昇った太陽が闇を払うように、すっかり敵を粉砕した。(四九)

(第百二十一章)

(70) ガトートカチャの死（第百二十二章—第百五十四章）

カルナから戦車を奪うサーティヤキ

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、勇士シンドゥ国王がアルジュナに殺された時、わが軍の人々はどのようにしたか、それを私に語ってくれ。(一)」

サンジャヤは語った。——

わが君よ、戦場でシンドゥ国王がアルジュナに殺されたのを見て、シャラドヴァットの息子クリパは怒りにかられ、矢の大雨をアルジュナに浴びせた。ドローナの息子(アシュヴァッターマン)も戦車に乗ってアルジュナに襲いかかった。(二―三)最高の戦士である両者は、戦車により、両方の側から鋭い矢をその最高の戦士に浴びせた。(四)その強力な最高の戦士は矢の大雨で悩まされ、最高に苦しんだ。(五)アルジュナは戦場で師(クリパ)と師(ドローナ)の息子を殺すことは望まず、名人芸を発揮した。(六)彼はドローナの息子とクリパの武器を自分の武器により防御して、彼らを殺そうと望まず、あまり激しくない矢を二人に放った。(七)アルジュナに発せられたそれらの矢は、あまり激しく傷つけなかったが、数が多いので、二人は最高に苦しんだ。(八)王よ、そこでクリパはアルジュナの矢に苦しめられ、戦車の座席で失神して座り込んだ。(九)彼の御者は、主人が矢で苦しみ惑乱しているのを見て、「彼は殺された」と考え

て彼を運び去った。(一〇)大王よ、クリパが戦場で沈み込んだ時、アシュヴァッターマンもアルジュナを離れて他の戦士に向かった。(一一)勇士アルジュナはクリパが矢で苦しんで失神したのを見て、戦車の中で、悲嘆に暮れた。(一二)

「大知者ヴィドゥラは、一族を滅亡させる邪悪なスヨーダナが生まれたばかりの時に、このことを予見して王に告げた。

『どうかこの一族の面汚しをあの世に送って下さい。というのは、彼のせいでクル族の長たちに大きな危険が生じるでしょうから。(一三―一四)』

真実を述べる彼のこの言葉通りになった。というのは、彼のせいで今やクリパは矢の床にあるのだから。(一五)ああ、王族の生業など下らない。腕力や雄々しさなど下らない。私のような者がどうしてバラモンである師を害そうと望むであろうか。(一六)彼は聖仙の息子であり、私の師匠であり、ドローナの親友である。その彼が私の矢に苦しんで戦車の座席に横たわっている。(一七)私は心ならずも矢で彼をひどく苦しめた。その彼は戦車の座席に沈み込んで、私の生命を苦しめるかのようである。(一八)私は彼の矢に苦しめられても、その輝きに満ちた人を見ている〔だけでいる〕べきだった。しかし私は苦境に陥り、多くの矢を彼に射返した。(一九)彼は倒れて、息子を殺されたことよりもっと私を悲しませる。クリシュナよ、あのような状態で、哀れにも自分の戦車に沈み込んでいる彼を見よ。(二〇)この世で人中の雄牛たちが、師匠から学術を学んで、師の望みのものを与えるなら、彼らは神の地位に達する。(二一)しかし、最低の人々が師から学術を得て、まさに師を殺すなら、その悪行

の人々は地獄に行く。(二二) それ故、今日私がやった行為は必ずや私を地獄に行かせるものだ。師匠であるクリパを矢の雨で戦車に沈ませたのだから。(二三) 以前クリパは、私に武術を授けながら言った。『クルの王子よ、決して師に対し攻撃してはならぬ』と。(二四) 私はその善良で偉大な師匠の言葉に従わなかった。他ならぬその彼に戦場で矢を浴びせたのであるから。(二五) 退くことのないその敬うべきガウタマ（クリパ）に敬礼！ クリシュナよ、彼を攻撃した私に災いあれ。(二六)」

アルジュナがそのように嘆いていた時、カルナはシンドゥ国王が殺されたのを見て、彼の方に突進して来た。(二七) 勇士アルジュナはカルナが近づいて来るのを見て、笑ってクリシュナに告げた。(二八)

「あそこにカルナが、サーティヤキの戦車の方に向かって行く。きっと彼は、ブーリシュラヴァスが戦死したことに我慢できないのだ。(二九) クリシュナよ、カルナが進む道に馬たちをかりたてよ。カルナがサーティヤキに、ブーリシュラヴァスと同じ道をたどらせぬように。(三〇)」

アルジュナにこのように言われて、威光に満ちた勇士クリシュナは、次のような時宜にかなった言葉を述べた。(三一)

「アルジュナよ、あの強力なサートヴァタの雄牛は、一人でカルナに十分対抗できる。いわんやドルパダの二人の息子といっしょならなおさらである。(三二) しかしアルジュナよ、今はあなたがカルナと戦うことはよくない。彼には燃え上がる大流星のようなヴァーサヴィー

（インドラが与えた槍）がある。彼はあなたに対して用いるために、その槍を大切に守っている。敵の勇士を殺す者よ。(三三) そこでカルナをサーティヤキのもとに行かせるがよい。アルジュナよ、私はあの邪悪な男を殺すにふさわしい時を知っている。(三四)」

ドリタラーシトラはたずねた。

「ブーリシュラヴァスとシンドゥ国王が殺された後で、勇士カルナとサーティヤキはどのように戦ったか。(三五) サーティヤキは戦車を失ったが、いかなる戦車に乗ったか。そして〔アルジュナの〕車輪を守る二人のパーンチャーラの王子はどうしたか。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。(三六)」

サンジャヤは語った。――

おお、その激戦において起こったことをありのままあなたに語りましょう。気を確かに持って御自身の悪しき行為をよく聞きなさい。(三七) 王よ、クリシュナは前からこのことを心の中で知っていた。勇士サーティヤキが祭柱を旗標にする者（ブーリシュラヴァス）にうち破られるということを。(三八) 王よ、あのクリシュナは過去と未来を知る。それ故、強力な彼は御者のダールカを呼んで命じた。「明朝、私の戦車の準備をしてくれ」と。(三九) 神々もガンダルヴァも夜叉や蛇や羅刹も人間も、決して二人のクリシュナ（クリシュナとアルジュナ）をうち破ることはできない。(四〇) 祖父（梵天）をはじめとする神々とシッダ（半神の一種）たちは、その二人の無比の力を知っ

ている。その戦いがどのようであったか、聞きなさい。(四一)

サーティヤキが戦車を失い、カルナが武器を振り上げているのを見て、マーダヴァ(クリシュナ)は大きな音を響かせ、リシャバ音階(第二音階)で法螺貝を吹いた。(四二)ダールカは法螺の音を聞いて、合図の意味を知り、スパルナ(金翅鳥)の旗標がそびえ立つ戦車を彼のもとに導いた。(四三)シニの孫(サーティヤキ)はクリシュナに許可されて、そのダールカの操縦する燃える太陽のような戦車に乗った。(四四)戦車をひくサイニャ、スグリーヴァ、メーガプシュパ、バラーハカという名の最高の馬たちは、非常に高速で、黄金の装飾で飾られ、望みのままに進むことができる。(四五)それらの馬をつないだ、その天車のような戦車に乗って、サーティヤキは多くの矢を発射しながら、カルナに向かって突進した。(四六)その時、〔アルジュナの戦車の〕車輪を守るユダーマニユとウッタマウジャスの二人も、アルジュナの戦車を離れて、カルナに向かって行った。(四七)大王よ、カルナの方も非常にいきり立ち、戦場で矢の雨を放ちながら不屈のサーティヤキに向かって突進した。(四八)神々、ガンダルヴァ、阿修羅、蛇、羅刹の戦いでも、そのような戦いは地上でも天界でもいまだかつて聞いたことがなかった。(四九)大王よ、戦車、馬、人、象よりなる軍隊は、両者の心を魅了する働きを見て、戦いを中止した。(五〇)王よ、すべての人々が、最高の人間である両者のその非常に超人的な戦いと、ダールカの御者としての技術を見物した。(五一)進行、後退、転回、円を描いてまわること、引き返すこと。以上により、御者カーシャペーヤ(ダールカ)の御者の技術は驚嘆すべきものであった。(五二)天空にいる神々、ガンダルヴァ、魔類たちも、カルナとサーティヤ

キの戦いを非常に熱心に見物した。(五三)戦場で競い合う強力な両者、神に等しいカルナとユユダーナすなわちサーティヤキは、友のために勇武を発揮した。(五四)大王よ、両者はお互いに矢の雨を相手に注いだ。カルナは矢の雨でシニの孫を悩ませた。(五五)クルの勇士(ブーリシュラヴァス)とジャラサンダの死に我慢できず、カルナは悲しみに入り込まれて、大蛇のようにため息をついた。(五六)敵を制する彼は怒って、戦場においてその眼でサーティヤキを燃やすように見て、何度も攻撃した。(五七)サーティヤキの方も、怒った相手を見て、矢の大雨により反撃した。象が敵の象に反撃するように。(五八)無比の勇武を有する二人の人中の虎は、強力な二頭の虎のように交戦して、戦場でお互いに傷つけ合った。(五九)

それから、敵を制するシニの孫はすべて鉄製の矢でカルナの全身を繰り返し射た。(六〇)そして彼は半月形の先の矢でカルナの御者を戦車の座席から射落とした。また鋭い矢で、カルナの四頭の白馬を殺した。(六一)そしてその人中の雄牛は、百本の矢でカルナの旗を百に切って、あなたの息子の見ている前で、カルナから戦車を奪った。(六二)王よ、それからあなたの軍の人中の雄牛たち、すなわちカルナの息子ヴリシャセーナ、マドラ国王シャリヤ、ドローナの息子は、サーティヤキをぐるりと取り囲んだ。それからすべてが混沌とし、何もわからなくなった。(六三―六四)サーティヤキによりカルナが戦車を奪われた時、王よ、すべての兵たちの間に「ああ、ああ」という声があがった。(六五)王よ、カルナはサーティヤキに矢で苦しめられて動揺し、ため息をついてドゥルヨーダナの戦車に乗った。(六六)カルナはあなたの息子との少年期からの友情について考え、また王国(アンガ)を与えられた際に誓った

約束を守ろうとしていたのだが……。（六七）しかし王よ、カルナが戦車を失った時、強力なサーティヤキはドゥフシャーサナをはじめとする勇猛なあなたの息子たちを殺さなかった。（六八）彼は以前にビーマセーナが誓ったことを守らせるために、戦車を奪って彼らを動揺させたが、生命を奪うことはしなかった。（六九）というのは、あの賭博の際に、ビーマセーナはあなたの息子たちを殺すことを誓った。そしてまた、アルジュナはカルナを殺すと誓った（二・六八・三三参照）のである。（七〇）一方、カルナをはじめとする最高の戦士たちは、サーティヤキを殺そうと努力したが、彼を殺すことはできなかった。（七一）ドローナの息子、クリタヴァルマン、及びその他の幾百の王族の雄牛たちを、サーティヤキは天界を願い、ダルマ王によかれと願い、一つの弓でうち破った。（七二）敵を苦しめるサーティヤキは、力にかけて二人のクリシュナに等しかった。この世には、クリシュナ、アルジュナ、サーティヤキという人中の虎である弓取りがいる。第四の男はいない。（七三）

ドリタラーシトラは言った。

「クリシュナに等しい若者サーティヤキは、自分の腕力を誇り、ダールカを御者とするクリシュナの無敵の戦車に乗り、カルナの戦車を奪った。そのサーティヤキはまた別の戦車に乗ったか。（七四―七五）私はそのことを聞きたい。そなたは語るのが巧みだから。サーティヤキは耐えがたいと私は考える。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。（七六）」

サンジャヤは語った。――

王よ、聞きなさい。ダールカの聡明な弟が、完全に装備された他の戦車を速やかに彼にもたらした。（七七）その車は鉄や金の板金で結ばれた轅を持ち、千の星（の飾り）をはめこまれ、獅子の旗標とその他の旗を持っていた。（七八）その車には、風のように高速な馬たちがつながれていた。それらの最高の馬は黄金の飾りでおおわれ、月のように白く、すべての音を超える声で嘶き、頑丈で、きらびやかな黄金の具足をつけていた。王よ。その戦車は鈴の網に満ちて音を響かせ、槍と投槍で輝いていた。（七九―八〇）戦闘用の品物に満ち、多くの武器でおおわれ、雷雲のように重々しい音をたてた。ダールカの弟はそのような戦車をもたらした。（八一）サーティヤキはその戦車に乗ってあなたの軍を襲撃した。一方ダールカは望み通りクリシュナのもとに行った。（八二）

大王よ、カルナにも人々は戦車を（提供した）。法螺貝か牛乳のように白い、きらびやかな黄金の具足をつけた、この上なく高速な良馬たちがそれにつながれていた。（八三）その最上の戦車は、黄金の鈴の列（五・一五二・九参照）と軍旗を備え、器械と旗を装備し、優れた御者が操り、多くの武器におおわれていた。（八四）人々はカルナにそのような戦車を提供した。カルナはそれに乗り、敵を襲撃した。

以上、あなたが私にたずねたことに対し、すべてお答えした。（八五）しかし、あなたの悪しき政策から生じた滅亡について、更にお聞きなさい。あなたの三十一名の息子たちがビーマセーナに倒された。（八六）常にめざましく戦うドゥルムカをはじめとして、幾百の勇士た

ちがサーティヤキとアルジュナに殺された。（八七）わが君よ、あなたの悪しき政策により、ビーシュマとバガダッタをはじめとし、このような滅亡が起こった。（八八）（第百二十二章）

残酷な大戦場

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、敵味方の勇士たちがそのような状態の時、ビーマはどのようなことをしたか。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。（一）」

サンジャヤは語った。――

ビーマセーナは戦車を失い、カルナの言葉の槍に苦しめられて怒りにかられ、アルジュナに告げた。（二）

「ダナンジャヤよ、カルナはお前が見ている前で、繰り返し、私に向かって『鬚なし男、愚か者、大食い、武器に未熟な男、幼稚な奴、臆病者よ、戦ってはいけない』と言った。私はそのように言う男を殺さなければならぬ。バーラタよ、彼は私にそういうことを言ったのだ。（三―四）勇士よ、私はお前とともにその誓戒を立てた。アルジュナよ、それは私の誓いであるとともに、疑いもなくお前の誓いでもある。（五）最高の人よ、彼を殺すという私のあの言葉を思い出せ。ダナンジャヤよ、それが真実になるようにせよ。（六）」

限りなく勇猛なアルジュナはビーマの言葉を聞くと、戦場において少しカルナに近づいて告げた。（七）

「カルナよ、カルナよ、空しく見える者、御者（スータ）の息子、自慢屋、法（ダルマ）にもとる男よ、今私がお前に言うことを聞け。（八）戦いにおける勇士の行為は、勝利か敗北の二種である。カルナよ、そしてその二つは、インドラが戦っても不確実である。（九）お前はサーティヤキにより戦車を失い、ほとんど死ぬところだったが、放免された。お前はたまたまビーマセーナから戦車を奪えたのだ。（一〇）しかしカルナよ、お前が戦いの法を知りながら、退くことなく戦っている、力の限り戦場で勇士の行為を遂行しているビーマにあのように言ったことは、法にもとることだ。（一一）すべての兵とクリシュナと私が見ている所で、お前は戦いにおいて何度もビーマセーナにより戦車を失った。しかしビーマはお前に乱暴な言葉は何も言わなかった。（一二）お前は狼腹に多くの乱暴なことを聞かせたから、また私のいない所でお前たちは私の息子アビマニユを殺したから、それ故お前はすぐにその尊大さの報いを得よ。お前がアビマニユの弓を断ち切ったのは、自分を滅ぼすことになる。愚か者め。（一三―一四）愚か者よ、そのためにお前は従者、軍隊、象馬とともに私に殺されねばならぬ。お前はすべてのなすべきことをせよ。お前に大きな危険が訪れた。（一五）私は戦場においてお前が見ている前でヴリシャセーナ（カルナの息子）を殺すであろう。そして心の迷いから私に向かって来るその他の王たちをも、すべて殺すであろう。私は武器にかけて誓う。（一六）愚かで無知で高慢なお前が戦場に倒れているのを見て、愚かなドゥルヨーダナは非常に嘆くであろう。（一七）」

アルジュナがカルナの息子を殺すことを誓った時、戦士たちは大喚声をあげた。（一八）その非常に恐ろしい激戦が行なわれている間に、千の光線を持つ太陽は光を弱めて西山（アスタ）に没した。（一九）王よ、それからクリシュナは戦いの前線に立つアルジュナを抱きしめて、次のように言った。（二〇）

「アルジュナよ、幸いなことに、あなたは偉大な誓いを達成した。幸いなことに、邪悪なヴリッダクシャトラは息子とともに殺された。（二一）バーラタよ、神々の軍といえども、ドリタラーシトラの息子の軍と対戦したら、戦場で沈み込む。アルジュナよ、疑う余地が無い。（二二）人中の虎よ、いくら考えても、世界中であなた以外にあの軍と戦える男はどこにも見出されない。（二三）あなたに勝るとも劣らない多くの大威力を持つ王たちがドゥルヨーダナのために集結した。彼らは武装して、怒ったあなたと対戦したが、あなたに太刀打ちできなかった。（二四）あなたの精力と腕力はルドラ（シヴァ）やシャクラ（インドラ）やアンタカ（死神、破壊神）に等しい。今日、敵を苦しめるあなたは一人で大変な勇武を発揮したが、誰もそのようなことを戦場で行なうことはできない。（二五）あの邪悪なカルナが従者とともに殺された時に、私はまたこのように、敵を殺し敵に勝利したあなたを讃えるであろう。（二六）」

アルジュナは彼に答えた。

「マーダヴァよ、この誓いは神々にも達成しがたいものだが、あなたのお蔭で私はそれを達成することができた。（二七）マーダヴァよ、あなたがその人々の守護者である場合、彼らが勝利することは不思議ではない。ユディシティラはあなたの恩寵により、すべての大地を獲

得するであろう。（二八）クリシュナよ、すべてはあなた自身の仕事である。主よ、これはあなた自身の勝利である。我々はあなたによって繁栄させられる。我々はあなたの召使である。（二九）」

クリシュナはこのように言われて微笑し、ゆっくりと馬たちを操縦して、残酷な大戦場をアルジュナに見せた。（三〇）

聖クリシュナは言った。

「勇猛な王たちは戦いにおける勝利を求め、そして大きな名声が広がることを求めたが、あなたの矢で殺されて大地に横たわっている。（三一）彼らの武器や装飾は散乱し、馬と戦車と象は破砕され、鎧は切断され、彼らはこの上なく落胆していた。（三二）生きている者も死んでいる者もいたが、いずれも最高の輝きをそなえ、死んだ王たちも生きているかのように見えた。（三三）見よ、大地は彼らの黄金の羽根の矢や種々の鋭い刀や、象馬や武器により満ちている。（三四）鎧、楯、首飾り、耳環をつけた頭、ターバン、王冠、花輪、頭頂の宝玉、衣服、首の飾紐、腕環、美しく輝く金の胸飾り、その他のきらびやかな装飾品により大地は輝いていた。バーラタよ。（三五—三六）払子（ほっす）（ヤクの尾）、美しい扇、軍旗、馬・戦車・象、種々の彩色の布（象の背をおおう）、馬たちの飾り（毛の房）、きらびやかな毛布、高価な戦車の防護板。大地がきらびやかな布切れでおおわれるようにそれらの物でおおわれているのを見よ。（三七—三八）見よ、人々は装備された象から、御者とともに落ちる。雷電に撃たれた獅子たちが山頂から落ちるように。（三九）見よ、他の歩兵や騎兵の群は、血の洪水にまみれて、馬たちとともに大地に

縫いつけられている。(四〇)」

サンジャヤは語った。——

クリシュナはこのようにアルジュナに戦場を見せてから、自軍と合流して喜び、パーンチャジャニヤ(法螺の名)を吹き鳴らした。(四一)

(第百二十三章)

クリシュナとアルジュナに再会したユディシティラ

サンジャヤは語った。——

バーラタよ、それからユディシティラ王は戦車から飛び下りて、喜びの涙に濡れて、クリシュナとアルジュナを抱擁した。(一)そして彼は蓮花のように輝くその美しい顔を拭って、クリシュナとアルジュナに告げた。(二)

「幸いなことに、私は戦場で重任を果たした二人の勇士に会えた。幸いなことに、最低の人間である邪悪なシンドゥ国王は殺された。(三)クリシュナよ、幸いなことに、私に大きな喜びがもたらされた。幸いなことに、敵の群は悲しみの海に沈められた。(四)マドゥスーダナよ、全世界の尊師(グル)であるあなたがその人々の守護者である場合、三界において彼らにとってなしがたいことは何もない。(五)ゴーヴィンダよ、あなたの恩寵により、我々は敵に勝利するだろう。昔、あなたの恩寵によりインドラが悪魔たちに勝利したように。(六)クリシュナよ、あなたがその人々に満足すれば、彼らにとって、地上の征服であろうと三界の征服であろうと、必ずや実現する。(七)マーダヴァよ、神々の主であるあなたがその人々に満足すれば、彼らには罪悪も敗戦も存在しない。(八)クリシュナよ、栄光ある神群の王シャクラ(インドラ)は、あなたの恩寵により、激戦において三界の征服を達成した。(九)神々の主クリシュナよ、あなたの恩寵により、神々は不死になり、不滅の諸世界を享受する。(一〇)敵を殺す者よ、あなたの恩寵から生じた勇武により、シャクラは幾千の悪魔を殺して神々の王の位についた。(一一)勇士クリシュナよ、動不動の世界はあなたの恩寵により自己の道に立ち、念誦(ジャパ)や護摩(ホーマ)に従事する。(一二)

太初、この一切は闇よりなり、一面の海であった。最高の人よ、あなたの恩寵により世界は顕現の状態に達した。(一三)クリシュナは全世界の創造者であり、最高我であり、不滅である。彼に帰依する人々は決して迷うことはない。(一四)クリシュナよ、あなたは無始無終の神であり、不滅の世界創造者である。あなたを信愛する人々は諸々の困難を越える。(一五)あなたは最高で、太古より存する神人(プルシャ)であり、最高の者たちのうちの最高者である(異本による)。その最高者に帰依する者には、最高の繁栄がもたらされる。(一六)あなたは四ヴェーダを歌った。そして四ヴェーダにおいて歌われている。その偉大なあなたに帰依して、人は無上の繁栄に達する。(一七)あなたはダナンジャヤ(アルジュナ)の友であり、ダナンジャヤに好意を寄せ、ダナンジャヤの守護者である。そのあなたに帰依すれば人は幸福になる。(一八)」

偉大なクリシュナとアルジュナの両者は、このように言われて喜び、大地の主である王に

告げた。（一九）

「邪悪なジャヤドラタ王は、あなたの怒りの火により焼かれた。バーラタよ、そして猛り立つドゥルヨーダナの大軍は戦場で攻撃されて殺され、滅亡するであろう。敵を殺す者よ、実にクル族の人々はあなたの怒りによりすでに殺されたのだ。（二〇―二一）というのは、眼で敵を殺す勇士であるあなたを怒らせて、邪悪なスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）は友人縁者とともに、戦場で生命を捨てるであろうから。（二二）神々でさえ破りがたいあのクルの祖父ビーシュマは、前にあなたの怒りに殺されて、矢の床で寝ている。（二三）敵を殺すパーンダヴァよ、あなたがその人々に対して怒ったら、彼らが戦いに勝利することはむずかしく、彼らは死の支配下に帰する。（二四）誇りを与える人よ、あなたがその人々に対して怒ったら、その人の王国、生命、愛しい息子たち、種々の喜びはすぐに滅びるであろう。（二五）ユディシティラよ、常に王の法（ラージャダルマ）に専念するあなたが怒ったら、クル族は子供や家畜や親族もろとも滅亡したも同然と私は思う。（二六）」

それから、矢で傷ついた強力なビーマと勇士サーティヤキは、目上に挨拶した。それから二人の偉大な射手は、パーンチャーラの人々に囲まれて座っていた。（二七）喜び合掌して前にいるビーマとサーティヤキを見て、ユディシティラはその二人の勇士を祝福した。（二八）

「幸いなことに私は、軍隊の海から脱したそなたたち勇士に再会した。近寄りがたいドローナという鰐がいる、クリタヴァルマンというマカラ（海豚）がいる海から……。幸いなことに、地上のすべての王は戦いにおいてうち破られた。（二九）幸いなことに私は、そなたたち二人が戦いに勝利したのを見る。幸いなことに、ドローナと強力なクリタヴァルマンは戦いに敗れた。（三〇）幸いなことに私は、非の打ち所がなく、戦いにおいて誇り高い、戦場において退くことのない勇猛なそなたたちが、軍隊の海を渡ったのを見る。幸いなことに私は、私の生命に等しいそなたたちに再会した。（三一）」

パーンダヴァの王はこのように言って、人中の虎であるサーティヤキと狼腹とを抱きしめ、嬉し涙を流した。（三二）それから王よ、すべてのパーンダヴァ軍はこの勝利を見て喜び、更に戦う決意をした。（三三）（第百二十四章）

嘆き悲しむドゥルヨーダナ

サンジャヤは語った。――

王よ、シンドゥ国王が殺された時、あなたの息子スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）は、涙に濡れた顔で嘆き悲しみ、敵に勝利する気力を失って考えた。「地上においてアルジュナに等しい戦士は存在しない。（一）ドローナ、カルナ、アシュヴァッターマン、クリパといえども、怒った彼に立ち向かうことはできない」と。（二）わが君よ。「というのは、アルジュナは戦いにおいて、私のすべての勇士たちをうち破り、戦場でシンドゥ国王を殺した。誰も彼を制止しなかった。（三）いずれにせよこのクルの大軍はすべて殺されたも同然だ。それを救える者はいないから。インドラ自身でさえ救えない。（四）私はカルナを頼りにして、戦いにおいて武器

を振りかざした。そのカルナが戦いに敗れ、ジャヤドラタは殺された。（五）前に彼は集会場の中でパーンダヴァたちに暴言を述べた。そのカルナが戦いに敗れ、シンドゥ国王は倒された。（六）私はカルナの力を頼りにして、和平を要求するあのクリシュナを草のように考えた（軽んじた）。そのカルナが戦いに敗れた。（七）」

バラタの雄牛である王よ、全世界に罪を犯すあなたの息子はこのように思い悩み、ドローナに会うためにそのそばに行った。（八）それから彼に、クル軍が大量に殺されること、敵が勝利し、ドゥルヨーダナの軍が沈んでいることを告げた。（九）

ドゥルヨーダナは言った。

「師匠よ、見なさい。頭に水を灌がれた者（即位式を受けた王）たちが大量に殺されたのを。私の祖父である勇士ビーシュマをはじめとして……。（一〇）貪欲なシカンディンは彼を倒して満足したが、すべてのパーンチャーラ軍とともに軍隊の前衛にいる（異本による）。（一一）あなたの他の弟子である無敵のジャヤドラタ王は、七軍団を殺してから、アルジュナに殺された。（一二）親しい人々は、私の勝利を望み、有益なことをして、ヤマ（閻魔）の住処に行った。私はどのようにしたら彼らに借りを返せるか。（一三）あれらの王は私のために大地を望んだ。だが彼らは大地の主権を捨てて、大地に横たわっている。（一四）私は臆病者だ。このような友たちの滅亡を作り出しながら、千の馬祀によって自己を守ること（浄めること）ができない。（一五）貪欲で邪悪で法に背く私のために、彼らは勝利を望んで努力して、ヤマの住処に逝った。（一六）行ないが悪く、親しい人々を憎む私のために、どうして大地は諸王の集会において穴

を与えられなかったのか。（一七）祖父ビーシュマは、戦いにおいて倒され、血まみれの身体で横たわっていたが、どうしてこの私は諸王の中で彼を救うことができなかったのか。（一八）他界を勝ち得た無敵の彼は、高貴でない、友を憎むこの私と会って、何と言うだろうか。（一九）見よ。偉大な射手である勇士ジャラサンダは、私のために生命を捨てて奮戦したが、サーティヤキに殺された。（二〇）カーンボージャの王やアランブサや、その他の多くの友たちが殺されたのを見て、今、私が生きていて何になるか。（二一）あの勇士たちは私のために、顔を背けることなく、力の限り努力して私の敵を征服すべく奮戦したが、殺された。（二二）敵を苦しめる者よ、今日、私は力の限り努力して彼らに借りを返し、ヤムナー河畔で水を手向けて彼らを満足させよう。（二三）最高の戦士よ、私はあなたにこの真実を誓う。行なった善行にかけて、力にかけて、息子たちにかけて誓う。（二四）私はあのパーンチャーラとパーンダヴァの軍をすべて戦いにおいて殺して平安を得るか、あるいは戦いにおいて（先に死んだ）戦友たちと同じ世界へ逝くであろう。（二五）今や私の同盟者たちは十分に恩恵を与えられず私を守ろうとしない（テクスト疑問）。パーンダヴァたちに好意的になり、我々にはそうではない。強力な者よ。（二六）約束を固く守る男（ビーシュマを指すか）は戦いにおいて、自ら死を定めた。あなたはアルジュナがよい弟子であるから、彼を見逃している。（二七）かくて私の勝利を求める人々はすべて殺された。今や私の勝利を望んでいるのはカルナだけだ。（二八）愚かにも真に友を知らないで、彼（友でない者）を友のやるべき仕事につけるならば、その人の仕事は失敗する。（二九）そのように、私の仕事も友と称する人々によってなされた。迷妄により

貪欲にかられ、邪悪で、ねじくれた、財を求める私の……（異本による）。(三〇) ジャヤドラタは殺された。強力なソーマダッタの息子（ブーリシュラヴァス）、アビーシャーハの人々、シューラセーナの人々、シビの人々、ヴァサーティの人々も殺された。(三一) そこで私は今日、私のために戦場でアルジュナと戦って殺された、それらの人中の雄牛がいる所に行こう。(三二) あれらの人中の雄牛なしでは、私は生きていても仕方ない。パーンドゥの息子たちの師匠であるあなたは、私のすることを承認して下さい。(三三)」

（第百二十五章）

ドゥルヨーダナに失望するドローナ

ドリタラーシトラはたずねた。

「友よ、戦場でシンドゥ国王がアルジュナに殺された時、同様にブーリシュラヴァスが殺された時、そなたの心はどのようであったか。(一) また、ドローナはクル族の集会において、ドゥルヨーダナにそのように言われて、それから何と答えたか。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。(二)」

サンジャヤは語った。——

バーラタよ、シンドゥ国王とブーリシュラヴァスが殺されたのを見て、あなたの兵たちの間に大きな嘆声があがった。(三) 彼らはあなたの息子のすべての謀を非難した。その謀によって幾百の王族の雄牛たちが殺されたのだった。(四) またドローナは、あなたの息子の言葉を聞いて失望した。彼は少しの間考えてから、非常に苦しみながら告げた。(五)

「ドゥルヨーダナよ、何故にそのように言葉の矢で私を傷つけるのか。アルジュナは戦いにおいてうち破られないといつも言って来た。(六) クルの王よ、シカンディンは戦いにおいてアルジュナに守られてビーシュマを倒した。このことだけによって、アルジュナの力を知ることができる。(七) 戦いにおいて神々や人間に殺されないはずの男（ビーシュマ）が倒されたのを見て、まさにその時、バラタ族の軍は滅亡したと私は知った。(八) 我々は彼のことを、三界の男たちのうちで最大の勇士であると考えていた。その勇士が倒された時、我々は他の誰に寄る辺を求めようか。(九) わが子よ、クルの集会においてシャクニがそれで賭博をしたあれらの骰子は実は骰子ではない。それらは敵を苦しめる鋭い矢であった。(一〇) わが子よ、今やそれらの矢は、ジャヤ（アルジュナ）に射られて我々を殺している。あの時ヴィドゥラはそのように告げたが、そなたは理解しなかった。(一一) 偉大で賢明なヴィドゥラは、平和のために色々と有益なことを説いたが、そなたは彼の忠告を聞かなかった。(一二) 彼の言葉を軽んじたことにより、今やその恐ろしい大殺戮が訪れた。ドゥルヨーダナよ、そなたのせいだ。(一三) また、クリシュナー（ドラウパディー）は良家に生まれ、すべての法に従い、そのようなしうちにふさわしくないのに、我々が見ている前で、そなたは彼女を集会場に連れて来させた。(一四) ガーンダーリーの息子よ、今やそなたはあの非法の果報を受けているのだ。さもなければ、他の世界において、そなたはそれ以上の罪過に赴くであろう。(一五) また、あの時、

賭博において詐術によりパーンダヴァたちを破り、ルル鹿の皮をまとった彼らを森に追いやった。(一六) 彼らは息子のようであり、常に法（ダルマ）を実践しているのに、この世でバラモンと称する人で、私以外のいかなる者が、彼らに敵対することができようか。(一七) そなたはドリタラーシトラの同意のもとに、シャクニと共謀して、クルの集会においてパーンダヴァたちの怒りを起こさせた。(一八) そなたはヴィドゥラの言葉を無視して、ドゥフシャーサナに結びつき、カルナにより増大させられたその怒りを、繰り返し育成した。(一九) すべての兵はシンドゥ国王に依存して、アルジュナの息子を囲んで殺した。そのシンドゥ国王が、そなたたちの中でどうして殺されたのか。(二〇) クルの王よ、そなたやカルナやクリパやシャリヤやアシュヴァッターマンが生きているのに、シンドゥ国王はどうして死んだのか。(二一) そなたたちすべての王が激しい威光を持つシンドゥ国王を救おうと努めていた。その彼が、そなたたちの中でどうして殺されたのか。(二二) ドゥルヨーダナよ、その王は特別に私とそなたに対して、アルジュナから守ってもらうことを望んでいた。(二三) しかし彼がアルジュナから守られなかった時、私は自分自身の生命が守られることもまったく期待していない。(二四) パーンチャーラ軍とシカンディンを殺さないうちは、私は自分がドリシタデュムナの詐術に沈んでいるかのように思う。(二五) バーラタよ、そなたはシンドゥ国王を救えなかったのに、どうして苦しんでいる私を言葉の矢で傷つけるのか。(二六) もはやあの誓いを守る、汚れなき行為のビーシュマの黄金の旗を戦場に見ないのに、どうしてそなたは勝利を望むか。(二七) シンドゥ国王とブーリシュラヴァスは、勇士たちの中で殺された。その後はどうなる

とそなたは考えるのか。(二八) 王よ、ただ無敵のクリパが生きているが、シンドゥ国王の道を追わなかったので、私は彼を敬う。(二九) クルの王よ、そなたとそなたの弟ドゥフシャーサナが見ている前で、なしがたい行為をなすビーシュマ、戦いにおいてインドラを含む神々にも殺されないようなビーシュマが倒されたのを私は見た。(三〇) 王よ、もはや大地はそなたのものではないと私は思う。バラタ族の王よ、今やパーンダヴァとスリンジャヤの軍はこぞって私に襲いかかる。(三一) 私はすべてのパーンチャーラ軍を殺さないうちは鎧を脱がない。ドゥルヨーダナよ、私は戦場でそなたに有益な仕事をするであろう。(三二) 王よ、そなたは戦場で私の息子アシュヴァッターマンに告げなさい。『汝は生きている限りソーマカ軍を解放すべきではない』と。(三三) そしてまた、『父に教えられた言葉を守れ。確固として温情、自制、真実、廉直に努めよ。(三四) 法（ダルマ）と実利（アルタ）と享楽（カーマ）に通達し、法と実利を損なうことなく、専ら法にもとづき、諸行為を行なうべきである』と何度も告げて下さい。(三五)

バラモンは眼と心により満足させられるべきで、力の限り奉仕されるべきである。彼らに不快なことをしてはならぬ。実に彼らは火焔のようであるから。(三六)

ところで敵を殺す王よ、私は偉大な戦いをするために敵軍に突入する。そなたが言葉の矢で傷つけたから。(三七) ドゥルヨーダナよ、もしできるならそなたは軍隊を守りなさい。クルとスリンジャヤの軍はいきり立って、夜も戦うであろう。(三八)」

友よ、ドローナはこのように告げて、パーンダヴァとスリンジャヤの軍に向かって行った。太陽が星々の輝きを奪うように、王族たちの威光を奪いつつ。(三九)

（第百二十六章）

すべて運命が左右する

サンジャヤは語った。——

ドローナにこのように言われて、ドゥルヨーダナ王は怒りにかられて戦いの決意をした。（一）そしてあなたの息子ドゥルヨーダナはカルナに告げた。

「見よ。師匠により布かれた、神々にも破られがたい陣形は、クリシュナをともなうアルジュナに破られた。（二）あなたと偉大なドローナが奮戦している間に、主立った戦士たちが見ている前で、シンドゥ国王は殺された。（三）カルナよ、見よ。地上において最上の王たちが、戦いにおいてアルジュナ一人に殺された。インドラの息子は私の軍隊を残りわずかにした。（四）敵を殺す者よ、私が奮戦している間に、他の獣たちが獅子に殺されるように。（五）ドローナが望まないのに、どうしてアルジュナは戦場で奮戦して、破りがたいその陣形を破ったのか。（六）まことにアルジュナは常に偉大な師匠に気に入られている。それ故、師匠は戦わないで彼を通過させたのだ。敵を粉砕する者よ。（七）シンドゥ国王に戦いにおける安全を保証しながら、ドローナはアルジュナを通過させたのだ。見よ、何と私は不徳なことか。（八）もし前にシンドゥ国王が家に帰る許可を与えていたら、戦いにおいてこれほどの人的損失はなかったものを。（九）ジャヤドラタは生きたいと望み、家に帰ろうとしていた。ところがドローナが戦いにおける彼の安全を保証したので、私は愚かにも彼を引き止めた。（一〇）今日、

このろくでなしの私が見ている前で、チトラセーナをはじめとする私の弟たちはビーマセーナと戦って死んだ。（一一）」

カルナは言った。

「師匠を非難してはいけない。このバラモンは力の限り戦っている。武器に通じたドローナも、戦いにおいてパーンダヴァたちをうち破ることはできないと私は思う。（一二）というのは、白馬にひかれたアルジュナは彼を通過して〔わが軍に〕侵入したから。運命に示されたことが別様になることは決してないと私は考える。（一三）スヨーダナ王よ、それから我々が力の限り戦っている間に、シンドゥ国王は殺された。この世で運命のみが最高であると伝えられる。（一四）我々はあなたとともに、戦場で最高に努力したが、運命は我々の努力を無にし、我々を通り過ぎた。我々は常に詐術と勇武とによって行動したが……。（一五）運命に見離された人が何か仕事をする場合、彼がすることはことごとく運命により損なわれる。（一六）確信的な人は、なすべきことを躊躇せずになすべきである。成就は運命において確立する（ことの成否は運命に任せる）。（一七）パーラタよ、我々は詐術によりパーンダヴァたちを欺いた。また毒を用いて苦しめた。ラックの家において燃やし、また賭博によりうち破った。（一八）また王の政略に依存して、彼らを森に追放した。しかしあなたが努力してやったことは、運命によって台無しにされた。（一九）退却は死であると考えて、努力して戦いなさい。あなたと彼らが努力する時、運命は自ずから行くべき方に行くだろう。（二〇）叡智にもとづく善行が彼らにあったわけでは決し

てない。クルを支える勇士よ、あなたが知性を欠く愚行をしたわけでもない。(二一) 運命がすべての善行と愚行の根拠である。というのは、運命は専念して仕事を行ない、他のものたちが眠っている時も目覚めているから。(二二) あなたの軍隊は多数であった。また戦士たちは多かった。(二三) 少数の彼らにより、多数のあなた方の戦士が滅亡した。このようにして戦争が始まると思う。人的努力はそれにより無に帰した。(二四)」

サンジャヤは語った。――

王よ、このように彼らが色々と多くのことを話している間に、パーンダヴァの軍隊が戦場に認められた。(二五) それから王よ、あなたの軍と敵軍との間に、戦車兵と象兵が入り乱れた戦いが始まった。王よ、これもあなたの悪しき政策のせいだ。(二六)

(第百二十七章)

ユディシティラ、ドゥルヨーダナを射る

サンジャヤは語った。――

王よ、あなたの猛り立つ象兵や騎兵の群よりなる軍隊は、いたるところでパーンダヴァ軍に襲いかかって戦った。(一) パーンチャーラ軍とクル族はお互いに戦って、他の世界、広大なヤマ(閻魔)の世界に行く準備をした。(二) 勇士たちは勇士たちと交戦し、戦場において矢や

投槍や槍で貫き合い、速やかに相手をヤマの住処に送った。(三) 戦車兵たちは戦車兵とともに攻撃し合い、恐ろしい流血の激戦が繰り広げられた。(四) 大王よ、発情した象たちはお互いに攻撃し合い、いきり立って、牙で傷つけ合った。(五) 騎兵たちは投槍と槍と斧を持って騎兵たちと戦い、大きな名声を求めて、激戦においてお互いに傷つけ合った。(六) 強力な王よ、幾百の歩兵は、武器を手に持ち、勇武を示そうと常に努力して、お互いに傷つけ合った。(七) わが君よ、族姓(ゴートラ)、姓名、家系(クラ)を聞くことによって、はじめて我々はパーンチャーラ軍とクル軍とを見分けることができた(それほど混沌としていた)。(八) 戦士たちは恐れることなく戦場を動きまわり、矢や槍や斧でお互いに相手を他の世界に送った。(九) 王よ、幾千と放たれた彼らの矢により、そしてまた太陽が没したこともあって、十方は前のようには輝いていなかった。(一〇)

大王よ、パーンダヴァ軍がそのように戦っていた時、ドゥルヨーダナは恐れることなくその軍に突入した。(一一) 彼はシンドゥ国王が殺されたことでひどく苦しみ、死を覚悟して敵軍に入った。(一二) 戦車の音で大地を鳴り響かせ、震動させるかのように、あなたの息子はパーンダヴァの軍隊を攻撃した。(一三) バーラタよ、彼と彼らとの交戦は激しいもので、すべての兵たちの大殺戮をもたらすものであった。(一四) 真昼の太陽が光線で熱するように、あなたの息子も戦いの最中、矢の波によって熱するかのようだった。(一五) そのバラタ族の王を、パーンダヴァ軍は戦場で見つめることができなかった。彼らは敵に勝利する気力を失い、逃げ腰になった。(一六) パーンチャーラ軍はあなたの息子である偉大な弓取りに、先端

が輝く金の羽根の矢で射られて逃げまわった。パーンダヴァ軍は矢で苦しめられ、速やかに倒れた。(一七) 王よ、あなたの軍の他の人々は、戦場で、あなたの息子である王がしたような行為を誰もしなかった。(一八) パーンダヴァ軍は、戦いにおいてあなたの息子に粉砕された。蓮の花が咲く蓮池が象にすっかり粉砕されるように。(一九) 蓮池が風と太陽により水がなくなり、輝きが失せるように、パーンダヴァ軍は、あなたの息子の威光により輝きが失せた。(二〇)

バーラタよ、あなたの息子にパーンダヴァ軍が殺されるのを見て、ビーマセーナを先頭にして、パーンチャーラ軍が彼に襲いかかった。(二一) 彼は十本の矢でビーマセーナを、三本ずつの矢でマードリーの双子を、六本の矢でヴィラータとドルパダを、百本の矢でシカンディンを射た。(二二) そして、七十本の矢でドリシタデュムナを、七本の矢でダルマの息子を、多くの鋭い矢でケーカヤ軍とチェーディ軍を射た。(二三) 更に五本の矢でサートヴァタ(サーテイヤキ)を、三本ずつの矢でドラウパディーの息子たちを射た。そして戦場でガトートカチャをも射貫いて、獅子のように吼えた。(二四) そして彼は、戦場でその他の幾百の戦士たちと、象、馬、戦車を、恐ろしい矢で貫いた。怒った死神(アンタカ)が生類を殺すように。(二五)

わが君よ、彼が敵を殺していた時、パーンダヴァの長子(ユディシティラ)は、彼の金張りの大弓を二本の矢で三つに断ち切った。(二六) そしてユディシティラは、十本の鋭い矢を放って彼を射た。それらのすべての矢は彼の急所を貫通し、大地に入って砕けた。(二七) そこで喜んだ戦士たちはユディシティラを取り囲んだ。神々がヴリトラを殺したことで喜んでインドラ

を取り囲むように。(二八) わが君よ、それからユディシティラ王は戦場で最高に耐えがたい矢をあなたの息子に送った。彼はその矢にひどく傷ついて、最高の戦車に座り込んだ。(二九) するといたるところで、喜んだパーンチャーラの兵たちは、「王が殺された」と大声で高らかに叫んだ。王中の王よ。(三〇) わが君よ、そこで恐るべき矢の音が聞かれた。その時、ドローナが急いでその戦場に登場した。(三一) ドゥルヨーダナは喜んで元気を取りもどし、弓をしっかりと持って、「待て、待て」とパーンダヴァの王に言って襲いかかった。パーンチャーラ軍は王を守ろうと望んで、急いで反撃した。ドローナはクルの最上者を守ろうとして彼らを受け止めた。光線を放つ太陽が、激風に吹き上げられた雲を撃退するように。(三二―三三) それから王よ、戦いを求めて集結したあなたの軍と敵軍との間に、大殺戮をともなう大戦闘が行なわれた。(三四)

(第百二十八章)

凄まじい夜戦

ドリタラーシトラは言った。

「私の命令に背く息子ドゥルヨーダナに怒って(前述のように)告げてから、強力な師匠(ドローナ)はパーンダヴァ軍に突入した。(一) 偉大な射手である勇士ドローナが戦う決意をして突入した時、パーンダヴァたちはどのようにして彼を食い止めたか。(二) 偉大な師匠が戦いにおいて敵を殺している時、いかなる人々が彼の右の車輪を守ったか。いかなる人々が左の

車輪を守ったか。(三)すべての戦士のうちの最上者である彼は、その戦車の道で踊り、火のように猛り立っていたのに、どうして死ぬことになったか。(四)」

サンジャヤは語った。——

アルジュナと勇士サーティヤキは、夕方にシンドゥ国王を殺してから、王と合流して、ドローナに襲いかかった。(五)またユディシティラとビーマセーナも、それぞれ部隊を率いて、まさにドローナに襲いかかった。(六)また英邁なナクラ、無敵のサハデーヴァ、百の部隊を率いたドリシタデュムナ、ヴィラータとケーカヤ軍、マツヤ軍、シャールヴェーヤ軍も、ドローナに戦いを挑んだ。(七)王よ、またドリシタデュムナの父であるドルパダ王も、パーンチャーラ軍に守られて、まさにドローナに襲いかかった。(八)偉大な射手であるドラウパディーの息子たち、羅刹ガトートカチャも、軍隊を率いて、光輝に満ちたドローナに襲いかかった。(九)プラバドラカ軍とパーンチャーラ軍の六千人の戦士たちは、シカンディンを先頭に立てて、ドローナに襲いかかった。(一〇)また、人中の虎である他のパーンダヴァ軍の勇士たちも、こぞって、バラモンの雄牛であるドローナに向かって行った。(一一)バラタの雄牛よ、これらの勇士が進撃した時、臆病者の恐怖を増させる恐ろしい夜になった。(一二)王よ、その不吉で恐ろしい夜はその時、戦士たちを滅亡させ、象や馬や人の生命を終わらせた。(一三)その恐ろしい夜に、ジャッカルたちはいたるところで、口から火を吐いて吠えて、恐ろしい危険を告げ知らせた。(一四)梟たちも特にクル族の軍隊に認められた。それは恐ろし

い大きな危険を告げるものである。(一五)王中の王よ、それから軍隊の中で大きな音があがった。大きなベーリやムリダンガ（太鼓の種類）の音、象の咆哮、馬の嘶き、馬蹄の踏み鳴らす音によって、いたるところ喧噪が広がった。(一六―一七)大王よ、その黄昏時に、ドローナとすべてのスリンジャヤの間に、非常に恐ろしい戦闘が行なわれた。(一八)世界は闇と軍隊と一面に舞い上がるほこりにおおわれて、何も見分けられなくなった。(一九)地上のほこりには人と馬と象の血がこびりついて〔鎮まり〕、汚れにおおわれた我々はそれを見なかった。(二〇)夜中、諸々の武器が衝突し合って、山の竹林が燃えるようなパチパチという恐ろしい音が聞こえた。(二一)王よ、その夕暮に、敵も味方も闇におおわれて、まったく何も見分けられない時、すべては狂的になった。(二二)王中の王よ、地上のほこりは血によって鎮まった。そして黄金の鎧や装飾により闇は去った。(二三)バラタの雄牛よ、そのバラタ族の軍隊は宝玉や黄金に飾られ、夜に星々の輝く天空のようであった。(二四)〔その周囲では〕ジャッカルや鳶の鳴き声が響き、槍や旗に満ち、象の鳴き声に満ち（異本による）、恐ろしく、獅子吼や叫喚が響いていた。(二五)それから、大インドラの雷電の音のような、身の毛がよだつ、けたたましい大音声が、すべての方角をおおった。(二六)大王よ、そのバラタ族の軍隊は、夜中に、腕環や耳環や胸飾りや武器によって輝かされて見えた。(二七)そこでは象や戦車は黄金で飾られて、夜中、稲妻をともなう雲のように見えた。(二八)(二九―三三略)

恐ろしくも凄まじい夜戦が行なわれていた時、パーンダヴァとスリンジャヤの軍は猛り立ち、そろってドローナを攻撃した。(三四)王よ、人々はその偉大な人の正面から向かって行

ったが、ドローナは彼らすべてを退却させて、何人かをヤマ（閻魔）の住処に送った。（三五）

（第百二十九章）

ビーマの姿をしたシヴァが戦う

ドリタラーシトラは言った。

「無量の威力を持つ無敵のドローナが、我慢できず怒ってスリンジャヤ軍に突入した時、そなたたちはどのように考えたか。（一）また、私の命令に背く息子のドゥルヨーダナに、〔前述のように〕告げてから、限りなく高邁なドローナが敵中に入った時、アルジュナはどのように対処したか。（二）勇猛なシンドゥ国王とブーリシュラヴァスが殺された時、その威光に満ちた無敵の男はパーンチャーラ軍を攻撃した。（三）敵を苦しめる彼が突入した時、無敵の男（アルジュナ）はどのように考えたか。また、ドゥルヨーダナはその時に適したいかなることを考えたか。（四）その願いをかなえる勇猛な最高のバラモンに、いかなる人々が従ったか。そしてその勇士が戦っている間に、いかなる勇士たちが彼の後方を行ったか。彼が戦場で敵軍を殺している間に、いかなる人々が彼の前方で戦ったか。（五）すべてのパーンダヴァ軍はドローナの矢に苦しめられたことと私は思う。彼らは寒季にふるえている痩せた牛のようにふるえたろう。（六）その敵を粉砕する勇士、人中の雄牛は、パーンチャーラ軍に入って、どのようにして死ぬことになったのか。（七）その夜、集結したすべての兵たち、集まった偉大な戦

士たちが、それぞれかき乱されていた時、そなたたちにはいかなる知者たちがいたか。（八）わが軍の戦士たちは、戦いにおいて殺され、食い止められ、うち破られ、戦車を破壊されたとそなたは告げた。（九）サンジャヤよ、そこでその夜に、退くことのないパーンダヴァ軍を、どのようにしてクル軍から明瞭に区別したか。（一〇）」

サンジャヤは語った。——

王よ、その非常に恐ろしい夜戦が行なわれていた時、夜中、パーンダヴァたちは兵士を率いてドローナを攻撃した。（一一）それからドローナはケーカヤ軍と、ドリシタデュムナの息子たちを、高速の矢によって死神の世界に送った。（一二）バラタ族の王よ、彼は彼の正面にいた勇士たちをすべて他の世界に送った。（一三）王よ、偉大な戦士である勇士ドローナが〔敵軍を〕粉砕していた時、栄光あるシビが怒って彼を攻撃した。（一四）そのパーンダヴァ軍の勇士が襲来するのを見て、ドローナはすべて鉄製の十本の矢で射た。（一五）シビは三十本の鋭い矢を彼に射返した。そして笑って、彼の御者を一矢で射落とした。（一六）ドローナは偉大なシビの馬たちと御者を殺してから、冑をかぶった彼の頭を胴体から切り離した。（一七）

カリンガ国王の息子は、前に父を殺されたことで怒り、戦場でカリンガ軍とともにビーマセーナを攻撃した。（一八）彼は五本の矢でビーマを射て、更に七本の矢で射た。そして三本の矢でヴィショーカ（ビーマの御者）を撃ち、一矢で軍旗を破壊した。（一九）狼腹（ビーマ）はそのいきり

立つカリンガの勇士に対して怒り、自分の戦車から相手の戦車に飛び移り、拳によって相手を打ち殺した。(二〇) 非常に強力なビーマに拳で打ち殺された彼のすべての骨は、ばらばらになって激しく落下した。(二一) 彼の兄弟である勇士たちとカルナはそれに我慢できず、毒蛇のような鉄矢でビーマセーナを撃った。(二二)

それからビーマは敵の戦車を捨てて、ドゥルヴァ(カリンガの王子の一人)の戦車に向かって行った。ドゥルヴァは絶えず矢を放ったが、ビーマは彼を拳で打ちのめした。彼はこのように強力なビーマに殺されて落下した。(二三)

大王よ、強力なビーマセーナはドゥルヴァを殺してから、ジャヤラータの戦車に達して、獅子のように何度も吼えた。(二四) 彼は吼えながら、左手でジャヤラータを引き寄せ、カルナの前にいる相手を拳で打ち殺した。(二五) カルナはビーマに黄金の槍を投げた。ところがビーマは笑ってそれをつかんだ。(二六) そして無敵な狼腹は、戦場でそれをカルナに投げ返した。シャクニは油にひたした矢により空中でそれを断ち切った。(二七)

王よ、それからあなたの息子たちはビーマの戦車に近づき、矢の大雨により狼腹をおおった。(二八) それからビーマは戦場で笑うかのように、ドゥルマダ(クルの百王子の一人)の御者と馬たちを、矢によってヤマの住処に送った。しかしドゥルマダはドゥシュカルナ(百王子の一人)の戦車に乗り移った。(二九) 敵を苦しめる二人の兄弟は一つ戦車に乗り、戦いの最前線において、ビーマに襲いかかった。水の主(ヴァルナ)とミトラの両神が最高の悪魔ターラカを襲うように。(三〇) かくてあなたの息子であるドゥルマダとドゥシュカルナは一つ戦車に乗って、矢でビーマを射た。(三一) それから、カルナ、ドローナの息子、ドゥルヨーダナ、クリパ、ソーマダッタ、バーフリーカたちが見ている前で、敵を制するビーマは、勇士ドゥルマダとドゥシュカルナの戦車を足で蹴って、地面にめり込ませた。(三二―三三) それから怒ったビーマは、あなたの強力な息子である勇士ドゥシュカルナとドゥルマダを拳で打ち、足で踏みつぶした。(三四) 兵たちが「ああ、ああ」という声をあげた時、諸王はビーマを見て言った。

「あれはビーマの姿をしたルドラ(シヴァ)がドゥルヨーダナ軍の中で戦っているのだ。(三五)」

バーラタよ、すべての王たちはこのように言って、度を失い、乗物をかりたてて逃走した。〔みな散り散りに逃げ、〕二人でいっしょに逃げなかった。(三六)

その宵にクル軍がひどくかき乱された時、強力な狼腹は王中の雄牛たちにこよなく称讃された。その開花した蓮花のような眼をした強力な男は、ユディシティラ王に敬意を表した。(三七) そして双子(ナクラとサハデーヴァ)、ドルパダ、ヴィラータ、ケーカヤ軍、ユディシティラたちは最高に喜んだ。アンダカが殺された時、神々がシヴァを讃えたように、彼らは狼腹をこの上なく讃えた。(三八) それから、ヴァルナの息子たちのようなあなたの息子たちは怒って、戦車兵と歩兵と象兵とともに、戦いを望んで狼腹をすっかり取り囲んだ。(三九) それからその非常に恐ろしい宵に、偉大な人々の間に、驚異的な戦いが行なわれた。その最高の王たちの戦いは、闇の群に包まれ、恐怖をもたらし、こよなく凄まじく、鳶や狼や禿鷹を喜ばせるものであった。(四〇)

(第百三十章)

アシュヴァッターマンとガトートカチャの激戦

サンジャヤは語った。――

ソーマダッタは息子（ブーリシュラヴァス）が断食して死のうとしているところをサーティヤキに殺された時、非常に怒って、サーティヤキに告げた。（一）

「かつて偉大な神々は王族の法〔クシャトラダルマ〕（武士道）を定めた。サーティヤキよ、お前はどうしてそれを捨てて、盗賊〔ダスユ〕の法に専念するのか。（二）退却する者、悲嘆に暮れた者、武器を捨てた者、命乞いする者。王族の法に専念する知者が、どうして戦場でそのような者を攻撃するであろうか。（三）ヴリシュニ族の中では、二人の者が戦いにおいて偉大な戦士であるとして名高い。すなわち、勇士プラデュムナとお前である。サーティヤキよ。（四）アルジュナに両腕を断たれ、断食して死のうとしている者に対して、お前はどうしてあのような残酷なことをしたのか。（五）サーティヤキよ、私は二人の息子、好ましいこと、善行にかけて誓う。もしこの夜が過ぎないうちに、お前がアルジュナに守られていない時、勇士であると自慢しているお前を、息子や弟たちとともに殺すことができなければ、私は恐ろしい地獄に堕ちるであろう。ヴリシュニ族の面汚しめ。（六―七）」

強力なソーマダッタは怒ってこのように言うと、高らかに法螺貝を吹き、獅子吼をした。（八）すると蓮弁の眼をし、獅子のような歯をした強力なサーティヤキはひどく怒り、ソーマダッタに告げた。（九）

「王よ、あなたの息子で、偉大な戦士である勇士ブーリシュラヴァスは殺された。兄の災難に苦しむシャラも殺された。（一〇）今日あなたをも、息子や獣（馬）や親族とともに殺すであろう。今、戦場で努力して立っていなさい。特にあなたはクルの勇士であるから。（一一）ユディシティラ王には気前のよさ（布施）、自制、清さ、無傷害（不殺生）、廉恥、堅固さ、忍耐、すべての不滅の（美質）が常に存する。（一二）あなたはすでに、太鼓を旗標とする彼の威光により殺されている。あなたはカルナやシャクニとともに、戦いにおいて滅びるであろう。（一三）私はクリシュナの足と慈善の行為にかけて誓う。もし私が怒って邪悪なあなたと息子を戦場において殺さなければ、あなたがそこを離れて脱出するならば、あなたは〔ずっと私から〕解放されるであろう（すなわち、絶対にこの戦いで殺すということ）。（一四）」

二人の最高の男はお互いにこのように言うと、怒りで赤い眼をして、矢の応酬を開始した。（一五）

それからドゥルヨーダナは、千頭の象と一万の戦車によってソーマダッタを取り巻いて布陣した。（一六）すべての戦士のうちの最上者であるシャクニも非常に怒った。彼はあなたの義理の弟であるが、まだ若く、強力で、金剛のように堅固であった。彼も息子や孫たちや、インドラのように勇猛な兄弟たちに囲まれていた。（一七）英邁な彼には、十万の極上の馬たちがいた。彼は勇士ソーマダッタをすっかり守っていた。（一八）ソーマダッタは強力な人々に守られて、サーティヤキを矢でおおった。彼が真っ直ぐの矢でおおわれているのを見て、

ドリシタデュムナは怒って、大弓をつかんでそちらに向かった。(一九) 王よ、軍隊の群が相互に衝突した時、激風に煽られた海の音のような音が響いた。(二〇) ソーマダッタは九本の矢でサーティヤキを射た。サーティヤキは十本の矢でそのクルの雄牛を射た。(二一) ソーマダッタはその戦いにおいて、堅固な弓取りである勇士に手ひどく射貫かれ、戦車の座席に座り込んで失神した。(二二) 勇士ソーマダッタが気絶したのを見て、御者は急いでその勇士を戦場から運び去った。(二三)

彼がユユダーナ(サーティヤキ)の矢に苦しみ失神したのを見て、戦いの最前線において、ドローナの息子(アシュヴァッターマン)は怒ってサーティヤキに襲いかかった。(二四) 彼がサーティヤキの戦車に対して襲いかかったのを見て、ビーマセーナの息子(ガトートカチャ)は怒り、その敵を制止した。(二五) その戦車は黒鉄製で恐ろしく、熊の皮でおおわれ、巨大で、馬でなく象でもなく、象のような動物にひかれていた。(二六) それは八つの車輪をそなえ、眼を見開き、鳴き声をあげ、そびえる嘴を持つ禿鷲の王という輝かしい旗標をそなえていた。(二七) それは血に濡れた旗をつけ、腸の輪により飾られていた。ビーマの息子はその八つの車輪をそなえた大きな戦車に乗り、槍や槌や岩石や樹木を持つ、恐ろしい姿の羅刹の軍隊に囲まれていた。(二八―二九) 宇宙紀(ユガ)の終末に杖を手にした死神(アンタカ)のような、弓を振り上げた彼を見て、王たちは動揺した。(三〇) あなたの息子の軍隊は、恐怖にかられて動揺した。ガンガー(ガンジス)が風に乱されて渦巻き、波立つように。(三一) ガトートカチャが発する獅子吼におびえて、象たちは尿を流し、人々はひどく動揺した。(三二) それから、夕暮になると力が増大する羅刹たちが地上

に放った岩石の雨が一面に降った。(三三) そして鉄製の円盤、石弓、種々の投槍、槍、百殺(シャタグニー)棒、矛が絶え間なく落下した。(三四) その非常に恐ろしく凄まじい戦いを見て、あなたの息子、カルナ、及びその他の王たちは動揺し、諸方に逃げ去った。(三五) 武器の力が自慢の誇り高いドローナの息子だけが恐れなかった。そして彼は矢によりガトートカチャの作り出した幻術を粉砕した。(三六) 幻術が破られた時、ガトートカチャは怒り、恐ろしい矢を放った。それらの矢はアシュヴァッターマンの体に入った。(三七) 蛇たちが怒りにかられて、急いで蟻塚に入るように。石で研がれ、黄金の羽根のついたそれらの矢は、ドローナの息子を貫いて血まみれになって速やかに大地に入った。(三八) 一方、栄光あるアシュヴァッターマンは怒り、手練の早業を発揮して、十本の矢で猛り立つガトートカチャを射貫いた。(三九) ガトートカチャはドローナの息子により諸々の急所をしたたか射られてひどく苦しんだが、十万の幅(や)のある車輪(円盤)をつかんだ。(四〇) その車輪は剃刀のような縁をし、朝日のように輝き、宝玉や金剛で飾られていた。ビーマセーナの息子は殺そうとしてそれをアシュヴァッターマンに向けて投げた。(四一) それは非常な高速で飛んだが、ドローナの息子の矢にはじかれて、不運な人の希望のように、空しく地面に落ちた。(四二) それからガトートカチャは、車輪が落とされたのを見て、ドローナの息子を矢でおおった。ラーフ(日食、月食を起こす悪魔)が太陽をおおうように。(四三)

墨(アンジャナ)(アンチモニー)の堆積のような、栄光あるガトートカチャの息子は、進んで行くドローナの息子を食い止めた。山の王が風を遮るように。(四四) ビーマセーナの孫であるアンジャナパ

ルヴァンによって矢で苦しめられ、アシュヴァッターマンは雲によって雨で苦しめられるメール山のように見えた。(四五) しかしルドラ(シヴァ)かウペーンドラ(クリシュナ)のように勇猛なアシュヴァッターマンは動揺することなく、アンジャナパルヴァンの旗を一矢により断ち切った。(四六) そして二本の矢で相手の戦車の御者を、三本の矢でトリヴェーヌカ(車軸と軛を連結する三叉の木材)を断った。そして一矢により相手の弓を、四本の矢により四頭の馬を断った。(四七) それから彼は、戦車を失った相手の手にある、振り上げられた黄金の滴でおおわれた刀を、非常に鋭い矢で両断した。(四八) 王よ、ガトートカチャの息子は速やかに黄金で飾られた棍棒を振りまわして投げた。しかしそれは、ドローナの息子により矢で射られて落下した。(四九) それからアンジャナパルヴァンは、黒雲のように吼えて空中に飛び上がり、空から樹木の雨を降らせた。(五〇) ドローナの息子は天空にいて幻術を用いるガトートカチャの息子を矢で貫いた。太陽が光線で雲を貫くように。(五一) アンジャナパルヴァンは再び降下して、黄金で飾られた戦車に乗った。それは地面に(異本による) うずたかく積み上げられた、黒光りのする墨の山のようであった。(五二) ドローナの息子はその鉄製の鎧を着たビーマの孫アンジャナパルヴァンを殺した。マヘーシュヴァラ(シヴァ)がアンダカ(阿修羅の名)を殺したように。(五三)

強力な息子がアシュヴァッターマンに殺されたのを見て、ガトートカチャは怒りから腕環を揺すって、彼に近づいた。(五四) 勇士アシュヴァッターマンは、燃え上がる森火事のようにパーンダヴァ軍を燃やしていた。ガトートカチャは動揺することなく彼に告げた。(五五)

「ドローナの息子よ、待て、待て。生きて私から逃れることはできないぞ。私は今日、アグ

ニの息子(スカンダ)がクラウンチャ山を断ったようにお前を殺すであろう。(五六)」

アシュヴァッターマンは言った。

「わが子よ、去れ。神のように勇猛な者よ、他の者たちと戦え。ヒディンバーの息子よ、息子が父を攻撃することは適切でない(彼にとってビーマの息子は自分の息子同様である)から。(五七) ヒディンバーの息子よ、確かに私にはお前に対する怒りはない。しかし生物が怒りを抱いたら、自分自身をも殺すぞ。(五八)」

サンジャヤは語った。――

ビーマセーナの息子はそれを聞いて、息子の死に悲しみ、怒りで赤い眼をして、憤慨してアシュヴァッターマンに言った。(五九)

「ドローナの息子よ、どうして私が普通の人のように戦場で臆病風を吹かすか。私はビーマにより、クル族の有力な家系に生まれた。(六〇) 私は戦いにおいて退くことのないパーンダヴァたちの息子で、羅刹の王である。力にかけては十頭者(ラーヴァナ)に等しい。(六一) ドローナの息子よ、待て、待て。生きて私から逃れることはできないぞ。私は今日、戦場でお前の戦いを望む気持をなくさせてやろう。(六二)」

非常に強力な羅刹はそう言うと、怒りで赤い眼をして、獅子が象王を襲うように、いきり立ってドローナの息子に襲いかかった。(六三) 戦士のうちの雄牛であるドローナの息子に対し、ガトートカチャは戦車の車軸ほどの矢を、雲がどしゃ降りの雨を降らせるように浴びせ

た。(六四) しかしドローナの息子は、矢の雨が届く前に矢によってそれらを断ち切った。かくて空中に、諸々の矢によるもう一つの戦いが行なわれたかのようだった。(六五) その宵に、武器の衝突より生じた火花により、空は蛍によりきらめくように輝いた。(六六) 腕自慢のドローナの息子により幻術(マーヤー)が封じられたのを見て、ガトートカチャは再び姿を消して幻力を発揮した。(六七) 彼は樹々に満ちた峰々が高くそびえる山になり、槍、投槍、刀、杵を滝のように大量に流出した。(六八) 多くの武器の群が落下する、その墨(アンジャナ)の堆積のような山を見ても、ドローナの息子は動揺しなかった。(六九) それからドローナの息子は笑うかのように、金剛(ヴァジュラ)の武器(アストラ)を呼び起こした。その山の王は、その武器に撃たれて速やかに滅した。(七〇)

それから非常に恐ろしいガトートカチャは虹をともなう天空の黒雲となって、戦場においてドローナの息子を岩石の雨でおおった。(七一) すると武器を知る人々の最上者であるドローナの息子は、風神の武器(ヴァーヤヴィヤ)をつがえて、隆起した黒雲を粉砕した。(七二) そして最高の人であるドローナの息子は、矢の群ですべての方角をおおい、十万の戦士を殺した。(七三) 彼は再び戦車でやって来るガトートカチャを認めた。ガトートカチャは動揺することなく、弓を引き絞り、多数の羅刹により囲まれていた。(七四) その羅刹たちは、獅子か虎に似て、発情した象のように勇壮であり、象や戦車や馬の背に乗っていた。(七五) 彼らは大きな口と頭と首をして、ヒディンバーの息子に従っていた。彼らはパウラスティヤやヤートゥダーナ〔という羅刹の種類〕に属し、暗黒色で、恐ろしく勇猛であった。(七六) その勇士たちは種々の武器を持ち、種々の鎧や装飾をつけていた。強力で、恐ろしい叫びをあげ、怒り

で眼を見開いていた。(七七) 戦場でそれらの戦いに酔う羅刹が近づいた時、あなたの息子は意気消沈した。ドローナの息子は彼を見て告げた。(七八)

「ドゥルヨーダナよ、ちょっと待ちなさい。あなたは動揺する必要はない。勇士である弟たちや、インドラのように勇猛な王たちとともにいるではないか。(七九) 彼らは敵どもを殺すであろう。あなたが敗れることはない。私はあなたに真実に約束する。軍隊を励ましなさい。(八〇)」

ドゥルヨーダナは言った。

「〔あなたの言ったことは〕不思議ではないと私は思う。あなたの心は広大であるから。アシュヴァッターマンよ、あなたは我々に最高に献身的であるから。(八一)」

サンジャヤは語った。——

彼はアシュヴァッターマンにそう告げてから、シャクニに言った。

「あなたは戦いを飾る十万の戦車兵と六万の象兵に囲まれてアルジュナを攻撃せよ。カルナ、ヴリシャセーナ、クリパ、ニーラ、北部地方の軍、クリタヴァルマン、プルミトラ、シュルタールパナ(テクスト疑問)、ドゥフシャーサナ、ニクンバ、クンダベーディン、ウルクラマ、プランジャヤ、サンジャヤ、ドリダラタ、パターキン、ヘーマパンカジャ、シャリヤ、アルニ、インドラセーナ、サンジャヤ、ヴィジャヤ、ジャヤ、カマラークシャ、プル、クラーティン、ジャヤヴァルマン、スダルシャナ。以上の人々と、六万の歩兵があなたの後に従うであろう。(八二―八六)

叔父よ、ビーマと双子とダルマ王を殺せ。神々の王インドラが阿修羅たちを殺すように。私の勝利の希望はあなたにかかっている。(八七)クンティーの息子たちはドローナの息子により、矢で射貫かれ、ひどく身体を傷つけられている。叔父よ、スカンダが阿修羅たちを殺すように、彼らを殺せ。(八八)」

あなたの息子にこのように言われて、シャクニはあなたの息子たちを喜ばせ、パーンダヴァたちを燃やそうとして出撃した。(八九)

その間、その夜にドローナの息子と羅刹との非常に激しい戦いが行なわれていた。それはインドラとプラフラーダの戦いのようであった。(九〇)ガトートカチャは怒って、毒か火のような強力な十本の矢でアシュヴァッターマンの胸を射た。(九一)相手はビーマの息子が放った矢でひどく撃たれて、戦車の中で、風に揺られる樹木のようにふるえた。(九二)ガトートカチャは更に、ドローナの息子の手中にある輝きに満ちた弓を、速やかに矢で断ち切った。(九三)それからドローナの息子は、強靭な他の大弓をとり、雲が大雨を降らすように、鋭い矢を注いだ。(九四)バーラタよ、それからアシュヴァッターマンは、敵を滅ぼす金の羽根のついた矢を羅刹たちに向けて放った。(九五)広い胸をした羅刹たちの群は彼の矢で苦しめられ、獅子たちに苦しむ発情した象の群のようであった。(九六)強力な彼は矢で羅刹たちを粉砕して燃やした。尊い火神が宇宙紀(ユガ)の終末に諸生物を燃やすように。(九七)彼は矢で羅刹の軍団を燃やしてからこよなく輝いた。かつて天上において、マヘーシュヴァラ(シヴァ)神が(悪魔たちの)三都(トリプラ)を燃やして輝いたように。(九八)宇宙紀の終末に強力なヴァス(神火)が一切

の生類を燃やして輝くように、最高の勝利者であるドローナの息子は、あなたの敵たちを燃やして輝いた。(九九)

バーラタよ、パーンダヴァ方の幾千の王のうちで、誰一人として戦場でドローナの息子を直視することができなかった。強力な羅刹王である勇士ガトートカチャを除いて。(一〇〇)バラタの最上者よ、彼は怒りにより目尻を赤くし、手の平を打ち合わせ、唇を噛み、いきり立って自分の御者に告げた。

「ドローナの息子のもとに私を運べ。(一〇一)」

敵を殺す彼は再び、勝利の旗を持つ恐ろしい姿のドローナの息子と一騎打ちをするために進み出た。(一〇二)それから羅刹は怒って、ルドラ(シヴァ)の作った、八つの円盤のついた、非常に恐ろしい雷電(アシャニー)(ミサイルの種類)をドローナの息子に投じた。(一〇三)ドローナの息子は戦車に弓を置き、飛び下りて、それをつかんで、それを相手に投げ返した。相手も戦車から飛び下りた。(一〇四)その強く輝く非常に恐ろしい雷電は、馬や御者や旗もろとも戦車を灰にして、大地を破って入り込んだ。(一〇五)一切の生類はそのドローナの息子の行為を見て称讃した。彼は飛び下りて、シャンカラ(シヴァ)の作った恐ろしい雷電をつかんだのであった。(一〇六)

王よ、それからビーマの息子はドリシタデュムナの戦車に行き、再び鋭い矢をドローナの息子の広い胸に向けて放った。(一〇七)ドリシタデュムナも動揺することなく、金の羽根のついた、毒蛇のような矢を、ドローナの息子の胸に向けて放った。(一〇八)それからドローナの息子は、幾千の鉄矢を両者に向けて放った。両者は火焔のような矢で彼の矢を破壊した。

（二〇九）二人の人中の獅子とドローナの息子との戦いは非常に激しく、戦士たちに喜びを生じさせるものであった。バラタの雄牛よ。（二一〇）それから、千の戦車兵、三百の象兵、六千の騎兵を率いて、ビーマがその場に来た。（二一一）しかし、汚れなき行為の徳性あるドローナの息子は、ビーマの息子である羅刹と従者を率いたドリシタデュムナとに対して戦った。（二一二）そこでドローナの息子は最高に驚異的な勇武を発揮した。パーラタよ、それは一切の生類において、他の者にはなしがたいものであった。（二一三）彼はほんの一瞬の間に、ビーマセーナ、ガトートカチャ、ドリシタデュムナ、双子、ダルマの息子、ヴィジャヤ（アルジュナ）、アチュタ（クリシュナ）の見ている前で馬と御者と戦車と象もろとも羅刹の軍団を鋭い矢で殺した。（二一四－二一五）象たちは高速の鉄矢に手ひどく撃たれ、二つの峰のある山のように大地に倒れた。（二一六）動きまわる蛇のような、あちこち動きまわる切られた象の鼻に満ちて大地は輝いた。（二一七）投げ出された黄金の棒や王者の傘により大地は輝いていた。宇宙紀（ユガ）の終末に、諸々の月と太陽が昇り、惑星（グラハ）に満ちた天空のように。（二一八）ドローナの息子はそこにおびただしい血の激流がある川を現出させた。その川には高くそびえる旗という蛙と、太鼓という大きい亀がいて、それは傘というハンサ鳥の列をそなえ、泡のような払子（ほっす）（ヤクの尾）に囲まれている。（二一九）そこには鸛（カンカ）と禿鷲という大きな鰐がおり、多くの武器という魚に満ちている。戦車は大きな土塁を凌駕し（に似ている）、旗という美しい樹を有する。（二二〇）それは矢という魚がいて非常に恐ろしく、投槍と槍という非常に恐ろしいドゥンドゥバ（蛇の種類）がいる。髄と肉という大きな泥濘があり、胴体は筏（いかだ）を凌駕する（筏に似ている）。（二二一）それは毛髪という藻で斑（まだら）であり、臆病者たちを怖気づかせ、巨象や馬や兵士の身体を消滅させる。（二二二）その川は戦士たちの苦しむ声が響き、血の波に満ちている。（二二三）その川はこの上なく恐ろしいヤマ（閻魔）の住処という海に向かって流れる。

ドローナの息子は羅刹たちを殺してから、矢でガトートカチャを苦しめた。（二二四）強力なドローナの息子は再び激怒して、鉄矢の群でアルジュナと狼腹とドリシタデュムナを射貫いた。（二二五）それから強力な彼は、戦場でスラタというドルパダの息子を殺し、更にシュルタンジャヤというスラタの弟を殺した。（二二六）それから彼は、バラーニーカ、ジャヤーニーカ、ジャヤーシュヴァを殺した。王中の王よ、そしてドローナの息子は、シュルターフヴァヤをヤマの住処に送った。（二二七）そして黄金で飾られた美しい羽根のついた、他の三本の鋭い矢により、彼は強力なシャトルジャヤをシャクラ（インドラ）の世界（天界）に送った。（二二八）それから彼はその戦いで、プリシャドラと腕自慢のチャンドラデーヴァを殺し、クンティボージャの十人の息子を十本の矢で殺した。（二二九）

アシュヴァッターマンは非常に怒り、恐ろしい真っ直ぐ飛ぶ最高の矢をつがえ、弓を耳まで引き絞って、ヤマの杖のような恐るべきその矢を、速やかにガトートカチャめがけて放った。（二三〇）王よ、その羽根のついた強力な矢は、その羅刹の心臓を貫通して、速やかに大地に入った。（二三一）王中の王よ、撃たれて彼が倒れたのを知って、勇士ドリシタデュムナは、ドローナの息子のそばからその最高の戦士を（異本による）遠ざけた。（二三二）王よ、同様にユディシティラの軍の戦士たちは退却した。勇猛なドローナの息子は敵軍をうち破り、雄叫びをあ

げた。バーラタよ、一切の生類とあなたの息子たちは彼を讃えた。(二三三) かくて夜行の者(羅刹)たちは幾百の矢で身体を切り裂かれて、いたるところで死んで倒れていた。山頂のような彼らによって、大地は通行不能になり、こよなく恐ろしかった。(二三四) シッダ、ガンダルヴァ(半神の種類)、ピシャーチャ鬼の群、竜、金翅鳥(スパルナ)たち、祖霊、鴉、羅刹の群、鬼霊(ブータ)の群、天女(アプサラス)、神々は、ドローナの息子を讃えた。(二三五)

(第百三十一章)

ビーマ、バーフリーカを殺す

サンジャヤは語った。——

ドルパダの息子たち、クンティボージャの息子たち、羅刹たちが、幾千とドローナの息子に殺されたのを見て、ユディシティラとビーマセーナとドリシタデュムナとユユダーナ(サーティヤキ)は、奮起して、戦う決意をした。(一―二) ソーマダッタは戦場でサーティヤキを見て再び怒り、矢の大雨によりいたるところ彼をおおった。(三) それから、お互いに勝利を望むあなたの軍と敵軍との間に、こよなく恐怖を増大させる凄まじい戦いが行なわれた。(四) ビーマはサーティヤキのために、十本の矢でクルの勇士を射た。ソーマダッタも百本の矢をその勇士に射返した。(五) ソーマダッタはナフシャの息子ヤヤーティのように、すべての美質に富んでいたが、老齢で、息子の不幸に圧倒されていた。サーティヤキは怒り、金剛杵(ヴァジュラ)のような破壊力を持つ十本の鋭い矢で彼を射貫いた。そして力の限り彼を撃ってから、更に七本の矢

で彼を射貫いた。(六―七) それからビーマセーナは、サーティヤキのために、堅固で恐ろしい九本の鉄棒をソーマダッタの頭に向けて放った。(八) サーティヤキも怒って、羽根のついた火のような鋭い最高の矢を、ソーマダッタの胸に向けて放った。(九) 恐ろしい鉄棒と矢は、ソーマダッタの身体に同時に落下した。その勇士は倒れた。(一〇) バーフリーカは息子が倒れた時、雲が雨季の雨(または、「終末の雨」)を降らせるように、矢の雨を放ちながら襲いかかった。(一一) そこでビーマはサーティヤキのために、戦いの最前線において、九本の矢で偉大なバーフリーカを苦しめて射貫いた。(一二) プラティーパの息子である勇士(バーフリーカ)は怒り、ビーマの胸を槍で貫いた。インドラが雷電で(山を貫く)ように。(一三) ビーマはそのように撃たれてふるえ、気を失った。しかし強力な彼は気を取り直すと、相手に向けて棍棒を投げた。(一四) ビーマに投げられたその棍棒はバーフリーカの頭を奪った。彼は金剛杵(ヴァジュラ)に撃たれた山の王のように大地に倒れた。(一五)

人中の雄牛である勇士バーフリーカが殺された時、ダシャラタの息子(ラーマ)に等しい、あなたの十人の息子はビーマを攻撃した。(一六) ビーマは十本の矢で十人のあなたの息子を殺してから、カルナの愛しい息子のヴリシャセーナに矢を浴びせた。(一七) それから、ヴリシャラタというカルナの有名な弟は、ビーマを矢で射た。強力なビーマは彼をも殺した。(一八) バーラタよ、それから勇士ビーマはあなたの義弟たちのうちの七名を鉄矢で殺してから、シャタチャンドラを殺した。(一九) 勇士シャタチャンドラが殺されたことに我慢できず、シャクニの弟である勇士ガジャークシャとシャラバとヴィブ(異本は、その他に、スバガとバーヌダッタをあげる)は襲いか

かり、鋭い矢でビーマセーナを射た。(二〇) 非常に強力なビーマは、雄牛が激しい雨に打たれるようにそれらの矢で撃たれたが、五本の矢で五名の戦士たちを殺した。彼ら勇士たちが殺されたのを見て、最高の王たちは動揺した。(二一)

それからユディシティラは怒り、ドローナとあなたの息子たちが見ている前で、あなたの軍隊を粉砕した。非の打ち所のない人よ。(二二) ユディシティラはその戦いにおいて、アンバシタとマーラヴァの勇士たち、トリガルタとシビの集団（ガナ）を死神の世界に送った。(二三) そして王は、アビーシャーハ、シューラセーナ、バーフリーカとヴァサーティカの軍を制圧して、大地を血まみれにした。(二四) それからユディシティラは、ヤウデーヤ、アーラッタ、ラージャニヤ（テクスト疑問）、マドラの勇猛な集団を、戦いにおいて矢で死神の世界に送った。(二五) 「殺せ、連行しろ、捕えよ、貫け、切れ」というような激しい声がユディシティラの戦車の近くであがった。(二六) ドローナは自軍を敗走させているユディシティラを見て、あなたの息子にうながされ、矢を彼に浴びせた。(二七) ドローナも最高に怒り、ヴァーユ（風神）の武器で王を射貫いた。相手は自分の武器によりドローナの神的な武器を破壊した。(二八) その武器が破壊された時、ドローナは最高に怒り、ユディシティラを殺そうとして、ヴァルナ（水天）、ヤマ（閻魔）、アグニ（火天）、トゥヴァシトリ（工巧神）、サヴィトリ（太陽神）の武器をユディシティラに投じた。(二九) 強力なダルマの息子は恐れることなく、ドローナが放った、あるいは放ちつつある諸々の武器を自分の武器で破壊した。(三〇) バーラタよ、ドローナは自分の誓いを実現しようと望み、あなたの息子によかれと願い、ダルマの息子を殺そうとして、インドラの武器とプラジャーパティ（造物主）の武器を現出した。(三一) 象か獅子のように歩み、広い胸と大きくて赤い眼をした、大威光を有するクル族の主（ユディシティラ）は、他の大インドラの武器を現出した。彼はそれでドローナの二つの武器を破壊した。(三二) 諸々の武器が破壊された時、ドローナは怒り、ユディシティラを殺そうと望み、ブラフマ・アストラ（梵天の武器）を呼び起こした。(三三) それから、恐ろしい闇におおわれて、私は何も見分けられなかった。王よ、一切の生類は最高の恐怖に達した。(三四) クンティーの息子ユディシティラは、ブラフマ・アストラが準備されたのを見て、自分のブラフマ・アストラでその武器を防止した。(三五) 主立った戦士たちは、すべての武器に通じた偉大な射手である、人中の雄牛ドローナとユディシティラを讃えた。(三六)

パーラタよ、それからドローナはユディシティラを捨て置いて、怒りで眼を赤くして、風神の武器でドルパダの軍を粉砕した。(三七) パーンチャーラ軍はドローナに殺されつつ、恐怖のあまり、ビーマセーナと偉大なアルジュナが見ている前で逃げ出した。(三八) それからアルジュナとビーマは急いで引き返し、戦車の大群であなたの軍を取り囲んだ。(三九) アルジュナはドローナの右脇に、狼腹（ビーマ）は左脇に、矢の大群を降り注いだ。(四〇) 大王よ、その時スリンジャヤ、強力なパーンチャーラ、マツヤ、サートヴァタの人々がその両者に従っていた。(四一) バラタ族の軍はアルジュナに殺され続けた。大王よ、ドローナとあなたの息子自身に止められても、その時、戦士たちは引き止められなかった。(四二)　（第百三十二章）

カルナとクリパの論争

サンジャヤは語った。――

猛り立つパーンダヴァの大軍を見て、それが対抗しがたいと考え、ドゥルヨーダナはカルナに告げた。（一）

「友を愛する者よ、今や友たちを助けるべき時が来た。勇士カルナよ、戦場ですべての戦士たちを救ってくれ。（二）彼らは息を吐く蛇のように怒ったパーンチャーラ、マツヤ、カイケーヤ、パーンダヴァの勇士たちにすっかり囲まれている。（三）あそこで勝ち誇るパーンダヴァたちとインドラのようなパーンチャーラの多数の戦士団は、喜んで叫んでいる。（四）」

カルナは言った。

「もしインドラがアルジュナを救うために来たとしても、私は速やかに彼をうち破ってから、アルジュナを殺す。（五）必ずその通りにすると私はあなたに誓う。バーラタよ、安心しなさい。私はパーンドゥの息子たちと、集結したパーンチャーラ軍を殺すであろう。（六）私はあなたに勝利を約束する。火神の息子（スカンダ）がインドラに約束したように。（七）すべてのパーンダヴァのうちでアルジュナが最も強力である。シャクラ（インドラ）が作った、的を外すことのない（必殺の）槍を彼に向けて放つであろう。（八）その偉大な射手が殺されれば、彼の兄弟たちはあなたの支配下に帰すか、あるいは再び森に行くであろう。誇りを与える人よ。（九）クルの王よ、私が生きている間は、決して嘆いてはいけない。私は戦場で、集結したすべてのパーンダヴァたちに勝利するであろう。（一〇）集結したパーンチャーラ、ケーカヤ、ヴリシュニの連中を、矢の群によりずたずたにして、私はあなたに大地を引き渡すであろう。（一一）」

サンジャヤは語った。――

カルナがこのように言っている時、強力なシャラドヴァットの息子クリパが笑って、カルナに次のように告げた。（一二）

「カルナよ、まことにすばらしい。ラーダーの息子よ、もし言葉だけでことが成るなら、お前を寄る辺として、クルの雄牛は守護者を得たということだ。（一三）カルナよ、お前はクルの王のそばで、何度も自慢する。しかしお前の勇武や力は実際に見られたことはまったくない。（一四）お前が何度も戦場でパーンダヴァたちと戦うのが見られたが、あらゆる場合にお前はパーンダヴァたちに敗れた。御者（スータ）の息子よ。（一五）カルナよ、ドリタラーシトラの息子がガンダルヴァに捕えられた時、兵士たちは戦ったが、お前だけは逃げた。（一六）またヴィラータの都においては、集結したすべてのクル軍は戦いにおいてアルジュナに敗れた。カルナよ、お前と弟も敗れた。（一七）お前は戦場において、アルジュナ一人にも勝てない。どうしてクリシュナをともなうすべてのパーンダヴァに勝つことができよう。（一八）カルナよ、何も言わないで戦え。御者の息子よ、お前はあまりにも自慢する。人が何も言わないで勇武を発揮するならば、まさにそれがまさに善き人（立派な人）の誓戒である。（一九）御者の息子よ、お

前は雨を降らせない秋の雲が轟くように大言して、成果が認められない。カルナよ、しかし王はそれに気づかない。（二〇）ラーダーの息子よ、お前はアルジュナを見ないうちは大言壮語している。しかしアルジュナを目のあたりにしたら、大言はできなくなるだろう。（二一）お前はアルジュナの矢を受けないうちは大言壮語する。しかしアルジュナの矢に射貫かれたら、大言はできなくなるだろう。（二二）王族（クシャトリヤ）は腕力により勇者である。バラモンは言葉により勇者である。アルジュナは弓により勇者である。カルナは願望により勇者である。（二三）」

　このようにクリパに侮辱された時、最高の戦士カルナはクリパに答えた。（二四）

「勇士は常に雨季の雲のように大音声をあげるものだ。そうすれば適切な季節に蒔かれた種のように、速やかに果実をもたらす。（二五）勇士が戦場で重荷を担い、戦いの最前線において色々と自慢しても、私はそこに過失を見ない。（二六）人がある重荷を担おうと心に決めたら、必ずや運命がその仕事を援助してくれる。（二七）私は決意を道連れにして心で重荷を担い、大音声をあげる。もしそうだとしても、バラモンよ、あなたに何の不都合があるのか。（二八）勇士というものは雨を降らせる雲のように、無駄には大声を出さない。賢者は自己の能力を知って、大声を出すものだ。（二九）この私は、今日、戦場で奮戦して、クリシュナとアルジュナの両者を速やかにうち破ることができる。ガウタマ（クリパ）よ、そこで私は大声をあげるのだ。（三〇）バラモンよ、従う者たちとともに、私のこの大音声の結果を見よ。私は戦いにおいて、クリシュナやサーティヤキとともにパーンドゥの息子たちを殺して、棘を除

去した大地をドゥルヨーダナに与えるであろう。（三一）」

　クリパは言った。

「御者の息子よ、お前の希望的な（実現しない）言葉は、私には受け入れがたい。お前が二人のクリシュナとダルマ王を殺した時に〔受け入れよう〕。（三二）カルナよ、武装した神々、ガンダルヴァ、夜叉、人間、蛇、羅刹によっても、戦いにおいてうち破られない、戦いに通達したクリシュナとアルジュナとがいる所、必ずやそこに勝利がある。（三三）ダルマの息子ユディシティラは、敬虔で、真実を語り、自制し、目上（グル）と神を敬い、常に法（ダルマ）に専念し、特別に武器に通達し、志操堅固で、恩を知っている。（三四）彼の弟たちは強力で、すべての武器を習得し、目上への奉仕に専念し、賢明であり、常に法を守り、誉れ高い。（三五）その縁者である戦士たちはインドラのような力を有し、非常に献身的である。すなわち、ドリシタデュムナ、シカンディン、ドゥルムカの息子、ジャナメージャヤ、チャンドラセーナ、バドラセーナ、キールティダルマン、ドゥルヴァ、ダラ、ヴァスチャンドラ、ダーマチャンドラ、シンハチャンドラ、スヴェーダナ、偉大な戦士ドルパダ、ドルパダの息子たちである。マツヤ国王も従者とともに、彼らのために奮戦している。（三六―三八）そしてシャターニーカ、スダシャナ、シュルターニーカ、シュルタドゥヴァジャ、バラーニーカ、ジャヤーニーカ、ジャヤーシュヴァ、ラタヴァーハナ、チャンドローダヤ、カーマラタ、殊勝なヴィラータの兄弟たち、双子（ナクラとサハデーヴァ）、ドラウパディーの息子たち、羅刹のガトートカチャ。これらの者たちが彼らのために戦ったら、彼らには滅亡は存在しない。（三九―四〇）実にビーマとアルジュナは神、

阿修羅、人間、夜叉と羅刹の群、鬼霊（ブータ）、蛇、象を含む全世界を、武器の力により残らず滅することができる。（四一）そしてユディシティラは、恐るべき視線によって大地を燃やすことができる。カルナよ、無量の力を持つクリシュナが彼らのために武装したら、どうしてそれらの敵を戦いでうち破ることができようか。（四二）御者の息子よ、いつもお前が戦場でクリシュナとあえて戦おうとするのは、お前の大きな考え違いだ。（四三）」

サンジャヤは語った。——

バラタの雄牛よ、カルナはこのように言われて、笑いながらクリパ師に答えた。（四四）

「バラモンよ、パーンダヴァたちについてあなたが言った言葉は真実である。パーンダヴァたちには、以上の、またその他の美質が存する。（四五）パーンダヴァたちは戦いにおいて、インドラを含む神々、悪魔、夜叉、ガンダルヴァ、ピシャーチャ鬼、蛇、羅刹たちによってもうち破られない。しかし私は、インドラに与えられた槍によって、パーンダヴァたちに勝利するであろう。（四六）バラモンよ、インドラによって与えられたこの私の槍は的を外すことはない。私は戦場において、これでアルジュナを殺すであろう。（四七）アルジュナが殺されたら、クリシュナと、彼の同腹の兄弟たちは、アルジュナなしで、決して大地を享受することができないであろう。（四八）彼らすべてが滅びれば、海をも含むこの大地は、苦もなくクルの王の支配下に帰すであろう。ガウタマよ。（四九）疑いもなくこの世では、すべての目的はよい政策により成就する。私はこのことを知って、そこで大言壮語するのだ。ガウタマよ。（五〇）あなたは老いたバラモンで、戦いに関し無能である。そしてパーンダヴァたちを愛し、迷妄により私を軽蔑している。（五一）バラモンよ、もし更にそのように私に不快なことを言うのなら、私は刀を振り上げてあなたの舌を切るであろう。愚か者よ。（五二）バラモンよ、またあなたは、クル族のすべての兵を恐れさせて、戦場でパーンダヴァたちを称讃しようと望む。愚か者よ。その点についても、私が適切に説く言葉を聞きなさい。バラモンよ。（五三）ドゥルヨーダナ、ドローナ、シャクニ、ドゥルムカ、ジャヤ、ドゥフシャーサナ、ヴリシャセーナ、マドラ国王、あなた自身、ソーマダッタ、ブーリ、ドローナの息子、ヴィヴィンシャティという、すべて戦いに通達した人々が武装して立っている時、インドラに等しい力を持つ敵といえども、どうして彼らを戦いでうち破ることができるか。（五四—五五）彼らは勇士で、武器に通達し、強力で、天界を望んでいる。法（ダルマ）を知り、戦いに巧みで、戦いにおいて神々をも殺すことができよう。（五六）彼らはパーンダヴァたちを殺すことを望み、クルの王のために勝利を望み、武装して戦場に立つであろう。（五七）非常に強力な者たちにとっても、勝利は時の運だと私は思う。というのは、強力なビーシュマが、幾百の矢におおわれて横たわっている。（五八）またヴィカルナ、チトラセーナ、バーフリーカ、ジャヤドラタ、ブーリシュラヴァス、ジャヤ、ジャラサンダ、スダクシナ、最高の戦士シャラ、強力なバガダッタ。以上の、そしてその他の、神々にもうち勝たれがたい王たち、非常に強力な勇士たちが、戦いにおいてパーンダヴァたちに殺されたではないか。運命の計らい以外の何であろうか。最低の人よ。（五九—六一）バラモンよ、あなたがいつも讃えるドゥルヨーダナの敵たちの

場合でも、彼らのうちの幾百幾千の勇士たちが殺されている。(六二) クル族のすべての兵たちはパーンダヴァの兵たちとともに滅亡している。この場合、私は決してパーンダヴァたちに実力があるとは見ない。(六三) あなたはいつも彼らのことを強力だと考えているが……。最低のバラモンよ。私はドゥルヨーダナのために、力の限り戦場で彼らと戦うべく努力するであろう。勝利は運命に依存する。(六四)」

(第百三十三章)

カルナ、アルジュナに敗れる

サンジャヤは語った。——

ドローナの息子(アシュヴァッターマン)は、このように伯父(クリパ)がカルナに侮辱されているのを見て、急いで刀を振り上げ、猛烈な勢いでカルナに食ってかかった。(一)

アシュヴァッターマンは言った。

「カルナよ、見よ。愚か者よ、最低の人よ、ちょっと待て。邪悪な奴め、今私はお前の頭を胴体から切り離してやる。(二)」

サンジャヤは語った。——

大王よ、彼が激しく襲いかかった時、ドゥルヨーダナ王は自ら彼を制止した。最高の人クリパも制止した。(三)

カルナは言った。

「この戦いぶりを自慢する勇士様は、愚かで、最低のバラモンだ。クルの最上者よ、彼を放せ。私の力を彼に思い知らせてやる。(四)」

アシュヴァッターマンは言った。

「御者の息子よ、愚か者よ、我々がお前に我慢しても、アルジュナがお前のその高慢の鼻をへし折るだろう。(五)」

ドゥルヨーダナは言った。

「アシュヴァッターマンよ、静まれ。誇りを与える者よ、どうか堪えてくれ。決してカルナのことを怒ってはいけない。(六) あなたとカルナとクリパとドローナとマドラ国王とシャクニには、大きな仕事が託されている。最高のバラモンよ、静まってくれ。(七) バラモンよ、あそこにすべてのパーンダヴァ軍が、カルナと戦おうとして、いたるところで挑戦の名乗りをあげて、こちらに向かって来る。(八)」

サンジャヤは語った。——

一方、最高の戦士である威光ある強力なカルナは、インドラが神群に囲まれるように主立ったクル族の人々に囲まれて、弓を構え、自分の腕の力に依存して立っていた。(九) 大王よ、それから、猛り立つカルナとパーンダヴァたちとの、獅子吼が響きわたる戦いが始まった。(一〇) 王よ、誉れあるパーンダヴァとパーンチャーラの軍は、勇士カルナを見て、大声で叫

んだ。(一一)「あそこにカルナがいる。」「カルナはどこにいるのか。」「カルナよ、邪悪な最低の男よ。戦場で我々と戦え。(一二)」
他の人々は、怒りで赤い眼をして、カルナを見て言った。
「すべての虎のような王は、高慢で愚かな御者の息子を殺せ。(一三―一四)彼は生きるに値しない。この悪党はいつもパーンダヴァたちをこの上なく憎んでいる。彼はドゥルヨーダナの考えに従い、諸悪の根源である。彼を殺せ。」
王族たちはそう言って襲いかかった。(一五)勇士たちはユディシティラにうながされ、カルナを殺すために、矢の大雨で彼をおおった。(一六)カルナは走り寄るそれらすべての勇士を見ても動揺せず、恐れることもなかった。(一七)その都市のような、隆起する軍隊の海を見て、迅速にして強力で無敵のカルナは、戦場においてあなたの息子たちを喜ばせようとして、その軍隊を矢の群ですっかりおおった。バラタの雄牛よ。(一八―一九)それから王たちも、矢の雨で彼をおおった。そして彼らは、幾百幾千の弓を揺すって、悪魔の群がインドラと戦うようにカルナと戦った。(二〇)しかしカルナは、その諸王に発せられた矢の雨を、自分の矢の大雨により、すっかり粉砕した。王よ。(二一)やられたらやり返そうと望む彼らの戦いは、神々と阿修羅の戦いにおけるインドラと悪魔たちの戦いのように驚異的であった。
(二二)(二三―二八略)
それからドゥルヨーダナ王はカルナの勇武を見て、アシュヴァッターマンのところに行って次のように告げた。(二九)

「あのカルナは戦場で武装し、すべての王たちと戦っている。カルナの矢に苦しめられて逃走する軍隊を見よ。まるでカールッティケーヤ（スカンダ）に粉砕された阿修羅の軍隊のようだ。(三〇)戦場で英邁なカルナにうち破られた軍隊を見て、あそこにアルジュナが、カルナを殺そうとしてやって来る。(三一)戦場でアルジュナがカルナを殺すことのないように、策を講じてくれ。(三二)」
それから、ドローナの息子、クリパ、シャリヤ、勇士クリタヴァルマンが、カルナを守ろうとして、アルジュナに向かって行った。(三三)ヴリトラが神の軍に向けて進撃するように、クンティーの息子が向かって来るのを見て、カルナは栄光あるインドラのように反撃した。
(三四)
ドリタラーシトラはたずねた。
「サンジャヤよ、カーラ（破壊神）、死神（アンタカ）、ヤマ（閻魔）に等しい怒ったアルジュナを見て、次にヴァイカルタナ・カルナはどのように対応したか。(三五)実にその勇士は常にアルジュナと競い合って来た。そして、非常に恐ろしい戦いにおいてアルジュナをうち破ると言っている。(三六)常に窮極の敵である彼が激しくやって来た時、サンジャヤよ、次にヴァイカルタナ・カルナはどのように彼に対応したか。(三七)」
サンジャヤは語った。——

象が敵象に対し突進するようにアルジュナがやって来るのを見て、カルナはまったく動揺しないで、アルジュナを迎え撃った。（三八）激しく襲来するカルナを、敵を苦しめる威光あるアルジュナは矢で食い止めた。（三九）わが君よ、カルナは矢の群で彼をおおった。そしてカルナは大いに怒り、三本の真っ直ぐ飛ぶ矢で彼を射貫いた。（四〇）強力なアルジュナはカルナのその早業に我慢できなかった。敵を苦しめるアルジュナは、石で研ぎ汚れない先をした、三十本の真っ直ぐの矢をカルナに送った。そして強力な彼は猛り立ち、笑うかのように、一本の鉄矢でカルナの左腕の先を激しく射貫いた。射られた彼の手から、速やかに弓が落ちた。（四一―四三）強力なカルナは一瞬の半分のうちに、再びその弓をとり、手練の業で、矢の群によってアルジュナをおおった。（四四）バーラタよ、アルジュナは笑うかのように、カルナに放たれたその矢の雨を、自分の矢の雨により粉砕した。（四五）王よ、その二人の偉大な射手はお互いに攻撃し合い、やられたらやり返そうと望み、矢の雨で相手をおおった。（四六）戦場におけるカルナとアルジュナの戦いは驚異的であった。それは、二頭の野生の象が雌象のために怒って戦っているようであった。（四七）

それから偉大な射手アルジュナは、カルナの勇武を見て、急いで彼の弓を握りのところで断ち切った。（四八）そして敵を苦しめるアルジュナは、半月形の先の矢で彼の四頭の馬をヤマの住処に送り、御者の頭をその胴体から切り離した。（四九）そしてアルジュナは、弓を切られ、馬と御者を殺されたカルナを、四本の矢で射た。（五〇）その人中の雄牛は、馬を殺された戦車から速やかに飛び下り、矢に苦しめられ、速やかにクリパの戦車に乗った。（五一）

バラタの雄牛よ、あなたの兵たちはカルナが敗れたのを見て、アルジュナの矢に追い立てられ、十方に逃げた。（五二）王よ、彼らが逃走するのを見て、ドゥルヨーダナ王は彼らを引き返らせ、次のように告げた。（五三）

「勇士たちよ、逃げてはならぬ。王族の雄牛たちよ、とどまれ。今この私がアルジュナを殺すために自ら戦場に行く。私はパーンダヴァたちと、パーンチャーラ及びソーマカの者たちを殺すであろう。（五四）今日、私がガーンディーヴァ弓を持つアルジュナと戦っている時、パーンダヴァたちは宇宙紀（ユガ）の終末のカーラ（破壊神）のような私の勇武を見るであろう。（五五）今日、戦士たちは戦場で、蝗（いなご）の列のような、幾千と発射される私の矢の群を見るであろう。（五六）今日、兵士たちは戦場で、夏の終わり（雨季）の雲のように、私が弓を持って矢の雨を放っているのを見るであろう。（五七）今日、私は戦場において、真っ直ぐの矢でアルジュナをうち破るであろう。勇士たちよ、戦場にとどまれ。アルジュナに対する恐怖を捨てよ。（五八）というのは、アルジュナは私の力に直面したら耐えられないだろう。マカラ（海豚または鰐）の住処である海が海岸を越えられないように。（五九）」

侵しがたい王はこのように言うと、怒りで眼を赤くして、大軍に囲まれてアルジュナに向かって行った。（六〇）強力な彼が進撃するのを見て、クリパはアシュヴァッターマンに近づいて告げた。（六一）

「あそこに、強力で短気な王が怒りにかられ、（火に入る）蝗のような行動をとって、アルジュナと戦おうと望んでいる。（六二）我々の見ている前で、あの人中の虎がアルジュナと対

戦して生命を落とさないうちに、あのクルの王を止めなさい。(六三) あの勇猛なクルの王がアルジュナの矢の範囲に達しないうちに、早く彼を止めなさい。(六四) 脱皮した蛇のような、恐ろしいアルジュナの矢により、あの王が灰にされないうちに、彼が戦うことを止めなさい。(六五) 誇りを与える者よ、我々がいるのに、援助者がいないかのように、王が自ら戦いに出るということは適切でないと私は思う。(六六) クルの王がアルジュナと戦えば、彼が生きながらえる可能性はないと私は思う。象が虎と戦う場合のように。(六七)」

最高の戦士であるドローナの息子は、母方の伯父にこのように言われて、急いでドゥルヨーダナに告げた。(六八)

「ガーンダーリーの息子よ、私が生きているのに、あなたが戦いに行くことは適切でない。クルの王よ、常にあなたのためを願う私を無視して……。(六九) アルジュナに勝利しようと、あなたがうろたえてはならぬ。私がアルジュナを食い止めよう。待て、スヨーダナよ。(七〇)」

ドゥルヨーダナは言った。

「師匠(ドローナ)はパーンドゥの息子たちを、わが子のように保護している。最高のバラモンよ、あなたもまた、常に彼らを見逃している。(七一) あるいは私の不運により、あなたは戦いにおいて十分に勇武を示さない。あなたがユディシティラかドラウパディーを愛しているためなのかどうか、私にはわからない。(七二) 貪欲な私に災いあれ。幸せに慣れた無敵のすべての縁者たちが、私のために最高の苦しみに達したのだから。(七三) ガウタミー(クリピー)の息子で

あるあなたは最高の戦士であり、戦いにおいてマヘーシュヴァラ(シヴァ)に等しい。そのあなたがどうして敵を滅ぼせないだろうか。その能力がないだろうか。(七四) アシュヴァッターマンよ、お願いだ。私の敵たちを滅ぼしてくれ。非の打ち所のない者よ、神々でさえあなたの武器のとどく範囲に立つことはできない。(七五) ドローナの息子よ、パーンチャーラとソーマカの人々を従者もろとも殺せ。我らはあなたに守られて、残りの連中を殺すであろう。(七六) バラモンよ、あの誉れ高いソーマカとパーンチャーラの人々は、猛り立って、森火事のように私の軍隊の間で活動している。(七七) 勇士よ、最高の人よ、彼らとケーカヤ軍とを食い止めてくれ。アルジュナに守られて彼らがわが軍を全滅させないうちに。(七八) 貴君よ、遅かれ早かれあなたはこの仕事をしなければならぬ。勇士よ、あなたはパーンチャーラ軍を殺すために生まれた。(七九) 不屈の人よ、あなたは世界中からパーンチャーラを一掃するであろう。成就者たちはそのように告げた。そしてその言葉はその通りに実現するであろう。(八〇) インドラを含む神々は、あなたの武器の範囲に立つことができない。いわんや、パーンダヴァやパーンチャーラたちはなおさらである。私のこの言葉は真実である。(八一)」

(第百三十四章)

アシュヴァッターマンの勇武

サンジャヤは語った。——

戦いに酔うドローナの息子は、ドゥルヨーダナにこのように言われて答えた。

「勇士よ、クルの王よ、あなたの言われる通りだ。(一)まことにパーンダヴァたちは、私にとっても私の父にとっても常に愛しい。同様に、彼らにとっても我々二人は愛しい。しかしクルの王よ、友よ、我々は能力の限り、恐れを知らぬかのように、生命を捨てて戦っている。(二)私とカルナとシャリヤとクリパとクリタヴァルマンとは、一瞬のうちにパーンダヴァの軍隊を滅亡させることができる。最高の王よ。(三)クルの王よ、そしてパーンダヴァたちも、もし我々が戦場にいないなら、一瞬の半分のうちにクル族の軍隊を滅ぼすことができる。勇士よ。(四)我々がパーンダヴァたちに対して力の限り戦い、彼らが我々と戦おうとしている時、それぞれの威光(テージャス)が相手の威光に遭(あ)って鎮まっているのだ。バーラタよ。(五)パーンドゥの息子たちが生きている間は、パーンダヴァの軍を力ずくでうち破ることはできない。私はこの真実をあなたに告げる。(六)パーンドゥの息子たちは有能で、自分自身のために戦っている。バーラタよ、どうして彼らはあなたの兵たちを殺さないだろうか。(七)クルの王よ、あなたはまことに最も貪欲で邪悪である。疑い深く、高慢であって、我々をも疑っている。(八)しかし私は、あなたのために努力して、生命を捨てて、あなたのために戦いに行く。クルの王よ。(九)私は敵と戦い、有力な者たちを次々とうち破るであろう。パーンチャーラ、ソーマカ、ケーカヤ、パーンダヴァの軍と、戦場であなたのために戦うであろう。敵を制する者よ。(一〇)今日、私の矢に焼かれて、パーンチャーラとソーマカは、獅子に苦しめられた牛たちのように、いたるところで逃げまどうだろう。(一一)今日、ダルマの息子である王

はソーマカの人々とともに、私の勇武を見て、世界はアシュヴァッターマンに満ちていると考えるだろう。(一二)ダルマの息子ユディシティラは、パーンチャーラとソーマカが戦場で殺されるのを見て、意気阻喪するであろう。(一三)バーラタよ、戦場で私に立ち向かって来る人々を、私はすべて殺すであろう。勇士よ、私の腕の中に入った者たちは逃れることができないから。(一四)」

その生ある者たちのうちの最上者である勇士は、あなたの息子ドゥルヨーダナにこのように告げると、あなたの息子たちによかれと望み、戦闘を開始し、すべての弓取りたちを敗走させた。(一五)それからガウタミーの息子は、パーンチャーラとカイケーヤの人々に言った。

「すべての勇士たちよ、さあ、私の身体を攻撃せよ。手練の武技を発揮して、気を確かに持って戦え。(一六)」

大王よ、すべての者たちはこのように言われて、雲が雨を降らせるように、武器の雨をドローナの息子に降らせた。(一七)ドローナの息子はそれらの矢を破壊して、パーンドゥの息子たちとドリシタデュムナとの面前で、十人の勇士たちを殺した。王よ。(一八)パーンチャーラとスリンジャヤの軍はその戦いで殺されつつ、戦場にドローナの息子を残して、十方に逃げ去った。(一九)大王よ、逃走するパーンチャーラとソーマカの勇士たちを見て、ドリシタデュムナはドローナの息子に戦いを挑んだ。(二〇)黄金できらびやかな、雨雲のような音を響かせる、退くことのない百名の勇猛な戦士たちに囲まれて、パーンチャーラの王子である勇士ドリシタデュムナは、戦士たちが倒されるのを見て、ドローナの息子に告げた。

（二一—二二）

「師匠の息子よ、愚か者よ、他の者たちを殺して何になる。もしお前が勇士なら、私とともに戦え。私はお前を殺すであろう。今、私の前に立っていろ。（二三）」

それから栄光あるドリシタデュムナは、急所を断つ鋭い矢で師匠の息子を射た。バラタの雄牛よ。（二四）それらの金の羽根と曇りない先端を持つ、すべての身体を裂く高速の矢は、列をなして飛び、ドローナの息子に入った。蜜を求めて酔う蜂たちが花咲く樹に入るように。（二五）誇り高いドローナの息子は手ひどく射られて、足で踏まれた蛇のように怒り、弓を手に持ち、動揺することなく次のように言った。（二六）

「ドリシタデュムナよ、気を確かに持って少しの間待て。今、鋭い矢でお前をヤマ（閻魔）の住処に送ってやるから。（二七）」

敵の勇士を殺すドローナの息子は、ドリシタデュムナにこのように告げると、手練の業を発揮して、矢の群で相手をすっかりおおった。（二八）戦場でドローナの息子に矢でおおわれた、戦いに酔うパーンチャーラの王子は、言葉を発して相手を威嚇した。（二九）

「バラモンよ、お前は私の誓いと出生を知らないな。愚か者よ、私はドローナを殺してからお前を殺すべきだ。だから今は、ドローナがまだ生きているから、私は戦場でお前を殺さないだろう。（三〇）愚か者よ、しかしこの夜が明けないうちに、まずお前の父を殺して、それから戦いにおいてお前を死神の世界に送ってやろうと私は考えている。（三一）気を確かに持って、パーンダヴァたちに対する怨みと、クル族に対する忠誠心を示すがよい。お前は私か

ら生きて逃れることはない。（三二）バラモンの職務を捨てて、王族の法（クシャトラダルマ）に専念するお前のようなバラモンは、すべての人々に殺されるべきである。最低の男よ。（三三）」

このようにドリシタデュムナに暴言を言われた最高のバラモンは、激しく怒って、「待て、待て」と言った。（三四）そして彼は両眼で燃やすかのようにドリシタデュムナをにらみ、蛇のように息を吐いて、矢で相手をおおった。（三五）最高の王よ、すべてのパーンチャーラの軍に囲まれたその最高の戦士は、戦場でドローナの息子に矢でおおわれても、その強力な男は自分の沈着さによって、動揺することはなかった。そして、種々の矢をアシュヴァッターマンに向けて放った。（三六—三七）この二人の偉大な射手はお互いにいきり立ち、いたるところ矢の雨を放ち、矢の群で相手の矢を防ぎ、戦場で命を賭けた勝負に専念した。（三八）

（三九—四五略）

大王よ、それからドローナの息子は、偉大なドリシタデュムナの旗と弓と傘とを破壊し、外側の馬を御する二人の御者と主な御者と四頭の馬を殺して、戦場を疾駆した。（四六）そしてその限りなく高邁な男は、真っ直ぐの矢で、幾百幾千のすべてのパーンチャーラ軍を敗走させた。（四七）バラタの雄牛よ、それからパーンダヴァ軍は、戦場におけるインドラのようなドローナの息子の偉大な行為を見て戦慄した。（四八）その勇士は百本の矢で百人のパーンチャーラの兵を殺し、三本の鋭い矢で三人の勇士を殺した。（四九）それからドローナの息子は、ドルパダの息子とアルジュナが見ている前で、立ち向かう多くのパーンチャーラの兵を殺した。（五〇）戦場で殺されつつあるパーンチャーラとスリンジャヤの軍は、ドローナの息

子を捨てて、戦車や旗を散乱させて逃走した。(五一) 偉大な戦士であるドローナの息子は、その戦いで敵どもを殺して、夏の終わり（雨季）の雲のように、大声で吼えた。(五二) アシュヴアッターマンは多くの勇士たちを殺して輝いた。宇宙紀(ユガ)の終末に、火がすべてを灰にして輝くように。(五三) 栄光あるドローナの息子は、戦場で幾千の敵の群をうち破り、クル族の人々に讃えられつつ輝いた。神々の王（インドラ）が敵の群を滅ぼして輝くように。(五四)

（第百三十五章）

大王よ、それから、パーンドゥの息子ユディシティラとビーマセーナは、ドローナの息子をぐるりと取り囲んだ。(一) それからドゥルヨーダナ王は、戦場でドローナに守られて、パーンダヴァたちに襲いかかった。大王よ、それから臆病者たちの恐怖を増大させる恐るべき戦いが始まった。(二) ユディシティラは怒って、アンバシタ、マーラヴァ、ヴァンガ、シビ、トリガルタの群を死神の世界に送った。(三) ビーマはアビーシャーハとシューラセーナの戦いに酔う王族(クシャトリヤ)たちを殺害して、大地を血まみれにした。(四) アルジュナは鋭い矢で、ヤウデーヤとアーラッタの王族、マドラカの群を戦いにおいて、死神の世界に送った。(五) 象たちは高速の鉄矢に手ひどく撃たれて、二つの峰のある山のように大地に倒れた。(六) 象の鼻は切られていたるところでのたうちまわり、大地は動きまわる蛇におおわれたかのように輝いた。(七) 黄金できらびやかな王の傘が散乱し、大地は輝いていた。宇宙紀(ユガ)の終末に、太陽

や月などの惑星(グラハ)（太陽と月もグラハとされる）に満ちた天空のように。(八)「殺せ。恐れずに攻撃せよ。貫け。切れ」というような喧噪が赤い馬（のドローナ）の戦車の近くであがった。(九) ドローナは戦場で最高に怒り、風神の武器（ヴァーヤヴィヤ）で敵を粉砕した。克服しがたい風が雲を吹き散らすように。(一〇) パーンチャーラの兵はドローナに殺されつつ、ビーマセーナと偉大なアルジュナが見ている前で、恐れて逃走した。(一一)

それからアルジュナとビーマは、戦車の大群によりあなたの軍を取り囲んで、激しく反撃した。(一二) アルジュナはドローナの右脇に、狼腹は左脇に、矢の大洪水を浴びせた。(一三) 大王よ、スリンジャヤとパーンチャーラの勇士たち、マツヤとソーマカの人々がその二人に続いた。(一四) 同様に、あなたの息子に属する主立った勇猛な戦士たちは、大軍を率いて、ドローナの戦車の援護に向かった。(一五) それから、バラタの軍隊はアルジュナに殺されつつ、闇と眠気に悩まされ、再び散り散りになった。(一六) 大王よ、ドローナとあなたの息子自身が止めても、それらの戦士たちを制止することはできなかった。(一七) その大軍は、世界が闇におおわれている時、アルジュナの矢によって散り散りにされ、あらゆる方角に逃走した。(一八) 大王よ、幾百の王たちは、乗物を捨て、恐怖にかられ、いたるところで逃げまどった。(一九)

（第百三十六章）

サーティヤキはソーマダッタを殺す

サンジャヤは語った。――
ソーマダッタが大弓を揺すっているのを見て、サーティヤキは御者に言った。
「ソーマダッタのもとに私を連れて行け。(一) 戦場において、私は敵であるバーフリーカ(の息子)であるあの最低のクル族を殺さないで引き返すことはない。御者よ、私はこの真実を誓う。(二)」
そこで御者は戦場で馬たちをかりたてた。それらはシンドゥ産で、高速であり、法螺貝のような色をし、一切の言説を超えていた。(三) 思考か風のように速いそれらの馬は、ユユダーナ(サーティヤキ)を運んで行った。かつてインドラの馬たちが、悪魔を殺そうと身構えるインドラを運んだように。王よ。(四) 戦場でサーティヤキが激しく襲来するのを見て、勇士ソーマダッタは動揺することなく迎え撃った。(五) 雨を降らせる雲(または雨神)のように、彼は矢の雨を放ち、シニの孫(サーティヤキ)をおおった。雲が太陽をおおうように。(六) バラタの雄牛よ、戦場でサーティヤキは動揺することなく、矢の群でクルの雄牛をすっかりおおった。(七) 一方ソーマダッタは、六本の矢でサーティヤキの胸を射た。王よ、サーティヤキも鋭い矢で相手を射た。(八) 二人の人中の雄牛はお互いに矢で切られて輝いていた。花の時期に、美しい花をつけた二本のキンシュカ樹のように。(九) クルとヴリシュニの名誉をもたらす二人は、全身血

まみれになり、その眼で相手を燃やすかのようににらみ合っていた。(一〇)(一一―二三略)
ビーマはサーティヤキに加勢して、十本の矢でバーフリーカの息子を射た。しかしソーマダッタは動揺することなく、矢でサーティヤキを攻撃した。(二四) それから、ビーマセーナの息子(異本は「ビーマセーナ」)はサーティヤキに加勢して、新しい堅固な恐るべき鉄棒をソーマダッタの胸に投じた。(二五) クルの勇士はその戦いにおいて、笑うかのように、その飛来する恐ろしい鉄棒を両断した。(二六) その大きな鉄棒は、二つに切られて地面に落下した。金剛杵(ヴァジュラ)で切られた大きな峰のように。(二七)
王よ、それからその戦いにおいて、サーティヤキは半月形の先の矢で、ソーマダッタの弓を切り、五本の矢で弓懸(ゆがけ)を切った。(二八) そして彼は、速やかに四本の矢により四頭の最高の馬を死王(ヤマ)のもとに送った。バーラタよ。(二九) そしてその虎のような戦士であるシニの雄牛は笑いながら、真っ直ぐの半月形の先をした矢で、御者の頭を胴体から切り取った。(三〇) 王よ、それからサーティヤキは、金の羽根のついた、石で研がれた、燃える火のような非常に恐ろしい矢を放った。(三一) 王よ、強力なサーティヤキに放たれた恐ろしい最高の矢は、速やかにソーマダッタの胸に落ちた。バーラタよ。(三二) 勇士ソーマダッタは、強力なサーティヤキにしたたか射貫かれて、倒れて死んだ。(三三)
偉大な戦士たちは、ソーマダッタが殺されたのを見て、矢の大雨によりサーティヤキを攻撃した。(三四) サーティヤキが矢におおわれたのを見て、ユディシティラは大軍を率いてドローナの軍に襲いかかった。(三五) それから、ユディシティラは怒り、ドローナの見ている前

で、矢であなたの側の大軍を敗走させた。(三六) ドローナは自軍を敗走させているユディシティラを見て、怒りで眼を赤くして、激しく彼に襲いかかった。(三七) そして非常に鋭い七本の矢でユディシティラを貫いた。その勇士は〔ユディシティラに〕手ひどく射られ、口の端を舐めまわし、ユディシティラの旗と弓を断ち切った。(三八) その最高の王は弓を切られ、その緊急の時に急いで、戦場で速やかに他の堅固な弓をとった。(三九) それから王は、幾千の矢でドローナと、その馬たちと御者と旗と戦車を射貫いた。それは奇蹟のようであった。(四〇) バラタの最上者よ、ドローナは矢の打撃に苦しみ、少しの間もだえ、戦車の座席で座り込んでいた。(四一) それから最高のバラモンは、すぐに意識を取りもどし、大いに怒って、風神の武器(ヴァーヤヴィヤ)を放った。(四二) 強力なユディシティラは動揺することなく、弓を引き絞り戦場で自分の武器で相手の武器を防止した。(四三)

それからヴァースデーヴァ(クリシュナ)はユディシティラに告げた。

「勇士ユディシティラよ、私があなたに言うことを聞きなさい。(四四) バラタの最上者よ、ドローナと戦うことをやめよ。というのは、ドローナはいつも戦場であなたを捕えようと欲しているから。(四五) 彼があなたと戦うことは適切ではないと私は思う。彼を滅ぼすために作られた者が、明日、彼を殺すであろう。(四六) 師を捨てて置いて、スヨーダナ(ドゥルヨーダナ)王がいる所に行きなさい。虎のような戦士ビーマも、クル族の軍と戦っている。(四七)」

ダルマ王ユディシティラは、ヴァースデーヴァの言葉を聞くと、少しの間考えてから、恐ろしい戦場に向かい、敵を殺すビーマが立っている所に行った。口を開いた死神のように、

あなたの戦士たちを殺しながら。(四八―四九) 彼は戦車のたてる大きな音で大地を響かせ、夏の終わり(雨季)に雲(または雨神)が十方を響かせるかのようだった。(五〇) ユディシティラは敵を殺しているビーマの背後を守った。一方ドローナは、その夜、パーンダヴァとパーンチャーラの軍を粉砕した。(五一)

(第百三十七章)

闇の戦場を照らす灯明

サンジャヤは語った。——

王よ、そのように凄まじく恐ろしい戦いが行なわれて、世界が闇とほこりにおおわれていた時、戦場で対峙する戦士たちは、お互いに何も見ることができなかった。(一) 推量と符牒を告げること(合言葉。六・一・二参照)により、人と象と馬が殺される、最高に身の毛がよだつ激戦が行なわれた。(二) 最高の王よ、ドローナ、カルナ、クリパ、ビーマ、ドリシタデュムナ、サーティヤキなどの勇士は、相互に相手の軍隊を震撼させた。(三) 両軍の兵士たちは、これらの偉大な戦士たちに大量に殺されつつ、また闇とほこりにより、いたるところ逃げまわった。(四) 兵士たちは恐怖にかられ、いたるところで逃走した。大王よ、彼らは戦場を逃げまわって殺された。(五) 幾千という勇士たちが暗黒の闇の中で迷い、戦場で互いに殺し合った。これもあなたの息子の〔悪しき〕政策のせいだ。(六) バーラタよ、かくて戦場が闇におおわれた時、そこですべての軍隊とその指導者たちは迷妄に陥った。(七)

ドリタラーシトラはたずねた。
「彼らがパーンダヴァたちに力を殺がれ、暗黒の闇の中に埋没して右往左往していた時、そなたはどのような気持であったか。(八) また私の軍隊において、どのようにして彼らが再び明瞭になったか。そのように世界が闇におおわれていた時。サンジャヤよ。(九)」

サンジャヤは語った。——

それから、生き残ったすべての軍は、軍の指導者たちをめざして〔集まり〕、再び陣形を整えた。(一〇) ドローナは前衛に、シャリヤは後衛に、ドローナの息子とシャクニは両脇に位置し、ドゥルヨーダナ王は自ら全軍を守りつつ夜間に進軍した。王よ。(一一) 王よ、ドゥルヨーダナはまずすべての歩兵たちを元気づけてから告げた。
「すべての者よ、最高の武器を捨て、燃える灯明を手で持て。(一二)」

彼らは最高の王にうながされて喜び、灯明を持った。その軍隊は再び見分けられるようになり、夜中、火の光明により、高価な財宝、神々しい装飾、飛行する燃え上がる武器により輝いていた。一瞬のうちにすべての灯明が準備され、速やかに軍隊を輝かせた。(一三—一四) その夜、すべての軍隊は松明を持つ歩兵により奉仕されて照らされ、空中において稲光に照らされる雲のように見えた。(一五)

王中の王よ、このように軍隊が照らされた時、黄金の鎧を着たドローナは火のようにいたるところで燃やし、光輪を持つ真昼の太陽のように輝いた。(一六) 黄金の装飾、清らかな金の胸飾り、箙、よく鍛えられた武器に火が照り映えていた。(一七) アージャミーダよ、戦車に積んだ鋼鉄製の棍棒、輝かしい鉄棒、槍は、光線によって輝かしい反映をいたるところで生み出していた。(一八) 王よ、そこで奮戦している人々の傘、ヤクの尾の払子、刀（異本による）、燃える大松明、まわる黄金の輪は燦然と輝いていた。(一九)(二〇—二三略)

我々の軍が輝かしくなったのを見て、パーンダヴァたちも急いで同じ様にした。彼らはすべての軍隊において歩兵の群を急き立てて、灯明を作り出した。(二四) 象ごとに七つの灯明が、戦車ごとに十の灯明が作られた。馬の背に二つの灯明、両脇、旗、殿にそれぞれ他の幾つかの灯明が作られた。(二五) そして全軍において、両脇、後方、前方、中央、そしていたるところに、それぞれ他の幾つかの灯明が作られた。このように、両軍において、燃える火を手に持つ人々が動きまわっていた。(二六)(二七—二九略)

王よ、天に届く光明によって目覚めさせられた神の群、ガンダルヴァ、夜叉、阿修羅、シッダの群、及びすべての天女たちが集まって来た。(三〇) 戦場はそれらの神々、ガンダルヴァで満ち、また夜叉、阿修羅の王、天女の群、天上に昇りつつある勇士たちによって満ち、あたかも天界のようであった。(三一) 戦車兵と騎兵と象兵の陣形を整えたその大軍は、戦車と馬と象に満ち、灯明に輝かされ、戦士たちは猛り立ち、馬たちは傷つけられ走りまわり、あたかも神と阿修羅たちの軍陣のようであった。(三二) その夜に、神のような人々の戦いが行なわれた。そこでは槍の群に満ちた激しい風が吹き、偉大な戦車という雲があり、戦車と

馬の音がし、武器の群の雨が降り、血の激流がある。(二三)その戦いにおいて、偉大な最高のバラモン（ドローナ）は、火のようにパーンダヴァ軍を熱し、あたかも雨季の終わりに光線で熱する真昼の太陽のようであった。(二四)

（第百三十八章）

恐るべき夜戦

サンジャヤは語った。――

このようにほこりと闇におおわれた世界が照らし出された時、勇士たちは互いに相手を殺そうと望んで交戦した。(一)王よ、彼らは槍、刀、その他の武器を持って戦場に集まり、お互いに相手が罪を犯したと〔怒って〕にらみ合った。(二)バーラタよ、その時いたるところで輝く幾千の灯明によって大地は輝いた。惑星により輝く天空のように。(三)燃え上がる灯明によって戦場は輝いた。それは世界の帰滅の時に燃える大地のようであった。(四)すべての方角はすっかり灯明に照らされ、雨季の夜に蛍におおわれた樹々のように見えた。(五)それから勇士たちは、それぞれ勇士たちとの戦いに専念した。象兵は象兵とともに、騎兵は騎兵とともに戦った。(六)戦車兵は喜んで戦車兵と戦った。その恐ろしい夜中、あなたの息子の命令によって……。(七)大王よ、それからアルジュナは速やかにすべての王を滅ぼし、クル族の軍隊を粉砕した。(八)

ドリタラーシトラは言った。――

「無敵のアルジュナが我慢できなくなり、怒って私の息子の軍に突入した時、そなたの気持はどのようであったか。(九)敵を苦しめる彼が突入した時、兵たちはどのように考えたか。そしてドゥルヨーダナは、どのような時宜にかなったことを考えたか。(一〇)その敵を制する勇士に対して、いかなる人々が戦場で対戦したか。またいかなる人々が、ドローナの右の車輪と左の車輪を守ったか。(一一)その勇士たちが戦っている時、いかなる勇士たちが彼の背後にいたか。いかなる人々が戦場で敵軍を殺している彼の前方を守ったか。(一二)偉大な射手である強力で無敵の人中の虎ドローナは、パーンチャーラ軍に侵入し、戦車の進む道において踊るかのようであった。(一三)ドローナは怒った火のように、矢でパーンチャーラの戦車の群を燃やした。その彼がどうして逝去したのか。(一四)そなたは敵が平静でうち破られないと語る。そしてわが軍の兵が殺され、落胆し、散り散りになったと語る。わが軍の戦士たちが戦いにおいて戦車を奪われたと語る。(一五)」

サンジャヤは語った。――

大王よ、戦いを望むドローナの考えを知って、その夜、ドゥルヨーダナは従順な弟たちに告げた。(一六)すなわち、クル族の勇士ヴィカルナ、チトラセーナ、ドゥルダルシャ、ディールガバーフ、及び彼らに従う者たちである。(一七)

「汝らはすべて奮励努力して、ドローナの後方を守れ。クリタヴァルマンはその右輪を、シ

ヤリヤは左輪を守れ。(一八)」

そしてあなたの息子は、トリガルタの勇士たちで、生き残ったすべての偉大な戦士たちに、前方を守るように命じた。(一九)

「師匠は奮戦している。パーンダヴァたちも非常に奮戦している。戦場で敵軍を殺しているドローナを努力して守れ。(二〇) 実にドローナは戦いにおいて強力にして、手練の早業で、勇猛で、神々と戦ってもそれを破るであろう。パーンダヴァとソーマカなど問題ではない。(二一) そこで汝らすべての勇士はこぞって奮励努力し、パーンチャーラ軍と勇士ドリシタデュムナからドローナを守れ。(二二) 王たちよ、パーンダヴァ軍において、ドリシタデュムナ以外に戦いでドローナをうち破ることができる戦士を私は知らない。(二三) そこで私は、全身全霊でドローナを守るべきだと思う。彼はもし守られれば、ソーマカとスリンジャヤの軍と諸王を殺すであろう。(二四) 軍の前衛においてすべてのスリンジャヤ軍が殺された時、ドローナの息子は疑いもなく戦場でドリシタデュムナを殺すであろう。(二五) 同様に、勇士カルナはアルジュナを戦場においてうち破るであろう。そして武装した私は、戦いにおいてビーマセーナを破るであろう。(二六) そこで疑いもなく、長年の間、私の勝利が実現するであろう。それ故、勇士たちよ、戦場でまさにドローナを守れ。(二七)」

バラタの最上者よ、あなたの息子ドゥルヨーダナはこのように告げてから、その恐ろしい闇において、軍隊に命令を出した。(二八) バラタの雄牛よ、それから夜間、勝利を願う両軍の間に恐ろしい戦いが始まった。(二九) アルジュナはクル族の軍に対し、クル軍はアルジュナに対し、種々の武器を放って、お互いに攻撃し合った。(三〇) その戦いにおいて、ドローナの息子はパーンチャーラの王を、ドローナはスリンジャヤ軍を、真っ直ぐの矢でおおった。(三一) わが君よ、パーンダヴァとパーンチャーラの軍、そしてクル軍とはお互いに殺し合い、恐ろしい大音響があがった。(三二) その夜に行なわれたような非常に恐ろしい戦いを、我々も過去の人々も、いまだかつて見たことがなかった。(三三) (第百三十九章)

クリタヴァルマンはユディシティラをうち破る

サンジャヤは語った。——

王よ、そのようにすべての生類を滅ぼす恐ろしい夜戦が行なわれていた時、ダルマ王ユディシティラは、パーンダヴァ、パーンチャーラ、ソーマカの人々に告げた。

「ドローナのみを殺そうと望んで、進撃せよ。(一―二)」

王よ、その王の命令により、パーンチャーラとソーマカの人々は凄まじい叫び声をあげてまさにドローナを攻撃した。(三) 我々もいきり立ち、戦場において、能力と気力と精神力の限り、彼らに叫び返し、反撃した。(四)(五―一二略)

フリディカの息子クリタヴァルマンは怒り、海岸が隆起した海を食い止めるように、ダルマの息子ユディシティラを食い止めた。(一三) ユディシティラは五本の矢でクリタヴァルマンを射て、更に「待て、待て」と言って、二十本の矢で射た。(一四) わが君よ、クリタヴァ

ルマンは怒り、半月形の先の矢でダルマの息子の弓を断ち切り、七本の矢で相手を射た。（二五）そこでダルマの息子ユディシティラは別の弓をとり、十本の矢でクリタヴァルマンの両腕と胸を射た。（二六）わが君よ、その戦いでダルマの息子に射貫かれたクリタヴァルマンは、怒りで身をふるわせて、七本の矢で相手を攻撃した。（二七）ユディシティラは彼の弓を断ち切り、弓懸（ゆがけ）を切り、石で研いだ五本の鋭い矢を送った。（二八）それらの恐ろしい矢は相手の黄金できらびやかな高価な鎧を貫通して、大地に入った。王よ。蛇たちが蟻塚に入るように。（二九）

クリタヴァルマンは一瞬のうちに他の弓をとって、六十本の矢でユディシティラを、九本の矢で御者を射た。（三〇）バラタの最上者よ、限りなく高邁なユディシティラは、彼の大弓を戦車に置いて、蛇のような槍を相手に投げた。彼に投じられたその黄金できらびやかな大槍は、相手の右腕を貫通して大地に入った。（三一―三二）まさにその時、ユディシティラは再び弓をとって、真っ直ぐの矢でクリタヴァルマンをおおった。（三三）それから、最高の戦士であるヴリシュニの勇士（クリタヴァルマン）は、一瞬の半分のうちに、ユディシティラの馬たちと御者を殺し、戦車を破壊した。（三四）そこでパーンダヴァの長子は刀と楯をとったが、クリタヴァルマンは戦場で、鋭い矢によりそれらをも破壊した。（三五）それからユディシティラは戦場で金の柄のついた抗しがたい投槍をとり、速やかにクリタヴァルマンに投じた。（三六）ダルマ王の腕により放たれたそれは激しく飛来したが、手練のクリタヴァルマンは笑うかのようにそれを二つに断ち切った。（三七）それから彼は戦場で、幾百の矢をダルマの息子に浴びせた。そして猛り立ち、鋭い矢で相手の鎧を断った。（三八）王よ、偉大なユディシティラの鎧は、クリタヴァルマンの矢に断ち切られて、戦場に散乱した。星の群が空から落ちるように。（三九）ダルマの息子ユディシティラは、弓を切られ、戦車を失い、鎧を断たれ、相手の矢に苦しんで速やかに戦場から退却した。（四〇）一方、強力なクリタヴァルマンはダルマの息子ユディシティラをうち破ってから、再びドローナの車輪を守った。（四一）（第百四十章）

ドゥルヨーダナ、ビーマと戦う

サンジャヤは語った。――

王よ、ブーリ（ソーマダッタの息子）は戦場において、象が水を飲むために（テクスト疑問）駆けるように襲来する最高の戦士サーティヤキに立ち向かった。（一）サーティヤキは怒って、鋭い五本の矢で速やかに相手の胸を射た。相手の血が流出した。（二）クルの勇士の方も、その戦いにおいて、鋭い十本の矢で、戦いに酔うサーティヤキの胸の間を射た。（三）大王よ、その両者は怒りで赤い眼をして、いきり立って弓を引き絞り、お互いに矢でひどく傷つけ合った。（四）大王よ、ヤマ（閻魔）と死神（アンタカ）のような二人が怒って矢を放つ時、その矢の雨は非常に凄まじいものであった。（五）王よ、二人はお互いに相手を矢でおおって戦場で対峙していた。しばらくの間、その戦いは互角のようであった。（六）

それからサーティヤキは猛り立ち、笑うかのように、戦場において偉大なクルの勇士の弓

を断ち切った。(七) そして「待て、待て」と言って、弓を切られた相手の胸を、速やかに九本の鋭い矢で射た。(八) 強力な敵にしたたか射られた敵を苦しめるプーリは、他の弓をとると、サーティヤキに射返した。(九) 王よ、彼は三本の矢でサーティヤキを射て、笑うかのように、非常に鋭い半月形の先の矢でその弓を断ち切った。(一〇) 大王よ、サーティヤキは弓を断たれて怒りにかられ、相手の広い胸に向けて高速の槍を投じた。(一一) 相手は槍で身体を貫かれ、全身朱に染まって最高の戦車から落ちた。燃える光線を持つ赤い太陽が突然空中から落ちるように。(一二)

勇士プーリが殺されたのを見て、偉大な戦士アシュヴァッターマンは戦場で激しくサーティヤキに駆け寄った。そして、雲がメールに雨を注ぐように、矢の群を相手に浴びせた。(一三) 彼が怒ってサーティヤキの戦車に襲いかかった時、王よ、勇士ガトートカチャが雄叫びをあげてから彼に言った。(一四)

「待て、待て。ドローナの息子よ、私から生きて逃れることはできないぞ。私は今日、お前を殺すであろう。スカンダ（韋駄天）王がマヒシャ（悪魔の名）を殺したように。今日、戦場において、私はお前の戦いの願望を取り除いてやる。(一五)」

敵の勇士を殺す羅刹（ガトートカチャ）はそう言うと、怒りで赤い眼をして、いきり立ってドローナの息子に襲いかかった。獅子が象王に襲いかかるように。(一六) ガトートカチャは車軸（ラタークシャ）（長さの単位。百四アングラ）ほどの矢を、戦士の雄牛であるドローナの息子に雨降らせた。雲が大雨を降らせるように。(一七) ドローナの息子は戦場で笑って、飛来する矢の雨を、すばやく自分の毒蛇のような矢で粉砕した。(一八) それから彼は、急所を断つ高速の鋭い百本の矢で、羅刹の王ガトートカチャをおおった。敵を制する者よ。(一九) 王よ、その羅刹は戦いの最前線において、彼に矢でおおわれて、針でおおわれたヤマアラシのように見えた。(二〇) それから、栄光あるビーマセーナの息子（ガトートカチャ）は怒りにかられ、金剛杵（ヴァジュラ）か雷電のような音をたてる恐ろしい矢で、ドローナの息子を傷つけた。(二一)(二二―二八略)

それからガトートカチャは怒り、その戦いにおいて終末の火のような十本の矢でドローナの息子の胸を射た。(二九) 強力なドローナの息子はその羅刹により、飛来した矢で貫かれて、風に揺すられる樹のように戦場でふるえた。そして彼は失神して旗竿に寄りかかった。(三〇) 王よ、それからあなたの軍のすべての兵たちは「ああ、ああ」という叫びをあげた。王よ、あなたの兵たちはみな、ドローナの息子が殺されたと考えたのである。(三一) 戦場でアシュヴァッターマンがそのような状態でいるのを見て、パーンチャーラやスリンジャヤの軍は獅子吼をした。(三二)

それから敵を苦しめる強力なアシュヴァッターマンは意識を取りもどし、左手で弓を引き絞った。(三三) そして耳まで引き絞った弓により、ガトートカチャめがけて、ヤマの杖のような恐ろしい最上の矢を放った。(三四) 王よ、その美しい羽根のついた恐ろしい最上の矢は、羅刹の胸を貫通して大地に入った。(三五) 大王よ、強力な羅刹王は、戦いに自信のあるドローナの息子に手ひどく射られて、戦車の座席に座り込んだ。(三六) ガトートカチャが失神したのを見て、御者は動揺し、ドローナの息子のいる戦場から、急いで彼を連れ出した。

(三七) 強力なドローナの息子は、羅刹王ガトートカチャを戦場で射貫いてから、大きな声で雄叫びをあげた。(三八) バーラタよ、あなたの息子とすべての戦士たちに称讃されて、彼は真昼の太陽のようにその身体で輝いた。(三九)

一方ビーマセーナはドローナの戦車に対して戦っていたが、ドゥルヨーダナ王は自ら、鋭い矢で彼に対して戦った。(四〇) わが君よ、ビーマセーナは九本の矢で相手を射た。ドゥルヨーダナも、二十本の矢で射返した。(四一) その両者は戦場で矢におおわれて、空で雲の群におおわれた月と太陽のように見えた。(四二) バラタの最上者よ、ドゥルヨーダナ王は「待て、待て」と言って、五本の矢でビーマを射た。(四三) ビーマは九本の矢で彼の弓と旗を断ち切ってから、九十本の真っ直ぐの矢でクルの最上者を射貫いた。(四四) わが君よ、それからドゥルヨーダナはビーマセーナに対して怒り、すべての弓取りたちの見ている前で、矢を放った。王よ。(四五) ビーマはドゥルヨーダナの弓から放たれた矢を破壊して、クルの王に二十五本のクシュドラカ(短い矢)を放った。(四六)

わが君よ、ドゥルヨーダナは怒り、馬蹄形の先の矢でビーマセーナの弓を断ち切り、十本の矢で相手を射た。(四七) 強力なビーマセーナは別の弓をとり、七本の鋭い矢で速やかに王を射た。(四八) ドゥルヨーダナは手練の業で、その弓をも速やかに断った。そして、第二、第三、第四、第五の弓をも断ち切った。(四九) 大王よ、勝ち誇り、驕り高ぶるあなたの息子は、ビーマが新しい弓をとるごとにそれを断ち切った。(五〇) 弓が何度も切られた時、ビーマは戦場において、すべて鉄製のすばらしい槍を投げた。(五一) クルの王はすべての人々と

偉大なビーマが見ている前で、その槍が到着しないうちにそれを三つに断ち切った。(五二) 大王よ、そこでビーマは輝きに満ちた重い棍棒を勢いよく振りまわし、ドゥルヨーダナの戦車めがけて投げた。(五三) その重い棍棒は猛烈な勢いで、戦場においてあなたの息子の馬たちと御者を粉砕した。バラタの雄牛よ。(五四) 王中の王よ、あなたの息子は急いで、黄金で飾られた戦車から飛び下りて、偉大なナンダカの戦車に乗った。(五五) するとビーマは、偉大な戦士であるあなたの息子が死んだと思って、クル軍を威嚇するかのように大声で獅子吼した。(五六) あなたの軍の兵たちも、王が殺されたと考えた。そこですべての者が、いたるところで、「ああ、ああ」と叫んだ。(五七) 王よ、恐れたすべての兵士たちの叫び声を聞いて、また偉大なビーマセーナの雄叫びを聞いて、ユディシティラ王もスヨーダナが死んだと考えて、急いで狼腹(ビーマ)のいる所に行った。(五八―五九) 王よ、パーンチャーラ、ケーカヤ、マツヤ、スリンジャヤの軍は、ドローナのみと戦おうと望んで、全力を尽くして彼に向かって行った。(六〇) そこでドローナと敵軍との激しい戦いが行なわれた。彼らは闇に没してお互いに殺し合った。(六一)

(第百四十一章)

灯明に照らされた激戦

サンジャヤは語った。――

パラタ族の王よ、ヴァイカルタナ・カルナは戦場において、ドローナに対して向かって行

くサハデーヴァを制止した。(一一) サハデーヴァは九本の矢でカルナを射て、更に十本の真っ直ぐの鋭い矢で彼を射た。(一二) カルナは百本の真っ直ぐの矢で相手を射て、手練の業で、速やかに相手の弓の弦を切った。(一三) それから栄光あるマードリーの息子（サハデーヴァ）は他の弓をとって、二十本の矢でカルナを射た。それは奇蹟のようであった。(一四) カルナは真っ直ぐの矢で相手の馬たちを殺して、そして速やかに半月形の先の矢で相手の御者をヤマ（閻魔）の住処に送った。(一五) 戦車を失ったサハデーヴァは、刀と楯をとったが、カルナは笑うかのように、それをも矢で粉砕した。(一六) それからサハデーヴァは戦場において、黄金できらびやかな、非常に恐ろしい重い大きな棍棒を、カルナの戦車めがけて投じた。(一七) 激しい勢いで飛来する、サハデーヴァに投じられたその棍棒を、カルナは矢で防御し、それを大地に落下させた。(一八) サハデーヴァは棍棒が破壊されたのを見て、速やかにカルナに槍を投げた。カルナはその槍をも矢で断ち切った。(一九) 大王よ、それからサハデーヴァは動揺し、速やかに最上の戦車から降りて、立ちはだかるカルナを見て、戦車の車輪を持って、カルナめがけて投げつけた。(二〇) カルナは激しく飛来する、振り上げられたカーラ（時間、破壊神）の輪（時輪）のようなそれを見て、幾千の矢でそれを断ち切った。(二一) 偉大な彼が矢でその車輪を無効にした時、サハデーヴァは彼の矢で食い止められて戦場を捨てた。(二二) バラタの雄牛よ、カルナはしばし彼を追いかけて、笑ってサハデーヴァに告げた。王よ。(二三)

「勇士よ、戦場においてより優れた戦士たちと戦ってはいけない。マードリーの息子よ、同等の者たちと戦え。私の言葉を疑ってはならぬ。(二四)」

それからカルナは弓の先で相手をこづいて再び告げた。

「あそこにアルジュナが戦場でクル軍と奮戦している。マードリーの息子よ、もしそうしたければ家に帰れ。(二五)」

最高の戦士カルナはこのように告げると、笑うかのように、戦車に乗ってパーンチャーラとパーンダヴァの軍隊の方に向かった。(二六) 王よ、敵を殺すその勇士は、サハデーヴァを殺すことができたが殺さなかった。約束を守る彼はクンティーの言葉を思い出したのである。(二七) 王よ、それからサハデーヴァは矢に苦しみ、意気阻喪して、またカルナの言葉の矢に苦しみ、生きているのが厭になった。(二八) その勇士は戦場で急いでパーンチャーラの勇士ジャナメージャヤの戦車に乗った。(二九)

マドラ国王（シャリヤ）は、ドローナと戦うために急いで襲来した勇士ヴィラータとその軍隊を、矢の群でおおった。(三〇) 王よ、その二人の強力な弓取りの間に、戦場で古(いにしえ)のジャンバ（悪魔の名）とインドラとの戦いのような戦いが行なわれた。(三一) 大王よ、マドラ国王は軍隊の長ヴィラータを、真っ直ぐの百本の鋭い矢で速やかに射た。(三二) 王は九本の鋭い矢を彼に射返した。そしてまた七十三本の矢で、更に百本の矢で相手を射た。(三三) マドラ国王は相手の四頭の戦車馬を殺し、戦場において、御者と軍旗を戦車の座席から射落とした。(三四) 勇士ヴィラータは馬を殺された戦車から速やかに飛び下り、弓を引き絞って鋭い矢を放ちつつ立っていた。(三五) シャターニーカは兄が馬を殺されたのを見て、すべての人々が見ている前で、戦車により速やかに襲いかかった。(三六) マドラ国王は激戦において、襲来するシャターニ

ーカを多くの矢で射貫いて、彼をヤマ（閻魔）の住処に送った。（二七）その勇士が殺された時、最高の戦士ヴィラータは速やかに、旗で飾られたその〔弟の〕戦車に乗った。（二八）それから彼は、怒りから両眼を見開き、勇武が倍増して、速やかに矢でマドラ国王の戦車をおおった。（二九）それからマドラ国王は怒り、百本の真っ直ぐの矢で、軍隊の長ヴィラータの胸を強く撃った。（三〇）大王よ、ヴィラータは手ひどく射貫かれ、戦車の座席に座り込み、すっかり意識が朦朧となった。バラタの雄牛よ。彼の御者は戦場において、矢で傷ついた彼を運び去った。（三一）バーラタよ、それから夜間に、その大軍は、戦場を輝かせるシャリヤにより幾百の矢で射られて逃走した。（三二）

王中の王よ、クリシュナとアルジュナは自軍が逃走するのを見て、シャリヤが立っている場所に行った。（三三）王よ、その二人に対して、羅刹王アランブサ（前に死んだはずだが、また登場する）が、八つの車輪をそなえた最高の戦車に乗って対戦した。（三四）その戦車には馬の顔をした、見るも恐ろしいピシャーチャ鬼がつながれ、その旗は血で濡れ、赤い花輪で飾られ、黒鉄でできていて、熊の皮でおおわれ、恐ろしく巨大であった。（三五）それには輝かしい禿鷲の王の旗標が立っていた。その恐ろしい禿鷲は、きらびやかな羽根を持ち、眼を見開き、嘴を上げて鳴き声を立てていた。（三六）王よ、その羅刹は砕かれたアンチモニーの堆積のように輝いていた。彼はやって来るアルジュナを、アルジュナの頭に幾百の矢を注いで制止した。山の王が嵐を食い止めるように。（三七）戦場で人間と羅刹の間に、見る者すべての喜びを生む非常に激しい戦いが行なわれた。（三八）アルジュナは百本の矢で相手を射た。そして

九本の鋭い矢でそびえ立つ旗を断ち切った。（三九）それから三本の矢で御者を、三本の矢でトリヴェーヌカ（車軸と軛を連結する三叉の木材）を、一本の矢で弓を、四本の矢で四頭の馬を射た。そして、戦車を失った相手の振り上げた刀を矢で両断した。（四〇）バラタの雄牛よ、それからアルジュナは四本の鋭い矢で羅刹王を苦しめた。相手は射貫かれて恐怖にかられ逃走した。（四一）王よ、アルジュナは彼をうち破ってから、人間や象や馬に矢の群を浴びせつつ、速やかにドローナのもとに近づいた。（四二）大王よ、誉れ高いアルジュナに殺されつつ、兵たちは風に倒される樹々のように大地に倒れた。（四三）彼らが偉大なアルジュナに滅ぼされている間、王よ、あなたの息子たちのすべての軍隊は逃走した。（四四）

（第百四十二章）

サンジャヤは語った。——

バーラタよ、シャターニーカ（ナクラの息子）が速やかにあなたの軍を燃やしていた時、あなたの息子チトラセーナは彼を制止した。（一）ナクラの息子は鉄矢でチトラセーナをひどく苦しめた。そしてチトラセーナは十本の鋭い矢を相手に射返した。（二）大王よ、そしてチトラセーナはその戦いにおいて、九本の鋭い矢でシャターニーカの胸の間を射た。（三）ナクラの息子は真っ直ぐの矢で相手の鎧をその身体から取り去った。それは奇蹟のようであった。（四）王よ、あなたの息子は鎧を脱いでこよなく輝いた。その時期に、蛇が脱け殻を捨てて輝くように。王中の王よ。（五）それからナクラの息子は、鋭い矢で相手の旗を断ち切った。大王よ、

そして奮戦している相手の弓を断ち切った。(六) 大王よ、勇士チトラセーナは戦場で弓を切られ、鎧を脱がされたが、敵を貫く別の弓をつかんだ。(七) それからバラタ族の勇士チトラセーナは戦場で怒り、速やかに九本の矢でナクラの息子を射た。(八) わが君よ、すると最高の人シャターニーカも怒り、チトラセーナの四頭の馬と御者を殺した。(九) 強力な勇士チトラセーナはその戦車から飛び下り、二十五本の矢でナクラの息子を苦しめた。(一〇) 彼がそのような行為をした時、ナクラの息子は戦場において、半月の先の矢で彼の宝物で飾られた弓を断ち切った。(一一) 彼は弓を切られ、戦車を失い、馬と御者を殺され、速やかに偉大なクリタヴァルマンの戦車に乗った。(一二)(一三―二八略)

プラティヴィンディヤ(ユディシティラの息子)は怒って、戦場で敵を燃やしていた。あなたの息子である勇士ドゥフシャーサナは彼に立ち向かった。(二九) 王よ、両者の対戦はめざましいもので、雲のなくなった空における水星と金星との遭遇のようであった。(三〇) 戦場でなしがたい行為をするプラティヴィンディヤに対し、ドゥフシャーサナは三本の矢でその額を射た。(三一) あなたの息子である強力な弓取りにしたたか射られて、強力な彼は(三つの)峰のある山のように輝いた。(三二) 勇士プラティヴィンディヤは戦場で、ドゥフシャーサナを九本の矢で射てから、更に七本の矢で射た。(三三) バーラタよ、そこであなたの息子はなしがたい行為をなした。彼は恐るべき矢でプラティヴィンディヤの馬たちを倒した。(三四) そして半月形の先の矢でその弓取りの御者と軍旗を倒した。そして更に、相手の戦車を幾百に粉砕した。王よ。(三五) それからあなたの息子は怒って、真っ直ぐの矢で、相手の旗、箙(えびら)、手綱、

引き綱をずたずたに断ち切った。(三六) 徳性あるプラティヴィンディヤは、戦車を失ったが、弓を手にして立ち、あなたの息子に対して幾百の矢を浴びせて戦った。(三七) あなたの息子は手練の業を示して、馬蹄形の先の矢で相手の弓を断ち切り、そして弓を失った相手を十本の矢で苦しめた。(三八) 彼が戦車を失っているのを見て、彼の兄弟である勇士たちは軍隊とともに、大急ぎで彼を援助した。(三九) 大王よ、それから彼はスタソーマの輝かしい戦車に飛び乗り、弓をとってあなたの息子を射た。(四〇) それからあなたのすべての兵たちはあなたの息子を取り囲み、戦場で大軍を擁して攻勢をかけた。(四一) バーラタよ、それからその真夜中の恐ろしい時に、あなたの軍と敵軍との間に戦いが展開し、ヤマの王国の人々を増加させた。(四二)

(第百四十三章)

サンジャヤは語った。――

戦場においてナクラが激しくあなたの軍隊を攻撃していた時、シャクニは怒って、「待て、待て」と言いながら彼に襲いかかった。(一) 両雄は敵意を抱いて、お互いに相手を殺そうと望み、完全に引き絞った弓から放たれた矢により、お互いに攻撃し合った。(二) 王よ、シャクニは速やかに矢の雨を放ち、ナクラも同様に、戦いにおいてその技倆を発揮した。(三) 大王よ、その時その両雄は戦場において、矢の棘でおおわれ、棘でおおわれたシャールマリー樹(あるいは、鞘に包まれたシャールマリーの種を指すか)のように輝いていた。(四) 王よ、両者は眼を見開き、斜めににらみ合い、怒りで赤い眼をして、お互いに相手を燃やすかのようだった。(五) あなたの義弟(シャクニ)

は猛り立ち、笑うかのように、一本の鋭いカルニン（突起のある矢）でナクラの胸を射貫いた。（六）ナクラはあなたの義弟である弓取りに手ひどく射貫かれて、戦車の座席に座り込んだ。そして彼の意識は朦朧となった。（七）王よ、高慢な宿敵がそのような状態になったのを見て、シャクニは夏の終わりの雲のように雄叫びをあげた。（八）それからナクラは意識を取りもどし、口を開いた死神（アンタカ）のように、再びシャクニに襲いかかった。（九）バラタの雄牛よ、怒った彼は六十本の矢でシャクニを射て、更に百本の鉄矢でその胸の間を射た。（一〇）それから相手の矢をつがえた弓を握りのところで断ち切った。そして急いで相手の軍旗を切り、戦車から地面に落下させた。（一一）大王よ、シャクニはしたたか射られて、戦車の座席に座り込んだ。非の打ち所のない人よ、あなたの義弟が意識を失って倒れたのを見て、彼の御者は戦車により速やかに彼を戦いの最前線から運び去った。（一二）そこでパーンダヴァたちと彼らに従う人々は喚声をあげた。敵を苦しめるナクラは戦場で敵をうち破り、猛り立って、「ドローナの軍に私を運んで行け」と御者に告げた。（一三）英邁なマードリーの息子のその言葉を聞いて、彼は戦場でドローナが戦っている場所に行った。王よ。（一四）

王よ、シカンディンは戦場でドローナを求めていたが、シャラドヴァットの息子クリパは猛り立って、猛烈な勢いで彼に向かって行った。（一五）敵を制するガウタマ（クリパ）が急いでドローナのもとに近づいた時、シカンディンは笑うかのように、九本の矢で彼を射た。（一六）大王よ、あなたの息子に好ましいことをする師匠（クリパ）は、五本の矢でシカンディンを射て、更に二十本の矢で射た。（一七）王よ、その両者の間に恐ろしい大激戦が行なわれた。それは

神々と阿修羅との戦いにおける、シャンバラと神々の王との戦いのようであった。（一八）二人の勇士は空を矢の網でおおった。それはもともと恐ろしい様子だったが、更にいっそう恐ろしく見えた。（一九）バラタの最上者よ、戦いに専念する戦士たちにとって、その夜は終末の夜のようで、おぞましく恐怖をもたらすものであった。（二〇）

大王よ、シカンディンは半月形の矢でガウタマの大弓とその弦と矢を断ち切った。（二一）クリパは怒って彼に恐ろしい槍を投げた。その槍の柄は黄金で、先端は鋭く、研師によく研がれていた。（二二）シカンディンは多くの矢でその飛来する槍を断ち切った。その燃え上がる輝きに満ちた槍は、あたりを照らしつつ地面に落ちた。（二三）大王よ、そこで最高の戦士ガウタマは他の弓をとって、鋭い矢でシカンディンをおおった。（二四）最高の戦士シカンディンは、その戦いにおいて誉れ高いガウタマに矢でおおわれて、戦車の座席に座り込んだ。（二五）戦場でクリパは相手が座り込んだのを見て、殺そうとして多くの矢で射た。バーラタよ。（二六）

ヤジュニャセーナ（ドルパダ）の息子がその戦いにおいて退却したのを見て、パーンチャーラとソーマカの軍は彼をぐるりと取り巻いた。（二七）同様に、あなたの息子たちも、大軍とともに、最高のバラモン（ドローナ）を取り巻いた。それから再び戦いが行なわれた。（二八）王よ、戦場で戦士たちがお互いに攻撃し合っている時、轟く雲の音のような喧噪があがった。（二九）騎兵や象兵たちがお互いに近くで走りまわっている時……。王よ、恐るべき戦場は輝いていた。（三〇）大王よ、そして走りまわる歩兵の足音で、大地は恐怖にかられた女のようにふるえた。

(三一)(三二―三五略)大王よ、戦車と象と馬の上で輝く灯明は、空から落下する大流星のようであった。(三六)パラタの最上者よ、戦いの最前線で、その夜は灯明に照らされて昼のようであった。王よ。(三七)世間において、闇が太陽に遍(あまね)く照らされて消失するように、恐ろしい闇は輝く灯明に照らされて消失した。(三八)偉大な人々の武器や鎧や宝玉の輝きはすべて、それらの灯明に照らされてうち消された。(三九)バラタの最上者よ、その夜に激戦が行なわれていた時、戦場で父は息子を殺した。(四〇)そして迷妄により息子は父を殺し、友は友を殺した。親類は親類を殺し、叔父は甥を殺した。(四一)そしてお互いに、味方が味方を殺し、敵が敵を殺した。その夜、戦闘は常軌を逸して凄まじく、恐怖をもたらすものとなった。(四二)

(第百四十四章)

サーティヤキを殺せ

サンジャヤは語った。――

大王よ、その恐ろしい大激戦が行なわれていた時、ドリシタデュムナはまさにドローナを攻撃した。(一)彼は最高の弓をとり(異本による)、繰り返し弦を引き、黄金で飾られたドローナの戦車を攻撃した。(二)大王よ、その時ドローナを殺そうとして向かって行くドリシタデュムナを、パーンチャーラとパーンダヴァの軍が取り巻いていた。(三)最高の師匠であるドローナがそのように取り囲まれたのを見て、あなたの息子は戦場で努力して、いたるところでドローナを守った。(四)かくて夜中に交戦する軍隊の海は、風に隆起させられ、諸生物が動揺する、恐ろしい二つの海のようであった。(五)大王よ、それからパーンチャーラの王子は、速やかに五本の矢でドローナの胸を射貫き、獅子吼をした。(六)バーラタよ、ドローナは戦場において二十五本の矢で相手を射て、他の半月形の先の矢で相手の輝きに満ちた弓を断ち切った。(七)パラタの雄牛よ、ドリシタデュムナの方はドローナに射貫かれ、唇を嚙みしめ、速やかに弓を投げ捨てた。(八)大王よ、それから栄光あるドリシタデュムナは怒り、ドローナを殺そうと望んで他の最上の弓をとった。(九)そして敵の勇士を殺す彼は、その美しい弓を耳まで引き絞り、ドローナを滅ぼす恐ろしい矢を放った。(一〇)戦場でその強力な男に放たれた恐ろしい矢は、昇った太陽のようにその軍隊を輝かせた。(一一)神々、ガンダルヴァ、人間たちは、その恐ろしい矢を見て、戦場で「ドローナに幸いあれ」と言った。(一二)王よ、しかしカルナは手練の業で、その矢が師匠の戦車に達しないうちにそれを十二に断ち切った。(一三)わが君よ、カルナによりばらばらに切られたその矢は、速やかに落下した。無毒の蛇のように(異本による)。(一四)カルナは戦場において、真っ直ぐの矢でその矢を断ち切ってから、十本の矢でドリシタデュムナを射た。(一五)そして、ドローナの息子は五本の矢で、ドローナ自身は七本の矢で、シャリヤは九本の矢で、ドゥフシャーサナは三本の矢で彼を射た。(一六)そしてドゥルヨーダナは二十本の矢で、シャクニは五本の矢で射た。そしてすべての勇士たちも急いでパーンチャーラの王子を射た。(一七)かくて七名の勇士たちが戦場でドロ

ーナを援助するために彼を射たが、王よ、彼は動揺することなく、ドローナ、ドローナの息子、カルナ、あなたの息子など、すべての人々に対して、三本ずつの矢を射返した。（一八）それらの最高の戦士たちは、戦場でその弓取りに射られたが、再びそれぞれ五本の矢で速やかにドリシタデュムナを射た。（一九）

王よ、ドルマセーナは怒って、「待て、待て」と言って、一矢でドリシタデュムナを射て、更に他の三本の矢で速やかに彼を射た。（二〇）しかし彼は三本の鋭い矢でドルマセーナを射貫いた。それらの矢は金の羽根を持ち、石で研がれ、戦いにおいて相手の生命を終わらせるものであった。（二一）そして強力な彼は、更に他の半月形の先の矢で、黄金で輝く耳環をつけたドルマセーナの頭を胴体から切り離した。（二二）唇を噛みしめたその頭は戦場の大地に落ちた。強風に揺られた熟した椰子の実が落ちるように。（二三）

勇士ドリシタデュムナは更に鋭い矢で相手の勇士たちを射て、半月形の先の矢で、めざましく戦うカルナの弓を断ち切った。（二四）カルナはそのように弓を切られたことに我慢できなかった。非常に恐ろしい獅子が、尾を切られることに我慢できないように。（二五）カルナは怒りで赤い眼をして息を吐き、他の弓をとると、強力なドリシタデュムナに矢の群を浴びせた。（二六）カルナが怒ったのを見て、勇猛な六名の戦士の雄牛は急いでパーンチャーラの王子を殺そうとして取り囲んだ。（二七）あなたの六名の勇猛な戦士たちを前にして、ドリシタデュムナは死神の口に到達したと我々は思った。（二八）

ちょうどその時、ダシャールハの勇士サーティヤキは、矢を注ぎながら、奮戦するドリシ

タデュムナに近づいて来た。（二九）戦いに酔う偉大な射手サーティヤキが来た時、カルナは十本の真っ直ぐ飛ぶ矢で彼を射た。（三〇）大王よ、サーティヤキはすべての勇士の見ている前で、彼を十本の矢で射た。そして「逃げるな。待て」と言った。（三一）かくて強力なサーティヤキと偉大なカルナとの間に、バリとインドラとの戦いのような恐るべき戦いが行なわれた。（三二）王族の雄牛であるサーティヤキは、弓籠手（ゆごて）の音で人々を恐れさせつつ、蓮の眼をしたカルナに対して矢を射た。（三三）大王よ、強力なカルナは弓の音で大地をふるわせて、サーティヤキに射返した。（三四）カルナは幾百の多種多様の矢（ヴィパータ、カルニン、ナーラーチャ、ヴァツァダンタ、クシュラ）でサーティヤキを射た。（三五）ヴリシュニ族の最高の戦士であるサーティヤキも、カルナに矢を浴びせた。その戦いは互角であった。（三六）（三七—四三略）

王よ、勇士を滅ぼすその戦いが繰り広げられていた時、ガーンディーヴァ弓の大きな音が響きわたった。（四四）王よ、戦車の響きとガーンディーヴァの音を聞いて、カルナはドゥルヨーダナに次のように言った。（四五）

「あそこにアルジュナは、すべてのシビ族を殺し、特にその人中の雄牛たちを殺し、パウラヴァの偉大な射手たちを殺して、彼のガーンディーヴァの、吼えるインドラの大声のような大きな音が聞こえる。明らかにアルジュナは自分にふさわしい行為をしている。（四六—四七）王よ、このバラタ族の軍は大いに撃破されている。散乱した軍隊は決して踏みとどまらない。（四八）それは風に吹き散らされた雲の群のように分裂する。それは海上の船が難破するように、アルジュナに遭遇して撃破される。（四九）王よ、真夜中、ガーンディーヴァ弓に送られ

た矢により射られて逃げる幾百という、主要な戦士のたてる大声が聞こえる。王中の虎よ、それは空中の雷鳴のようである。(五〇)『ああ、ああ』という音声や獅子吼や太鼓など、多様な音がアルジュナの戦車の近くであがるのを聞きなさい。(五一)ここ、我々の間に、最低のサートヴァタであるサーティヤキが立っている。もし今、この目標が得られれば、我々はすべての敵をうち破るであろう。(五二)そしてあのパーンチャーラの王子はドローナと交戦している。王よ、彼は最上の男である戦士たちにすっかり取り囲まれている。(五三)もし我々がサーティヤキとドリシタデュムナを殺したら、大王よ、疑いもなく我々の勝利は確実になろう。(五四)大王よ、アビマニユを殺した時のように、勇士サーティヤキとドリシタデュムナの両雄を取り囲んで殺すよう、我々は努力しよう。(五五)バーラタよ、サーティヤキが多数のクルの雄牛と交戦しているのを知って、アルジュナはドローナ軍の方に、前方から向かって来る。(五六)サーティヤキが大勢に囲まれたことをアルジュナが知らないうちに、多くの最高の戦士たちがそちらに行くようにせよ。(五七)サーティヤキがすぐに他界するように、勇士たちは急いで激しく矢を放て。(五八)」

王よ、あなたの息子はカルナの意見を聞いてから、戦場で、インドラが誉れ高いヴィシュヌに告げるように、スバラの息子（シャクニ）に告げた。(五九)

「退くことのない一万の象と、一万の戦車に囲まれて、アルジュナに向かって進みなさい。(六〇)ドゥフシャーサナ、ドゥルヴィシャハ、スバーフ、ドゥシュプラダルシャナは、多くの歩兵に囲まれて、あなたに従って行くであろう。(六一)強力な叔父よ、二人のクリシュナとダルマ王を殺しなさい。バーラタよ、ナクラとサハデーヴァとビーマセーナを殺しなさい。(六二)神々の勝利の希望が神々の王（インドラ）にあるように、私の勝利の希望はあなたに依存する。叔父よ、スカンダが阿修羅たちを殺したように、クンティーの息子たちを殺しなさい。(六三)」

王よ、あなたの息子にこのように言われて、シャクニは大軍を率い、あなたの息子たちへの好意のために、パーンダヴァたちを燃やそうと望んで、あなたの息子たちとともに、パーンダヴァの方に向かって行った。それからあなたの軍と敵軍との間に戦いが始まった。(六四―六五)王よ、シャクニがパーンダヴァの軍に対して進軍した時、カルナは大軍を擁して、サーティヤキに対し、幾百の矢を放って、速やかに挑戦した。同様に、すべてのパーンダヴァたちはサーティヤキを取り巻いて（守った）。(六七)バーラタよ、その夜、偉大なドローナと、勇士ドリシタデュムナ及びパーンチャーラ軍との間に、激戦が行なわれた。(六八)

（第百四十五章）

パーンダヴァ軍とクル軍との全面的な戦闘

サンジャヤは語った。――

それから、すべてのあなたの兵たちは戦いに酔い、我慢できなくなり、いきり立ち、ユユダーナ（サーティヤキ）に対して急いで襲いかかった。(一)王よ、装備され金銀で飾られた戦車により、

騎兵により、象兵により、彼らはサーティヤキを取り囲んだ。(二)それらの勇士は、サーティヤキをぐるりと取り囲んでから、彼を威嚇しつつ獅子吼をした。(三)強力な彼らはサーティヤキを殺そうと望み、急いで、不屈の勇者サーティヤキに鋭い矢を浴びせた。(四)

敵の勇士を殺す強力なサーティヤキは、急いで襲いかかる彼らを見て、多くの矢を放って彼らを迎え撃った。(五)偉大な射手である勇士サーティヤキは戦いに酔い、真っ直ぐの恐ろしい矢で彼らの頭を切り落とした。(六)そしてサーティヤキは、馬蹄形の先の矢を用いて、あなたの兵たちの多くの象の鼻や馬の首や諸々の武器を切り落とした。(七)バーラタよ、落下した払子(ヤクの尾)や白い傘により大地はおおわれていた。天空が星々におおわれているように。主よ。(八)バーラタよ、戦場でサーティヤキと戦っている彼らの騒々しい声は、叫んでいる鬼霊たちの声のようであった。(九)大地はその大きな音声に満たされた。その夜は凄まじく、恐怖をもたらすものであった。(一〇)

真夜中、自軍がサーティヤキの矢に撃たれ、撃破されるのを見て、そして身の毛がよだつ大きな音声を聞いて、王よ、最高の戦士であるあなたの息子は御者に繰り返し告げた。

「あの音がする所に、馬たちをかりたてよ。(一一―一二)」

御者は彼に命じられて、サーティヤキの戦車の方に馬たちをかりたてた。(一三)それから、めざましく戦う、手練の早業の、疲れを知らぬ屈強な弓取りであるドゥルヨーダナはいきり立ち、サーティヤキに襲いかかった。(一四)それからサーティヤキは、弓を引き絞って放った、肉と血を食らう十二本の弓でドゥルヨーダナを射た。(一五)まずサーティヤキにそのように矢で苦しめられたドゥルヨーダナは、怒ってサーティヤキに対し十本の矢を射返した。(一六)バラタの雄牛よ、かくてパーンチャーラ軍とすべてのバラタ族の軍との間に、恐ろしい激戦が行なわれた。(一七)

サーティヤキは怒り、その戦いにおいて、八十本の矢であなたの息子である勇士の胸を射た。バーラタよ。(一八)それから彼は戦場で、あなたの息子の馬たちをヤマの住処に送り、一矢により速やかに御者を戦車から落とした。(一九)王よ、あなたの息子は馬を殺された戦車の上に立ち、サーティヤキの戦車に向けて鋭い矢を放った。(二〇)王よ、しかしサーティヤキは手練の業を発揮し、戦場であなたの息子が放った五十本の矢を断ち切った。(二一)わが君よ、それから彼は戦場において、別の半月形の先の矢であなたの息子の大弓を握りのところで激しく切断した。(二二)全世界の主であるその王は、戦車と弓を奪われ、速やかにクリタヴァルマンの輝く戦車に乗った。(二三)王よ、ドゥルヨーダナが退却した時、真夜中、サーティヤキはその矢であなたの軍隊を敗走させた。(二四)

王よ、シャクニは幾千の戦車、幾千の象兵、幾千の騎兵によりアルジュナをぐるりと取り囲み、あたり一面を騒々しくしていた。(二五)王族たちはカーラ(破壊神)にかりたてられて、アルジュナに対して神的な偉大な武器を浴びせて、アルジュナに挑戦していた。(二六)アルジュナは猛り立って、それらの幾千の戦車と象兵と騎兵を多大に殺害し、撃退した。(二七)それから勇士シャクニは戦場で笑うかのように、鋭い矢でアルジュナを射た。(二八)そして更に、百本の矢でその勇士を射た。バーラタよ、アルジュナは戦場で、二十本の矢で相手を

射た。(二九) そして、他の勇士たちを、三本ずつの矢で射た。王よ、アルジュナは戦場において、矢の群で彼らを食い止めて、あなたの兵たちを殺した。インドラが阿修羅たちを殺すように。(三〇) 大王よ、切られた腕、幾千の身体におおわれ、大地は花々におおわれるかのように輝いていた。(三一)

アルジュナは更に五本の真っ直ぐの矢でシャクニを射て、三本の矢でウルーカ（シャクニの息子）を射た（異本による）。(三二) ウルーカも彼を射てから、クリシュナを射た。そして、大地を満たして大声で雄叫びをあげた。(三三) 一方アルジュナは、速やかに進んで、シャクニの弓を断ち切った。そしてその四頭の馬をヤマの住処に送った。(三四) バラタの雄牛よ、それからシャクニは戦車から飛び下り、急いでウルーカの戦車に乗った。王よ。(三五) (三六―四一略)

大王よ、ドリシタデュムナは三本の矢でドローナを射て、速やかに鋭い矢でその弓の弦を切った。(四二) 王族を滅ぼす勇士ドローナは、その弓を座席に置いて、急いで他のより強力な弓をとった。(四三) 王よ、それからドローナは戦場において、七本の矢でドリシタデュムナを射て、五本の矢で御者を射た。(四四) 勇士ドリシタデュムナは、速やかに矢により相手を食い止め、幾百幾千のクル族の軍隊を粉砕した。(四五) あなたの息子の軍隊が殺されている時、血の洪水で波立つ恐ろしい川が流出した。(四六) その川は両軍の間を流れ、人と馬と象を運び、ヴァイタラニー川（地獄の川）のように、ヤマの国土に向かって流れた。(四七) 栄光あるドリシタデュムナはその軍隊を敗走させて、こよなく輝いた。威光あるインドラが神々の群の中で輝くように。(四八) その時、ドリシタデュムナとシカンディンは大法螺を吹き鳴らし

た。双子（ナクラとサハデーヴァ）とサーティヤキと狼腹（ビーマ）も吹き鳴らした。(四九) パーンダヴァの勇士たちはあなたの幾千の戦士をうち破って勝ち誇り、勝利に酔い、あなたの息子、カルナ、ドローナ、ドローナの息子である勇士が見ている前で獅子吼をした。王よ。(五〇―五一)

（第百四十六章）

サンジャヤは語った。――

王よ、あなたの息子は自軍が偉大な人々に殺されつつ敗走するのを見て大いに怒った。(一) 雄弁な彼は最高の勝利者であるドローナとカルナに急いで近づき、憤然として次のように言った。(二)

「戦場でシンドゥ国王がアルジュナに殺されたのを見て、あなた方二人は怒ってここでの戦いを始めた。(三) わが軍がパーンダヴァ軍に殺されている時、あなた方は彼らをうち破る能力がありながら、あたかも能力がないかのように見ている。(四) もしあなた方が私を捨てるつもりなら、あの時『我々二人は戦いでパーンドゥの息子たちを殺すであろう』と私に言うべきではなかった。誇りを与える人たちよ。(五) あの時私はその言葉を聞いて、あなた方に認められて、パーンダヴァたちに敵対したのである。それは戦士たちの滅亡をもたらすのに。(六) 人中の雄牛たちよ、もしあなた方が私を捨てないなら、ふさわしい勇武を発揮して戦いなさい。こよなく勇猛な者たちよ。(七)」

その二人の勇士は、あなたの息子により言葉の鞭でかりたてられ、打たれた蛇のように戦い始めた。(八) それから二人の最高の戦士、世界一の弓取りたちは、戦場でサーティヤキをはじめとするパーンダヴァたちに襲いかかった。(九) 同様にパーンダヴァたちも、そろって、自軍に囲まれて、何度も雄叫びをあげる両雄を攻撃した。(一〇)

さて、すべての戦士のうちの最上者である偉大な射手ドローナは猛り立ち、速やかに十本の矢でシニの雄牛（サーティヤキ）を射た。(一一) カルナは十本の矢で、あなたの息子は七本の矢で、ヴリシャセーナは十本の矢で、シャクニは七本の矢で射た。クルの王よ、彼らは戦場でサーティヤキを取り囲んだ。(一二) 戦場でパーンダヴァ軍を殺害しているドローナを見て、ソーマカ軍は速やかに矢の雨によりいたるところから彼を射た。(一三)

王よ、それからドローナは王族（クシャトリヤ）たちの生命を奪った。太陽が光線により闇を払うように。バラタ族の王よ。(一四) 王よ、ドローナに殺されつつあるパーンチャーラ軍はお互いに叫び合い、彼らの騒々しい音声が聞こえた。(一五) ある人々は息子を捨て、ある人々は父親を捨て、ある人々は兄弟や叔父を捨て、ある人々は甥や友人や親類縁者を捨て、生命惜しさに急いで逃げて行った。(一六) また他の人々は迷妄に陥り、うろたえてまさにドローナの方に向かって行った。また他のパーンダヴァ軍の戦士たちはその戦いにおいて他の世界に行った。(一七) 王よ、このようにパーンダヴァ軍は偉大な人々に殺されつつ、夜中、幾千の松明を捨てて、ビーマセーナ、アルジュナ、クリシュナ、双子、ダルマの息子、サーティヤキが見ている前を逃走した。(一八―一九) 世界が闇におおわれた時、何も見分けられなくなった。しかし

クル軍の照明により敵が逃げて行くのが認められた。(二〇) 王よ、偉大な戦士であるドローナとカルナは、多くの矢を浴びせて、逃走する敵軍を背後から殺した。(二一) パーンチャーラ軍が崩壊しすっかり分裂した時、クリシュナは落胆してアルジュナに告げた。(二二)

「偉大な射手であるドローナとカルナの二人はそろって、ドリシタデュムナとサーティヤキ、及びパーンチャーラ軍を矢で手ひどく攻撃した。(二三) 我々の勇士たちは、彼ら二人の矢の雨によって壊滅した。クンティーの息子よ、わが軍は制止されても踏みとどまらない。(二四) 我々二人は、陣形を整えて武器を振り上げるすべての軍とともに、ドローナとカルナとを食い止めるべく努力しよう。(二五) というのはあの二人は強力な勇士で、武器に通達し、勝ち誇り、ほっておいたら今夜、猛り立ってわが軍を滅ぼすであろう。あそこに恐ろしいビーマが、再び軍隊を引き返させて進んで行く。(二六)」

王よ、クリシュナはそこで狼腹（ビーマ）がそのように進撃するのを見て、アルジュナを喜ばせるかのように再び告げた。(二七)

「あそこに腕自慢のビーマがソーマカとパーンダヴァの軍に囲まれて、いきり立って、速やかに強力なドローナとカルナに向かって進んで行く。(二八) パーンドゥの息子よ、すべての軍隊を元気づけるために、ビーマといっしょに、そしてパーンチャーラの勇士たちといっしょに戦いなさい。(二九)」

そこで二人の人中の虎であるクリシュナとアルジュナは、ドローナとカルナのところに行って、戦いの最前線に陣取っていた。(三〇)

それからユディシティラの大軍は再び引き返した。そしてドローナとカルナは戦場で敵を粉砕し続けた。（三一）王よ、かくてその夜、大々的な激戦が行なわれた。月の出に隆起した二つの海が戦うように。（三二）それからその夜、あなたの軍隊も手に持った灯明を捨てて、狂ったかのようにパーンダヴァ軍と戦った。（三三）そのこよなく恐ろしい夜がほこりと闇におおわれた時、兵たちは勝利を願って、ただ姓名を名乗り合うことによって戦った。（三四）大王よ、挑戦する王たちが名乗る名前が聞こえた。それはあたかも婿選び式（スヴァヤンヴァラ）において名前が告げられているようであった。（三五）人々がいきり立って戦い、勝利したり敗れたりしている時、突然沈黙したり、あるいは大きな声をあげたりした。（三六）クルの最上者よ、灯明が見られる所にはどこにでも、勇士たちが蝗（いなご）のように倒れていた。（三七）王中の王よ、このようにパーンダヴァ軍とクル軍が全面的に戦っている間に、夜の闇はいよいよ深くなった。（三八）

（第百四十七章）

無敵なカルナに対しガトートカチャを戦わせる

サンジャヤは語った。——

それから敵の勇士を殺すカルナは、戦場でドリシタデュムナを見て、急所を貫く十本の矢でその胸を射た。（一）わが君よ、ドリシタデュムナも喜び勇んで、「待て、待て」と言って、速やかに五本の矢を彼に射返した。（二）その二人のすばらしい勇士は、戦場においてお互いに矢で相手をおおい、弓を引き絞って放った矢により相互に相手を射た。（三）それからカルナは戦場において、パーンチャーラの長ドリシタデュムナの御者と四頭の馬を矢で射貫いた。（四）そしてカルナは、鋭い矢で相手の最高の弓を断ち切り、半月形の先の矢でその御者を戦車の座席から落とした。（五）ドリシタデュムナは戦車と馬と御者を失い、恐ろしい鉄棒をとって、カルナの馬たちを粉砕した。（六）毒蛇のようなカルナの多くの矢に射貫かれたドリシタデュムナは、徒歩でユディシティラの軍に行き、サハデーヴァの戦車に乗った。わが君よ。（七）カルナの御者は、カルナの戦車に法螺貝のような色の、他のシンドゥ産の高速の駿馬たちをつないだ。（八）的を外さないカルナは努力して、パーンチャーラの勇士たちを矢で苦しめた。雲が山々を（雨で）苦しめるように。（九）パーンチャーラの大軍はカルナに苦しめられ、獅子に苦しめられた雌鹿のようにこよなく恐れて逃走した。（一〇）人々がいたるところで馬や象や戦車から速やかに地面に落下しているのが認められた。（一一）カルナは戦場において馬蹄形の先の矢により、逃げる兵たちの両腕や耳環をつけた頭を断ち切った。（一二）王よ、そして彼は象の背や馬の背にいる兵や地面に立っている兵の両腿を断ち切った。（一三）逃げまわる多くの勇士たちは、戦場で自分の身体や乗物が切断されたのに気がつかなかった。（一四）パーンチャーラとスリンジャヤの兵たちは、戦場で殺され続けて（恐怖にかられ）、草が揺れ動いただけでもカルナが来たと考えた。（一五）彼らはうろたえて、戦場を逃げまわる味方の兵をもカルナだと思い誤り、恐れて逃げ出した。（一六）バーラタよ、それらの兵がうち破られ逃走している時、カルナは矢を浴びせながら彼らの背後から襲撃した。（一七）彼ら

はその偉大な男にかりたてられて、すっかり仰天してうろたえ、お互いに見合いながら、踏みとどまることができなかった。（一八）王よ、パーンチャーラ軍はカルナとドローナに最高の矢で殺され、すべての方角を見ながら逃走した。（一九）

それからユディシティラ王は、自軍が逃走するのを見て、退却する気になってアルジュナに告げた。（二〇）

「見よ、勇士カルナが弓を手にして立っている。それはまるでこの夜の恐ろしい時に太陽が熱しているかのようだ。（二一）アルジュナよ、お前の縁者たちがカルナの矢にかりたてられて叫んでいる声が今、絶えず聞こえている。（二二）彼が矢をつがえて放つ時、私は彼の勝利の勇武を見る。彼は必ずや我々を滅ぼすであろう。（二三）ここでこの後すぐになすべきことはカルナを殺すことだ。その時が来たと私は思う。アルジュナよ、それをやりなさい。（二四）」

強力なアルジュナはこのように言われて、クリシュナに告げた。

「ユディシティラ王はカルナの非常な勇猛さに恐れをなした。（二五）カルナの軍が繰り返しこのようにしている時、あなたは速やかに時宜にかなって決定すべきである。我々の軍隊は逃げているから。（二六）クリシュナよ、わが軍はドローナの矢にかりたてられ、壊滅し、カルナにおびやかされていて、彼らはとどまっていられない。（二七）そしてカルナが恐れを知らぬかのように行動し、逃走する有力な戦士たちに鋭い矢を浴びせているのを私は見る。（二八）ヴリシュニの虎よ、戦いの最前線で彼のこのような活躍を目のあたりにすることには

耐えられない。蛇が足で触れられることに我慢できないように。（二九）そこであなたは、カルナのいる所に速やかに行ってくれ。私が彼を殺すか、彼が私を殺すかだ。クリシュナよ。（三〇）」

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。

「クンティーの息子よ、私は戦場で人中の虎カルナが神々の王のように活躍し、超人的な勇武を発揮しているのを見る。（三一）ダナンジャヤよ、戦いにおいて彼に対抗できる者は、あなたか羅刹ガトートカチャを除いて他にいない。人中の虎よ。（三二）しかし非の打ち所のない者よ、あなたが戦場でカルナと戦う時はまだ来ていないと私は考える。強力な男よ。（三三）彼には燃える大流星のような、インドラが与えた槍がある。勇士よ、それはあなたを殺すために〔保存され〕、恐ろしい姿をとっている。（三四）強力なガトートカチャがカルナに対戦するのがよい。実に彼は強力なビーマにより生まれ、神のように勇猛である。（三五）ガトートカチャには神、羅刹、阿修羅の武器がある。そして彼はいつもあなたを愛し、あなたによかれと願っている。彼は戦いにおいてカルナに勝利すると私は確信している。（三六）」

サンジャヤは語った。——

蓮の眼をした強力なクリシュナはアルジュナにこのように告げると、その羅刹を呼んだ。羅刹は彼の前に現われた。（三七）王よ、彼は鎧を着て弓矢と刀を持ち、クリシュナとアルジュナに挨拶してから喜び勇んで言った。

「御前(おんまえ)に。私にお命じ下さい。(三八)」
そこでクリシュナは笑うかのように、燃える口をし、輝く耳環をつけた、雲のようなガトートカチャに告げた。(三九)
「ガトートカチャよ、わが子よ、私がお前に言うことをよく聞きなさい。今や他の誰でもない、お前が勇武を示す時が来た。(四〇)お前は今、沈みかけている親族の筏(いかだ)となりなさい。お前には種々の武器と羅刹の武器がある。(四一)ヒディンバーの息子よ、見よ。戦いの最前線において、パーンダヴァ軍はカルナに追い立てられている。牛たちが牛飼に追い立てられるように。(四二)あそこで英邁な勇士カルナは、確固たる勇武を発揮して、パーンダヴァの軍隊の中で王族(クシャトリヤ)の雄牛たちを殺している。(四三)その屈強な弓取りが矢の大雨を注いでいる時、その矢の輝きに苦しめられて、わが軍は立っていることができない。(四四)今パーンチャーラ軍は、真夜中、カルナに矢の雨で苦しめられ、鹿たちが獅子を恐れて逃げるように逃げて行く。(四五)恐ろしく勇猛な者よ、戦場でこのように猛り立ったカルナを制止できる者はお前以外にない。(四六)勇士よ、そこでお前は自分の母方と父方の者たちの威光と武器の力にふさわしい行為をなせ。(四七)ヒディンバーの息子よ、『彼はどのように我々を苦難から救うであろうか』ということで人々は息子を望む。そこでお前は親族たちを救いなさい。(四八)実にお前が戦場で戦っている時、常にお前の力は恐ろしく、お前の幻術(マーヤー)は渡りがたい。ビーマの息子よ。(四九)パーンダヴァ軍がカルナに鋭い矢でうち破られ、ドリタラーシトラの息子の軍に沈みつつある時、お前は守護者となれ。敵を苦しめる者よ。(五〇)実に羅刹というものは、夜中に更に限りなく勇猛になる。強力で非常に侵しがたい勇士になり、勇猛にふるまう。(五一)夜間、戦場において、幻術により勇士カルナを殺せ。ドリシタデュムナを先頭とするパーンダヴァ軍はドローナを殺すであろう。(五二)」
クルの王よ、クリシュナの言葉を聞くと、アルジュナも敵を制する羅刹ガトートカチャに言った。(五三)
「ガトートカチャよ、お前と強力なサーティヤキとビーマセーナとは、すべての兵士たちのうちで私に尊敬されている。(五四)そこでお前は出かけて行き、夜中、カルナと一騎打ちをせよ。勇士サーティヤキはお前の背後を守るであろう。(五五)お前はサーティヤキに援護されて、戦いにおいて勇士カルナを殺せ。かつてインドラがスカンダとともにターラカを殺したように。(五六)」
ガトートカチャは言った。
「最上の人よ、私はカルナに匹敵する。ドローナにも匹敵する。そして武器に通達したその他の王族(クシャトリヤ)たちにも匹敵する。(五七)今夜、この世が続く限り人々が語り継ぐような戦いをカルナとするであろう。(五八)私は羅刹の法(ダルマ)に則(のっと)って、あらゆる者を殺すであろう。勇士であろうと、恐れて手を合わせるものであろうと、容赦はしない。(五九)」
サンジャヤは語った。――
敵の勇士を殺す強力なヒディンバーの息子はこのように言うと、その激戦において、あな

たの兵たちを恐れさせて、カルナに襲いかかった。(六〇)彼が燃える口をした蛇のようにいきり立って襲いかかって来た時、最高の射手カルナは〔矢を〕放ちつつ迎え撃った。(六一)王中の虎よ、その夜、咆哮するカルナと羅刹との間に、インドラとプラフラーダ（魔王の名）との戦いのような戦いが行なわれた。(六二)

（第百四十八章）

羅刹王アランバラを殺すガトートカチャ

サンジャヤは語った。——

王よ、ガトートカチャが戦場でカルナを殺そうとして、急いでカルナの戦車に向かって行くのを見て、あなたの息子はドゥフシャーサナに告げた。

「あの羅刹は戦いにおけるカルナの勇武を見て、速やかにカルナの方に向かって行く。お前はあの勇士を制止せよ。大軍に囲まれて、あの勇士のいる所に行け。(一―三)ヴァイカルタナ・カルナは、戦場であの羅刹と戦おうとしている。誇りを与える者よ、お前は軍隊に囲まれて、戦場で努力してカルナを守れ。(四)」

王よ、その間、最高の戦士である強力なジャタースラの息子（アランバラ）が、ドゥルヨーダナに近づいて言った。(五)

「ドゥルヨーダナ様、あなたに命じられて、戦いに酔う高名なパーンダヴァたちとその従者たちを殺したいと思います。(六)かつて最高の羅刹である私の父ジャタースラに対し、卑劣

なパーンダヴァたちは羅刹を滅ぼす何らかの方法を用いて彼を倒しました（三・一五四参照）。王よ、私は彼の無念を晴らすために、あなたに命じられて行きたいです。(七)」

それから王は、喜んで、彼に繰り返し言った。

「私はドローナとカルナなどとともに敵を殺すことができる。しかし汝は私に命じられて戦いに行き、ガトートカチャを殺せ。(八)」

そこで巨体のジャタースラの息子は「承知しました」と言って、ガトートカチャに挑戦して、種々の武器を浴びせた。(九)ヒディンバーの息子（ガトートカチャ）はただ一騎で、アランバラ（ジャタースラの息子）とカルナと越えがたいクル軍とを粉砕した。強風が雲を吹き散らすように。(一〇)それからアランバラは強大な幻力（マーヤー）を持つ戦士ガトートカチャを見て、速やかに、種々の特徴を持つ矢の群でガトートカチャを苦しめた。(一一)そしてアランバラは多くの矢でビーマセーナの息子を射てから、矢の群でパーンダヴァ軍を逃走させた。(一二)わが君よ、真夜中、彼に敗走させられたパーンダヴァ軍は、風に吹き散らされた雲のように散り散りになった。(一三)王よ、同様にガトートカチャにかりたてられたクル軍は、真夜中、幾千となく松明を投げ捨てて逃走した。(一四)それからアランバラは怒り、突き棒で巨象を突くように、戦場において、鋭い矢でビーマセーナの息子を攻撃した。(一五)ガトートカチャは相手の戦車と御者とすべての武器を粉々に断って、こよなく恐ろしく雄叫びをあげた。(一六)それから彼は、カルナとその他の幾千のクル軍とアランバラに対して、雲がメール山に雨を降らせるように、矢の群を雨降らせた。(一七)その羅刹に苦しめられて、クル軍は動揺した。その四部

門よりなる軍隊は、繰り返しお互いに相手を粉砕した。(一八)
大王よ、ジャタースラの息子は御者を殺され、戦車も失い、戦場で怒って、ガトートカチャを拳でもって強く打った。(一九) ガトートカチャは彼に拳で打たれて揺れ動いた。地震において、山が樹木や茂みとともに揺れるように。(二〇) それからビーマセーナの息子は、敵の群を殺す鉄棒のような腕を振るって、ジャタースラの息子を拳で手ひどく撃った。(二一) それからガトートカチャは猛り立ち、速やかに相手を振りまわして投げ飛ばした。そしてインドラの旗のような両腕で地面に押しつけた。(二二) アランバラの方も羅刹ガトートカチャをはねのけ、ほうり投げ、戦場で怒って彼を地面に押しつけた。(二三) かくて雄叫びをあげる巨体のガトートカチャとアランバラとの間に、身の毛がよだつ激しい戦いが行なわれた。(二四) インドラとヴィローチャナの息子（魔王バリ）のような、強力で幻力に満ちた両者は、お互いに幻力で凌駕しようとして戦った。(二五) 両者は火と海になり、またガルダ鳥とタクシャカ竜になり、また雲と強風になり、また金剛杵と大山になり、また象と虎になり、またスヴァルバーヌ（日食の悪魔ラーフ）と太陽になった。(二六) このようにアランバラとガトートカチャの両者はお互いに相手を殺そうと望み、幾百の幻術を用い、激しく、めざましく戦った。(二七) そして両者は鉄棒、棍棒、投槍、槌、矛、杵、山の頂によって、お互いに攻撃し合った。(二八) その幻力に満ちた最高の羅刹たちは、馬や象に乗り、徒歩で、また戦車に乗り、戦場で戦った。(二九)
王よ、それからガトートカチャは、アランバラを殺そうと望み、この上なく怒って飛び上

がり、鷹のように相手に襲いかかった。(三〇) そして彼は、巨大な羅刹王アランバラをひっつかんで、持ち上げ、戦場で地面にたたきつけて殺した。ヴィシュヌがマヤを殺した時のように。(三一) それからガトートカチャは、驚異的な刀を振り上げて、相手の恐ろしい醜悪な顔を胴体から切り取った。(三二) 羅刹ガトートカチャは血にまみれたその頭の髪をつかんで、速やかにドゥルヨーダナの戦車の方に向かった。(三三) その強力な羅刹はドゥルヨーダナに近づいて、笑いながら、醜い顔と髪をしたその頭を相手の戦車に投げて、雨季における雲のように恐ろしい音声で雄叫びをあげた。(三四) 王よ、それから彼はドゥルヨーダナに告げた。
「お前がその勇武を認めたお前のこの縁者はこの通り殺された。カルナもお前も同様の状態になるであろう。(三五)」
王よ、彼はこのように言うと、それからカルナに向かって行った。カルナの頭に幾百の鋭い矢を浴びせながら。(三六) 大王よ、それから戦場で、人間と羅刹との間に、恐ろしくも凄まじい驚異的な戦いが行なわれた。(三七)
（第百四十九章）

カルナ、ガトートカチャの幻術を破る

ドリタラーシトラはたずねた。
「ヴァイカルタナ・カルナと羅刹ガトートカチャは真夜中に戦ったが、その戦いはどのようであったか。(一) その恐ろしい羅刹の戦いぶりはどのようであったか。彼の戦車、幻術、す

べての武器はどのようであったか。(二)彼の馬、彼の戦車の旗と弓はどのような大きさであったか。彼の鎧はどのようであったか。胄（異本による）はどのようであったか。私にたずねられたら、そなたはそのことを言え。サンジャヤよ、そなたは語りが巧みだから。(三)」

サンジャヤは語った。――

ガトートカチャは赤い眼で、巨大な体を持ち、赤色の顔をして、その腹は窪んでいる。体毛は上方に立ち、その髭は茶色で、法螺貝のような耳をし、大きな顎を持っている。(四)その口は耳まで裂け、鋭い歯をして尖っている。その舌と唇は非常に長くて赤く、その眉毛は長くたれ下がり、大きな鼻をしている。(五)その身体は青黒く、首は赤く、山のように背が高く、恐怖をもたらす。巨体で、大きな腕と頭を持ち、強力である。(六)その頭はぴかぴかしているが触れるとでこぼこして、おぞましい瘤ができている（テクスト疑問）。その尻は大きく、臍は深い。（以下、テクスト疑問）(七)幻力に満ちた彼はまた手の飾りをつけ、腕環をつけ、山がその山麓に火の輪（山火事か）を持つように、その胸に金の胸飾りをつけている。(八)彼の頭には美しい冠が輝いていた。それは黄金製できらびやかで、多様に身体を輝かせ、トーラナ（鳥居に似た形の門）のようである。(九)朝日のように輝く両の耳環、黄金製の美しい輪、輝きに満ちた大きい真鍮製の鎧をつけている。(一〇)

彼の乗る大戦車は、幾百の鈴の音が鳴り響き、赤い種々の旗を有し、その車体は熊皮でおおわれ、その大きさは一ナルヴァ（長さの単位。四百ハスタ）ほどである。(一一)それは一切の最高の武器をそなえ、旗に飾られている。八つの車輪をそなえ、雷雲のような重々しい音をたてる。(一二)その戦車をひく馬たちは、象のようで、赤い眼をして恐ろしく、黒色をして（異本による）、有能で強力である。(一三)彼の御者である羅刹は、異形の眼をし（ヴィルーパークシャ）、燃える口と耳環を持ち、戦場において太陽の光線のような手綱で馬たちを御する。彼は太陽が〔御者の〕アルナ（曙光）とともにあるように、その御者とともにある。(一四)彼の戦車には、天にも届く非常に大きな軍旗が高くそびえ立つ。その旗標は、赤い頭をした、非常に恐ろしい肉食の禿鷲である。(一五)彼の弓はインドラの雷電のような音をたて、堅固な弦を張り、〔大きくて〕目立ち、一キシュク（尺腕）の幅で、長さ十二アラトニ（肘から小指の先までの長さ）である。彼はその弓を引き絞り、車軸ほどの矢ですべての方角をおおって、その勇士を滅ぼす夜に、カルナに襲いかかった。(一六―一七)

彼が弓を引き絞り、戦車に力強く立っていた時、雷鳴のような弓の音が聞こえた。(一八)バーラタよ、あなたのすべての兵たちは彼におびえさせられて、海の大波のようにふるえた。(一九)カルナは異形の眼をした恐ろしい彼が襲来するのを見て、笑うかのように、急いで彼を制止した。(二〇)彼が近くから矢を射かけるのに対し、カルナは矢を射ながら彼に襲いかかった。象が象に対するように、群の長である雄牛が他の群の雄牛を攻撃するように。(二一)王よ、カルナと羅刹との両者の衝突は、インドラとシャンバラの戦いのように激しいものであった。(二二)両者は恐ろしい音をたてる剛弓をとり、お互いに強力な矢で相手をおおって傷つけ合った。(二三)両者は弓を引き絞って真っ直ぐの矢を放ち、お互いに相手の真

鎗の鎧を貫いて制し合った。(二四)二頭の虎が爪で、二頭の巨象が鼻で戦うように、両者はお互いに戦車用の槍（注釈、英訳の解釈と異なる）と矢により傷つけ合った。(二五)両者はお互いに矢を射交わし、身体を切り合い、矢の群で燃やし合い、お互いに見ることができなかった。(二六)両者は全身傷つき、血まみれになり、まるで水を流出する赤いチョークの山のように輝いていた。(二七)輝きに満ちた両者は矢の先で身体が裂け、お互いに傷つけ合いながら奮闘したが、お互いに相手を戦慄(おのの)かせることはできなかった。(二八)王よ、戦場で生命を賭けて勝負するカルナと羅刹との夜の戦いはこのように長く続き、互角であった。(二九)彼（ガトートカチャか？）が鋭い矢を弓につがえ、絶え間なく射る時、敵味方はその弓の音におびえた。王よ、その時カルナはガトートカチャを凌駕できなかった。(三〇)

それから、武器を知る者たちの最上者であるカルナは、神的な武器を現出させた。ビーマの息子ガトートカチャは、カルナが神的な武器を準備したのを見て、羅刹の幻力(マーヤー)を現出した。(三一)彼は恐ろしい姿の羅刹の大軍に囲まれた。彼らは槍と槌を持ち、山や樹木を手に持っていた。(三二)彼が大弓を振り上げ、恐ろしいカーラの杖(ダンダ)を持つ生類の破壊者(アンタカ)のように来るのを見て、王たちは戦慄した。(三三)ガトートカチャが発する獅子吼を恐れて、象たちは放尿し、人々はひどくふるえた。(三四)それから、こよなく恐ろしい石の大雨が一面に降った。それは夜中に力が増大する羅刹の軍隊により投げられたものであった。(三五)鉄製の円盤、ブシュンディ（投石機、石弓）、槍、投槍、戟(シューラ)、百殺棒(シャタグニー)、矛が絶え間なく落下した。(三六)その凄まじくも恐ろしい戦いを見て、諸王とあなたの息子たちと戦士たちは恐れて逃走した。(三七)

その中で武器の力を誇る誇り高いカルナだけが恐れなかった。そして彼はガトートカチャの作り出した幻術を矢で粉砕した。(三八)幻術が破られた時、ガトートカチャは怒り、恐ろしい矢を放った。それらの矢はカルナの身体に入った。(三九)それらの矢は戦場でカルナを貫き、血まみれになり、怒った蛇のように大地に入った。(四〇)

一方、栄光あるカルナは怒り、手練の早業で、ガトートカチャを攻撃し、十本の矢で彼を射貫いた。(四一)ガトートカチャは諸々の急所をカルナに射貫かれて非常に苦しんだが、千の輻(や)を持つ神的な円盤(チャクラ)をつかんだ。(四二)そしてビーマセーナの息子は、剃刀のような縁を持つ、朝日のような、宝玉や宝石で装飾されたその円盤を、カルナを殺そうとして投げた。(四三)しかしそれは、高速で射られたカルナの矢により貫かれ、不運な人の願望のように、空しく地面に落ちた。(四四)ガトートカチャは円盤が落とされたのを見て怒り、ラーフが太陽をおおうように、カルナを矢でおおった。(四五)しかし、ルドラ（シヴァ）やインドラの弟（ヴィシュヌ）やインドラのように勇猛なカルナはうろたえることなく、速やかにガトートカチャの戦車を矢でおおった。(四六)そこでガトートカチャは怒り、黄金で飾られた棍棒を振りまわして投げた。それもカルナに矢で射られて落ちた。(四七)それから巨大な体のガトートカチャは黒雲のように吼えながら空に飛び上がり、空から樹木の雨を降らせた。(四八)そこでカルナは、空中にいるその幻力を持つビーマセーナの息子を矢で射貫いた。太陽が光線で太陽を貫くように。(四九)カルナは相手のすべての馬を殺し、戦車を百に砕き、雨を降らせる雲のように矢を雨降らせた。(五〇)ガトートカチャの身体には、傷ついていない部分は二指(アングラ)ほ

どもなかった。彼はたちまちにヤマアラシが針を立てたようになった。(五一) ガトートカチャはすっかり矢の群でおおわれたので、戦場で彼の姿や馬や戦車や旗は認められなかった。(五二) しかし幻力ある彼はカルナの神的な武器を自分の武器により粉砕しつつ、幻力によりカルナと戦った。(五三) 彼はその時、空中で矢の群におおわれて姿が見えないまま、幻力と手練の業により戦った。(五四)

クルの最上者よ、幻力に満ちたビーマの息子は、幻力を用いて敵を惑わせつつ、大いなる幻影を作り出した。バーラタよ。(五五) 醜い顔をした彼は、諸々の変異の顔を作り出して、幻力によりカルナの神的な武器を食い尽くした。(五六) そしてまた、巨大な体をした彼は戦場で百に切られ、元気をなくし、気力を失い、空から落ちたように見えた。クルの雄牛たちは彼が殺されたと考えて雄叫びをあげた。(五七) しかし彼は別の身体をとって、すべての方角に認められた。更にまた、巨大な体をとって、百の頭、百の腹がある者となった。(五八) そして大きな腕を持って、マイナーカ山のように見えた。そして更に、その羅刹は親指ほどの大きさになり、海の波のように高く隆起し、水平にまた上方に動いた。(五九) そして彼は大地を裂いて、更に水に飛び込み、こちらに見えたかと思うと、また他の場所から出現した。(六〇) 彼は再び降下して、黄金で飾られた戦車に立った。彼は鎧を着て、地上と天空と諸方位を幻影でおおった。(六一) 王よ、それから彼はカルナの戦車の近くに行き、耳環が顔にあたるほど動きまわり、落着き払って次のように告げた。(六二)

「しばし待て。御者(スータ)の息子よ、私から生きて逃れることはできないぞ。私は今日、戦場でお

前の戦いの願望を取り除いてやる。(六三)」

荒々しい勇猛な羅刹は怒りで眼を赤くしてこのように告げると、空中に飛び上がり、大きな声で笑った。そして獅子が象王を襲うようにカルナを攻撃した。(六四) そしてガトートカチャは、戦士の雄牛であるカルナに、車軸ほどの矢を浴びせた。雲が大雨を降らせるように。しかしカルナは、その遠方から飛来する矢の雨を粉砕した。(六五)

バラタの雄牛よ、幻術がカルナに破られたのを見て、ガトートカチャは再び幻術を用いて、姿を隠した。(六六) 彼は峰々をともない、樹々に満ちた高い山になった。そこから槍、投槍、刀、杵が大量に流出した。(六七) カルナはそのアンチモニーの堆積のような山と、恐ろしい武器がそこから落下するのを見てもふるえなかった。(六八) カルナは笑うかのように、神的な武器を振り上げた。そしてその武器により、巨大な山は粉砕されて消失した。(六九)

それから、非常に恐ろしいガトートカチャは、虹をともなう黒雲となり、カルナに岩石の雨を浴びせた。(七〇) 武器を知る人々の最上者カルナは、風神(ヴァーユ)の武器をとって、その黒雲を粉砕した。(七一) 大王よ、そしてカルナは矢の群で諸方をすっかりおおって、ガトートカチャの放った武器を破壊した。(七二) それから強力なビーマセーナの息子は戦場で笑って、勇士カルナに対して強力な幻力を現出した。(七三) カルナは再び最高の戦士ガトートカチャが恐れることなく、多くの羅刹に囲まれて襲来するのを見た。(七四) その羅刹たちは、獅子や虎に似て、発情した象のように勇猛で、象や戦車や馬の背に乗っていた。(七五) 恐ろしい彼らは、種々の武器を持ち、種々の鎧で飾られていた。マルト神群によりインドラが囲まれる

ように、荒々しい羅刹たちに囲まれたガトートカチャを見て、勇士カルナはその羅刹と戦った。(七六)

それから、ガトートカチャは五本の矢でカルナを射貫いて、すべての王を恐れさせて恐ろしい叫び声をあげた。(七七) そしてガトートカチャは再びアンジャリカという矢により、速やかに矢の大群とともに、カルナの手にある弓を断ち切った。(七八) そこでカルナは他の強い負荷に耐える、丈夫な弓をとって、インドラの弓（虹）のように高く掲げて、力まかせに引き絞った。(七九) 大王よ、それからカルナは、金の羽根のついた敵を殺す矢を、空を飛ぶ羅刹たちに放った。(八〇) 広い胸を持つ羅刹の群は彼の矢に苦しめられ、獅子に苦しめられた森の象の群のように動揺した。(八一) 強力なカルナは羅刹たちとその馬と御者と象を矢で粉砕して、宇宙紀(ユガ)の終末に火神が生類を燃やすようであった。(八二) カルナは羅刹の軍隊を殺して輝いていた。かつてマヘーシュヴァラ（シヴァ）が天界で（悪魔の）三都市を燃やして輝いたように。(八三) わが君よ、パーンダヴァの幾千の王のうちで、誰も彼を見ることもできなかった。王よ。(八四) 恐るべき精力と体力をそなえた、怒ったヤマのような、強力な羅刹の王ガトートカチャを除いて。王よ。(八五) 王よ、怒った彼の両眼から火が生じた。二つの大松明から火焰を放つ油滴が生ずるように。(八六)

ガトートカチャは掌で掌を打ち、唇を噛みしめ、再び幻力で作り出した戦車に乗った。(八七) それには象のような馬たち、ピシャーチャ鬼のような顔の驢馬がつながれていた。彼は怒って、「カルナのもとに私を運べ」と御者に命じた。(八八) それからその最高の戦士は恐

ろしい形状の戦車で進み、再びカルナと一騎打ちをした。王よ。(八九) その羅刹は再びいきり立って、八つの車輪をそなえた、ルドラ（シヴァ）に作られた非常に恐ろしい雷電(アシャニ)をカルナに放った。(九〇) カルナは弓を戦車に置いて、飛び下りてその雷電をつかみ、それを相手に投げ返した。相手は戦車から飛び下りた。(九一) 大きな輝きを放つそれは、馬と御者と旗もろとも戦車を粉々に砕き、大地を破って入り込んだ。そこで神々はすっかり驚嘆した。(九二) 直ちにカルナが車から飛び下りてその神が作った強力な雷電をつかんだことに対し、一切の生類はカルナを称讃した。(九三) カルナは戦場でこのように行動してから、再び戦車に乗った。それから、敵を苦しめるカルナは鉄矢を放った。(九四) 誇りを与える者よ、一切の生類のうち他の者は、その恐ろしい戦場においてカルナが行なったようなことをすることはできない。(九五)

ガトートカチャは山が大雨に打たれるように鉄矢に撃たれて、再びガンダルヴァの都城（蜃気楼）のように姿を消した。(九六) 強力な幻力を持つ敵を殺戮する彼はこのようにして、幻力と手練の業により、カルナの諸々の神的な武器を破壊した。(九七) しかしカルナは、その羅刹により幻力で武器を破壊されても動揺することなく、その羅刹に対して戦った。(九八) 大王よ、それから強力なビーマセーナの息子は怒って、自身を多様にして諸王を恐れさせた。(九九) そして空から獅子、虎、ハイエナ、火のような舌の蛇、鉄の嘴の鳥たちが降って来た。(一〇〇) ガトートカチャは都市、山、森のようであったが、カルナに放たれた鋭い矢でおおわれて、その場で消え失せた。(一〇一) そして羅刹、ピシャーチャ鬼、ヤートゥダーナ（悪魔の類）、

犬（または「ジャッカルと狼」。テクスト疑問）たちが、カルナを食おうとしていたるところから駆けて来て、恐ろしい声で彼をおどした。（一〇二）カルナは血にまみれた多くの武器を準備して、多くの矢によって彼らを一つ一つ射貫いた。（一〇三）彼は神的な武器により羅刹の幻力を破って、真っ直ぐの矢で相手の馬たちを撃った。（一〇四）彼らは矢により粉砕され、身体の部分を断たれ、背中を切られ、その羅刹が見ている前で大地に倒れた。（一〇五）ガトートカチャは幻術を破られ、カルナに向かって「今お前を殺してやる」と言ってから消え失せた。（一〇六）（第百五十章）

羅刹王アラーユダとビーマの戦い

サンジャヤは語った。——

そのようにカルナと羅刹（ガトートカチャ）との戦いが行なわれていた時、強力な羅刹王アラーユダがやって来た。（一）彼は種々の姿をした、勇猛な幾千の異形の羅刹に囲まれ、〔パーンダヴァに対する〕以前の怨みを思い出し、大軍を率いてスヨーダナ（ドゥルヨーダナ）に近づいた。（二）というのは、彼の親族である、バラモンを食う勇猛なバカと、威光に満ちたキルミーラと、彼の友であるヒディンバは、〔ビーマに〕殺されたのであった。（三）彼は長年の間積み重ねた以前の怨みを思い出し、これは夜の戦いで〔羅刹に有利で〕あると考えて、戦場でビーマを殺そうと望んだのである。（四）彼は発情した象か怒った蛇のようになり、戦いを望んで、ドゥルヨーダナに次のように言った。（五）

「大王よ、あなたも御存じのように、ビーマは私の縁者である羅刹のヒディンバ、バカ、キルミーラを殺しました。（六）その上奴は、かつて他の羅刹たちや我々を蔑ろにして、少女であったヒディンバーを手ごめにした。（七）王よ、そこで私は彼とその眷属と、馬と戦車と象と、ヒディンバーの息子と、その仲間を殺そうとして自らやって来たのだ。（八）今日、私はクリシュナに先導されたすべてのクンティーの息子たちを殺して、すべての従者もろとも食べてやる。すべての軍隊を制止しなさい。我々がパーンダヴァと戦うであろう。（九）」

その時、弟たちに囲まれたドゥルヨーダナは、彼のその言葉を聞いて喜び、彼を歓迎して告げた。（一〇）

「我々はあなたとその眷属を先頭に立てて敵と戦うであろう。というのは私の兵たちは、敵意を静めて停戦することはないであろうから。（一一）」

その羅刹の雄牛は、「そのようになさい」と王に言ってから、人を食う鬼たちとともに急いでビーマを攻撃した。（一二）王中の王よ、彼は輝かしい身体をして、ガトートカチャの乗る車と同じような、太陽のように輝く戦車に乗って攻撃した。（一三）彼の大戦車は比類のない音をたて、多くのトーラナ（鳥居に似た形の門）に飾られ、熊の皮で車体をおおわれ、一ナルヴァ（四百ハスタ）ほどの長さであった。（一四）また彼の車につながれた百頭の馬たちは高速で、象のように巨体で、肉と血を食した。（一五）また彼の戦車の音は、大雲のたてる音のようである。そして彼の弓は非常に大きくて、丈夫な弦を持ち、こよなく強力である。（一六）また彼の矢は金の羽根がつき、石で研がれ、車軸（アクシャ）ほどの長さであった。彼自身もまた、ガトートカチャと

同じように、強力な勇士であった。(二七)また、ジャッカルと鳶に守られた彼の旗標は、火や太陽のようであった。彼は容姿にかけてはガトートカチャより美しく、その顔は興奮して輝いていた。(二八)彼は燃える腕環をつけ、燃える王冠と輪をつけ、花輪とターバンをつけ、刀を帯び、棍棒、石弓、杵、鋤、弓を持ち、象のような体をしていた。(二九)彼は火のように輝くその戦車に乗り、パーンダヴァ軍を逃走させ、戦場を動きまわり、空中で稲妻に飾られた雲のように輝いていた。(三〇)王よ、パーンダヴァのすべての勇士たち、すべての主立った強力な王たちは、鎧をつけ楯を持ち、喜び勇んで戦った。(三一)

(第百五十一章)

サンジャヤは語った。――

戦場で恐るべき働きをするアラーユダが来たのを見て、すべてのクル軍はすっかり喜んだ。(一)同様に、ドゥルヨーダナをはじめとするあなたの息子たちも喜んだ。舟なくして海を渡ろうとしていた人々が舟を得て喜ぶように。(二)その時、諸王は再び生き返ったような気がして、羅刹王アラーユダを大歓迎した。(三)

カルナと羅刹(ガトートカチャ)との間に、夜間、恐怖をもたらす凄まじい超人的な戦いが行なわれていた時、パーンチャーラ軍と諸王は驚嘆して見物していた。王よ、同様にあなたの軍も右往左往しながら見ていた。(四―五)ドローナとドローナの息子とクリパなどは、戦場でガトートカチャの働きを見て幻惑され、「それは彼ではない」などと叫んだ。(六)大王よ、あなたのすべての兵たちは当惑し、「ああ、ああ」と言って、生きた心地がせず、カルナが生きているという希望を失った。(七)

ドゥルヨーダナはカルナが最高に苦しんでいるのを見て、羅刹王アラーユダを呼んで次のように言った。(八)

「あそこの戦場でカルナがガトートカチャと交戦し、彼にふさわしい偉大な働きをしている。(九)だが見よ、あれらの勇猛な王たちはガトートカチャに殺されている。彼らは樹々が象に倒されるように、彼に種々の武器で殺されている。(一〇)この戦いにおいて、私はあなたの同意を得て、私は諸王の中であなたにこの役割を委ねる。勇士よ、勇武を発揮して彼を殺せ。(一一)あの敵を苦しめる邪悪なガトートカチャが幻力によってカルナを殺す前に。(一二)」

王にこのように命じられた、強力で勇猛果敢な羅刹は、「承知しました」と言って、ガトートカチャに襲いかかった。(一三)王よ、そこでビーマセーナの息子はカルナを捨てて、襲来する敵を矢で攻撃した。(一四)そして怒った二名の羅刹王の戦いがあった。それは森で雌象が原因で発情した二頭の象の戦いのようであった。(一五)一方、最高の戦士カルナは、羅刹(ガトートカチャ)から解放され、太陽のように輝く戦車に乗ってビーマセーナを攻撃した。(一六)獅子により牛の長が攻撃されるように、戦場でアラーユダによりガトートカチャが攻撃されるのを見て、襲来するカルナを無視して、最高の戦士ビーマは戦車に乗り、矢の群を注ぎながら、アラーユダの戦車に向かって進撃した。(一七―一八)王よ、その時アラーユダはビーマが襲来するのを見て、ガトートカチャを捨ててビーマセーナに挑戦した。(一九)王よ、羅刹を

滅ぼすビーマは、その羅刹王とその眷属に激しく襲いかかり、矢の雨を浴びせた。(二〇) 王よ、同様に敵を制するアラーユダも、石で研がれた矢をビーマに繰り返し浴びせた。(二一) またすべての恐るべき羅刹も、種々の武器を持ち、あなたの息子たちの勝利を望んで、ビーマセーナに襲いかかった。(二二) 強力なビーマセーナは、強力な彼らに攻撃されながらも、五本ずつの鋭い矢で彼らすべてを射た。(二三) 残酷な（異本による）羅刹たちはビーマに攻撃されて、けたたましい叫び声をあげ、十方に逃げた。(二四) 強力な羅刹（アラーユダ）は彼らがビーマにおびやかされるのを見て、急いで彼に矢を浴びせて襲いかかった。(二五) ビーマセーナは戦場において、鋭い先の矢を相手に放った。しかしアラーユダは急いで、戦場でビーマに放たれたそれらの矢に対し、あるものを断ち切り、あるものをつかんだ。(二六) 恐ろしく勇猛なビーマは、その羅刹王を見て、金剛杵（ヴァジュラ）のような棍棒を激しく投げた。(二七) 棍棒が焔に満ちて激しく飛来した時、アラーユダは棍棒によりそれを撃った。その棍棒はビーマに向かって飛んで行った。(二八) ビーマはその羅刹王に矢の雨を浴びせた。羅刹はそれらの矢の群をも、鋭い矢により無効にした。(二九) 恐ろしい姿をしたすべての羅刹の兵士たちも、羅刹王の命令により敵の戦車や象を撃破した。(三〇) パーンチャーラ軍、スリンジャヤ軍、馬たち、最高の象たちは、羅刹たちにひどく苦しめられて、そこで平安を得ることはできなかった。(三一)

非常に恐ろしい戦闘が行なわれているのを見て、最高の人（クリシュナ）はアルジュナに告げた。(三二)

「勇士よ、見よ。ビーマが羅刹王に圧倒されている。アルジュナよ、彼のたどった道を行け。ぐずぐずするな。(三三) ところで、ドリシタデュムナ、シカンディン、ユダーマニユ、ウッタマウジャス、ドラウパディーの息子たち、以上の勇士たちは、そろってカルナに向かって行くべきだ。(三四) アルジュナよ、そしてナクラとサハデーヴァと強力なユユダーナ（サーティヤキ）とが、あなたの指示により他の羅刹たちを殺すべきである。(三五) 勇士よ、あなたもドローナに率いられたあの軍隊を食い止めよ。人中の虎よ、大きな危機が訪れたから。(三六)」

クリシュナがこのように言った時、名を挙げられた勇士たちはカルナとその他の羅刹たちに戦いを挑んだ。(三七) その時、栄光ある羅刹王は、弓を引き絞って毒蛇のような矢を放ち、ビーマの弓を断ち切った。(三八) そして強力な彼は、戦場でビーマセーナが見ている前で、鋭い矢でビーマの馬と御者を殺した。バーラタよ。(三九) 馬と御者を殺されたビーマは、戦車の座席から飛び下り、叫び声をあげて、恐るべき重い棍棒を相手に投じた。(四〇) その大きな棍棒が恐ろしい音をたてて飛来した時、恐ろしい羅刹はそれを自分の棍棒で破壊してから雄叫びをあげた。(四一) 羅刹王のその凄まじくも恐ろしい行為を見て、ビーマセーナは満足して、速やかに他の棍棒をとった。(四二) そしてその人と羅刹との激しい戦いが行なわれた。その両者は棍棒が衝突する大音響によって大地を激しく震動させた。(四三) 両者は棍棒を捨てて更に攻撃し合い、金剛杵（ヴァジュラ）のような音をたてる拳により互いに撃ち合った。(四四) 両者はいきり立ち、車輪、頸木、車軸、座席、備品などを手当り次第にとって撃ち合った。(四五) 両者はお互いに攻撃し合って血を流し、発情した巨象のように、互いに繰り返し引き

ずり合った。(四六) パーンダヴァたちの幸せに専念するクリシュナはビーマセーナを見て、彼を守るためにヒディンバーの息子(ガトートカチャ)をうながした。(四七)

(第百五十二章)

アラーユダ、ガトートカチャに倒される

サンジャヤは語った。——

その時クリシュナは戦場において近くでビーマが羅刹に襲われているのを見て、ガトートカチャに次のように告げた。(一)

「勇士よ、見よ。我々すべてとお前が見ている前で、近くでビーマが羅刹に襲われている。輝きに満ちた者よ。(二) 勇士よ、そこでお前はカルナをうち捨てて、すぐに羅刹王アラーユダを殺せ。その後でカルナを殺すがよい。(三)」

強力なガトートカチャはクリシュナの言葉を聞くと、カルナを離れて、バカの兄弟である羅刹王と戦った。その夜、二名の羅刹の非常に激しい戦いが行なわれた。(四) 一方、アラーユダの戦士である勇猛な羅刹たちは、恐ろしい姿をし、弓をとって、激しく敵を襲撃した。(五) 勇士サーティヤキとナクラとサハデーヴァは武器をとり、鋭い矢で彼らを射貫いた。(六) 王よ、アルジュナは戦場において、いたるところに矢を放って、王族(クシャトリヤ)の雄牛たちを殺した。(七) 王よ、カルナもまた戦場において、ドリシタデュムナやシカンディンなどのパーンチャーラの勇士たち、及びその他の諸王を逃走させた。(八) 彼らがカルナに殺されるのを見て、

恐ろしく勇猛なビーマは戦場で矢を注ぎながら、速やかにカルナに向かって行った。(九) それからナクラとサハデーヴァと勇士サーティヤキも、羅刹たちを殺して、カルナがいる所に行った。彼らはカルナと戦い、パーンチャーラ軍はドローナと戦った。(一〇)

アラーユダは猛り立ち、敵を制するガトートカチャの頭を巨大な鉄棒で打った。(一一) 強力なビーマセーナの息子はその一撃により少し気が遠くなり、その身体を硬直させた。(一二) しかし彼は戦場で相手に棍棒を投げつけた。それは燃える火のようで、百の鈴をつけて飾られ、黄金で装飾されていた。(一三) 恐るべき行為の彼に激しく投じられたその棍棒は、大きな音をたてて、相手の馬たちと御者と戦車を粉砕した。(一四) アラーユダは馬と車輪と車軸を破壊され、旗と轅(ながえ)を断たれ、羅刹の幻力(マーヤー)を用い、急いで戦車から飛び下りた。(一五) 彼は幻力により、多量の血の雨を降らせた。天空は稲妻で輝き、黒雲で満ちた。(一六) それから雷雲をともなって金剛杵(ヴァジュラ)が落下した。大きなチャタチャターという音が戦場で起こった。(一七) 羅刹ガトートカチャは、羅刹(アラーユダ)に作られた幻術を見て、上方に飛び上がり、自分の幻術によりその幻術を破った。(一八) 幻力あるアラーユダは、自分の幻術が相手の幻術により破られたのを見て、ガトートカチャの上に激しい岩石の雨を降らせた。(一九) 強力なガトートカチャは矢の雨によりその恐ろしい岩石の雨を諸方で粉砕した。それは奇蹟のようであった。(二〇) それから両者はお互いに多様な武器を相手に浴びせた。すなわち、鉄棒、槍(シューラ)、棍棒、槌、三叉戟(ピナーカ)、カラヴァーラ(刀の類か)、トーマラ、プラーサ、カンパナ(いずれも飛道具)、鉄矢(ナーラーチャ)、鋭いバッラ(半月形の先の矢)、種々の矢、円盤、戦斧など(中略)……。彼らはシャミー、ピ

ール、カリーラ、シャミャーカ、イングダ、バダリ、花咲くコーヴィダーラなどの（中略）大枝を持つ種々の大木を引き抜いて、それらにより、更に多様な山頂、種々の鉱脈の堆積により、戦場でお互いに撃ち合った。それらの音は炸裂する金剛杵（ヴァジュラ）のように大きかった。（二一―二六）王よ、ビーマの息子とアラーユダとの戦いは恐るべきもので、古（いにしえ）のヴァーリンとスグリーヴァという二頭の猿王の戦いのようであった。（二七）その両者は種々の恐ろしい武器や矢で戦ってから、鋭い刀をとって、お互いに撃ち合った。（二八）巨体でこよなく強力な両者は、互いに相手に襲いかかり、腕で相手の髪をつかんだ。（二九）王よ、巨体を持つ両者は身体は傷つき、汗と血を流し、雨が降る山のようであった。（三〇）

それからガトートカチャは、羅刹（アラーユダ）に激しく襲いかかり、相手を振りまわして、力まかせに投げ飛ばし、相手の大きな頭を切り取った。（三一）こよなく強力な彼は、耳環で飾られた相手の頭を切ってから、非常に大きな叫び声をあげた。（三二）敵を制する巨体のバカの親族（アラーユダ）が殺されたのを見て、パーンチャーラとパーンダヴァの軍は獅子吼をした。（三三）その羅刹が倒された時、パーンダヴァ軍は幾千の太鼓と幾万の法螺貝を鳴らした。（三四）その夜はパーンダヴァたちの勝利をこの上なく顕彰し、いたるところ灯火で飾られて輝いていた。（三五）強力なビーマセーナの息子は息絶えたアラーユダの頭をドゥルヨーダナの前に投げ出した。（三六）ドゥルヨーダナ王はアラーユダが殺されたのを見て、兵士たちとともにこの上なく意気消沈した。バーラタよ。（三七）というのは、アラーユダは以前の怨みを思い出し、自らやって来て、「私は戦いにおいてビーマセーナを殺す」と彼に約束したのであった。（三八）「ビーマは確実に彼に殺されるだろう」と王は考えた。そして弟たちは長く生きると考えた。（三九）ビーマセーナの息子にアラーユダが殺されたのを見て、彼はビーマセーナの約束は果たされたと考えた。（四〇）

（第百五十三章）

カルナ、必殺の槍をガトートカチャに用いる

サンジャヤは語った。――

ガトートカチャはアラーユダを殺して喜び、軍隊の先頭に立って、種々の雄叫びをあげた。（一）大王よ、象をふるえさせる彼の大声を聞いて、あなたの兵たちに凄まじい恐怖が生じた。（二）一方、勇士カルナは強力なガトートカチャがアラーユダとの戦いに没頭しているのを見て、パーンチャーラ軍を攻撃した。（三）彼は弓を引き絞って真っ直ぐの十本ずつの強力な矢を放ち、ドリシタデュムナとシカンディンを射た。（四）それから彼は最高の鉄矢によりユダーマニユとウッタマウジャスを、また最高の戦士であるサーティヤキをも震撼させた。（五）王よ、左右で矢を放っている彼らすべての円形に引き絞った弓が認められた。（六）その夜、彼らの弓弦と弓籠手（ゆごて）が当たる音と、戦車の車輪の音とは、夏の終わり（雨季）の雲の音のように騒々しいものであった。（七）王よ、その戦場という雲は、弓弦と車輪の音という雷鳴をともない、円形の弓という稲光、旗という［雲の］先端を持ち、矢の大洪水という雨を降らせた。（八）王よ、敵の群を殺すカルナは、戦場で山のように動揺することなく、山のように堅

固で、その激しい矢の大雨を破壊した。(九) それから偉大なカルナはあなたの息子のために専念し、金できらびやかな羽根のついた、落雷のような、鋭い無比の矢により、戦場で敵どもを駆逐した。(一〇) ある者たちの旗は切られ折れ、ある者たちは矢により苦しめられ、身体を断たれ、ある者たちは御者を失い、ある者たちは馬を失った。カルナは速やかに彼らをそのような状態にした。(一一) 彼らは戦場で寄る辺を見出せず、ユディシティラの軍に合流した。彼らが敗れて退却させられたのを見て、ガトートカチャは非常に怒った。(一二) 彼は黄金と宝石できらびやかな最高の戦車に乗り、獅子のような叫び声をあげた。そして彼はヴァイカルタナ・カルナに近づいて、金剛杵(ヴァジュラ)のような矢で相手を射貫いた。(一三) 両者はありとあらゆる種類の矢の音を空に響かせた。(一四) その戦いにおいて、空は矢の雨におおわれ、金の羽根で燃えるように光を放つ、水平に飛ぶ矢により、多彩な花よりなる花輪で輝くように輝いていた。(一五) 無比の力を持つ両者は、等しくお互いに最高の武器で攻撃し合った。
その戦いにおいて、何人(なんぴと)もその二人の最高の勇士たちの差異(優劣)を見出さなかった。(一六)
太陽の息子とビーマの息子との戦いはこよなく多彩でこよなく見物(みもの)であった。その激戦は武器の衝突により恐ろしく、天におけるラーフ(日食の悪魔)と太陽との熱戦のようであった。(一七)
王よ、ガトートカチャがカルナを凌駕できなかった時、最高に武器に通じた彼は恐るべき武器を現出した。(一八) ヒディンバーの息子である羅刹は、その武器によりまずカルナの馬たちと御者とを殺してから、速やかに姿を消した。(一九)

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、詐術により戦うその羅刹がそのように姿を消した時、わが軍の人々はどのようにしたか、それを私に語ってくれ。(二〇)」

サンジャヤは語った。——

その羅刹が姿を消したのを知って、すべてのクル族の人々は叫んだ。

「詐術により戦うこの羅刹は戦場で姿を消して、カルナを殺すのではないか。(二一)」

それから手練の業と多彩な武器で戦うカルナは、矢の群ですべての方角をおおった。それらの矢により空中が暗黒になった時、何もそこに現われて来なかった(テクスト疑問)。(二二) カルナは矢ですべての空間をおおったが、その手練の業により、その手の先で箙(えびら)に触れ、矢をとり、弓につがえるのが認められなかった。彼はすべての空間を矢でおおっていた。(二三) それから羅刹は空中に凄まじくも恐ろしい猛烈な幻影(マーヤー)を現出した。我々は赤い雲のような、ぎらぎら輝く、火焔のような恐ろしいそれを見た。(二四) クルの王よ、そしてそれから稲妻と燃える流星が出現した。そしてまた、幾千の太鼓が鳴る音のような、非常に恐ろしい音があがった。(二五) それから金の羽根のついた矢、槍、投槍、杵、斧、油で洗われた刀、先端が輝く矛、トーマラ(投槍の一種か)、光線を放つ鉄棒、多彩な棍棒、鋭い刃を持つ戟(げき)、金の板でおおわれた重い棍棒、百殺棒(シャタグニー)などの武器がいたるところ現われ出た。(二六―二七) そして大きな岩石が幾千と、雷電と金剛杵(ヴァジュラ)をともなってあちこちで落下した。そして幾百もの刃を持つ火のように

輝く円盤が出現した。(二八) カルナは燃えながら落下する槍、岩石、斧、投槍、刀、金剛杵、雷電、杵の大雨を矢の群で破壊しようとしたが破壊できなかった。(二九) 馬は矢で撃たれて倒れ、象は金剛杵で撃たれて倒れ、偉大な戦士たちは石で撃たれて倒れ、彼らは大声で叫んだ。(三〇) ガトートカチャはこよなく恐ろしい種々の武器を落下させて、ドゥルヨーダナの軍勢をすっかり殺した。兵たちが苦しみ、あちこち逃げまどっているのが見られた。(三一) 彼らは「ああ、ああ」と言って逃げまわり、悲嘆に暮れていた。しかしその時、勇士たちは高貴さの故に、顔を背けて退却することはなかった。(三二) その最も凄まじく恐ろしい羅刹の強力な武器よりなる雨が落下し、兵たちの群が倒されるのを見て、あなたの息子たちに大きな恐怖が入り込んだ。(三三) 火のように燃える舌をした幾百のジャッカルが、こよなく恐ろしい声で吠えていた。羅刹の群が叫んでいた。それを見て王の戦士たちは慄然とした。(三四) 羅刹たちは燃える舌と口をし鋭い牙を持って、恐ろしく、山のような巨体であった。彼らは空中にいて、槍を手に持ち、雨の群を降らせる雲のようであった。(三五) クル軍は矢、槍、戟、恐ろしい棍棒、燃える鉄棒、金剛杵、三叉戟、雷電、円盤に撃たれ、百殺棒(シャタグニー)に粉砕されて倒れた。(三六) 羅刹たちはあなたの息子の軍に多様な武器を浴びせた。そして恐ろしい失意が兵たちを襲った。(三七) 勇士たちは内臓は散乱し、頭は破壊され、身体は砕けて、そこに横たわっていた。彼らの馬は切断され、象は砕かれ、戦車は岩石で粉砕された。(三八) ガトートカチャに創られた幻影(マーヤー)である、世にも恐ろしい姿の羅刹たちは、このように武器の雨を降らせ、懇願する者や恐れる者をも容赦しなかった。(三九) その恐ろしいクルの

勇士の殺戮、カーラ(破壊神)にもたらされた王族(クシャトリヤ)たちの滅亡において、すべてのクル族の人々はうち破られ、大声で叫びながら急いで逃走した。(四〇)

「クルの人々よ、逃げろ。もうおしまいだ。インドラをはじめとする神々は、パーンダヴァのために我々を滅ぼす。」

そのように沈みつつあるバラタ族の軍にとって、いかなる島(寄る辺)もなかった。(四一) その激戦が行なわれ、クル軍がうち破られ滅ぼされ、軍隊の区分が明瞭でなくなった時、クル軍も敵軍も識別されなくなった。(四二) その常軌を逸した恐ろしい敗走において、すべての方角は見渡す限り(テクスト疑問)空虚であった。王よ、ただカルナ一人がその武器の雨に胸までつかっているのを私は見た。(四三)

それからカルナは、羅刹の神的な幻力(マーヤー)と戦いつつ、空中を矢でおおった。廉恥心ある彼は、戦場でなしがたい高貴な行為をなしつつ、迷うことはなかった。(四四) 王よ、それから恐れたすべてのシンドゥの軍とバーフリーカの軍がカルナを見た。彼らはあの羅刹の勝利を見て、カルナが戦場で迷妄に陥らないことを讃えていた。(四五) 羅刹に放たれた円盤をそなえた百殺棒(シャタグニー)が、同時にカルナの四頭の馬を殺した。馬たちは歯や眼や舌などを失い、息絶えて、大地に膝をついて倒れた。(四六) それからカルナは、馬を殺された戦車から飛び下りて、クル軍が逃走し、彼の神的な武器が幻術により破壊された時、いささか途方に暮れて、心の中でその時にやるべきことを考えた。(四七) それからすべてのクル軍は、カルナと恐ろしい幻術を見て告げた。

「カルナよ、今すぐに槍で羅刹を殺せ。クル軍とドリタラーシトラの息子たちは滅びる。(四八)ビーマとアルジュナは何を我々にするだろうか。夜中に我々を苦しめているこの羅刹を殺せ。この恐ろしい戦闘から我々を解放する者が、戦場で我々をパーンダヴァたちと戦わせるであろう。(四九)それ故、インドラから与えられた槍であの恐ろしい姿の羅刹を殺せ。カルナよ、この夜、インドラのようなすべてのクルの勇士と兵士たちが滅びることのないように。(五〇)」

王よ、カルナはその夜羅刹に攻撃され、自軍が滅ぼされているのを見て、そしてクル軍が大声をあげているのを聞いて、例の槍を放つ決意をした。(五一)その夜、彼は怒った獅子のようにひどくいきり立ち、羅刹のそのような攻撃に我慢できなくなった。そして相手を殺そうと望んで、耐えがたい最高の勝利の槍をとった。(五二)王よ、その槍は積年の間、戦場でアルジュナを殺すべく、大事に保存されたものである。実にインドラがカルナの耳環と交換にその最高の槍をカルナに与えたのであった。(五三)その槍は舌なめずりして輝き、輪縄をそなえ、破壊神(アンタカ)の夜のようであり、死神(ムリテュ)の姉妹であり、燃え上がる流星のようであった。カルナはその槍を羅刹に送った。(五四)敵の身体を滅ぼす燃え上がるその最高の槍がカルナの腕にあるのを見て、王よ、羅刹は自身をヴィンディヤ山麓のように大きくして、恐れて逃げ出した。(五五)王よ、空中の生類は、カルナの腕にあるその槍を見て大声をあげた。王よ、そして雷をともなう激しい風が吹き、雷電が地面に落ちた。(五六)その槍はそのような幻術(マーヤー)を灰にして燃え上がり、その羅刹の心臓を激しく貫通して、夜間に輝きつつ上方に行き、

星々の中に入った。(五七)勇士ガトートカチャは種々の多彩な武器、神々、人間、羅刹の武器の群により戦った後、種々の恐ろしい叫び声をあげて、インドラの槍によって愛しい生命を奪われた。(五八)そして彼は敵を滅ぼすために、次のような他の驚異的なめざましい行為をした。王よ、その時、彼は槍で急所を貫かれながらも、山か雲のように輝いていた。(五九)それからその羅刹王は身体を貫かれて息絶えて、空中から大地に落下した。ガトートカチャは頭を下にして、身体を硬直させ、(テクスト一部疑問)巨大な姿をとっていた。(六〇)恐るべき行為をするビーマセーナの息子は殺されたが、そのような恐るべき凄まじい姿をとって、あなたの軍隊の一部を粉砕した。そしてクルの軍隊を恐れさせた。(六一)それからクルの軍隊は集結して、獅子吼をし、ベーリやムラジャやアーナカ(太鼓の種類)を打ち、法螺貝を吹いた。クルの軍隊は幻術(マーヤー)が滅ぼされ、羅刹が殺されたのを見て喜び歓声をあげた。(六二)インドラがヴリトラを殺した時にマルト神群に讃えられるように、カルナはクル軍に讃えられつつ、戦車に乗っているあなたの息子の後ろに乗り、喜んで自分の軍隊に合流した。(六三)

(第百五十四章)

(71) ドローナの死（第百五十五章―第百六十五章）

ガトートカチャの死を喜ぶクリシュナ

サンジャヤは語った。——

ヒディンバーの息子が裂かれた山のように殺されたのを見て、すべてのパーンダヴァたちは心から悲しんで、涙に満ちた眼をしていた。（一）しかしクリシュナは大喜びし、人々を苦しめるかのように獅子吼をした。バーラタよ。彼は大声で叫んでから、アルジュナを抱きしめた。（二）彼は大声で叫んでから馬の手綱を引き絞り、喜びにあふれて、風に吹き上げられる樹のように踊った。（三）それからクリシュナは再びアルジュナを抱きしめて（異本による）、何度も手でたたき、戦車の座席に立ち、再び激しく叫び声をあげた。（四）王よ、強力なクリシュナが喜んでいるのを知って、アルジュナは悲し気に言った。（五）

「クリシュナよ、あなたは今大喜びをしているが、場違いではないか。ヒディンバーの息子が殺されて、最高に悲しむべき時なのに。（六）ガトートカチャが殺されたのを見て、わが軍は退却し、彼が倒れたことで我々はひどく悲しんでいる。（七）クリシュナよ、これには深い理由（わけ）があるはずだ。あなたにその理由をたずねる。今、真実を私に告げてくれ。真実を述べる人々の最上者よ。（八）もしそれが秘密でないなら、どうか告げて下さい。敵を制する者よ。クリシュナよ、あなたが今、何故に平静さを失ったか言って下さい。（九）クリシュナよ、あなたのこの軽々しい行為は、海が干上がり、メール山が移動するようなことだと私は思う。

（一〇）」

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は言った。

「ダナンジャヤよ、私が大喜びをした理由を聞きなさい。それはあなたの心をこよなく満足させるであろう。（一一）輝きに満ちた者よ、ダナンジャヤよ、ガトートカチャによってあの槍が浪費させられたからには、戦場ですでにカルナは殺されたも同然であると知れ。（一二）カルナがあの槍を持ったら、彼はカールッティケーヤ（スカンダ）のようである。この世で何人（なんぴと）が戦場において彼に立ち向かえようか。（一三）幸いなことに、彼は（貫き得ない）鎧を奪われた。幸いなことに、彼は耳環を奪われた。幸いなことに彼の必殺の槍は、ガトートカチャに対して用いられて無効になった。（一四）強力なカルナは、もしあの鎧と耳環をつけていたら、一人で神々をも含む三界を征服したであろう。（一五）インドラ、クベーラ、水の主ヴァルナ、ヤマといえども、戦場においてカルナに対抗することはできないだろう。（一六）あなたがガーンディーヴァ弓を引き絞り、私が円盤スダルシャナをとっても、戦場において完備したあの人中の雄牛をうち破ることはできない。（一七）インドラはあなたのために、詐術を用いてカルナの耳環を奪った。そして敵の都を征服する彼の鎧を奪った。（一八）カルナはあの鎧と汚れなき耳環を切り取ってインドラに与えたから、ヴァイカルタナ（切り離した者）と呼ばれるようになったという（三・二九四・三八参照）。（一九）怒った毒蛇が呪句（マントラ）の威光により力を失う。火の焔が鎮まる。カルナは今やそのようであると私には思われる。（二〇）勇士よ、偉大なインドラが耳環と神聖な鎧と交換して、ガトートカチャを殺したあの槍をカルナに与えて以来、カルナはそ

れを得て、いつも戦いにおいてあなたを殺したも同然と考えて来た。(二一—二二) しかし人中の虎よ、そのようであっても、あなた以外の誰も、彼を殺すことができない。非の打ち所のない者よ、私は真実にかけて誓う。(二三) カルナは敬虔で、真実を語り、苦行を積み、誓戒を守り、敵に対しても情け深い。それ故、カルナはヴリシャン（「雄牛」、または「有徳な人」）と呼ばれる。(二四) 彼は戦いに酔い、強力で、常に弓を構え、森における獅子が発情した象の群の長を粉砕するように、戦いの最前線において戦士の虎たちの誇りをくじく。(二五) 彼は真昼の太陽のようで、あなたの軍の偉大な主立った戦士たちは彼を見ることができない。人中の虎よ。彼は矢の群という千の光線を放ち、秋の太陽のようである。(二六) 夏の終わり（雨季）の雲のように、カルナは矢の大雨を降らせる。カルナは神的な武器という水を降らせ、雨を降らせる雨神（または「雲」）のようである。彼は今、インドラに与えられた槍を失って、ただの人間になった。(二七)

彼を殺すために一つの術策がある。あなたは前もって私の合図を吟味して、油断することなく、彼が注意を怠って、その戦車の車輪が穴にはまった時に、彼を殺すべきである。(二八) ジャラーサンダ、偉大なチェーディ王（シシュパーラ）、強力なニシャーダの王子エーカラヴィヤたちをすべて、私はあなたのために、種々の術策により一人一人殺した。(二九) そしてヒディンバ、キルミーラ、バカをはじめとするその他の羅刹王、そして敵軍を粉砕するアラーユダ、更に恐るべき働きをする強力なガトートカチャも殺された。(三〇)」　（第百五十五章）

法を損なう者たちは殺される

アルジュナはたずねた。

「クリシュナよ、我らのために、どのようにして、いかなる術策によって、ジャラーサンダなどの王は殺されたのか。(一)」

ヴァースデーヴァは語った。

「ジャラーサンダ、チェーディ王、ニシャーダの王の強力な息子（エーカラヴィヤ）がもしかつて殺されなかったら、彼らは今、恐怖をもたらすものになったであろう。(二) スヨーダナ（ドゥルヨーダナ）は必ずや彼ら最高の戦士たちを（味方として）選んだであろう。彼らはいつも我々と仲が悪いので、クル族の側につくであろう。(三) 彼らは勇士で、偉大で、武器に通達し、屈強の戦士たちである。彼らは神々のように、ドゥルヨーダナのすべての軍隊を守るであろう。(四) カルナ、ジャラーサンダ、チェーディ国王、ニシャーダの王子がスヨーダナにつけば、彼らはこの地上を苦しめるであろう。(五) アルジュナよ、彼らがいかなる術策により殺されたか、それを私から聞け。というのは、神々ですら術策なしに、戦いで彼らをうち破ることはできないから。(六) アルジュナよ、実に彼らの一人一人ですら、世界守護神たちに守られたすべての神軍と戦場で戦うことができる。(七)」

かつてローヒニーの息子（バララーマ）に攻撃されたジャラーサンダは怒って、我々を殺すため

に、銅の先端を持つ棍棒を投げた。（八）その火のような棍棒は、空に境界線を引くかのように飛んだ。飛来するその棍棒は、インドラに放たれた雷電のように見えた。（九）ローヒニーの息子は、その棍棒が飛来するのを見て、それを迎撃するために、ストゥーナカルナという武器を放った。（一〇）その棍棒は、その武器の勢いにより威力を失い、山々をふるわせ、大地の女神を裂きつつ、地上に落下した。（一一）

ジャラーという足の速い恐ろしい羅刹女がいた。彼女が接合した（サンダヤーマーサ）結果、その敵を制するジャラーサンダが生まれた。（一二）二人の母から生まれたそれぞれ半身ずつが、ジャラーによって接合された（サンディタ）から、それ故ジャラーサンダ（ジャラーによって接合された者）と呼ばれる（二・一七・六参照）。（一三）アルジュナよ、大地の中にいたその羅刹女は、子供や親族もろとも、その棍棒とストゥーナカルナという武器によって殺された。（一四）ジャラーサンダは棍棒を失い、あなたが見ている前で激戦においてビーマセーナに殺された（二・二参照）。（一五）もし栄光あるジャラーサンダが棍棒を持っていたら、インドラを含む神々ですら戦いにおいて彼を殺すことはできなかったであろう。最高の人よ。（一六）

またドローナは、あなたのために、不屈の勇者であるニシャーダの王子（エーカラヴィヤ）に対し、師匠への謝礼を要求し、詐術によりその親指を切り取らせた。（一七）屈強の勇士ニシャーダの王子は弓懸（ゆがけ）をつけて一人で森を歩きまわって矢を放ち、もう一人のラーマのように輝いていた。（一八）もしエーカラヴィヤが親指を失わなかったら、神々、魔類、羅刹、蛇（竜）といえども戦いにおいて彼をうち破ることは決してできなかったろう。アルジュナよ。（一九）いわんや、ただの人間には、見られることさえできない。強固な握力を持ち、敏腕で、昼も夜も常に矢を放つ彼は……。（二〇）しかし私は、あなたのために、戦いの最前線において彼を殺した。

勇猛なチェーディ国王（シシュパーラ）もあなたの眼の前で殺された。（二一）すべての神や阿修羅は、戦いにおいて彼を殺すことはできなかった。人中の虎よ、私は世界の者たちの幸せを願い、あなたを助力者として、彼やその他の神々の敵を殺すために生まれた。

ヒディンバ、バカ、キルミーラはビーマセーナに倒された。彼らはラーヴァナに匹敵する羅刹で、バラモンや祭祀を滅ぼしていた。（二二―二三）同様に、幻力（マーヤー）を有するアラーユダもガトートカチャに殺された。そのガトートカチャも、術策により、カルナに槍で殺された。（二四）もしカルナが激戦においてビーマセーナの息子ガトートカチャを槍で殺さなければ、私は彼を殺したであろう。（二五）しかし私はあなたによかれと願って、前に彼を殺さなかったのだ。というのは、あの羅刹はバラモンと祭祀を憎んでいた。（二六）彼は法（ダルマ）を損なう邪悪な者であったから倒されたのだ。そしてまた、私はインドラに与えられたカルナの槍をも術策により浪費させた。非の打ち所のない者よ。（二七）パーンダヴァよ、実に法を損なう者たちは、私にとって殺されるべきなのだ。これは法を確立するための私の不変の誓いである。（二八）ブラフマン（ヴェーダ）、真実、自制、清さ、法、廉恥、吉祥、堅固、忍耐がある所、私は常にそこで楽しむ。私は真実にかけてあなたに誓う。（二九）

あなたはカルナに対して嘆く必要はない。あなたが彼を圧倒する術策を教えよう。（三〇）

また狼腹（ビーマ）は戦場においてスヨーダナを殺すであろう。彼を殺す方法をもあなたに教えるであろう。パーンダヴァよ。（二一）

ところで敵軍の方で喧噪が高まっている。あなたの軍隊が十方に逃げている。（二二）実にクル軍は目的を達して、あなたの軍隊を粉砕している。最高の戦士ドローナはあなたの軍隊を燃やしている。（二三）」

（第百五十六章）

クリシュナがアルジュナを守った

ドリタラーシトラは言った。

「もし必ず一人の勇士を殺す（異本による）槍がカルナにあるなら、どうして彼は他のすべての者を捨てて、それをアルジュナに放たなかったのか。（一）アルジュナが殺されたら、すべてのパーンダヴァとスリンジャヤの軍は殺されるであろう。その卓越した勇士が死んだら、どうして戦いにおいて勝利しないであろうか。（二）『私は挑戦されたら退かない』というのがアルジュナの大誓戒である。カルナは自らアルジュナに挑戦すべきであった。（三）それからカルナは一騎打ちをして、インドラに与えられた槍で何故にアルジュナを殺さなかったのか。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。（四）確かに私の息子は知性を欠き、よい仲間がいない。敵に裏をかかれた彼は、どうして敵に勝利することができようか。（五）彼のあの最高の槍は勝利の拠り所であった。その彼の槍はクリシュナの計らいにより、ガトートカチャに対して浪費させせられた。（六）手の不自由な人の手にあるビルバ果が強力な者に奪われるように、その的を外すことのない槍は、ガトートカチャに対して浪費させられた。（七）猪と犬が戦って共倒れになれば、猟師（直訳は「犬を調理する者」）が利益を得るように、戦場でカルナとガトートカチャが共倒れになれば、クリシュナの利得になると私は思う。賢者よ。（八）もしガトートカチャがカルナを殺せば、パーンダヴァたちにこの上ない利得があるであろう。またカルナが相手を殺しても、あの槍を失うから、彼らは目的を成就したことになる。（九）知者である人中の獅子クリシュナは叡知によりこのように考えて、ガトートカチャをカルナと戦わせたのだ。パーンダヴァたちに好意的にふるまい、有益なことをしようとして。（一〇）」

サンジャヤは答えた。

「王よ、大知者であるクリシュナはカルナの意図を知って、必殺の槍を浪費させるために、強力な羅刹王ガトートカチャに彼と一騎打ちをせよと指令したのである。王よ、これはあなたの悪しき政策のせいだ。（一一―一二）クルの王よ、もしクリシュナが偉大な戦士カルナからアルジュナを守らなかったら、我々は目的を達成したであろう。（一三）ドリタラーシトラよ、ヨーガの主である強力なクリシュナがいなければ、アルジュナは馬や旗や戦車とともに、戦場において大地に倒れたであろう。（一四）アルジュナは多種多様な方策に守られて、クリシュナに守護されて、敵に向かって行き勝利した。（一五）特にクリシュナはあの必殺の槍からアルジュナを守った。実にあの槍は投じられたらアルジュナを殺したであろう。雷電が樹木を砕くように。（一六）」

ドリタラーシトラは言った。

「私の息子は争いを好み、悪い顧問を持ち、しかも知者であると自惚れている。彼のアルジュナを殺すこの方策は無効になった。（一七）サンジャヤよ、どうしてそなたもこのことを失念していたのか。大知者よ、そなたがそのことを知らせなかったとは。（一八）」

サンジャヤは語った。――

毎夜、ドゥルヨーダナとシャクニと私とドゥフシャーサナは、常に〔カルナとともに〕次のように考察した。（一九）

「カルナよ、明日、すべての兵たちを捨て置いて、アルジュナを殺せ。そうすれば我々は、パーンダヴァとパーンチャーラたちを召使のように享受するであろう。（二〇）あるいは、アルジュナが殺された時、もしクリシュナがパーンダヴァたちの誰か一人を戦いに起用するなら、クリシュナを倒すべきである。（二一）というのは、クリシュナはパーンダヴァたちの根である。アルジュナは生起した幹である。他のパーンダヴァたちは枝である。パーンチャーラは葉であると称される。（二二）パーンダヴァたちはクリシュナに依存し、クリシュナを力とし、クリシュナを指導者とする。星々にとって月が拠り所であるように、彼らにとってクリシュナは最高の拠り所である。（二三）カルナよ、それ故、あらゆる場所と時において、葉と枝と幹を捨て置いて、パーンダヴァたちの根であるクリシュナを斬れ。（二四）

王よ、もしカルナがあのヤーダヴァの指導者であるクリシュナを殺せば、疑いもなくすべ

ての大地があなたの支配下に帰すであろう。（二五）ヤドゥ一族とパーンダヴァたちを喜ばせるあの偉大な人が、もし殺されて大地に横たわるなら、王よ、山と海と森をともなうすべての大地があなたの支配下に帰するであろう。（二六）」

我々はそのように決意したが、神々の主である計り知れぬクリシュナが目覚める、戦いの時には、その決意は混乱してしまった。（二七）そしてクリシュナは常にアルジュナを守っていて、戦場において彼をカルナの正面に立たせることを望まなかった。（二八）クリシュナは他の勇士たちをカルナの近くに立たせた。「あのカルナの的を外さぬ槍を浪費させてやろう」と考えて。王よ。（二九）

それから、不屈の勇者である戦士の虎（異本による）、強力なサーティヤキは、勇士カルナについてクリシュナにたずねた。

「限りなく勇猛な人よ、あの槍によって、敵たちはカルナを頼りにしている。カルナはどうしてそれをアルジュナに投じないのか。（三〇―三一）」

ヴァースデーヴァ（クリシュナ）は答えた。

「ドゥルヨーダナをはじめ、ドゥフシャーサナ、カルナ、シャクニ、シンドゥ国王は、いつも協議していた。（三二）

『カルナよ、カルナよ、偉大な射手よ、戦場において限りなく勇猛な男よ。最高の勝利者よ、あなたのあの槍を他の者に対して放つべきではない。（三三）勇士アルジュナ以外には……。というのは彼は彼らのうちで最も誉れ高いから。神々のうちのインドラのように。（三四）彼

が殺されたら、すべてのパーンダヴァたちはスリンジャヤたちとともに、アグニ（神火）を失った神々のように滅びるであろう。（三五）』

シニの雄牛（サーティヤキ）よ、カルナは『承知した』と約束した。（三六）最高の戦士よ、しかし私はいつもカルナを惑わせた。そこで彼はあの槍をアルジュナに対して投げなかったのである。（三七）アルジュナが戦おうとすれば、その槍が彼の死をもたらすと考え、私には眠りも心の喜びもなかった。最高の戦士よ。（三八）シニの雄牛よ、しかしそれがガトートカチャに対して浪費されたのを見て、今、アルジュナが死神の口から解放されたと私は考える。（三九）私の父母でも、あなたでも、兄弟でも、私の生命でも、それらを守ることより戦場でアルジュナを守ることの方が大切なのだ。（四〇）サーティヤキよ、私はアルジュナなしではそれを望まない。（四一）サーティヤキよ、そこで今日、私の喜びはこよなく大きいのだ。死んだアルジュナが生き返ったように思うから。（四二）そのために私はあの羅刹をカルナに対して送ったのである。他の者は夜戦において、カルナを食い止めることはできないからね。（四三）」

サンジャヤは語った。――

アルジュナに有益なことに専念し、常に彼によかれと願うクリシュナは、その時サーティヤキに以上のように語った。（四四）

（第百五十七章）

ユディシティラに教えるヴィヤーサ

ドリタラーシトラは言った。

「友よ、カルナとドゥルヨーダナとシャクニなど、そして特にそなたの戦略はまるでなっていない。（一）インドラをはじめとする神々によっても退（しりぞ）けがたく耐えがたいあの槍は、戦場でただ一人だけを殺すといつもあなたは知っていたのに。（二）どうしてカルナは、前に戦いが始まった時に、クリシュナやアルジュナにそれを放たなかったのか。サンジャヤよ。（三）」

サンジャヤは答えた。

「王よ、クルの一族の最上者よ、我々すべては戦場から帰ると、夜中、いつも次のように協議した。『カルナよ、カルナよ、明日の夜明けになったらすぐに、あの槍をクリシュナかアルジュナに向けて放つべきである』と。（四―五）しかし王よ、黎明の時になると、運命の計らいにより、カルナやその他の戦士たちの決意はまた失せてしまうのであった。（六）運命のみが最高であると私は思う。というのは、カルナは手に持つその槍により戦場でアルジュナあるいはクリシュナを殺さなかったのだから。（七）カルナの手にある槍は、振り上げられた終末の夜（カーララートリ）のようであるが、彼は運命に知性を損なわれていたから、神の幻力（マーヤー）に迷わされ、そのインドラに与えられた槍を、デーヴァキーの息子クリシュナやインドラのようなアルジュナを殺すべく投じなかったのであった。王よ。（八―九）」

ドリタラーシトラは言った。
「そなたたちは運命により、またクリシュナにより（異本による）自己の知性を失った。実にあの槍は、草のような存在のガトートカチャを殺して失われた。（二〇）カルナと私のすべての息子とその他の王たちは、この悪しき戦略により、ヤマ（閻魔）の住処に行く。（二一）
ところで、ガトートカチャが殺された時、クル軍とパーンダヴァ軍との間に、どのように戦いが展開したか、再び私に語ってくれ。（二二）また陣形を整えてドローナを攻撃したスリンジャヤとパーンチャーラの戦士たちは、どのように戦ったか。（二三）ドローナはソーマダッタの息子（ブーリシュラヴァス）とシンドゥ国王（ジャヤドラタ）を殺されたことで怒り、いきり立って生命を捨てて敵軍に突入した。（二四）彼は口を開けた虎か、口を拡げた死神（アンタカ）のようだ。パーンダヴァとスリンジャヤの軍は、矢を射るそのドローナに対してどのように対抗したか。（二五）そしてまた、師匠を守るドゥルヨーダナをはじめ、ドローナの息子、カルナ、クリパは、戦場でどのように行動したか。（二六）わが軍はその戦いにおいて、ドローナを殺そうと望むアルジュナと狼腹（ビーマ）に対して、どのように攻撃したか。サンジャヤよ、私に語ってくれ。（二七）片やシンドゥ国王を殺されて怒り、片やガトートカチャを殺されて怒り、いきり立った者たちは、その夜、どのように戦ったか。（二八）」

サンジャヤは語った。——

王よ、その夜、羅刹ガトートカチャがカルナに殺された時、あなたの兵たちは喜んで叫び

声をあげ、戦うことを望んで、激しく敵に襲いかかった。その時、自軍を殺されて、ユディシティラ王は深夜、最高に気落ちした。（一九－二〇）そしてその敵を苦しめる勇士はビーマセーナに告げた。
「勇士よ、ドゥルヨーダナの軍隊を食い止めよ。ガトートカチャが殺されたことで、大きな迷妄が私に入り込んだ。（二一）」
彼はビーマにこのように指示すると、自分の戦車に座り込んだ。王は涙に満ちた顔をして、何度もため息をついた。カルナの勇武を見て、恐ろしく弱気になったのである。（二二）クリシュナは彼がそのように悩んでいるのを見て次のように言った。
「クンティーの息子よ、悩んではいけない。バラタの最上者よ、普通の人のように嘆くのは、あなたにはふさわしくない。（二三）王よ、立ち上がれ。主よ、重荷を担いなさい。あなたが嘆いていては、勝利はおぼつかないであろう。（二四）」
クリシュナの言葉を聞くと、ダルマ王ユディシティラは両手で両眼を拭ってクリシュナに告げた。（二五）
「勇士よ、あなたは法（ダルマ）の最高の帰趨を知っている。恩を忘れる者は、バラモン殺しと同様の果報を受ける。（二六）というのは、クリシュナよ、我々が森に住んでいた時、偉大なガトートカチャはまだ子供であったが、彼は我々を援助してくれた。（二七）クリシュナよ、アルジュナが武器を入手するために出発したと知って、あの偉大な射手は、カーミヤカの森で私に仕えた。そしてアルジュナが帰るまで我々といっしょに住んでくれた。（二八）ガンダマー

ダナ山を進んだ時、あの偉大な男は我々に難所を越えさせてくれた。そして彼は疲れ切ったパーンチャーリー（ドラウパディー）を背負ってくれた（三・一四五参照）。（二九）主よ、そして戦いが始まってから彼のなしたことは……。あの偉大な男は私のためになしがたい働きをした。（三〇）クリシュナよ、私は当然サハデーヴァを愛しているが、羅刹王ガトートカチャはその二倍も愛している。（三一）あの勇士も私に献身的であった。彼にとって私は愛しく、私にとって彼は愛しかった。そこで私は悲しみに苦しめられ、弱気になったのだ。クリシュナよ。（三二）

クリシュナよ、見よ。わが軍はクル軍に追い立てられている。見よ、偉大な戦士ドローナとカルナは奮戦している。（三三）見よ。パーンダヴァ軍はその両者に粉砕された。大きな葦の茂みが発情した二頭の象に踏みつぶされるように。（三四）クリシュナよ、クルの勇士たちはビーマセーナの両腕の力やアルジュナのめざましい武技をものともせず、勇敢に戦った。（三五）あそこでドローナとカルナとスヨーダナ王は、戦いにおいて羅刹を殺し、戦場で喜んで叫んでいる。（三六）クリシュナよ、我々やあなたが生きているのに、どうしてガトートカチャはカルナと対戦して死ぬことになったのか。（三七）クリシュナよ、アルジュナが見ている前で、我々すべてを蔑ろにして、彼はビーマセーナの息子である強力な羅刹を殺した。（三八）クリシュナよ、邪悪なドリタラーシトラの息子たちにアビマニユが殺された時は、その戦場には勇士アルジュナはいなかった。（三九）我々はすべて邪悪なシンドゥ国王（ジャヤドラタ）に食い止められた。ドローナとその息子とがあの所行の原因であった。（四〇）師匠は自ら彼を殺す方法をカルナに教えた。彼が刀で奮戦していた時、ドローナはその刀を二つに切断した。

（四一）彼がそのような苦境に陥った時、クリタヴァルマンは無慈悲にも、激しく彼の馬たちと、両端の馬たちを御す二人の御者を殺した。そして他の勇士たちが戦場でアビマニユを倒した。（四二）ヤーダヴァの最上者クリシュナよ、シンドゥ国王はわずかな原因でアルジュナに殺された。それはあまり私の気に入らない。（四三）もしパーンダヴァたちが敵を殺すのが正当なら、まず最初に、戦場でドローナとカルナとを殺すべきだというのが私の考えである。（四四）人中の雄牛よ、実にこの両者は我々の苦難の根である。スヨーダナは戦場でこの両者を得て安心する。（四五）ドローナとカルナとその従者たちが殺されるべきであったのに、あの勇士は直接に関係ないシンドゥ国王を殺した。（四六）私はどうしても御者（スータ）の息子を成敗しなければならぬ。勇士よ、そこで私は自らカルナを殺そうと望んで出陣するであろう。強力なビーマセーナはドローナの軍と交戦している。（四七）」

ユディシティラはこのように言うと、速やかに進撃した。彼は大弓を引き絞り、恐るべき法螺貝を吹き鳴らした。（四八）それからシカンディンが、千の戦車兵、三百の象兵、五千の騎兵、三千のプラバドラカ（パーンチャーラの一部）に囲まれて、急いで王の後に従った。（四九）それからユディシティラに先導される、武装したパーンチャーラとパーンダヴァの軍隊は、太鼓を打ち、法螺貝を吹いた。（五〇）すると強力なクリシュナはアルジュナに告げた。

「あそこにユディシティラが怒りにかられて、カルナを殺そうと望んで急いで進んで行く。彼を捨て置くことはよろしくない。（五一）」

クリシュナはこのように言うと、速やかに馬たちをかりたてた。そして彼は、遠方に行っ

た王の後を追った。（五二）
ダルマの息子ユディシティラが、悲しみのあまり定見を失って、火で燃えるかのように、カルナを殺そうとして激しく進軍するのを見て、ヴィヤーサ仙は彼に近づいて告げた。（五三）
「アルジュナは戦場でカルナに遭遇したが、幸いなことに生きている。実にカルナは、アルジュナを殺すことを望んであの槍を温存していた。（五四）バラタの雄牛よ、幸いなことにアルジュナはカルナと一騎打ちをしなかった。その両者は神的な武器をいたるところに発射して競い合う。（五五）ユディシティラよ、諸々の武器が破壊された時、カルナは苦しんで、必ずや戦場においてインドラの槍を放つであろう。（五六）バラタの最上者よ、そうすればお前にとって恐ろしい災いとなろう。幸いなことに、戦いにおいて羅刹がカルナに殺された。誇りを与える者よ。（五七）実は彼はカーラ（時間、破壊神）に殺されていた。インドラの槍は原因（道具）にすぎない。わが子よ、まさにお前のために羅刹は戦いで殺されたのだ。（五八）
バラタの最上者よ、怒ってはいけない。悲しんではいけない。ユディシティラよ、これはこの世のすべての生き物の帰結なのだ。（五九）バラタ族の王よ、弟たちとともに、すべての偉大な王たちとともに、戦場でクル族の軍と戦いなさい。五日目に、大地はお前のものになるであろう。（六〇）人中の雄牛よ、常に法（ダルマ）についてのみ考えよ。パーンダヴァよ、最高に満足して、温情、苦行、布施、忍耐、真実に専念せよ。法のある所に勝利がある。」
ヴィヤーサはユディシティラにこのように告げると、その場で消え失せた。（六一―六二）

（第百五十八章）

アルジュナの提案で、両軍は仮眠をとる

サンジャヤは語った。――
その夜、ガトートカチャがカルナに殺された時、ダルマの息子ユディシティラは苦悩と怒りに支配された。（一）ビーマがあなたの大軍を食い止めたのを見て、彼はドリシタデュムナに告げた。
「クンバヨーニ（ドローナ）を制止せよ。（二）というのは、敵を苦しめるあなたはドローナを滅ぼすために、矢と鎧と刀と弓を持って、火中より生じたのであるから。戦場において喜び勇んで襲撃せよ。決して恐れてはならぬ。（三）ジャナメージャヤ、シカンディン、ドゥルムカの息子、ヤショーダナも、喜び勇んで、いたるところからドローナに襲いかかれ。（四）ナクラ、サハデーヴァ、ドラウパディーの息子たち、プラバドラカたち、ドルパダとヴィラータ、及び彼らの息子と兄弟たち、サーティヤキ、ケーカヤたち、パーンドゥの息子アルジュナは、ドローナを殺そうと望んで、速やかに襲撃せよ。（五―六）すべての戦車兵、象兵、騎兵、歩兵はすべて、戦場で勇士ドローナを倒せ（異本による）。（七）」
彼らすべては、偉大なユディシティラにこのように命じられて、戦いを望んで激しくドローナに襲いかかった。（八）しかし最高の戦士ドローナは、パーンダヴァたちが懸命に努力し

て激しく襲来した時、戦場で彼らを迎え撃った。（九）
それからドゥルヨーダナ王は、ドローナの生命を守ろうと望み、猛り立ち、懸命に努力してパーンダヴァ軍を攻撃した。（一〇）そして大王よ、お互いに怒号するパーンダヴァ軍とクル軍の間に、象馬や兵士を疲労させる戦いが始まった。（一一）大王よ、偉大な戦士たちは眠気で眼を開けていられず、その戦いにおいて疲れ果て、戦場でいかなる動作をもすることができなくなった。（一二）三更（ヤーマ）（一ヤーマは四時間）よりなる凄まじくも恐ろしいその生命を奪う夜は、千更のように長く感じられた。（一三）彼らがこの上なくお互いに殺され、傷つけられ、眠気でまったく眼を開けられなかった時、彼らにとって昼と夜の見分けがつかなかった。敵味方のすべての王族（クシャトリヤ）たちは気力を失い、意識が朦朧とし、武器を失い、矢を失った。（一四）彼らはこのような状態であったが（テクスト疑問）、こよなく廉恥心を持つ者たちは自己の本務（ダルマ）を考慮して、自分の軍隊を離れなかった。（一五）他の人々は眠気で眼を開けていられなくなり、武器を捨てて眠った。ある者たちは象の上で、他の者たちは戦車の上で、また他の人々は馬の上で眠った。バーラタよ。（一六）王たちは眠気で眼を開けていられず、いかなる動作も見分けられなくなった。戦士たちは戦場で、お互いに相手をヤマ（閻魔）の住処に送った。（一七）また他の人々は、眠って、敵と味方を混同し、戦場で敵味方を殺した。（一八）彼らは戦場において、眠気で眼を開けていられなくなり、種々の叫び声をあげた。彼らは眠たくて眼を閉じていたが、戦わなければならぬと考えて立っていた。（一九）王よ、他の勇士たちは、その恐ろしい闇の中で、眠気で眼を開けていられなかったが、戦場でお互いに攻撃し合って、相手を

殺した。（二〇）多くの人々は眠気により戦場でひどく狼狽して、自分が敵に殺されても気がつかなかった。（二一）
人中の雄牛アルジュナは彼らのそのような有様を知って、諸方を響かせて声高らかに言った。（二二）
「軍隊が闇と特大のほこりにおおわれた時、あなた方と象や馬はすべて疲れ、眠気で眼を開けていられない。（二三）そこであなた方、兵士たちは、もしよければ、休息をとりなさい。まさに戦場のその場で、しばらく眼を閉じなさい。（二四）そして月が昇った時、眠気と疲れがとれて、再び、天界を求めて互いに殺し合いなさい。クルとパーンダヴァの兵たちよ。（二五）」
徳性あるアルジュナのその言葉を聞いて、すべての法（ダルマ）を知る人々は兵たちを喜ばせて、お互いに告げ合った。（二六）彼らは叫んだ。
「カルナよ、カルナよ、ドゥルヨーダナよ、戦うことをやめよ。パーンダヴァたちの軍は戦いを中止したから。（二七）」
バーラタよ、アルジュナがあちこちでそのように叫んでいた時、パーンダヴァの軍とあなたの軍は戦いを中止した。（二八）神々と偉大な聖仙たちや、一切の軍隊は大喜びして（テクスト疑問）、彼のその言葉を歓迎した。（二九）バラタ族の王よ、すべての兵たちは疲れ、その親切な言葉を歓迎して、しばらくの間眠った。（三〇）バーラタよ、あなたの軍隊は休息して、幸せな気分になり、アルジュナに敬意を表した。（三一）

「勇士よ、あなたには諸々の武器がある。あなたには知性と勇武がある。あなたには法と諸々の生類に対する哀れみがある。非の打ち所のない者よ。（三二）我々はあなたにより元気づけられて望む。アルジュナよ、あなたに幸せがあるように。勇士よ、心が望む目的を速やかに達成せよ。（三三）」

王よ、勇士たちはこのように人中の虎アルジュナを讃えつつ、眠気に襲われて沈黙した。（三四）ある人々は馬の背で、他の人々は戦車の座席で、ある人々は象の肩の上で、他の人々は地面で眠った。（三五）ある人々は、各々、武器を持ち、棍棒、刀、斧、投槍を持ち、鎧をつけたままで眠った。（三六）（三七—四一略）

それから、睡蓮（夜咲きの蓮）の主である、美女の頬のように白い、眼の喜びである月が、大インドラの方角（東方）を飾った（七・一六一・一からすると、今は深夜のはずだから、東方に月があるというのは矛盾する）。（四二）それからすぐに、兎の印を持つ尊い主（月）は、前方で星々の輝きを（異本による）呑み込んで、赤い色を現わした。（四三）月はその赤色に続いて、徐々に黄金に似た輝きを持つ大きな光線の網を放った。（四四）それらの月光は、その輝きにより闇を払って、ゆっくりとすべての方角と空と地上を遍く満たした。（四五）それからすぐに、世界は光明からなるようになった。光なくすべてが不明瞭な闇は速やかに去った。（四六）王よ、それから世界が照らされ、夜が昼のようになった時、夜行の生き物たちは、あるものたちは活動を続け、またあるものたちは活動をやめた。（四七）

王よ、兵たちは月光に目覚めさせられて、水中の蓮の大きな群が開花するように目覚めた。（四八）ちょうど海が月の出により高まり波立つように、軍隊の海原は月の出によって奮起した。（四九）王よ、それから世界において、世界を滅ぼすために、最高の世界（天界）を望む人々の間で、再び戦いが始まった。（五〇）

（第百五十九章）

クル軍を二つに分ける

サンジャヤは語った。——

それからドゥルヨーダナは、怒りにかられ、ドローナに近づいて、その奮起と怒りとを生じさせつつ次のように言った。（一）

「特に武術に秀でた敵が、戦いにおいて疲労して休息し、意気消沈している時、彼らを容赦すべきではない。（二）しかし我々はあなたによかれと望んで、容赦した。パーンダヴァたちは今やすっかり休息してより強力になった。（三）我々は威光と力の点ですっかり消耗している。しかし彼らはあなたに守られて、益々力を増している。（四）あなたには特にブラフマ・アストラ（梵天の武器）などの一切の神的な武器がある。（五）あなたが戦う時、パーンダヴァたちも我々も、その他の世の弓取りたちも、あなたに匹敵しない。私はこの真実をあなたに告げる。（六）最高のバラモンよ、あなたはすべての武器に通じている。あなたは疑いもなく、神的な武器により、神々、阿修羅、ガンダルヴァを含むこの諸世界を滅ぼすであろう。（七）彼らは特にあなたを恐れているが、しかしあなたは彼らを容赦している。彼らが弟子であることを前提として。あるいは私の不運の故か。（八）」

王よ、あなたの息子によってこのように奮起させせられ、怒らされたドローナは、憤然としてドゥルヨーダナに告げた。（九）

「ドゥルヨーダナよ、私は長老ではあるが、力の限り戦場で努力している。これからは、私は勝利を切望して卑しいことをするであろう。武器に通じた私は、武器に通じていないすべての人を殺すであろう。（二〇）もしそなたが望むなら、そなたの言葉により、私は必ずや殊勝なことも汚れたこともやるであろう。クルの王よ。（二一）戦いにおいて勇武を発揮し、すべてのパーンチャーラ軍を殺してから鎧を脱ぐであろう。王よ、私は武器にかけて誓う。（二二）

そなたはアルジュナが戦いに疲れたと考えるが、勇士よ、彼の力を如実に聞け。クルの王よ。（二三）もしアルジュナが怒ったら、神々、ガンダルヴァ、夜叉、羅刹も彼に太刀打ちできない。（二四）尊い神々の主（インドラ）はカーンダヴァの森で彼に対峙した。しかし偉大な彼は矢を雨降らせるその神を食い止めた。（二五）またその人中の王は、夜叉、竜、悪魔、その他の力を誇る者たちを殺した。そのこともそなたに周知のことだ。（二六）また例の牧場視察において、あの屈強の弓取りは、チトラセーナなどのガンダルヴァ族をうち破り、彼らに攫われていたそなたたちを解放した。（二七）また、神々の敵ニヴァータカヴァチャ族は神々にも殺されなかったが、あの勇士は戦いにおいて彼らをも征服した。（二八）またその人中の虎は、ヒラニヤプラに住む幾千の悪魔たちを征服した。人間たちはどうして彼に対抗できよう。（二九）王よ、そしてそなたのすべての軍が、我々が努力しているのに、アルジュナによって

滅ぼされるのを、そなたは現に見た。（二〇）」

王よ、このようにドローナがアルジュナを称讃している時、あなたの息子は怒って、再び次のように言った。（二一）

「私とドゥフシャーサナとカルナと、私の母方の叔父シャクニとは、バラタ軍を二つに分けて、今日我らは戦場でアルジュナを殺そう。（二二）」

ドローナは彼のその言葉を聞いて、笑うかのように「汝に幸いあれ」と王に続けて言った。そして次のように告げた。（二三）

「ガーンディーヴァ弓を持つアルジュナは、威光により燃えるかのようで、不滅である。いかなる王族がその王族の雄牛を滅ぼすことができるか。（二四）財主（クベーラ）、インドラ、ヤマ（閻魔）、水の主（ヴァルナ）、阿修羅、蛇（竜）、羅刹も、武器をとった彼を滅ぼすことはできない。（二五）バーラタよ、そなたが言ったようなことを言うのは愚か者である。というのは、戦場でアルジュナに会ったら、誰が無事で家に帰れようか。（二六）ところでそなたはすべての者を疑うから、残酷で邪悪である。そなたの幸せに専心する立派な人々をも、あれこれと非難しようとする。（二七）そなたもぐずぐずせずに、自分の利益のためにアルジュナに向かって行きなさい。そなたも戦おうと望んでいる。そなたは良家の生まれの王族であるから。（二八）これらの罪のないすべての王たちを、どうして破滅させるのか。そなたがこの対立の根である。それ故、そなたがアルジュナを攻撃せよ。（二九）ここにいるお前の母方の叔父（シャクニ）は知者で、王族の法に忠実である。そのいかさま賭博師のガーンダーラ国王が、戦場で

アルジュナを攻撃するがよい。(三〇) 彼は賭博に巧みで、邪(よこしま)な賭博師で、ぺてん師で、詐術を用いて勝負する。その彼が戦いにおいてパーンダヴァたちに勝利するだろう。(三一)
そなたはしばしばカルナとともに、ドリタラーシトラの聞いている所で、迷妄にかられ、上機嫌で何度も空しい言葉を語った。(三二)
『父上、私とカルナと、私の弟のドゥフシャーサナとが三人そろって、戦いにおいてパーンドゥの息子たちを殺すであろう。(三三)』
色々な集会で、そなたがこのように大言するのが聞かれた。その約束を実行せよ。彼らとともに、言った言葉が真実になるようにせよ。(三四) そなたの仇敵であるそのアルジュナは眼前に立っている。王族の法を考慮せよ。そなたがジャヤ(アルジュナ)により殺されることは称讃に値する。(三五) そなたは布施し、食べ、学び、望んでいた富貴を得た。そなたはなすべきことをなし、負債がない。恐れるな。アルジュナと戦え。(三六)」
ドローナは戦場でこのように告げると、敵のいる所に引き返した。それから〔クル側は〕軍隊を二つに分け、そして戦いが始まった。(三七)
(第百六十章)

ドローナ、ドルパダとヴィラータを殺す

サンジャヤは語った。——
王よ、夜が残り三分の一ほどになった時、勇み立つクル軍とパーンダヴァ軍との間に戦い

が再開された。(一) その時、太陽の先駆けであるアルナ(曙光)が、月光を奪いつつ、天空を赤く染めつつ登場した。(二) それから軍隊が二つに分けられた時、ドローナはドゥルヨーダナを先に立てて、ソーマカとパーンダヴァの軍、及びパーンチャーラの軍を攻撃した。(三) クリシュナはクル軍が二つに分かれているのを見て、アルジュナに告げた。
「アルジュナよ、敵のクル軍が左側になるようにする(異本とかなり異なる)。(四)」
アルジュナは「そのようにせよ」とクリシュナに同意して、偉大な射手であるドローナとカルナの左側にまわった。(五) 敵の都市を征服する彼はクリシュナの意図を知り、戦いの最前線にいるビーマセーナを見て、そちらに近づいた。(六)
ビーマは言った。
「アルジュナよ、アルジュナよ、私の真実の言葉を聞け。王族(クシャトリヤ)の女がその時のために息子を産むところの、まさにその時が来た。(七) その時が来たのに、もしお前が最善を求めないなら、お前は尊敬されず、情け深くふるまったことにならないぞ。(八) お前はその力により、真実と繁栄と法(ダルマ)と名誉に対する負債をなくせ(それらを完全なものにせよ)。最高の戦士よ、敵軍を破れ。アルジュナよ……(テクスト疑問)。(九)」
サンジャヤは語った。——
アルジュナはビーマとクリシュナにうながされて、カルナとドローナを凌駕して、すっかり食い止めた。(一〇) 彼が戦いの最前線を進み、王族(クシャトリヤ)の雄牛たちを焼いて勇武を発揮してい

た時、王族の雄牛たちも奮戦努力したが、増大する火のような彼を食い止めることができなかった。(二一) その時、ドゥルヨーダナとカルナとシャクニは、アルジュナに矢の群を浴びせた。(二二) 最高の武器を知る者たちの最上者であるアルジュナは、彼らのすべての武器を無駄にさせて、矢の雨を注いだ。王中の王よ。(二三) 手練の早業のアルジュナは、自分の武器により敵の武器を防止して、十本ずつの鋭い矢で彼らすべてを射た。(二四) ほこりの群が舞い上がり、矢の雨が降った。その時、恐ろしい闇が支配し、大きな音声があがった。(二五) そのようであった時、天も地も諸方も見分けられなかった。すべてが軍隊とほこりで混乱し、盲目のようになった。(二六) 王よ、敵も我々もお互いに見分けられなかった。王たちは名乗り合うことによって戦った。(二七) 王よ、戦士たちは戦車を失ってもお互いに攻撃し合い、相手の髪を握りしめ、鎧や腕をつかんだ。(二八) その時、戦士たちは馬や御者を殺されて動きが取れず、生きてはいたが、恐怖に苦しんでいるように見えた。(二九) 息絶えた馬たちが乗り手たちとともに、殺された山のような象に寄りかかっているのが認められた。(三〇)

それからドローナは、その戦場から北の方角に移動して、煙のない火のように戦場に立っていた。(三一) 王よ、パーンダヴァ軍の兵たちは、ドローナが戦線から離れた場所に退いたことを知って戦慄した。(三二) わが君よ、ドローナが栄光により輝き、威光で燃えるかのようであるのを見て、敵たちは恐れ、ふるえ、しおれた。(三三) ドローナが発情した象のように敵の軍に挑戦する時、人々は彼に勝利する希望を失った。悪魔たちがインドラに対するように。(二四) ある人々は気力を失い、ある気丈な人々は怒り、ある人々は驚嘆し、ある人々は我慢できなくなった。(二五) また他の王たちは手で手の先をこすった。また他の人々は怒りにかられ、歯で唇を噛んだ。(二六) また他の人々は武器を振りまわし、また他の人々は腕をさすった。また他の強力な人々は、自らを捨ててドローナを攻撃した。(二七) 王中の王よ、特にパーンチャーラ軍は、ドローナの矢に悩まされ、戦場でひどく苦しみながらも戦い続けた。(二八)

それからヴィラータとドルパダは、戦場でそのように行動している、戦いにおいてこよなくうち破られがたいドローナに向かって行った。(二九) 王よ、そしてドルパダの三人の孫である、チェーディの偉大な射手たちは、ドローナに戦いを挑んだ。(三〇) ドローナは三本の鋭い矢でその三名のドルパダの孫たちの生命を奪った。彼らは殺されて大地に倒れた。(三一) それからパラドゥヴァージャの息子である勇士ドローナは、その戦いにおいて、チェーディ、ケーカヤ、スリンジャヤの軍をうち破り、すべてのマツヤ軍をうち破った。(三二) 大王よ、それからドルパダとヴィラータは怒って、戦場でドローナに対して矢の雨を浴びせた。(三三) 敵を粉砕するドローナは、よく鍛えられた二本の矢で、ドルパダとヴィラータをヤマ（閻魔）の住処に送った。(三四)

ヴィラータとドルパダが殺され、ケーカヤとチェーディとマツヤとパーンチャーラの人々が殺され、ドルパダの孫である三人の勇士が殺された時、気高いドリシタデュムナはドローナのその行為を見て、怒りかつ苦しみ、戦士たちの中で次のように誓った。(三五—三六)

「今日、もしドローナが私から逃れられるか、あるいは私がドローナから退却するならば、私は王族（クシャトリヤ）としてまたバラモンに対して功徳を積んだことを失うがよい。（三七）」

敵の勇士を殺すパーンチャーラの王子はすべての弓取りの中で彼らにこのように誓うと、軍隊を率いてドローナに向かって行った。（三八）ドゥルヨーダナ、カルナ、シャクニ、そしてドゥルヨーダナの主要な弟たちは、戦場でドローナを守った。（三九）ドローナは戦場でこのような偉大な人々に守られていたので、パーンチャーラ軍は努力したが、ドローナを見ることができなかった。（四〇）わが君よ、そこでビーマセーナはドリシタデュムナに対して怒り、辛辣な言葉で彼を傷つけた。人中の雄牛よ。（四一）

「ドルパダの一族に生まれ、すべての武器について知悉した尊敬される王族（クシャトリヤ）が、どうして敵が眼の前にいるのに傍観しているのか。（四二）いかなる男が、父と息子を殺されて、捨て置かれるか。特に諸王の集会において誓いを立てながら。（四三）火が自らの威光により燃え上がるように、ドローナは弓矢を薪として、威光により王族を燃やしている。（四四）すぐに彼はパーンダヴァの軍隊を残らず滅ぼすであろう。あなた方はここに立って私の働きを見ていなさい。私はまさにドローナを攻撃する。（四五）」

狼腹（ビーマ）はこのように言うと、怒ってドローナの軍に突入した。弓を強く引き絞り、あなたの軍隊を敗走させて。（四六）パーンチャーラの王子ドリシタデュムナも敵の大軍に突入し、ドローナに戦いを挑んだ。そして大激戦が行なわれた。（四七）王よ、その日の出に行なわれた大激戦ほど激しい戦いを、我々はいまだかつて見たことも聞いたこともなかった。（四八）わが君よ、戦車の群がお互いに混じり合っているのが認められた。生き物の死体が散乱していた。（四九）ある人々は他の場所に行く途中で他の人々に襲撃された。また他の人々は退却して、背中を攻撃されまた他の人々は脇腹を攻撃された。（五〇）このようにこよなく恐ろしい混戦が行なわれた。それからすぐに、暁の太陽が昇った。（五一）

（第百六十一章）

ドローナとアルジュナの戦い

サンジャヤは語った。――

大王よ、武装した戦士たちは戦いの最前線で、千の光線を放つ暁の太陽を崇拝した。（一）燃える黄金のように輝く太陽が昇り、諸世界が照らされた時、再び戦いが行なわれた。（二）日の出前に戦っていたのと同じ一組の者たちが、太陽が昇った時も戦った。（三）騎兵は戦車兵と、象兵は騎兵と、歩兵は象兵と戦った。また騎兵は騎兵と、歩兵は歩兵と戦った。戦士たちはある時はくっついて、ある時は離れて戦場に倒れた。（四）多くの人々は夜通し活動していたので、太陽の光輝により疲れ、飢えと渇きで全身消耗し、意識朦朧とした。（五）法螺貝、小鼓、太鼓、咆哮する象、引き絞られ音をたてる弓。王よ、以上のものの音は天にも届くほどであった。バラタの雄牛よ。走る歩兵たち、振り下ろされる武器、嘶く馬、回転する車輪、叫び声、吼える声は、こよなく騒々しかった。（六－八）騒音は増大し、大音響は天に達

した。種々の武器で切られ地面を動きまわる者たちの苦しむ声がした。（九）大地に倒れつつある、すでに倒れた、歩兵と騎兵と戦車兵と象兵の大きな叫び声が聞こえた。それは非常に哀れな光景であった。（一〇）（一一—三一略）

それから、ドゥルヨーダナ、カルナ、ドローナ、ドゥフシャーサナの四名の戦士は、四名のパーンダヴァと戦った。（三二）ドゥルヨーダナは弟とともに、双子（ナクラとサハデーヴァ）と戦った。カルナは狼腹（ビーマ）と、アルジュナはドローナと戦った。（三三）その戦士の雄牛たちの超人的な凄まじい戦いは、恐ろしく、こよなく驚異的なもので、すべての人々がいたるところからそれを見つめた。（三四）（三五—四六略）

それからドゥルヨーダナとナクラとの、怒り猛り立った者同士の戦いが行なわれた。（四七）ナクラは勇み立ち、あなたの息子に幾百の矢を浴びせつつ、彼を左まわりにまわった（敬意を表する場合は右まわりにまわる）。そこで大音声があがった。（四八）ドゥルヨーダナは戦場で怒った従兄弟に左まわりにまわられて怒り、相手に対しても、戦場で左まわりにまわった。（四九）めざましい道を知る威光あるナクラは、左まわりにまわろうとするあなたの息子を制止した。（五〇）ナクラは矢の群によって彼をすっかり食い止めて苦しめ、退却させた。兵士たちはその行為を讃えた。（五一）ナクラはすべての苦難を思い出して、あなたの息子に、「待て、待て」と言った。これもあなたの悪しき政策のせいだ。（五二）

（第百六十二章）

サンジャヤは語った。——

それからドゥフシャーサナは怒り、猛烈な速さの戦車に乗り、大地を震動させて、サハデーヴァに襲いかかった。（一）敵を苦しめるサハデーヴァは、半月形の先の矢を用いて、襲来する相手の御者の冑をつけた頭を速やかに切り落とした。（二）それは余りにも素速かったので、ドゥフシャーサナもその他の兵も、御者が頭を切られたことに誰も気づかなかった。（三）しかし、誰も手綱をとらなかったので馬が好きな方向に進んだ時、ドゥフシャーサナは御者が死んでいることに気づいたのであった。（四）その最高の戦士は馬術に通じていたので、戦場で自ら馬を御して、手練の業で見事に戦った。（五）敵味方の人々は、戦場で彼のその行為を讃えた。その戦いにおいて彼は御者を殺された戦車に乗って、恐れを知らぬかのように活動したのであった。（六）

一方サハデーヴァは、彼の馬たちに鋭い矢を浴びせた。彼らは矢に苦しめられつつ、あちこち走りまわった。（七）彼は手綱を握っているので弓を離した。しかし彼は弓で仕事をするために、再び手綱を放した。（八）サハデーヴァはその隙をついて、彼に矢を注いだ。カルナはあなたの息子を救おうとして、両者の間に入った。（九）

それから狼腹（ビーマ）は、弓につがえ、耳まで引き絞って放たれた三本の矢でカルナの両腕と胸を射た。（一〇）カルナは打たれた蛇のように相手を制止した。そしてビーマとカルナとの間に激しい戦いが行なわれた。（一一）両者は雄牛のようにいきり立ち、眼を見開き、怒って猛烈な勢いでお互いに攻撃し合った。（一二）二人は戦いに酔って接近し、矢を射るには近

すぎるので（テクスト疑問）、棍棒戦を始めた。（二三）ビーマセーナは速やかに棍棒でカルナの戦車の轅を砕いた。王よ、それは奇蹟のようであった。（二四）それから強力なカルナは棍棒をとって、ビーマの戦車に向けてそれを投げた。しかしビーマは棍棒によりその棍棒を砕いた。（二五）それからビーマは再び重い棍棒をカルナに向けて投げた。カルナは美しい羽根のついた、見事な造りの十本の矢で、更に他の諸々の矢でそれを迎撃した。その棍棒は再びビーマの方に飛んで行った。（二六）棍棒がもどって来たので、ビーマの大きい旗が倒れた。そして彼の御者は棍棒に撃たれて失神した。（二七）その時カルナは怒りにかられて、相手の旗、弓、箙に、八本の矢を放った。バーラタよ。（二八）それから更に、カルナは戦車に備えた矢により、相手の鹿の色をした馬と、両端の馬を御す二人の御者とを速やかに殺した。（二九）敵を制するビーマは戦車を失い、ナクラの戦車に乗り移り、獅子が山の頂に立つように立った。（三〇）

王中の王よ、同様に偉大な戦士である師弟のドローナとアルジュナも、戦場で攻撃し合い、めざましく戦った。（二一）二人は手練の早業と武術により（テクスト疑問）、戦車の戦いにより、人々の眼と心を惑わせた。（二二）いまだ見たこともない師弟の戦いを見て、すべての敵味方の戦士たちは戦闘をやめた。（二三）両雄は戦場において、見事な戦車の行跡を示しつつ、お互いに相手を左まわりにまわろうと望んだ。戦士たちは驚嘆してその両者の勇武を見ていた。（二四）大王よ、ドローナとパーンダヴァとの激戦は、空中で餌を求めて争っている二羽の鷹の戦いのようであった。（二五）ドローナがアルジュナをうち破ろうとしてやったことに対し、アルジュナは笑って、その一つ一つに対してやり返した。（二六）ドローナはアルジュナを凌駕することができなかった時、武器の道に通達した彼は、インドラの武器、パーシュパタ（シヴァの武器）、トゥヴァシトリの武器、ヴァーユ（神風）の武器、ヴァルナ（天水）の武器を放った。アルジュナはドローナの弓から放たれたその一つ一つを破壊した。（二七―二八）

アルジュナが自分の武器によりそれらの武器を適切に破壊した時、ドローナは神的な最高の武器をアルジュナに浴びせた。（二九）ドローナがアルジュナを破ろうとしてそれぞれの武器を彼に対して用いると、アルジュナはその武器を破壊するために、それぞれに対処した。（三〇）神的な武器がアルジュナにより適切に破壊された時、ドローナは心の中でアルジュナに敬意を払った。（三一）バーラタよ、ドローナは彼が弟子であることから、地上のすべての戦士よりも自分の方が優れていると考えた。（三二）このように偉大な人々の中で、ドローナはアルジュナに食い止められたが、満足して自らも奮戦し、微笑しながらアルジュナをも食い止めた。（三三）それから、神々、幾千のガンダルヴァ、聖仙、シッダの群が、見物しようとして空中に立った。（三四）栄光ある虚空は、天女や夜叉や羅刹たちに満ち、更に雲に満ちているかのようになった。（三五）燃える武器が十方に放たれている時、ドローナと偉大なアルジュナを讃える姿の見えない者たちの声が繰り返し聞こえた。（三六）

「これは人間の戦いでも、阿修羅や羅刹や神やガンダルヴァの戦いでもない。必ずやこれは最高のブラフマン（梵天か）の戦いである。これはめざましく驚異的である。我々は見たことも聞いたこともない。（三七）ある時はドローナがアルジュナに勝り、またある時はアルジュナ

がドローナに勝る。武器の点でこの両者に差異を見出すことは誰もできない。（三八）もしルドラ（アシッア）が自分自身を二つに分けて、自分が自分と戦うなら、この戦いと比較することができる。さもなければ、比較できるものはない。（三九）師匠には一カ所に集まった知識がある。アルジュナには知識と武術とが存する。師匠には一カ所に集まった勇武がある。アルジュナには力と勇武とが存する。（四〇）この二人の偉大な射手は、戦いにおいて敵に滅ぼされることはない。彼らがもし望めば、神々を含む世界を滅ぼすことができよう。（四一）」

大王よ、姿が見えない生類、見える生類はこぞって、その二人の人中の雄牛を見てこのように言った。（四二）それから叡知に満ちたドローナはブラフマ・アストラ（梵天の武器）を現出した。戦場でアルジュナと姿が見えない生類を苦しめつつ。（四三）そこで山と森と樹々をともなう大地は揺れ動いた。荒々しい風が吹き、海は動揺した。（四四）偉大なドローナによってその武器が準備された時、クルとパーンダヴァの軍隊と、すべての生類は大いに恐れた。（四五）王中の王よ、それからアルジュナはうろたえることなく、自らのブラフマ・アストラによって相手の武器を破壊した。そこですべてが鎮まった。（四六）その両者のどちらも引けをとらなかった時、両軍は入り乱れて戦い、混戦模様になった。（四七）王よ、戦場でドローナとアルジュナとの激戦が行なわれている間、再び何も見分けがつかなくなった。（四八）空は雲の群のような矢の網におおわれ、空中を行く者たちは通行することができなかった。（四九）

（第百六十三章）

猛威を振るうドローナの武器

サンジャヤは語った。――

大王よ、このように人間と馬と象の殺戮が進行していた時、ドゥフシャーサナはドリシタデュムナと戦った。（一）ドリシタデュムナは黄金の戦車に乗り、ドゥフシャーサナの矢に苦しめられ、怒ってあなたの息子の馬たちに矢を浴びせた。（二）大王よ、旗と御者をともなう彼の戦車は、ドリシタデュムナの矢におおわれて、たちまち見えなくなった。（三）王中の王よ、ドゥフシャーサナの方は、偉大なパーンチャーラの王子の矢の群に苦しめられ、その正面にとどまることができなくなった。（四）ドリシタデュムナはその矢でドゥフシャーサナを退却させてから、戦場で幾千の矢を注いでまさにドローナに向かって行った。（五）

その間、フリディカの息子クリタヴァルマンは、三人の兄弟とともに近づき、ドリシタデュムナを制止した。（六）人中の雄牛である双子（ナクラとサハデーヴァ）は、燃える火のようにドローナに向かって行くドリシタデュムナを守りつつ彼につき従った。（七）かくて勇猛な七名の勇士たちはすべていきり立ち、死を覚悟して交戦した。（八）王よ、心と行動が清い彼らは天界に行くことをめざして、お互いに相手に勝とうとして聖なる戦いをした。（九）生まれと行為が、気高い、叡知ある王たちは、最高の帰趨をめざして法（ダルマ）にかなった戦いを行なった。（一〇）そこには法にかなわない、不適切な武器による戦いはなかった。（一一）（一一の後半と一二略）すべての

者は真っ直ぐの公正な武器をとり、正当な戦いにより他の世界と名誉を望んでいた。(一三)あなたの四名の戦士と、パーンダヴァの三名との間に、まったく欠陥のない激戦が行なわれた。(一四)

王よ、迅速に武器を用いるドリシタデュムナは戦士の雄牛たちが双子に食い止められたのを見て、彼らを捨てて、ドローナに向かって行った。(一五)一方、双子に食い止められた四名の勇士は、風が二つの山に吹くように、その二名の人中の雄牛を攻撃した。(一六)戦士の雄牛である双子は、二人ずつの戦士とともに戦った。それからドリシタデュムナはドローナを攻撃した。(一七)大王よ、ドゥルヨーダナは戦いに酔うパーンチャーラの王子がドローナに向かって行くのを見て、四名の勇士が双子と戦っているのを見て、血を飲む矢を注ぎながらその場所に駆け寄った。サーティヤキは非常に速やかに彼を攻撃した。(一八—一九)クル族とマドゥ族の二名の人中の虎は、お互いに接近し、笑いながら、恐れることなく交戦した。(二〇)両者は少年の頃の出来事を思い出して喜びながら、何度も笑いながらお互いに見つめ合った。(二一)その時ドゥルヨーダナ王は自分の行為を非難しながら、いつも親しい友であったサーティヤキに言った。(二二)

「友よ、怒り、貪欲、迷妄、怨みは何と悪いことか。王族(クシャトラ)のふるまいは何ということか。腕力は何ということか。(二三)シニの雄牛よ、お前は私を狙い、私はお前を狙っている。いつも私にとってお前は、またお前にとって私は、自分の命よりも愛しかったのに。(二四)私は少年時代に二人の間に起こったすべての出来事を思い出すが、戦場においてそれらはすべ

て古びてしまった。サーティヤキよ、他ならぬ怒りと貪欲により、私は今お前と戦っている。(二五)」

王よ、最高に武器を知るサーティヤキはそのように言う彼に対して笑い、鋭い矢を準備して答えた。(二六)

「王子よ、これは我々が以前に集まって遊んだ集会場でもないし、師匠の住処でもない。王よ。(二七)」

ドゥルヨーダナは言った。

「シニの雄牛よ、少年時代の我々のあの遊びはどこへ行ったのか。そしてこの戦いは何という違いだ。実に時間(カーラ)は乗り越えがたいものだ。(二八)我々は財物を求めているが、財物が何になるというのだ。我々はすべて財物を貪って集まり戦っているが。(二九)」

サンジャヤは語った。——

そのように言う王に対してサーティヤキは答えた。

「戦場では師をも殺すというのが常に王族(クシャトラ)の慣わしである。(三〇)王よ、もしお前にとって私が愛しいなら私を殺せ。ぐずぐずしてはいけない。パラタの雄牛よ、お前のお蔭で私は善行者の世界に行けるであろう。(三一)もしお前に能力や腕力があるなら、それをすぐに私に対して発揮せよ。私は友たちのこのような大きな災禍を見たくはない。(三二)」

王よ、サーティヤキはこのようにきっぱりと答えて、迷うことなく脇目も振らず、速やか

に進撃した。（三三）あなたの息子は彼が向かって来るのを見て迎え撃った。王よ、そしてあなたの息子はサーティヤキに矢を浴びせた。（三四）かくてクルとマーダヴァの二人の獅子の間に戦闘が始まった。二人はお互いに恐ろしく怒った象と獅子のようであった。（三五）それからドゥルヨーダナは弓を引き絞って放った鋭い矢により、戦いに酔うサーティヤキを射た。（三六）サーティヤキは彼を十本の矢で射た。それからまた、戦場で五十本の矢、更に三十本の矢で、更に十本の矢で射た。（三七）

サーティヤキは速やかに、矢を放つ彼の矢をつがえた弓を断ち切った。そして多くの矢を浴びせた。（三八）大王よ、ドゥルヨーダナは深く射貫かれて苦しみ、サーティヤキの矢に苦しめられ、他の戦車に避難した。（三九）しかしあなたの息子は一息ついて、再びサーティヤキの戦車に向けて矢の網を放ちつつ、サーティヤキに向かって行った。（四〇）サーティヤキもまたドゥルヨーダナの戦車に対して絶えず矢を放った。王よ、かくて激戦が繰り広げられた。（四一）そこで多くの矢が放たれていたるところに落ち、乾いた木のある大きな森における火の音のような大きな音がした。（四二）

カルナは最高の勇士サーティヤキが優勢なのを見て、あなたの息子を救おうと望み、速やかにサーティヤキに襲いかかった。（四三）しかし強力なビーマセーナは彼を容赦しなかった。彼は多くの矢を放ちながら速やかにカルナに向かって行った。（四四）カルナは笑うかのように彼の鋭い矢を迎撃し、矢で彼の弓矢を断ち切り、御者を殺した。（四五）一方ビーマセーナは怒って棍棒を持ち、その戦いで敵の旗と弓と御者を粉砕した。（四六）カルナは我慢できず、

戦場で種々の矢の群により、多種多様な武器によりビーマと戦った。（四七）

激戦が繰り広げられていた時、ダルマの息子である王（ユディシティラ）は、パーンチャーラの人中の虎やマツヤの人中の雄牛たちに告げた。（四八）

「彼らは我々の生命である。彼らは我々の頭である。彼らは我々の強力な戦士である。その人中の雄牛である者たちがドリタラーシトラの軍と専ら戦っている。（四九）すべての者は意気阻喪し、どうして呆然として立ち止まっているのか。あの我々の戦士たちが戦っている所に行け。（五〇）諸君はすべて王族の法（クシャトラダルマ）を前提として、苦熱を離れ、勝利するにせよ殺されるにせよ、望ましい帰趨（天界）へ行くがよい。（五一）もし勝利したら、多大な謝礼をともなう多くの祭祀を行ないなさい。あるいは殺されたら、神々のようになって、すばらしい諸世界を得るであろう。（五二）」

王にうながされた偉大な勇士たちは戦いを続行し、四部よりなる軍を構成して、急いでドローナに向かって行った。（五三）パーンチャーラ軍は一方から多くの矢でドローナを攻撃した。またビーマセーナを先頭とする者たちは他方からドローナを攻撃した。（五四）パーンダヴァたちのうちに三名の廉直な勇士たちがいた。すなわち双子（ナクラとサハデーヴァ）とビーマセーナである。彼らはアルジュナに向かって叫んだ。（五五）

「アルジュナよ、速やかに攻撃せよ。クル軍をドローナから引き離せ。そうすればパーンチャーラ軍が、守護者を失った彼を殺すであろう。（五六）」

それからアルジュナはクルの軍隊に激しく襲いかかった。一方ドローナは、ドリシタデュ

ムナを先頭とするパーンチャーラ軍を攻撃した。(五七)
それからドローナはパーンチャーラの人々の大殺戮を行なった。かつて戦場で怒ったインドラが悪魔たちを滅ぼしたように。(五八) 大王よ、敵たちは戦場でドローナに武器により殺されつつも、気力を有する勇士たちはドローナを恐れなかった。(五九) 大王よ、パーンチャーラとスリンジャヤの勇士たちは殺されつつも、戦場で戦い続け（異本による）、ドローナ一人に襲いかかった。(六〇) パーンチャーラ軍が全面的に滅ぼされていた時、矢や槍で殺されている彼らの間に恐ろしい叫び声があがった。(六一) 戦場でパーンチャーラ軍がその偉大な人に殺され、ドローナの武器が猛威を振るっていた時、パーンダヴァたちに恐怖が入り込んだ。(六二) 大王よ、戦場で馬や人の群が大々的に殺されているのを見て、その時パーンダヴァたちは勝利の希望を失った。(六三)

「最高の武器を知るドローナは、味方を全滅させるのではないか。寒季（シシラ）の終わり（春）に、燃え上がる火が枯木を焼き尽くすように。(六四) 誰も戦場で彼を見つめることはできない。法（ダルマ）を知るアルジュナは決して彼に対して〔本気で〕戦わないだろう。(六五)」

アシュヴァッターマンが殺された

クンティーの息子たちがドローナの矢に苦しめられて恐れたのを見て、彼らの幸せに専心する叡知あるクリシュナはアルジュナに告げた。(六六)

「最高の弓取りである彼は、戦いにおいて、インドラを含む神々によっても、決してうち勝たれ得ない（異本による）。(六七) パーンダヴァよ、法（ダルマ）を捨てて、勝利のために術策を用いなさい。黄金の乗物に乗る彼が、戦いにおいて我々すべてを殺すことのないように。(六八) アシュヴァッターマンが殺されたら彼は戦わないだろうと私は考える。戦場でアシュヴァッターマンが殺されたと、誰かが彼に告げるべきである。(六九)」

王よ、クンティーの息子アルジュナはこの言葉を喜ばなかった。しかし他のすべての人々は歓迎した。ユディシティラは渋々同意した。(七〇) 王よ、それから強力なビーマは、自軍にいるアシュヴァッターマンという名の強象を棍棒で殺した。(七一) そしてビーマは恥ずかしく思いながらも、戦場でドローナに近づき、「アシュヴァッターマンが殺された」と高らかに叫んだ。(七二) アシュヴァッターマンという名の象が殺されたと心の中で言って、その時ビーマは偽って発言したのである。(七三) ドローナはそのこの上なく不快なビーマセーナの言葉を聞いて、水中の砂のように、身体がくずれるような気持になった。(七四) しかし自分の息子の力を知る彼は、それが偽りであると考え、息子が殺されたと聞いても平静さを失わなかった。(七五) ドローナは自分の息子が敵にやられることはないと考え、気を取り直し、すぐに元気を出した。(七六) 彼は自分の死をもたらすというドリシタデュムナに襲いかかり、殺そうとして、鷺（カンカ）の羽根のついた千本の鋭い矢を相手に浴びせた。(七七) 彼が戦場でそのように動きまわっていた時、二万人のパーンチャーラの人中の雄牛たちが、いたるところから彼に矢を浴びせた。(七八) そこで敵を苦しめるドローナはいきなり立ち、それらパーンチャー

ラの勇士たちを殺すために、ブラフマ・アストラ（梵天の武器）を現出させた。（七九）そしてドローナは、すべてのソーマカ軍を殺して輝いた。そして戦場でパーンチャーラの兵たちの頭を切り落とし、黄金の飾りをつけた鉄棒のような腕を切り落とした。（八〇）王たちは戦場でドローナに殺されつつ、風に吹き倒された樹々のように倒れて大地をおおった。（八一）バーラタよ、倒れた象や馬の群の肉と血にまみれ、大地は通行不能になった。（八二）

ドローナは二万人のパーンチャーラの戦車兵を殺して、煙を出さずに燃える火のように戦場に立っていた。（八三）そして栄光あるドローナは再び怒り、半月形の先の矢でヴァスダーナ（パーンシュの王）の頭を胴体から切り取った。（八四）ドローナは更に五百のマツヤ兵と、六千のスリンジャヤ兵と、一万の象兵を殺し、更に一万の騎兵を殺した。（八五）ドローナが王族（クシャトリヤ）を滅ぼすために立っているのを見て、火神に先導された聖仙たちが急いでやって来た。（八六）すなわちヴィシュヴァーミトラ、ジャマダグニ、バーラドゥヴァージャ、ガウタマ、ヴァシシタ、カシャパ、アトリ、シカタとプリシュニとガルガと光線を飲むバーラキリヤたち（いずれも聖仙の種類）、ブリグ族、アンギラス族、その他の繊細な大仙たちが、ドローナを梵界に導こうと願っていた。（八七―八八）彼らすべては戦場で輝くドローナに告げた。

「法（ダルマ）にもとづかずに戦いがなされた。あなたの死の時期である。（八九）ドローナよ、戦場に武器を置き、ここにいる我々と合流して、今後は残酷な行為を再びしてはならぬ。（九〇）あなたはヴェーダとその補助学に通じ、真実と法に専念し、特にバラモンである。これはあなたにはふさわしくない。（九一）必ず的を射貫く者よ、武器を置いて永遠の道に立て。あなた

が人間界に住む期間は満了した。（九二）」

以上のような彼らの言葉を聞き、そしてビーマセーナの言ったことを聞き、また戦場でドリシタデュムナを見て、ドローナは意気消沈した。（九三）彼は苦しみ悲嘆に暮れ、クンティーの息子ユディシティラに、自分の息子は殺されたのか殺されなかったのかとたずねた。（九四）ユディシティラは虚偽を決して言わないとドローナは確信していたからである。たとえ三界の主権を得るためでも……。（九五）そこで他の誰かでなく彼にたずねたのであった。ユディシティラの幼年時代から、ドローナは彼を信用していたから。（九六）

その時クリシュナは、戦士の長であるドローナが地上からパーンダヴァを抹殺してしまうと考えて悩み、ダルマ王に言った。（九七）

「もし怒りにかられてドローナが戦えば、半日であなたの軍は全滅するだろう。私はこの真実をあなたに告げる。（九八）そこであなたは、我々をドローナから救うために、真実を言うより嘘をついた方がよい。生命を守るために嘘をついても罪悪には陥らない。（九九）」

二人が話し合っていた時、ビーマセーナは次のように言った。

「大王よ、あの偉大な人を殺す方法を聞くやいなや、私は戦いで勇武を示し、あなたの軍に入ったマーラヴァ王インドラヴァルマンの所有する、インドラの象に等しいアシュヴァッターマンという名の象を殺した。それから私はドローナに向かって言った。『アシュヴァッターマンは殺された。バラモンよ、戦いから手を引け』と。（一〇〇―一〇一）必ずやあの人中の雄牛は私のその言葉を信じなかった。そこであなたは勝利を望み、クリシュナの言葉に同意しな

さい。(二〇三) 王よ、クリピーの息子は殺されたとドローナに言いなさい。王よ、あのバラモンの雄牛はあなたにそう言われたら決して戦わないだろう。というのは王よ、この人間界において、あなたは真実を語ると知られているから。(二〇四)」

大王よ、彼のその言葉を聞いて、またクリシュナの言葉にかりたてられ、そしてまたそれは運命づけられたことであるから、ユディシティラはその通りに言おうとした。(二〇五) 王よ、虚偽を言うことを恐れ、しかし勝利にこだわり、不明瞭に「象〔のアシュヴァッターマン〕が殺された」と告げた。(二〇六) その前には彼の戦車は地上から上方に四アングラ離れた所を走っていた。しかし、このように告げたために彼の乗物は地上に触れるようになった。(二〇七)

一方、勇士ドローナはユディシティラからそのような言葉を聞いて、息子の災難を嘆いて、生きる希望を失った。(二〇八) 彼は聖仙の言葉を聞き、また息子が殺されたと聞き、自分は偉大なパーンダヴァたちに罪を犯したと考えた。(二〇九) そしてドリシタデュムナを見て当惑し、この上なく悲嘆に暮れ、以前のように戦えなくなった。敵を制する王よ。(二一〇)

この上なく悲嘆に暮れ、悲しみで心を乱した彼を見て、パーンチャーラ国王の息子ドリシタデュムナは彼に襲いかかった。(二一一) かつてドルパダ王は、ドローナを滅ぼすために、盛大な祭式において、燃え上がる火の中から彼を得た。(二一二) 彼は雷雲のような音をたてる、丈夫な弦を張った、古びることのない神聖な恐ろしい勝利の弓と、毒蛇のような矢をとった。(二一三) そしてパーンチャーラの王子はドローナを殺そうとして、大きく燃え上がる火にも似

た、毒蛇のようなその矢を弓につがえた。(二一四) 弓弦の中にあるその矢の形状は、雨季の終わりに、光暈を持つ輝く太陽のようであった。(二一五) ドリシタデュムナに引き絞られたその燃えるような弓を見て、兵士たちは終末の時が来たように考えた。(二一六) その矢が彼につがえられたのを見て、栄光あるドローナは自分の身体の最後の時だと考えた。(二一七) それから師匠は相手を抑止するための努力をした。王中の王よ、しかしその偉大な人の諸々の武器は現われなかった。(二一八) 彼が矢を放っている間に、四つの昼と一つの夜が過ぎた。しかしその日は、昼の三分の一で、彼の矢は尽きてしまった。(二一九) 矢が尽き、息子〔が死んだという言葉〕に苦悩し、また種々の神的な武器が満足しない（呼んでも現われない）ので、そしてまたバラモン（聖仙）の言葉にうながされて、彼は武器を捨てたいと望んだ。しかし彼は威光によりかりたてられて、超人的に戦った。(二二〇―二二一) それから彼は、別の神的なアンギラスの弓をとって、梵杖（ブラフマダンダ）（五・九六・二二参照）のような矢を放ってドリシタデュムナと戦った。(二二二) そして彼は怒り、ドリシタデュムナに矢の大雨を浴びせ、いきり立って相手を攻撃した。(二二三) ドローナは鋭い矢で相手の矢を百に断ち切った。そして相手の旗と弓を切り、御者を射落とした。(二二四) ドリシタデュムナは笑って再び他の弓をとり、鋭い矢でドローナの胸の間を射た。(二二五) その勇士は手ひどく射貫かれて、戦場で当惑したが、鋭い刃を持つ半月形の先の矢で、相手の大弓を断ち切った。(二二六) 王よ、そして無敵のドローナは相手の矢を断ち、その他の弓と、棍棒と刀をすべて断ち切った。(二二七) それから敵を苦しめる彼はいきり立ち、敵の生命を断つ九本の鋭い矢で、猛り立つドリシタデュムナを射貫いた。(二二八) そして限りなく高

邁な勇士は、ブラフマ・アストラ（梵天の武器）を呼び出して、ドリシタデュムナの馬を自分の戦車の馬と混じり合わせた。（二二九）パラタの雄牛よ、鳩のような色と、赤い色をした、風のように速い駿馬たちは、混じり合ってこよなく輝いた。（二三〇）大王よ、戦いの最前線において、それらの混じり合った馬は、雨季に稲光をともなって轟く雲のように輝いていた。（二三一）

限りなく高邁なそのバラモンは、ドリシタデュムナの轅と車輪と車体の連結部を破壊した。（二三二）勇士ドリシタデュムナは弓を断たれ、戦車を失い、馬と御者を殺されて最高の窮地に陥り、棍棒をとった。（二三三）それがまさに彼によって投げられようとした時、不屈の勇者である偉大な戦士ドローナは怒って、鋭い矢でそれを破壊した。（二三四）人中の虎は、ドローナによりそれが矢で破壊されたのを見て、汚れない刀と、輝かしい百の月で飾られた楯をとった。（二三五）そのような状況で、パーンチャーラの王子は、疑いもなくその偉大な最上の師匠が死ぬ時が来たと正しく考えた。（二三六）それから彼は、自分の戦車の座席に立ち、次に自分の戦車の車軸に立ち、刀を振り上げ輝かしい百の月で飾られた楯をかざして進んだ。（二三七）勇士ドリシタデュムナはなしがたい業績をあげようと求め、その戦いでドローナの胸を貫こうと望んだ。（二三八）彼は頸木の中央に立ち、次に頸木を結ぶ綱の上に立ち、次に赤い馬（ドローナの馬の）たちの後半身に立った。兵士たちはその行為を称讃した。（二三九）ドローナは、頸木の境い目に立ち、ついに赤い馬たちの上に立つ彼の隙を見出すことができなかった。それは奇蹟のようであった。（二四〇）餌を切望して速やかに飛ぶ鷹のように、彼は戦場でドローナを求めて進んだ。（二四一）

勇猛なドローナは怒って、相手の鳩のような色をしたすべての馬たちを、戦車に備えた槍で一頭ずつ殺した。（二四二）ドリシタデュムナの馬たちは殺されて大地に倒れた。しかし赤い馬たちは戦車の束縛から解放された。王よ。（二四三）最高の戦士である勇士ドリシタデュムナは、馬たちが最高のバラモンに殺されたのを見て我慢できなくなった。（二四四）王よ、戦車を失ったその最高の剣士は、ガルダ鳥が蛇を襲うように、ドローナに襲いかかった。（二四五）王よ、ドローナを殺そうとする彼の姿は、ヒラニヤカシプを殺す時のヴィシュヌの最高の姿のように輝かしかった。（二四六）ドリシタデュムナは刀と楯を持ち、二十一種よりなる種々の〔剣術の〕道を披露し、刀を振りまわし、高く振り上げ、突きを入れ、飛び上がり、前進し、後退し、まわりこみ、退き、飛び下り、猛り立った（原文疑問）。（二四七―二四八）

それからバラモン（ドローナ）はその危機において、ドリシタデュムナの刀と百の月で飾られた楯を千の矢によって射落とした。（二四九）ドローナのそれらの矢は、接近戦に用いられるヴァイタスティカ（一ヴィタスティの長さの短い矢）という矢であった。クリパ、アルジュナ、ドローナの息子、カルナ、プラデュムナ、ユユダーナ（サーティヤキ）、アビマニユを除いて、他の人々はその矢を持っていなかった。（二五〇―二五一）その時、師匠は息子に等しい弟子を殺そうとして、別の最高に鋭くて堅固な矢を弓につがえた。（二五二）しかしシニの雄牛（サーティヤキ）が、十本の鋭い矢でそれを断ち切った。かくて彼は、あなたの息子と偉大なカルナが見ている前で、師匠の口に呑まれているドリシタデュムナを救ったのである。（二五三）偉大なクリシュナとアルジュナは、ドローナとカルナとクリパの間に入り、戦車の道で活動している不屈の勇者サーティヤキを見た。

(二五四) 両者は「見事、見事」と言いながら、戦場ですべての者の神的な武器を破壊している不屈なサーティヤキを称讃した。それからクリシュナとアルジュナは敵軍に襲いかかった。(二五五) そしてアルジュナはクリシュナに告げた。

「クリシュナよ、見よ。サーティヤキは最高の師匠たちの間で戯れている。(二五六) 不屈の勇者サーティヤキは再び、私やマードリーの双子やビーマやユディシティラ王を喜ばせる。(二五七)」

ヴリシュニ族の誉れを高めるサーティヤキは、その偉大な戦士たちの近くで戯れたが、彼らの教えを受けたことから謙虚さを保って戦場を動きまわった。(二五八) シッダ（半神の種類）や兵士たちは戦場で無敵なサーティヤキを見て、「見事、見事」と讃えた。両軍のすべての戦士たちは彼の働きを称讃した。(二五九)

（第百六十四章）

ドローナの死

サンジャヤは語った。——

その王たちの会戦において戦闘は残酷なものになった。ルドラ（シヴァ）が生類を殺そうとして怒った時のように。(一) バーラタよ、腕、頭、弓、傘、払子（ヤクの尾）が戦場に散乱していた。(二) 大地は車輪が壊れた戦車、倒された大きな旗、殺された騎兵や勇士によって満ちていた。(三) クルの最上者よ、戦士たちが飛来する矢に断ち切られて、戦場で種々の行動をとっているのが認められた。(四) 神々と阿修羅たちの戦いのような恐ろしい戦いが行なわれていた時、ダルマ王ユディシティラは王族たちに告げた。

「勇士たちよ、努力してドローナを攻撃せよ。(五) あそこで勇士ドリシタデュムナはドローナと交戦している。彼は力の限りドローナを殺すべく努力している。(六) 我々は彼が戦場であのような様子をしているのを見る。それからすると、ドリシタデュムナは今日、怒ってドローナを戦場で倒すであろう。そこで諸君はうちそろってドローナを包囲せよ。(七)」

ユディシティラに命じられたスリンジャヤの勇士たちは、ドローナを殺そうとして奮起してドローナに襲いかかった。(八) 偉大な戦士であるドローナは、死を決意して、襲来する彼らすべてを激しく攻撃した。(九) 誓いを守るドローナが進撃した時、大地は震動した。そして敵軍を恐れさせて、雷鳴をともなう風が吹いた。(一〇) そして太陽から出たかのような大流星が落ちた。それはその熱により燃やすかのようで、大なる危険を告げるかのようだった。(一一) わが君よ、ドローナの諸々の武器は燃え上がり、戦車は大音響をたて、馬たちは涙を流した。(一二) 勇士ドローナは活力を失ったかのようだった。彼はヴェーダを唱える（バラモンの）聖仙の天界へ行くことをめざし、見事な戦いによって生命を捨てようと企てた。(一三) ドローナは四方をドルパダの兵に取り囲まれて、王族の群を燃やしつつ戦場を動きまわった。(一四) 敵を粉砕するドローナは二万人の王族を殺してから、鋭い先端の矢で十万人を殺した。(一五) 彼は王族を滅ぼすべく奮戦して、バラモンの本性に依存して、煙のない火のように戦場に立っていた。(一六)

偉大なパーンチャーラの王子は戦車を失い、すべての武器を失ったが、意気消沈することはなかった。強力なビーマは急いで彼に近づいた。(一七) それから敵を粉砕する彼は、パーンチャーラの王子を自分の戦車に乗せて、近くでドローナに矢を射ている彼を見て告げた。(一八)

「この世であなた以外の人は師匠と戦うことはできない。早く彼を殺すべく急ぎなさい。あなたに重責がかかっている。(一九)」

そのように言われた勇士は、急いで近づいて、一切の負荷に耐える、新しい堅固な最高の武器（弓）を手にとった。(二〇) 彼は戦場でいきり立って、無敵のドローナに矢を放ち、相手を制することを望んで矢の雨を師匠に浴びせた。(二一) その戦いにおいて輝く最高の二人は、いきり立ってお互いに制し合い、神的なブラフマ・アストラ（梵天の武器）を何度も呼び起こした。(二二) 大王よ、ドリシタデュムナはドローナのすべての武器を破壊して、戦場において、強力な武器でドローナをおおった。(二三) 不屈の彼は、戦場でドローナを守っているヴァサーティ、シビ、バーフリーカ、クル族の軍を粉砕した。(二四) 王よ、その時ドリシタデュムナは、矢の群で諸方をすっかりおおって、光線によって諸方をおおう太陽のように輝いていた。(二五)

ドローナは彼の弓を矢で断ち切り、彼を矢で射貫き、更に彼の諸々の急所を撃った。彼は最高の苦痛に達した。(二六) 王中の王よ、それからビーマはひどく怒り、ドローナの戦車をつかんで、徐にドローナに告げた。(二七)

「もし自分の仕事に満足しないで武技を磨いた見せかけのバラモンが戦わなかったら、王族(クシャトラ)は死滅することはなかったであろう。(二八) 一切の生類に対する不殺生（無傷害）は最高の法(ダルマ)であると知られる。バラモンはその基本である。そしてあなたは最もブラフマン（ヴェーダ）を知る者である。(二九) バラモンよ、あなたは無知により迷ったかのように、息子や妻のため財物を求めて、犬食い(シュヴァパーカ)（「犬を調理する者」の意）のように、ムレーッチャ族やその他の種々の人々を殺している。(三〇) あなたは法(ダルマ)を知らぬかのように、一人の息子のために自己の仕事に勤しむ多数の人々を殺し、非行を行なって、どうして恥じないのか。(三一) 彼（アシュヴァッターマン）は今、あなたの背後で知られることなく倒れ眠っている。ダルマ王が言ったあの言葉を疑うべきではない。(三二)」

ビーマにこのように言われた徳性あるドローナは弓を捨て、すべての武器を捨てようと望んで告げた。

「勇士カルナよ、カルナよ。クリパよ。ドゥルヨーダナよ。(三三) 戦場において努力せよ。私はこの通り何度も言う。あなた方がパーンダヴァたちから無事であるように。私は武器を捨てる。(三四)」

大王よ、ドローナはこう言ってから、息子に向かって叫んだ。そして彼は戦場で武器を捨て、戦車の座席に座り込み、ヨーガに専心し、一切の生類に無畏（危険、恐怖のないこと）を与えた。(三五) 彼のその隙をついて、ドリシタデュムナは刀を持って立ち上がり、戦車から飛び下りて、激しくドローナに襲いかかった。(三六) 人々やその他の生類はドローナがそのようにドリシタ

デュムナの支配下に帰したのを見て、「ああ、ああ」と嘆声をあげた。(三七)彼らは「ああ、ああ」と大声で叫び、「何ということだ」と言った。ドローナの方は、武器を捨てて、最高の平等の境地（三昧）に入っていた。(三八)苦行（修養）を積んだ師匠は、前述のように言って、ヨーガに依止し、光明となって、善き人々とともに、昇りがたい天に昇って行った。(三九)彼がそのような状態になった時、二つの太陽があると我々は思った。太陽のように輝くドローナという月が昇る時、天空は一面に光明に満ちた。(四〇)そして一瞬のうちにその光明は消失した。ドローナが梵界に行き、ドリシタデュムナが茫然としていた時、喜んだ天上に住む者たちのさんざめく声が聞こえた。(四一)その時、我々五名の人間だけが、その偉大な人物がヨーガに専心して最高の帰趨に達するのを目撃した。(四二)すなわち、私と、アルジュナと、バラモンのクリパと、クリシュナと、ダルマ王とであった。(四三)しかし他のすべての者は、ヨーガによって解放されてこの世を去る英邁なドローナの偉大な行動を見ることができなかった。大王よ。(四四)人間たちは師匠が最高の帰趨に達したのを知らず、敵を制する彼がヨーガに依止して聖仙の雄牛たちとともに梵界に行きつつあるのを見なかった。(四五)武器を捨てた彼の身体は幾百の矢で傷つき、血が滴っていた。一方ドリシタデュムナは、すべての者たちに非難されながらも彼に触れた。(四六)そして身体から生気が去り、何も言わない彼の頭をつかんで、刀でその頭を胴体から切り取った。(四七)ドローナが倒された時、ドリシタデュムナは大喜びして、戦場で刀を振りまわし、獅子吼をした。(四八)八十五歳のドローナは浅黒く、耳の所まで白髪であったが、あなたのために、十六歳であるかのように戦場で活躍した。(四九)クンティーの息子である勇士アルジュナは、「ドルパダの息子よ、師匠を生きたまま連れて来い。殺してはいけない」と言っていた。(五〇)あなたの兵士たちも「彼を殺すべきでない、殺すべきでない」と叫んだ。アルジュナは同情をもって彼に駆け寄った。(五一)アルジュナとすべての王たちが叫んでいる間に、ドリシタデュムナは戦車の座席の上で人中の雄牛ドローナを殺したのだった。(五二)

敵を制するドリシタデュムナは血にまみれ、戦車から大地に降りた。彼は赤い身体をし、太陽のように見られがたかった。かくて兵たちはドローナが戦場で殺されるのを見た。(五三)王よ、勇士ドリシタデュムナの方は、ドローナの大きな頭をあなたの兵たちの面前に投げた。(五四)王よ、あなたの兵たちはドローナの頭を見て、あらゆる方角に一目散に逃げた。(五五)一方ドローナは、天空に達して、星の道に入った。王よ、サティヤヴァティーの息子である聖仙クリシュナ（ヴィヤーサ）の恩寵により（天眼を得た）私自身がこのドローナの死を目撃した。光輝に満ちた彼が煙なく燃える流星が流れるように天空を（光で）満たして行くのを私たちは見た。(五六―五七)

ドローナが殺された時、パーンダヴァとスリンジャヤの軍は気力を失ったクルの軍を全速力で追跡し、そこであなたの軍は散り散りになった。(五八)ドローナが殺された時、戦場においてあなたの軍のほとんどの馬は鋭い矢で殺され、あなたの軍は生気を失ったかのようになった。(五九)あなたの兵たちは敗北し、他方では大いに恐れて、二重にうちひしがれて（訳注は「地上と天上の二つの世界を失って」と解する）、自己の平常心を保つことができなかった。(六〇)王よ、王たちはその時、

幾万の死体で満ちている中で、ドローナの身体を探したが、見つけることができなかった。(六一) 一方パーンダヴァたちは勝利を得て、他方では大きな名声を得て、矢の音を響かせ、大声で獅子吼をした。(六二) 王よ、それからビーマセーナとドリシタデュムナは軍隊の中でお互いに抱き合って踊った。(六三) その時ビーマは、敵を苦しめるドリシタデュムナに言った。

「プリシャタの孫よ、御者の息子(カルナ)と邪悪なドゥルヨーダナが戦場で殺された時、私は勝利したあなたを再び抱くであろう。(六四)」

ビーマは大喜びしてこのように言うと、腕を打つ音で大地を震動させた。(六五) あなたの兵たちは、戦場で彼のたてる音に戦慄し、王族の法を捨てて、一目散に逃げ出した。(六六) 王よ、一方パーンダヴァたちは勝利を得た。そして戦場で敵が壊滅したので、彼らは幸せな気持になった。(六七)

王よ、ドローナが殺された時、クル軍は武器で傷つき、勇士たちは殺され、壊滅し、悲嘆に暮れた。(六八) 彼らは放心し、気力を失い、弱気になって活力を失い、大きな嘆声をあげて、あなたの息子を取り巻いた。(六九) 彼らはほこりにまみれてふるえ、十方を見ながら、涙声になった。昔、ヒラニヤークシャが殺された時の悪魔たちのように。(七〇) 小動物のようにおびえる彼らに囲まれて、あなたの息子である王はそこにとどまっていることができず、そこから出た。(七一) バーラタよ、あなたの兵士たちは飢えと渇きに苦しめられ、太陽に熱せられて、非常に意気阻喪した。(七二) ドローナが倒されたことは、太陽が落ち、海が干上がり、メール山がひっくり返り、インドラが敗北するようなことだ。(七三) 王よ、クル軍は耐えがたいドローナの死を見て、この上なく戦慄し、恐れて逃げ出した。(七四) ガーンダーラ国王シャクニは、黄金の戦車に乗るドローナが殺されたのを見て恐れ、恐怖にかられた戦士たちとともに逃走した。(七五) 御者の息子(カルナ)も、旗を持って全速力で逃げる大軍を集めて、恐れて逃走した。(七六) マドラ国王シャリヤも形勢を見て、戦車兵と象兵と騎兵に満ちた軍隊に続いて、恐れて逃走した。(七七) シャリヤもほとんどの勇士が殺された象兵と多くの歩兵に囲まれて、「ああ、無念」と言いながら退却した。(七八) 王よ、クリタヴァルマンも、生き残ったボージャの軍、カリンガ、アーラッタ、バーフリーカの軍に囲まれて、非常に駿足の馬たちにひかれて逃走した。(七九) 王よ、そこでドローナが倒されたのを見て、ウルーカも歩兵の群に囲まれて、恐怖にかられて逃走した。(八〇) ドゥフシャーサナは若くて見目よく、勇武にかけて定評があったが、ひどく意気消沈して、象兵に囲まれて逃走した。(八一) 大王よ、勇士ドゥルヨーダナも、象兵と騎兵と戦車兵をともない、歩兵に囲まれて逃走した。(八二) 人々は他人の象や戦車や馬に乗り、髪を振り乱し、散り散りになった。二人の者はいっしょに逃げなかった(みなばらばらになった)。(八三) 王よ、その他のあなたの兵たちは、「もう駄目だ」と考えて、気力と活力を失い、鎧を捨てて逃走した。(八四) バラタの雄牛よ、あなたの兵たちはお互いに「とどまれ、とどまれ」と叫びながら、自らはそこにとどまらなかった。(八五) 御者が殺されたので、戦車から美しく飾られた馬たちを解き放って、戦士たちはあるいは馬に乗り、あるいは徒歩で急いで逃げた(テクスト疑問)。(八六)

あなたの兵がそのように恐れ、力を失って逃走した時、ドローナの息子（アシュヴァッターマン）は流れに逆らう鰐のように敵に立ち向かった。(八七) 戦いに酔う、発情した象のように勇猛な彼は、パーンダヴァの多様な軍隊を殺して、やっとのことで危機を脱した。(八八) ドローナの息子は、自軍がさっさと逃げるのを見て、ドゥルヨーダナに近づいて次のように言った。(八九)

「バーラタよ、どうして軍隊は恐れたかのように逃げるのか。また王中の王よ、あなたはどうして逃げる軍隊を戦場にとどめないのか。(九〇) 王よ、あなたも以前のように平静さを保っていない。そしてこれらのカルナなどの諸王も踏みとどまらない。(九一) 他の戦いにおいてはこの軍隊は決して逃げ出さなかった。バラタ族の勇士よ、あなたの軍隊は恙無いのか。(九二) クルの王よ、いかなる戦士のうちの獅子が殺されたら、あなたの軍隊がこのような状態になるのか、それを私に話してくれ。(九三)」

王中の雄牛ドゥルヨーダナはドローナの息子の言葉を聞いても、恐ろしく不快なことを話すことができなかった。(九四) あなたの息子は破船のように、悲しみの海に沈み、戦車に立つドローナの息子を見て涙に暮れた。(九五) それから王は、恥じらいながらクリパに言った。

「どうかすべてを告げてくれ。わが軍が逃げるわけを。(九六)」

王よ、そこでクリパは、何度も苦悩しながら、ドローナが倒された次第をその息子に語った。(九七)

アシュヴァッターマン、父の死を聞く

クリパは言った。

「我々は地上で最高の戦士ドローナを先頭にして、パーンチャーラ軍だけと戦いを開始した。(九八) それから戦闘が始まった時、クル軍とソーマカ（パーンチャーラ）軍は入り乱れ、お互いに雄叫びをあげ、武器で相手の身体を撃ち倒した。(九九) やがて人中の雄牛ドローナはブラフマ・アストラ（梵天の武器）を〔呪句で〕呼び起こし、半月形の先の矢で何百何千という敵を殺した。(一〇〇) パーンダヴァ軍、ケーカヤ軍、マツヤ軍、特にパーンチャーラ軍は、カーラ（時間、破壊神）にかりたてられ、戦場でドローナの戦車に近づいて死滅した。(一〇一) 千人の獅子のような戦士、二千頭の象を、ドローナはブラフマ・アストラで焼いて、死神のもとに送った。(一〇二) ドローナは八十五歳で、浅黒く、耳の所まで白髪であったが、戦場でその老人は十六歳であるかのように動きまわった。(一〇三) 敵軍が苦しめられ、王たちが殺された時、パーンチャーラ軍は我慢できなくなり退却した。(一〇四) 彼らが部分的に壊滅し退却した時、敵をうち破るドローナは、神的な武器を呼び起こして、昇った太陽のようであった。(一〇五) 栄光あるあなたの父はパーンダヴァ軍の中央に達して、光線のような矢を放ち、真昼の太陽のように見られがたかった。(一〇六) 彼らは太陽のように輝くドローナに焼かれ、力尽き、気力を失い、途方に暮れた。(一〇七)

クリシュナはドローナが矢で彼らを苦しめているのを見て、勝利を望み、パーンドゥの息子たちに次のように言った。（二〇八）

『戦士の群の長である、あの最高の戦士は、戦いにおいて決して敵にうち破られることはない。たとえインドラによっても。（二〇九）パーンダヴァたちよ、そこで諸君は法を捨てて勝利を守れ。黄金の車に乗る彼が、戦いにおいてあなた方すべてを殺すことのないように。（二一〇）アシュヴァッターマンが殺されたら彼は戦わないだろうと私は考える。誰か偽って、戦場で彼が殺されたとドローナに言いなさい。（二一一）』

クンティーの息子アルジュナはこの言葉を喜ばなかった。しかしその他のすべての人々は歓迎した。ユディシティラは渋々同意した。（二一二）ビーマセーナは恥じらいながらも『アシュヴァッターマンが殺された』とあなたの父に告げた。あなたの父はそれを聞いた。（二一三）息子を愛する父上は、それが偽りであると考えて、あなたが戦場で殺されたかどうか、ダルマ王にたずねた。（二一四）ユディシティラは嘘をつくことをひどく恐れ、また勝利にも執着して、象〔のアシュヴァッターマン〕が殺されたと告げた。マーラヴァのインドラヴァルマンに属する、山のような巨体のアシュヴァッターマンという象がビーマに殺されたことについてそう言ったのである。（二一五）その時〔ビーマは〕ドローナに近づいて、大声で次のように言った。

『あなたが彼のために武器をとり、彼を目当てに生きているところの、そのあなたにとって常に愛しい息子アシュヴァッターマンは倒された（二一六）』

その非常に不快なことを聞いて師匠は失望し、諸々の神的な武器を収めて、前のようには戦わなかった。（二一七）パーンチャーラの王子は、彼が最高に落胆し、悲嘆に暮れているのを見て、襲いかかって残酷な行為をした。（二一八）世間の真実を知悉するドローナは、彼が定められた死神であると見て、戦場で神的な武器を捨て、断食して死のうとしていた。（二一九）その時ドリシタデュムナは、勇士たちが〔非難して〕叫んでいる中で、左手でドローナの髪をつかみ、その頭を切った。（二二〇）人々はいたるところで、『殺すべきではない、殺すべきではない』と言っていた。アルジュナも戦車から降りて、彼の方に駆け寄った。（二二一）法を知る彼は両腕を上げて、急いで何度も言った。『師匠を生きたままで連れて来い。殺してはいけない』と。（二二二）このようにクルの人々とアルジュナに止められたが、その無慈悲な男はあなたの父上を殺したのだ。人中の雄牛よ。（二二三）あなたの父上が殺された時、すべての兵は恐怖にかられて逃げ出した。我々もまた気力を失った。非の打ち所のない者よ。（二二四）」

サンジャヤは語った。——

ドローナの息子は戦場で父が死んだことを聞いて、足蹴にされた蛇のように、激しい怒りにかられた。（二二五）

（第百六十五章）

(72) ナーラーヤナの武器の発射（第百六十六章―第百七十三章）

ドローナの息子、復讐を誓う

ドリタラーシトラは言った。

「サンジャヤよ、強力なアシュヴァッターマンは老いたバラモンである父が非法（アダルマ）により殺されたと聞いて何と言ったか。彼のうちには、人間、ヴァルナ（水天）、アグニ（火天）、梵天、インドラ、ナーラーヤナ（ヴィシュヌ）の武器が常にそなわっているが。（一―二）サンジャヤよ、法（ダルマ）を守る師匠が非道なドリシタデュムナに殺されたと聞いて、アシュヴァッターマンは何と言ったか。（三）ドローナは偉大な〔パラシュ〕ラーマから弓のヴェーダ（兵学）を習得して、大望を抱く息子に神的な諸々の武器について教えた。（四）というのは、この世で人々は、ただ息子だけについて、自分よりも優れた美質を持つことを望む。他の者については決してそうは望まない。（五）偉大な師匠たちに秘密がある場合、彼らはそれらを息子か、あるいはつき従う弟子に与える。（六）サンジャヤよ、クリピーの息子である勇士（アシュヴァッターマン）は、特別にすべての技術を得て、戦いにおいてドローナに引けをとらない。（七）あの彼は論書にかけてはラーマに認められ、戦いにかけてはインドラに等しく、精力にかけてはカールタヴィーリヤに等しく、叡知にかけてはブリハスパティに等しい。（八）平静さにかけて山に等しく、威光にかけては火に等しく、深さにかけては海のようで、怒りにかけては蛇の毒のようである。（九）彼はこの世で第一の戦士であり、屈強な弓取りで、疲れを知らない。風のように迅速で、怒った死神のように戦場を動きまわる。（一〇）彼が戦場で矢を放つ時、大地は苦しめられる。不屈の勇者である勇猛な彼は戦いにおいて苦しむことはない。（一一）彼はヴェーダ学習や誓戒〔を修了して〕沐浴し、弓のヴェーダ（兵学）に通達している。彼はダシャラタの息子ラーマのようで、大海〔の内部〕のように動揺しない。（一二）

法を守る師匠が非道なドリシタデュムナに殺されたと聞いて、そのアシュヴァッターマンは何と言ったか。（一三）偉大な創造者により、ドリシタデュムナがドローナの死神であると定められたように、彼はドリシタデュムナの死神であると定められた。（一四）無慈悲で邪悪で残酷で了見が狭い男によって師匠が殺されたと聞いて、アシュヴァッターマンは何と言ったか。（一五）」

サンジャヤは語った。――

人中の雄牛よ、ドローナの息子は父が詐術により邪悪な男に殺されたと聞いて、怒りにより涙にまみれた。（一六）王中の王よ、怒った彼の身体は、終末の時に生類を殺そうとする死神のそれのように輝いて見えた。（一七）それから彼は涙に満ちた両眼を何度も拭って、怒りにより息を吐いて、ドゥルヨーダナに次のように言った。（一八）

「武器を捨てた私の父が卑しい者たちに倒された次第、そして法（ダルマ）の旗を掲げる者によって悪事がなされた次第を私は聞いた。そして悪逆非道なダルマの息子（ユディシティラ）の卑劣な行為を私は聞いた。（一九）戦いに従事する者たちには、必ず勝利か敗北かの二つがある。王よ、

そこで死ぬことは讃えられる。(二〇) 戦場で戦う者が正しく行動して死ぬことは、悲しむには及ばない。このバラモン（ドローナ）の場合のように。(二一) 私の父は疑いもなく英雄の世界に行った。だからその人中の虎が逝去したことは悲しまれるべきでない。(二二) しかし、すべての兵が見ている前で、法（ダルマ）により行動する者でありながら彼が髪の毛をつかまれたということが、私に断末魔の苦しみを与える。(二三) 欲望、怒り、軽蔑、慢心、幼稚さ、侮辱により、人々は法にもとることをする。(二四) きっと邪悪で無慈悲なドリシタデュムナは私を軽蔑してあの非道を行なったのだ。(二五) そこでドリシタデュムナはその非常に恐ろしい結末を見るであろう。そして最高に卑劣な行為をして、偽りを述べたパーンドゥの息子も。(二六) あの時ダルマ王は詐術により師匠に武器を捨てさせた。今日、大地はそのダルマ王の血を飲むであろう。(二七) 私はありとあらゆる手段によりパーンチャーラ族を殺すよう努力する。そして私は、悪事をなすドリシタデュムナを戦いにおいて殺すであろう。(二八) クルの王よ、私は硬軟の手段によりパーンチャーラ族を殺して平安を得るであろう。(二九) 人中の虎よ、人は現生と死後において、大きな恐怖から救われるために、息子を得ることを望む。(三〇) しかし私の父は、弟子である山のような息子の私が生きているのに、縁者がいないかのように、あのような状態に陥った。(三一) 私の諸々の神的な武器が何になる。両腕が何になる。勇武が何になる。私を息子として得ながら、ドローナが髪の毛をつかまれるとは。(三二) バラタの最上者よ、そこで私は、他界した父に対し負債を返せるようなことをやりたい。(三三) 高貴な人は決して自慢すべきではない。しかし私は、父を殺されたことに我慢できず、

今日、自分の力について述べる。(三四) パーンダヴァたちとクリシュナは今日、私の力を見るがよい。私がすべての敵軍を粉砕し、宇宙紀（ユガ）の終末を作り出す時。(三五) 人中の雄牛よ、実に神々、ガンダルヴァ、阿修羅、羅刹といえども、今日、戦いにおいて戦車に乗る私をうち破ることはできない。(三六) この世で最も武器を知る者は、私かアルジュナの他にいない。私は燃える光線の中の太陽のように、軍隊の中にいて、神の造った武器を用いるであろう。(三七) 今日、戦場で私が激しく弓から発する矢が（異本による）、その力を示しつつ、パーンダヴァたちを粉砕するであろう。(三八) 王よ、今日すべての方角が大雨で満たされるように鋭い矢でおおわれるのを、我らの兵たちは見るであろう。(三九) 私は恐ろしい音をたてて、いたるところに矢の群を放って、強風が樹々を倒すように敵どもを倒すであろう。(四〇) アルジュナ、クリシュナ、ビーマセーナ、双子、ユディシティラ王も、その武器について知らない。(四一) 邪悪なドリシタデュムナも、シカンディンも、サーティヤキも知らない。それを準備し回収する方法とともに、私に属する武器について。(四二)

かつて私の父は作法にもとづいてナーラーヤナ（ヴィシュヌと同一視される）に敬礼して、バラモンの姿で近づいたその神に供物を捧げた。(四三) 尊い神は自らそれを受け取って、彼に恩寵を授けた。そこで私の父は最高のナーラーヤナの武器を選んだ。(四四) 王よ、その時最高の神である尊い神は彼に告げた。

『戦いにかけて汝に等しい人間は他に誰もいなくなるであろう。(四五) バラモンよ、しかし決してこれを無闇に用いてはならぬ。というのはこの武器は敵を殺さないうちは引き返すこ

とはないから。（四六）ドローナよ、そしてこれは誰彼無しに殺す。それは殺されるべきでない者をも殺すであろう。それ故、それを（無闇に）用いてはならぬ。（四七）戦場で殺されることと逃走すること（異本は「戦車を捨てること」）、武器を捨てること、敵に請願すること、庇護を求めること。（四八）以上がこの強力な武器を用いてはならぬ場合である。敵を苦しめる者よ。戦いにおいて殺されるべきでない者たちを苦しめれば、あらゆる場合に苦しむであろう。（四九）』

私の父はそれを受け取った。そして主は私に告げた。

『汝はこの武器（句呪）により、多くの神的な武器の雨を雨降らすであろう。そして戦場で、威光により輝くであろう。（五〇）』

その尊い主はこのように告げると、天上に昇って行った。こうして私の縁者はナーラーヤナからこの武器を得たのである。（五一）私は戦場において、これによりパーンダヴァたち、パーンチャーラ、マツヤ、ケーカヤの軍を敗走させるであろう。インドラが阿修羅たちを敗走させるように。（五二）バーラタよ、敵たちが奮戦しても、私の矢は私が望む通りになって、敵たちの上に落ちるであろう。（五三）私は戦場に立ち、望みのままに（武器を）雹のように降らせるであろう。鉄の先端の矢で敵の勇士たちを敗走させるであろう。私は疑いもなく、種々の斧を投じるであろう（異本による）。（五四）敵を苦しめる者よ、そこで私は強力なナーラーヤナの武器により敵であるパーンダヴァ軍を苦しめて滅ぼすであろう。（五五）友とバラモンと師を憎む、非常に非難される卑劣な男、パーンチャーラのうちで最低の奴は、今日、生きて私から逃れられないだろう。（五六）』

ドローナの息子のその言葉を聞くと、クルの軍隊は引き返した。それからすべての最上の人々は大法螺を吹き鳴らした。（五七）そして彼らは喜び勇んで、幾千の太鼓と小鼓を打ち鳴らした。そして大地は、馬の蹄と車輪に苦しめられて音をたてた。その喧噪は空と天と地を反響させた。（五八）最高の戦士であるパーンダヴァたちは雲の轟きにも似たその音を聞いて、こぞって集まって協議をした。（五九）バーラタよ、一方ドローナの息子は、このように言うと、水に触れて（誓い）、そのナーラーヤナという神的な武器を現出した。（六〇）

（第百六十六章）

ドローナの死に意気消沈するアルジュナ

サンジャヤは語った。——

それからそのナーラーヤナの武器が現出した時、雨をともなう風が吹き、雲もないのに雷鳴が聞こえた。（一）大地は揺れ動き、大海は動揺した。そして河川は逆に流れ始めた。（二）バーラタよ、そこでは山の峰々は裂け、獣たちはパーンドゥの息子たちを左まわりにまわった。（三）すべては闇におおわれ、太陽は汚れた。肉食の生き物たちが喜んで集まって来た。（四）王よ、神々、悪魔、ガンダルヴァたちは恐怖にかられ、その非常に驚くべきことを見て、どのようにすればよいかと恐れた。（五）その時すべての王は、ドローナの息子のおぞましい恐るべき武器を見て、苦しみ、途方に暮れていた。（六）

ドリタラーシトラはたずねた。

「ドローナの息子は父が殺されたことに我慢できず、こよなく悲嘆に暮れて、自軍を戦場に引き返させた。（七）その時、クル軍が襲来するのを見て、ドリシタデュムナを守るために、パーンダヴァたちの間にいかなる協議があったか。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。（八）」

サンジャヤは語った。——

ユディシティラは前にドゥルヨーダナの軍が逃げたのを見て、そして再び彼らの喧噪を聞いて、アルジュナに言った。（九）

「ドリシタデュムナは戦場で、インドラが大阿修羅ヴリトラを殺すように、師匠ドローナを殺した。（一〇）その時、クル軍は意気消沈し、戦いにおける勝利の希望を失い、自身を救おうと考えて逃走した。ダナンジャヤよ。（一一）ある王たちは戦車に乗って急いで逃げたが、その戦車は、両端の馬を御す御者を殺されて真っ直ぐ進めず、軍旗その他の旗や傘を失い、轅（ながえ）は壊れていた。（一二）その座席も壊れ、馬たちは動揺していた。また他の王たちは放心し、恐れて、足で馬たちをかりたてた。またある人々は、恐怖にかられ、自ら頸木と車輪と車軸の壊れた戦車を御して逃げた。（一三）ある人々は座席から外れて、象の背に矢で縫いつけられた。ある人々は矢に苦しんで逃げる象たちにより、十方に運ばれた。（一四）またある人々

は、武器と鎧を失って、乗物から地面に落ち、車輪で切断され、馬や象に踏みつぶされた。（一五）また他の人々は、『父よ、息子よ』と叫びながら、恐れて逃走した。彼らは怖気づいて力を無くし、お互いに認識しなかった。（一六）他の人々は重傷の息子や父や友や兄弟を（車に）乗せ、鎧を脱いで、彼らに水をかけた。（一七）

ドローナが殺された時、敵軍はそのような状態に陥り、急いで逃走した。それがいかなるわけでまた引き返して来たのか。もしお前が知っているなら、私に言ってくれ。（一八）嘶く馬と咆哮する象たちの声、戦車の車輪の音、それらの大音響が混じり合って聞こえる。（一九）これらの非常に激しい音声がクルという海に起こり、繰り返し盛り上がり、私の軍隊を震撼させる。（二〇）身の毛がよだつ騒々しい音が聞こえ、それはインドラを含む三界の者たちを恐れさせる（テクスト疑問）と私は思う。（二一）この恐るべき音響は、インドラのたてる音響であると私は考える。きっと、ドローナが殺された時、インドラがクル軍のためにやって来たのだ。（二二）アルジュナよ、非常に恐ろしい大音響を聞いて、我々は鳥肌が立ち、我々の戦士や象たちは戦慄した。（二三）戦場で怖気づいたクル軍を踏みとどまらせ、戦うために引き返させた、あの神々の主のような勇士は誰か。（二四）」

アルジュナは言った。

「クル軍はその男の力に依存して、平静さを取りもどし、自身を恐ろしい行為にかりたて、法螺貝を吹いている。（二五）王よ、武器を持たない師が殺された時、誰がドゥルヨーダナの軍を踏みとどまらせて叫んでいるのかと、あなたはその男について疑問を抱いている。

（二六）その男は廉恥心あり、強力で、発情した象のように歩む。恐ろしい行為をする、クル族の恐れを除くその男について私は述べよう。（二七）その男が生まれた時、ドローナは尊敬に値するバラモンたちに千頭の牛の財産を与えた。その男、すなわちアシュヴァッターマンがあそこで雄叫びをあげている。（二八）生まれたばかりのその勇士は、ウッチャイヒシュラヴァス（神馬の名）のように嘶いて、大地と三界すべてを震動させた。（二九）姿の見えない者たちは、それ（アシュヴァ（馬）のような声）を聞いて、彼にアシュヴァッターマンという名をつけた。その勇士が、今あそこで雄叫びをあげている。パーンダヴァよ。（三〇）ドリシタデュムナは今日、非常に無慈悲な行為により、身寄りがいないかのようなドローナを攻撃して殺した。そのドローナの身寄りが立ちはだかっている。（三一）パーンチャーラの王子は私の師の髪の毛をつかんだ。ドローナの息子は自己の力を知り、決してそれに我慢しないであろう。（三二）あなたは王国のために、師に対して偽った。あなたは法（ダルマ）を知っていながら、非常に大きい非法をなした。（三三）『この私の弟子であるユディシティラは、一切の法をそなえ、偽りを言うはずはない』と、ドローナはあなたを信頼したのだ。（三四）あなたは真実の衣をまとった虚偽に陥り、『象（のアシュヴァッターマン）が殺された』と師匠に告げた。（三五）それからドローナは武器を捨て、我執を捨て、意識を失い、苦悩していた。（三六）息子を愛する師は悲嘆に暮れ、意気阻喪した。弟子は永遠の法を捨てて、師を殺した。（三七）あなたは武器を捨てたドローナを非道にも殺して、今、もし可能ならば顧問たちとともにドリシタデュムナを守りなさい。（三八）今日、我々すべては、父を殺されて怒る師匠の息子により呑まれるドリシタデュムナ

を救うことはできないであろう。（三九）彼は一切の生類に対してこの上なく愛情を注ぐが、その彼が今日、父が髪をつかまれたことを聞いて、戦場で我々を燃やすであろう。（四〇）私が師匠を慕って大声で叫んだのに、弟子は自己の法（ダルマ）を捨てて師を殺した。（四一）我々はもう若くはなく、残された年もかなり少なくなった。今、我々がなした大きな非法は、その残された年を損なうものである。（四二）彼は愛情にかけて我々の父のようであった。法に関しても、彼は父のようである。その師匠が、短期間の王権のために殺された。（四三）王よ、ドリタラーシトラはビーシュマとドローナにすべての大地を、更に最高の息子たちを引き渡した。（四四）師は常に敵たちから敬われ、そのように厚遇されながらも、この私を自分の息子にも増して可愛がってくれた。（四五）あなたの言葉により、彼は衰弱していなかったが、武器を捨て、戦場で殺された。彼が戦えば、インドラといえども彼を殺すことができないのに。（四六）その老いた師匠はいつも有益なことをしてくれたのに、愚かな我々は王権を求めて、卑劣にも彼をあやめた。（四七）インドラの息子（アルジュナ自身）は彼への愛情により、息子、兄弟、父、妻、生命をもすべて捨てるであろう。私の師匠はそのことを知っていた。（四八）その私が、王権を望んで、彼が殺されるのにそれを見過ごした。王よ、それ故私はうつ向いて、（すでに）地獄に堕ちている。（四九）老いたバラモンである師匠、武器を捨てた聖者（ムニ）を、王権のために殺したからには、今や生きているより死んだ方がましだ。（五〇）」（第百六十七章）

アルジュナに反論するドリシタデュムナ

サンジャヤは語った。——

大王よ、勇士たちはアルジュナの言葉を聞いても、好ましいこともそうでないことも言わなかった。（一）それから、勇士ビーマセーナは怒って、笑うかのようにアルジュナに告げた。バラタの雄牛よ。（二）

「お前は森に住む隠者（ムニ）か誓戒を厳守する柔和なバラモンのように、法（ダルマ）に関して説く。（三）王族（クシャトリヤ）は他者を傷つけられること（クシャタ）から救い、自らも〔傷を克服して〕生き、三種の善き者たち（神々とバラモンと師を指すか）に対し友好的（クシャトンタ）で、大地（クシティ）を獲得し、速やかに（クシプラム）法と名誉と繁栄を得るものだ。（四）一族を支えるお前は、すべての王族の美質にめぐまれながら、愚かな言葉をほざいて、今は輝いていない。（五）クンティーの息子よ、お前はシャチーの夫であるインドラのように勇猛である。そしてお前は法に背くことはない。海が海岸を越えないように。（六）誰がお前を敬わないだろうか。お前は十三年間にわたる怨みを捨てて、今、法のみを望んでいるのだから。（七）弟よ、幸いなことにお前は今、自己の法のみを考えている。不屈な男よ、幸いなことにお前の心はいつも柔和である。（八）しかしながら、法に従っていた者の王国が非法により奪われた。そして敵どもはドラウパディーを集会所に連れて来て凌辱した。（九）我々はそのような状態にふさわしくないのに、樹皮と鹿皮を着て、敵どもに十三年間森に追放された。（一〇）非の打ち所のない者よ、お前はこれらの忍びがたい状況を忍んだ。お前は王族の法（クシャトラダルマ）に専念して、このすべてのことを遂行した。（一一）私はその非法を除去するために、お前とともにこの戦いを始めた。私は王国を奪ったあの卑劣な者たちを縁者たちもろともに殺すであろう。（一二）お前は前に、『我々は戦いのために集まって来た。力の限り努力しよう』と言った。しかし今、お前は我々を非難している。（一三）お前は自己の法を知ろうとしない。お前の言った言葉は偽りになる。お前は言葉で、恐怖に苦しむ我々の急所を断つ。（一四）傷ついた人々の傷に塩をまくようなことだ。敵を苦しめる者よ。私の心はお前に言葉の槍で苦しめられて裂ける。（一五）お前は敬虔であるが、この大きな非法に気づかない。お前と我々は讃えられるべきであるのに、お前は讃えないからである。お前はお前の十六分の一にも値しない者（ドローナの息子）を讃えている。（一六）自分で自分の美質を讃えるのはよろしくないが、私は怒って大地を裂き、山々を砕くことができる。（一七）黄金で飾られた重い恐ろしい棍棒を振りまわして、私は風のように、山のような樹々を砕くことができる。（一八）人中の雄牛よ、兄の私がそのようであるのを知りながら、お前がドローナの息子を恐れるのはふさわしくない。（一九）アルジュナよ、あるいは、すべての人中の雄牛とともに立っていなさい。限りなく勇猛な男よ。私は一人で棍棒を手にして、戦場で彼をうち破るであろう。（二〇）」

それから、パーンチャーラの王子はアルジュナに告げた。あたかもヴィシュヌが怒って吼えているヒラニヤカシプに告げたように。（二一）

「アルジュナよ、賢者たちはバラモンの義務は以下のようであると知っている。すなわち、他人のために祭祀を行なうこと、教授、贈物をすること、自分のために祭祀を行なうこと、贈物を受けること、第六に学習である。ドローナはそれらのうちのいずれに専念していたか。アルジュナよ、私が彼を殺したと、どうして私を非難するのか。（二一－二三）彼は自己の法(ダルマ)から逸脱し、王族(クシャトリヤ)の法に依存して、卑しい行為をし、超人的な武器で我々を殺した。（二四）また耐えられがたい彼はバラモンだと言いながら、幻術(マーヤー)を用いた。その彼を術策(マーヤー)により殺しても、どうして不適切なことがあろうか。アルジュナよ。（二五）ドローナが私に殺された時、ドローナの息子が怒って恐ろしい叫びをあげたとしても、私にとって何が失われるか。（二六）また、ドローナの息子が戦いにかりたてて（テクスト疑問）、クル軍を守ることができず滅びさせることも不思議ではないと私は思う。（二七）

あなたは敬虔でありながら、師の殺害者と私を非難するが、私はそのためにパーンチャーラ国王の息子として火中から生まれたのである。（二八）戦場で戦っている彼にとって、すべきこともすべきでないことも平等（一同）である。アルジュナよ、どうして彼をバラモンだとか王族(クシャトリヤ)であるとか呼べようか。（二九）彼は怒りにかられて、ブラフマ・アストラ（梵天の武器）で武器に通じない者たちを殺すであろう。その彼をどうしてあらゆる方策により殺してはいけないのか。最高の人よ。（三〇）法を知る人々は法にもとる者を毒のようだと言う。アルジュナよ、法の真実を知るあなたが、彼らの言うことを知っていながら、どうして非難するのか。（三一）私は残酷な彼を攻撃して、戦車の上で倒したのだ。アルジュナよ、その讃えられるべ

き私を、どうしてあなたは讃えないのか。（三二）あの戦いにおいて、私は燃える火か毒のような、恐ろしいドローナの頭を切った。讃えられるべき私を、どうしてあなたは讃えないのか。（三三）戦場において彼は他ならぬ私の親族を殺した。彼の頭を切り取っても、私の苦熱は去らない。（三四）ジャヤドラタの頭のように、彼の頭をニシャーダ族の領土に投げ込まなかったということが、私の急所を断つ（残念でたまらない）。（三五）アルジュナよ、敵を殺さないことは非法(アダルマ)であると教えられている。殺すか殺されるか、というのが王族(クシャトリヤ)の法(ダルマ)である。（三六）アルジュナよ、敵である彼が、戦場で、私により合法的に殺されたのである。父親の友である勇士バガダッタがあなたに殺されたように。（三七）あなたは戦場で祖父（ビーシュマ）を倒して、それが自分の法（務め）であると考えた。私が邪悪な敵を殺した時、それが法であるとどうして考えないのか。（三八）パーンドゥの長男は偽りを述べたのではない。私も法に背く者ではない。アルジュナよ。弟子を憎む悪者が殺されたのだ。戦いなさい。勝利はあなたのものだ。（三九）」

（第百六十八章）

激しく対立するサーティヤキとドリシタデュムナ

ドリタラーシトラは言った。

「偉大なドローナはヴェーダとその補助学を適切に学んだ。廉恥心ある彼には、弓のヴェーダ（兵学）が現に確立している。（一）その大仙の息子であるドローナが、師の殺害者である、卑

劣で無慈悲な悪党に非難された。(二) 人中の雄牛たちは彼の恩寵により戦場で、神々もなしがたい超人的な諸行為をなす。(三) そのドローナが、みなの眼の前で邪悪な男に非難された。その時、人々が怒らなかったとしたら、王族(クシャトラ)など下らない。怒りなど下らない。(四) パーンダヴァたちや、すべての王や、地上の弓取りたちは、パーンチャーラの王子の言葉を聞いて何と言ったか。サンジャヤよ、それを私に語ってくれ。(五)」

サンジャヤは語った。——

王よ、残酷なドルパダの息子の言葉を聞いて、すべての王は沈黙していた。(六) しかしアルジュナは横目で斜めにドリシタデュムナを見て、涙を浮べてため息をつき、「何ということ、何ということ」と言った。(七) ユディシティラ、ビーマ、双子、クリシュナ、及びその他の者は、非常に恥じていた。王よ、サーティヤキは次のように言った。(八)

「ここには誰も男はいないのか。今、よからぬことを言うこの最低の悪党をすぐに殺せる男は。(九) 師を非難して、どうしてお前の舌や頭が百に裂けないのか。お前は非法(アダルマ)によって倒されないのか。(一〇) あのような汚ない行為をしながら、人々の集まりにおいて自慢したから、お前はパーンダヴァたちやすべてのアンダカ・ヴリシュニの人々に見放される。(一一) あのようなすべきでないことをして、更に師を非難して、お前は殺されるべきだ。お前は一刻でも生きている必要はない。(一二) 最低の男でも、お前以外のいかなる貴族が、徳性ある立派な師の髪をつかんで殺そうとするか。(一三) お前の親族たちは一

族の面汚しであるお前を得て、未来と過去のそれぞれ七代にわたって、名誉を失い、破滅する(地獄に堕ちる)であろう。(一四)

お前は人中の雄牛アルジュナがビーシュマに対してしたことに言及した。しかしあの偉大な人は自ら最期を定めたのだ。(一五) 彼の場合も、お前の弟である極悪人(シカンディン)が倒したのだ。地上でパーンチャーラの二人の王子ほど悪人は他にいない。(一六) シカンディンもビーシュマを殺すために、お前の父により作られたという。アルジュナは偉大なビーシュマの死神であるシカンディンを守ったのだ。(一七) すべての善き人々に非難されるお前と弟を得て、パーンチャーラの人々は法(ダルマ)から逸脱し、卑劣で友と師を憎む者たちになる。(一八) もしお前が再びそのような言葉を私の前で言うなら、私は金剛杵(ヴァジュラ)のような棍棒でお前の頭を砕いてやる(異本による)。(一九)」

サーティヤキにこのように非難されて、ドリシタデュムナは怒り狂い、嘲笑ってサーティヤキに乱暴な言葉を述べた。(二〇)

「サーティヤキよ、聞いたぞ、聞いたぞ。しかし許してやろう。しかし卑しい男よ、清く正しい男を非難するのはよろしくない。(二一) 世間で忍耐は讃えられているが、邪悪な者は忍耐に値しない。というのは、邪悪な者は忍耐する人のことを、『彼は敗れた』と考えるから。(二二) お前は卑しい行ないをし、卑しい性質で、悪い意図を持っている。髪の先から爪の先まで非難さるべきである。そのお前が人を非難しようとしている。(二三) 腕を切られた時、ブーリシュラヴァスが断食して死のうとしているのに、お前は止められたのに彼を殺した。

それよりも悪いことがあろうか。(二四)一方ドローナの場合は戦陣を布き、戦場で神的な武器を用いていたが、彼が武器を捨てた時に、私は彼を殺したのだ。それがどうして残酷な悪行なのか。(二五)しかし、敵に腕を切られ、戦場で戦わずに断食して死のうとしている聖者(ムニ)を殺すような者はどうなるだろうか。サーティヤキよ。(二六)強力な彼はお前を地面に打ち倒して歩きまわっていた。お前は最高の男でありながら、どうしてあの時に彼を殺さなかったのか。(二七)栄光ある勇士ブーリシュラヴァスはすでにアルジュナにうち破られていたのに、卑しいお前は再び彼を殺したのだ。(二八)一方、ドローナの場合は、パーンダヴァの軍を敗走させていた。その時、私は幾千の矢を放って、彼に向かって行った。(二九)お前は自分であのようなチャーンダーラ(被差別民)のような行為をして、非難さるべきなのに、どうして私に荒々しいことを言おうとするのか。(三〇)ヴリシュニ族の最低の男よ、お前が残酷な行為をしたのであり、私ではない。お前は諸々の悪行の住処である。二度とあのように言ってはならぬ。(三一)黙っていろ。今後は二度と再び私を非難してはならぬ。お前は私に逆さまなことを言おうとするが。(三二)もし愚かにもこのような乱暴なことを再び私に言うなら、戦いにおいて、矢によりお前をヤマ(閻魔)の住処に行かせてやる。(三三)

馬鹿者よ、それに法(ダルマ)のみによってはことは成らない。彼らも非法により行動したのだ。どのようにか。聞け。(三四)かつてユディシティラは非法により欺かれた。そしてドラウパディーも非法により苦しめられた。サーティヤキよ。(三五)パーンダヴァたちはすべて、クリシュナー(ドラウパディー)とともに森に追放された。そしてまた非法により全財産が奪われた。

愚か者よ。(三六)そしてマドラ国王(シャリヤ)は非法により、わが軍から敵に引き抜かれた。クルの祖父ビーシュマは非法により、こちらの側に殺された。ブーリシュラヴァスは非法により、法(ダルマ)を知るお前に殺された。(三七)かくて敵側の勇士たちも、パーンダヴァ側の勇士たちも、法を知りながら、勝利を得るために、戦場でこのようにふるまったのだ。サーティヤキよ。(三八)最高の法を知ることはむずかしい。また非法を知ることも非常にむずかしい。クル軍とともに戦え。祖霊の住処に行ってはならぬ。(三九)」

栄光あるサーティヤキは、このような残酷で乱暴な言葉を言われて身をふるわせた。(四〇)サーティヤキはそれを聞いて、怒りで眼を赤くして、蛇のように息を吐くと、戦車に弓を置き、棍棒をつかんだ。(四一)それから彼はパーンチャーラの王子に突進し、怒って次のように言った。

「私は乱暴なことをお前に言わない。殺されるに値するお前を殺してやる。(四二)」

強力で短気な彼は怒り狂って、死神(アンタカ)のように、死神のようなパーンチャーラの王子に激しく襲いかかった。(四三)その時、クリシュナにうながされた強力なビーマセーナが、速やかに戦車から飛び下りて、両腕で彼を制止した。(四四)強力なサーティヤキは怒って駆け寄って襲いかかろうとするが、強力なビーマはその彼をつかんで、力ずくで引きもどそうとした。(四五)それから強力なビーマは両足をふんばって立ち、最高に強力なシニの雄牛が六歩進んだところで引き止めた。(四六)

王よ、それからサハデーヴァは、戦車から降りて、強力なビーマに引き止められている彼

に柔和な声で告げた。(四七)

「人中の虎サーティヤキよ、我々にとって、アンダカ・ヴリシュニ族とパーンチャーラ族ほど優れた友は他にいない。(四八) 同様に、アンダカ・ヴリシュニのうちでも、特にあなたとクリシュナにとって、我々のような友は他にいない。(四九) そしてサーティヤキよ、パーンチャーラ族にとっても、海に至るまで探しても、パーンダヴァとヴリシュニほど優れた友は他にいない。(五〇) そこであなたは〔我々の〕友であるように、〔彼らの〕友であると考えられる（テクスト疑問）。そしてあなた方は我々に属し、我々はあなた方に属する。(五一) そこですべての法を知るあなたは、友の法を思い出して、パーンチャーラの王子に対する怒りを鎮め抑えなさい。シニの雄牛よ。(五二) あなたはドリシタデュムナに対して辛抱し、ドリシタデュムナもあなたに対して辛抱すべきである。我々も辛抱するであろう。忍耐より何か他に道はあるだろうか。(五三)」

わが君よ、サハデーヴァがシニの孫を鎮めていた時、パーンチャーラの王子は笑って、次のように言った。(五四)

「ビーマよ、戦いに酔うシニの孫を放せ。風が山に達するように、彼を私のもとに来させよ。(五五) 私は戦場において、鋭い矢で彼の怒りと戦いの願望と生命を（異本による）滅ぼしてやろう。クンティーの息子よ。(五六) 私はパーンドゥの息子たちのために努力している、非常に大切な仕事を〔先に〕やるべきだろうか。あそこにクル軍が進んで来るから。(五七) あるいは、アルジュナが戦ってすべてを食い止めるがよい。私の方は矢で彼の頭を切り落とすであろう。

(五八) 彼は私のことを、戦場で腕を切られたブーリシュラヴァスと同じだと考えている。彼を離せ。私が彼を殺すか、彼が私を殺すかだ。(五九)」

強力なサーティヤキはパーンチャーラの王子の言葉を聞いて、蛇のように息を吐き、ビーマの腕の中につかまって、絶えず身をふるわせていた。(六〇) わが君よ、それからクリシュナとダルマ王は急いで、非常な努力をして二人の勇士を制止した。(六一) そして王族の雄牛たちは、怒りで眼を赤くしている二人の勇士を制止してから、戦場で戦おうとして、敵たちに向かって行った。(六二)

（第百六十九章）

ナーラーヤナの武器は鎮まる

サンジャヤは語った。――

それからドローナの息子は敵を殺戮した。宇宙紀の終末に、カーラ（時間、破壊神）が作り出した死神が一切の生類を殺戮するように。(一) 彼は矢で敵を殺して、死体の山を作った。旗がその山の樹である。武器が峰々である。その山は殺された象という大きな岩石を有し、馬というキンプルシャ（半神の一種）に満ち、弓という蔓草に囲まれている。その山は戟という肉食動物の音が響き、鬼霊や夜叉の群に満ちている。(二―三)

それから、その人中の雄牛は激しい勢いで叫んで、あなたの息子に再び例の誓いを聞かせた。(四)

『法(ダルマ)の衣をまとったクンティーの息子ユディシティラは、戦っている師匠に、『武器を捨てよ』と告げた。(五)それ故、彼が見ている前で、私は彼の軍隊を敗走させるであろう。敵を敗走させてから、まさに私はあの邪悪なパーンチャーラの王子を殺すであろう。(六)もし彼らが戦場で私と戦うなら、私は彼らすべてを殺すであろう。私はこの真実をあなたに誓う。軍隊を引き返させなさい。(七)」

あなたの息子はそれを聞くと、大きな獅子吼により大きな恐怖を除去して、軍隊を引き返させた。(八)王よ、それからまた、満水の海のようなクルとパーンダヴァの軍隊の合戦が始まった。(九)クル軍はドローナの息子に励まされて平常にもどり、いきり立っていた。そしてパーンダヴァとパーンチャーラの軍も、ドローナの死により高揚していた。(一〇)彼らは最高に喜び勇み、勝利は自分の側にあると見て、猛り立ち、戦場において猛烈な勢いを示した。(一一)王中の王よ、クル軍とパーンダヴァ軍は、山が山に、海が海に衝突するようにぶつかり合った。(一二)それから、クルとパーンダヴァの軍隊は勇み立って、幾千の法螺貝、幾万の太鼓を鳴らした。(一三)軍隊の間に、攪拌される海の音のような非常に大きな驚異的な音があがった。(一四)

それからドローナの息子は、パーンダヴァとパーンチャーラの軍隊をねらって、ナーラーヤナの武器を出現させた。(一五)すると先端が燃える幾千の矢が虚空に出現した。それらは燃える口をした蛇たちのように、パーンダヴァ軍を食おうとしていた。(一六)王よ、それらは太陽の光線が世界をおおうように、戦場において、たちまち諸方と空と軍隊をおおった。

(一七)王よ、それとは別に、黒鉄よりなる諸々の球が出現した。それらは汚れなき空における星々のように輝いていた。(一八)そして、四方に火を放つ多彩な百殺棒(シャタグニー)と、剃刀のような縁を持つ日輪のような円盤が出現した。(一九)バラタの雄牛よ、空中がそれらの武器におおわれたのを見て、パーンダヴァとパーンチャーラとスリンジャヤの軍隊は狼狽した。(二〇)王よ、実にパーンダヴァの勇士たちが戦えば戦うほど、その武器は増大した。(二一)燃える火のようなそのナーラーヤナの武器に殺されつつ、彼らは戦場のいたるところでのたうちまわった。(二二)王よ、寒季の終わりに火が枯れた草木を燃やすように、その武器はパーンダヴァの軍隊を燃やした。(二三)王よ、満ち満ちる武器により自軍が滅ぼされている時、ダルマの息子ユディシティラは最高に恐れた。(二四)自軍が度を失って逃げるのを見て、そしてアルジュナが傍観しているのを見て、ダルマの息子は次のように言った。(二五)

「ドリシタデュムナよ、パーンチャーラ軍とともに逃げよ。サーティヤキよ、あなたもヴリシュニ・アンダカの軍に囲まれて家に帰りなさい。(二六)徳性あるクリシュナも自身の安全を図るであろう。彼は世の人々に教えることができる。自分のことは自分で考えるだろう。(二七)戦争をすべきではない。私はあなた方すべての兵たちに告げる。私自身は弟たちとともに火に入るであろう。(二八)私は仲間とともにビーシュマとドローナという海を渡り、恐ろしく渡りがたい戦場を渡り、ドローナの息子という水の入っていない牛の足跡に沈み込むであろう。(二九)あのアルジュナ(異本は「ドゥルヨーダナ王」)の私に対する願望が速やかに実現するように。私は戦いにおいて、善行の師匠を倒した。(三〇)戦いに通達していない少年アビマニユが、

有能な多くの残酷な戦士たちに殺された時、ドローナは彼を守らなかった。(三一) 集会場にいるクリシュナー（ドラウパディー）が奴隷の状態に陥った時、ドローナはその問いに答えず、息子とともに傍観していた。(三二) 馬たちが疲れた時、アルジュナを殺そうとするドゥルヨーダナは、シンドゥ国王を守るために、〔ドローナによって〕鎧を着せられた。(三三) ブラフマ・アストラ（梵天の武器）を知るドローナは、私の勝利のために努力しているサティヤジットをはじめとするパーンチャーラ軍を、根こそぎに倒した。(三四) 我々が非法により王国から追放された時、ドローナは我々〔の同情者〕に止められたのに、我々が去ることに同意した（ニーラカンタ注による）。(三五) しかし彼は我々に最高の友情を注いでくれた。その彼が殺されたので、私は彼のために親族とともに死ぬであろう。(三六)」

ユディシティラがこのように言った時、ダーシャールハ（クリシュナ）は両腕で急いで軍隊を制止して、次のように告げた。(三七)

「速やかに武器を置き、乗物から降りなさい。偉大な方（ナーラーヤナ）は〔この武器を〕抑止するこのような方法を定めた。(三八) みな象や馬や戦車から地面に降りろ。この武器は地面に武器なしでいる諸君を殺さないであろう。(三九) 戦士たちが武器の力に頼って戦えば戦うほど、あのクル軍はより強力になるのである。(四〇) 人々が乗物から降りて武器を捨てれば、この武器は戦場でその人々を殺さないであろう。(四一) しかし、何らかの人々が心の中でさえ反抗しようとしたら、彼らが地底界（ラサータラ）に行ったとしても、この武器は彼らをすべて殺すであろう。(四二)」

バーラタよ、クリシュナのその言葉を聞くと、すべての人々は実際の行動により、また心により武器を捨てようと望んだ。(四三)

王よ、それからビーマセーナは、人々が武器を捨てようと望んでいるのを見て、人々を喜ばせつつ次のように言った。(四四)

「いかなる者も決してここで武器を放つべきでない。私が矢により、ドローナの息子の武器を防ぐであろう。(四五) あるいは、この黄金で飾られた重い棍棒により、戦場でカーラ（破壊神）のようにふるまい、ドローナの息子の武器を砕くであろう。(四六) というのは、この世には勇武にかけて私に等しい者は誰もいないから。太陽に等しい星は他に存在しないように。(四七) 象王の鼻に等しい、私の強固な二本の腕を見よ。それらはヒマーラヤ山をも打ち倒すことができる。(四八) 私はここにいる人々のうちでただ一人、一万の象に等しい力を有する。天上の神々の間でインドラが無比であると知られるように、私には対抗者がいない。(四九) 今日、戦場において、逞しい肩を持つ私の両腕の力を見よ。私が燃え上がるドローナの息子の武器を防ぐために燃えている時。(五〇) もしナーラーヤナの武器に対して戦う者がいないなら、私が今日、クルとパーンダヴァの軍が見ている前で、それに対して戦うであろう。(五一)」

敵を制するビーマはこのように言って、それから、雷雲のような音をたて、太陽のように輝く戦車に乗って、ドローナの息子に向かって行った。(五二) 手練の早業のクンティーの息子は、迅速に近づいて、矢の群を彼に浴びせた。(五三) それからドローナの息子は笑い、襲

来する（異本による）相手に声をかけて、加持された燃える先端の矢を浴びせた。（五四）戦場で火を吐き、燃える口の蛇のようであり、黄金の火花のようなそれらの矢によりビーマはおおわれた。（五五）王よ、戦場で射るビーマセーナの姿は、夕方、蛍におおわれた山の姿のようであった。（五六）王よ、対抗して射るビーマに対するそのドローナの息子の武器は、風に煽られた火のように増大した。（五七）恐るべき力を持つその武器が増大するのを見て、ビーマ以外のパーンダヴァ軍は大恐怖に陥った。（五八）そこで彼らはすべて武器を地面に置き、すべて戦車や象や馬から降りた。（五九）彼らが武器を捨て、乗物から降りた時、その強力な武器はビーマの頭に落ちた。（六〇）すべての生類、特にパーンダヴァたちは、その時ビーマセーナが光熱におおわれるのを見て、「ああ、ああ」と叫んだ。（六一）

（第百七十章）

アシュヴァッターマンの勝利

サンジャヤは語った。――

アルジュナはビーマセーナがその武器におおわれたのを見て、光熱を妨害するためにヴァルナ（天水）の武器で彼をおおった。（一）アルジュナの手練の早業により、そして光熱におおわれていることにより、ビーマがヴァルナの武器におおわれたことに誰も気づかなかった。（二）ビーマとその馬たちと御者と戦車は、ドローナの息子の武器におおわれて、火の中に火が置かれたように、火焰に囲まれて、非常に認められがたかった。（三）王よ、夜の終わりに星々がアスタ山（山西）に達するように、諸々の矢はビーマセーナの戦車に達した。（四）わが君よ、実にビーマとその戦車と馬たちと御者とは、ドローナの息子に（矢で）おおわれて、火の中にいるかのようになった。（五）終末の時に、火が動不動のすべての世界を燃やして主の口に帰するように、その武器はビーマをおおった。（六）火が太陽に入ったように、また太陽が火に入ったように、その光熱は入り込み、何も見分けられなかった。（七）

ビーマの戦車に対してその武器が拡がり、戦いにおいて無敵のドローナの息子が増長するのを見て、パーンダヴァのすべての兵たちは度を失い、武器を置いた。ユディシティラを先頭にして彼ら勇士たちが退却するのを見て、光輝に満ちたアルジュナとクリシュナの両雄は急いで戦車から飛び下りて、ビーマのもとに駆けつけた。（八―一〇）それから非常に強力な両者は、ドローナの息子の武器の力により生じた光熱に飛び込み、幻力によりそこに入っていた。（一一）武器から生じた火は武器を置いた二人を燃やさなかった。それはまた、ヴァルナの武器を用いていたからであり、クリシュナとアルジュナが力をそなえていたからでもある。（一二）それからナラ（アルジュナ）とナーラーヤナ（クリシュナ）は、ナーラーヤナの武器を鎮めるために、ビーマと彼のすべての武器を力まかせに引っぱった。（一三）勇士ビーマは引っぱられて叫んだ。そしてその恐ろしいドローナの息子の無敵の武器は増大した。（一四）クリシュナはビーマに告げた。

「ビーマよ、制止されているのに、どうしてあなたは戦いをやめないのか。（一五）もし今、クルの王子たちが戦いにより破られ得るなら、我々もこれらの人中の雄牛も戦うであろう。

（一六）しかし、あなたのすべての軍は戦車から降りている。ビーマよ、それ故あなたも急いで戦車から降りよ。（一七）」
クリシュナはこのように言うと、ビーマを戦車から地上に降ろした。ビーマは怒りで眼を赤くして、蛇のように息を吐いていた。（一八）ビーマが戦車から降り、武器を地面に置いた時、敵を苦しめるナーラーヤナの武器は鎮まった。（一九）
このような方法により、その耐えがたい光熱が鎮まった時、四方四維はすべて清明になった。（二〇）王よ、吉祥の風が吹き、鳥獣は鎮まり、象や馬は喜び、兵士たちも喜んだ。（二一）パーラタよ、恐ろしいその光熱が除去された時、英邁なビーマは、夜明けに昇った太陽のように輝いた。（二二）生き残ったパーンダヴァの軍隊は、その武器が鎮まったことに喜び、あなたの息子を殺そうとしてそこに立っていた。（二三）
大王よ、その武器が無効にされ、敵軍がそこに布陣していた時、ドゥルヨーダナはドローナの息子に言った。（二四）
「アシュヴァッターマンよ、すぐにまたあの武器を用いよ。パーンチャーラ軍は再び勝利を望んで布陣している。（二五）」
わが君よ、しかしアシュヴァッターマンは、あなたの息子にそのように言われると、ひどく嘆息して、王に次のように告げた。（二六）
「王よ、あの武器はもどって来ない。二度は使えない。もしそれをもどせば、疑いもなく使用者を殺す。（二七）あのクリシュナはあの武器を無効にする方法を用いた。さもなければ、

戦いにおいて敵は全滅したはずだ。王よ。（二八）だが、敗北と死とでは、敗北よりも死の方がよい。敵は武器を捨てたのだから敗北し、死んだも同然だ。（二九）」
ドゥルヨーダナは言った。
「師匠の息子よ、あの武器が二度は使えないのなら、師の殺害者たちを他の武器で殺せ。最高に武器を知る者よ。（三〇）実にあなたには、シヴァ神が所有するような諸々の神的な武器がある。あなたが怒って望めば、インドラといえども逃れることはできない。（三一）」
ドリタラーシトラはたずねた。
「ドローナが詭計により殺され、その武器が無効にされた時、そのようにドゥルヨーダナに言われたドローナの息子は、更にどのようにしたか。（三二）パーンダヴァたちがナーラーヤナの武器から解放され、戦いのために戦場に布陣し、戦線で働いているのを見て。（三三）」
サンジャヤは語った。――
獅子の尾の旗標を持つアシュヴァッターマンは、父の死を知り、怒って恐れを捨て、ドリシタデュムナに向かって進撃した。（三四）その人中の雄牛は進撃して、激しい勢いで、二十五本の小矢（クシュドラカ）で人中の雄牛である相手を射貫いた。（三五）王よ、それからドリシタデュムナは、燃える火のようなドローナの息子を、六十三本の矢で射た。（三六）そして彼は金の羽根を持つ、石で研いだ二十本の矢で相手の御者を、四本の鋭い矢で四頭の馬を射貫いた。

(三七)ドローナの息子は次々と矢を射て、大地をふるわせて雄叫びをあげた。彼は戦場で、すべての人々の生命を奪うかのようだった。(三八)王よ、一方、武器に通達し孜々として励む強力なドリシタデュムナは、退却を死と考えて、まさにドローナの息子に襲いかかった。(三九)それから、最高の戦士である限りなく高邁なパーンチャーラの王子は、ドローナの息子の頭に、矢の雨を浴びせた。(四〇)ドローナの息子は戦場で怒って、矢で彼をおおった。そして父が殺されたことを思い出して、十本の矢で彼を射貫いた。(四一)ドローナの息子は弓を引き絞って放った二本の馬蹄形の先の矢で、パーンチャーラの王子の軍旗と弓を断ち、その他の矢で相手を苦しめた。(四二)ドローナの息子は、その激戦において、相手の馬たちと御者と戦車を奪った。そして怒った彼は、相手のすべての従者たちを矢でおおった。(四三)王よ、それからパーンチャーラの軍隊は、矢の雨に傷ついて苦しみ、狼狽して逃げ出した。(四四)

シニの孫(サーティヤキ)は兵士たちが退却し、ドリシタデュムナが苦しんでいるのを見て、急いで自分の戦車を(異本による)ドローナの息子の戦車に向けてかりたてた。(四五)そして彼は八本の鋭い矢でアシュヴァッターマンを苦しめた。そして更にいきり立つ相手を、種々の形をした二十本の矢で射て、また相手の御者を射貫き、四本の矢で四頭の馬を射た。(四六)

偉大な射手である短気なドローナの息子は、ユユダーナ(サーティヤキ)に種々の特徴のある矢でしたたか射られたが、笑って次のように言った。(四七)

「シニの孫よ、あの師匠を殺した男をお前が助けようとするのはわかる。しかしお前は、私

に呑まれた彼と自分自身を救えないだろう。(四八)」

ドローナの息子はこのように言って、太陽の光線のような、美しい節を持つ最高の矢を、サーティヤキに向けて発射した。ハリ(インドラ)が金剛杵(ヴァジュラ)をヴリトラに向けて放つように。(四九)彼に放たれたその矢は、鎧をつけたサーティヤキを貫き、大地に入った。蛇が息を吐きながら穴に入るように。(五〇)鎧を貫かれたその勇士は、突き棒で苦しめられた象のように、多くの傷から(血を)流して、弓矢を離した。(五一)そして彼は血にまみれて沈み込み、戦車の座席に座った。御者は速やかに彼をドローナの息子から引き離して、他の戦車の方に向かった。(五二)

さて、敵を苦しめるアシュヴァッターマンは、他の美しい羽根のついた真っ直ぐの矢で、ドリシタデュムナの眉間を撃った。(五三)パーンチャーラの王子はしたたか射貫かれた後でひどく苦しみ、戦場で座り込み、軍旗に寄りかかった。(五四)王よ、発情した象が獅子に苦しめられるように彼が苦しめられていた時、パーンダヴァの五名の勇猛な戦士たちが彼に急いで駆け寄った。(五五)すなわち、アルジュナ、ビーマセーナ、パウラヴァのヴリッダクシャトラ、チェーディの皇太子、マーラヴァのスダルシャナである。彼らは一斉に五本ずつの矢を放って、いたるところからアシュヴァッターマンを攻撃した。(五六)しかしドローナの息子は、毒蛇のような二十五本の矢により、彼らが放った二十五本の矢を同時に断ち切った。(五七)そしてドローナの息子は七本の鋭い矢でパウラヴァの王を苦しめ、三本の矢でマーラヴァの王を、一本の矢でアルジュナを、六本の矢で狼腹(ビーマ)を苦しめた。(五八)

王よ、それからこれらすべての勇士たちは、金の羽根のついた、石で研がれた矢で、同時に、あるいは別々に、ドローナの息子を射た。（五九）一方、チェーディの皇太子は、二十本の矢でドローナの息子を射た。またアルジュナも八本の矢で、またすべての者たちは三本ずつの矢で彼を射た。（六〇）それからドローナの息子は、六本の矢でアルジュナを、十本の矢でクリシュナを、五本の矢でビーマを、四本の矢で皇太子を射た。そして二本の矢で相手の弓と旗を断ち切った。ドローナの息子は更に矢の雨でアルジュナを射て、恐ろしい獅子吼をした。（六一）ドローナの息子は、鍛えられた刃を持つ鋭い矢を前後に放った。その時、大地と空と天と四方四維は、彼の恐ろしい矢によっておおわれた。（六二）インドラのような力を持ち、恐ろしい威光を持つ彼は、三本の矢で、自分の戦車に座っているスダルシャナの、インドラの旗にも似た両腕と頭を切り取った。（六三）そして彼は戦車用の槍によりパウラヴァの王を攻撃して、矢でその戦車を粉砕してから、上等の栴檀を塗った相手の両腕を切り、半月形の先の矢でその頭を胴体から切り取った。（六四）それから彼は笑って、青蓮の花輪のような色をした、チェーディ国王の愛しい皇太子を、燃火のような矢で速やかに射て、馬や御者もろとも死神に引き渡した。（六五）勇猛な将軍である無敵なドローナの息子は、戦場で彼らを殺してから、喜んで大きな法螺貝を吹いた。（六六）それから、すべてのパーンチャーラ軍とビーマセーナは恐れ、ドリシタデュムナの戦車を捨てて諸方に逃げた。（六七）ドローナの息子は壊滅した彼らの背後から矢を浴びせ、速やかにカーラ（破壊神）のようにパーンダヴァ軍を攻撃した。（六八）王よ、王族（クシャトリヤ）たちは戦場でドローナの息子に殺されつつ、恐怖から、あらゆる方角にドローナの息子がいると考えた。（六九）

（第百七十一章）

クリシュナとアルジュナの正体

サンジャヤは語った。――

限りなく高邁なクンティーの息子ダナンジャヤ（アルジュナ）は、自軍が壊滅したのを見て、ドローナの息子を殺そうと望んで、自軍を引き返させた。（一）王よ、その兵たちは、クリシュナとアルジュナに努力して止められてもその場に踏みとどまらなかった。（二）しかしただアルジュナ一人が、ソーマカ軍の一部と他のマツヤ軍とともに、クル軍の方に（異本による）引き返した。（三）アルジュナは獅子の尾を旗標にする勇士アシュヴァッターマンに急いで近づいて言った。（四）

「お前の能力、精力、知識、雄々しさ、ドリタラーシトラの息子たちに対するお前の愛情、我々に対するお前の憎悪、更にお前の絶大な威光、それを私に見せてくれ。（五）ドローナを殺したあのドリシタデュムナもお前の高慢の鼻を折るであろう。パーンチャーラの王子と、クリシュナとともにいる私に向かって来い。（六）」

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、師匠の息子は尊敬に値し、強力である。彼はアルジュナを愛し、アルジュ

ナは彼を愛している。(七) アルジュナのこのような乱暴な言葉はかつてなかった。どうしてアルジュナは友に乱暴に言ったのか。(八)」

サンジャヤは語った。――

チェーディの皇太子とパウラヴァのヴリッダクシャトラが殺され、弓に通達したマーラヴァのスダルシャナが殺された時、そしてドリシタデュムナとサーティヤキとビーマが敗れた時、そしてまたユディシティラのあの言葉により急所がこすられた時、そしてまた苦難（息子を殺されたことなど）を思い出して葛藤が生じた時、悲しみからアルジュナにいまだかつてない怒りが生じた。(九―一一) それ故アルジュナは卑しい男のように、敬うべき師匠の息子に対し、不適切で粗野で不快なことを言ったのである。(一二)

王よ、最高の勇士であるドローナの息子は、このようにアルジュナにすべての急所を断つ言葉により乱暴なことを言われ、怒りで息を吐き、アルジュナに対して憤り、そして特にクリシュナに対して憤った。(一三) 強力な彼は猛り立ち、戦車の上に立ち、水に触れて、神々によっても抗しがたいアグニ（神火）の武器を呼び起こした。(一四) 敵の勇士を殺す師匠の息子は、眼に見える、あるいは見えない、敵の群をめざして、煙のない火のような輝く矢を加持して、怒りにかられて、それをいたるところに放った。(一五) それから虚空に、激しい矢の雨が生じた。熱い風（異本による）が吹き、太陽はまったく熱さなかった。(一六) 悪魔たちはあらゆる方角で恐ろしく叫んだ。そして空では雲が血の雨を降らせ、轟いた。(一七) 鳥獣、牛、

誓戒をよく守る聖者、最高に自制した者たちも平安を得られなくなった。(一八) すべての大きな生き物は動揺し、太陽は傾き、三界は熱せられ、熱に入り込まれたかのように苦しんだ。(一九) 象たちは矢の光熱に苦しみ、地面に横たわり、息を吐き、恐ろしい光熱から解放されようとして飛び上がった。(二〇) バーラタよ、池は熱せられ、水に生ずる生き物は燃やされ、平安に達することはなかった。(二一) 四方四維、天空と地上に、ガルダか風のような速さで、多様な矢の雨が降った。(二二) 金剛杵のように激しく集中するドローナの息子の矢により、敵たちは焼かれ、火に焼かれた樹々のように倒れた。(二三) 巨象たちは焼かれて、雷雲のような音をたてて恐ろしい叫び声をあげ、いたるところで大地に倒れた。(二四) 他の巨象たちは焼かれて逃げまわり、また他の象たちは、恐ろしい森で森火事に包まれて戦いていた。(二五) わが君よ、馬の群と戦車の群は、森火事に焼かれた樹々の頂のように見えた。そしてあちこちで幾千の戦車の群が倒れた。(二六) バーラタよ、尊いアグニ（神火）は戦場で敵軍を燃やした。宇宙紀の終わりにサンヴァルタカ火が一切の生類を燃やすように。(二七)

王よ、激戦においてパーンダヴァ軍が燃やされているのを見て、あなたの兵たちは喜んで獅子吼をした。(二八) それから勝ち誇るあなたの兵たちは喜んで、多様な種類の幾千の楽器を急いで打ち鳴らした。(二九) 王よ、世界が闇におおわれた時、すべての軍隊とアルジュナは、激戦において認められなかった。(三〇) 王よ、ドローナの息子が怒って作り出したような武器は、我々はいまだ見たことも聞いたこともなかった。(三一)

大王よ、一方アルジュナは梵天の武器を呼び出した。それはすべての武器を撃退するため

に梵天に作られたものである。(三二) それから一瞬の後に闇は除去された。冷たい風が吹き、諸方は清明になった。(三三) そこで我々は驚異的な光景を見た。殺されたすべての敵の軍団は、武器(アストラ)の幻力(マーヤー)に燃やされて、その姿は見分けられなかった。(三四) それから偉大な射手であるクリシュナとアルジュナの両雄は、闇から脱して、天空における日月のようにそろって認められた。(三五) 旗や幡や馬をともない、最上の車軸を持ち、武器を備え、あなたの兵たちに恐怖をもたらすその戦車も闇から脱して輝いていた。(三六) それからすぐに、喜んだパーンダヴァ軍の歓声と法螺や太鼓の音がした。(三七) 両軍の間には、クリシュナとアルジュナの二人は殺されたという考えがあった。その両者が闇から脱し急に現われたのを彼らは見た。(三八) その両者は無傷で、喜んで最高の法螺を吹いた。パーンダヴァ軍が喜んだのを見て、あなたの兵たちは戦(おのの)いた。(三九)

わが君よ、偉大な二人が脱したのを見て、ドローナの息子は非常に苦しみ、「これはどうしたことか」と少しの間考えた。(四〇) 王中の王よ、彼は考えてから、物思いにふけり、長く熱い息を吐き、落胆していた。(四一) それからドローナの息子は弓を置いて、急いで戦車から飛び下り、「ああ、ああ、すべては空しい」と言いながら、戦場から逃走した。(四二) それから彼はヴィヤーサに会った。ヴェーダの編纂者であるヴィヤーサは、輝かしい雲のようで、汚れなく、サラスヴァティー(舌弁)の住処であった。(四三) クルの一族を担う者よ、ドローナの息子はそのヴィヤーサが眼の前にいるのを見て、挨拶して、悲嘆に暮れ、声をつまらせて言った。(四四)

「おお、おお、これは幻術(マーヤー)なのか、あるいは偶然なのか。どういうことなのかわからない。この私の武器がどうして空しいのか。私に何か手違いがあったか。(四五) 世の中がひっくり返ったのか、あるいは世界が終わりになったのか。二人のクリシュナが生きていたとは。実にカーラ(時間、運命)は乗り越えがたい。(四六) 阿修羅、神々、ガンダルヴァ、ピシャーチャ鬼、羅刹、蛇、夜叉、鳥(ガルダ)、人間は、私が放ったこの武器を決して無効にすることはできない。その武器を用いたのに、たった一軍団を焼いただけとは。(四七―四八) それはどうして人間の法(ダルマ)に従うクリシュナとアルジュナとを殺さなかったのか。尊者よ、おたずねする。私にありのままに告げて下さい。(四九)」

ヴィヤーサは言った。

「そなたは驚いて、重大な内容のことを私にたずねる。私はそなたにすべてを語るであろう。心を集中して聞きなさい。(五〇) ナーラーヤナというのは、古人たちのうちでも最古の存在である。一切を創造した者は、ある目的のために、ダルマの息子として生まれた。(五一) 彼はマイナーカ山に住んで、激しい苦行を行なった。威光に満ちた彼は、上方に腕を持ち上げ、燃える太陽のようであった。(五二) 蓮の眼をした彼は六万六千年の間、風を食べて(断食して)、自身を憔悴させた。(五三) それからまたその二倍の期間、再び別の大きな苦行を行なって、天地の間をその威光で満たした。(五四) わが子よ、彼はその苦行によりブラフマンと一体になった。それから彼は、宇宙の主、一切の胎(ヨーニ)、世界の主、すべての神々によっても非常に見られがたい主、極小のもののうち

でも極小のもの、最大のもののうちでも最大のものを見た。（五五―五六）ルドラ、イーシャーナ、リシャバ（最勝のもの）、チェーキターナ（以上、シヴァを指す）、アジャ（不生）、最高のもの、動不動の生類、一切の生類の心に存するものを見た。（五七）（五八―六二略）
　ナーラーヤナは、数珠に囲まれた、光明の最高の貯蔵庫であるヴィシュヴァサンバヴァ（シヴァ）、すなわち願いをかなえ、魅力に満ちた身体をしたパールヴァティーをともなう主、アジャ、イーシャーナ、不滅のもの、原因を本性とするもの（第一原因）、不屈のものを見て、敬礼した。（六三―六四）蓮の眼をした彼は急いで、アンダカ（阿修羅の名）を倒したルドラ（シヴァ）に敬礼して、信愛をこめてヴィルーパークシャ（三眼者、シヴァ）を称讃した。（六五）
『最高の神よ、生類を作った最初の神々、世界の守護者たちはあなたから生じた。神よ、この大地に入って守る者たちは、あなたの最古の創造である。（六六）神々、阿修羅、竜、羅刹、ピシャーチャ鬼、人間、スパルナ（ガルダ）、ガンダルヴァ、夜叉など、個々の生類の群、この一切は、すべてあなたから生じたと我々は知っている。インドラ、ヤマ、ヴァルナ、財主（クベーラ）、ミトラ、トゥヴァシトリ、ソーマに捧げる行為（式儀）はあなたに捧げるものである。（六七）形体、光明、音声、虚空、風、接触、味、水、香、大地、欲望、梵天、ブラフマン（エヴァダー）、ブラーフマナ（バラモン）、そしてこの動不動のものはあなたから生じた。（六八）〔海など多大な〕水から生じた〔雨水などの〕少量の水が個別のものとなり、帰滅の時には、再びそれらから唯一の水（原初の水）となる。賢者はこのように万物の創造と帰滅とを捨てて（異本「考えて」）あなたと合一する。（六九）神聖な性質におおわれた（テクスト疑問）心的な二羽の鳥（イーシュヴァラとジーヴァ）、言葉という

枝を持つ（異本による）ピッパラ樹（ヴェーダか？）、七名の守護者（五元素と意と知性）、都城を支えるその他の十（身体を構成する十要素）は、あなたによって創造された（英訳などを参照したが、疑問）。あなたはそれらよりも優れている。侵しがたい過去、現在、未来は、あなたから生じた。この全世界も……。（七〇）信愛している信者である私を愛して下さい。無益なこと（欲望など）を心に抱かせて、私を害そうとしないで下さい。賢者たちは本体のうちの本体であるあなたに専心して輝かしいブラフマンに達する。（七一）最高の神よ、私はあなたを敬おうと望んであなたを讃えた。雄牛をともなうあなたを探し求めて。私に讃えられて、非常に得られがたい恩寵を私に授けて下さい。私にひどいことをしないで下さい（テクスト疑問）。（七二）』
　その本性が不可思議の、聖仙に讃えられる、ピナーカ槍を持つニーラカンタ（シヴァ）は、それがふさわしい最高の神（ナーラーヤナ）に恩寵を授けた。（七三）
　ニーラカンタは言った。
『ナーラーヤナよ、汝は私の恩寵により、人間、神、ガンダルヴァの間で無量の力と精神をそなえた者になるであろう。（七四）神々、阿修羅、大蛇、ピシャーチャ鬼、ガンダルヴァ、人間、羅刹、スパルナ（ガルダ）、竜、及び一切の動物は、汝に対抗できないであろう。いかなる神も、戦いにおいて汝に勝利しないであろう。（七五―七六）私の恩寵により、何者も武器、金剛杵、火、風、湿ったもの、乾いたもの、動くもの、不動のものによって、汝を苦しめることは決してできないだろう。もし戦いになれば、汝は私を凌駕するであろう。（七八）』」

ヴィヤーサは続けた。

「以上のようにかつて諸々の恩寵がシャウリ（クリシュナ）によって得られたのだ。まさにその神が、幻力により世界を迷わせつつ活動している。（七九）まさに彼の苦行により、その神に等しいナラという偉大な聖者が生まれた。そのナラがアルジュナであると知れ。（八〇）この二人の聖仙は古い神々のうちでも最高に強力であり、世間的営為を行なうために宇宙紀ごとに生まれる。（八一）

叡知に満ちた賢者（アシュヴァッターマンを指す）よ、同様に威光と怒りをそなえたそなたも、すべて偉大な行為と苦行により、ルドラの一部として生まれた。（八二）かつてそなたは神のように叡知があり、世界がバヴァ（シヴァ）よりなると知り、その神に愛されることを望み、誓戒により自身を憔悴させていた。（八三）そなたは輝く新しい偉大な神人の身体を作り（テクスト疑問）、念誦と護摩と供物によって祭祀を行なった。誇りを与える者よ。（八四）賢者よ、その古の神はこのように供養されて満足し、そなたの心にある大願をかなえた。（八五）

あの両者とそなたにとって、生、行為、苦行、ヨーガは豊かである。あの両者とそなたは、宇宙紀ごとに、崇拝において、この神をリンガ（根男）の形において崇拝する。（八六）リンガにおいてすべての相をそなえたバヴァが存すると知って主を敬うなら、その人のうちに、アートマ・ヨーガ（最高我との合一？）とシャーストラ・ヨーガ（教典による道？）は常に存する。（八七）神々、シッダ（成就者）たち、最高の聖仙たちはこのように祭祀を行なって、世界における最高で永遠の位置を求める。（八八）このようにケーシャヴァ（クリシュナ）はルドラを信愛し、ルドラより生まれた。

まさにその永遠のクリシュナに祭祀を捧げて崇拝すべきである。（八九）リンガにおいて万物が存すると知って主を敬うなら、雄牛を旗標とする者（シヴァ）はその人をこよなく愛する。（九〇）」

サンジャヤは語った。——

偉大な戦士であるドローナの息子は、ヴィヤーサの言葉を聞いて、ルドラに敬礼した。そしてクリシュナを尊敬した。（九一）彼は喜びで総毛立ち、自己を制し、大仙に敬礼してから、自軍に合流して撤退した。（九二）王よ、それから戦いにおいてドローナが倒され、クル軍が意気消沈した時、パーンダヴァ軍も撤退した。（九三）王よ、ヴェーダに通達したバラモンであるドローナは、五日間戦って、敵軍を殺してから、梵界に逝った。（九四）（第百七十二章）

ヴィヤーサ、アルジュナのために「シャタ・ルドリーヤ」を説く

ドリタラーシトラはたずねた。

「サンジャヤよ、超戦士ドローナが殺された時、その後わが軍とパーンダヴァ軍はどのようにしたか。（一）」

サンジャヤは語った。——

超戦士ドローナがドリシタデュムナに殺され、そしてクル軍が敗れた時、アルジュナは自分の勝利をもたらす非常に大きな奇蹟を見て、たまたま訪れたヴィヤーサにたずねた。バラタの雄牛よ。（一―三）

「私が戦場において、汚れない矢の群で敵たちを殺している時、私の前方を火のように輝く男が進むのを私は見ます。（四）彼が燃える槍を構えてその方角に進むと、その方角で、私の敵たちが粉砕されます。偉大な聖者よ。（五）彼は両足で地面に触れていません。またその槍を放つこともありません。彼の威光により、その槍から幾千の槍が出て来るのです。（六）人々は彼に粉砕されたすべての敵が私に粉砕されたと考えます。実は彼に燃やされた兵たちを、私はその後で燃やすのです。（七）尊者よ、私に教えて下さい。あの最高の人は誰ですか。槍を手にし、威光にかけて太陽のような大きな男は。クリシュナ（ヴィヤーサ）よ。（八）」

ヴィヤーサは言った。

「造物主たちの第一原因であり、威光よりなるものであり、神人であり、遍在者であり、世界、地上、空、神、全世界の主、強力な主であり、イーシャーナである。アルジュナよ、そなたは恩寵を授けるそのシャンカラ（シヴァ）を見たのだ。一切の始原であり、宇宙の主であるその神に庇護を求めよ。（九―一〇）マハーデーヴァ、偉大なる神、イーシャーナ、ジャティラ（髪を結った者）、シヴァ、三眼者、大きな腕を持つ者、ルドラ、螺髻を持つ者（シキン）、襤褸を着た者、恩寵により信者たちの願いをかなえる者に。（一一）その遍在者の眷属は、種々の姿により神聖である。すなわち、侏儒たち、結髪の者たち、剃髪の者たち、首の短い者たち、大きな腹をした者たち。（一二）巨体の者たち、気力に満ちた者たち、大耳の者たちである。アルジュナよ、変形した顔、足、奇妙な衣裳をまとうこのような者たちにより、マハーデーヴァ、マヘーシュヴァラ、すなわち威光あるシヴァは敬われて、その身の毛がよだつ恐ろしい戦場において、恩寵によりそなたの前方を進む。アルジュナよ。（一三―一四）

あの軍隊がドローナとカルナとクリパという偉大な射手である戦士たちに守られている時、アルジュナよ、たとえ心によってもそれを攻撃しようとする者が誰かいるか。偉大な射手である神、多くの姿をとるマヘーシュヴァラを除いて……。（一五）彼が前にいる時、誰も立ち向かうことはできない。三界において、彼に等しいものは存在しないから。（一六）実に戦場で怒った彼の臭いによっても、敵たちは正気を失い、ほとんど死んだようになり、ふるえ、倒れる。（一七）神々は彼に敬礼しつつ天上に住む。そして世界における他の人々、そして天界を勝ち得た人々で、そのウマーの夫であるルドラを、願いをかなえるシヴァ神を信愛する人々は、この世で幸福を得てから、最高の帰趨に達する。（一八―一九）クンティーの息子よ、寂静のために常に彼に敬礼せよ。ルドラに、青黒い首を持つ者（シティカンタ）に、最も微細な者（カニシタ）に、威力に満ちた者（スヴァルチャス）に。（二〇）カパルディン、荒々しい者（カラーラ）に、茶色の眼を持つ者（ハリアクシャ）、願いをかなえる者（ヴァラダ）、ヤーミヤ、アヴィヤクタ・ケーシャ（不明瞭な髪を持つ者）、善行者、シャンカラに。（二一）（二二―二八略）

クンティーの息子よ、私はその願いをかなえる宇宙の主に庇護を求める。ウマーの夫、ヴ

イルーパークシャ（三眼者）、ダクシャの祭祀の破壊者、揺ぎない造物主に、不滅の生類の主に。（二九）（三〇―三二略）三叉戟を持ち、願いをかなえ、刀と楯を持つ主、ピナーカ槍を持ち戦斧を持つ世界の主、イーシュヴァラに、襤褸をまとう帰依所である神に、私は庇護を求める。（三三）かの神々の主に敬礼する。ヴァイシュラヴァナ（クベーラ）が彼の友である。美しい衣を着て、よい誓戒を保ち、見事な弓を持つその神に常に敬礼する。（三四）（三五―三九略）

その英邁なマハーデーヴァの、神聖な諸行為を、私は知性に応じ、知識に応じてそなたに語るであろう。（四〇）もし彼が怒れば、世界における神々、阿修羅、ガンダルヴァ、羅刹たちは、たとえ洞窟に隠れたとしても、安らかに暮らせない。（四一）

あの時、怒ったバヴァ（シヴァ）は恐れることなく〔ダクシャの〕祭祀を破壊し、弓で矢を放って、非常に恐ろしく叫んだ。（四二）「祭祀」が逃げ、マヘーシュヴァラが怒った時、神々はどこからも守護を得られず、平安を得られなかった。（四三）すべての世界の者たちは、その弓弦と弓籠手の音に動転し、神々と阿修羅たちは彼に圧倒され、倒れた。アルジュナよ。（四四）すべての水は動揺し、大地は震動した。山々は裂け、諸方と〔方位の〕象たちは茫然自失した。（四五）諸世界は闇におおわれて暗くなり明瞭でなかった。すべての星の輝きは、太陽とともに消失した。（四六）聖仙たちは恐怖にかられて叫び、すべての生類と自分の幸福を願って、鎮めの儀式を行なった。（四七）シャンカラは笑うかのようにプーシャン（太陽神）に近づき、供物を食べている彼の歯を砕いた。（四八）それから神々はふるえて彼に平伏してから退散した。シヴァは再び神々に、燃える鋭い矢を放った。（四九）王よ、神々は恐れて、ルドラに特別の祭祀の分け前を引き渡し、彼に庇護を求めた。（五〇）そこで怒りを離れた彼は祭祀を復活した。神々は彼に対して勤め、今日も勤めている。（五一）

天上に強力な阿修羅たちの三つの都城があった。それらは、鉄、銀、黄金よりなる壮大な都であった。（五二）鉄の都はターラカークシャに、銀の都はカマラークシャに、黄金の最高の都はヴィディユンマーリンに属した。（五三）インドラがすべての武器を用いてもそれらの都を破壊することができなかった。そこですべての神は悩んで、ルドラ（シヴァ）に庇護を求めた。（五四）インドラをはじめとするすべての神は、その偉大な神に言った。

『ルドラよ、すべての祭式において〔犠牲にされた〕獣はルドラのものになるでしょう。世界の主よ、あれらの阿修羅を殺しなさい。（五五）』

このように言われた彼は『承知した』と答えて、神々によかれと願い、柱のように動かずに千年の間立ったままでいた。（五六）

三つの都城が天空で集合した時、彼は三つの節と三つの鏃のある矢でそれらの都城を射貫いた。悪魔たちは終末の火とヴィシュヌとソーマよりなるその矢を見ることができなかった。（五七）―（五八）

さて、ウマー（パールヴァティー）は五本の髪の房を持つ童子を膝に乗せて、知りたいと思い、『これは誰か』と神々にたずねた。（五九）その童子は怒ったインドラの金剛杵を持つ腕を麻痺させた。彼こそ尊い神、全世界の主宰神である主であった。（六〇）しかしすべての神々と造物主は、その朝日のように輝く世界の主宰神を認知しなかった。（六一）その時、梵天が近づいて

マヘーシュヴァラを見て、『これは最高の神だ』と知って敬礼した。（六二）

それから神々はウマーとルドラを満足させた。そしてインドラの腕は再びもとの状態にもどった。（六三）その雄牛を旗標とする尊い神、神々の最上者、ダクシャの祭祀を破壊した者は、妻とともに、その神々に満足した。（六四）彼はルドラであり、シヴァであり、アグニ（火神）、シャルヴァ、一切知、インドラ、ヴァーユ（風神）、アシュヴィン双神、稲光である。（六五）彼はバヴァ、パルジャニヤ（雨神）、マハーデーヴァ、非の打ち所のない者、月、イシャーナ、スーリヤ（太陽）、ヴァルナ（水天）である。（六六）彼はカーラ、アンタカ、ムリティユ、ヤマ、昼夜である。半月、一カ月、季節、朝と夕の薄明、一年である。（六七）配置者、制定者、宇宙の本体、ヴイシュヴァカルマン（一切造者）である。身体を持たない彼は、一切の神の身体を維持する。（六八）その神はすべての神々に讃えられる。彼は一様であり、多様であり、百様、千様、百千様である。（六九）その不生である尊いマハーデーヴァはこのようである。実に私はその尊い神の美質をすべてあげることはできない。（七〇）もし人々がすべての病魔に捕えられたり、すべての罪悪をそなえていても、彼らがその神に庇護を求めれば、寄る辺である彼は彼らを救済する。（七一）彼は人々に長寿、無病、権力、財産、多くの享楽を与え、またそれらを奪い取る。（七二）インドラをはじめとする神々にある主権は、実は彼の主権であると言われる。そして彼は世の人々の幸不幸に関わっている（異本による）。（七三）彼はまた諸々の願望の至上権であるからイーシュヴァラと呼ばれる。彼は生類のマヘーシュヴァラ（偉大な主）であり、偉大な者たちのイーシュヴァラである。（七四）彼は多くの形状により、多様に全世界を遍く満たし

ている。この神の口が海中にある。（七五）この神は常に墓地（火葬場）に住む。人々はそこで、ヴィーラ・スターナ（英雄の場所）と言って、かのイーシュヴァラに対する祭祀を行なう。（七六）この神には、この世の人々がそれらに言及して供養するところの、燃え上がる恐ろしい多くの形状がある。（七七）世界中でこの神について、適切な意味をともなう多くの名前があげられている。この神は偉大であり、遍在していることから、またその行為によって……。（七八）そしてヴェーダ聖典にも、彼に捧げる最高の『シャタ・ルドリーヤ』（百のルドラの讃歌）が伝承されている。無限のルドラと名づけられる、その偉大な神に捧げる聖句である。（七九）

その神は諸々の神的人的な願望をかなえる主である。彼は遍在者であり、強力な神であり、広大な宇宙を遍く満たす。（八〇）バラモンと聖者たちは、彼のことを最年長の者（万物よりも先に存在する者）と呼ぶ。というのは彼は神々のうちで最初に存在する者である。彼の口から火神が生じた。（八一）彼は常に獣（生類）を守り、また彼らと楽しみ、彼らの主君である。それ故、彼はパシュパティ（獣主）であると伝えられる。（八二）彼は常に梵行（清浄行）によりそのリンガ（男根）を保ち、人々はそれを尊崇する（マハヤンティ）。そこで彼はマヘーシュヴァラであると伝えられる。（八三）聖仙、神、ガンダルヴァ、天女たちは、上方に立つ彼のリンガを崇拝する。（八四）それが崇拝される時、マヘーシュヴァラは喜ぶ。シャンカラは幸福で、満足し、喜ぶ。（八五）彼は過去と未来と現在にわたって、動不動の多様な姿をとるから、バフルーパであると伝えられる。（八六）彼は一眼を持ち、あるいはいたるところ眼よりなり、ぎらぎらと輝いている。彼は怒りにより諸世界に入るから、それ故シャルヴァ（害する者）であると伝えられる。（八七）彼の姿は

煙のよう（不明瞭）であるから、それ故ドゥールジャティと呼ばれる。一切諸神（ヴィシュベーデーバーハ）が彼のうちに存するから、そこで彼はヴィシュヴァルーパであると伝えられる。（八八）その世界の主は三体の女神――天、水、地――を愛する（守る）からトリアンバカであると伝えられる。（八九）彼は常にすべての行為においてすべての目的をかなえ、人類の吉祥を望むから、まさにそれ故シヴァであると伝えられる。（九〇）彼は千の眼を持ち、万の眼を持ち、いたるところ眼よりなる。そして広大な宇宙を守るから、それ故マハーデーヴァであると伝えられる。（九一）彼は燃やし、上方に立ち、生気を生起させ維持し、常に屹立するリンガを持つから、それ故スターヌであると伝えられる。（九二）彼は生類の身体に不均一に存し、また均一（平等）であり、不均一な状態にある、プラーナ（出息）とアパーナ（入息）よりなる身体における風である（真意は不明）。（九三）その姿を敬い、またそのリンガを敬うならば、そのリンガの供養者は常に大なる繁栄に達する。（九四）両腿の半分は火の性質で、半分はソーマである。その身体は吉祥である。彼のアートマンの半分は火で、半分はソーマであると言われる（真意は不明）。（九五）彼の吉祥の身体は威光よりなり、偉大で、神々よりも輝かしい。彼の身体は輝かしく、人々の間で恐るべき火（ゴーラ・アグニ）と呼ばれる。（九六）吉祥の身体を持つ彼は梵行（清浄行）を行なう。イーシュヴァラにはより恐ろしい身体があり、彼はそれですべての者たちを食う。（九七）彼は燃やし、激烈で、苛酷で、栄光あり、肉と血と髄を食べるから、そこでルドラ（恐ろしい者）と呼ばれる。（九八）

アルジュナよ、そのピナーカ槍を持つ神マハーデーヴァが、戦場においてそなたの前方で

敵を殺しているのがそなたに認められたのだ。（九九）その神に与えられた武器によりそなたが悪魔たちを殺したところの、まさにその尊い神が戦場でそなたの前を進んでいる。（一〇〇）これが諸ヴェーダによって知られる、幸せと名声をもたらす、神聖な神のうちの神の讃歌である。アルジュナよ、その『シャタ・ルドリーヤ』がそなたのために説かれたのである。（一〇一）この讃歌はすべての目的を成就させ、神聖であり、すべての罪を滅し、すべての悪を鎮め、すべての苦しみと恐怖を除去する。（一〇二）四種（四部）よりなるこの讃歌を常に聞く人は、すべての敵に勝利して、ルドラの世界においてこよなく尊敬される。（一〇三）人々の間にあって、偉大な神の戦争に関するこの神聖ですばらしい行為、『シャタ・ルドリーヤ』を、常に精励に読誦し、聴聞するなら、その宇宙の主である神を信愛する人は、トリアンバカが満足した時、諸々の恩寵と願望を得るであろう。（一〇四―一〇五）クンティーの息子よ、行って戦え。そなたが敗れることはない。そなたの傍らにはクリシュナが顧問、守護者としているから。（一〇六）」

サンジャヤは語った。――

バラタの最上者よ、パラーシャラの息子（ヴィヤーサ）は戦場でアルジュナにこのように告げると、来る時と同じように帰って行った。敵を制する者よ。（一〇七）

（第百七十三章）

ちくま学芸文庫

原典訳　マハーバーラタ7

二〇〇三年三月十日　第一刷発行

訳　者　上村勝彦（かみむら・かつひこ）
発行者　菊池明郎
発行所　株式会社　筑摩書房
東京都台東区蔵前二—五—三　〒一一一—八七五五
振替〇〇一六〇—八—四一二三
装幀者　安野光雅
印刷所　三松堂印刷株式会社
製本所　株式会社積信堂

ちくま学芸文庫の定価はカバーに表示してあります。
乱丁・落丁本及びお問い合わせは左記へお願いいたします。
筑摩書房サービスセンター
埼玉県さいたま市櫛引町二—六〇四　〒三三一—八五〇七
電話番号　〇四八—六五一—〇〇五三

ISBN4-480-08607-2 C0198